

初 田 館 跡

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書 (XIX)

1992.3

兵庫県教育委員会



近畿自動車道舞鶴線と初田館跡



1. 初田館跡遠景写真（南西上空より）



2. 初田館跡遠景写真（東上空より）



1. 調査前の初田館跡近景写真（南上空より）



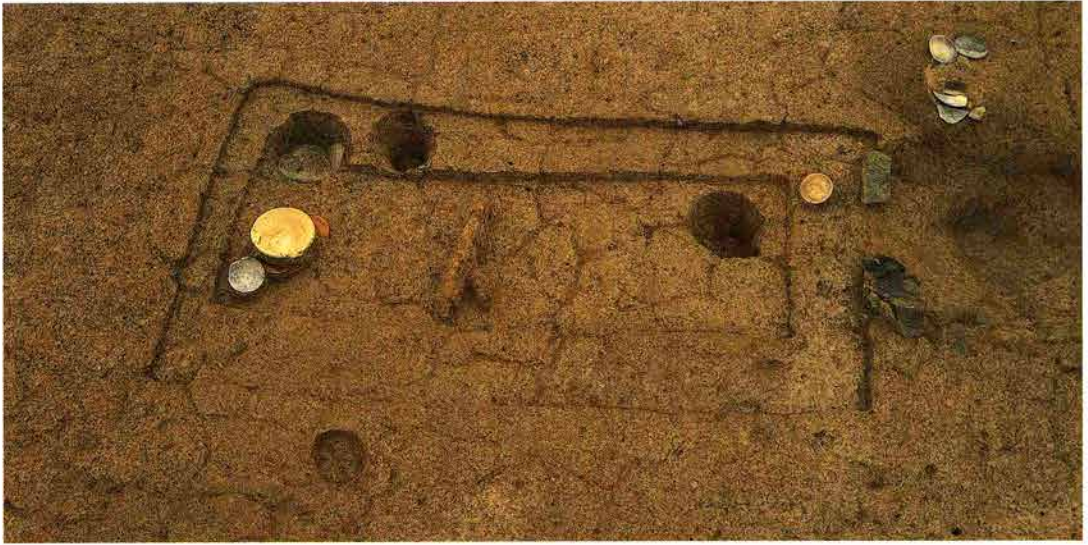
2. 調査後の初田館跡近景写真（南上空より）



1. 初田館跡全景写真（真上より）



2. 初田館跡全景写真（東上空より）



上：墓 中：旧河道内遺物出土状況(1) 下：旧河道内遺物出土状況(2)



上：南堀の橋脚 中：南堀内遺物出土状況 下：井戸3



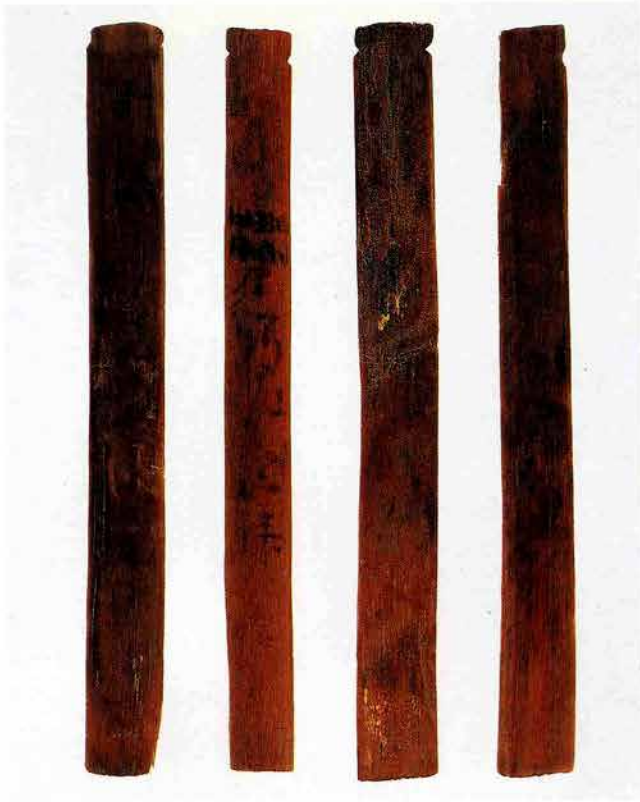
1. 御札



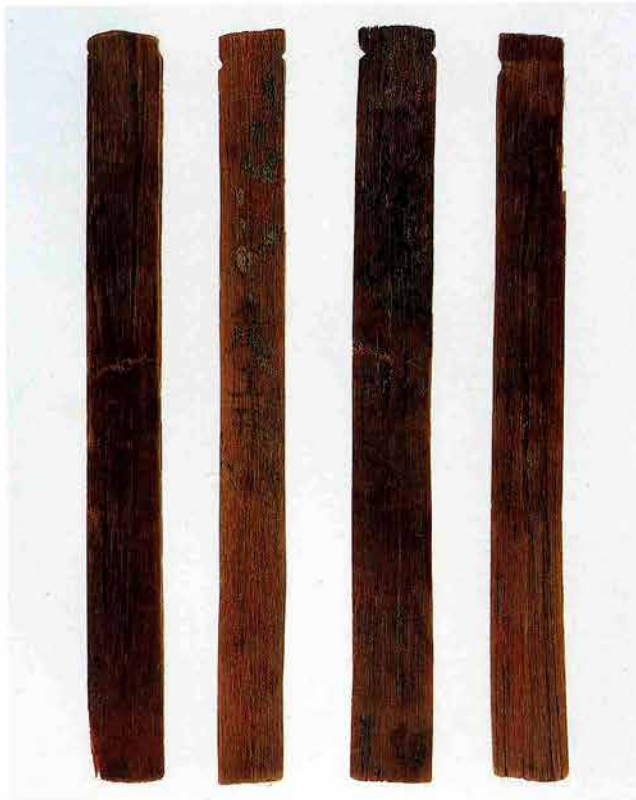
2. 人形



3. 和鏡 (又ヶ田ノ坪出土)



(表)



呪符木簡

(裏)

例 言

1. 本書は近畿自動車道舞鶴線建設に伴い、昭和61年度に発掘調査が実施された兵庫県多紀郡丹南町初田所在の初田館跡とその下層にある遺跡の調査報告書である。
2. 調査は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が日本道路公団大阪支社と契約を交わし、実施したものであり、兵庫県側の近畿自動車道舞鶴線建設に伴う最後の調査遺跡であった。
3. 現地での調査は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課 埋蔵文化財係主査岡崎正雄、技術職員山田清朝・山上雅弘が担当した。
4. 当初、本遺跡は仮称「酒井館」とされていたが、『丹波志』記載の「初田古館」に相当するため、本調査時に「初田館跡」と訂正をした。
5. 現地の作業については東海興業株式会社と作業委託契約を行い、実施した。
6. 冬場の調査のため、航空写真測量を使い作業を促進させた。なお、航空写真測量は国際興業株式会社と委託契約を交わし実施した。
7. 掘り出された遺構は、1)室町時代の館（堀・井戸・池・土壇等）の他に、2)古墳時代後期の住居址群、3)平安時代の柱穴と旧河道、4)鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・墓・旧河道、5)江戸時代以降の畑・水田・井戸・幡柱基礎等と多岐に亘る。
8. 主に館の調査を行ったが、下層に上述のとおり遺構面があり、慎重に調査を実施した。確認調査以後に館の範囲の取扱い方が充分ではなく、本調査時には調査範囲が限定され過ぎており、館跡について十分な調査を実施することは出来なかった。但し、路線外の西については館跡はじめ多くの遺構が残っており、後世まで遺跡として保存されることが望まれる。
9. なお、遺構の北方向は館跡の遺構が磁石方向に偏っているため、磁北を示している。
10. 出土品整理作業は平成元年度から独立した兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において、整理普及課が3カ年計画で実施し、調査員の指導の下に嘱託員表具冴子・中澤貴美子・松本美千代・和田マユミ・斉藤海予子を中心に事業を行った。
11. 出土遺物は1)土師器、2)須恵器、3)緑釉陶器、4)灰釉陶器、5)黒色土器、6)瓦器、7)国産陶磁器、8)輸入陶磁器の土器類はじめ、金属製品(F)、木製品(W)、石製品(S)等が多くある。1)～7)は土器断面のスクリーントーンを変え、8)は土器番号の前にCを付け各々を区別している。
12. 出土品の内、金属製品の保存処理は整理普及課主査加古千恵子の指導の下に嘱託員植田弥生・尾崎比佐子が実施した。木製品は財団法人元興寺文化財研究所に委託し、保存処理を行った物と整理普及課主任別府洋二の指導の下に嘱託員石野照代などが保存処理を行った物がある。

13. 本文の執筆分担は以下の通りである。

岡崎正雄 第1章-1、第2章、第4章(一部)、第5章-1・4、第6章-3・6

山田清朝 第3章-1、第4章-2・3・4、第5章3、第6章-2

山上雅弘 第1章-2、第3章-2、第4章-3～5、第5章2・5、第6章-1・4・5

市橋重喜・水口富夫 第2章-2

14. 自然科学分野については、1)木製品の樹種(京都大学名誉教授 島地 謙)、2)炭化材の樹種(嶋倉巳三郎)、3)鉄滓(東京工業大学 高塚秀治)、4)花粉(山形大学 前田保夫)、5)種実(流通科学大学 南木睦彦)の同定及び分析を依頼し、先生方から玉稿を戴いたものについて、最後に付載としてまとめている。

15. 本書の編集は岡崎が調査員と協議してあたり、その責任は岡崎にある。

16. なお、遺物は保存処理をした金属・木製品は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(神戸市兵庫区荒田町)で、他の遺物は魚住分館(明石市)で収蔵保管している。

17. 最後に初田館跡の調査をはじめ本書の作成については、関係各機関はじめ多くの方々から指導及び助言とご協力戴きました。以下、芳名を記載しお礼に替えさせていただきます。

奈良国立文化財研究所、木簡学会、西紀・丹南町教育委員会、丹南町史編集室、兵庫県立歴史博物館、京都大学文学部博物館、京都大学埋蔵文化財調査センター、中世土器研究会、北垣聰一郎、綾村 宏、寺崎保広、久下 隆、嵐 端激、小林基伸、伊藤 晃、稲山稔也、井上喜久夫、菱田 哲郎、森村健一、藤井善布(故人)、角田 誠、中井 均、多田暢久、篠原芳秀、渡辺 誠、木津義明、峰岸純夫

目 次

第1章	はじめに	1
第1節	近畿自動車道舞鶴線に伴う中世城館の調査	1
第2節	初田館跡の用語について	3
第2章	調査の経緯	5
第1節	調査に至る経過	5
第2節	第1次調査	9
第3節	第2次調査	12
1.	調査の方法	12
2.	土層	14
3.	調査日誌	16
第4節	整理作業	23
第5節	出土品保存処理作業	24
第6節	分析鑑定調査	24
第3章	遺跡の環境	27
第1節	地理的環境	27
第2節	歴史的環境	29
第4章	遺 構	35
第1節	遺構の概要	35
第2節	古墳時代の遺構	38
1.	概要	38
2.	遺構	40
第3節	平安～鎌倉時代の遺構	47
1.	概要	47
2.	遺構	49
第4節	室町時代の遺構	55
1.	概要	55

2. 遺構	55
第5節 江戸時代の遺構	77
1. 概要	77
2. 遺構	77
3. 小結	82
第5章 遺物	83
第1節 遺物の出土状況	83
第2節 古墳時代の遺物	85
1. 出土状況	85
2. 土器	85
3. 土製品	90
4. 石製品	90
〈観察表〉	92
第3節 平安～鎌倉時代の遺物	94
1. 出土状況	94
2. 平安時代の土器	98
3. 鎌倉時代の土器	116
4. 土製品	133
5. 石製品	133
6. 木製品	134
7. 金属製品	154
〈観察表〉	158
第4節 室町時代の遺物	173
1. 出土状況	173
2. 土器	173
3. 石製品	188
4. 木製品	188
5. 金属製品	203
〈観察表〉	208
第5節 江戸時代の遺物	216
1. 出土状況	216
2. 土器	216

3. 土製品	222
4. 木製品	222
5. 金属製品	227
〈観察表〉	229
第6章 ま と め	233
第1節 古墳時代の集落について	233
第2節 平安～鎌倉時代の土器について	235
第3節 室町時代の土器について	262
第4節 初田館跡の遺構変遷について	266
第5節 初田館跡の構造について	272
付 載	
1. 初田館跡出土木製品の樹種	287
2. 初田館跡出土炭化材の樹種	301
3. 初田館跡出土鉄滓の分析結果について	307
4. 伝初田館出土和鏡について	311

図 版 目 次

巻首図版 1 遺跡	近畿自動車道舞鶴線と初田館跡
巻首図版 2 遺跡	1.初田館跡遠景写真（南西上空より） 2.初田館跡遠景写真（東上空より）
巻首図版 3 遺跡	1.調査前の初田館跡近景写真（南上空より） 2.調査後の初田館跡近景写真（南上空より）
巻首図版 4 遺構	1.初田館跡全景写真（真上より） 2.初田館跡全景写真（東上空より）
巻首図版 5 鎌倉時代の遺構	上：墓 中：旧河道内遺物出土状況 (1) 下：旧河道内遺物出土状況 (2)
巻首図版 6 室町時代の遺構	上：南堀の橋脚 中：南堀内遺物出土状況 下：井戸 3
巻首図版 7 遺物	1.御札 2.人形 3.和鏡（又ヶ田ノ坪出土）
巻首図版 8 遺物	呪符木簡
図版 1 遺構	全景写真（真上より）
図版 2 遺跡	上：調査前の全景（南より）、中：伐採後の全景（北より）、 下：調査前の全景（北より）
図版 3 古墳時代の遺構（1）	1.全景（南より） 2.竪穴住居址 1～4
図版 4 古墳時代の遺構（2）	1.竪穴住居址 1・2の全景（北より） 2.竪穴住居址 1の竈焚口
図版 5 古墳時代の遺構（3）	1.竪穴住居址 3の全景（南より） 2.竪穴住居址 4の全景（東より）
図版 6 平安・鎌倉時代の遺構（1）	1.墓と他の遺構群 2.墓と副葬品
図版 7 平安・鎌倉時代の遺構（2）	1.井戸 1 上面確認状況

- 2.井戸1 全景
- 図版 8 平安・鎌倉時代の遺構 (3) 1.井戸1 検出状況
2.井戸1 半截後断面
- 図版 9 平安・鎌倉時代の遺構 (4) 旧河道全景 (北より)
- 図版10 平安・鎌倉時代の遺構 (5) 1.旧河道全景 (南より)
2.旧河道の土層堆積
- 図版11 平安・鎌倉時代の遺構 (6) 旧河道遺物出土状況 土器群 (上・下)
- 図版12 平安・鎌倉時代の遺構 (7) 旧河道遺物出土状況 瓦器碗・土師器鍋・下駄・折敷
- 図版13 平安・鎌倉時代の遺構 (8) 旧河道遺物出土状況 須恵器碗・土師器鍋・人形他
- 図版14 平安・鎌倉時代の遺構 (9) 東堀内下層遺物出土状況 瓦器碗・土師器鍋他
- 図版15 室町時代の遺構 (1) 1.小型堀全景 (東より)
2.小型堀全景 (南より)
- 図版16 室町時代の遺構 (2) 小型堀土層堆積 (上: 北堀西壁、中: 南堀西壁、下: 東堀北壁)
- 図版17 室町時代の遺構 (3) 1.井戸2 上面確認状況 (東より)
2.井戸2 全景 (東より)
- 図版18 室町時代の遺構 (4) 1.井戸2 検出状況 (東より)
2.井戸2 底胴木西側細部
- 図版19 室町時代の遺構 (5) 1.井戸3 全景 (北より)
2.井戸3 掘り方の石組み半截後断面 (北より)
- 図版20 室町時代の遺構 (6) 井戸3 (上: 第1段桶、中: 桶のたが、下: 遺物出土状況)
- 図版21 室町時代の遺構 (7) 1.池2 全景確認状況 (東より)
2.池2 全景と建物3 (北より)
- 図版22 室町時代の遺構 (8) 1.池1 全景 (西より)
2.土壇7 (東より)
- 図版23 室町時代の遺構 (9) 1.土壇6 土層堆積
2.土壇6 全景
- 図版24 室町時代の遺構 (10) 1.南堀上面確認状況 (東より)
2.南堀土層堆積状況全景 (東より)
- 図版25 室町時代の遺構 (11) 1.南堀橋脚と石出土状況
2.南堀橋脚全景 (東より)
- 図版26 室町時代の遺構 (12) 1.南堀橋脚全景 (南より)
2.南堀橋脚掘り方半截後断面

- 図版27 室町時代の遺構 (13) 1.南堀遺物出土状況 (五徳他)
2.羽子板出土状況
3.御札出土状況
- 図版28 室町時代の遺構 (14) 1.東堀上面確認状況 (南より)
2.東堀土層堆積状況 (南より)
- 図版29 室町時代の遺構 (15) 1.北堀・旧河道全景
2.北堀全景
- 図版30 室町時代の遺構 (16) 北堀土層堆積状況 (上: 3・4区北壁、中:3~6区北壁、
下: 1・2区西壁)
- 図版31 室町時代の遺構 (17) 上: 調査前の土塁・北堀全景 (東より)、中: 北堀上面確認
状況 (東より)、下: 北堀完掘状況
- 図版32 室町時代の遺構 (18) 1.北堀 板出土状況
2.北堀 板と漆碗出土状況
- 図版33 室町時代の遺構 (19) 1.柵と柱穴 (北より)
2.建物 1 (東より)
- 図版34 江戸時代の遺構 (1) 1.北部上面確認状況 (北より)
2.畑 (北より)
- 図版35 江戸時代の遺構 (2) 1.井戸 4 全景
2.井戸 4 掘り方上層半截後断面
- 図版36 江戸時代の遺構 (3) 1.井戸 4 木組み全景
2.井戸 4 細部
- 図版37 江戸時代の遺構 (4) 1.井戸 4 半截後断面
2.井戸 4 井戸枠全景
3.井戸 4 井戸枠細部 (上、下)
- 図版38 古墳時代の遺物 (1) 竪穴住居址出土土器 (土師器・須恵器)
- 図版39 古墳時代の遺物 (2) 竪穴住居址・包含層出土土器 (土師器・須恵器)
- 図版40 古墳時代の遺物 (3) 1.包含層出土土器 (土師器・須恵器)
2.竪穴住居址出土土錘
- 図版41 平安時代の遺物 (1) 土師器 杯・皿・碗
- 図版42 平安時代の遺物 (2) 1.土師器 杯・皿・碗の見込み
2.土師器 杯・皿・碗の底
- 図版43 平安時代の遺物 (3) 土師器 碗・碗底・甕
- 図版44 平安時代の遺物 (4) 土師器 甕

- 図版45 平安時代の遺物 (5) 1.土師器 甕
2.土師器 甌
- 図版46 平安時代の遺物 (6) 須恵器 杯
- 図版47 平安時代の遺物 (7) 須恵器 椀(1)
- 図版48 平安時代の遺物 (8) 須恵器 椀(2)
- 図版49 平安時代の遺物 (9) 須恵器 椀(3)・鉢・瓶、椀と杯の底
- 図版50 平安時代の遺物 (10) 須恵器 椀底
- 図版51 平安時代の遺物 (11) 須恵器 壺・黒色土器 椀
- 図版52 平安時代の遺物 (12) 鎌倉時代の遺物 (1) 黒色土器 椀・土師器 皿
- 図版53 鎌倉時代の遺物 (2) 土師器 杯・鍋・羽釜
- 図版54 鎌倉時代の遺物 (3) 土師器 羽釜
- 図版55 鎌倉時代の遺物 (4) 須恵器 椀・瓦器 皿
- 図版56 鎌倉時代の遺物 (5) 1.瓦器 皿見込み
2.瓦器 皿底
- 図版57 鎌倉時代の遺物 (6) 瓦器 椀(1)
- 図版58 鎌倉時代の遺物 (7) 瓦器 椀(2)
- 図版59 鎌倉時代の遺物 (8) 瓦器 椀(3)
- 図版60 鎌倉時代の遺物 (9) 瓦器 椀(4)
- 図版61 平安～鎌倉時代の遺物 (1) 瓦器 椀・墓出土土器 (白磁 碗・瓦器 皿)・土壙
3 土師器 皿
- 図版62 鎌倉時代の遺物 (10) 井戸1出土木製品 曲物
- 図版63 鎌倉時代の遺物 (11) 1.井戸1出土木製品 曲物底板
2.井戸1出土木製品 呪符木簡
- 図版64 平安～鎌倉時代の遺物 (2) 旧河道出土木製品 木錘・下駄・紡錘車・草履他
- 図版65 平安～鎌倉時代の遺物 (3) 旧河道出土木製品 曲物底板
- 図版66 平安～鎌倉時代の遺物 (4) 旧河道出土木製品 曲物底板他
- 図版67 平安～鎌倉時代の遺物 (5) 旧河道出土木製品 折敷(1)
- 図版68 平安～鎌倉時代の遺物 (6) 旧河道出土木製品 折敷(2)
- 図版69 平安～鎌倉時代の遺物 (7) 旧河道出土木製品 人形
- 図版70 平安～鎌倉時代の遺物 (8) 旧河道出土木製品 祭祀具・織具・椀・漆皿
- 図版71 平安～鎌倉時代の遺物 (9) 旧河道出土木製品 杓子・匙他
- 図版72 平安～鎌倉時代の遺物 (10) 旧河道出土木製品 棒他
- 図版73 平安～鎌倉時代の遺物 (11) 1.墓出土鉄製品 刀・火打金

2.東堀、旧河道出土鉄・銅製品 鏃・刀石突

- 図版74 中世の遺物
1.旧河道出土鉄滓
2.中世包含層出土 鉄・銅製品
- 図版75 鎌倉～室町時代の遺物 (21)
1.旧河道出土 土錘
2.砥石 (一部古墳時代の砥石を含む)
- 図版76 鎌倉～室町時代の遺物 (2)
1.旧河道出土 石包丁形石製品
2.碁石
- 図版77 室町時代の遺物 (1) 土師器 皿(1)
- 図版78 室町時代の遺物 (2) 土師器 皿(2)
- 図版79 室町時代の遺物 (3) 土師器 皿(3) (上: 見込み、下: 底)
- 図版80 室町時代の遺物 (4) 瀬戸・美濃焼 碗・皿
- 図版81 室町時代の遺物 (5)
1.瀬戸・美濃焼 天目碗
2.瀬戸・美濃焼 水滴
- 図版82 室町時代の遺物 (6) 丹波焼 播鉢・甕
- 図版83 室町時代の遺物 (7)
1.瀬戸・美濃焼 卸皿
2.備前焼 甕・徳利、瓦器 風炉
- 図版84 鎌倉～室町時代の遺物 (3) 青磁 碗
- 図版85 鎌倉～室町時代の遺物 (4)
1.白磁 碗・皿
2.青花 皿
- 図版86 室町時代の遺物 (8)
1.青花 碗 (表)
2.同 上 (裏)
- 図版87 室町時代の遺物 (9) 井戸2 出土木製品 漆碗・桶・木錘・箸・竹製品他
- 図版88 室町時代の遺物 (10) 井戸2 出土木製品 枿
- 図版89 室町時代の遺物 (11) 井戸3 出土木製品 曲物・底板・下駄・杭
- 図版90 室町時代の遺物 (12) 井戸3 出土木製品 井側桶他
- 図版91 室町時代の遺物 (13) 南堀出土木製品 御札・羽子板・箸・曲物底他
- 図版92 室町時代の遺物 (14) 南堀出土木製品 下駄・加工材他
- 図版93 室町時代の遺物 (15) 南堀出土木製品 たも網み・弓
- 図版94 室町時代の遺物 (16) 南堀出土木製品 柱材・板
- 図版95 室町時代の遺物 (17) 南堀出土木製品 橋脚柱材
- 図版96 室町時代の遺物 (18) 南堀出土木製品 橋脚杭材・杭
- 図版97 室町時代の遺物 (19) 北堀出土木製品 碗・下駄他
- 図版98 室町時代の遺物 (20) 北堀出土木製品 掛矢・杭・板

- 図版99 室町時代の遺物 (21) 1.南堀出土鉄製品 五徳・鏃
2.包含層出土 筭
- 図版100 室町時代の遺物 (22) 1.井戸 2 出土鉄・銅製品 鉄鎌・鉄釘・小柄他
2.銅製品 銭・飾り金具・鉄砲玉
- 図版101 江戸時代の遺物 1.包含層出土土器
2.便所甕 丹波焼甕
- 図版102 江戸時代以降の遺物 (1) 1.面子
2.井戸 4 ・包含層出土銅・鉄製品
- 図版103 江戸時代以降の遺物 (2) 1.井戸 4 井側板材
2.井戸 4 井戸枳材
- 図版104 江戸時代以降の遺物 (3) 堀・水田出土木製品 杭・矢板他

挿 図 目 次

挿図 1	初田館跡位置図	xvi
挿図 2	近畿自動車道舞鶴線と中世城館跡調査の位置図	1
挿図 3	初田館跡用語解説図	3
挿図 4	近畿自動車道舞鶴線と初田館跡の位置	5
挿図 5	初田館跡周辺の字限図	6
挿図 6	初田館跡と調査地区	8
挿図 7	確認調査位置図	10
挿図 8	調査風景写真	11
挿図 9	調査地区割付図	12
挿図10	発掘調査参加者写真	13
挿図11	遺跡微高地基本土層図	14
挿図12	2層出土の江戸時代土器	14
挿図13	3層出土の鎌倉・室町時代土器	15
挿図14	3層出土の平安・鎌倉時代土器	15
挿図15	4層出土の古墳時代土器	16
挿図16	調査地区と調査作業風景	22
挿図17	整理作業風景	23
挿図18	微地形エレベーション図	27
挿図19	遺跡周辺の微地形図	28
挿図20	初田館跡周辺の遺跡分布図	29
挿図21	初田館跡周辺の中世城館分布図	32
挿図22	遺構縦断面図	35
挿図23	遺構全体図	36
挿図24	館の堀・旧河道調査地区割付図	37
挿図25	古墳時代竪穴住居址群位置図	38
挿図26	竪穴住居址 1・2 位置図	39
挿図27	竪穴住居址 1	40
挿図28	竪穴住居址 1 竈	41
挿図29	竪穴住居址 2	42
挿図30	竪穴住居址 3	43
挿図31	竪穴住居址 4	44

挿図32	竪穴住居址 4 土壌内土器	45
挿図33	竪穴住居址 5	45
挿図34	土壌 1	46
挿図35	旧河道土層堆積状況パネルダイアグラム	47
挿図36	墓 1	48
挿図37	土壌 2	50
挿図38	井戸 1	51
挿図39	土壌 3	52
挿図40	土壌 5	53
挿図41	土壌 6	54
挿図42	館跡遺構全体図	56
挿図43	南堀土層堆積図	58
挿図44	東堀土層堆積図	58
挿図45	北堀土層堆積図(1)	58
挿図46	北堀土層堆積図(2)	59
挿図47	橋脚	60
挿図48	小型堀	61
挿図49	小型堀土層堆積図	62
挿図50	建物 1	64
挿図51	建物 2 ・ 溝 3	65
挿図52	柵 1	66
挿図53	溝 1 ・ 溝 2	67
挿図54	井戸 2	68
挿図55	井戸 3	70
挿図56	池 1	71
挿図57	池 2	72
挿図58	建物 3	73
挿図59	土壌 9	74
挿図60	土壌 8	75
挿図61	石敷	75
挿図62	土壌 7	76
挿図63	江戸時代遺構全体図	78
挿図64	溝 4	79

挿図65	井戸 4	80
挿図66	幡基礎土壌群	81
挿図67	幡基礎土壌 2	82
挿図68	便所	82
挿図69	堀・旧河道遺物分布状況	84
挿図70	古墳時代土器 (1) 竪穴住居址 1 ~ 3	86
挿図71	古墳時代土器 (2) 竪穴住居址 4	87
挿図72	古墳時代土器 (3) 土壌 1	88
挿図73	古墳時代土器 (4) 包含層 (1)	89
挿図74	古墳時代土器 (5) 包含層 (2)	90
挿図75	古墳時代土製品 竪穴住居址 3	91
挿図76	古墳時代石製品 竪穴住居址 1・2	91
挿図77	旧河道土層セクション位置図	94
挿図78	断面 A	94
挿図79	断面 B	95
挿図80	断面 C	96
挿図81	断面 D	96
挿図82	断面 E	97
挿図83	平安時代土器 (1) 旧河道 (1)	99
挿図84	平安時代土器 (2) 旧河道 (2)	102
挿図85	平安時代土器 (3) 旧河道 (3)	103
挿図86	平安時代土器 (4) 旧河道 (4)	104
挿図87	平安時代土器 (5) 旧河道 (5)	105
挿図88	平安時代土器 (6) 旧河道 (6)	107
挿図89	平安時代土器 (7) 旧河道 (7)	109
挿図90	平安時代土器 (8) 旧河道 (8)	111
挿図91	平安時代土器 (9) 旧河道 (9)	112
挿図92	平安時代土器 (10) 旧河道 (10)	113
挿図93	平安時代土器 (11) 旧河道 (11)	114
挿図94	平安時代土器 (12) 旧河道 (12)	115
挿図95	鎌倉時代土器 (1) 旧河道 (1)	117
挿図96	鎌倉時代土器 (2) 旧河道 (2)	119
挿図97	鎌倉時代土器 (3) 旧河道 (3)	120

挿図98	鎌倉時代土器 (4)	旧河道 (4)	122
挿図99	鎌倉時代土器 (5)	旧河道 (5)	125
挿図100	鎌倉時代土器 (6)	旧河道 (6)	126
挿図101	鎌倉時代土器 (7)	旧河道 (7)	127
挿図102	鎌倉時代土器 (8)	旧河道 (8)	128
挿図103	鎌倉時代土器 (9)	旧河道 (9)	129
挿図104	鎌倉時代土器 (10)	旧河道 (10)	130
挿図105	鎌倉時代土器 (11)	柱穴	131
挿図106	鎌倉時代土器 (12)	墓 1	131
挿図107	鎌倉時代土器 (13)	土壇 3	131
挿図108	鎌倉時代土器 (14)	土壇	132
挿図109	平安～鎌倉時代土錘	旧河道	133
挿図110	平安～鎌倉時代石製品	旧河道	134
挿図111	平安～鎌倉時代木製品 (1)	井戸 (1)	135
挿図112	平安～鎌倉時代木製品 (2)	井戸 (2)	136
挿図113	平安～鎌倉時代木製品 (3)	井戸 (3)	137
挿図114	平安～鎌倉時代木製品 (4)	旧河道 (1)	139
挿図115	平安～鎌倉時代木製品 (5)	旧河道 (2)	140
挿図116	平安～鎌倉時代木製品 (6)	旧河道 (3)	141
挿図117	平安～鎌倉時代木製品 (7)	旧河道 (4)	142
挿図118	平安～鎌倉時代木製品 (8)	旧河道 (5)	143
挿図119	平安～鎌倉時代木製品 (9)	旧河道 (6)	144
挿図120	平安～鎌倉時代木製品 (10)	旧河道 (7)	146
挿図121	平安～鎌倉時代木製品 (11)	旧河道 (8)	148
挿図122	平安～鎌倉時代木製品 (12)	旧河道 (9)	149
挿図123	平安～鎌倉時代木製品 (13)	旧河道 (10)	150
挿図124	平安～鎌倉時代木製品 (14)	旧河道 (11)	151
挿図125	平安～鎌倉時代木製品 (15)	旧河道 (12)	152
挿図126	鎌倉時代金属製品	墓 1	154
挿図127	平安～鎌倉時代金属製品 (1)	旧河道 (1) ・包含層	155
挿図128	平安～鎌倉時代金属製品 (2)	旧河道 (2)	156
挿図129	平安～鎌倉時代金属製品 (3)	旧河道 (3)	157
挿図130	室町時代土器 (1)	南堀 (1)	176

挿図131	室町時代土器 (2)	南堀 (2)、土製品	177
挿図132	室町時代土器 (3)	北堀 (1)	178
挿図133	室町時代土器 (4)	北堀 (2)	179
挿図134	室町時代土器 (5)	東堀 (1)	180
挿図135	室町時代土器 (6)	井戸 2・3	181
挿図136	室町時代土器 (7)	小型堀	182
挿図137	室町時代土器 (8)	池 2・土壇 7	183
挿図138	室町時代土器 (9)	溝 3・溝 1・池 1	184
挿図139	室町時代土器 (10)	柱穴他	185
挿図140	鎌倉・室町時代土器 (1)	包含層 (1)	185
挿図141	鎌倉・室町時代土器 (2)	包含層 (2)	186
挿図142	室町時代石製品 (1)	包含層 (1) 砥石・磨石	187
挿図143	室町時代石製品 (2)	柱穴	188
挿図144	室町時代石製品 (3)	包含層 (2)	188
挿図145	室町時代木製品 (1)	井戸 2	191
挿図146	室町時代木製品 (2)	・竹製品 井戸 2	192
挿図147	室町時代木製品 (3)	井戸 3 (1)	193
挿図148	室町時代木製品 (4)	井戸 3 (2)	194
挿図149	室町時代木製品 (5)	南堀 (1)	195
挿図150	室町時代木製品 (6)	南堀 (2)	196
挿図151	室町時代木製品 (7)	南堀 (3)	197
挿図152	室町時代木製品 (8)	南堀 (4)	198
挿図153	室町時代木製品 (9)	南堀 (5)	199
挿図154	室町時代木製品 (10)	北堀 (1)	200
挿図155	室町時代木製品 (11)	北堀 (2)	201
挿図156	室町時代木製品 (12)	北堀 (3)	202
挿図157	室町時代金属製品 (1)	井戸 2	204
挿図158	室町時代金属製品 (2)	南堀 (1)	205
挿図159	室町時代金属製品 (3)	南堀 (2)	206
挿図160	室町時代金属製品 (4)	包含層	207
挿図161	江戸時代土器 (1)	便所	216
挿図162	江戸時代土器 (2)	包含層 (1)	218
挿図163	江戸時代土器 (3)	包含層 (2)	219

挿図164	江戸時代土器(4) 包含層(3)	220
挿図165	江戸時代土器(5) 包含層(4)	221
挿図166	江戸時代土製品 包含層	223
挿図167	江戸時代木製品(1) 井戸4(1)	224
挿図168	江戸時代木製品(2) 井戸4(2)	225
挿図169	江戸時代木製品(3) 水田他	226
挿図170	江戸時代金属製品(1) 包含層	227
挿図171	江戸時代金属製品(2) 包含層	228
挿図172	古墳時代の土器集成図	234
挿図173	平安～鎌倉時代の土器器種分類(1)	236
挿図174	平安～鎌倉時代の土器器種分類(2)	237
挿図175	瓦器碗の法量	248
挿図176	平安～鎌倉時代土器の変遷案(1)	254
挿図177	平安～鎌倉時代土器の変遷案(2)	255
挿図178	平安～鎌倉時代土器の変遷案(3)	256
挿図179	平安～鎌倉時代土器の変遷案(4)	257
挿図180	室町時代土師器皿の法量	263
挿図181	室町時代の土器集成図	264・265
挿図182	初田館跡遺構変遷図Ⅰ	267
挿図183	初田館跡遺構変遷図Ⅱ	268
挿図184	初田館跡遺構図	269
挿図185	天正年間前後初田館跡周辺の城館分布図	270
挿図186	初田館跡概念図	274
挿図187	城館分布図	278

表 目 次

表 1	初田館跡出土種実一覧表(1)	25
表 2	初田館跡出土種実一覧表(2)	26
表 3	初田館跡周辺の遺跡分布一覧表	30
表 4	城郭分布一覧表	33
表 5	古墳時代遺物観察表	92・93
表 6	平安～鎌倉時代遺物観察表	158
表 7	室町時代遺物観察表	208
表 8	江戸時代遺物観察表	228
表 9	出土瓦器碗分析表	249
表 10	初田館関係年表	271



挿図 1 初田館跡位置図

第1章 はじめに

第1節 近畿自動車道舞鶴線に伴う中世城館跡の調査

兵庫県下の近畿自動車道舞鶴線に関わる埋蔵文化財の発掘調査は昭和57年度から本格的に開始され、昭和61年度の初田館跡の調査で終了した。発掘調査終了後、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所等で出土品整理作業を経て、既に本報告書を含めて23冊の『近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告』として纏められている。

中でも、近年調査研究が進んで行われるようになってきた中世城館跡の調査は、近畿自動車道舞鶴線では1)水上郡春日町河津館跡、2)三田市中尾城跡、3)多紀郡西紀町内場山城跡、4)多紀郡丹南町初田館跡がある。いずれも遺跡の全体を調査することなく、路線外については現況保存となり、調査地区は記録保存となっている。時期的には室町時代後半以降に位置し、摂津・丹波の状況を表している資料である。土塁・堀で区画された館跡と小規模山城と梯廓式山城の調査で、丹波焼、備前焼、瀬戸・美濃焼と土師器等の遺物が豊富に出土している。⁽¹⁾

ところで、初田館跡は水田に残る館跡として暫く現況を保存する方向で対処されてきていたが、近畿自動車道の必要性に鑑み、止むなく発掘調査が実施された。「酒井勘四郎の首塚」、「酒井神社」として初田の村落・「酒井一族」の象徴的遺跡として、また江戸時代の丹波国の地誌『丹波志』⁽²⁾の初田古館として水田・畑地として残っていた場所であった。

調査において、『丹波志』記載の館跡に当たる遺構が出土しており、遺物からはやや古く室町時代後半に位置する。また、館跡下層には平安時代から鎌倉時代までの豊富な遺構・遺物があり、多紀郡西紀町所在の近衛家領「宮田荘」内遺跡の板井寺ヶ谷遺跡・西木之部遺跡や丹南町東寺領「大山荘」内遺跡



挿図2 近畿自動車道舞鶴線と中世城館跡調査の位置図

と検討できる資料を得た。最下層には古墳時代後期の竪穴住居址 5 棟の発見があった。

註

- (1)『河津館址』近畿自動車道舞鶴線に伴う埋蔵文化財調査報告書 (VI)
兵庫県文化財調査報告書43冊 1983.3
『中尾城跡』近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XI
兵庫県文化財調査報告書67冊 1989.3
- (2)『丹波志』(多紀郡ノ部 永戸半兵衛貞著 著)

初田古館

初田村の西北田間にあり。古跡有て隍跡正しからず。酒井勘四郎と云者居と云。

兵家茶話云、酒井勘四郎宅、初田村跡西田間に在。香花所在宅南日常福寺。

封疆志曰、酒井勘四郎館在初田村。天正頃人、戦死 其首為崇因送郷里建祠。

有子僅成童不知之所。

貞享記曰く勘四郎・江州勢多入り、戦死。年歴不詳。按ずるに勘四郎は明智光秀に降り天正十年六月十二日左馬介に従ひ安土より坂本に行く途に戦死なるべし。

館跡 方三十三間 兵家茶話曰方三十間

隍 長四十五間 横二間半

門跡 方二間半 南方に在

外隍 長五十間 横三間

井 兵家茶話曰井在宅東伊那須美と曰ふ。早魃不潤

私云館跡を去八十一間泥川の五六間初田村の三四間西也

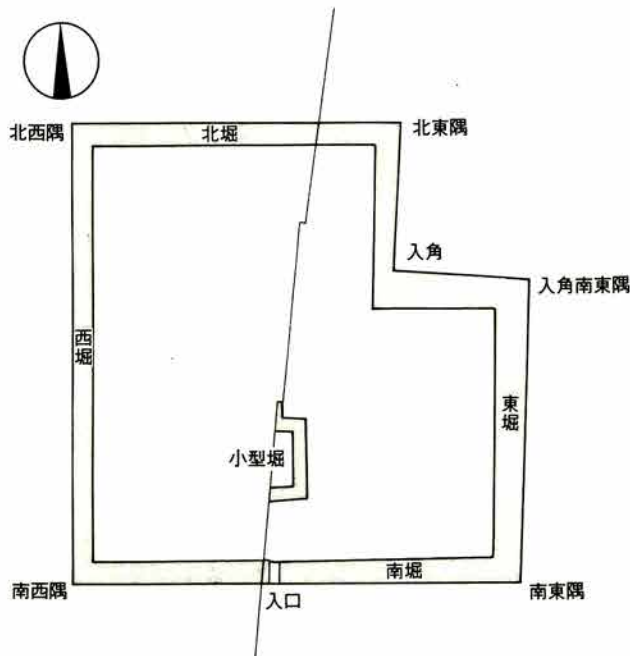
貞享記曰酒井志磨宅地内外二重隍、其中二十五間二十間

私云前輩の録する所右の如くなれとも内外の隍外圍の壘跡今田となって古跡正しからず故に別に図にあらわす。

第2節 初田館跡の用語について

本書の中での用語については以下のように統一を計っている。まず、館全体については、調査で判明した堀囲いの範囲を「初田館跡」あるいは単に「館」と呼ぶことにした。一方、館跡の範囲について、『丹波志』では「内外の隍」記述が見られ、範囲が広がることを示唆している。記述に従えば館跡の西側を流れる田松川を外堀として利用したと考えられるが、調査区の範囲ではこのことについて結論を出すことは出来なかった。

但し、『丹波志』に述べる外堀は記述から推測すると範囲が広大なものになる姿を想定しているようである。この記載については尊重しなければならないと考えるが、後述するように初田館跡そのものが広大であったという意見には賛成できない。また、「内外の隍」が防禦施設として発達したもので、城郭化したのであれば、「館」ではなく「館城」と呼ぶべき遺構であり、呼称も初田城跡としなければならない。しかし、調査による成果からは館跡が城塞化した痕跡は認められない。あえてそれを探すならば館内の小規模な堀で囲まれた小区画小型堀であろう。しかし、この堀が入口（虎口）防御の施設なのかどうかは結論できない。担当者としては『丹波志』にいう「内外の隍」が事実であっても、館そのものが広大に広がることや塁線として築かれたものは存在せず、あくまで付属する諸施設が存在したにすぎないと考えている。



挿図3 初田館跡用語解説図

従って、初田館跡はあくまで館であり「初田館跡」という呼称が正しいと考えられる。

館周辺の個々については図のようにした。館の南辺中央には橋脚があり、館の入口と考えられる。城郭では「虎口」と呼ぶべきであるが、館を強調するためあくまで「入口」と呼んだ。

その他、館の周囲を囲む堀については「堀」とし、さらに、堀の各辺については「南堀」・「東堀」・「北堀」・「西堀」とした。また、北東の屈曲する部分については「入角」と呼ぶ。入角のそれぞれの部分は挿図のように、コーナー部分を「入角隅」と呼称する。

館跡の堀の各辺の隅部分は「南堀」・「堀南東隅」・「堀北東隅」・「堀北西隅」・「堀南西隅」などとし、堀の入角コーナーは入角南東隅とした。

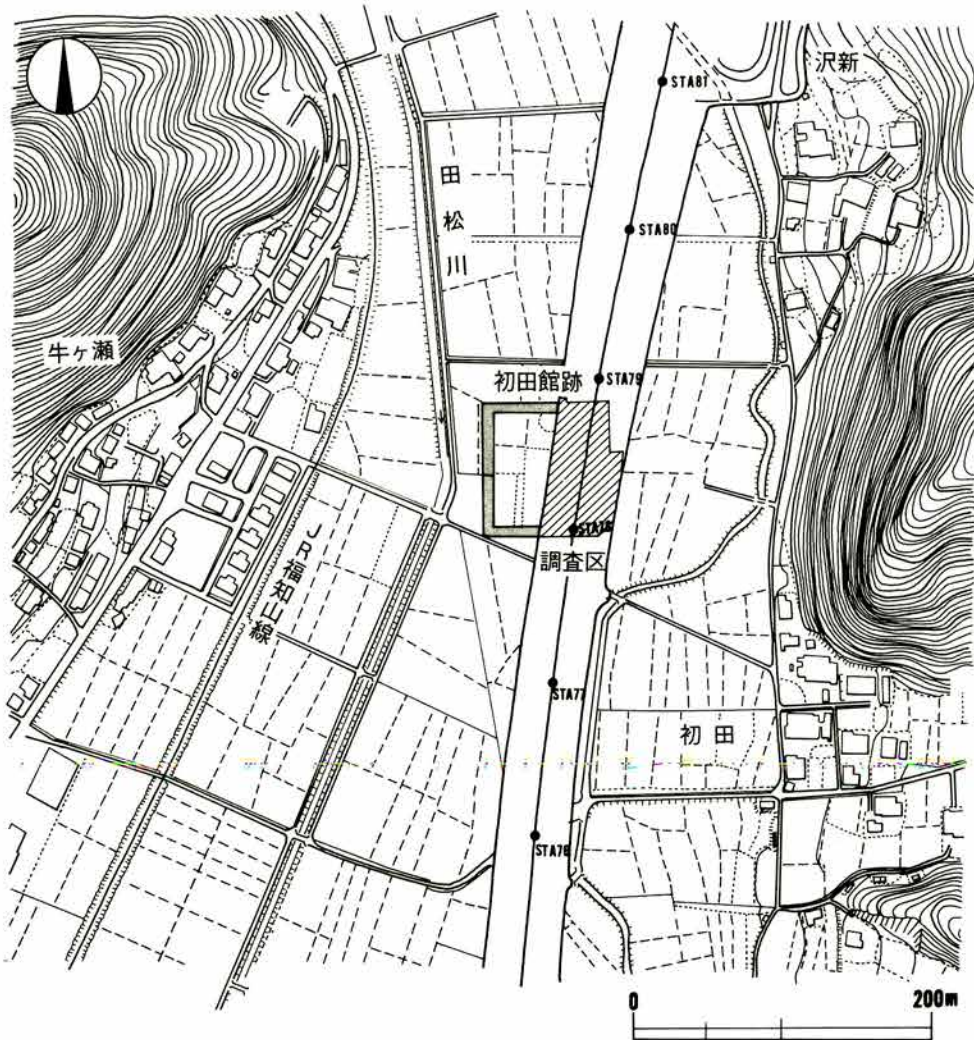
館の内部で検出された小規模な堀については、遺構の性格が不明であるが一応「小型堀」と呼んだ。そして、この堀で囲まれた小区画を呼ぶ場合は「小型堀区画」とした。しかし、この堀については不明な点が多く、この語が適切かどうかは今後の課題としたい。

他の部分については遺構の項で個々の名称を付した。

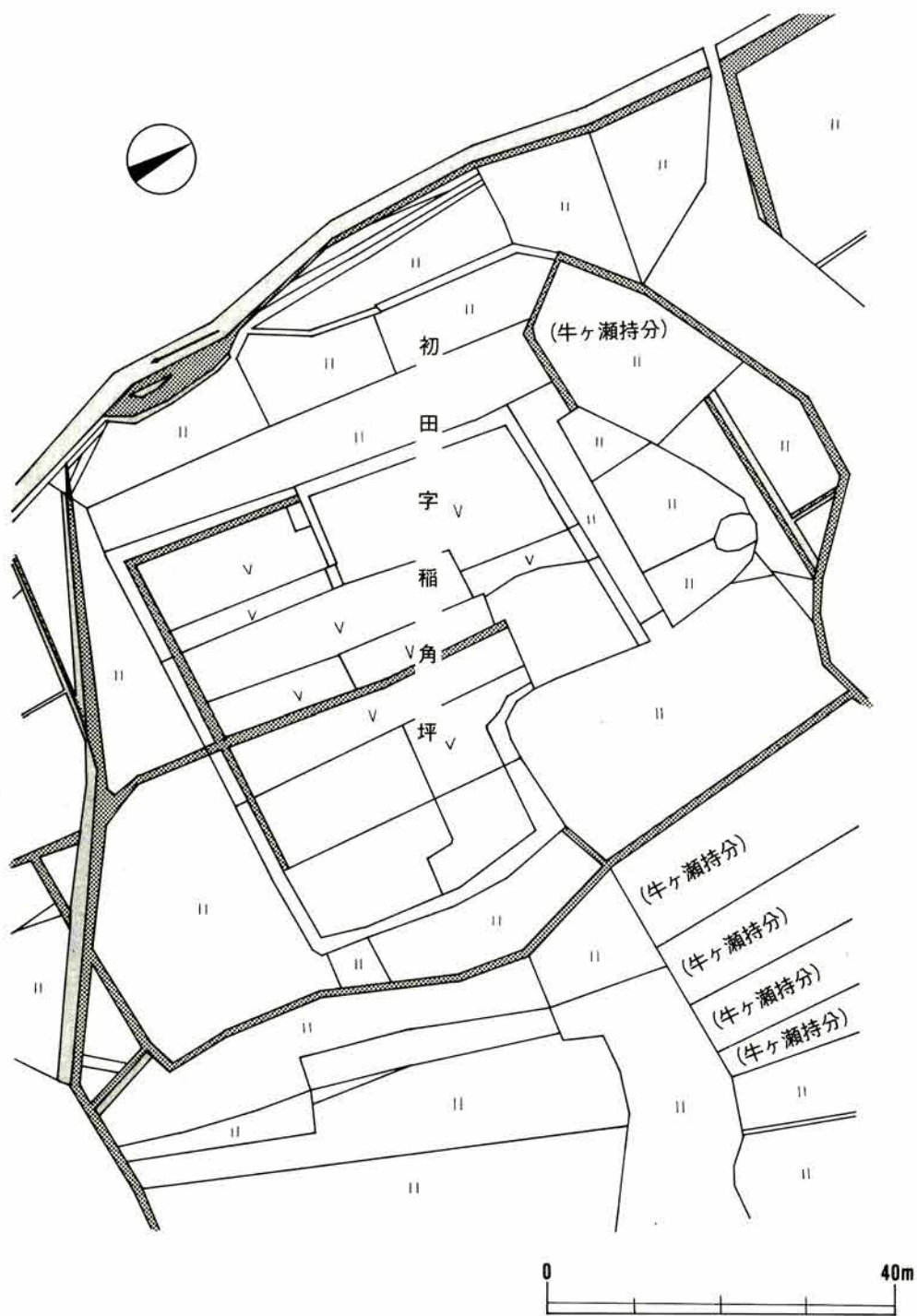
第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

多紀郡丹南町初田所在の初田館跡は瀬戸内海に注ぐ武庫川の一源流の田松川が加古川の源流の一つと谷中分水界を形成する地区に近く、古くから初田・酒井一族の本貫の地として盆地の



挿図4 近畿自動車道舞鶴線と初田館跡の位置



挿図5 初田館跡周辺の字限図

中でも微高地にあたる地区で、一族の館として酒井神社など祭礼、村行事の場として最近までは、ほ場整備事業などからも除外され「堀を巡らす土塁を持つ館跡」として保存されてきていた。

少し詳しく述べると、大正13年から昭和3年にかけて旧田松川の付け替えと新田松川の敷設で大きく自然地形が変化を受ける。田松川は明治10年まで運河として利用されており、明治16年の日出坂トンネル、明治32年阪鶴鉄道の開通により、水運事業も衰退し、後廃止される。

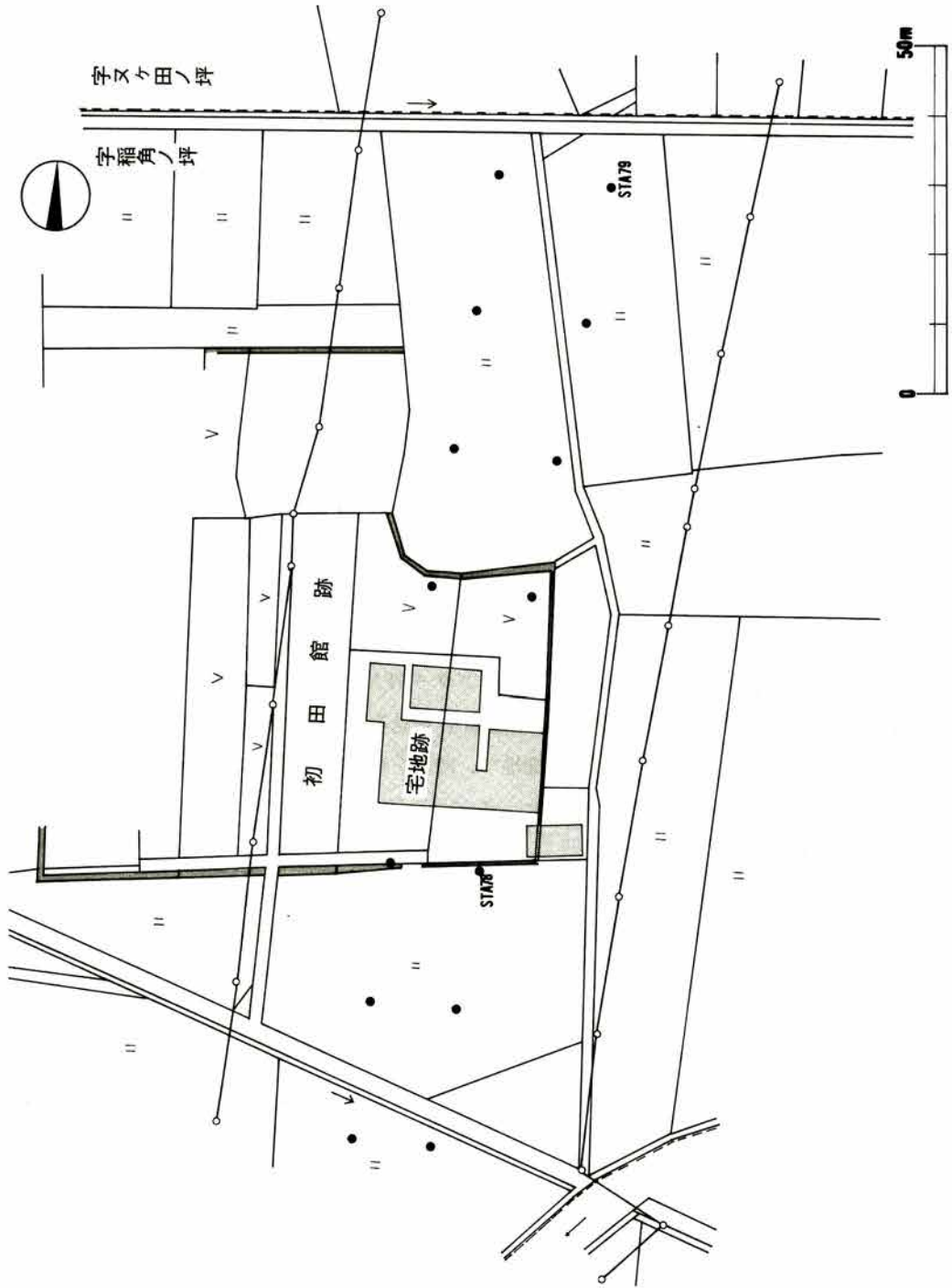
昭和40年代には牛ヶ瀬地区のほ場整備事業において又ヶ田坪で和鏡（端花鴛鴦鏡）他が出土し、鎌倉時代の墓として注目された。なお、和鏡は篠山町立歴史美術館で収蔵されている。

一方、近畿自動車道の整備計画が昭和48年に出されてから、兵庫県教育委員会と日本道路公団との間で遺跡保存の協議が重ねられ、昭和52年の路線の発表をまって具体的な協議を開始した。昭和53年度に摂津、丹波国境・日出坂峠以北の丹波地域の分布調査において周辺の遺跡とともに初田館跡が再確認された。昭和56年度の丹南インター予定地内の杉・西吹両遺跡の確認調査から始められた近畿自動車道舞鶴線の埋蔵文化財調査は初田館跡の調査で終了した。

初田館跡の調査は、昭和59年に工事用道路部分の確認調査を終えた後、用地買収が難渋したことから、漸く近畿自動車道舞鶴線の兵庫県側最後の埋蔵文化財調査として、昭和61年に本調査が実施された。

初田館跡の調査は近畿自動車道舞鶴線道路センターSTA.78～STA.79の間に限定されていた（挿図4）。また、初田館跡周辺の字限図（挿図5）を見ると初田字稲角に位置し、一部北の水田が牛ヶ瀬分とされる。図の中央部分は畑地で、四周を短冊形の水田で囲まれており、堀と土塁で囲まれた館の存在が伺われる。道路センターSTA.78の南とSTA.79の北にも遺跡の広がりが見られる。

ところで、『兵家茶話』・『丹波志』にみる「伊奈須美」は字稲角に当たり、発掘調査で見出された井戸4が伊奈須美井と考えられるなど、地誌に歴史が読める資料でもある。



挿図6 初田館跡と調査地区

第2節 第1次調査

兵庫県教育委員会が実施した昭和59年度近畿自動車道舞鶴線建設工事に伴う初田館跡発掘調査の『実績調査報告書』を掲載して報告に替える。

- ・遺跡の所在地 多紀郡丹南町初田
- ・調査委託者 日本道路公団
- ・調査受託者 兵庫県教育委員会
- ・調査期間 (自) 昭和59年10月4日
(至) 昭和59年10月10日
- ・調査担当者 兵庫県教育委員会 社会教育文化財課
技術職員 水口富夫
技術職員 市橋重喜
技術職員 岸本一宏

調査に至る経過

初田館は酒井館あるいは勘四郎館と呼称され、『丹波志』等でも著名な館跡であり、方90mと方82mほどの二重濠をもつとされている。近畿自動車道舞鶴線（近舞線）は、この館跡の東側約1/2にあたる部分を通過するため兵庫県教育委員会は、工事着手前に付近の確認調査もふくめ発掘調査の必要があると判断していた。

日本道路公団と兵庫県教育委員会は近舞線予定地内の遺跡発掘調査予定を年度毎に協議しているが、初田館跡は昭和59年度当初予定に入っていなかった。しかし、トラック2台分が対面通行できる幅員の仮設工事用道路を付設する必要が生じたため、急遽兵庫県教育委員会と協議し昭和59年度発掘調査（確認調査）を実施することとなった。

協議事項は以下の通りである。

- ①仮設工事用道路の付設は認めるが、事前に確認調査を実施し館の範囲を確かめる。
- ②確認調査によって仮設工事用道路予定地に館跡が拡がる場合は日本道路公団が全面調査前に旧状に戻す。

調査の方法

上記のような経過のため、トレンチ調査によって堀跡の確認を行った。トレンチは北から第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチと呼称する。

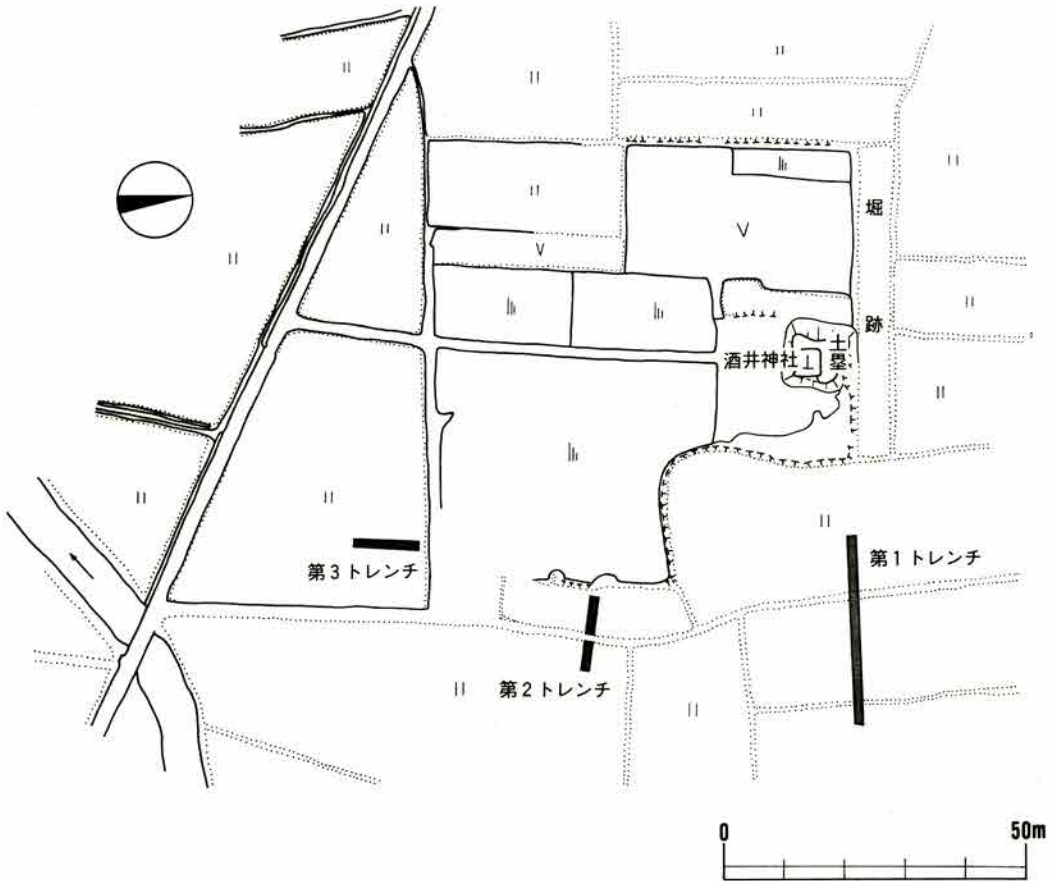
調査の結果

(第1トレンチ) 幅1.5m 長さ31m

水田の造成によって土塁状のたかまり・館内の遺構は削平されてしまっている。しかし、トレンチ西端から約2m東で堀の落ち込み肩を検出し、急傾斜で東へ落ちることが判った。堀は最深部から東へは緩傾斜で立ち上がる。堀内は粘土質の黒色土が堆積し、中位で鎌倉時代の瓦器碗や片口鉢を検出した。北側の堀跡状の水田(東西方向)とはおそらく直交しないと思われる。このことによって東辺部が湿地状態ないし旧河道でないかという推定が成り立つ。

(第2トレンチ) 幅1.5m 長さ6m+5m

第1トレンチと同様、水田によって土塁状のたかまりは削平されている。上端幅約6mの堀跡を検出した。



挿図7 確認調査位置図

(第3トレンチ) 幅1.5m 長さ11m

南北方向のトレンチで、幅約4.5mの堀を検出した。南端部西壁に礎石状の石があるが、トレンチの堀が人工の堀であることはまちがいないが一重か二重であるかは不明である。

以上のような調査結果のため、次のことが指摘できる。

(1) 東辺部の堀は自然流路を利用していた可能性があるが、館の規模を推定する際や館の機能を考える上で、極めて重要と考えられる。

(2) 南辺部はトレンチによって少なくとも一重の堀があることが判ってきたが、その南側については調査の性格上明らかにしえなかった。今後、トレンチを追加、延長して確かめる必要がある。

(3) 北辺部はトレンチを入れていないので、よくわからないものの第1トレンチで検出した自然流路状の堀(?)を追求する必要と、東西方向の水田(幅約7m)の関連を調査し北方への拡がりを確認しなければならない。

(4) (1)~(3)では館の推定規模を確かめるには至っていないので、南北方向の工事に際しては、なお取扱いの注意を要する。

(5) したがって、全面調査時点では東側の仮設工事用道路は撤去する必要があると判断した。また一部直進していない部分についても撤去し、再度確認調査を行うことが必要である。



遠景 (南西から)



工事用道路予定地 (南から)



第1トレンチ (西から)



第3トレンチ西壁

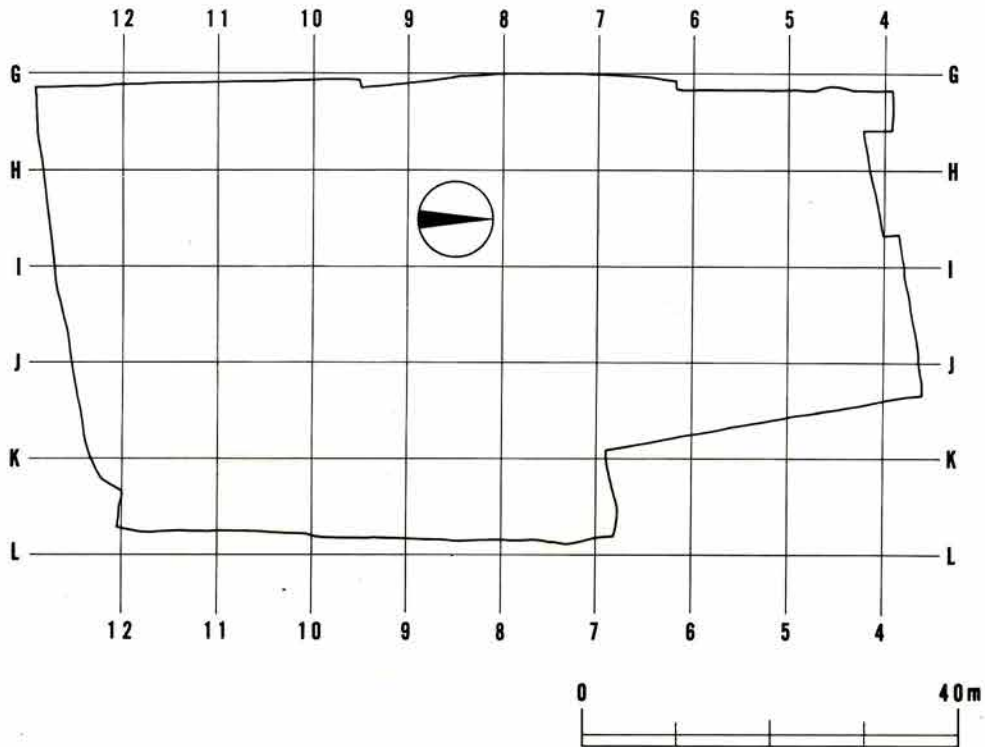
挿図8 調査風景写真

第3節 第2次調査

1. 調査の方法

調査は極めて限定された範囲に留まり、しかも工事用道路部分の除去と道路擁護壁へ影響の及ばない範囲について、盛土を除去してなんとか3,674㎡の調査を確保した。『丹波志』の記載や字限図で想定する初田館跡の路線部分の調査に及ばなくなっているが、昭和61年9月18日から昭和62年2月20日の間、発掘調査を実施した。字限図や以前に平板測量で作成した館の方向が現在の磁北に並んでおり、磁北を北に10m方眼の調査区を設定した。館跡の将来の調査も考えて、南北方向にNa4～12、東西方向にNaG～Lを割り付けた。それぞれの調査区は南西隅の記号で例えばG12区と呼称し、調査を開始した。

調査地は微高地部分と低地部分に分かれる。第1次調査のトレンチは工事用道路の為の地区設定で館跡及び下層の土層堆積を確認したものではないため、改めて排水と下層の土層堆積を確認するために調査区の四周に側溝を設けた。土層観察の上、微高地は人力により掘削を開始



挿図9 調査地区割付図

し、用地買収に伴う建物撤去の際の攪乱坑については重機を使って掘削を行った。次に近世面、中世面の調査を行った。攪乱坑の断面を観察したり、調査区の中央を東西に割る配水管埋設溝の断面を調査し、及び下層に古墳時代の土器が大量に出土することから、中世面の調査後改めてトレンチを設け、竪穴住居址を確認した。トレンチで確認した範囲について追加の調査を行った。一方、低地部分については近世水田造成層について、重機で掘削し、以下トレンチで下層の土層堆積を確認しながら、旧河道を鎌倉時代、平安時代層上面とそれ以下の2回に分けて調査を行った。なお、中世の遺構検出面と古墳時代の遺構検出面の2面において、航空写真測量を行った。測量完了後、井戸の断割りや井戸側の取上げ、橋脚の取上げを重機などを用い実施した。また、北堀・東堀・南堀・旧河道の土層堆積断面から植生調査サンプルを取り上げ、花粉分析を行った。

発掘調査の組織

事業主体	兵庫県教育委員会
調査主体	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課
調査体制	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係
調査員	主査 岡崎正雄、技術職員 山田清朝・山上雅弘
調査補助員	西本寿子、橋本智子、奥野和宏、水嶋正稔（関西大学）、三原慎吾（同志社大学）、青木哲哉（立命館大学）
発掘作業委託	東海興業株式会社
航空写真測量	国際航業株式会社



挿図10 発掘調査参加者写真

2. 土層

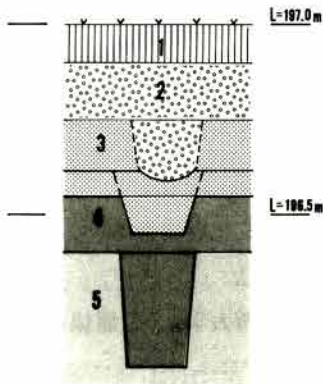
微高地の土層については、調査区の西端側溝で確認した、1層耕作土、2層黄褐色砂礫土、3層黄褐色砂、4層茶褐色土、5層暗灰茶褐色土を基本としている（挿図11）。

2層には江戸時代を中心とした陶磁器が多く含まれており、江戸時代の遺構面を調査した。微高地では畑と溝であり、低地では水田跡を杭列で確認できた。

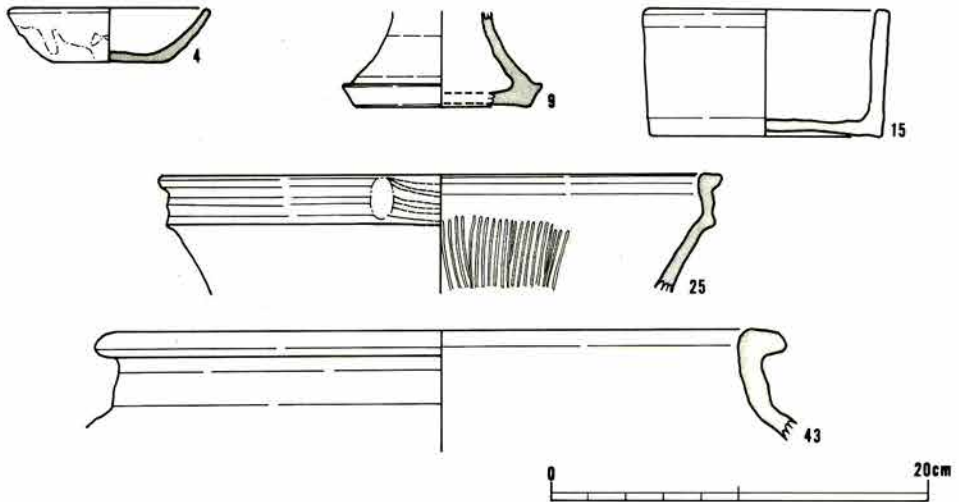
3層には平安時代～室町時代の土器（須恵器・土師器・瓦器・輸入陶磁器等）が多く含まれていた。遺構面は室町時代面・鎌倉時代面・平安時代面の3枚を調査しなければ成らないが、遺構面として認識が困難なため中世面として1面のみの調査を行った。

室町時代の館跡の遺構群（堀・井戸・池・掘立柱建物等）、鎌倉時代の遺構群（井戸・墓・柱穴等）、平安時代の遺構群（柱穴等）の調査がある。

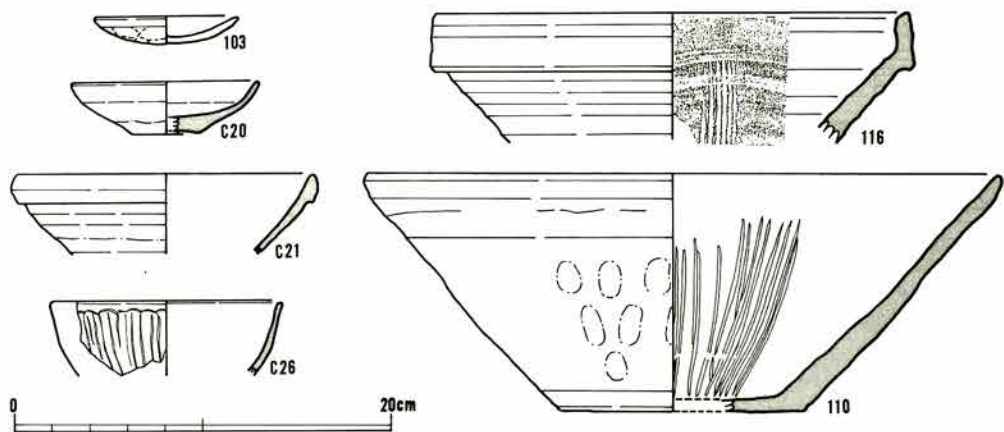
下層のトレンチにより、古墳時代の遺物（須恵器・土師器・土錘等）を包含する4層を確認したため、古墳時代面の調査を行い、竪穴式住居址を5棟検出した。



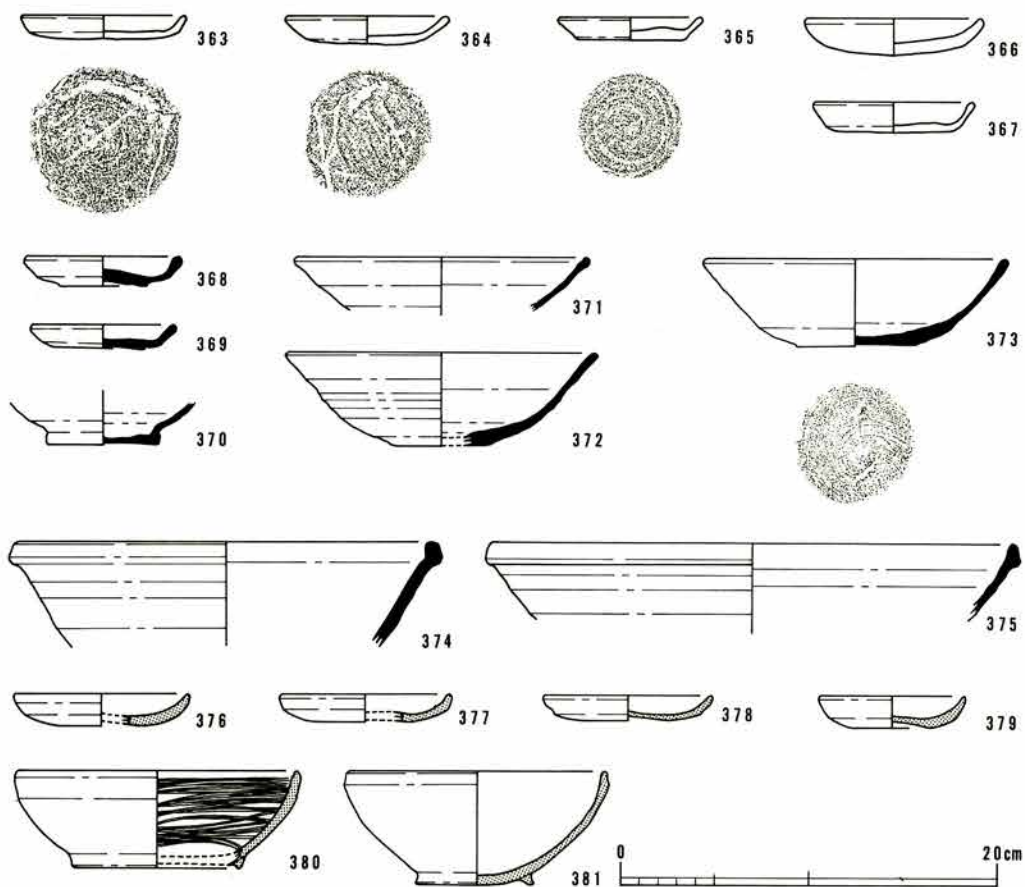
挿図11 遺跡微高地基本土層図



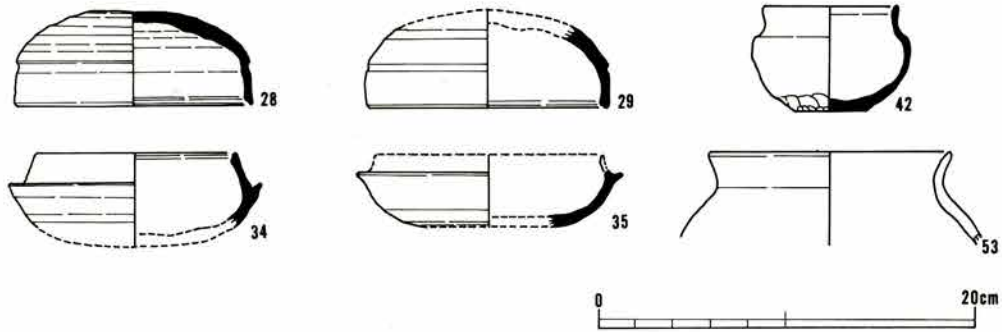
挿図12 2層出土の江戸時代土器



挿図13 3層出土の鎌倉・室町時代土器



挿図14 3層出土の平安・鎌倉時代土器



挿図15 4層出土の古墳時代土器

発掘調査日誌（昭和61年9月18日～昭和62年2月20日）

- 9月18日（木）～9月23日（火）現場事務所設置と調査準備を行う。
- 9月24日（水）晴れ後曇り。草刈り後杭打ち。調査前の写真撮影、平板測量後ベルコン設置。
- 9月25日（木）晴れ。困障のやり直し。南サブトレンチで堀の肩を出す。酒井神社（土塁）写真撮影。基準点からのレベル出しを行い、BM204.97mとする。
- 9月26日（金）晴れ。北の盛り土の防護柵の設置。南サブトレンチの土層の実測。調査区内の測量杭の整備。西サブトレンチの掘削を開始。
- 9月29日（月）晴れ。本日から調査体制が整い、排土の小運搬も始まる。西サブトレンチでは南堀の北肩を検出し、瓦器の伴う土壌も検出。
- 9月30日（火）晴れ。サブトレンチを西・北・東と展開する。南堀の下層から青磁碗・土師器皿・丹波焼播鉢を検出。
- 10月1日（水）雨。作業中止。
- 10月2日（木）曇り後晴れ。サブトレンチで北堀、東堀と旧河道の覆土を検出する。北では瓦器・丹波焼を多く検出。西サブトレンチの土層を実測する。
- 10月3日（金）晴れ時々曇り。地元民と土地開発公社との連絡協議のため現場作業を午前中で終了する。
- 10月6日（月）曇り。東・南東隅サブトレンチで堀の隅部を確認する。西・北サブトレンチの写真撮影。G5区表土層を掘り下げる。
- 10月7日（火）曇り。G・H(4～9)区表土層を掘り下げる。北サブトレンチ実測。
- 10月8日（水）晴れ。G・H区の人力掘削とG～K4区の機械掘削を行う。立命館大学の青木氏が参加し、北サブトレンチの土層観察を開始する。森崎参事来跡。
- 10月9日（木）晴れ。H(6～12)区・I8区の表土掘削と建物基礎コンクリートを重機で除去し始める。北堀の平面を掴む。
- 10月13日（月）晴れ。I(8～12)区表土層、G5区・H(5～7)区2層を掘り下げる。H5/6区の重機排土を行う。山上職員が研修から現場復帰。

- 10月14日（火） 晴れ。I(8~12)区、J(8/9)区の表土層の掘り下げとH(6/7)区、I・J 6区の重機排土と現代建物基礎起しを行う。G(6~8)区・H 6区 2層を掘り下げる。東サブトレンチの土層図作成。
- 10月15日（水） 晴れ。昨日の続きを行う。また、調査区北東隅を重機で深掘りを行い、湿地性堆積と遺物を1.8m下から発見する。更に昭和59年度の調査トレンチを再度掘り下げる。
- 10月16日（木） 晴れ。昨日のトレンチの最下層で平安時代中期の土器を発見する。I(9/10)区・J(9/10)区の表土層、G(6~8)区の黄褐色礫層を掘り下げる。また、I(6/7)区・J 5区で重機掘削で盛土・表土層を除去する。
- 10月17日（金） 曇り時々雨。昨日の続き。トレンチの更に下層で黒色土器を発見する。
- 10月18日（土） 晴れ後曇り時々雨。H(8~11)区・I(8~11)区・J(9~11)区の2層掘り下げとG~K12区の重機による排土を行い、調査区東南部で堀の内隅を確認した。
- 10月20日（月） 曇り後晴れ。2層の掘り下げを続け、東堀上層の重機排土も続ける。確認調査トレンチの2本の土層断面観察を行う。
- 10月21日（火） 晴れ後曇り。G(8~11)区の3層を掘り下げる。東堀の重機による上層面検出を続ける。確認調査トレンチの土層断面図作成。
- 10月22日（水） 曇り後晴れ。雨の中、3層の掘り下げを続ける。
- 10月23日（木） 曇り。G~J12区で南堀の上面を検出する。H(8~11)区は黄褐色礫土を掘り下げ・重機は排出土の積出しに追われる。
- 10月24日（金） 晴れ。南堀上面の写真撮影。H(8~11)区は近世溝（バラス混土）を掘る。
- 10月27日（月） 曇り時々晴れ。確認調査トレンチの再精査を行い、土層堆積状況を確認する。H・I区の3層掘り下げとK・J区で堀の上面検出を続ける。
- 10月28日（火） 曇り。H・I・J(9~11)区は黄褐色礫混み土の掘り下げと現代攪乱土壌の掘削を行う。
- 10月29日（水） 曇り後雨。H・I・J(8~11)区の3層掘り下げと調査区中央の配水管埋設溝を掘削し、現代攪乱土壌の平板測量図を作成する。
- 10月30日（木） 晴れ。I・J(8~12)区の3層掘り下げを行う。重機による掘削と残土処理は本日で終了し、ベルトコンベアーの設置を復元する。土層堆積の検討を続け、写真撮影と実測を行う。
- 10月31日（金） 快晴。H・I・J(7~11)区は3層掘り下げを行う。また、I・J 6区、K 7・8区の遺構の検出と堀の上層の精査を行う。東サブトレンチの掘り下げで、瓦器碗と土師器羽釜を発見する。
- 11月 4日（火） 晴れ後曇り。G・H(7/8)区は3層掘り下げを行い、配水管埋設溝の南壁断面精査と写真撮影を行い、東サブトレンチの掘り下げを続ける。
- 11月 5日（水） 晴れ。G・H(4~7)区の3層を掘り下げを行い、G 6区で井戸を検出した。G・H(7/8)区は近世溝を精査する。K 7区の配水管埋設溝精査で、黒色シルト層から折敷他の木製品と瓦器碗が出土する。
- 11月 6日（木） 晴れ。G・(5~7)区の3層掘り下げと現代攪乱土壌の掘り下げを行い、井戸 2を検出した。

G～J(4～7)区は堀と旧河道の取りつき部を検出した。

- 11月 7日(金) 曇り時々小雨。近世面と堀・旧河道検出面の写真撮影を行う。
- 11月10日(月) 晴れ。堀と旧河道は割り付けを行い、掘り下げを開始する。
- 11月11日(火) 曇り時々雨。北堀1～4区、旧河道1～3区は掘り下げを続け、H5/6区は茶褐色土と攪乱土の掘り下げを行う。また、I・J区は近世溝を掘り下げを行う。
- 11月12日(水) 晴れ時々曇り。井戸1・2をそれぞれ50cm掘り下げ、井戸2で白磁・青磁片を検出する。北堀では白磁片、旧河道では漆碗(1区)、瓦器碗(2/3区)と埋もれ木を検出しながら鎌倉時代遺構面まで掘り進める。
- 11月13日(木) 曇り後雨。旧河道(1～3区)・北堀(1～4区)を掘り下げ、下駄が旧河道2区から出土する。井戸1は曲物底板を検出する。
- 11月14日(金) 曇り。北堀は5区まで掘り進め、2/3区下層から板状木製品を検出する。旧河道2/3区ではほぼ鎌倉時代面まで完了する。井戸1は曲物底板2例目を深さ50～100cmで発見する。
- 11月17日(月) 曇り。近世面は平板測量により遺構図を作成する。北堀3～6区、旧河道2～4区を掘り下げ、瀬戸・美濃天目碗や瓦器碗を検出する。
- 11月18日(火) 曇り後晴れ。G5区などで近世攪乱面の精査を行う。北堀3/4区は堀底の精査と5～7区は中層を掘る。旧河道2/4区は瓦器碗・土師器鍋を検出する。
- 11月19日(水) 晴れ。北堀6/7区は掘り下げを進め、4/5区も堀底の仕上げに掛かる。
- 11月20日(木) 晴れ。北堀5～7区は掘り下げを完了する。G・H(7/8)区は中世面を検出する。旧河道2～5区は遺物を取り上げる。また、旧河道1～5区の土層堆積図を作成する。
- 11月21日(金) 快晴。北堀・旧河道の全景写真を撮影する。
- 11月25日(火) 曇り後雨。午後、作業は中止。
- 11月26日(水) 曇り時々雨。雨の中、G(7～12)は中世面までの掘り下げを行う。
- 11月27日(木) 晴れ。G・H(9～11)区は中世面までの掘り下げを行う。
- 11月28日(金) 晴れ。G・I(8～12)区は中世面までの掘り下げを行う。
- 12月 4日(木) 雨後晴れ。東堀2～6区は上層、南堀1～4は近世埋め土層を掘り下げる。東堀4区で漆碗が出土する。井戸4は深さ180cmまで掘り下げる。
- 12月 5日(金) 晴れ。南堀1/4区は中世土層を掘り下げる。南堀4区と東堀4/5区から木製品が出土する。井戸4は深さ190cmまで掘り下げ、横棧4段目を検出する。
- 12月 8日(月) 井戸1は清掃を行い、裏込めから丹波焼を多く発見する。また、堀の掘り下げと中世面の精査を続ける。群馬県発掘事業団木津氏が見学。
- 12月 9日(火) 快晴。南堀1～4区・東堀2～4区は掘り下げを続ける。南堀2区から五徳、3区から羽子板など多くの遺物が出土する。H9/10区は中世面の精査を行い、小型堀は掘り下げる。名古屋大学渡辺助教授が見学。
- 12月10日(水) 晴れ後雨。井戸1・2は写真撮影を行う。また南堀を中心に堀を掘る。南堀出土の木簡を奈良国立文化財研究所の寺崎技官他に見て頂き、天文15年の年紀を確認する。

- 12月11日（木）晴れ後曇り。井戸4は井側上面を検出し写真撮影後、上面の平面図を作成する。また、堀は継続して掘り下げ、集積土壌1・溝3・4の実測を開始する。
- 12月12日（金）晴れ。井戸3は上面の写真撮影。井戸4は掘り下げを続け、井戸2は上面の上屋の柱跡を探す。堀は継続して掘り進める。
- 12月13日（土）晴れ。堀と井戸3・4は掘り下げを続ける。池状土壌1・溝3・4の実測を完了し、遺物を取り上げる。
- 12月15日（月）雨一時曇り。時雨強く、G・H(9~11)区は柱穴を探し、井戸4は掘り下げを続ける。
- 12月16日（火）晴れ後曇り。東堀2区は掘り下げを開始する。H~J(8~10)区は中世の遺構の検出に努める。小型堀と南堀0区は土層断面の写真撮影を行う。
- 12月17日（水）曇り。東堀の仕上げを急ぎ、中世遺構の検出も続ける。
- 12月18日（木）曇り。井戸4は作業を一時中断する。南堀の西端の橋脚部は中層の遺物を取上げ、下層へ掘り下げる。南堀の各土層断面と小型堀は全景写真を撮影する。土木技術史研究家北垣先生が見学。
- 12月19日（金）曇り。昨夜の雨で排水作業に半日を費やす。午後、北堀・旧河道の土層観察用畦を試料サンプル用を除き、除去する。池状土壌2は全景写真を撮る。
- 12月20日（土）雨。雨のため排水作業を半日行い、午後作業を中止する。
- 12月22日（月）曇り時々雨。24日予定の航空写真測量を延期し、排水作業を行う。花粉分析用の材及び種子用のサンプルを行う。洲本市浦上氏が見学。
- 12月23日（火）晴れ後曇り。南堀は橋脚部の完掘をめざし調査を進める。東堀1/2区は下層を掘り下げ続け、瓦器碗等を取り上げる。北堀・旧河道の畦を除去する。
- 12月24日（水）晴れ。南地区は清掃を完了する。東堀1/2区の下層の掘り下げを続け、多くの瓦器碗等の遺物を検出し実測を行う。大村課長補佐と奈良国立文化財研究所の西村主任研究官が見学。
- 12月25日（木）曇りのち時雨。明日の航空写真測量のため北地区は精査を夕方まで続ける。池状土壌は遺物出土状況図を作成する。広島県草戸千軒町遺跡調査研究所の篠原氏が見学し、遺物を検討する。
- 12月26日（金）曇り後晴れ。本日航空写真測量のため排水後、仕上げの精査・清掃を終え、正午前写真撮影を終了する。午後から櫓を使用して全景写真、東堀・南堀・橋脚・土壌の個別写真撮影を行い、養生を済ませ年内の作業を終了する。

昭和62年

- 1月6日（火）晴れ。休日の間に溜まった雨水の排水作業と養生シートの乾燥から新年の作業を開始する。
- 1月7日（水）晴れ。旧河道の畦のブロックサンプリングを行い、畦を除去する。奈良国立文化財研究所で木簡5点の釈読を進め、「転読札」・「呪符木簡」を解明する。
- 1月8日（木）晴れ。
- 1月9日（金）晴れ。井戸4の実測を行う。
- 1月12日（月）雪。雪の中、作業プレハブ内で遺物中心に新聞記者発表を行う。

- 1月13日(火) 雪。朝、除雪と排水を行うが、午後再び雪となり作業を中止する。現地説明会資料作成と土器の復原を行う。
- 1月14日(水) 晴れ。積雪11cmの除雪を行い、現地説明会の会場設営を行う。
- 1月15日(木) 快晴。午後1時から約130名の参加者を迎え、現地説明会を行う。愛知県埋蔵文化財調査センター・堺環濠都市遺跡調査研究者・有岡城跡調査研究者と地元郷土史研究者方々から有意義な意見が出され、実りのある催しと成った。
- 1月16日(金) 曇り。井戸1・2・3、柱穴断割りと池状土壌2の実測図作成を行う。東堀下層の調査をほぼ完了し、旧河道下層をさらに掘り下げる。
- 1月19日(月) 曇り。東堀2区青灰色シルト直上から青磁蓮弁文碗が出土する。池状土壌2は写真撮影を行う。旧河道2～3区・東堀2区の下層の掘り下げを続ける。
- 1月20日(火) 雪。作業中止。
- 1月21日(水) 晴れ。旧河道2区は平安時代の土師器碗と須恵器碗を検出する。建物の柱穴・土壌を精査する。
- 1月22日(木) 晴れ。旧河道2区は青灰色砂混り黒色シルト層上面から人形、暗黒灰色シルト層から瓦器碗を検出する。池状土壌内の柱穴1～4の精査と井戸3を掘り下げる。東堀1区灰色シルト層からも瓦器碗が出土する。H9区で土師器皿が一括出土する。更に旧河道・東堀で下層の状況を掴むためトレンチ掘りを開始する。
- 1月23日(金) 曇り後雨。旧河道・東堀の下層トレンチの断面の検討と遺物の確認を急ぐ。旧河道4区は暗黒灰色シルト層から須恵器甕を検出する。東堀2区は曲物底板を検出する。井戸3は現代攪乱土壌で断割られているため第1段の桶まで掘り下げ、精査を行う。
- 1月24日(土) 曇り時々雨。雨のため作業を中止し、井戸3の第1・2段桶の精査と写真撮影と実測のみ午前中行う。
- 1月26日(月) 晴れ。旧河道・東堀の下層トレンチの調査を完了する。旧河道1/2区は灰色C層から平安時代須恵器碗を検出する。東堀1区は瓦器碗と土師器鍋を検出する。
- 1月27日(火) 晴れ。旧河道2区は暗灰色砂層から須恵器甕・転用硯など10世紀代の遺物が多く出土し、黒色シルト層からは人形と刀の石突が出土する。旧河道1区と東堀1区の土器群を取り上げる。
- 1月28日(水) 晴れ。微高地上の建物柱穴の根石等の詳細調査を続ける。旧河道2区はヘラ状木製品や須恵器鉢が出土する。
- 1月29日(木) 晴れ。旧河道2区は大形・中形折敷や木錘が出土し、4区や東堀1区でも木製品が出土する
- 1月30日(金) 曇り。旧河道2～4区は10世紀代の須恵器碗・瓶が出土しする。井戸3は桶第2段目を精査する。微高地上の建物柱穴や掘り残り遺構の精査を行う。
- 1月31日(土) 晴れ。堀や現代攪乱土壌の断面で古墳時代の須恵器が多く出土しているため、下層確認トレンチで確かめた遺構の調査を開始する。古墳時代堅穴住居址1は炭化材の広がりを掴む。旧河道2区は転用硯、3区は黒色シルト層から大形折敷・ヘラが出土する。
- 2月2日(月) 曇り後雪。降雪激しく昼にて作業を中止する。

- 2月 3日（火）雪。積雪10cmを超え、排水のみ作業を行う。
- 2月 4日（水）雪。積雪量多く作業中止する。
- 2月 5日（木）曇り後晴れ。除雪から仕事を再開する。旧河道の畦の写真と全景写真を撮影する。古墳時代
竪穴住居址1は土層堆積を検討し、平面図と炭化材の広がりやを平板測量する。井戸3は第1
段目桶を断割り、第3段目の桶内の掘り下げを行い、曲物・下駄を検出する。
- 2月 6日（金）晴れ。旧河道は3本の畦の土層図を作成する。井戸3は昨日の続き。古墳時代竪穴住居址は
3棟を掘り下げる。
- 2月 7日（土）晴れ。東堀2区は掘り方に土壌7を検出し、掘り下げを行う。古墳時代竪穴住居址は土層観
察用畦の断面図作成後、畦を除去する。
- 2月 9日（月）晴れ。井戸3は上面の石積みと第1段桶の再精査を行う。古墳時代竪穴住居址は遺物を検出
する。明日の第2回航空写真測量のため精査を行う。
- 2月10日（火）晴れ。第2回航空写真測量後、竪穴住居址群は全景写真撮影を行い、細部の実測を開始する。
- 2月11日（水）晴れ。竪穴住居址は実測の継続と東堀の再度の下層断割りをを行う。
- 2月13日（金）晴れ。木棺墓1は断割りをを行う。井戸4は井戸枠材の重機を使っての取上げを行う。東堀・
井戸1は断割りも行う。
- 2月17日（火）曇り 竪穴住居址1の竈は断割り後細部の調査を行う。井戸4は井戸枠材を取上げながら細
部を写真撮影しながら調査を続ける。井戸3は下段の井戸枠材を取り上げる事が出来なかつ
たが湧水のため調査を続ける事ができないため、作業を完了する。南堀橋脚部からの写真撮
影を行う。
- 2月18日（水）曇り。橋脚材の掘り方を確かめるため断割りをを行い、図面を作成する。
- 2月19日（木）雨。橋脚材を取り上げながら図面を補足する。
- 2月20日（金）晴れ。本日で作業を完了し、管理引継ぎを委託業者東海興業株式会社と日本道路公団三田工
事事務所との間で行い、発掘調査を終了する。



1. 遺構全景（東上から）



5. 旧河道の土層堆積



2. 遺構全景（北上から）



6. 墓の調査



3. 表土層除去



7. 井戸3の調査



4. 旧河道の掘削



8. 井戸3の遺物出土状況

挿図16 調査地区と調査作業風景

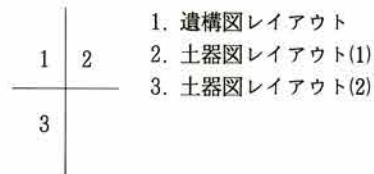
第4節 整理作業

初田館跡の発掘調査において出土した遺物は、整理コンテナで112箱の土器（須恵器、土師器、瓦器、黒色土器、陶磁器類）・土製品（土錘）、約200点の木製品、約60点の金属製品と20点の石製品が出土している。調査現場事務所で水洗いを済ませ、調査終了時に明石魚住分館に搬入した。平成元年から3ヵ年計画で出土品整理作業を開始した。ネーミング、接合は魚住分館で初年度に行い、土器類については実測・復原・写真撮影を2年次に行った。最終年は遺物・遺構のレイアウト・トレースを行い、原稿執筆・編集作業を経て報告書の完成に到った。

出土品の写真撮影は吉田カメラ（撮影者 横山俊介氏）に作業委託して行った。

出土品整理事業の組織

事業主体	兵庫県教育委員会
調査主体	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所
調査体制	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所 整理普及課
調査員	主査 岡崎正雄、技術職員 山田清朝・山上雅弘
嘱託員	表具冴子・中澤貴美子・松本美千代・和田マユミ・斉藤海予子



挿図17 整理作業風景

第5節 出土品保存処理作業

出土品の内、金属製品（鉄・銅製品）・木製品については保存処理作業を実施している。

金属製品は約60点の製品について、整理普及課 主査加古千恵子が指導して、1)鉄製品の保存処理、2)銅製品の保存処理を埋蔵文化財調査事務所で実施した。処理済の製品は処理台帳を作成するとともに、1点ずつシリカゲルとともに密封保管している。

〔参考〕

『中尾城跡』1989.3 兵庫県教育委員会 12p.「保存処理作業」

『高川古墳群』1992.3 兵庫県教育委員会 16～19p.「出土金属製品の保存処理作業」

上記の2つの文献に加古千恵子が金属製品の保存処理作業工程を記述しており、初田館跡でも同様の処理がなされているので、方法については参考とされたい。

一方、木製品については埋蔵文化財調査事務所における処理能力が小さいため、財団法人元興寺文化財研究所へ100点の木器を作業委託し、保存処理を実施した。残りの木製品については埋蔵文化財調査事務所において保存処理を開始している。保存処理は基本的に木製品の樹種の同定を終えたのち、P.E.G法により実施している。埋蔵文化財調査事務所では整理普及課主任別府洋二が保存処理を担当した。処理済の木製品については処理台帳を作成するとともに、特別収蔵庫で保管している。

第6節 分析鑑定調査

①出土品の内、井戸・堀・旧河道で出土した木製品については、木材研究会（代表 島地 謙 京都大学名誉教授）に依頼し、133点の木製品について樹種の同定を行った。結果は付載として巻末に掲載している。

②古墳時代の竪穴住居址、鎌倉時代・室町時代の井戸から出土している炭化材については、嶋倉巳三郎先生に依頼し、31点の樹種を同定して載いた。結果は同じく付載として巻末に掲載している。

③平安～鎌倉時代の旧河道出土の鉄滓について、東京工業大学 高塚秀治先生に依頼して分析を行った。結果は同じく付載として巻末に掲載している。

④堀・旧河道の土層断面から植生調査のサンプルを現地で山形大学 前田保夫教授の指導のもとに採集し、今回は花粉分析のみ付載として巻末に掲載予定した。

⑤井戸・堀・旧河道出土の種実については、当初、流通科学大学 南木睦男助教授に依頼し、種実同定をお願いしていたが、未報告ために出土種実の概要を表として掲載する。

表1 初田館跡出土種実一覧表(1)

No.	遺構名称	層位	種実名称	個数	時代
1	井戸1	-50cm~-100cm	モモ、その他	5	鎌倉
2	井戸1	井筒内埋土	モモ	1	鎌倉
3	井戸1		多種	多数	鎌倉
4	井戸2	-50cm~-80cm	アズキ?	4	室町
5	井戸2	-180cm~-200cm	ヒョウタン、ウリ、モモ、ドングリ	多数	室町
6	井戸2	-200cm~-230cm	ヒョウタン、ドングリ、クルミほか	多数	室町
7	井戸2	-230cm~-260cm	ヒョウタン、ドングリ、クルミほか ウリ、モモ	多数	室町
8	井戸2	-252cm青灰色粘土	クルミ	18	室町
9	南堀0区	暗灰色シルト	モモ	1	室町
10	南堀1区	暗青灰色シルト	モモ	8	室町
11	南堀1区	最下層	モモ	18	室町
12	南堀2区	最下層	モモ	多数	室町
13	南堀4区	暗灰色シルト	モモ	26	室町
14	東堀1区	黒色シルト下層	モモ	74	鎌倉
15	東堀1区	黒色シルト	モモ	34	鎌倉
16	東堀1区	黒色シルト上層	モモ	6	鎌倉
17	東堀1区	暗黒色シルト上層	モモ	5	鎌倉
18	東堀1区	暗黒色シルト下層	モモ	83	鎌倉
19	東堀1区	灰褐色シルト混り砂	モモ	2	鎌倉
20	東堀1区	最下層	モモ、マツボックリ	3	鎌倉
21	東堀1区	下層	モモ	2	鎌倉
22	東堀2区	暗黒灰色シルト下層	モモ	7	鎌倉
23	東堀2区	最下層	モモ	60	鎌倉
24	東堀2区	最下層	ドングリ、そのほか	31	鎌倉
25	東堀2区	最下層	トチ	1	鎌倉
26	東堀2区	最下層	クルミ、マツボックリ、そのほか	3	鎌倉
27	東堀2区		モモ	1	鎌倉
28	東堀5区	黒灰色シルト中層	モモ	1	鎌倉
29	東堀5区	最下層	モモ	1	鎌倉
30	東堀6区	黒灰色シルト中層	モモ	1	鎌倉
31	北堀2区	暗灰色シルト	モモ、マツボックリ	10	室町
32	北堀3区	黒灰色シルト		多数	室町
33	旧河道1区	黒色シルト下層	モモ	1	鎌倉
34	旧河道3区	黒色シルト上層	クルミ、トチ	2	鎌倉
35	旧河道4区	暗黒色シルト	クルミ		鎌倉
36	旧河道4区	黒色シルト下層	モモ	5	鎌倉

表2 初田館跡出土種実一覧表(2)

遺構 種実	井戸1	井戸2	南堀0区	南堀1区	南堀2区	南堀4区	東堀1区	東堀2区	東堀5区	東堀6区	北堀2区	北堀3区	旧河道1区	旧河道3区	旧河道4区
モモ	○	○		◎	◎	◎	◎	◎	○	○			○		○
アズキ?		○													
ヒョウタン		◎													
ウリ		◎													
ドングリ		○						○							
クルミ		○	○					○						○	
トチ								○						○	
マツボックリ							○	○			○				

(凡例 ○ 出土、◎ 多く出土)

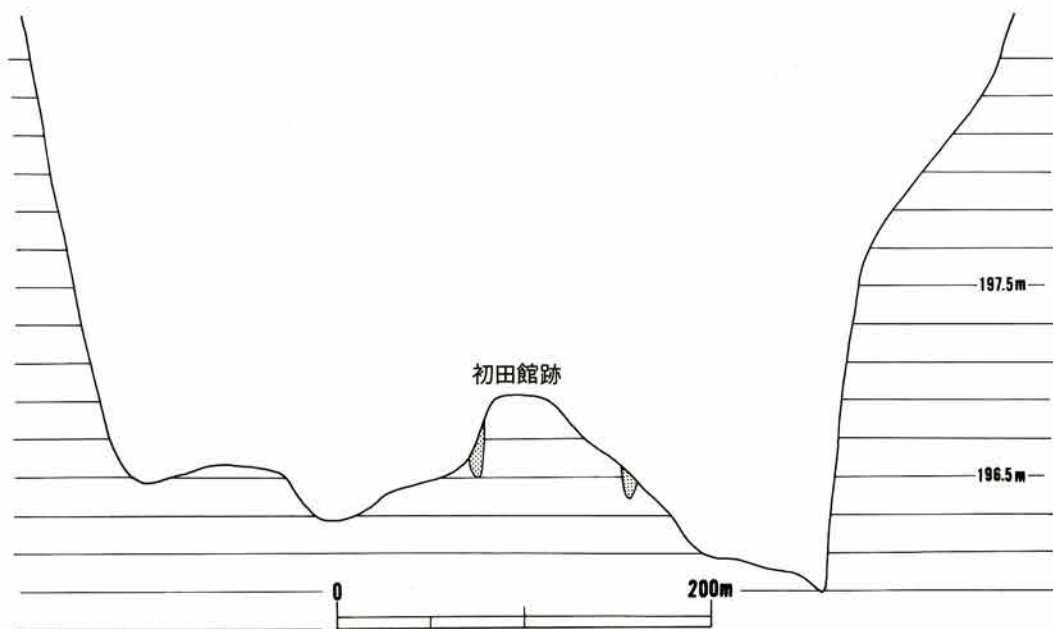
第3章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

初田館跡は、大阪湾に注ぐ武庫川水系の最上流域に位置し、武庫川の支流をなす田松川を中心とする谷底平野に立地する。この谷底平野は、田松川の上流部つまり篠山盆地の南部では北西方向に主軸方向をとり、当遺跡のやや北側で屈曲して北北東方向に主軸方向を変化させている。当谷底平野は、北側に位置する篠山盆地とは谷中分水界をなしている。このため、篠山盆地とは水系を異にし、篠山盆地の中心をなす篠山川は西流し、加古川に流れ込んでいる。

ところで当遺跡は、谷底平野のほぼ中央部に位置する。標高は196mである。国土地理院発行の1/25000地形図でみると、当遺跡は谷底平野の平坦地に立地する遺跡としか理解できない。そこで、より微視的にみていくために丹南町発行の1/1000の図をもとに10cm等高線図を作製したのが、挿図19である。これによると、当遺跡がひとつの微高地上に立地することが明瞭である。この微高地は、ほぼ北西から南東方向に主軸方向をとり、その規模は長軸方向で約400m、短軸方向で約200mである。また、微高地基底部と微高地頂部との比高は約1mである。

調査の結果によると、検出された遺構は極細砂～細砂を主体とする層を基盤としており、当遺跡は、田松川によって形成された自然堤防上に立地するものといえる。



挿図18 微地形エレベーション図



挿図19 遺跡周辺の微地形図

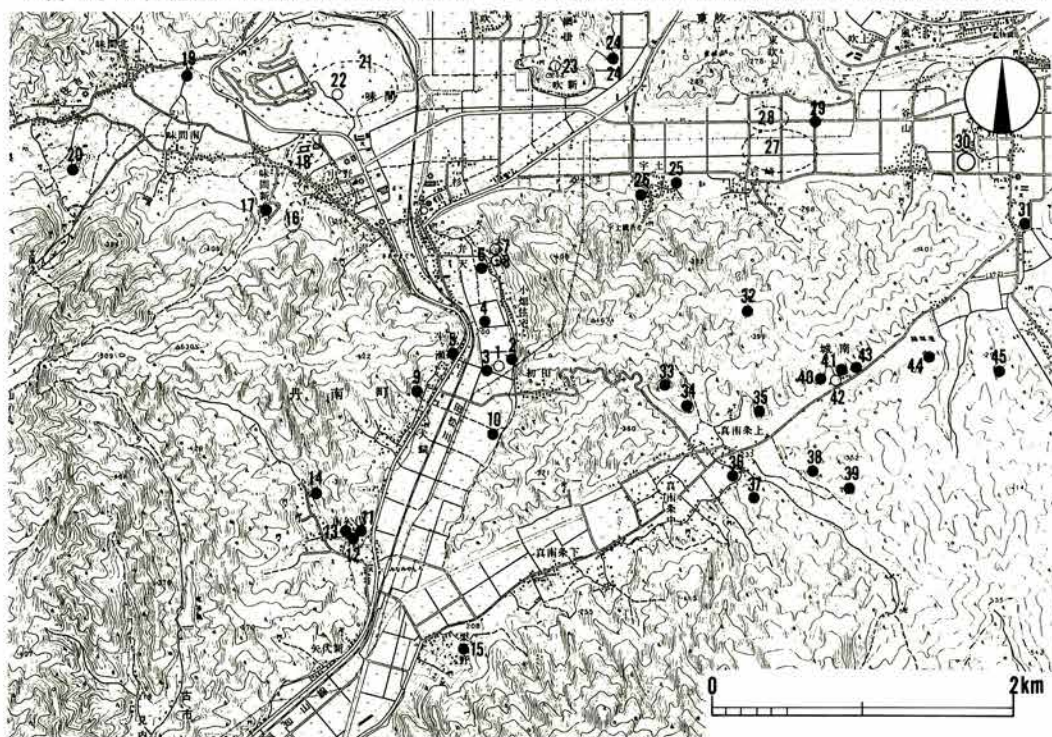
第2節 歴史的環境

遺跡周辺の歴史的環境については、既刊の報告書⁽¹⁾などに詳しく報告されているので、遺跡に関係する時代を中心に簡単に述べるに止めたい。

館跡周辺の弥生時代以前の遺跡は、石剣が出土した稲隅遺跡、内行花文鏡が出土した北山遺跡、石器が出土した又ヶ田坪遺跡などが知られている程度である。また、調査が行われた遺跡も付近には見られない。

古墳時代については、いくつかの古墳が知られているが詳細のわかるものは少ない。分布も単独ないし数基単位の群集墳が見られる程度で、大半が古墳時代後期に営まれたものである。

初田付近には庄境古墳群・大將軍古墳（牛ヶ瀬）・平尾山古墳（犬飼）、真南条地区には真南条古墳群・菖蒲谷古墳・宝塚古墳・岡崎山古墳・打掛山古墳、南矢代には南矢代口・中・奥の各古墳が知られている。この内、調査が行なわれた庄境1・2号墳は横穴式石室の主体部を持つもので6世紀後半と考えられる。近畿自動車道の建設に伴って調査が行なわれた古墳で、初田館跡の北東2kmに位置する。この他、真南条3号墳は調査の結果、複数の木棺直葬の主体部を持つ、6世紀代の古墳であることがわかっている。真南条古墳群は初田から古市にかけて広



挿図20 初田館跡周辺の遺跡分布図

表3 初田館跡周辺の遺跡分布一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	時代	備考
1	初田館跡	多紀郡丹南町初田	集落	古墳	部分発掘調査
2	稲隅遺跡	〃 〃	石剣出土地	弥生	
3	堀ノ内遺跡	〃 〃	散布地	?	
4	又ヶ田坪遺跡	〃 〃	散布地	?	
5	大將軍古墳	〃 牛ヶ瀬	古墳	古墳	
6	大沢新遺跡	〃 大沢新	条里跡	中世	
7	庄境1号墳	〃 〃	古墳	古墳	発掘済み
8	庄境2号墳	〃 〃	古墳	〃	〃
9	平尾山古墳	〃 犬飼	古墳	〃	
10	初田遺跡	〃 初田	散布地	中世	
11	南矢代遺跡	〃 南矢代	散布地	?	
12	南矢代口古墳	〃 〃	古墳	古墳	
13	南矢代中古墳	〃 〃	古墳	〃	
14	南矢代奥古墳	〃 〃	古墳	〃	
15	栗栖野古墳	〃 栗栖野	古墳	〃	
16	佐幾山古墳	〃 味間新	古墳	〃	
17	音羽山古墳	〃 〃	古墳	〃	
18	味間新塚群集墳	〃 〃	古墳	〃	
19	住吉川右岸遺跡	〃 味間北			
20	諏訪の腰遺跡	〃 味間奥			
21	西山古墳群	〃 味間	古墳	古墳	
22	西山北古墳	〃 〃	古墳	〃	西山古墳群内の古墳・発掘済み
23	長者ヶ谷1号墳	〃 吹新	古墳	〃	
24	薬師山古墳	〃 東吹	古墳	〃	
25	権頭塚古墳	〃 宇土	古墳	〃	
26	宇土古墳	〃 〃	古墳	〃	
27	岩崎遺跡	多紀郡丹南町岩崎			
28	岩崎四ノ坪遺跡	〃 〃			
29	谷山遺跡	〃 谷山			
30	竜門寺遺跡	〃 野中	集落・寺跡	弥生・奈良	数次の発掘調査を実施
31	経田ノ坪遺跡	〃 小枕中	散布地	?	
32	極楽寺跡	〃 岩崎	寺院跡	中世	
33	打掛山古墳	〃 真南条北山	古墳	古墳	
34	北山遺跡	〃 〃	散布地	弥生	内行花文鏡出土
35	岡崎山古墳	〃 〃	古墳	古墳	
36	小谷山古墳	〃 真南条	古墳	〃	
37	宝塚古墳	〃 〃	古墳	〃	
38	菖蒲山古墳	〃 〃	古墳	〃	
39	善光寺跡	〃 〃	寺院跡	中世	
40	真南条上1号墳	〃 真南条上	古墳	古墳	
41	真南条上2号墳	〃 〃	古墳	〃	
42	真南条上3号墳	〃 〃	古墳	〃	発掘調査済み
43	真南条上4号墳	〃 〃	古墳	〃	
44	真南条上5号墳	〃 〃	古墳	〃	
45	坊ヶ谷塚古墳	多紀郡丹南町小枕	古墳	古墳	

がる谷から、東側に分岐した谷の奥部にある。谷の北側に4基、南側に1基が位置する。但し、古墳群が立地する位置は谷底が東側に向かって傾斜するもので、古墳を経営した主体は反対側の小枕周辺にあった集落になる可能性もある。

古墳時代の集落については、周辺では今回の検出が初めてで、他に調査成果は見られない。

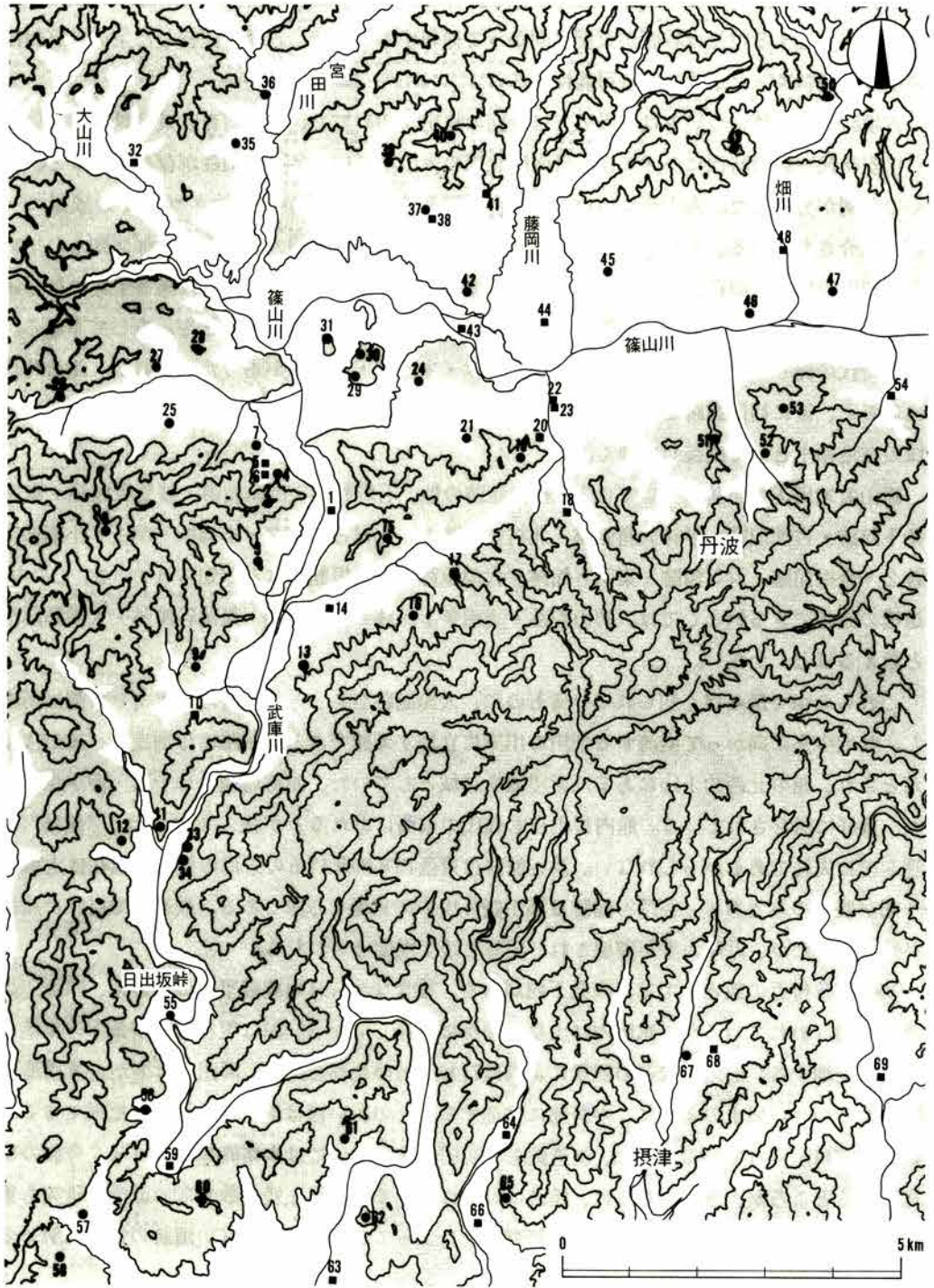
平安時代～鎌倉時代にかけては、丹南町北部の大山地区に有名な大山荘が存在するなど、多くの荘園が分布した。大山荘については総合荘園調査が1984年から開始され⁽²⁾その成果の一部が紹介されている。また、館跡付近では平安時代には仏性院領大沢荘と米光保が知られている。初田の地がどの荘園に含まれたかは不明であるが、旧河道から出土した墨書土器には「米光」の文字が刻まれており、初田がこれらの荘園に深く関わっていたことを示唆してくれる。平安時代の終り頃になると初田周辺には犬甘保・主殿保・油井保があったとされる。鎌倉時代になると、後に初田館跡を経営する酒井氏が3保の地頭職として入部し、以後、同氏はこの地域の在地領主として成長してゆく。

篠山盆地周辺の館跡については⁽³⁾、初田館跡の他、石野館跡・山城館跡・波賀野館跡・真南条下館跡・古枕旧宅・平林大膳館跡・北村古館跡1・北村古館跡2・小森旧宅跡1・小森旧宅跡2・今福館跡・浜谷館跡・東岡谷館跡・大淵館跡・野々垣館跡などが知られている。この内、遺構の確認できる例としては、初田館跡・真南条下館跡・浜谷館跡・東岡谷館跡・大淵館跡など数えるほどしかない。

これらの中で最も良く知られているものに、大淵館跡がある。篠山盆地の東寄り大淵に所在し、盆地中央に向かって南流する畑川の川岸に立地する館である。館跡には畑氏の一族が住んだとされ、館の北西約1kmにある八百里城を詰城としていた。館跡周囲には土塁・堀が認められ、良好に保存されている。館内は現在も畑氏の末裔にあたる方が住んでおられ、“館跡”と呼ぶのは失礼であるかもしれない。浜谷館跡は東西18×南北17mの方形の館跡で現在は土塁の一部が残るのみである。東岡谷館跡は篠山側の川岸に立地する館である。最近まで良好に遺構が残っていたが、近年大半が破壊され、堀跡を残す程度といわれる。

初田館跡付近の館としては真南条下館がある。残念ながらほ場整備事業のために、館周辺の景観は損なわれているが、水田内に土塁が僅かに遺存している。館は現在の真南条下の集落より北に立地する。旧地形などの観察によれば71×54mの規模を持ち、周囲には堀が巡る構造であったという。以上のように、平野部に立地することの多い館は現在その遺構が把握できるものは非常に限られている。また、調査例も、初田館跡を除いては本格的なものではなく今後の研究によるところが大きい。さらに、館跡の調査については、現在残る数少ない遺構の研究も重要であるが、地籍図を利用した微地形観察などによって、知られていない遺跡の把握に努めることも進めなければならないだろう。

山城は、篠山盆地周辺では八上城跡・八百里城跡・油井城跡1などが大きな規模を有する遺



挿図21 初田館跡周辺の中世城館分布図

表4 城館分布一覧表

番号	城名	所在地	番号	城名	所在地
1	初田館跡	多紀郡丹南町 初田	36	板井城跡	多紀郡西紀町 上板井
2	大沢城跡	“ 大沢	37	今福堡跡	多紀郡篠山町 今福
3	矢代城跡	“ 南矢代	38	今福館跡	“ “
4	祿庄城跡	“ 大沢	39	矢代堡跡	“ 矢代
5	石野館跡	“ “	40	盃山城跡	“ 東浜谷
6	山城館跡	“ “	41	浜谷館跡	“ 郡家
7	佐幾山城跡	“ “	42	飛の山城跡	“ 西岡谷
8	高仙寺山城跡	“ 見内	43	東岡谷館跡	“ 岡谷
9	波賀野城跡	“ 波賀野	44	篠山城跡	“ 北新町
10	波賀野館跡	“ “	45	沢田城跡	“ 沢田
11	油井城跡 1	“ 油井	46	勝山堡跡	“ 和田
12	油井城跡 2	“ “	47	般若寺城跡	“ 般若寺
13	栗栖野城跡	“ 栗栖野	48	大淵館跡	“ 大淵
14	真南条下館跡	“ 真南条下	49	八百里城跡	“ 瀬利
15	中山別壘跡	“ 真南条中	50	奥畑城跡	“ 奥畑
16	枝城跡	“ “	51	せみ丸城跡	“ 殿町
17	真南条上城跡	“ 真南条上	52	奥谷城跡	“ “
18	小枕旧宅跡	“ 小枕	53	八上城跡	“ 八上
19	谷山城跡	“ 谷山	54	野々垣館跡	“ 野々垣
20	平林大膳館跡	“ 小枕	55	藍丸山砦跡	三田市 藍本
21	岩崎城跡	“ 岩崎	56	藍岡山城跡	“ “
22	北村古館跡 1	“ 北	57	相野丸山砦跡	“ 西相野
23	北村古館跡 2	“ “	58	古城砦跡	“ “
24	吹城跡	“ 東吹	59	曲り城跡	“ 藍本
25	味間南堡跡	“ 味間北	60	穴口城跡	“ 東本庄
26	三崎伊豆守館跡	“ 味間奥	61	本庄丸山城跡	“ “
27	味間北古堡跡	“ 味間北	62	森本城跡	“ “
28	西古佐小屋床跡	“ 西古佐	63	鳥山城跡	“ 井ノ草
29	網掛城跡	“ 網掛	64	大町居館	“ 下青野
30	網掛西山堡跡	“ “	65	青野城跡	“ “
31	西吹城跡	“ 西吹	66	後藤氏居館跡	“ “
32	大山城跡	“ 北野	67	乙原城跡	“ 乙原
33	古森旧宅跡 1	“ 古森	68	増田居館跡	“ “
34	古森旧宅跡 2	“ 古森	69	高平田中城跡	“ 田中
35	内場山城跡	多紀郡西紀町 東木ノ部			

構である。中でも八上城跡は慶長14年まで存続し、規模・内容ともに多紀郡を代表するものである。山頂部分には石垣も築かれており、範囲は高城山のほぼ全体に及んでいる。また、山城の西側の谷には奥谷城跡や殿垣内の字名が残り、谷の西側丘陵には「せみ丸」と呼ばれる山城遺構が確認できる。これらは波多野氏に関連する一連の遺構で、この谷周辺に城下集落を形成していたことが窺われる。この城下集落は波多野氏滅亡以後は、八上城の北側に移り、麓に伝前田玄以の館や墓跡と伝承される遺構などを残している。山頂の遺構の規模や内容と、城下の館や集落の存在は八上城が多紀郡内の拠点として存在したことを窺わせるのに十分なものである。

八百里城跡は標高442mの山頂にあるもので、主郭は土塁囲で30×14mの規模を持つ。(主曲輪の南側は大きく崩れて土塁が残らない。)篠山盆地内の中では比較的広い曲輪を有している。さらに堀切や郭などの城郭施設は中腹にまで及んでおりその威容を誇っている。油井城跡1(油井の集落東約500mの遺構)は標高262mの山頂にある。山城の立地は背後が大きな鞍部となる独立丘陵で、頂部は比較的ゆるやかな傾斜をしている。この頂部に曲輪が梯郭式に並ぶもので、要所は堀切で切断した構造である。この他、15末～16世紀前半代の遺構として位置づけができる内場山城跡や、小規模であるが大きな土塁・堀切を有する板井城跡、大山川に張り出した段丘上に立地し、館城と考えられる大山城跡、多紀郡と氷上郡の境、遠坂峠を見張る位置に立地する金山城跡などが特徴的である。

油井城跡1は摂津との国境、日出坂峠の手前に築かれたものであるが、波多野氏の領した領域の境には規模の大きな城や、特徴的な城が配置されることが多い。京都丹波方面には大きな規模を有する柗井城跡が築かれ、この東に隣接して安口城跡が立地する。安口城跡は柗井城跡に比べ小規模であるが大きな堀切を有し、広い主曲輪を持つ。加えて、柗井城跡と八上城跡を結ぶ地点には淀山城跡が立地し、この城には横堀が認められる⁽⁴⁾。又、氷上郡に対しては前述の板井城跡があるなど意図的な配置が確認でき、波多野氏が領域の境目を固めていた状況が窺える。これに対して、日出坂峠の南側、摂津にも多くの城郭が分布する。しかし、油井城跡1に匹敵する規模のものはなく、丹波側と対象的である。

初田館跡周辺の山城では、前述の油井城跡1を除くと、大沢城跡・中山別壘跡・矢代城跡・波賀野城跡・栗栖野城跡・真南条上城跡・枝城跡・油井城跡2・高仙寺山城跡などが知られるが、小規模なものばかりである。

註

- (1)『庄境1号墳』『庄境2号墳』兵庫県教育委員会、『長者ヶ谷1号墳』西紀・丹南町教育委員会などがある。
- (2)『丹波大山荘現況調査報告Ⅰ～Ⅴ』西紀・丹南町教育委員会 1985～1989年刊、が成果として報告されている。
- (3)『兵庫県の中世城館・荘園調査』兵庫県教育委員会 1982年刊、以下の城館の記述については同書を参考にした。
- (4) 多田暢久氏の御教示による。

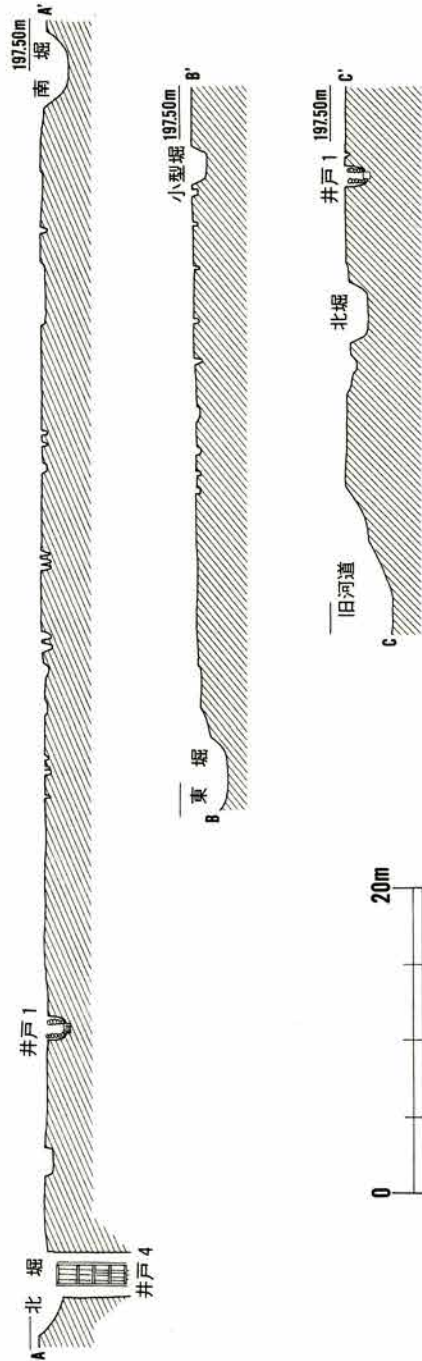
第4章 遺構

第1節 遺構の概要

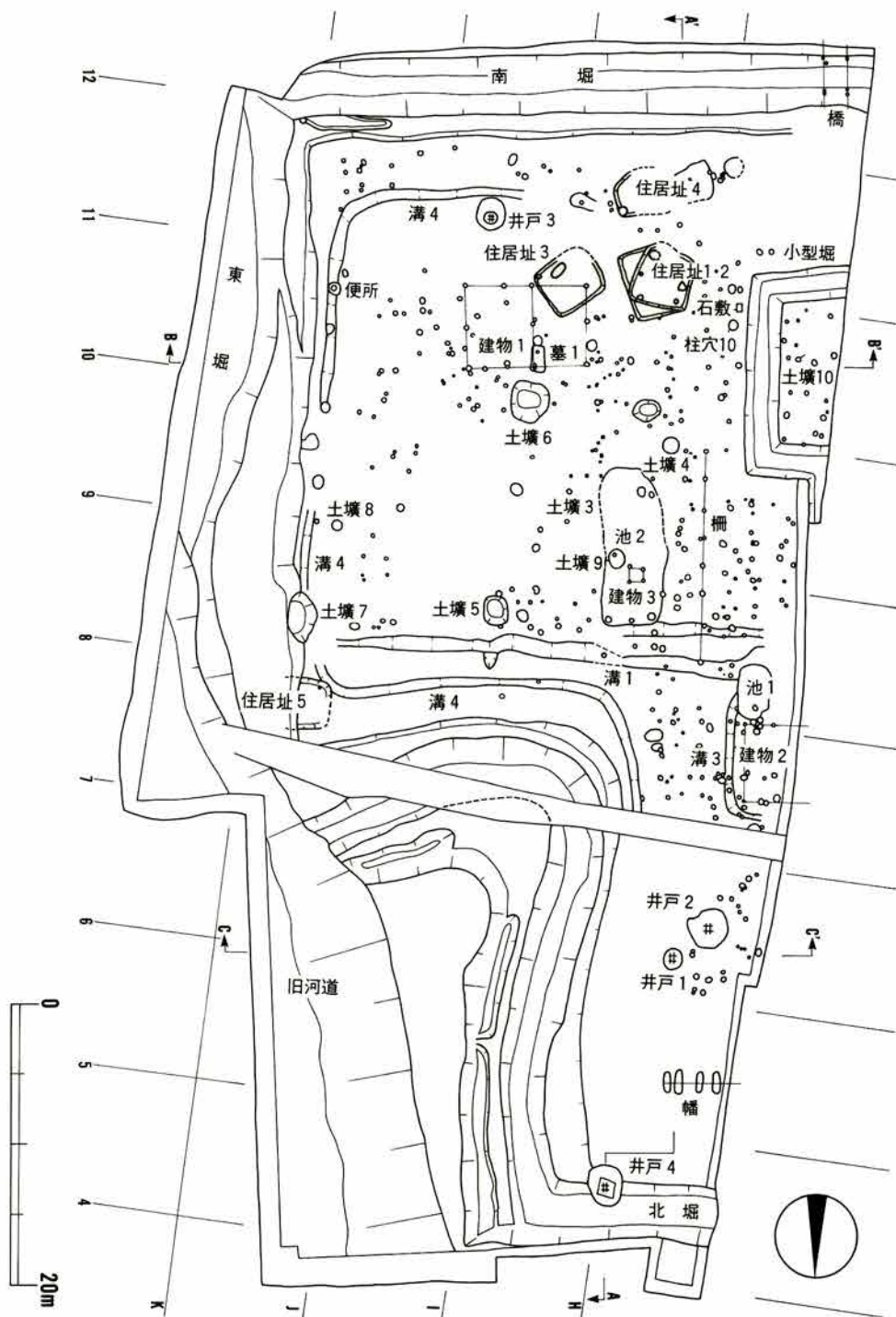
初田館跡の調査を目的として遺構の精査・検出を繰り返し、表土層から漸次遺構が発見された。少し前までは宅地であった微高地部分と水田であった低湿地部分に分かれており、第1次調査でも確認されているように、低湿地部分が館の堀で、微高地部分が土塁内部・館の屋敷に当たることが判る。

宅地や水田として土地利用した後世の開発で室町時代に栄えた初田館跡の保存状況を順次明らかにする作業である。その結果、江戸時代には『丹波志』に云う「伊奈須美の井」を利用したの微高地部分での畑作と低湿地部分の水田経営が判り、初田の酒井氏の祠（首塚）を北中央に祀り、神社の幡基礎土壌がある。土塁部分は壁土等の土取りの坑があき、僅かに土塁内側を示すかのように溝が巡る。室町時代には館を囲むように堀が四周水を湛え巡っていたようで『丹波志』に云う「南門」・「橋」がある。堀と相似形のような小型堀で囲まれた部分や井戸2基・池・柱穴から柵や建物が復元できる。堀は現田松川（武庫川の源流）の旧河道を利用して築かれており、その利用は平安・鎌倉時代に遡ることが判った。微高地では井戸・墓などが発見されている。旧河道には墨書土器や祭祀具が多く出土しており、井戸からは呪符木簡がある。更に、この土地利用は古墳時代後期の人々の集落として利用されていたことが竪穴住居址4基の発見で判った。

堀、井戸、建物、柵、池、土壇、溝、便所、幡基礎、竪穴住居址、墓など古墳時代から江戸時代にか



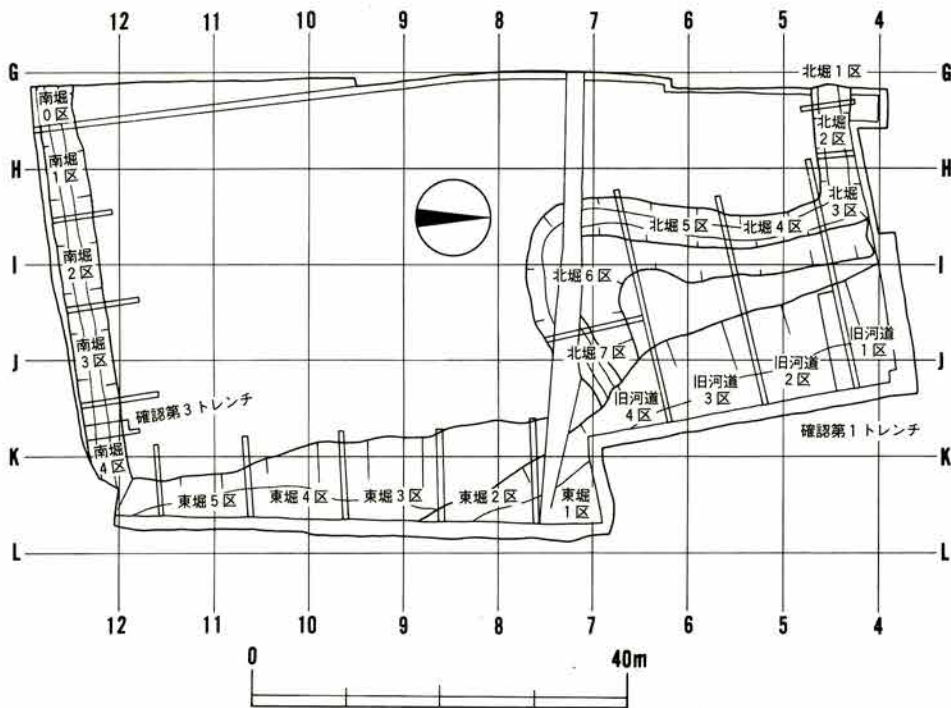
挿図22 遺構縦断面図



挿図23 遺構全体図

けて遺構が複合しながら発見されている（挿図22・23）。

遺構として最も注意して調査した堀と下層の旧河道は遺物の保存状況も良く、土器のみならず、金属製品・木製品も多く出土している。ここでは、調査の方法と遺物の取り上げ方法と遺構の重複関係について説明する（挿図24）。第1次調査（確認調査）のトレンチで南堀（第1トレンチ）と旧河道（第3トレンチ）を部分的に調査し、鎌倉時代の瓦器を発見している。明確に旧河道を利用したのは平安時代に遡り、鎌倉時代へと続いた。遺跡の北西から南東へと流れていた。後、田松川の流路が変わり湿地化するが、微高地を館として利用するとき、一部旧河道を再利用しながら堀を巡らしている。東堀から北堀の入角部分は重要ではあるが、旧河道部分と重なり、遺構を明確にしえなかった部分でもある。堀・旧河道については確認トレンチを再度精査することから始め、北堀・旧河道、東堀・旧河道を細かく分区し、土層と遺物出土状況を検討しながら調査を行った。調査区7列には現代の埋設土管の掘り方で壊されており、不明の部分も多い。南堀は橋脚部分を調査範囲限度で調査するために拡張しており、南堀0区を設けている。いずれも調査区の限定のため、堀の幅（南堀の南肩部、東堀の東肩部）や『丹波志』の記載する二重堀の遺構の追求は出来なかった。

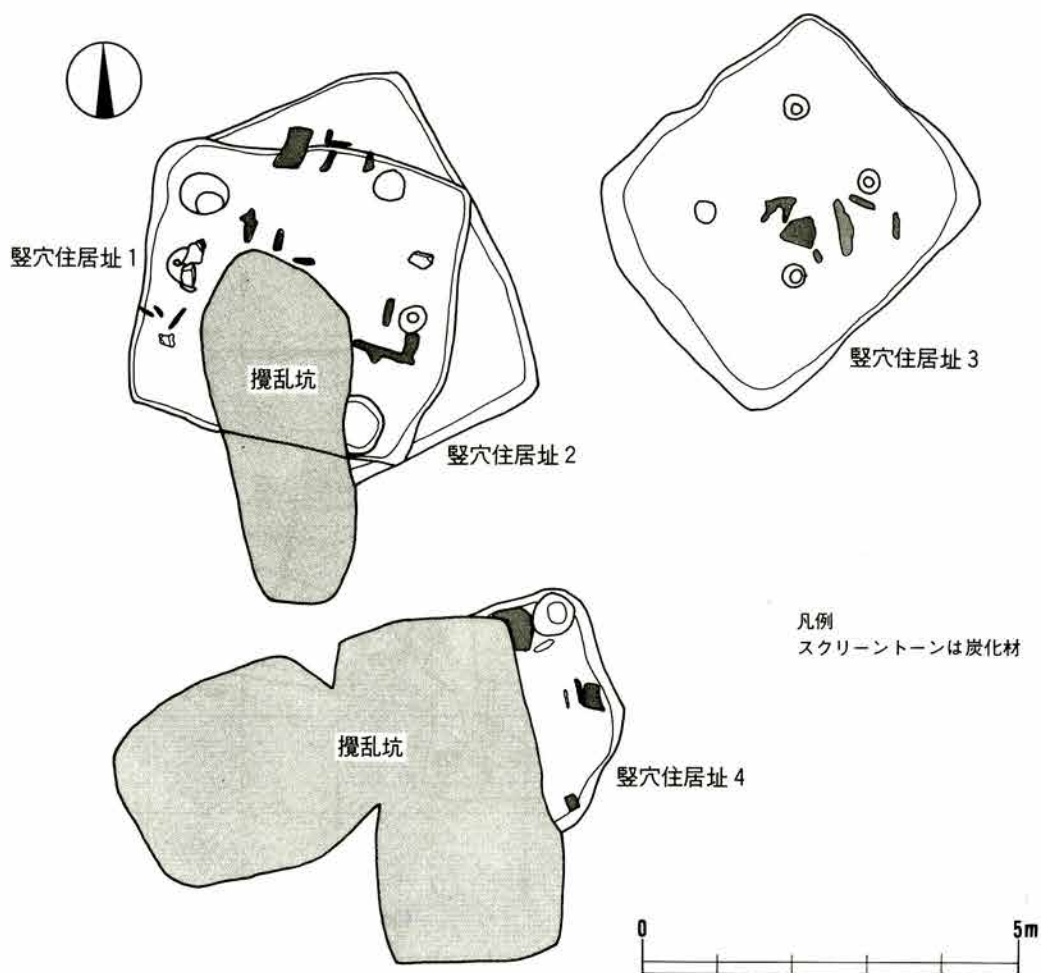


挿図24 館の堀・旧河道調査地区割付図

第2節 古墳時代の遺構

1. 概要

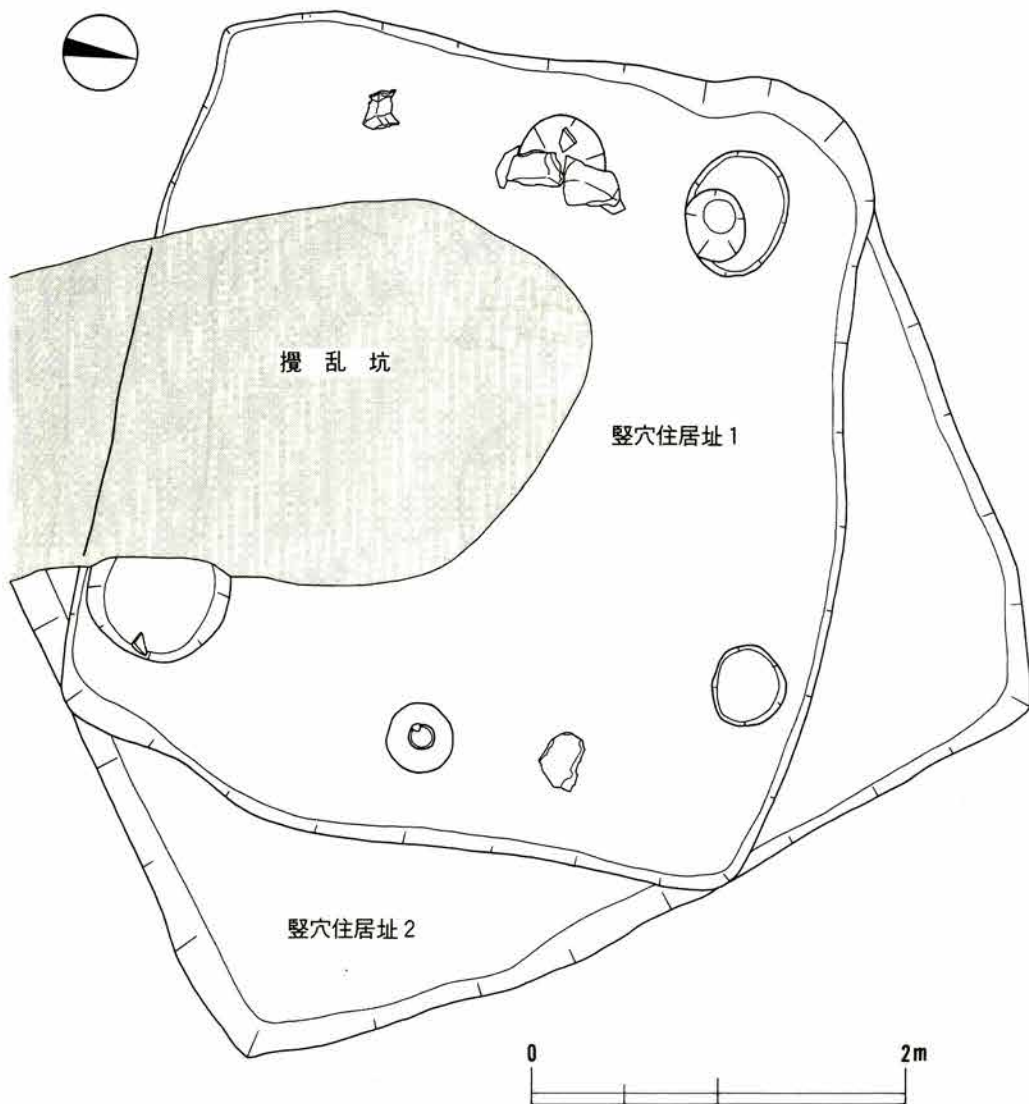
古墳時代の遺構・遺物は調査区の南西寄りに集中している。検出された遺構には竪穴住居址5棟、土塋1基がある。このうち、竪穴住居址1棟（竪穴住居址5）を除く全ての遺構（竪穴住居址1～4・土塋1）が南西寄りに集中している。遺物もこの付近を中心に分布が広がっていた。しかし、遺構が集中する付近は粘土採掘の攪乱土壌が多いうえ、上面の削平が著しく住居址などの遺構は良好な状態で検出することは出来なかった。平面プランが明確に出来ないも



挿図25 古墳時代竪穴住居址群位置図

のや（竪穴住居址4）、住居の一部が攪乱（竪穴住居址1～3・5）で破壊されたものが見られた。

集中する4棟の住居には挿図25に示したように炭化した材木が床面に見られた。これらの材は床面近くで検出されたものが多く、住居に伴う部材である可能性が高い。後述のように材については樹種鑑定を行っている。



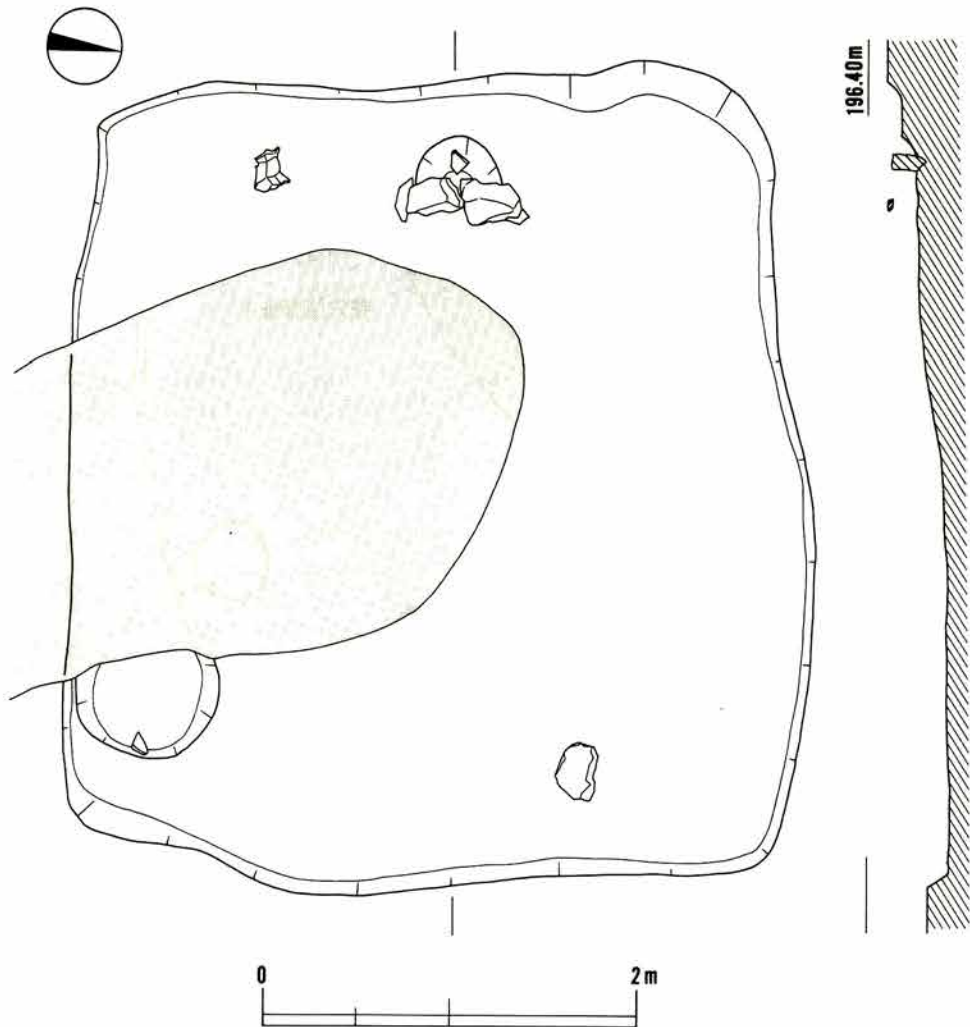
挿図26 竪穴住居址1・2位置図

2. 遺構

竪穴住居址1・2 (挿図26)

古墳時代の遺構面を精査中に作り付けの竈が検出されたことから、住居址であることが判明した。当初、1棟と考えられたが、平面プランが歪なこと、建物内にベッド状遺構とは考えられない段差が見られることから2棟が切り合っていることが分かった。

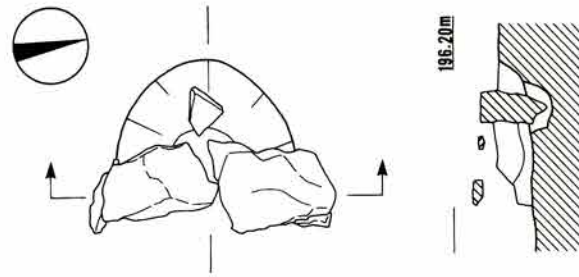
作り付けの竈は位置や、竈の方向から竪穴住居址1に帰属するものである。柱穴は配置が4本柱構造になるが方向から竪穴住居址2に伴うと思われる。また、土壌は住居址の隅に置かれることが多いことから竪穴住居址1に伴うと考えた。



挿図27 竪穴住居址1

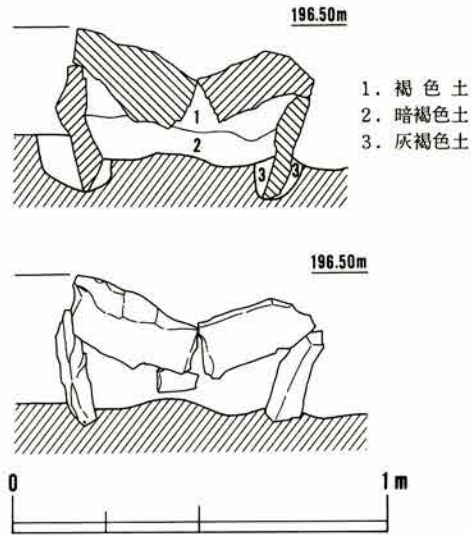
竪穴住居址1には、作り付けの竈・土壌が伴い、竪穴住居址2には、柱穴3基が伴うと考えて住居址を復原した。

住居址の構築順序は竪穴住居址1に伴う作り付けの竈が遺存していたことから、竪穴住居址2→竪穴住居址1の順に作られたと思われる。



竪穴住居址1（挿図27）

東西方向を向く住居址である。東西4.2m、南北3.9mの規模を持ち、面積16.4㎡を測る建物である。平面形は東西にやや長いプランを有しており、検出面は標高196.1～196.3m前後である。住居内には作り付けの竈と土壌がある。遺物は細片が多く凶化できたものは少ない。特に、土師器は細片が多い。さらに、竪穴住居址1と竪穴住居址2は遺物を区別せずに取り上げたことから出土遺物を分けることが出来なかった。



1. 褐色土
2. 暗褐色土
3. 灰褐色土

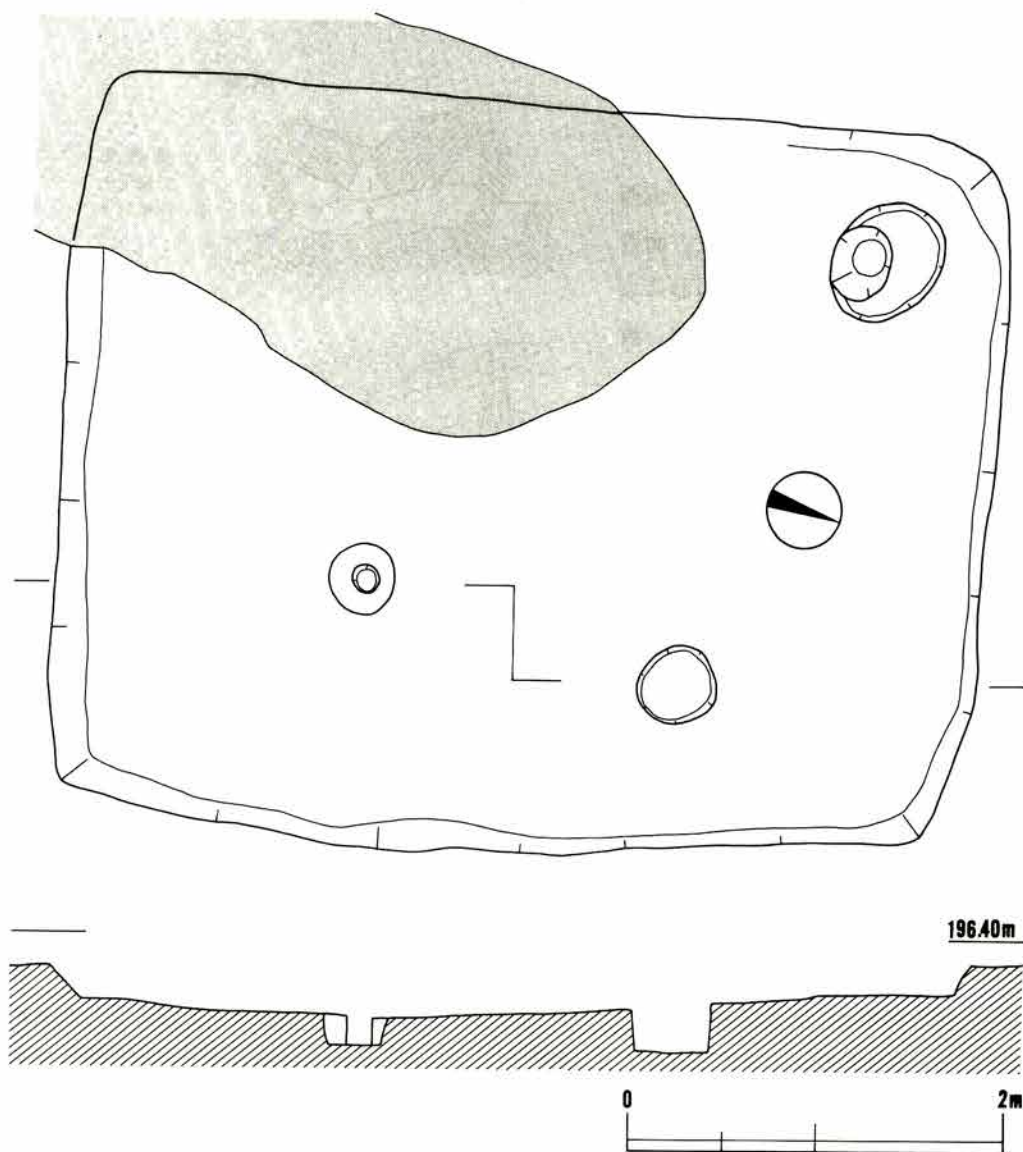
挿図28 竪穴住居址1竈

また、作り付けの竈が西辺にあることから入口は東辺に推定できる。建物の長辺の方向はN73°Wを向いている。柱構造は住居址内に確実な柱穴が検出されなかったために不明である。

北辺の壁のラインは実際には検出面から残っていたものと考えられる。しかし、検出面で見つけることが出来ず、竪穴住居址2の床面との段差によってようやく認識できた。このため、平面プランが不明確になった。

作り付けの竈は住居の西辺のほぼ中央に検出されたもので、焚口の前面と燃焼部に据えられた袖石や支脚などが検出の根拠となった。竈の前庭部周辺には炭が比較的多く検出できた。焚口の内法は幅46cm、高さ25cmである。焚口に貼り付けた石は両袖に縦長の石を据え、この上に長さ80cm、最大幅50cmの平石を高架させ、門状にしている。これらの袖石は焚口の補強のために据えたと考えられる。天井に高架させた袖石は中程で真っ二つに折れており、両側の袖石も外方に向けて斜めに検出された。天井石が落下していないことから、住居廃絶後の攪乱ないしは破壊によるものと思われる。両袖の石は全長の1/5を堀方の中に埋めるもので、袖石の堀り方は約15cmの深さを持っている。袖の部分は恐らく周囲の埋土と同質の粘質土が貼り付けられ

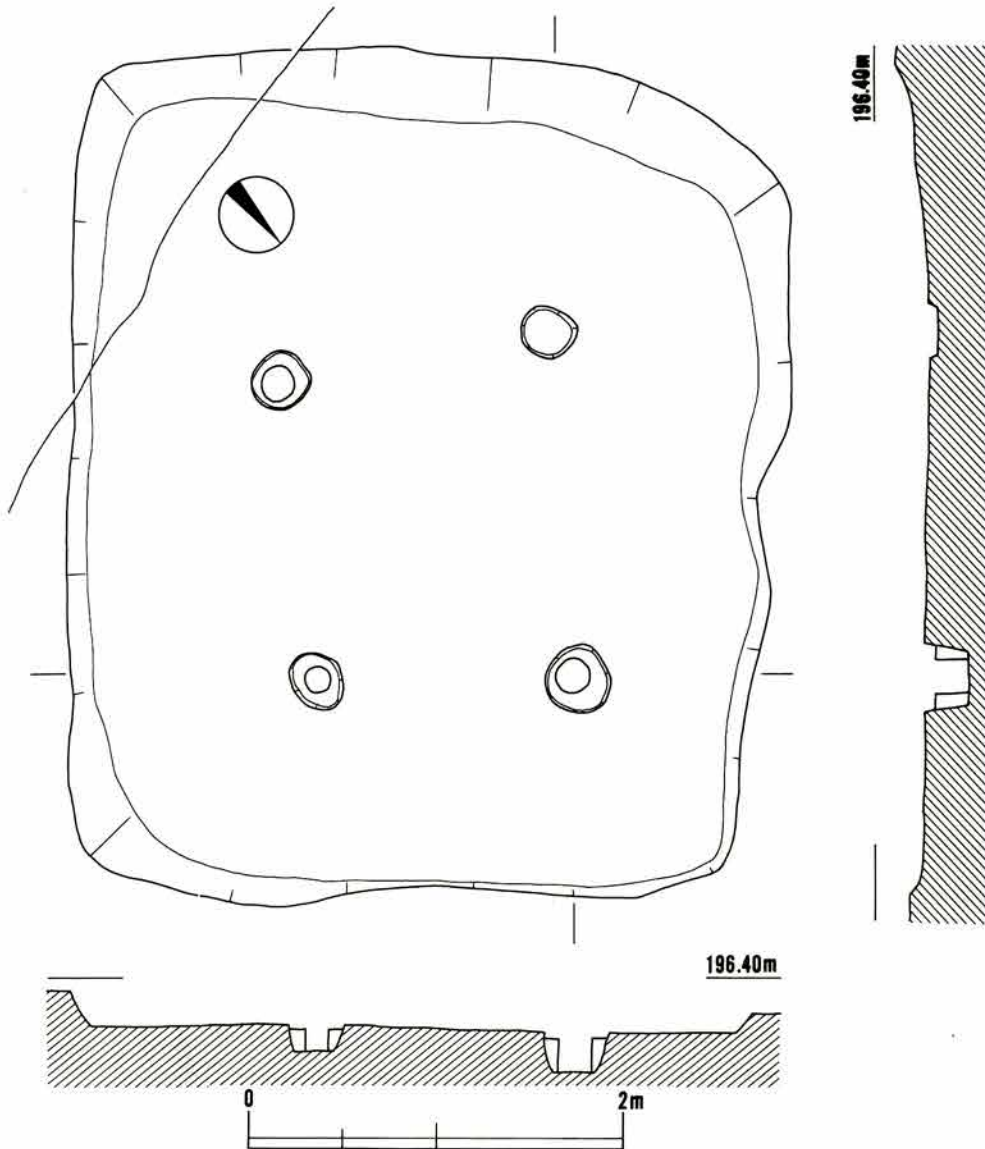
たとえられるが、住居の廃絶後攪乱されたと思われ残っていなかった。あるいは、周囲の土に同化した部分もあると考えられたが、検出は困難であった。竈の燃焼部は馬蹄形状の落ち込みとして検出できた。落ち込みの中央には支脚が樹立し、焚口の方向に開口部を持つ構造である。底部には焼土と炭が堆積していた。竈と住居の壁は検出状況からすると約30cmほど空いて



挿図29 竪穴住居址 2

おり、煙出しの痕跡は確認できなかった。おそらく、削平や近世以降の攪乱によって上面が破壊され煙出しが失われたと考えられる。

土壌は住居の南東端寄りで見つかったもので、西半分を粘土の攪乱土壌で破壊されている。平面は円形で直径76cm、深さ30cmを測る。中には土師器の細片や炭・灰が含まれていた。



挿図30 竪穴住居址 3

竪穴住居址 2 (挿図29)

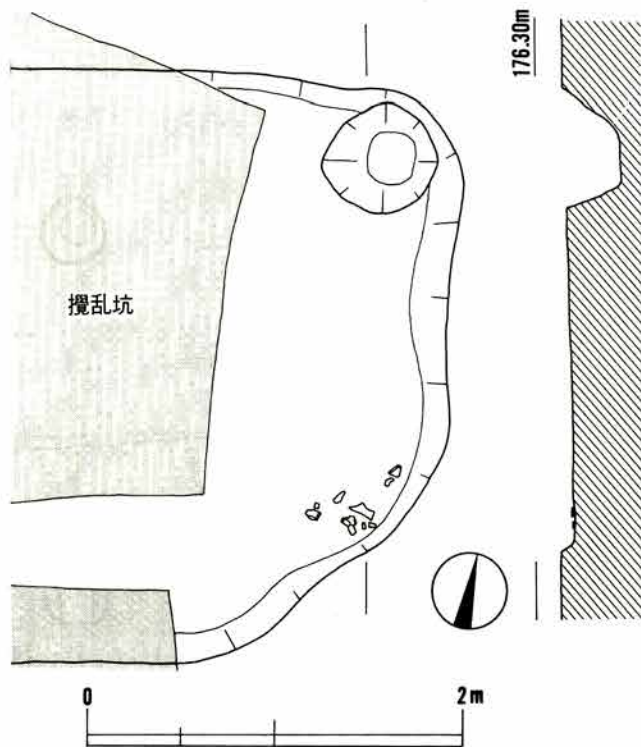
今回検出された遺構の中でも、竪穴住居址 3 と同様に特に残りの悪い遺構である。攪乱土壌と竪穴住居址 1 の破壊によって住居の4/5が破壊されている。検出された柱穴の配置から3基の柱穴が本住居のものとして復原した。周溝など他の遺構は検出できなかった。住居の検出面は標高196.3m前後である。竪穴住居址 2 は長辺を南北に持つ方形住居である。長辺の方向に屋根が向くとすれば、建物方向はN20°W前後を向く。規模は長辺が5.0m、短辺が3.7m以上である。面積は西辺が破壊によって残存しないため推定の域をでないが、およそ20.0㎡前後と考えられる。

柱穴は直径30~70cm、深さ15~25cmの規模である、柱痕跡の観察から柱の直径は14cm前後と考えられる。遺物も竪穴住居址 1 で述べた通り出土状況は不明である。

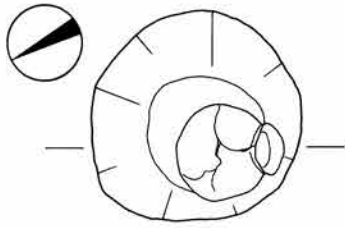
竪穴住居址 3 (挿図30)

竪穴住居址 1・2の東に隣接して検出できた建物である。長軸を棟方向とすれば、建物の方向はN50°E前後を向く。長軸が4.5m、短軸が3.8mで面積17.1㎡の規模を持つ。やはり削平が激しく、壁は16~18cm前後しか検出できない。特に短辺の西側の壁は、立ち上がりが緩く傾斜し、明瞭な変換点はない。上屋は住居の中央に4本の柱穴があることから、4本柱構造と考えられる。柱穴の掘り方は直径30~35cm、深さ15~20cm前後であるが、東側隅のものはやや浅く8cm前後であった。柱の痕跡は東側隅を除いた3基の柱穴で観察でき、柱の直径は15~20cmと考えられる。

この他、炭化した材木が床面から多く出土した。比較的形の長いものも見られ、屋根の垂木と考えられるものも含まれる。遺構の検出レベルは標高196.2~196.3m前後である。



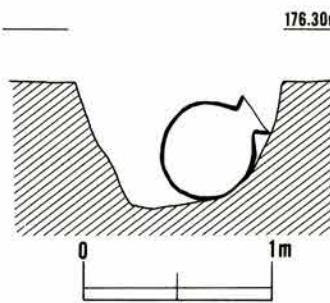
挿図31 竪穴住居址 4



竪穴住居址 4 (挿図31)

住居 4 棟が集中して検出されたうち、最も南側で見つかった住居跡である。大半が粘土採りの攪乱土壌によって破壊されて、上部も大きく削平を受けている。

但し、遺構の北東隅周辺は、土壌を中心に弧を描きながら、直角に曲がる。このことから方形住居の可能性はある。

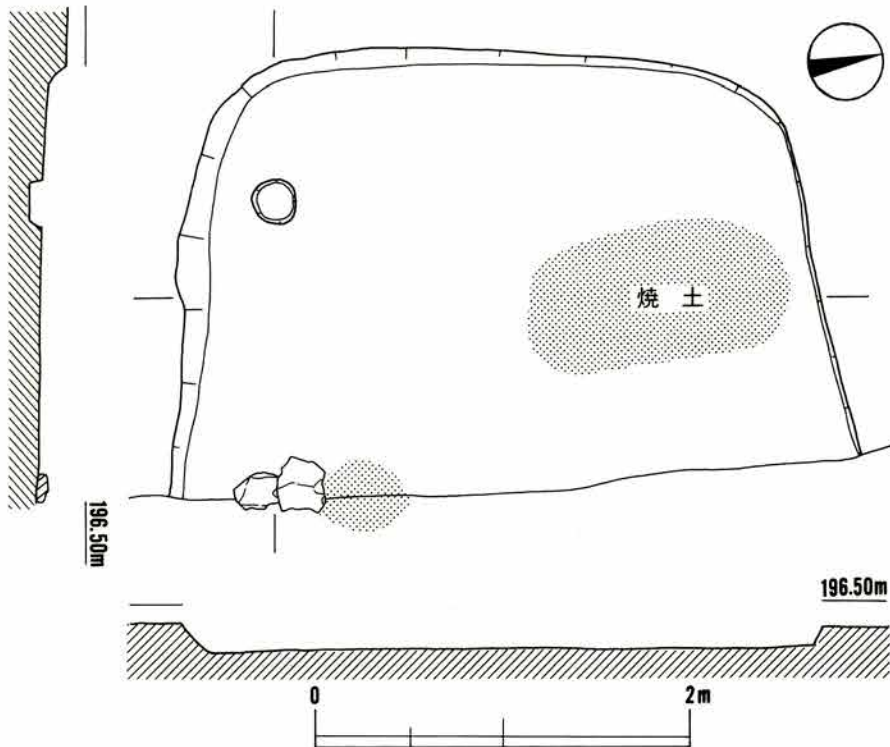


176.30m

住居内からは土壌 1 基が検出できたが、周溝や柱穴は検出できなかった。遺物は土壌と住居の南端に集中して出土した。

竪穴住居址 4 の規模は明確にできないが、検出された部分での規模は、東辺が長さ3.0m以上、残存の壁は10cm前後で、残存部分の面積は3.6㎡程である。遺構の検出レベルは標高176.1～176.2mで竪穴住居 1・2 とほぼ同じ高さで検出された。

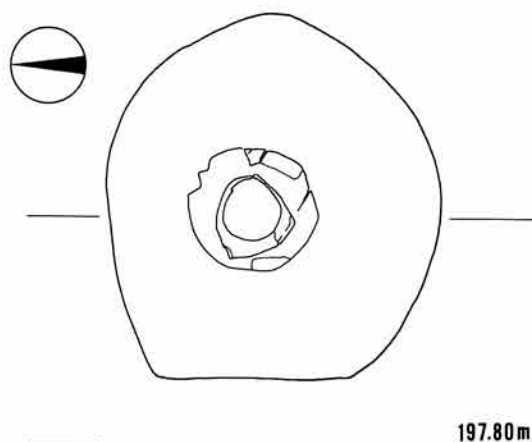
挿図32 竪穴住居址 4 土壌内土器



挿図33 竪穴住居址 5

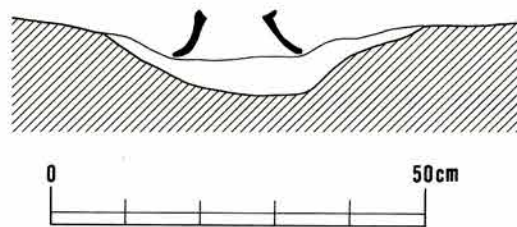
住居の南側はプランが不規則に曲がっており、住居の壁と考えるには疑問もある。また、壁の立ち上がりが不明瞭な箇所も見られる。これらのことからさらに南に続いていた可能性も残されている。

土壌はほぼ円形を呈し、最大径1.1m、深さ0.65mを測る。土壌の壁は急な傾斜で掘削し、土壌底も北側に向かって傾斜する。底には土師器甕1点を据えていた。甕は斜めに寝かせた状態で据えるもので、口縁を西南方向に向けている。



竪穴住居址5（挿図33）

初田館跡の東堀入角隅付近で検出した。近世の水田開発によって東半分を、粘土の採掘場によって西側の壁際を破壊されている。上面も削平が激しく、壁は最大で16cm前後が残っていたにすぎない。残存部より



推定すると南北辺が3.7mで、検出範囲での面積は8.4㎡の規模を測る。残存部分の中では、北辺が特に壁の残りが悪い。床面が西に向かって斜めに検出でき、壁も痕跡程度のものが観察できたにすぎない。また、プランが北側に若干広がる可能性も残されている。

挿図34 土壌1

柱穴は1基検出できたが、浅いもので規模も小さく、住居の棟を支えた柱かどうかは不明である。周溝などの付帯施設は検出できなかった。図に示したスクリーントーン部分は赤く焼けた焼土が広がる範囲である。さらに、南側の焼土に接して火を受けた人頭大の石が据えられていた。この石は、検出状況から住居跡に伴うものと思われ、作業台などに使用されたものと考えられる。

また、遺物は土師器の細片が若干出土しているが図化できるものはなかった。

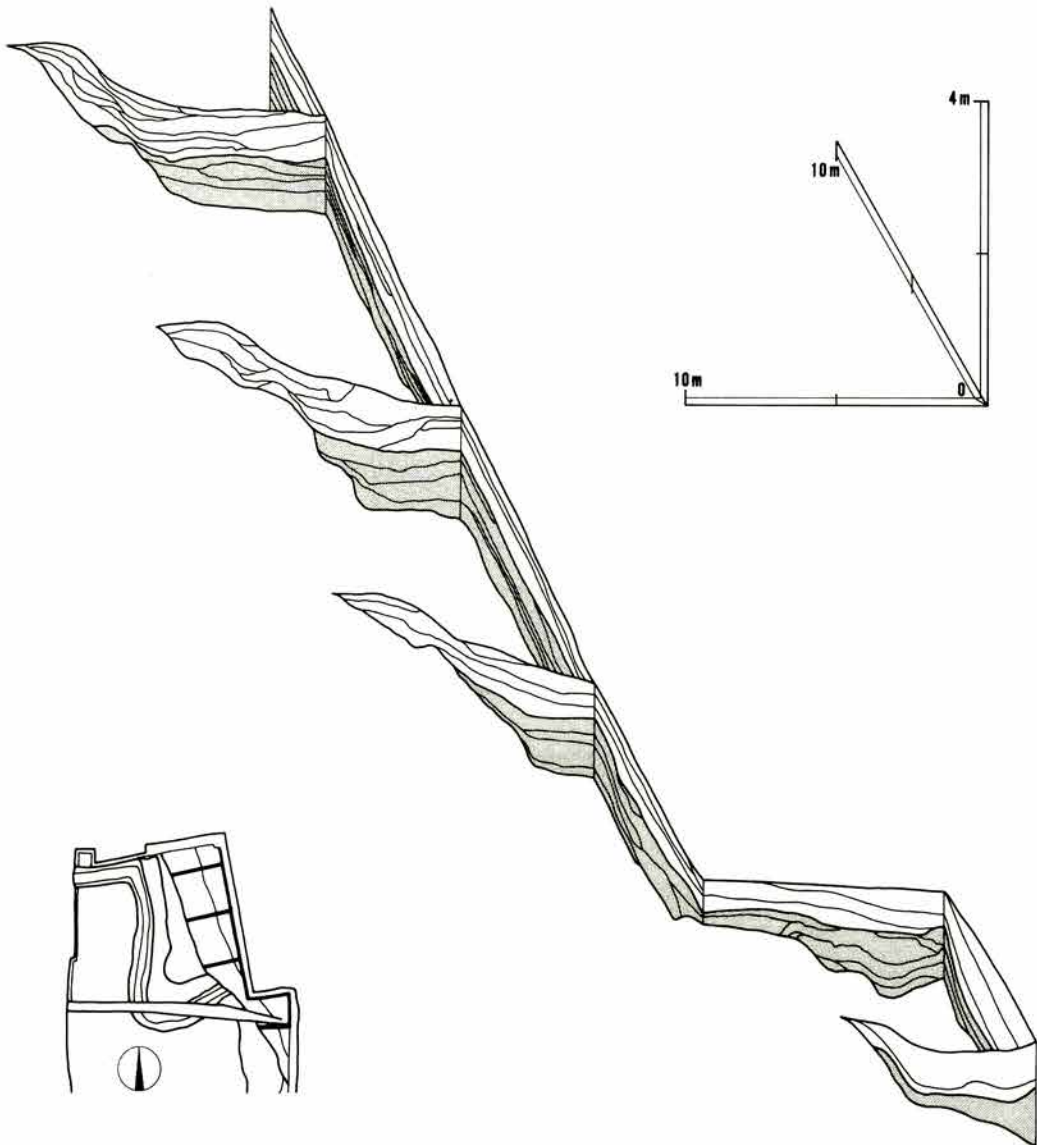
土壌1（挿図34）

小型堀の中で検出された遺構で、竪穴住居址1との距離は約4mの位置にある。直径48cm、深さ11cmの規模を持つ円形の土壌である。中には土師器甕の口縁部分を倒立させて据えていた。竪穴住居址同様上面の削平が著しく土壌の残りは良くないもので、土師器甕は頸部より上が残存していなかった。

第3節 平安～鎌倉時代の遺構

1. 概要 (挿図23)

当該期の遺構としては、墓・土壇・井戸・柱穴群・旧河道を検出している。柱穴群からは建物を復元できなかったが、墓・井戸とともに屋敷地を形成していたものと考えられる。



挿図35 旧河道堆積状況パネルダイヤグラム

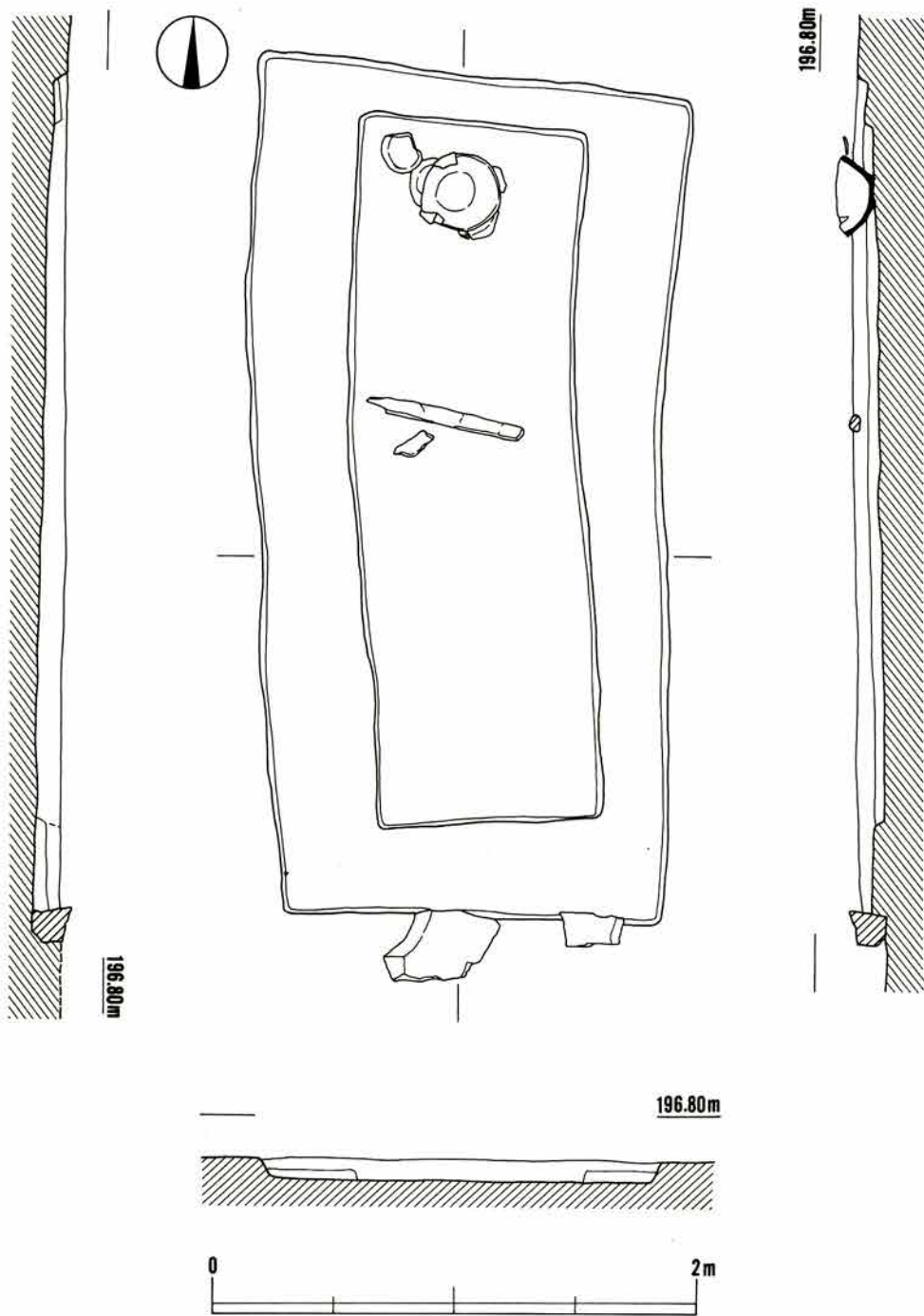


插图36 墓1

具体的な時期については後述するが、平安時代まで遡るのは旧河道に限られ、他は鎌倉時代と考えられる。

2. 遺 構

旧河道（挿図35）

調査区の北東部で検出した。北北西から南南東方向に走るが、南西側肩部から底部にかけて検出したのみで、反対側肩部は調査区外にあたり検出できなかった。このため、旧河道の幅は明らかにできない。

検出した長さは約45mで、最深部における検出面からの深さは1.70mを測る。旧河道内の埋土は、シルト混じり砂および砂質シルト層が交互に堆積している。急激な土砂の流入によって埋もれたようで、多くの層においてラミナが観察されている。

各層から、土器・木製品が出土している。それらの出土状況については、第5章で述べるとおりである。出土土器から判断すると、9世紀代から13世紀にかけての遺物が認められることから、比較的長い時間をかけて堆積していったことがわかる。土器では、土師器・須恵器・瓦器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土している。木製品では、人形・折敷・曲物底板などが出土している。この他、金属製品もわずかではあるが出土している。

なお、この旧河道は鎌倉時代に完全に埋没したのではなく、初田館の機能していた室町時代においても、湿地状の窪地となっていた。そして、完全に埋没するのは近世における水田開発のための整地による。この過程については後述する予定である。

墓 1（挿図36）

調査区のほぼ中央部南側で検出した。土壙6の約1m南側にあたる。

掘り方の平面形は、若干歪んではいるが長方形を呈する。主軸方向はN4°Wを指向し、主軸方向で3.30m、その直交方向で1.60mを測る。南側小口には角礫が2石置かれていたが、確実に当墓に伴うものなのかについては明確にしない。

また、掘り方内を約1cm程下げた段階で、掘り方とほぼ相似形を呈する棺の痕跡を確認することができた。主軸方向は掘り方と同じで2.70mを測り、その直交方向は0.95mである。掘り方検出面からの深さはわずか5cmである。

棺内からは、副葬したと考えられる白磁碗1点と、瓦器小皿4点、瓦器碗1点、および鉄製小刀1点・火打金1点が出土している。白磁碗は、棺内北西隅付近から、正立した状態で出土している。白磁碗の底部は、検出した棺の底部に接していることから、ほぼ原位置を保っているものと考えられる。また瓦器碗・小皿は、白磁碗とほぼ一括で出土している。これらの遺物についても、ほぼ原位置を保っているものと考えられる。

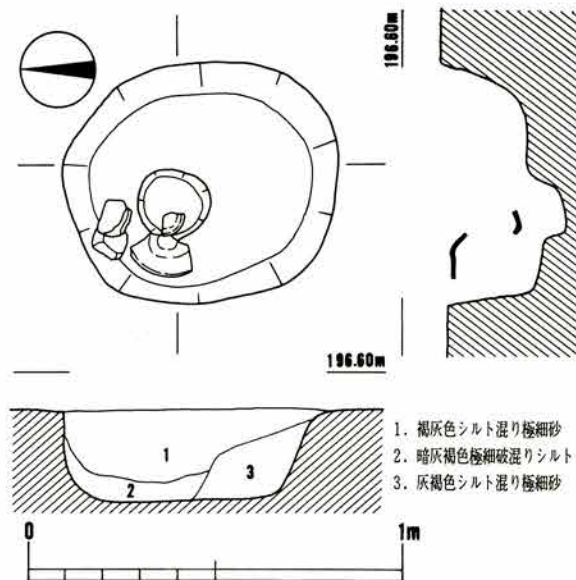
これに対して小刀は、棺内中央より若干北側で主軸とほぼ直交する方向で出土している。棺底より若干遊離して出土していることから、被葬者の上に置かれていたものと推定される。

柱 穴

柱穴は他の時代との遺構の重複や、遺構面の削平、粘土採掘穴などによる攪乱のために時期を特定できるものは少ない。このため挿図23に示したように、柱穴は時期不明のものが多く、鎌倉時代に特定できるものは少ない。また、建物に復元できるものもなかった。但し、これらの柱穴は時期不明のものも含めて、大半が鎌倉～室町時代のもと考えられるので、実際には鎌倉時代の柱穴はかなりの数が存在していると思われる。

柱穴の検出状況には渉々しいものはないが、出土遺物の量や、井戸・墓・土壌などの遺構の検出、北東側の旧河道への遺物の投棄状況から考えて、堀で囲まれた館の時代以前にもこの場所に人が住んだことは容易に想像されよう。建物跡については、井戸1や墓1の周辺、池2の西側などには建っていた可能性が考えられる。

検出された柱穴は円形ないし楕円形の掘り方を持つもので、柱痕跡の観察から直径10～15cm程度の柱材が用いられていたと推定される。鎌倉時代の柱穴には室町時代と違って柱の根固めに石などを用いて補強するものは見られない。

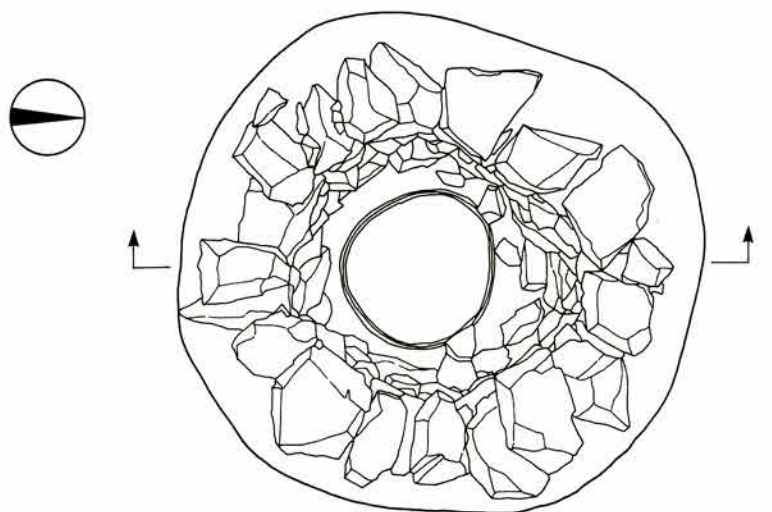


挿図37 土壌 2

土壌 2 (挿図37)

当初、土壌として検出し整理を進めていたが、柱穴と判断される遺構である。遺構の壁面が垂直に立ち上がること、2段掘りになるが、1段目の土壌を柱掘り方、2段目を柱の沈んだ痕跡と考えることができる。

平面は楕円形に近いもので、柱掘り方は長軸長74cm、短軸長64cmで、検出面からの深さは20cmである。底はほぼ水平になる。中央から南に寄った部分に円形の柱の沈んだ痕跡が観察される。直径19cm、深さ10cmの規模を持つ。なお、柱痕跡は沈んだ痕跡以外には認められず、柱穴の断面には観察できなかった。土壌内からは須恵器碗が出土しており、柱を抜き取った後に地鎮を行った可能性がある。



196.50m

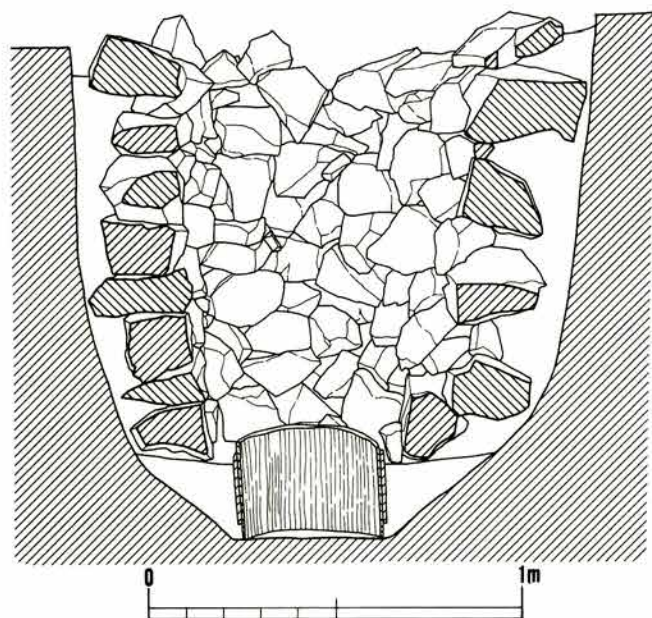


插图38 井戸 1

井戸 1 (挿図38)

館の北東寄りで検出された円形の井戸である。室町時代の井戸 2 に比べるとその水量は少ないものの、井戸は現在でも湧水が出ており、適宜に排水をしながら調査を行わなければならないほどであった。井戸の検出高は標高196.3m、井戸底の高さは標高194.9mを測る。井戸 2 に比べると井戸底の高さは1.5m前後浅い。井戸側は石組みで、底に曲物を据えて水溜にする構造である。井戸の掘り方の最大直径は1.35mである。

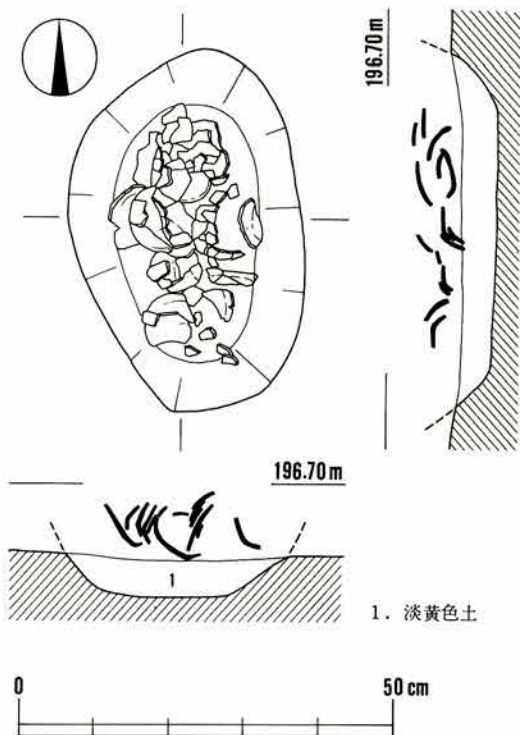
石組みの内法は直径0.8m、高さ1.2mを測る。石には円礫はなく、長方形に近い角礫を多く用いていた。長軸の長さが20~40cm前後の石が多い。石組みの裏は掘り方の大きざりざりに組むもので、組み方は長軸を裏に向けており、石の小口にあたる部分を井戸側内に向けて組んでいた。また、石組みの裏には拳大のカイ込め石を挟んで、石組みを補強するが、栗石は入れていない。石は概ね1段ごとに平行に積んで、全体的には螺旋状に組んでいる。石材は割石のままで使用しており、石材の面を調整した石は見られない。材質は花崗岩である。

下部の水溜に使用する曲物は直径40cm、高さ26cmのものである。石組みが小規模なため、井戸側の一部とも考えられるような大きさである。この曲物は2重に重ねたもので、石組みの下に据えている。内法が石組みより小さいため、曲物を据えた後、石組みとの間にはカイ込め石

を充填して、石を組む土台を補強している。曲物の上端部より石組のレベルがやや下がるのは石が沈下したためと考えられる。

埋土は泥土で、石組みに使用した石材が含まれていた。これらの石材は石組み上段のもので、井戸廃棄時に石組みが破壊されたためと思われる。掘り方の埋土はシルト質の粘土である。

出土遺物には、木製品の曲物底板と呪符木簡4枚がある。その他、桃の種が埋土の中に含まれていた。呪符木簡は曲物の上端付近のレベルで出土したもので、井戸廃棄時の祭祀に使用したものと考えられる。



挿図39 土壌 3

土壌 3 (挿図39)

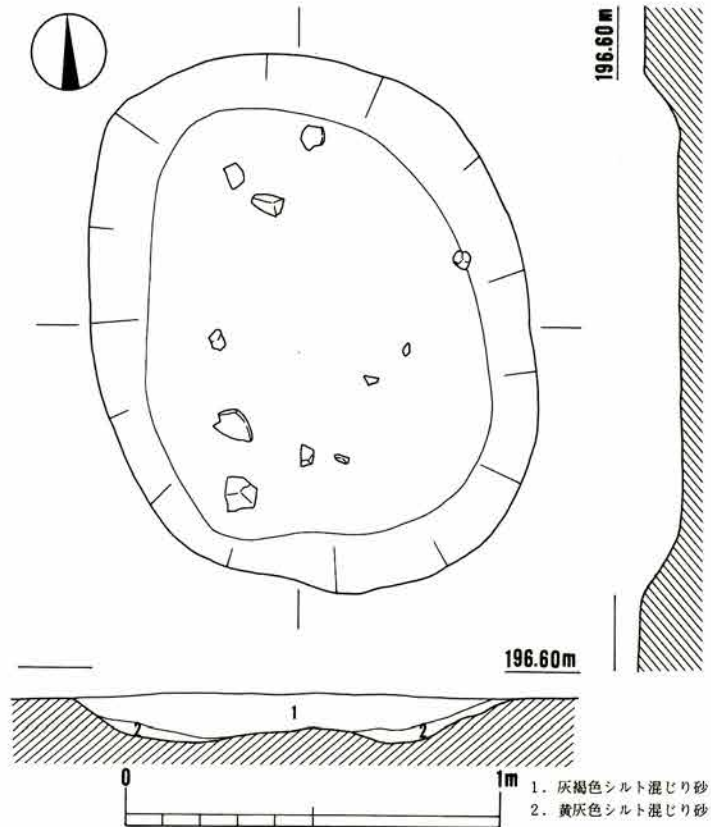
土壌 3 は、調査区のほぼ中央、池 2 の東側で検出された長楕円形の土壌である。長軸長49cm、短軸長32cmを測る。検出面での標高は

196.6m、土壌の深さは0.2mであるが、検出段階で既に土器が浮いた状態で出土していることから、土壌は少なくとも数十cm程度の深さを持っていたと考えられる。埋土は淡黄色土である。

土壌内から出土した遺物は土師器の皿で、いくつかの単位で重ねて置かれていた。

土師器の皿はいずれも残りの悪いもので、実測出来たのは5個体（339～343）にすぎない。

削平が著しいことや、周囲に同時期の遺構がないことなどから遺構の性格は不明であるが、土器が固まって出土した状況などを見ても単なる廃棄土壌でないことは確かである。



挿図40 土壌 5

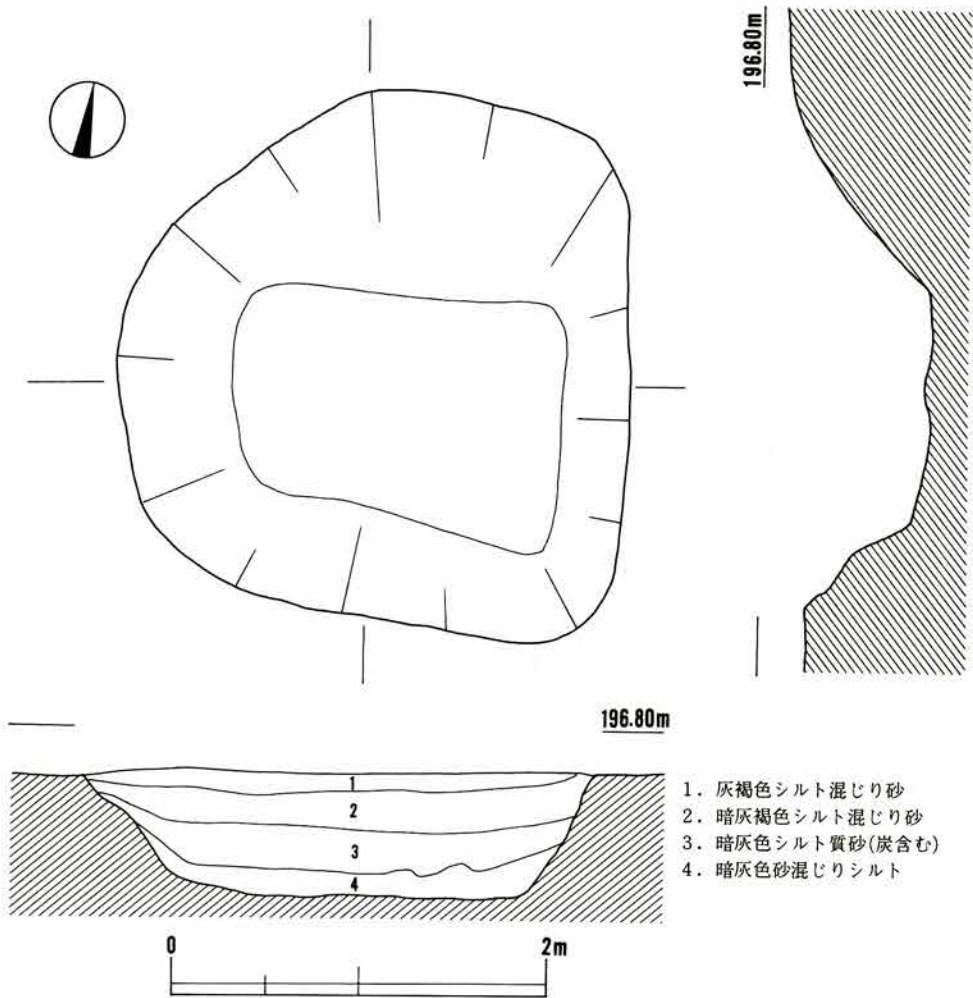
土壌 5（挿図40）

調査区の中程、北入角の南側に検出された土壌である。平面形は南北にやや長い楕円形である。長軸長1.4m、短軸長1.2m、深さ10cmを測る。

形状や検出状況から単なる廃棄土壌ではないと思われるが、この遺構の削平が激しいため性格を明らかにすることはできなかった。

ただし、土壌底には微量であるが炭や焼土痕跡が観察できたことや、遺物が底から出土していることなどから、住居の周囲に位置する遺構の痕跡ではないかと思われる。出土遺物には、土師器の細片がある。

埋土は灰褐色混じりシルト砂及び黄灰色シルト混じり砂である。遺構の時期については、時期の分かる破片から判断して鎌倉時代と考えた。



挿図41 土壌 6

土壌 6 (挿図41)

調査区の南寄り、墓 1 の北側に近い場所から検出された遺構である。東西にやや長い不等辺 5 角形のプランを持つ土壌である。最大長 2.8m、深さ 0.7m を測る。今回の調査で検出した土壌の中では大きい規模を持つもので、深さは最大である。土壌の壁はやや急な傾斜で立ち上がり、土壌底はほぼ水平である。土壌 5 同様、遺物から判断して鎌倉時代と考えたが、墓に近接しすぎていることや、規模が大きく、深さも深いことから時期に疑問も残っている。さらに、土地を大きく改変し、土砂を切り盛りすることが増大するのは一般的に室町時代以降のことが多い。しかし、今回は確証がないため、鎌倉時代の遺構とした。

第4節 室町時代の遺構

1. 概要

江戸時代の地誌『丹波志』の記述や、地元の伝承で知られる初田館の東側3/5を調査した。調査区内で検出できた館の規模は南辺が41.5m、東辺が76.0m、北辺が11.5mを測る。調査区内での館部分の面積は2100㎡前後である。

調査の結果、館の周囲を巡る堀と堀内に橋脚遺構が、そして館の内側では小型堀・掘立柱建物・柵・柱穴・池・井戸・溝・土壌などの遺構が検出された(遺構名は挿図23参照)。

2. 遺構

堀(挿図42~46)

当館跡を方形にめぐると推定される堀の約1/2弱を検出した。ただし、検出した堀の北東部はクランクし入角となるもので、単純な方形をなしてはいない。この入角部分から北側を北堀、北堀の東端から南側にのびる堀を東堀、東堀の南端から西側へのびる堀を南堀と呼称する。

南堀 東西方向にほぼ直線的に掘られている。計41mを検出し、西側は調査区外へのび、東側はコーナーをなし東堀へとつながる。検出面における幅は4~4.5mとほぼ一定している。横断面はU字形を呈し、中央部における検出面からの深さは西側で1.2m、東側で0.6mと、西側ほど深くなる傾向にある。底部の標高は、西側で195.2m、東側で195.3mである。

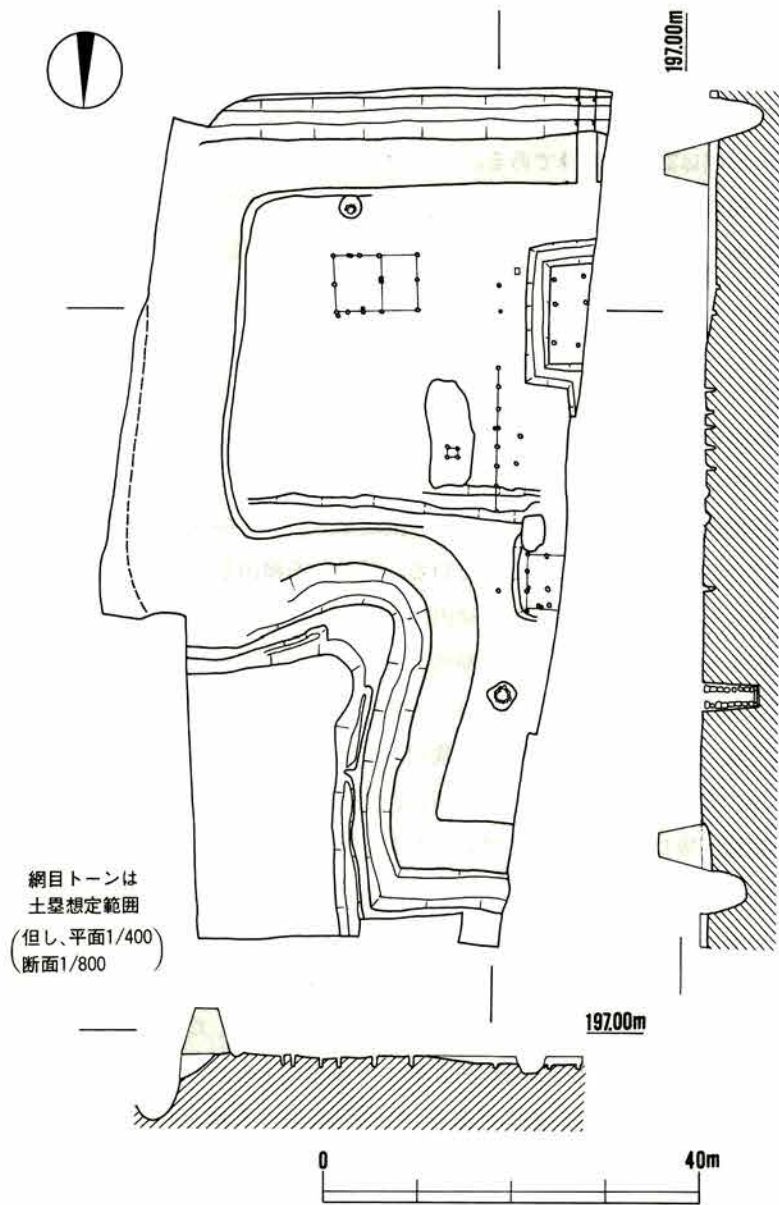
南堀の西端では、南堀を横断する橋脚を検出している。この橋脚については後述する。

堀内の埋土は、大きく2層からなる。上層は、近世における水田耕作用に整地された層である。下層は、堀掘削後に自然に堆積していったシルトを主体とした層である。このシルト層から館の機能にともなう遺物が出土している。おもな出土遺物としては、土器・木製品・金属製品が出土している。

東堀 南堀の東端から北へほぼ直角方向にのび北側は北堀に接続している。東堀の北側の一部は、平安~鎌倉時代にかけての旧河道を利用している。検出した長さは48mである。

東堀については、東側の肩部は調査区外にあたり検出できなかった。横断面は南堀同様U字形を呈するが、南堀と比べて浅い傾向にあり、中央部における検出面からの深さは0.8mを測る。底部の標高は、南端で195.2m、北側で195.0mである。

埋土は、南堀同様2層からなる。上層は、近世における水田耕作用の整地層で、下層は館が機能してからの自然堆積によるシルト層である。ただし、南堀とは異なり、下層からは殆ど遺物が出土していない。



挿図42 館跡遺構全体図

北堀 入角部分を中心に検出した。東堀の北端から西側へ約15m（Ⅰ区）、そこから北側へ約25m（Ⅱ区）のび、さらに西側に約13m（Ⅲ区）を検出した。

横断面は、Ⅰ区では南堀・東堀同様単純なU字形を呈しているが、Ⅰ区・Ⅱ区については堀内中央部に土手状の高まりをもち、二重になっている。また、検出面における幅も異なる。

Ⅰ区は、検出面における最大幅は9mを測る。中央部に土手をもち、その両側に堀が二重にめぐり形になっている。それぞれの堀は規模が異なり、外側のものは浅く小規模である。内側の堀は、中央の土手頂部におけるレベルで、幅3.5m、そのレベルからの深さ34cmを測る。また外堀は、同レベルにおいて幅1.1mを測り、このレベルからの深さは20cmである。

Ⅱ区は、検出面における幅は7.70mを測る。Ⅰ区同様中央部に土手をもち、二重に堀がめぐっている。断面形は、両者とも逆台形を呈する。内側の堀のほうが規模が大きく、中央部の土手のレベルでの幅3.60mを測り、このレベルからの深さは58cmある。堀検出面からの深さは94cmである。また、外側の堀は、同レベルでの幅1.70mを測り、このレベルからの深さは大変浅く16cmである。

Ⅲ区は、断面U字形を呈するが、南堀・東堀とは異なり、検出面における幅4.63m、深さ70cmと浅く、皿形に近いものである。

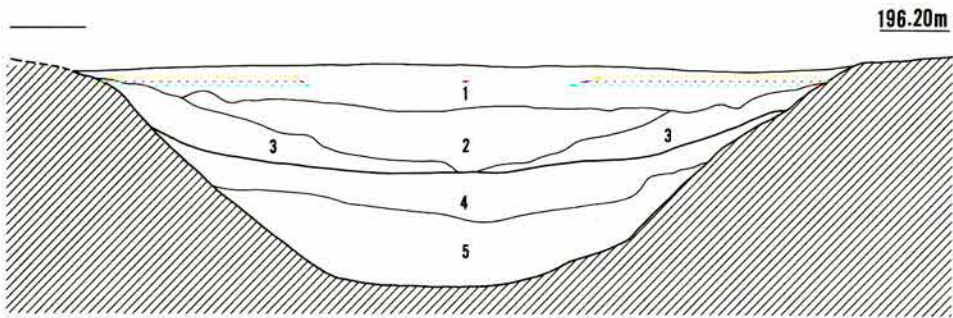
埋土は、Ⅰ～Ⅲ区ともほぼ同じで、上層約50cmは、近世における水田開発に伴う整地層からなり、以下はシルト層が堆積していた。このシルト層は大きく3層に分層できたが、ほぼ同質のものである。このシルト層からの出土遺物は少なく、殆どが木製品で、土器はわずかである。木製品としては、掛矢と板材が出土している。板材は、屋根に葺かれたと推定されるもので、Ⅲ区の堀底からまとまって出土している。

橋脚（挿図47）

南堀の西端で、橋脚を4ヶ所検出した。

各橋脚は1本の柱と1本の杭がセットとなっている。脚柱は、堀底部からの深さ50～70cm、堀底部における掘り方径35～40cmの掘り方内の底部に礎石を据え、その上に立てられている。礎石は円柱状のものや円錐形のものなど一定していないが、平坦面が上になるように据えられている。堀自体が軟質のシルト層を基盤としているため、柱が上部の重みで沈み込まないようにするための工夫と考えられる。柱は基本的に直立するように立てられているが、機能時の重みのためか、かなり傾斜していたものや礎石の中心からずれているものも認められる。柱は4本ともほぼ同じ規模のものが用いられており、径16～23cmを測る。柱上部は堀検出面のレベルまでしか遺存せず、上端部の構造は不明である。残存する長さは55cm～1.2mを測る。

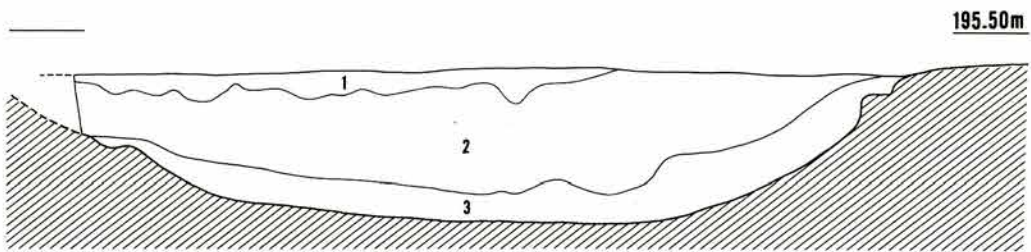
これに対して杭は、各柱に対して堀の内側に約10～20cmの距離をあけて、堀底部に直接打ち込まれている。橋脚を設置する基盤自体が軟質のシルト層であることから、支柱をなす柱の位



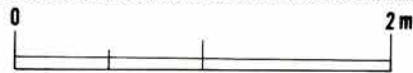
1. 灰色砂混じりシルト(近世埋め土)
2. 明黄灰色砂混じりシルト(近世埋め土)
3. 淡黒灰色砂混じりシルト(近世埋め土)
4. 暗青灰色シルト
5. 黒灰色シルト(腐植物・遺物多く含む)



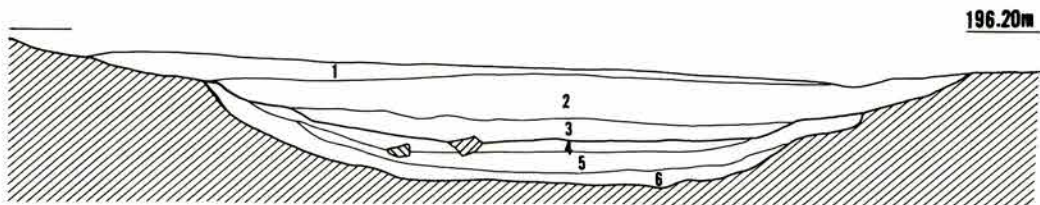
挿図43 南堀土層堆積図



1. 黒灰色シルト混じり青灰色細砂～極細砂
2. 暗青灰色シルト(炭・有機質多く含む)
3. 黒灰色シルト(有機質・植物遺体多く含む)



挿図44 東堀土層堆積図



1. 灰褐色シルト混じり極細砂
2. 灰褐色シルト混じり極細砂(埋め土)
3. 灰色シルト混じり極細砂(埋め土)
4. 淡黒灰色シルト
5. 暗灰色シルト
6. 淡黒灰色シルト(腐植物多く含む)



挿図45 北堀土層堆積図(1)

置がずれないようにするためのものと考えられる。杭は、柱とほぼ同規模の柱材を用いており、先端を約18~30cmにわたって削り込んでいる。遺存する長さは、柱とほぼ同じである。

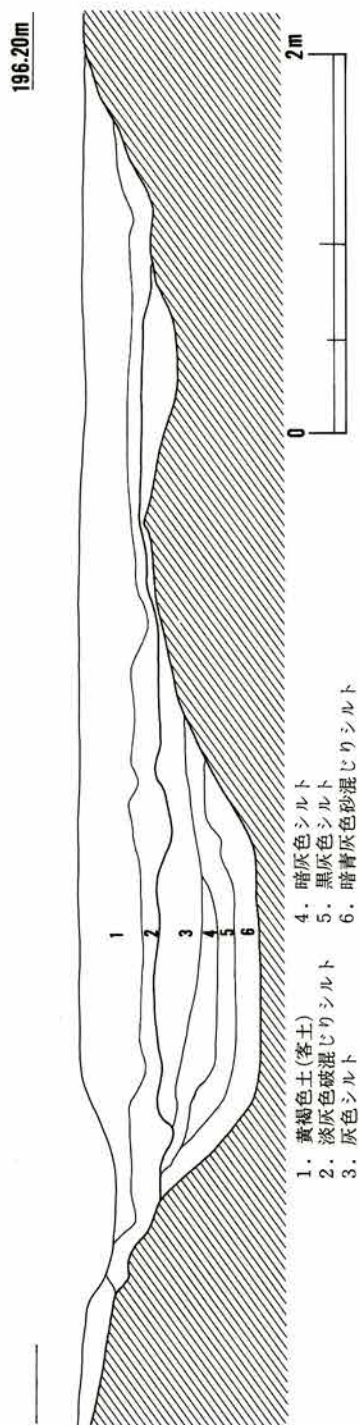
4ヶ所の橋脚は、堀底部から斜面への変換部に設置され、それぞれがやや不整形な長方形をなし、堀に対して直交するように配置されている。同じ変換部側の橋脚間が短辺をなし、支柱間の距離は、北側で1.80m、南側で1.90mを測る。これに対して長辺をなす支柱間の距離は、西側で2.40m、東側で2.50mを測る。

小型堀（挿図48）

館の入口に隣接して検出された堀である。堀の規模は幅2.5m、深さ0.6~0.8m前後の小規模なもので東西方向に6.8m、南北方向に全長18.1m検出できた。堀は調査区の西側、および北側にさらに伸びると考えられる。堀の平面形は館の形状を縮小したものに酷似しており、東北辺が入角となるもので、入角部分の全長は南北に5.3mを測る。調査区側の堀で囲まれた内側の面積は約41.2㎡である。検出高は標高196.50~70m前後であるが、やはり上面をかなり削平されていると思われ堀内の柱穴の残りは悪い。

堀の断面はほぼ台形を呈し、底は概ね平坦である。底の幅は東辺で若干細くなることもあるが、幅1.1~1.2m前後で一定している。埋土は下層に若干の流入土も見られたが、全体的には一度に埋め戻したような形跡が認められた。

堀内にはいくつかの柱穴が検出できた。図に示したものは埋土の状況から同時期のものと判断できるものである。しかし全て遺物を出土しているわけではないので、中には他の時代のものも含まれる可能性がある。東辺の柱穴は比較的堀の方向に沿っており、柵列や建物跡の可能性も残されている。但し、調査では残りの悪さからこれを検証することはできなかった。



挿図46 北堀土層堆積図（2）

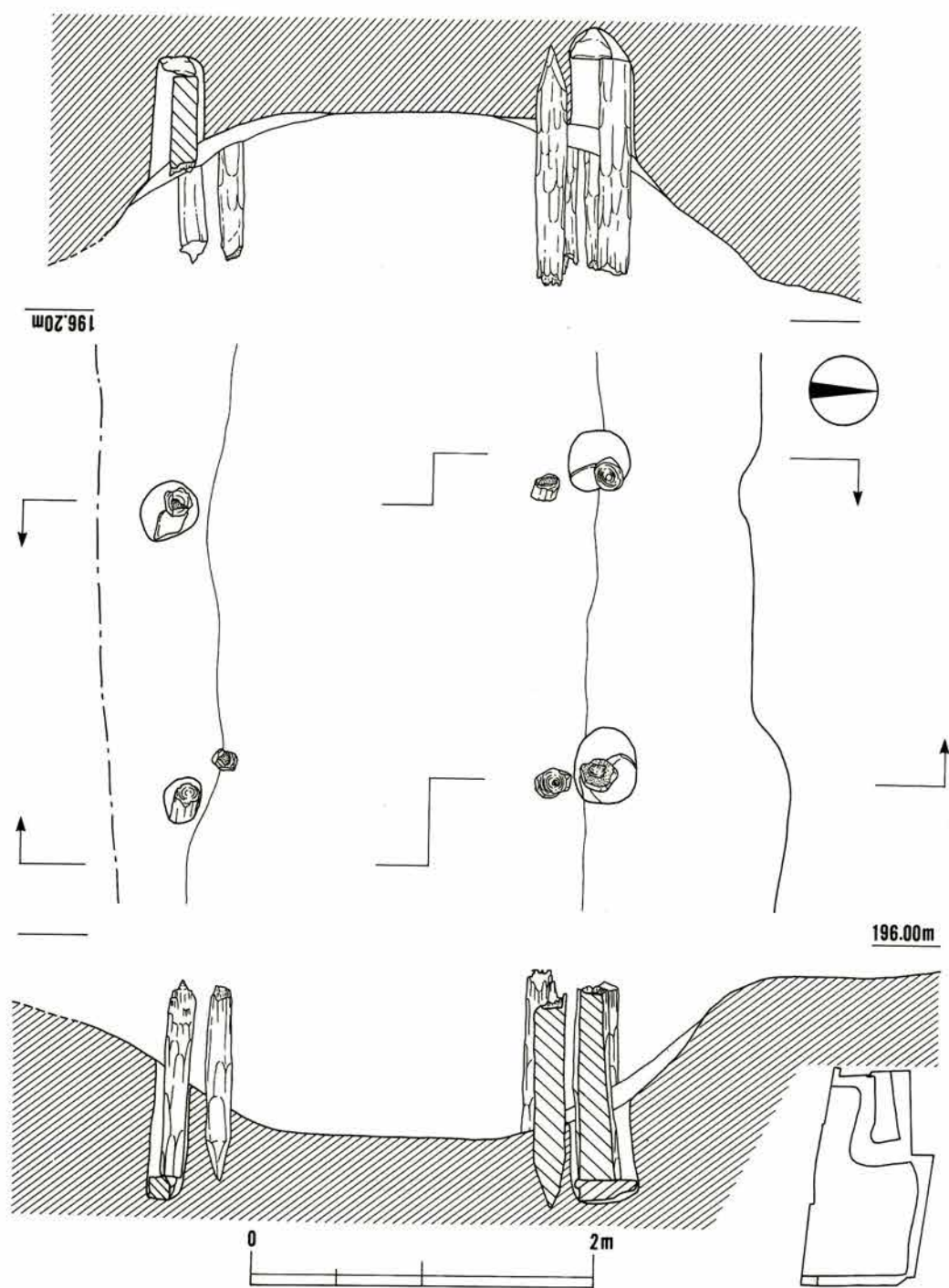
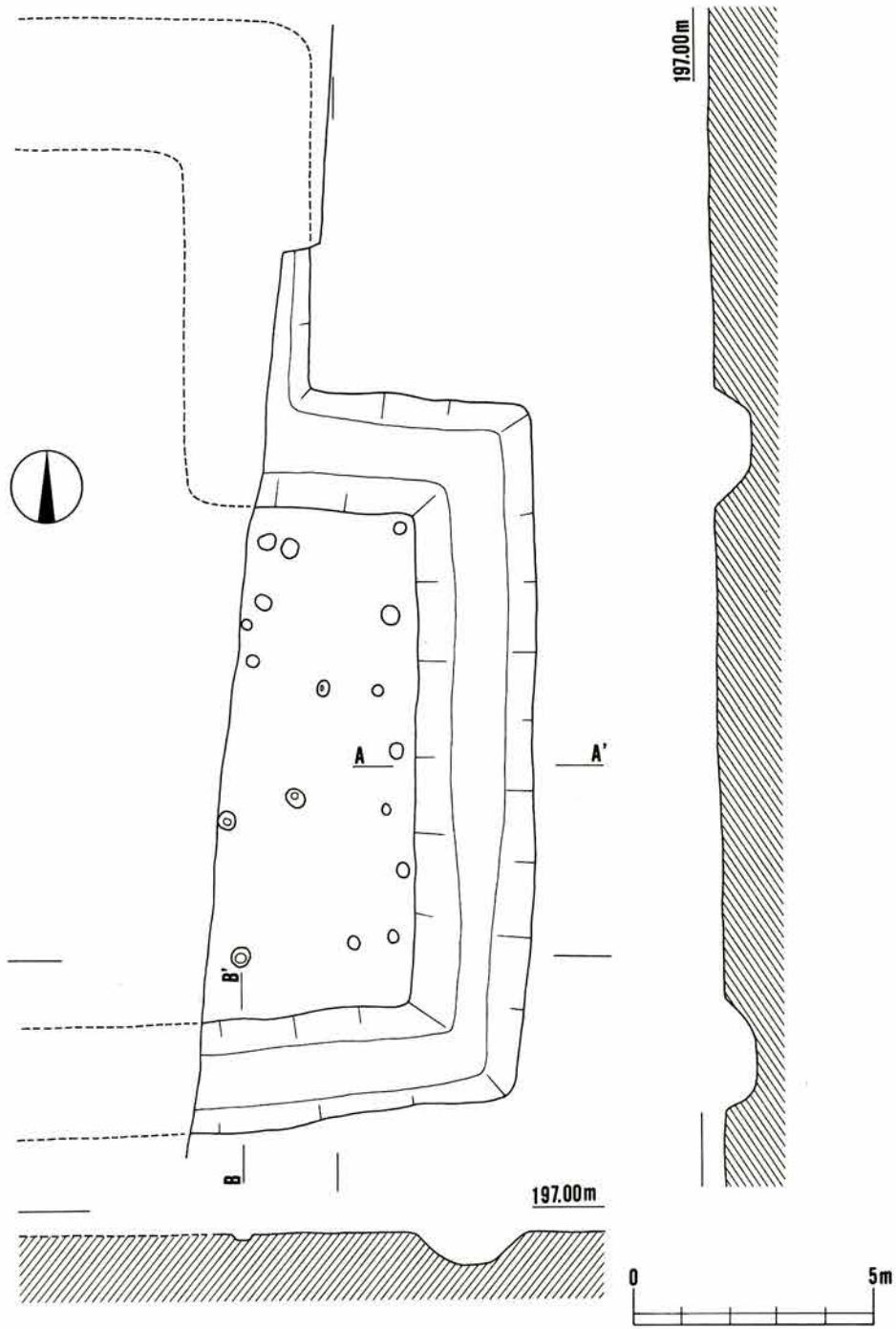
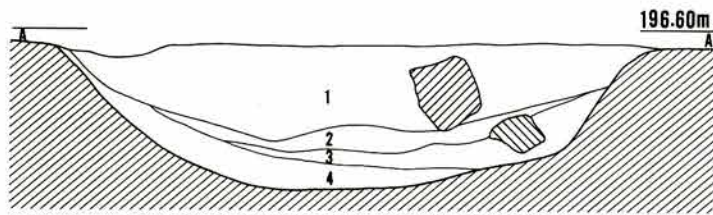


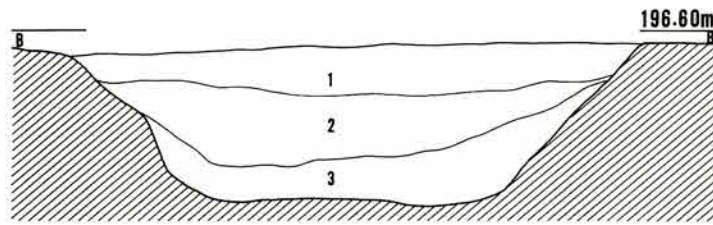
插图47 桥脚



挿図48 小型堀



1. 灰褐色シルト混じり砂(埋め土)
2. 暗灰色極細砂混じりシルト(流れ込み)
3. 灰色シルト
4. 黄褐色細砂混じりシルト



1. 暗灰褐色シルト混じり砂
2. 黄灰褐色土(埋め土)
3. 黒灰色砂混じりシルト(埋め土)



挿図49 小型堀土層堆積図

小型堀は調査区内に限っていえば、館全体の形状・方向の縮小したプランを有している。堀の方向は東辺を基準にすればN1°Wを向くもので、館の東辺と同方向である。規模は概ね館の1/5に相当し、面積的には館の入り口周辺の一角を占める遺構である。

この堀からは、土師器、丹波焼擂鉢・捏鉢・甕、中国産の青磁碗・白磁碗・白磁小杯、備前焼徳利などが出土している。時期は概ね16世紀前半の遺物であるが、中国製の染付に16世紀後半段階に輸入されるものが含まれている。このことから堀は16世紀前半～後半の期間存続していた可能性がある。

堀とこれに囲まれた内部とは1連のものとするのが自然である。しかし性格に関しては種々なことが推定される。そして、その状況から以下のことが観察できる。①館のプランとの関連が考えられる。②入口を遮る構造である。③規模的に館の一角を占めることから建物などの施設を取り囲んだ遺構である。④館廃絶後も機能していた可能性がある。などである。

しかし、完掘していないことや、内部施設の検出が充分行えなかったことから、現段階では②の要素を指摘するに止めておきたい。

建物1（挿図50）

館の南端で検出された掘立柱建物である。今回の調査で唯一全体を知ることができた。建物の棟方向は東西を向くもので、N87°Eを測る。この方向は館の南辺と同角度で、この方向を意識して建てられたと考えられる。建物規模は4間×2間で、桁行の南側が9.2m、北側が8.8m、梁行きの東側が6.0m、西側が5.6m、面積55.2㎡である。

この建物の周囲には柱穴が密集しているが、これらの柱穴の中には室町時代の遺物が出土するものも少なからず見られた。確実に室町時代の遺物を検出したものを図示（挿図50）した。この時期の柱穴は柱周囲を石で補強する点や、根石を入れる点、そして埋土や柱の規模などの点で共通したものが多い。多くのものが建物に前後して使用されたと考えられる。

建物1以外には並びを復元できるものはなかったが、同じ場所で建物が複数回建て替えられたのではないかと思われる。また、建て替えの他に、柱穴の密集は東側にも続くので、この周辺に別棟が存在したことも予想される。いずれにしても、復元案以外に何棟かの建物が建つことは確実である。

建物1の検出面は標高196.45～196.55m前後で、柱穴の深さは0.16～0.38mである。柱穴は円形のもので直径0.3～0.4m前後、柱痕跡は西側梁行の間の柱穴で観察できたのみである。痕跡の観察から柱の直径は0.15m前後と考えられる。

また、建物の柱穴を全体的に観察すると、根石が置かれている柱が東に集中しており、柱穴の規模・深さともやや東側が大きめであることがわかる。棟の東西で基礎の補強に違いがみられることは、両者の間に建築上の構造が異なることを指摘できよう。根石などを用いる方には床敷構造の建物が、西側には重量物が柱に懸からない、土間などが予想される。また、屋根構造が両側で異なることも考えられる。西側が東側に付属する庇様の構造になるようなことも予想される。

仮に、東側が床敷構造であるとする、農家などの棟構造から推定すると、入口は土間側の北面、あるいは妻入なら西面にあるのが一般的である。

建物2（挿図51）

館の途中で西側部分を検出した掘立柱建物である。溝3に周囲を囲まれ、池1が南東隅に隣接する。建物は東西棟で東辺の梁行が2間、南北辺の桁行が2間以上の規模になるとと思われる。検出できた範囲での寸法は、桁行の南側が3.3m以上、北側が2.7m以上の規模を計る。梁行は東辺が5.5mで、柱間は2.0m前後が平均的と思われる。梁行は建物1の規模とほぼ同じである。桁行きについては、柱穴が密集して検出され幾つか異なる復元も可能であるが、ここでは2.0m前後の間隔になる柱穴を選んで復元した。調査区の限界もあって全体を知ることができないが、建物は溝3を雨落ちの溝とする範囲内に収まっていたことは疑いがない。

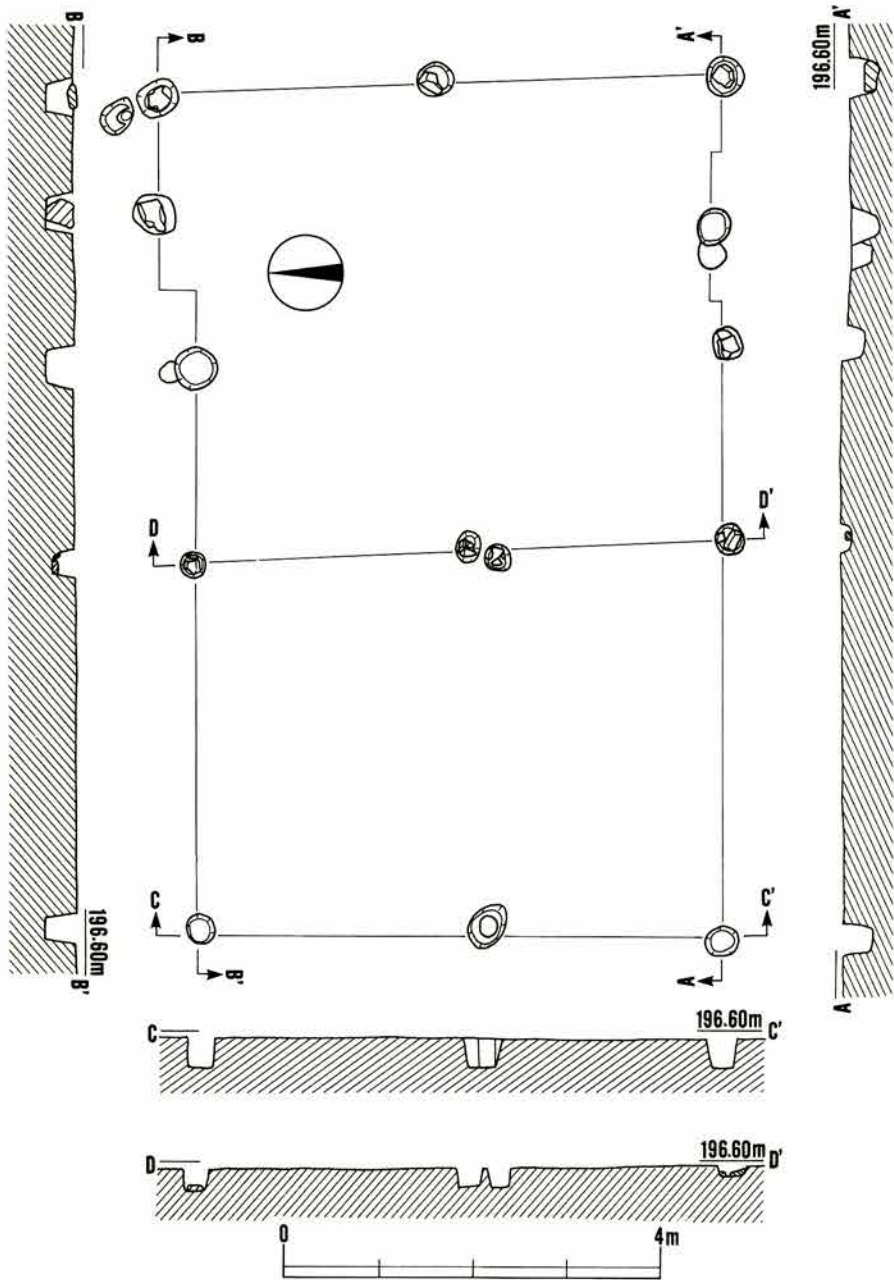


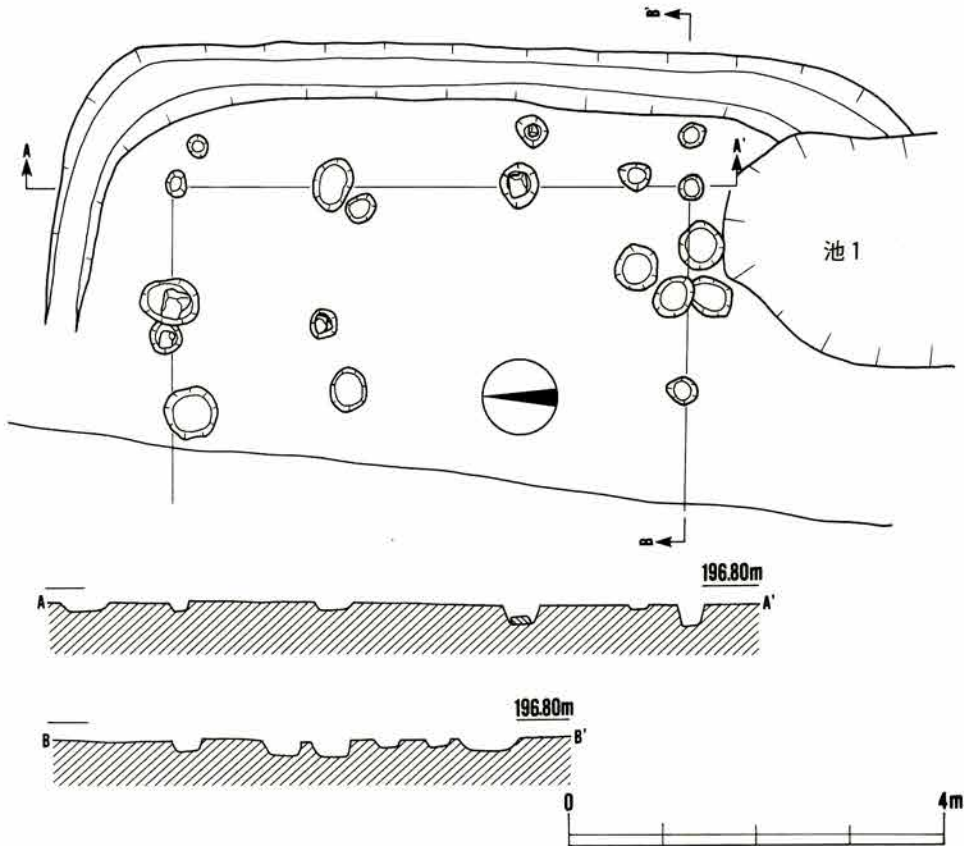
插图50 建物 1

柱穴の掘り方は円形ないし楕円形を呈しており、規模も最大径で20~60cmと幅がある。これは、削平が著しいためと思われる。柱穴の検出レベルは標高196.6m、深さは10~20cmである。柱の痕跡が観察できる柱穴はなかった。柱穴で根石ないし柱の補強に石を入れたものは、建物の東辺ないし北辺に見られた。

雨落ち溝と考えられる溝3（挿図51）は幅50~60cm、深さ15~16cm、断面はU字形を呈している。溝の南東端は池1に接するもので、南北は8mの長さを持っている。埋め土は褐色の砂礫混り土である。

柵1（挿図52）

館の西寄り池2の西側に7間分が検出された。柱間隔が均等で、検出される柱穴の形状・埋土・深さが均質であることから一連の並びと考えた。そして、この並びに平行した柱並びが無いことから柵とした。但し、北端の柱穴は館の時期に存在した溝2を切ること、柱穴の深さが他のものに比べ浅いこと、根石が入ること、柱間が北端のみ2.5mと広いことなどから柵の並



挿図51 建物2・溝3

びと無関係の可能性もある。

柵の柱間隔は2.0~2.1mであった。柱穴内には根石などの補強材は北端の柱穴を除いて見られない。柱の直径は痕跡の観察から20cm前後と考えられる。

柱の検出レベルは標高196.6~196.7m前後で、深さは0.4~0.5mであった。少なくとも、建物2の柱穴よりは深い柱穴が多い。柵の北端は溝1・2に接していたと思われるが、南端については並びが不明確である。但し、挿図42で示しているように、5m南にこの柵の続きになるとと思われる柱穴で、室町期の遺物を出土したものが2基検出された。これらは規模、深さもほぼ匹敵する構造を持っているもので、柵に並ぶ可能性を考えた。このことから柵は、溝1から南へ一直線に並び、東側の1画を大きく遮断する施設ではないかと考えられる。

溝1・溝2（挿図53）

溝1・2は土塁・堀が屈曲した南側に平行して走る溝である。溝1は検出長31.0m、幅1.0m、深さ0.2mである。溝2は全長10.0m、幅0.9m、深さ0.1m前後になる。

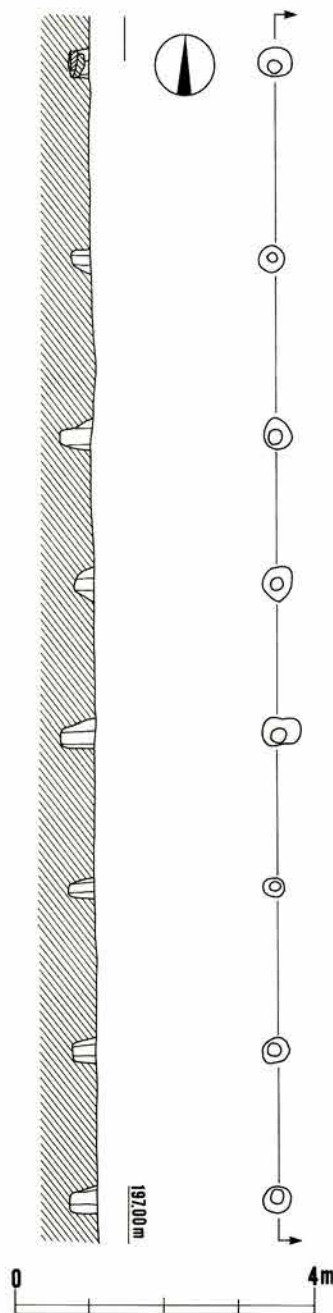
溝の埋土は両方とも褐色の砂礫混り土、断面はU字形を呈する。

この溝の間隔はおよそ1.5mあって東西に平行に流れている。溝1は溝に直行して接するものである。そして、溝と溝の間には殆ど遺構が見られないことから、溝の間には小規模な土手状の遺構ないし築地塀などが存在したと思われる。そして、溝1・2はこの遺構の雨落ち溝と考えられる。

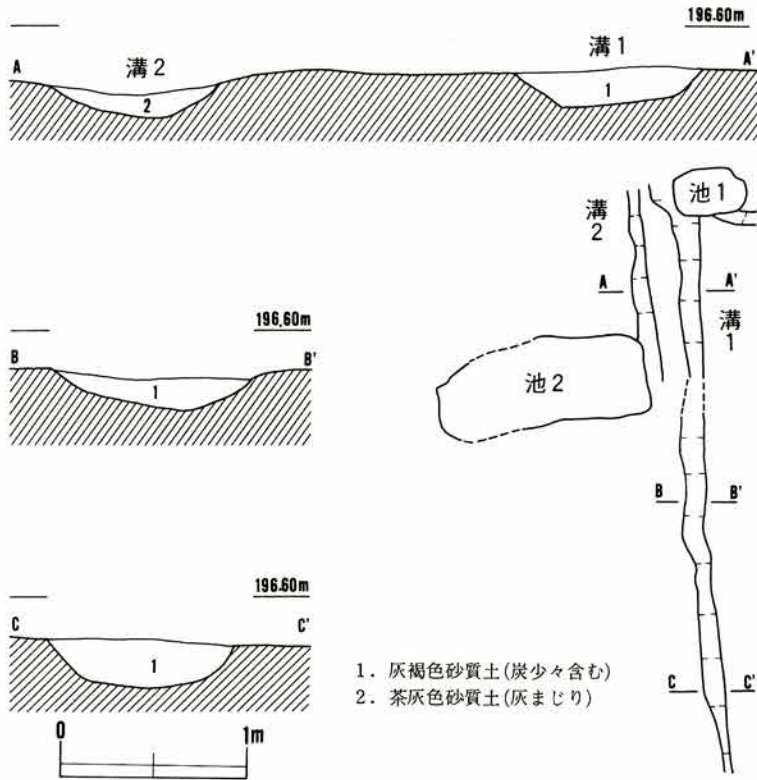
井戸2（挿図54）

室町時代の井戸は2基（井戸2・3）があるが、何れも鎌倉時代の井戸よりは深く掘削する。

井戸2は館の北東辺の堀際で検出された井戸である。石組の井戸側を持ち、底に胴木を据えた構造を持っている。井戸は標高196.4m前後の高さで検出され、底は標高193.5m



挿図52 柵1



挿図53 溝1・溝2

まで掘削する。検出面からの井戸の深さは2.9mである。

掘り方は楕円形を呈し、最大直径2.9mである。また、井戸2は検出面から2.0m付近より下では井戸1以上に湧水が激しく、調査時は常時排水が必要であった。

石組みの内法は直径1.1m、高さは2.3mを測る。井戸側の石材は直径0.3~0.4m前後の角礫を多く用いている。裏込めには栗石はほとんどなく、石の間には直径0.1~0.2m大のカイ込め石を挟んで石組みを補強していた。掘り方は下部の方では石材ぎりぎりの幅のみを掘削しており、上部になるほど広がっている。石組みの積み方は1段毎に高さを均等にしながら積み、基本的には螺旋状に組んでいったと考えられる。石材は長細い形に粗く割った割石を用い、石の長辺を奥に据え、小口を井戸側に向けている。

胴木の長さは1.2~1.3m前後で、直径15~18cm大の松材を井桁に組んでいた。胴木の組み合せは互いに柄穴を入れて組み合わせるもので、組み合わせの内法は、1辺1.0m前後である。

井戸側の埋土は滞水のために泥状になっており、中に植物遺体などの有機物を多く含んでいた。検出面から下へ1.0m前後のところまでは、石組みの石材が投げ込まれていた。それより下

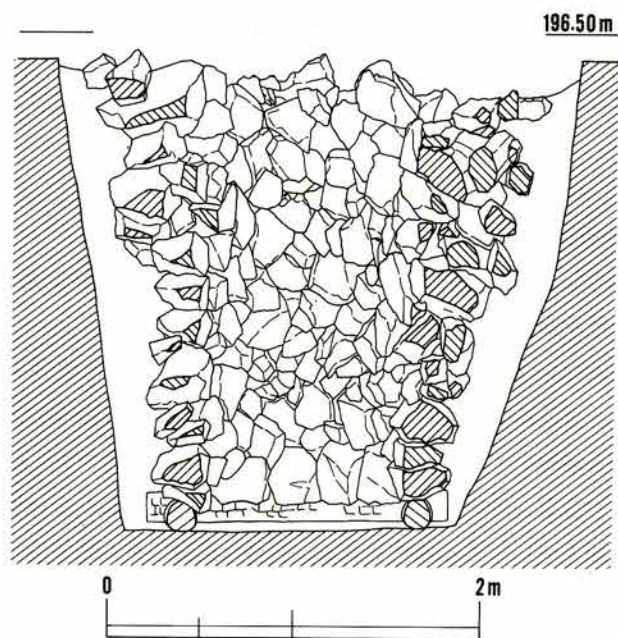
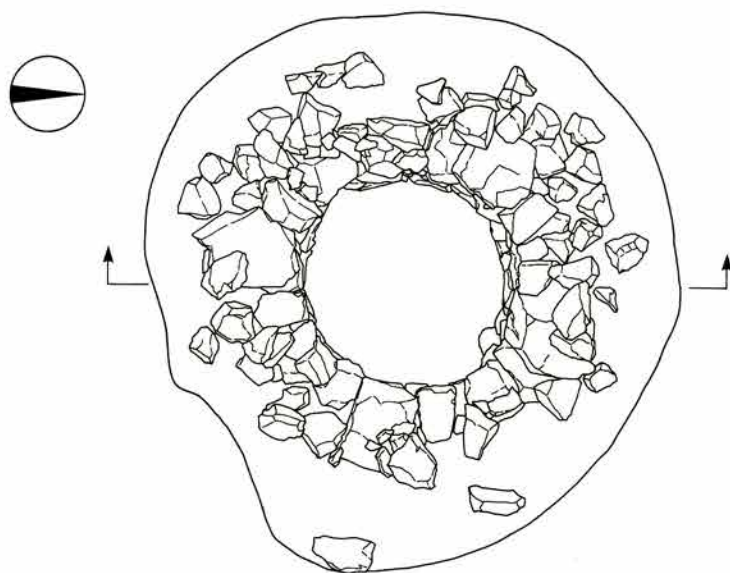


插图54 井戸 2

層は砂質土と泥土との互層になり、最下層では粒子の粗い砂礫層が40～50cm程堆積していた。そして、遺物はこの砂礫層からは出土していない。

出土遺物は、土師器皿、瀬戸・美濃焼皿、中国産の青磁碗、丹波焼播鉢、備前焼徳利などの土器の他、石製品の砥石、金属製品の鎌、口金、釘、座金、小柄など多様なものがある。

井戸3（挿図55）

館の南端、溝4に接して検出された井戸である。建物1とは北側に隣接する関係にある。上方が石組、下方が桶を3段重ねた構造の井戸である。攪乱土壌によって石組みの北半分は失っている。石組みの石材は直径0.3～0.4m前後の角礫を多く用い、石の間には直径0.1～0.2m大のカイ込め石を挟むが、裏込めの栗石は認められない。石組みの積み方は1段毎に高さを均等にしながら、全体としては螺旋状に積み上げている。石材は長細い形に石材を粗く割った割石を用い、石の長辺を奥に据え、小口を井戸側に向けている。

井戸の検出レベルは標高196.3m前後で、底のレベルは標高193.3mである。掘り方は円形で直径2.2m、深さ3.1mを測る。井戸底は井戸2より僅かに深い。やはり、湧き水は豊富で井戸2同様、常時排水を行いながら調査を進めた。

検出された部分での石組み内側の直径は0.6m、深さは0.7m、桶部分の深さは2.2mを測った。掘り方は石組み部分を広く掘り、桶部分は徐々に狭く掘っている。桶の下段では井戸側ぎりぎりの大きさである。

桶は3段積みで、上段・中段が上下逆、下段が正位置に据えられていた。各段の桶の法量は上段が高さ0.89m、口径0.93m、底径0.71m、中段が高さ0.80m、口径0.87m、底径0.73m、下段が高さ0.80m、口径0.82m、底径0.66mの大きさである。桶の箍は竹を捩じって口縁付近、中程、底付近の3段に留めている。桶の板材は上段から23枚・21枚・21枚を使用していた。桶の重ね部分は上段と中段が14cm、中段と下段が6cmであった。桶は上段・中段の桶がやや東側に傾き箍が切れて板材が内側に押されていた。

埋土は主として泥土でやはり上方には石組の石材が投げ込まれていた。出土遺物には木製品の曲物、下駄、杭、桶、金属製品の飾金などがある。

池1（挿図56）

建物2の南西隅に隣接する。しかし、全体に削平を受けているため遺構の残りは悪く、平面プランは明確ではない。検出された遺構は、南北に長い楕円形を呈する。規模は南北長3.64m、東西2.17m、深さ0.2mを測る。池の断面形状は低部を水平に、側壁は緩やかな傾斜で上がるものである。土壌内には10～20cm大の角礫が多く検出された。特に礫は土壌の西壁付近に集中する傾向があり、全域に及んでいないが、池底に敷かれていた可能性がある。

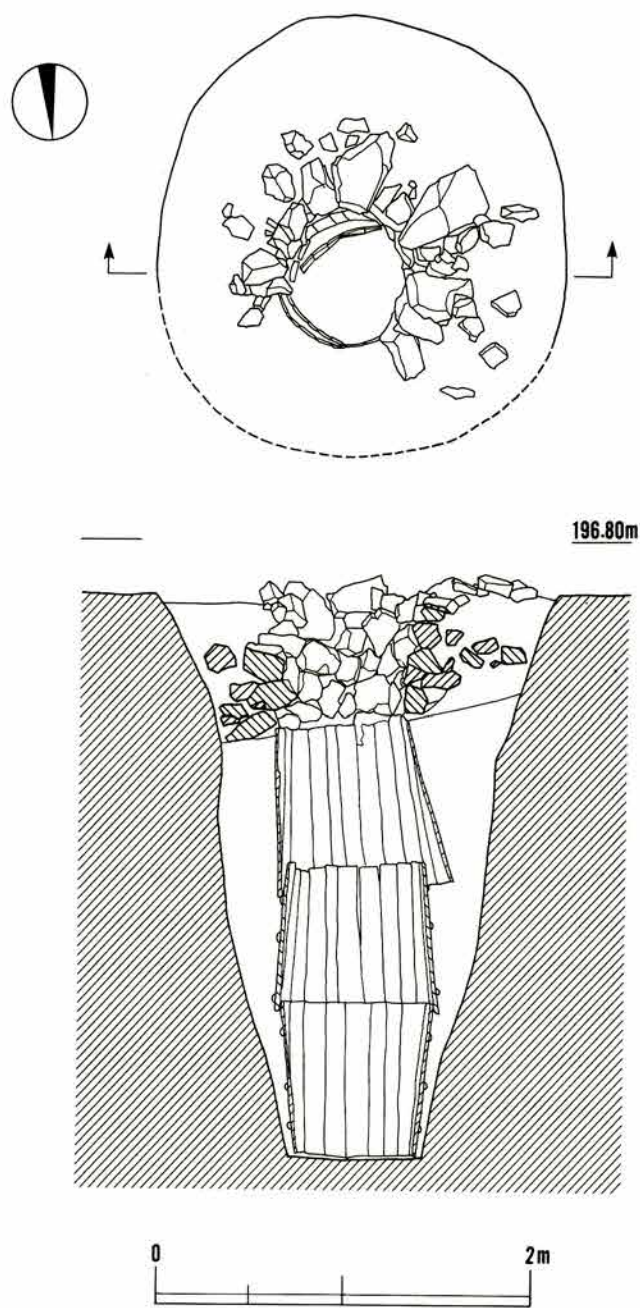
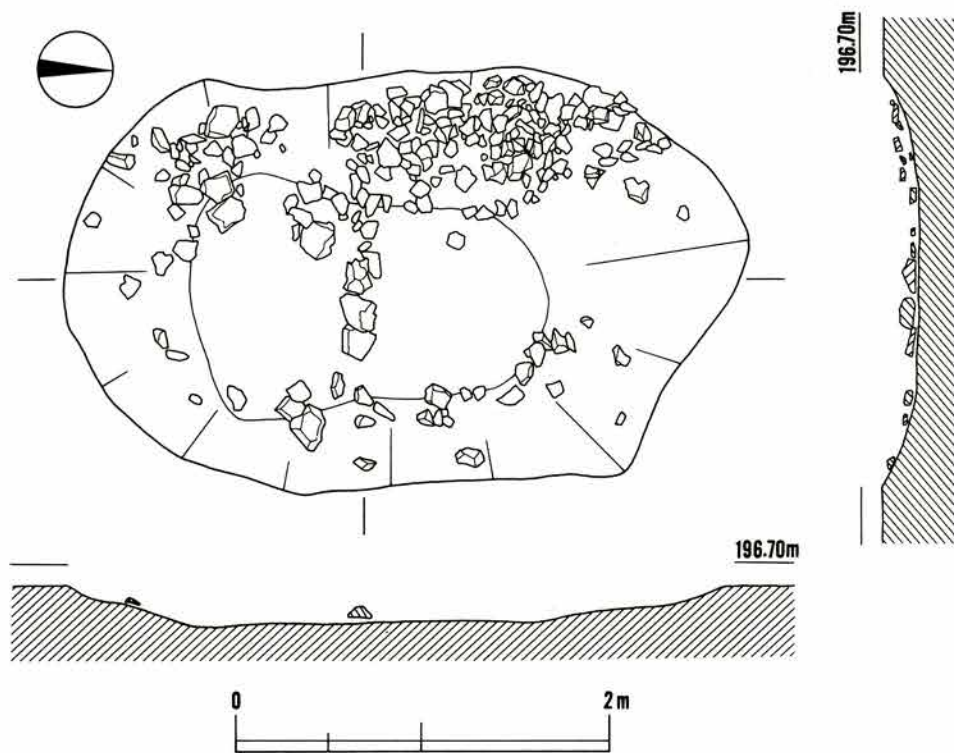


插图55 井戸 3



挿図56 池 1

埋土は褐色砂礫混り土で、出土遺物は少量であるが丹波焼片・土師器片などがある。

池 1 は溝 1・溝 3 に接しているが、切り合い関係は土層から明確にすることは出来なかった。しかし、埋土は何れも近似しており年代的に大差ないと考えられる。

池 2 (挿図57)

館の中央西寄りで検出された。検出された遺構の平面形は南北に長軸を持つ長方形を呈し、規模は長さ11.36m、幅4.8m、深さ0.16mを測る。しかし、瓦の粘土取りの土壌などによって南端は攪乱が著しいことや、全体に削平を受けているため遺構の平面プランは必ずしも正確ではない。

池の北端は数cmずつ高低差をもつ小規模な3段掘りになっている。池 1 同様、内部に直径10～20cm前後の礫を多量に出土した。これに混じって丹波焼片を中心とする遺物(図のドット部分)も多く出土している。礫は特に西側に集中するが、分布は北端を除いて、ほとんど全域に及んでいた。礫は殆ど池底に残るもので、池に敷いていた可能性が強い。

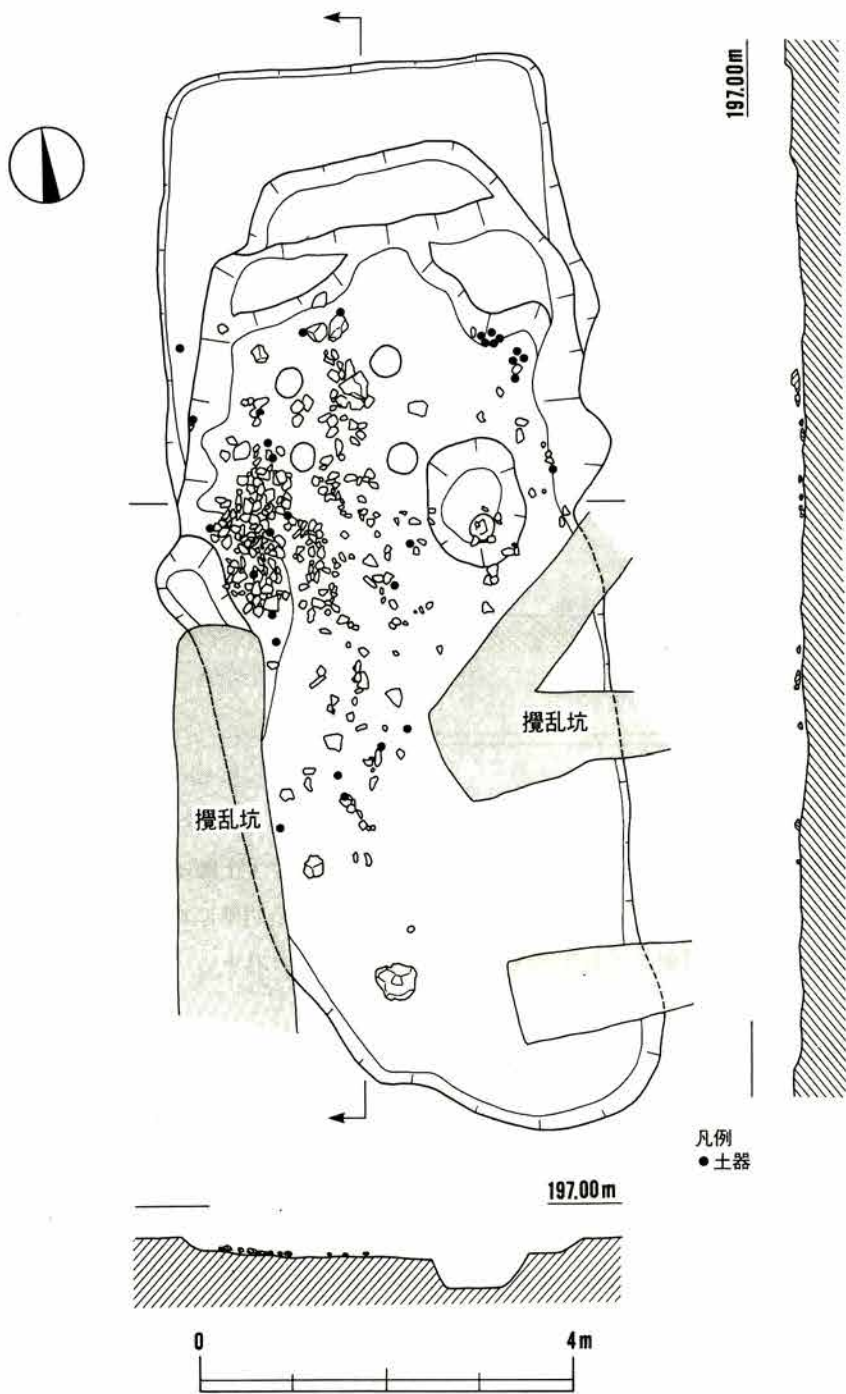


插图57 池 2

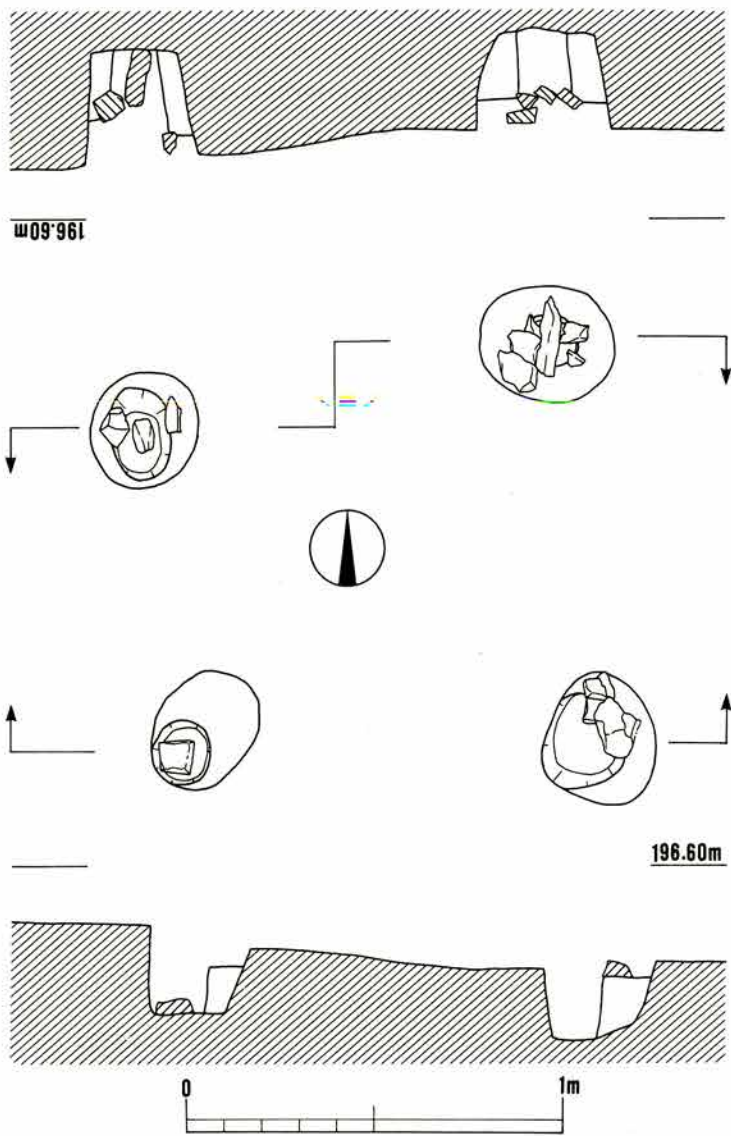


插图58 建物 3

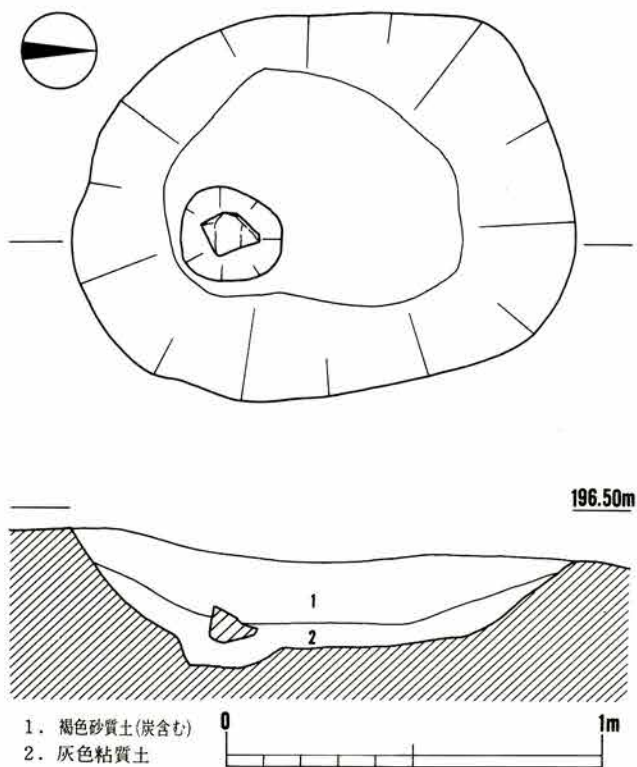
出土遺物は池底の石に混じって出土したものである。土師器皿、瀬戸・美濃焼碗、備前焼播鉢、丹波焼播鉢がある。この他、池の中からは建物3（挿図58）、土壌9が検出された。

建物3（挿図58）

建物3は1間×1間の建物である。東側・北側の柱間が1.0m、南側が1.0m、西側が0.85mとなりやや西側辺の柱間が歪になる建物である。柱穴は掘方0.3～0.35m、深さ0.3m前後である。北端隅の柱穴には柱材の芯が遺存していた。さらに南西隅の柱穴には根石が、他の柱穴には柱の基部を固定するために礫を据えていた。柱痕跡から柱の直径は15～20cm前後と考えられる。建物3は検出状況から池と同時期のものと思われ、池との関係から考えると池中の浮見堂のような建物であった可能性がある。

土壌9（挿図59）

池2の中に検出された。楕円形を呈する土壌で、長軸1.33m、短軸1.0m、深さ0.22mを測る。土壌底には柱穴が検出された。池との切り合いは不明であるが、検出状況から池に前後する遺



挿図59 土壌9

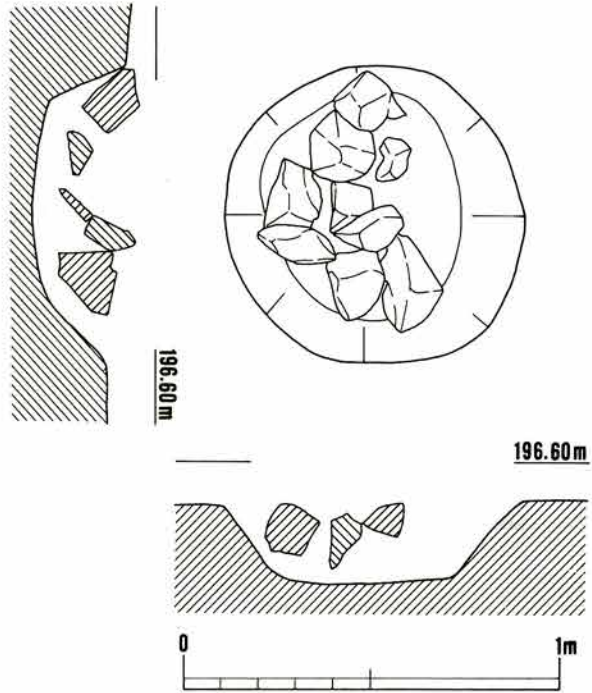
構と思われる。

土壌 8 (挿図60)

館の東堀寄りで見出された土壌である。平面は円形を呈し、中に10~20cm大の角礫が多く投げ込まれていた。

土壌の規模は直径80cm、深さ20cmの規模を計る。検出面のレベルは標高196.5m前後である。性格は不明であるが、規模や形状からゴミ捨て土壌とは考えられない。また壁の立ち上がりや、石の出土状況などから柱穴の可能性もないと思われる。

埋土や検出状況から室町時代の遺構と考えておく。遺物は土師器の細片が出土している。



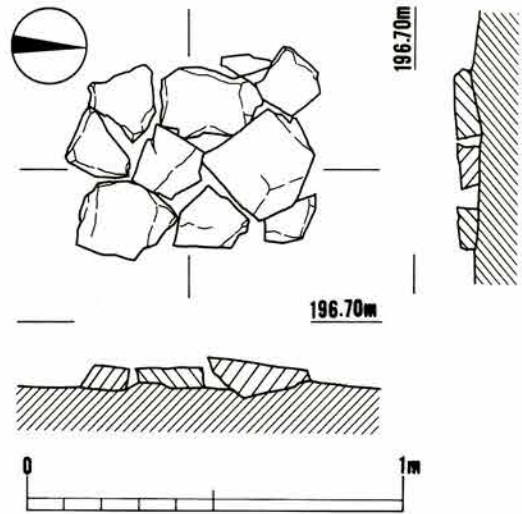
挿図60 土壌 8

石敷 (挿図61)

20cm前後の角礫を敷並べた遺構である。上面は標高196.60m前後の高さに揃えている。平面形状は南北に長い、長方形を呈するもので、規模は南北辺が0.66m、東西辺が0.52mである。

遺構は当時の地表面に敷かれていたものと思われる。

相伴遺物はないが花崗岩質の割り石を使用することから、同じような石を土壌や柱穴に多く使用している室町時代の遺構と考えた。しかし、小型堀に隣接しすぎることから同堀の機能した16世紀前半の時期、つまり土塁・堀囲いの館の時期より以前の遺構の可能性はある。遺構の性格は建物に付属する

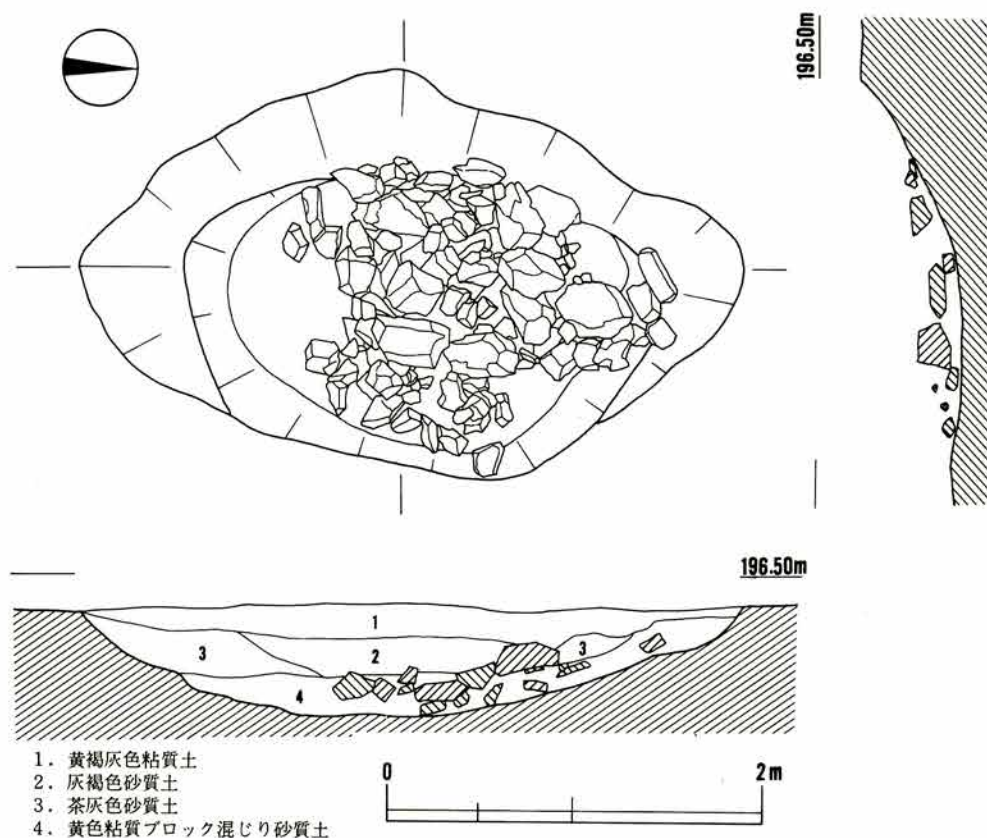


挿図61 石敷

沓脱石が考えられるが、結論付けることはできなかった。

土壌 7 (挿図62)

長軸 2 m、短軸 3.5 m、深さ 0.6 m を計る やや楕円形の 土壌 である。下層が 4 層 黄色 粘質 ブロック 混じり 砂質 土 で 埋まり、角礫 で 人為的に 埋めている。角礫 の 間に 丹波 焼甕、瀬戸・美濃 焼甕、瀬戸・美濃 焼 卸皿 が 出土 している。丹波 焼甕 は 稻荷 山 窯 産 の 口 縁 が N 字 状 の 名 残 り を と ども、一 条 沈 線 が ある (88)。瀬戸・美濃 焼 卸皿 は 灰 釉 が 掛 け ら れ、へ ら で 卸 目 を 付 け 片 口 を も つ (87)。い ず れ も 同 時 期 に 属 し 一 括 性 が あ り、室 町 時 代 前 半 の 遺 構 である。



挿図62 土壌 7

第5節 江戸時代の遺構

1. 概要

近世期以降の遺構は水田の畦境の杭・畑の畝溝・幡立基礎・粘土採掘土壌・便所などを検出した。

2. 遺構

畑と水田（挿図63）

館の南半分には畑の畝溝が検出された。検出された畝溝の範囲は溝4の内側に限られることから、溝4で区画された範囲が1枚の畑の範囲と考えられる。畝溝の間隔は5.5～4.5m、幅は0.3～0.9m、深さは0.15m前後を測る。路地栽培の畑の溝と考えられるが、通常の畑に比べ間隔が広いのが特徴である。この畑は粘土採掘穴と前後して耕作されており、このことから畝溝が掘られた時点では土塁が残っていたと思われ、時期は出土の遺物から江戸時代と考えられる。但し周囲の土塁が削られ始めた時期に、畑が耕作されたかどうかは不明である。なお、調査直前にはこの場所では芋の栽培が行われ、やはり畑として利用されていた。

館の周囲の堀は近世以降埋め立てられ水田として現在まで利用されている。これらの水田の内、東堀部分では、水田の筆境を画する杭列（図のドット部分）が検出された。この杭列は1列ではなく、少なくとも2列が観察できた。これらは東の列から西の列へ向けて移動したと思われるものである。当初館の東堀の斜面際に打たれたものが、水田が除々に館の内側を抉って進出したのにつれて、西側に移動して打ち直したと考えられる。

土壌（挿図63）

調査区内には多くの攪乱土壌が見られたが、これらは江戸時代以降の粘土採掘のために掘られたものである。土壌は瓦の粘土採掘穴である。長さが最大21mもある大型の長方形土壌と、直径1～1.5m程度で深さも0.5～0.6m程度の浅い土壌の2種類がある。大きいものは館の中に集中しており、小規模なものは溝4と堀の間（土塁の下）に集中していた。

小規模な土壌は土塁の破壊時に掘削されたもので古い時期のものとして推定される。館内に見られる大型の粘土採掘穴はその後のものである。畑耕作の合間に掘削されたと思われる。

溝4（挿図64）

館の南半分を巡る溝で南堀から東堀を経て入角の東辺に続く溝である。北端には溝は観察されないが、おそらく堀に沿って館の北端まで続いていたと思われる。溝の規模は幅0.8～1.2m、

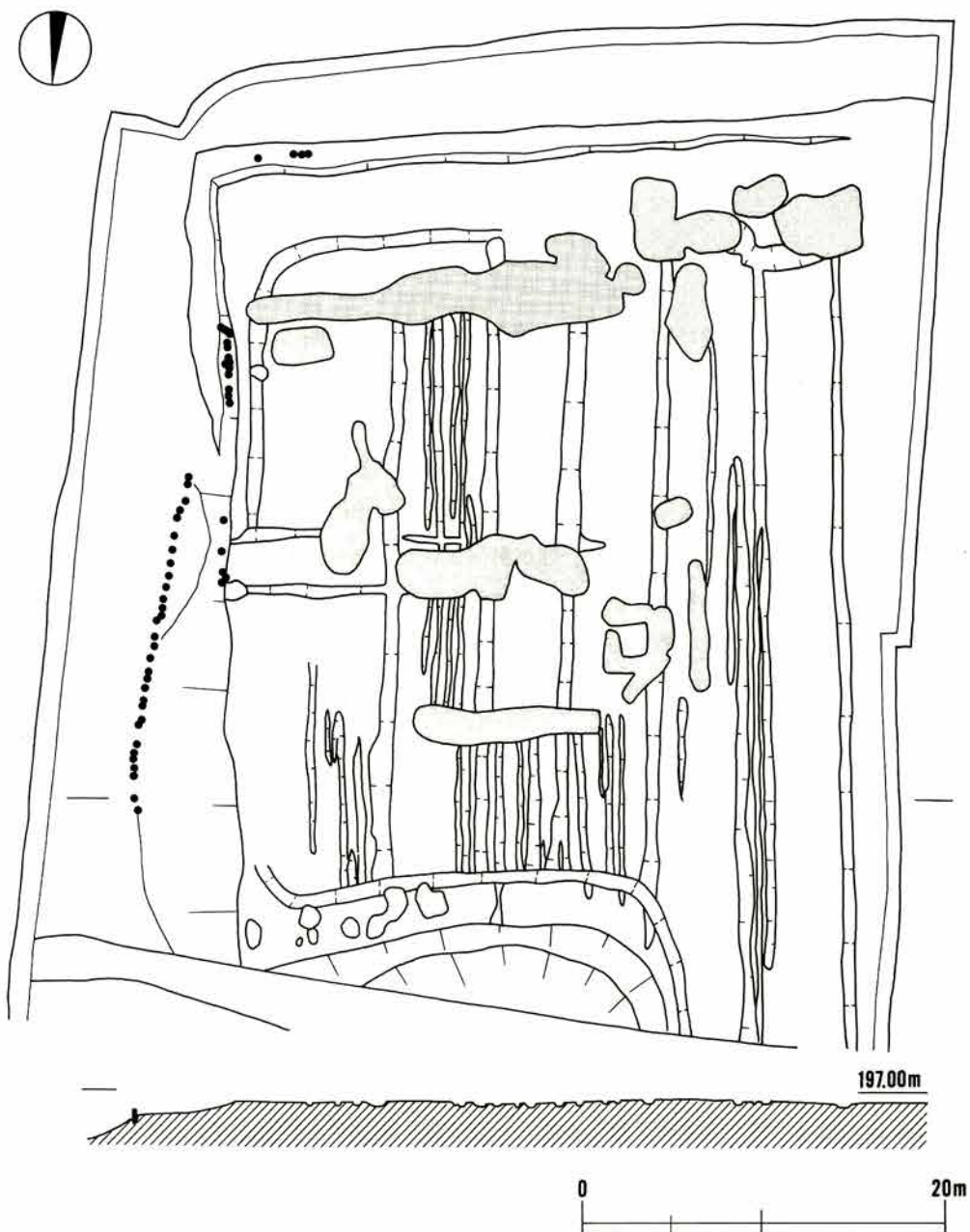
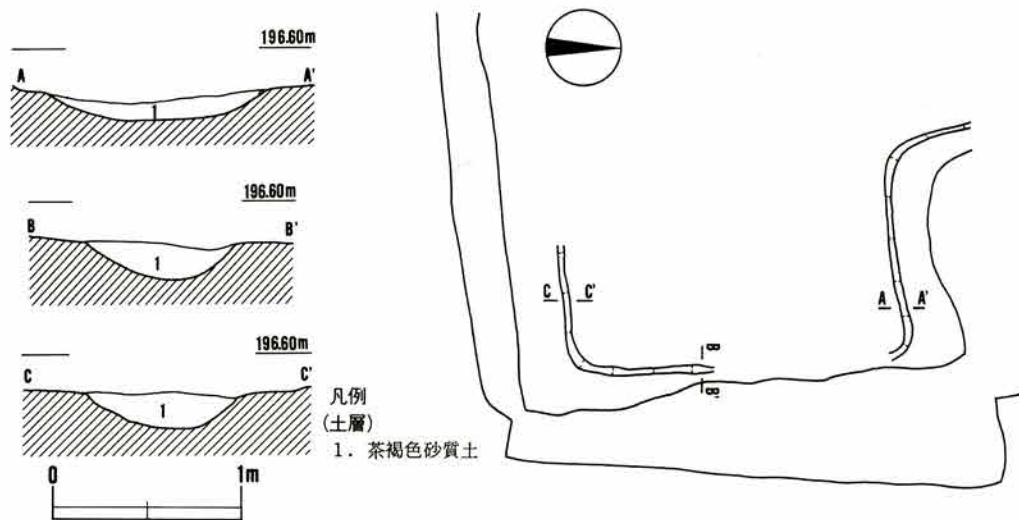


插图63 江戸時代遺構全体図



挿図64 溝4

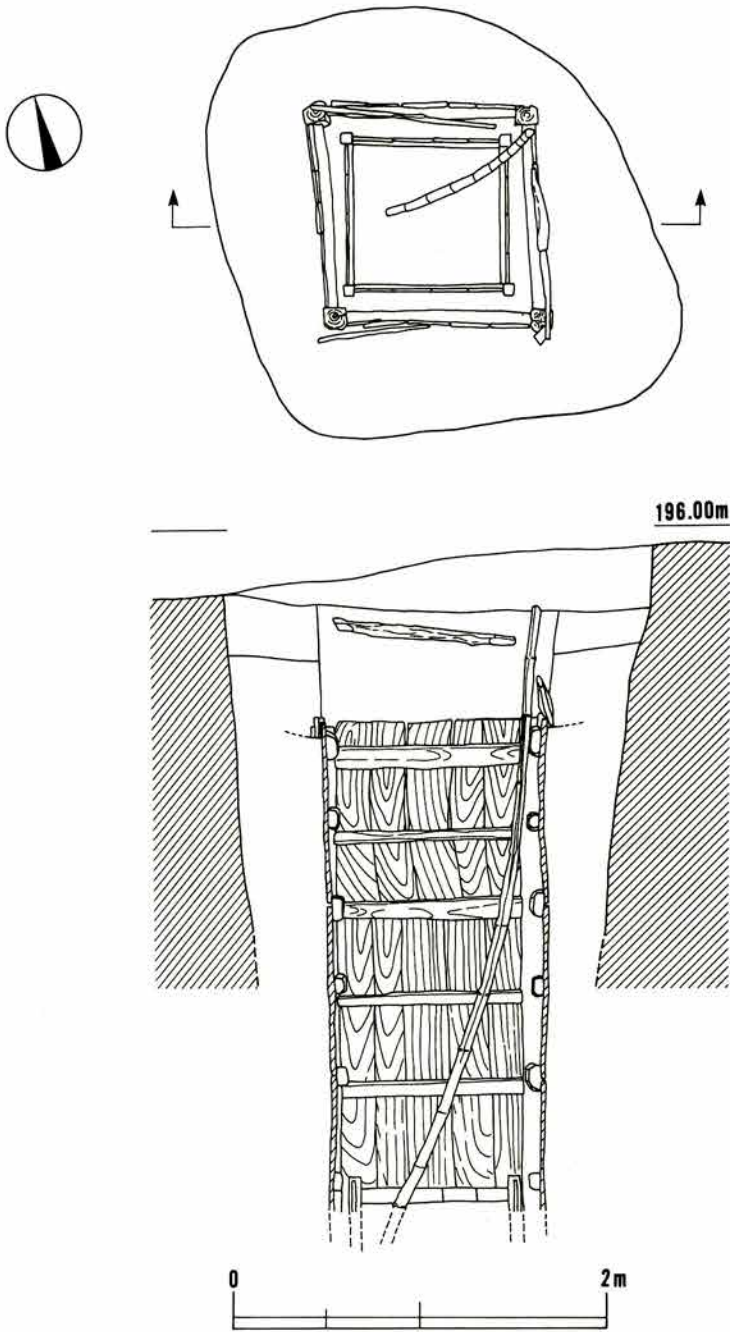
深さ0.15m前後である。検出面から江戸時代に耕作された畑の周囲に巡る溝と考えられる。この溝が巡るのは、館の内側4m前後のところ畑が耕作された当時は溝と堀の間には障害物(土塁)が存在したと思われる。また、この溝と堀の間には土壌7を除いて遺構は認められない。

井戸4 (挿図65)

調査区の北の端、北堀東隅の肩を切って検出された井戸である。掘り方はほぼ長方形のプランで、掘り方の最大長は2.3mである。井戸側は4隅の柱を横棧で留めて枠を組み、縦板で周囲を覆う構造のものである。この木組を、上下の2段以上重ねていた。但し、検出できたのは地表から約3.5m前後までである。2段目の下層は調査できなかった。1段目の井戸側は1辺1.2m、高さ2.6mで、隅柱は直径12cm前後である。隅柱に40~50cmごとの間隔をおいて、ほぞ穴を開けて横棧を通していった。側板は長さ90~100cm前後で、横棧3段分を覆い、1辺に5~6枚程度を用いている。2段目の木組は小さくなるが、同様の構造と考えられる。1辺0.9mで、側板は1辺につき4枚前後を使用している。

井戸を廃棄する段階で井戸鎮めを行ったと考えられ、井戸内に竹を差し込んでいた。この竹は3.2m以上の長さがあり、節にして10個を数えた。遺物は瓦片・瓶の蓋などがある。井戸掘削の時期は古くとも江戸時代以降であるが、廃絶の時期は、昭和の時代に下ると考えられる。

井戸は深さ2.5m前後掘った段階で湧水が激しく4インチのポンプで常時排水しなければ作業が進まないほどであった。調査の最終段階では下層の掘削を諦め重機によって井戸を半截した。しかし、北から南に向かって流れる地下水の水圧のために井戸側が耐えられず、下層の確



挿図65 井戸4

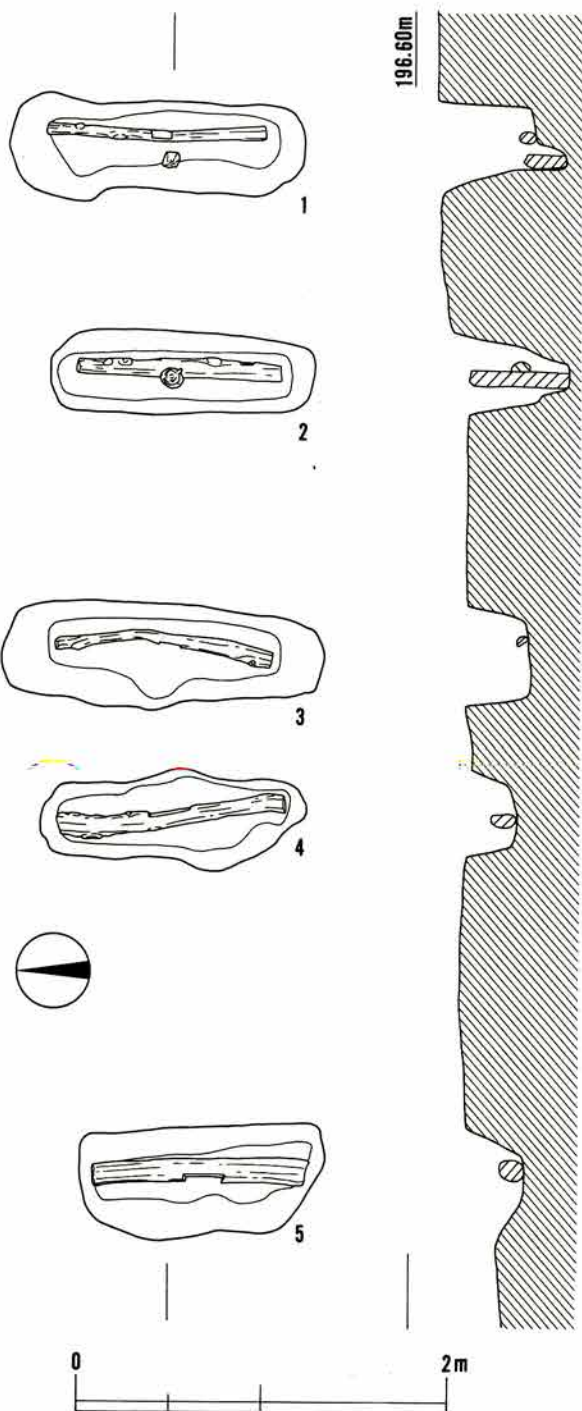
認を行えなかった。また下段の井戸側材や地鎮めの竹なども取り上げが出来なかった。この井戸は地元では「稲角の井戸」と呼ばれ水量の豊富なことで知られており、周囲の水田などの灌漑用として用いられていた。

幡立基礎（挿図66・67）

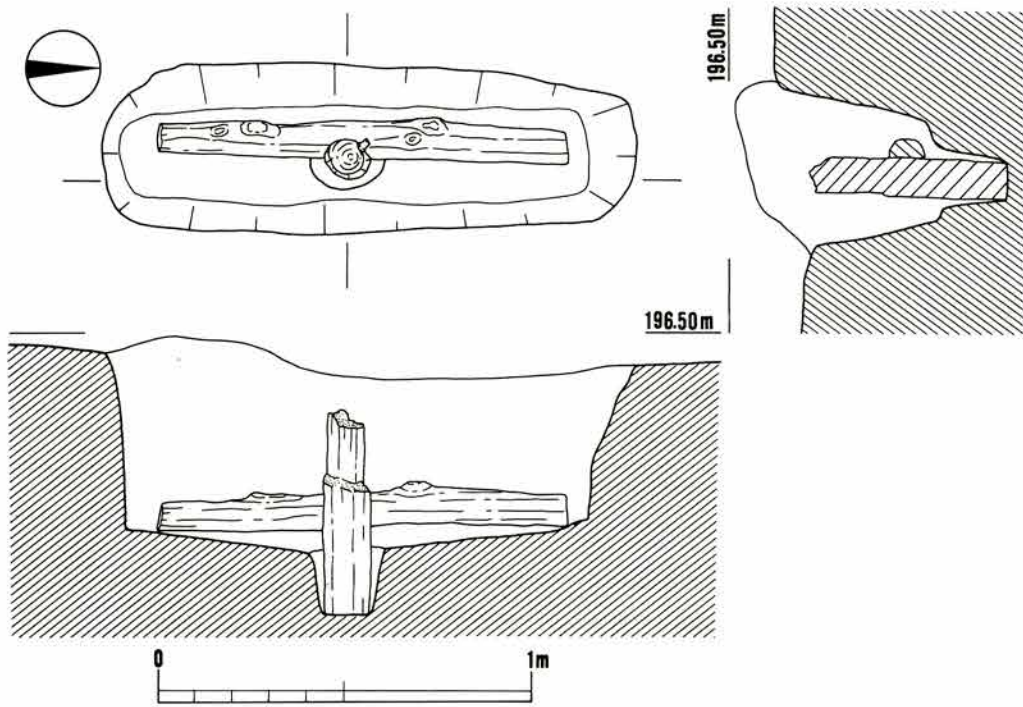
酒井神社境内の祠の東で、幡立ての芯柱基礎を検出した。芯柱基礎は5基あって、芯柱間での間隔は1.0~2.0mである。西側の4と5が広く、3と4の間隔が狭い。位置関係から観察すると1と2、3と4がそれぞれ1対となり、5が離れている。芯柱基礎は南北に長い隅円の長方形を呈し、典型的な2で規模は長さ1.45m、幅0.45m、深さ0.7mである。但し、深さは3・4・5が1・2より浅く0.35m前後である。また1と2は掘り方が2段になり幡立ての芯柱も良く残るため、規模の大きい幡を立てた可能性がある。丸太材は2で直径0.1m、長さ1.1mの大きさである。

便所（挿図68）

東堀の南寄りで検出された遺構である。直径0.44m、検出面からの深さ0.3mほどの掘り方に丹波焼の甕を据えている。土壌の上半と甕の胴部より上は削平のため失われていた。この甕の上には館の調査に入る直前まで家が建っており、この家で使用していた便甕の可能性はある。



挿図66 幡基礎土壌群



挿図67 幡立基礎土城 2

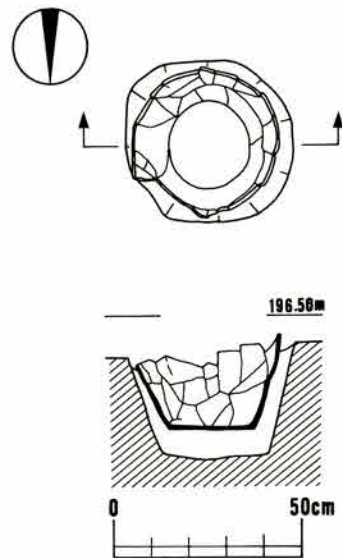
3. 小 結

江戸時代になると館の北側の一角には、酒井神社が建立され旧主酒井氏を顕彰して現在に至っている。他の部分についても早くから畑や宅地として利用が始まったようである。

さらに、当初土塁内側に限られた開墾や開発は、土塁にも及ぶようになった。最終的には粘土の採掘によって土塁は崩されたようである。その後、館内部でも畑の農閑期には粘土取りが大規模に行われた。

一方、周囲の水田耕作も積極的に進められ、東堀ではこの水田が序々に館内を切り崩している様子が窺えた。

また、館の南東隅には宅地が建てられるが、この宅地は丹波焼きの便壺の出土から確実に近世まで遡れることが確実である。これらの開発の記録から、人々のたゆまぬ開墾の歴史を知ることができたことは意義が大きい。



挿図68 便所

第5章 遺物

第1節 遺物の出土状況

初田館跡は安土・桃山時代、天正年間の酒井勘四郎の館という『丹波志』などの記載と、兵庫県教育委員会が実施した分布調査において瓦器片、丹波焼片の採集、そして、第1次調査のトレンチからの瓦器碗完形品の出土などから、鎌倉～桃山時代にかけての遺物の出土が予測された。前述の通り、遺跡と路線との関わりでの十分な調査がなされたわけではないが、予測を越えて古墳時代から江戸時代までの各遺構に伴う遺物が出土している。

古墳時代の遺物は住居跡に伴う土器（須恵器・土師器）、石製品（砥石）、土製品（土錘）がある。上層の遺構の調査時に土層断面観察から遺物・遺構の広がり限定している。

平安～鎌倉時代の遺物は井戸1、墓、柱穴等の遺構と室町時代の館堀の下層や旧河道から多くの遺物が出土している。土器（須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・輸入陶磁器）、石製品（砥石・石包丁形石製品）、土製品（土錘）、木製品、金属製品（鉄製品・銅製品）等が出土している。その多くは旧河道から出土している。木製品の中には井戸の呪符木簡が4点と祭祀具が多く、須恵器の中には「僧義」の墨書と多くの転用硯、瓦器の中には「米光」、「○」の墨書、金属製品の中には刀装具が出土しているなど特出できるものがある。

旧河道の土層堆積は厚く、平安時代前期に遡る遺物から鎌倉時代後半に下る遺物まで幅広く、遺物のドットマップを土層堆積と検討して遺物組成を復原している。

室町時代の遺物は予想されたものより古く16世紀前半に位置する遺物が多く、天正年間に下る遺物は少ない。館の遺構、堀・小型堀・井戸・池・建物・柵等に伴う遺物がある。土器（土師器、丹波焼、備前焼、瀬戸美濃焼・輸入陶磁器）、石製品（砥石）、木製品、金属製品（鉄製品・銅製品等）等がある。土器の中に墨書があるが釈読はできていない。木製品の中に（転読）御札があり、戦に伴う「武運長久」の祈願が読める。金属製品の中には鉄鏃など武器と五徳など日常の遺物も混じる。

江戸時代の遺物は井戸4・便所や畑・水田の包含層から多く出土しているが、今回は多くは報告していない。

また、木製品の樹種同定・炭化材の樹種同定・種実の同定から各時代の植生の復原や選材についても検討している。

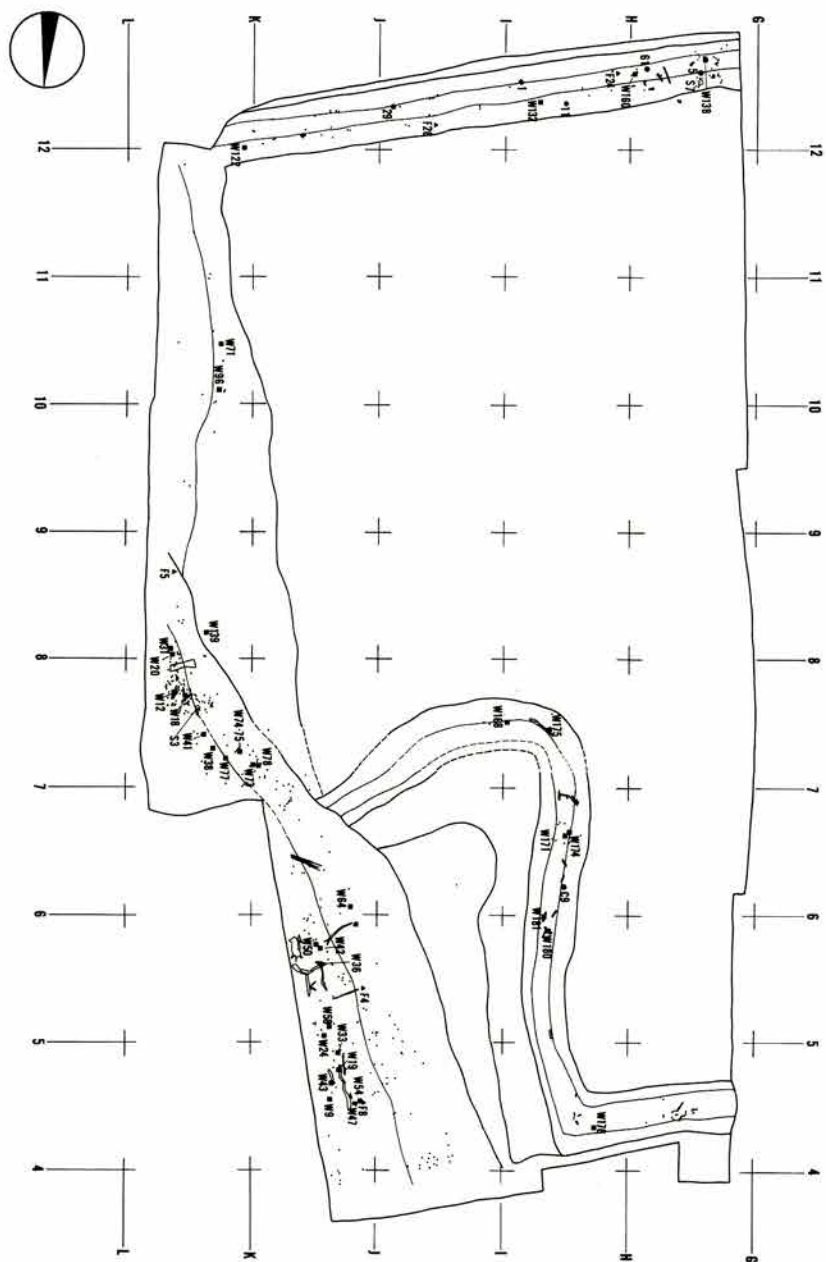


插图69 堀・旧河道遺物分布状況

第2節 古墳時代の遺物

1. 出土状況

古墳時代の遺物は竪穴住居址・土壇などの遺構と、遺構の集中する調査区南西寄りに広がる包含層から出土したものが大半である。一部旧河道の中から出土したのものも含まれる。

出土遺物には須恵器・土師器・土製品・石製品がある。記述は竪穴住居址1～4・土壇、そして包含層の順に述べることとする。

2. 土器

(1) 竪穴住居址1・2

既に述べたとおり、2棟の住居址の遺物を分けることが、困難なため、一括して報告する。出土遺物には須恵器（杯蓋・杯身）、土師器（杯・壺）、土錘、砥石がある。

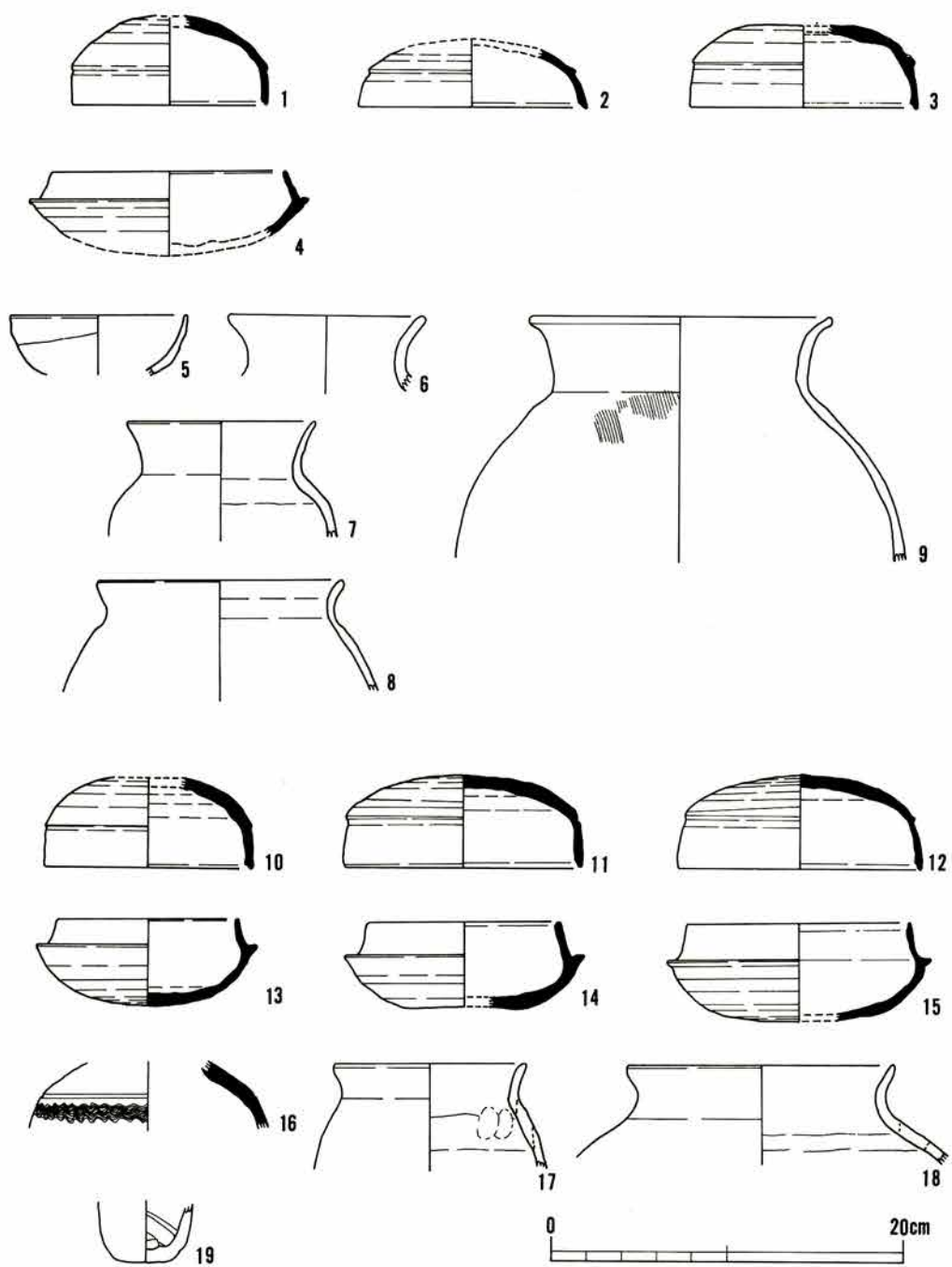
須恵器は杯蓋（1～3）、杯身（4）がある。蓋はいずれも口縁部と天井部の境に稜を持ち直下は沈線状ないしは段状になるものである。口径10.9～13.0cm、器高4.5～4.9cmを測る。1は天井が膨らみ、1/3程度の幅の狭いケズリ調整が見られ、口縁の内面に沈線を施す。2は口縁部がやや外方に直線的に広がる。口縁端部は沈線が退化しているが僅かに残る。3は天井部全体をケズリ調整するもので、口縁内面には沈線が観察できる。杯身は口径13.1cmのもので、大型化している。口縁端部に沈線は無く、立ち上がりは内傾しながら直線的に立ち上がる。外面底部は受けの直下までケズリ調整を施している。

土師器は杯（5）、甕（6～9）がある。いずれも残りが悪く、9で外面に刷毛目の痕跡を観察する以外は調整は不明である。6は口縁部のみの破片で、口径9.9cmと小型である。頸部の中程から外反して端部を丸くおさめる。7は肩部まで図化できたが、口径10.6cmとやはり小さい。口縁部は頸部から直線的に外方へ立ち上がるもので、肩・胴部とも直線的な器形をなす。8・9はどちらも胴部上半部分のみの破片である。口径はそれぞれ13.6cm・16.7cmである。

(2) 竪穴住居址3

遺物には須恵器（杯蓋・杯身・壺）、土師器（壺・小壺）、土錘、砥石がある。

須恵器は杯蓋（10～13）、杯身（13～15）がある。蓋はいずれも口縁部と天井部の境に稜を持つものである。口径11.6～13.6cm、器高5.1～5.3cmを測る。10は天井部が膨らみ3/4程度に幅の狭いケズリ調整が見られ、口縁の端部に沈線を施す。11もほぼ同様であるが天井部が平坦である。12は天井部がやや膨らむ。



挿図70 古墳時代土器（1） 竪穴住居址1～3

壺(16)は肩部の破片である。最大直径12.6cm、1条の沈線と8本単位の波状文を施す。

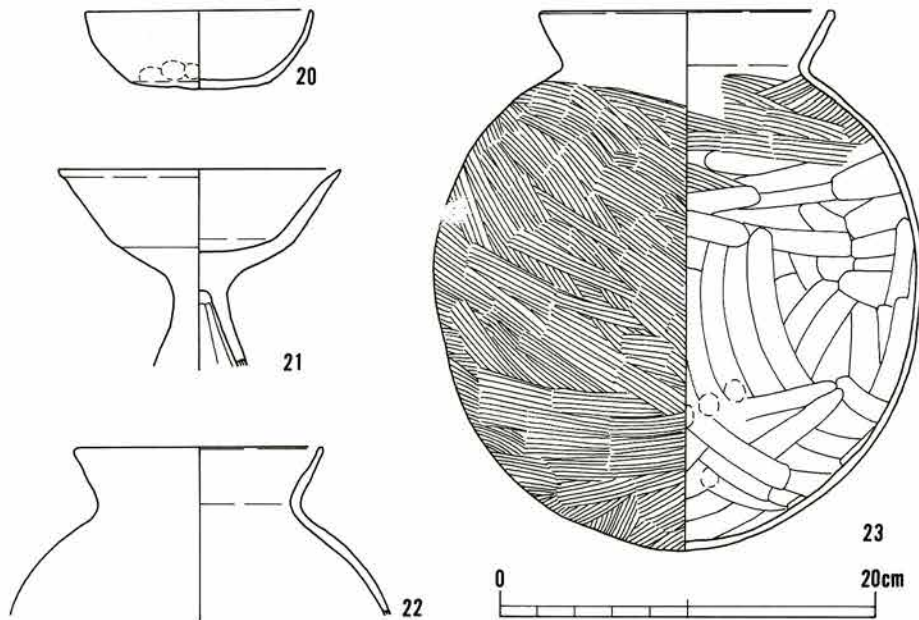
土師器は壺(17・18)と小壺(19)がある。17は口径10.8cm、18は口径14.9cmである。磨滅の激しい破片である。内面の粘土紐の接合痕跡と指頭痕跡がわずかに観察される。小壺(19)は手づくねの製品で内面に縦方向の指ナデ痕跡を残す。

(3) 竪穴住居址4

出土した遺物の大半が土師器であるためか、図化できた遺物は全て土師器である。器種には杯・高杯・壺がある。杯(20)は口径11.8cm、底部から体部にかけて直線的に立ち上がり、底部には指頭痕跡を残す。高杯(21)は杯部の口径が14.9cm、残存高が10.3cmである。杯部は体部と底部の境が明瞭に屈曲するものである。

甕(22)は口径13.0cm、口縁部をやや外に彎曲しながら直立させるものである。

甕(23)は土壌出土遺物である。口径15.2cm、器高28.4cmを測る。丸く大きな胴部を持ち、口縁部を外方に開きながら直立させるものである。外面はハケ目調整、内面は全体的にナデ調整を施すが、頸部直下の一部にハケ目調整が見られる。



挿図71 古墳時代土器(2) 竪穴住居址4

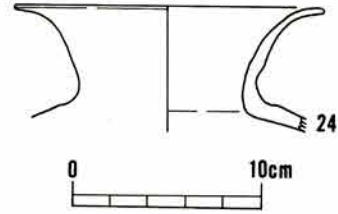
(4) 土壙

土師器壺(24)は口径16.2cmの口縁部片である。斜め上方に立ち上がり口縁端部でさらに屈曲する。

(5) 包含層

須恵器には蓋杯・壺・小壺・器台・甕、土師器には高杯・壺などがある。これに混じって他に、弥生土器も1点出土している。

杯蓋(25~30)は口縁部と天井部の境に稜を持ち、直下は沈線状ないしは段状になるものが多い。口径11.8~14.8cm、器高4.8~5.8cmを測る。28は天井部が膨らみ、口縁部の内面に



挿図72 古墳時代土器(3) 土壇1

沈線を施す。29は口縁部が丸く内傾し、口縁端部は面を持つ。30は口径14.8cmと大型化するもので、稜は退化して天井部と口縁部の境はナデでかく区画している。口縁端部は丸く面を持つ。

杯身(31~38)は口縁端部に沈線を持つ(31~34)ものと、面になる(36~38)ものがある。前者は口径10.6~11.0cm、器高3.1cm前後と小型のものである。後者は、口径12.7~14.0cm、器高4.8~5.5cm前後で大型の口径をもつ。底部外面のケズリは施す範囲が底部周辺に限られるものも見られる。35は立ち上がりが残存していないが、口径が小さく薄手で丁寧な作りであることから前者のグループに入る可能性がある。

高杯(39・45) 39は天井部に偏平なつまみを持つもので、口縁部は残っていない。有蓋高杯の蓋と考えられる。45は無蓋の高杯である。口径24.7cm、2条の稜を施し、破片の下端には波状紋を施していた痕跡が観察できる。

壺(40)は口縁部のみの破片である。口径10.9cmで、口縁部直下に1条の凹線と5条1単位の波状文を施す。薄手で丁寧な作りである。色調は暗紫色で器肉は深層が赤褐色を呈する。

小壺(42・43)は何れも底部を静止ヘラケズリ調整するものである。42は口径7.0cm、器高5.7cmで、底部は静止ヘラケズリで仕上げるもので、肩は軽く張るもので、口縁部はやや広く開く。44は壺の口縁部片である。口径21.0cm、口縁端部は外反しながら尖らせておわる。口縁部の外面直下に突帯を貼り付ける。

46・47・48は甕である。46・47は胴部の破片である。外面にいわゆる車輪紋が施されている。2重円に8分割する分割線を放射状に入れるもので、同一個体の可能性がある。48は口径20.1cmの甕で口縁部は端部を角張って終わらせ、内面に軽い窪みができる程度のナデを施している。口縁部外面の直下には貼付突帯が付く。外面は平行タタキ、内面は調整をナデ消している。

土師器はやはり残りが悪いものが多い。49は弥生土器の底部片である。内面にハケ目調整を施すもので、底部は中央がやや上げ底になり、高台状になる。

50・51は高杯である。いずれも脚部の破片である。52は器台と考えられる。杯部が短く直線的になるものである。53~57は甕である。口径12.7~23.1cm前後である。ただし、55は口径11.5cmと小さいが、復元のためやや疑問も残る。54は外面にハケ目、内面はナデ調整を施し、さらに内面には粘土紐の接合痕跡がよく残るものである。57では内面にハケ目が若干観察される。

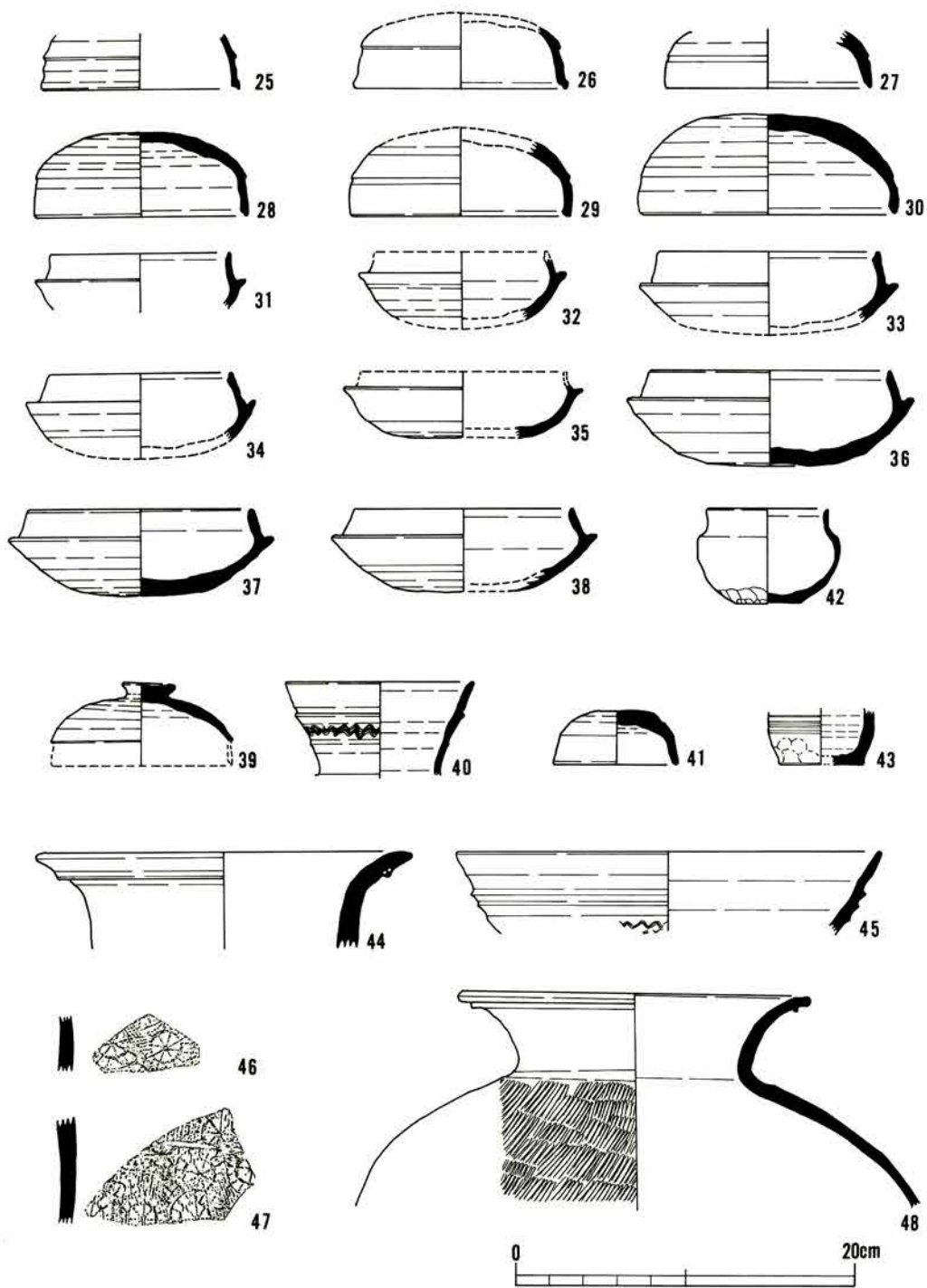
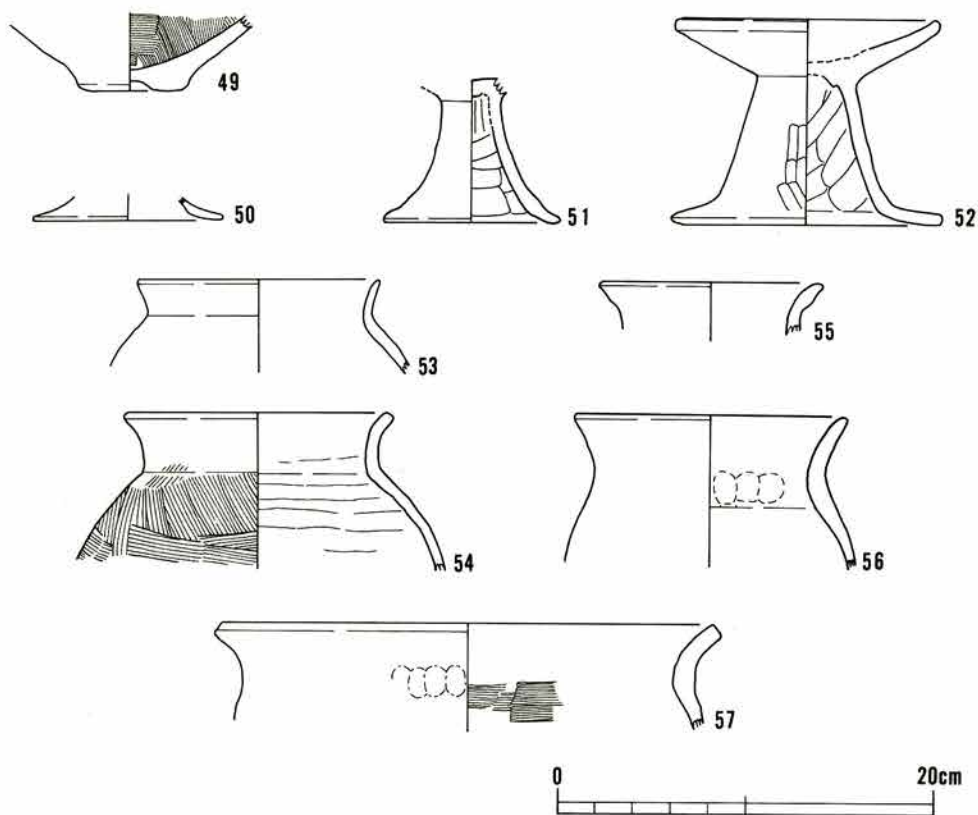


插图73 古墳時代土器（4）包含層（1）



挿図74 古墳時代土器（5） 包含層（2）

3. 土製品

山間部の集落の割には多くの土錘が出土した。全て竪穴住居址3からの出土である。いずれも、棒状のもので中空になるタイプである。前後が折れて欠けるものが多い。長さ3.1~6.1cm、幅1.3~1.9cm程度の大きさである。紐穴の直径は0.6~0.7cm前後である。

4. 石製品

石製品には砥石がある。2点あるが竪穴住居址1・2のどちらかから出土した。1は表と両側面を擦り面として使用している。残存長15.4cm、最大幅8.7cmを測る。2は4面が使用されているが、中程で折れている。大きさは残存長10.8cm、最大幅6.1cmである。使用の激しさから中程の擦り減り方が著しい。材質は両者とも砂岩である。

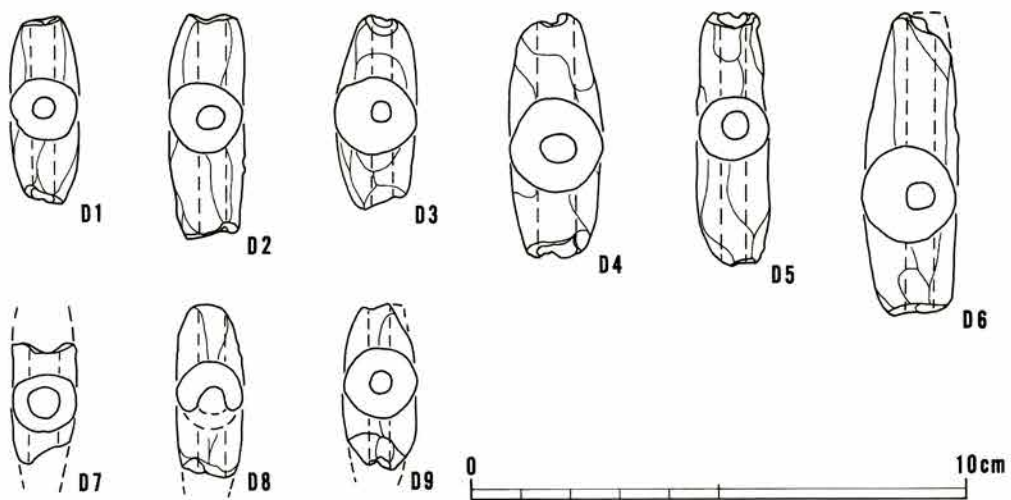


插图75 古墳時代土製品 竪穴住居址 3

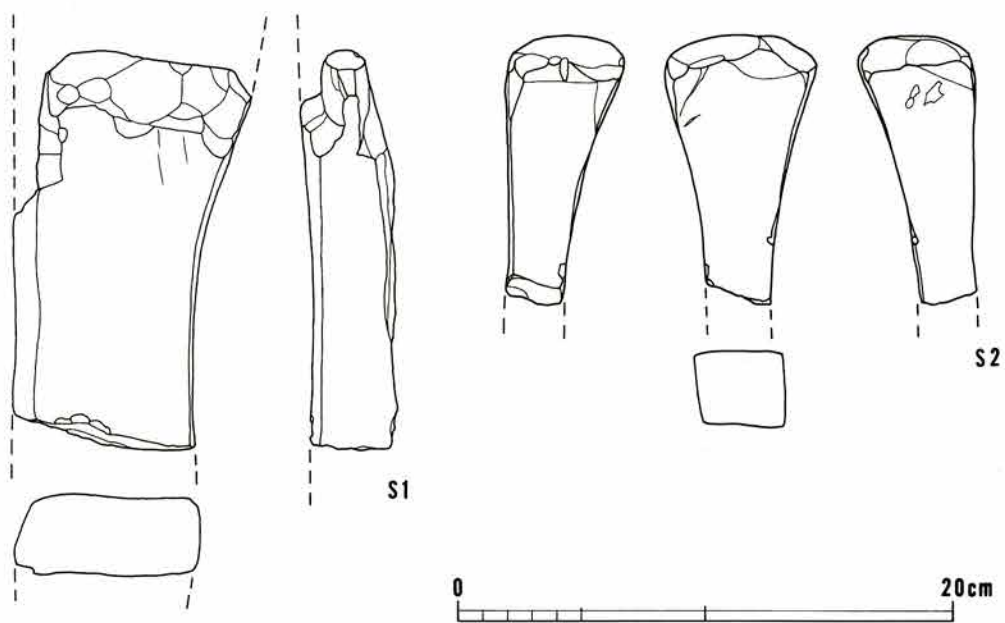


插图76 古墳時代石製品 竪穴住居址 1・2

表5 古墳時代遺物観察表(1) 土器(1)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
1	須恵器	杯蓋	10.9	4.9	—	3/12	天井外面回転ヘラケズリ 住居址1.2
2	須恵器	杯蓋	13.0	—	—	2/12	天井外面回転ヘラケズリ 住居址1.2
3	須恵器	杯蓋	12.6	4.5	—	6/12	天井外面回転ヘラケズリ 住居址1.2
4	須恵器	杯身	13.1	—	—	2/12	底部回転ヘラケズリ 住居址1.2
5	土師器	杯身	9.8	—	—	5/12	住居址1.2
6	土師器	甕	10.8	—	—	1/12	住居址1.2
7	土師器	甕	10.6	—	—	7/12	内面粘土紐接合痕跡 住居址1.2
8	土師器	甕	13.6	—	—	4/12	住居址1.2
9	土師器	甕	16.7	—	—	4/12	外面刷毛目調整 住居址1.2
10	須恵器	杯蓋	11.6	5.0	—	5/12	天井外面回転ヘラケズリ 住居址3
11	須恵器	杯蓋	13.3	5.1	—	10/12	天井外面回転ヘラケズリ 住居址3
12	須恵器	杯蓋	13.6	5.3	—	11/12	天井外面回転ヘラケズリ 住居址3
13	須恵器	杯身	10.1	4.8	—	12/12	底部回転ヘラケズリ 住居址3
14	須恵器	杯身	10.8	4.8	—	4/12	底部回転ヘラケズリ 住居址3
15	須恵器	杯身	12.4	5.4	—	8/12	底部回転ヘラケズリ 住居址3
16	須恵器	壺	—	—	—	1/12	肩部1条沈線・波条文 住居址3
17	土師器	甕	10.8	—	—	1/12	内面粘土紐接合痕跡 住居址3
18	土師器	甕	14.9	—	—	3/12	内面粘土紐接合痕跡 住居址3
19	土師器	小壺	—	—	—	1/12	内面指ナデ痕跡 住居址3
20	土師器	杯	11.8	4.1	6.0	4/12	内外面横ナデ・底部指頭痕跡 住居址4
21	土師器	高坏	14.9	—	—	3/12	住居址4
22	土師器	甕	13.0	—	—	4/12	住居址4
23	土師器	甕	15.2	28.4	—	12/12	外面ハケ目・内面不定方向ナデ 住居址4
24	土師器	甕	16.2	—	—	6/12	住居址4 土壌1
25	須恵器	杯蓋	11.8	—	—	2/12	
26	須恵器	杯蓋	12.7	—	—	5/12	
27	須恵器	杯蓋	11.9	—	—	1/12	
28	須恵器	杯蓋	12.4	4.8	—	8/12	天井外面回転ヘラケズリ
29	須恵器	杯蓋	12.6	—	—	4/12	天井外面回転ヘラケズリ
30	須恵器	杯蓋	14.8	5.8	—	11/12	天井外面回転ヘラケズリ
31	須恵器	杯身	10.6	—	—	3/12	
32	須恵器	杯身	—	—	—	2/12	底部回転ヘラケズリ
33	須恵器	杯身	12.7	—	—	6/12	底部回転ヘラケズリ
34	須恵器	杯身	11.0	—	—	5/12	底部回転ヘラケズリ
35	須恵器	杯身	—	—	—	1/12	底部回転ヘラケズリ
36	須恵器	杯身	14.0	5.5	—	10/12	底部回転ヘラケズリ
37	須恵器	杯身	13.0	5.0	—	11/12	底部回転ヘラケズリ
38	須恵器	杯身	12.7	4.8	—	6/12	底部回転ヘラケズリ
39	須恵器	壺蓋	—	—	—	3/12	天井外面回転ヘラケズリ、つまみ

表5 古墳時代遺物観察表(2) 土器(2)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
40	須恵器	壺	10.9	—	—	2/12	肩部に1条突帯、波条文を施す
41	須恵器	壺蓋	7.2	3.1	—	6/12	天井外面回転ヘラケズリ
42	須恵器	小壺	7.0	5.7	3.8	2/12	底部回転ヘラケズリ
43	須恵器	甕	—	—	5.1	5/12	底部周辺静止ヘラケズリ
44	須恵器	甕	21.0	—	—	1/12	口縁下に突帯貼り付け
45	須恵器	器台	24.7	—	—	7/12	外面突帯貼り付け・波条文
46	須恵器	甕	—	—	—	1/12	車輪文
47	須恵器	甕	—	—	—	1/12	車輪文
48	須恵器	甕	20.1	—	—	1/12	平行タタキ・口縁下に突帯
49	土師器	甕	—	—	—	1/12	弥生土器
50	土師器	高坏	13.6	5.3	—	1/12	脚内面に縦方向のナデ調整
51	土師器	高坏	10.1	4.8	—	2/12	脚内面に縦方向のナデ調整
52	土師器	器台	10.8	4.8	—	4/12	脚内面に縦方向のナデ調整
53	土師器	甕	12.7	5.4	—	2/12	
54	土師器	甕	13.7	—	—	1/12	外面ハケ目調整
55	土師器	甕	11.5	—	—	1/12	
56	土師器	甕	14.2	—	—	3/12	
57	土師器	甕	?	—	—	1/12	外面指頭痕跡・内面ハケ目調整

表5 古墳時代遺物観察表(3) 土製品

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	幅	穴径		
D1	土師器	土錘	3.9	1.8	0.5	10/12	棒状土錘 住居址3
D2	土師器	土錘	4.6	1.5	0.6	9/12	棒状土錘 住居址3
D3	土師器	土錘	3.9	1.6	0.4	10/12	棒状土錘 住居址3
D4	土師器	土錘	4.9	1.9	0.8	8/12	棒状土錘 住居址3
D5	土師器	土錘	5.1	1.4	0.6	9/12	棒状土錘 住居址3
D6	土師器	土錘	6.1	1.9	0.5	8/12	棒状土錘 住居址3
D7	土師器	土錘	—	1.3	0.7	5/12	棒状土錘 住居址3
D8	土師器	土錘	3.5	1.3	—	6/12	棒状土錘 住居址3
D9	土師器	土錘	3.3	1.5	0.5	7/12	棒状土錘 住居址3

表5 古墳時代遺物観察表(4) 石製品

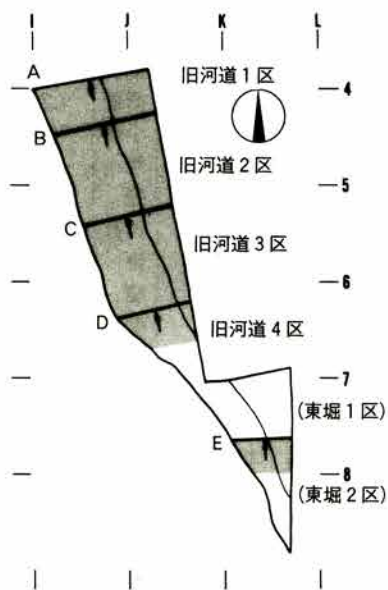
遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	幅	厚さ		
S1	石製品	砥石	15.4	8.7	3.1	6/12	2面に使用痕跡 住居址1.2
S2	石製品	砥石	10.8	6.1	4.5	6/12	4面に使用痕跡 住居址1.2

第3節 平安時代～鎌倉時代の遺物

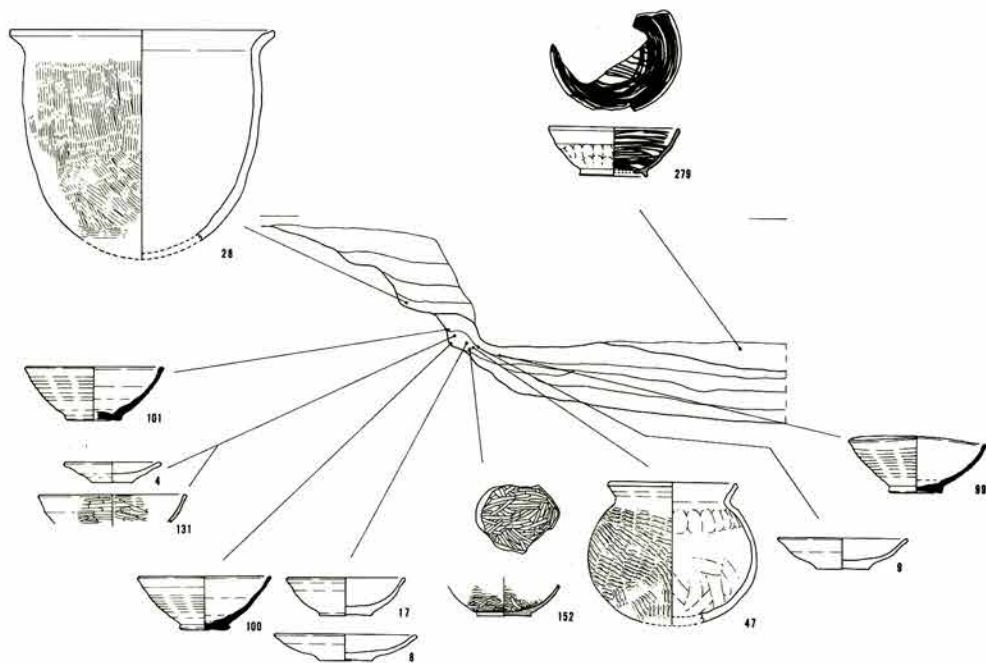
1. 出土状況（挿図77～挿図82）

旧河道出土の土器が中心をなすが、他に井戸・墓・柱穴・土壇・溝からもわずかながら出土している。このため、当節で対象とする遺物は旧河道出土のものが中心となる。

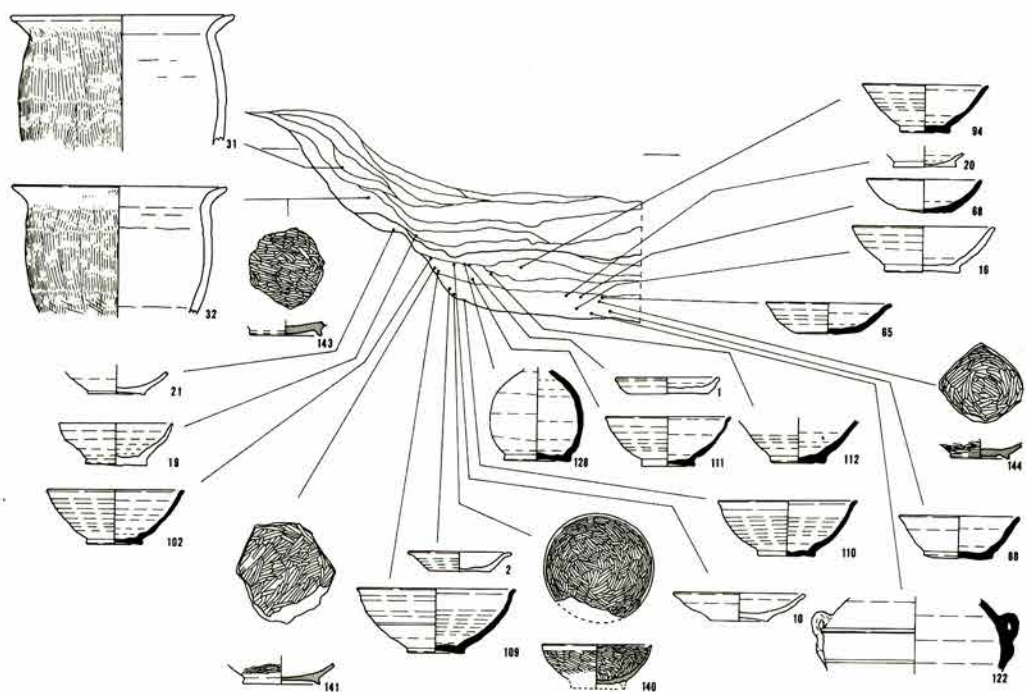
ところで、旧河道の調査にあたっては、基本的には各遺物について層ごとに取り上げていった。また主な遺物については、平面的な位置と出土層位およびそのレベルを記録し、取り上げていった。そして、この記録をもとに、各地区ごとに遺物の出土位置を土層断面図に投影させたのが、挿図78～挿図82である。断面Aと断面Bの間出土遺物を断面Aに、断面Bと断面Cの間出土遺物を断面Bに、断面Cと断面Dの間出土遺物を断面Cに、



挿図77 旧河道セクション位置図



挿図78 断面A



挿図79 断面B

断面Dと断面Eの間の断面D側半分出土遺物を断面Dに、断面Eの南側出土遺物を断面Eに、それぞれ投影させたものである。

この図をみてもわかるように、一つの層を境に明確にその内容が変化するという状況は認められない。ただし大きな傾向としては、下層ほど古い様相の土器が出土していることは少なくとも言えそうである。

以上のような土器の出土状況から判断して、他の土製品・石製品・木製品についても、より時代を特定することは困難と考えられる。そこで、これらの遺物についても、平安時代と鎌倉時代を分けずに報告することにする。

ただし土器については、便宜上、瓦器出現以降の土器については平安～鎌倉時代の土器として、それ以前、つまり黒色土器が伴う時期を平安時代として報告していくことにする。他の土器・須恵器などについては、あくまでも、出土層位を中心に瓦器を伴う層から出土したものと、黒色土器を伴う層から出土したものとに分類した。また、出土層位のみでは瓦器と黒色土器との共伴例としてやや疑問のあるものについては、他の遺跡の共伴例をもとに、瓦器に伴うものと黒色土器にともなうものといった基準で2者に分類した。このため両時代の境について

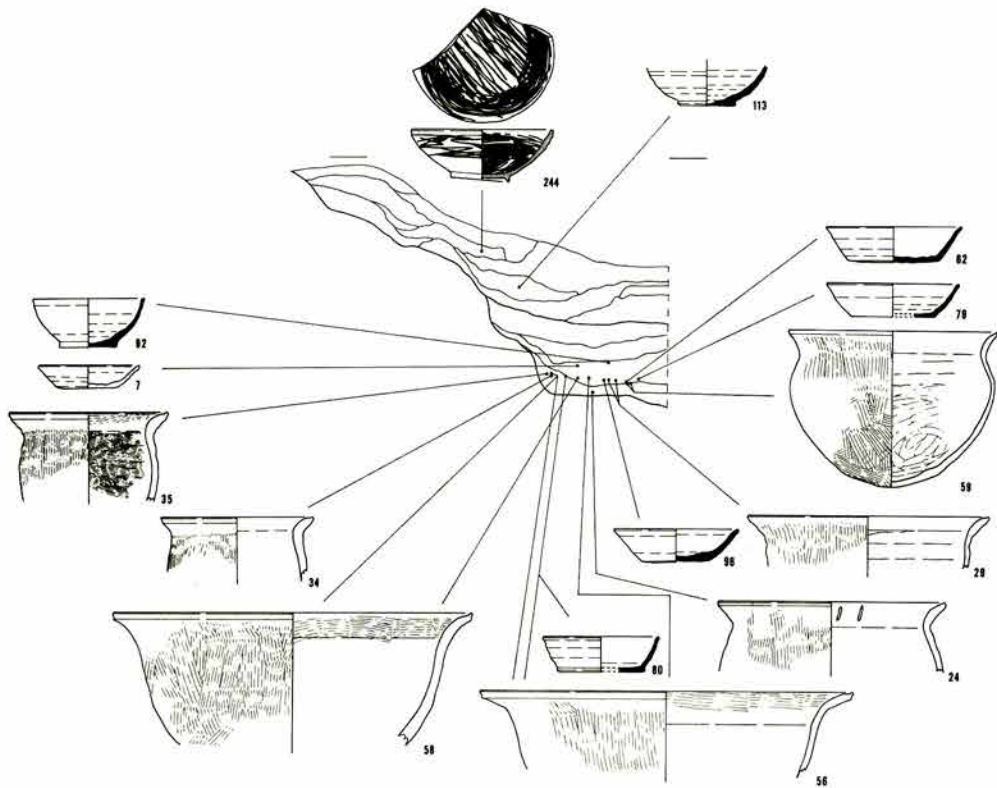


插图80 断面C

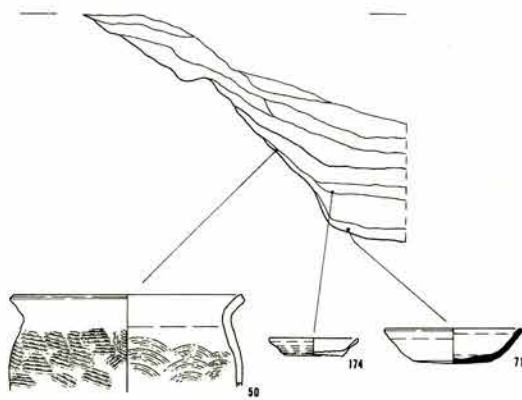


插图81 断面D

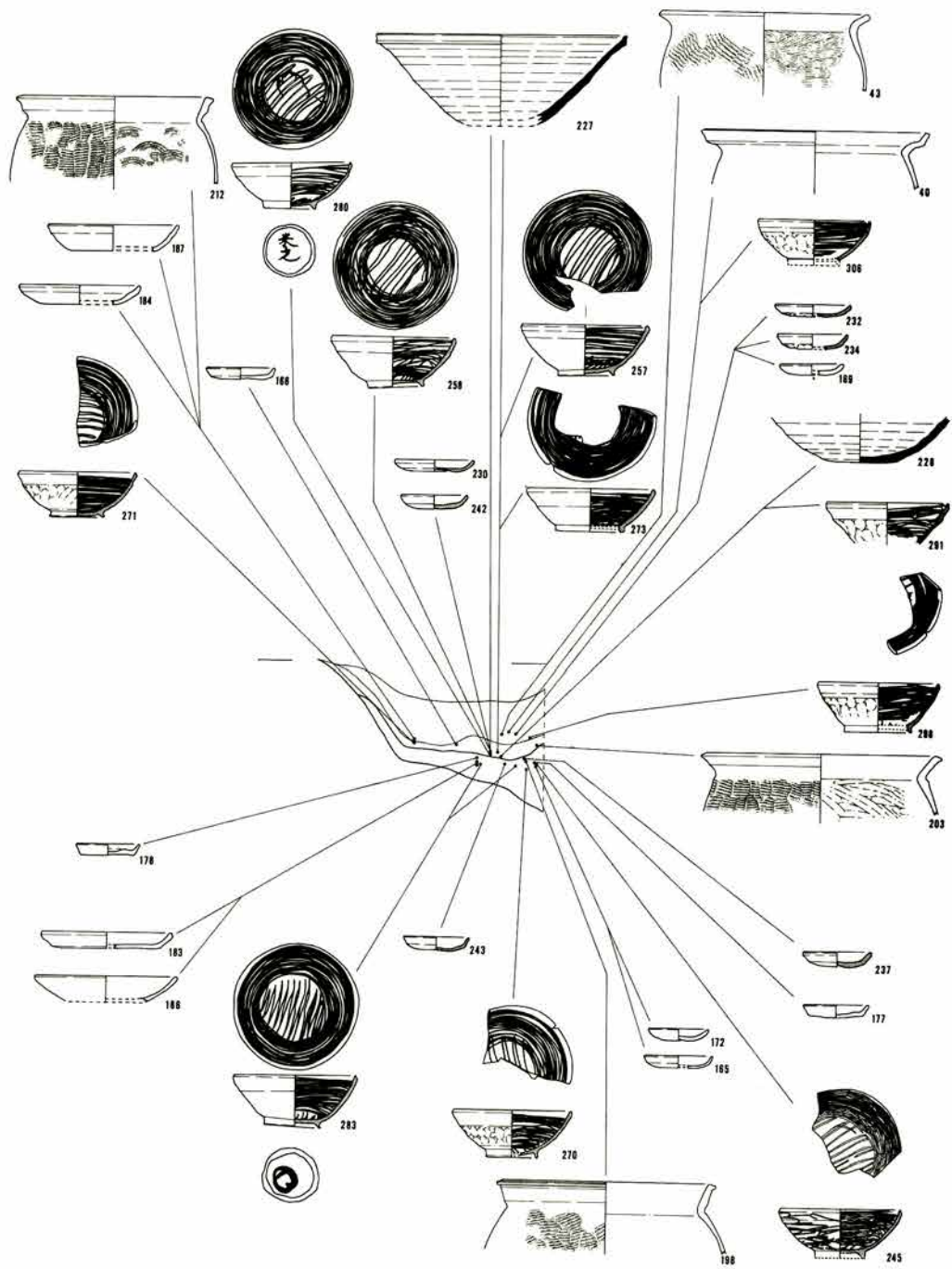


插图82 断面E

は不明確なものも多く、報告にあたっては、時代が逆転している危険性も大いに内包するものである。この点については、第6章で述べる予定である。

なお、以下の報告においては、平安～鎌倉時代の土器を「上層出土土器」、平安時代の土器を「下層出土土器」と呼称していくことにする。また、器種分類については、後節でのまとめを前提とした上での分類である。したがって、各器種の分類及び細分は上層出土土器と下層出土土器とをひとまとめにしたものを前提として行っている。

2. 平安時代の土器 (挿図83～94)

ここで報告する土器は旧河道出土のものに限られる。器種としては、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器が出土している。量的には土師器と須恵器で大半を占める。

(1) 土師器 (1～60) 小皿・杯・椀・托・甕・鍋・羽釜・鉢・甑が出土している。

皿 法量的に小型の皿 (1～7) とやや大型の皿 (8～10) に分類できる。

小皿については、底部の切り離し方法によって、大きく2タイプにわけられる。

ひとつは底部を回転糸切りにより切り離すもの (皿Aa-1～6) である。口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。特に2については、ロクロによる挽き上げの際の指先のあたりが顕著である。また、2・4～6は、精良な胎土からなる。ただし、これらの土器は、形態的・法量的には個体差が目立ち、同じ特徴をもつものは認められない。

もうひとつのタイプは、底部をヘラ起こしにより切り離した後、底部をナデ調整により仕上げたもの (皿B) である。7の1個体のみである。体部から口縁部はロクロによるナデ調整により仕上げられている。また、口縁端部にヘラナデ調整を施し、わずかに端面を形成している。前者のタイプに比べて、2mm大の小礫を多く含んでいる。法量的にも、前者のタイプに比べて口径に対する器高の比率が高い点も特徴として指摘できる。

やや大型の皿Dは3個体 (8～10) であるが、これらは形態的・法量的にほぼ同じ特徴を有する。口径13.6cm～15.0cmで、器高2.8cm～3.3cmを測る。体部から口縁部にかけては内湾気味に立ち上がり、口縁部は強いナデ調整を加えることによってわずかに外反傾向にある。底部は、皿Aa同様回転糸切りにより切り離されている。また、体部から口縁部も皿A同様回転ナデ調整により仕上げられている。胎土についても、各個体とも精良である。

杯 当器種についても法量的に2つに分けられる。

比較的小型の杯A (12～14) については、図化した3個体とも、形態的・法量的に個体差が目立つ。12と13は底部をヘラ切りにより切り離し、体部から口縁部を回転ナデ調整により仕上げている。(杯Aa) これに対して14は、形態的により古いものと考えられ、底部を手捏ねにより

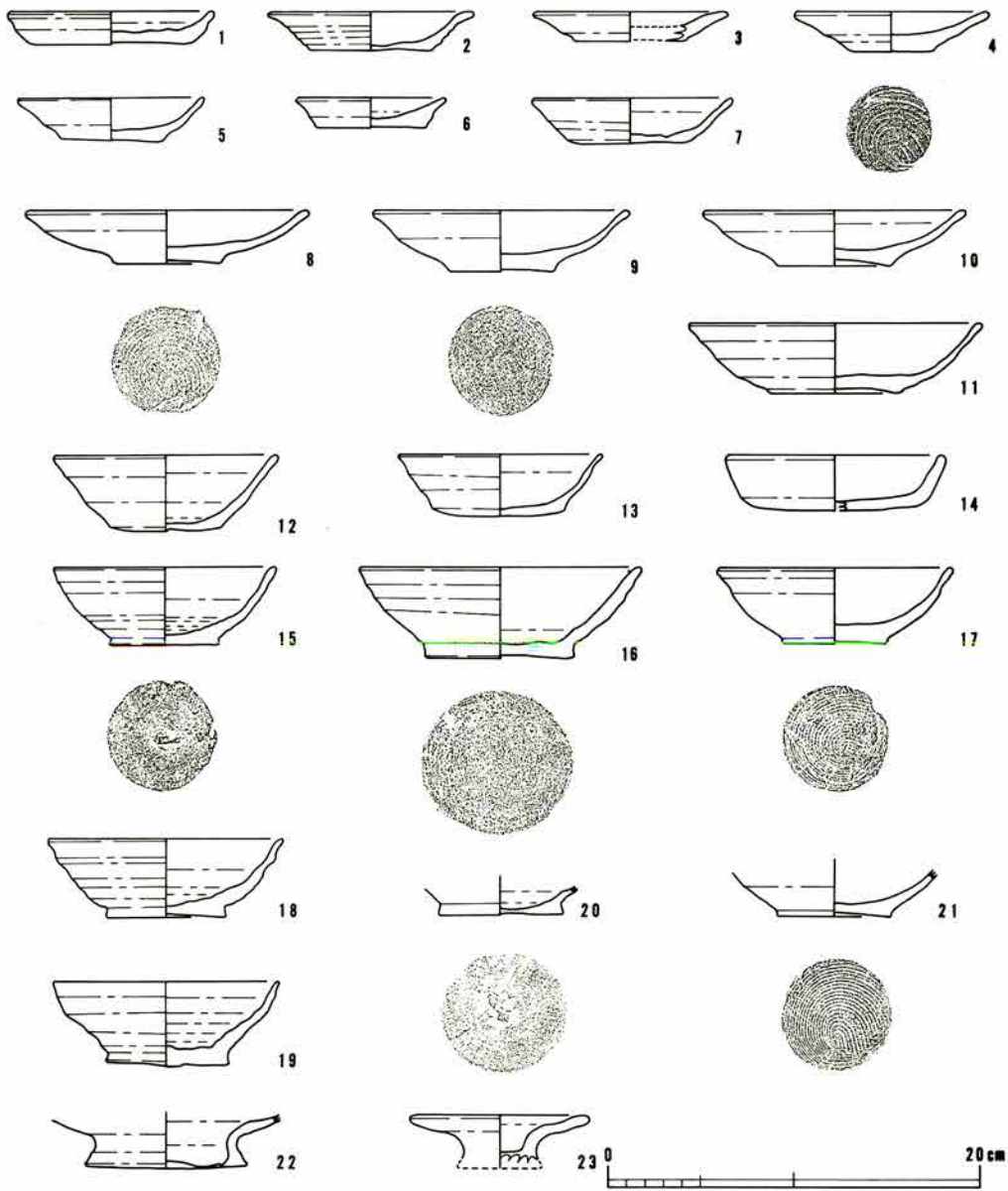


插图83 平安時代土器（1）旧河道（1）

成形し、体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。(杯B) 層位的にも最下層から出土している。

大型の杯(11)は、回転糸切りによって切り離された平底の底部から大きく開きながら内湾気味に立ち上がる。口縁部はほぼ直線的で、わずかに肥厚している。体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。(杯Ab)

椀 底部を中心とした形態・技法から4つのタイプ(椀A・椀B・椀C・椀D)に分類できる。

椀A(15・18~20)は、平高台を有する底部に対して、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、内面の見込みは明瞭な段をもたない。椀Bとは形態的に大差ないが、底部をヘラ切りにより切り離している点が両者を分ける最大の特徴である。底部は切り離した後、ナデ調整により仕上げられている。また体部から口縁部にかけては回転ナデ調整により仕上げられている。形態的・技法的に相野窯跡群産の須恵器椀に共通するものがあり、この須恵器椀を模倣したものととも考えられる。

椀B(17・21)は、椀Aと形態的・法量的に大差ないが、底部を回転糸切りにより切り離す点において大きく異なる。体部から口縁部にかけては回転ナデ調整により仕上げられている。また、胎土が椀Aに比べて精良である点も一つの特徴である。

椀C(16)は、平高台を有する底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がるものである。椀A・椀Bに比べて大型である。内面はわずかに段をなして落ち込んでいる。底部は回転糸切りにより切り離され、体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。形態的には、椀B同様相野窯跡群産の須恵器椀との関係が考えられるが、底部を糸切りにより切り離す点で大きく異なる。

椀D(22)は、内面の落ち込みがより顕著なものである。底部片のみしか出土していないため全体の形態は不明である。底部は、体部を成形後内部を充填したようで、その接合部分は土器断面の観察で明瞭で、この接合部を境に内側はナデ調整を施し、この外側は回転糸切り痕が認められる。体部は回転ナデ調整により仕上げられている。

托 23の1個体のみである。大きく段落ちする底部から水平方向近くを開く口縁部が付く。回転ナデ調整により仕上げられている。底部は残存しないが、回転糸切りにより切り離されているものと推定される。口径9.1cmと小型の土器である。

甕 土師器のなかでは最も多く出土している器種である。大半の土器は、外面に煤、内面に煮溢れが顕著に認められる。形態・技法上の特徴から大きく3タイプに分類できる。

甕A(24~37)は、長胴な体部に口縁部が「く」字形に短く外反するものである。完形の土器が出土していないため、全体の形態は明らかにしえないが、最も良好に残存する28から推定すると、砲弾形をなすものと推定される。体部外面に縦方向のハケ調整、内面にナデ調整を施

した後、口縁部内外面を横方向のナデ調整により仕上げている。体部内面のナデ調整は丁寧とは言えず、粘土紐の継ぎ目が顕著に認められる。また、35のように体部内面に横方向を主体としたハケ調整を施すものも認められる。また、この土器については、口縁部内面にも横方向のハケ調整を施している。法量的にみて、大型（24～33）と小型（34～37）にわけられる。

なお口縁端部の形態をみると、丸くおさめるもの（Aa）と、28・30・31・33～37のように、端部を上方につまみ上げるようなナデ調整を施すもの（Ab）が認められる。特に小型の甕AⅡは全てこの形態をとるものである。次に述べる甕Bとの関係において注目される。

甕B（38～42・44・45）は、口縁端部を明瞭に上方につまみ上げる点を特徴とする。体部から底部まで残存するものは45のみで、他は口頸部のみが残存するものであるため、全体を復元することは困難である。多くは45のように長胴傾向にあるものと推定される。さらに底部についても45をもとに推定すると、丸底に近い形態をなすものと考えられる。

体部の整形法については、調整法が観察可能なものはすべてタタキ原体による縦方向のナデ調整により仕上げられている。口縁部は内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。口縁部の形態については、単純に上方につまみ上げるもの（Ba）から、38・40のように受け口状をなすもの（Bb）とに細分できる。特にBaの体部外面にはヨコ方向のタタキ整形が施されている。

甕C（43・46～53）は、球形の体部に「く」字形に屈曲する口縁部が付き、端部を上方につまみ上げるものである。底部は丸底ないしそれに近い形態が推定される。また口縁端部の形態については、端部をつまみ上げるもの（Ca-46～49・52）と、端面をなすのみでつまみ上げないもの（Cb-43・50・51・53）とが認められる。

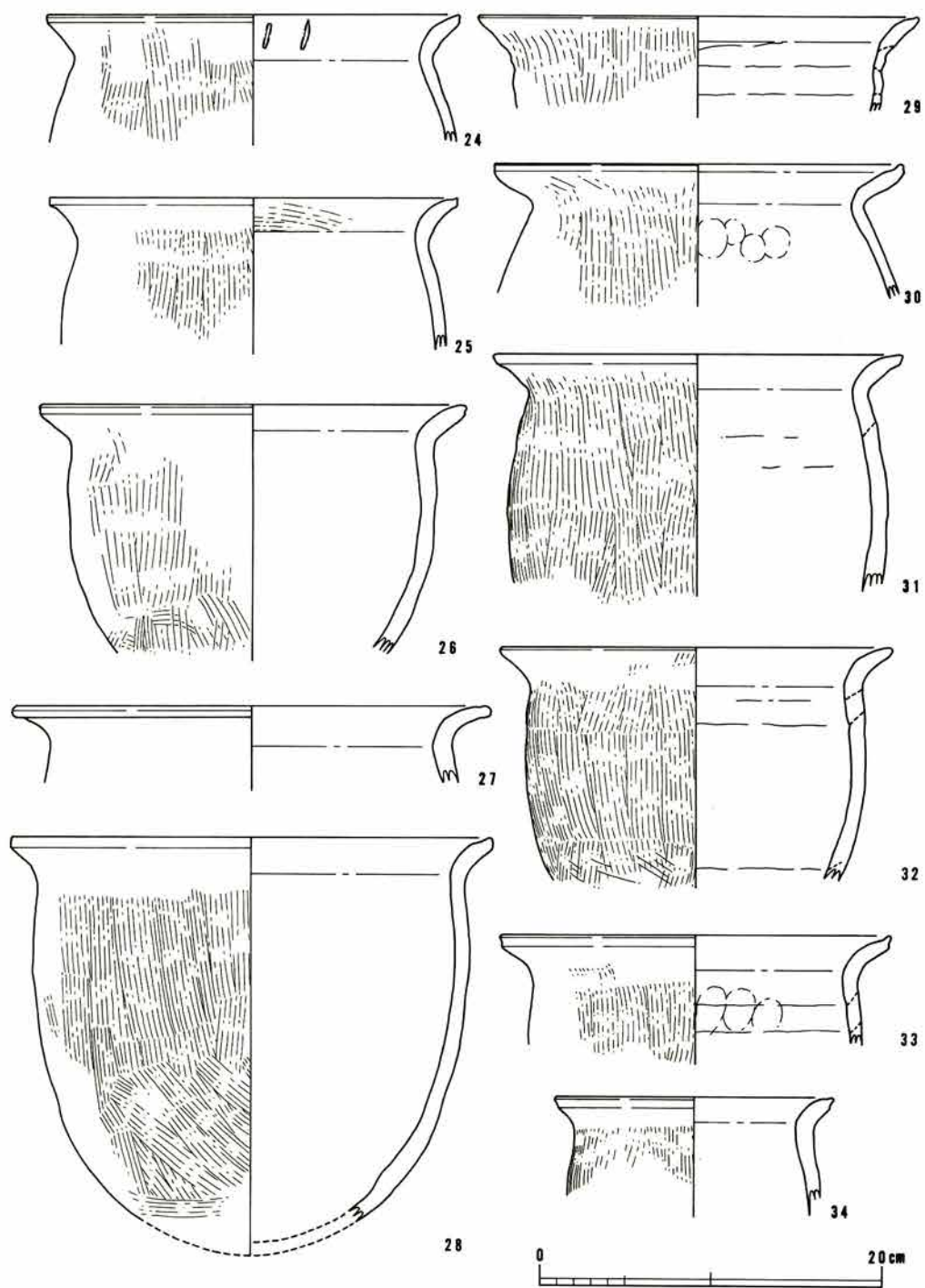
体部外面は左上がり方向あるいは水平方向のタタキ整形により仕上げられている。この明確なタタキ技法の使用が甕Bと区別する重要な指標でもある。内面は、タタキ整形にともなう同心円文をナデ調整により消されている。このナデ調整については、ヘラ状工具を用いるものやハケによるものも認められる。また、ナデ調整が不十分で同心円文が顕著に残存するものも認められる。口縁部は内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。

法量的にみると、小型（46・47）・中型（43・48～52）・大型（53）の3つに分類できる。中型・大型の甕は、タタキはすべて水平方向である。

羽釜A 54の1個体が出土している。内傾する口縁部の上端部下2cmの位置に、幅の狭い断面方形の鐳がつく。口縁端部は、内側上方につまむようなナデ調整により仕上げられている。

鉢 形態の特徴から2タイプに分類できる。

鉢A（55～58）は、大きく斜上方に開く体部に、ゆるやかに「く」字状に外反する口縁部が付くものである。口縁端部を斜上方につまみ出している。底部まで残存するものがないが、丸底状を呈するものと推定される。体部外面を縦方向のハケ調整、内面をナデ調整により仕上げ



挿図84 平安時代土器 (2) 旧河道 (2)

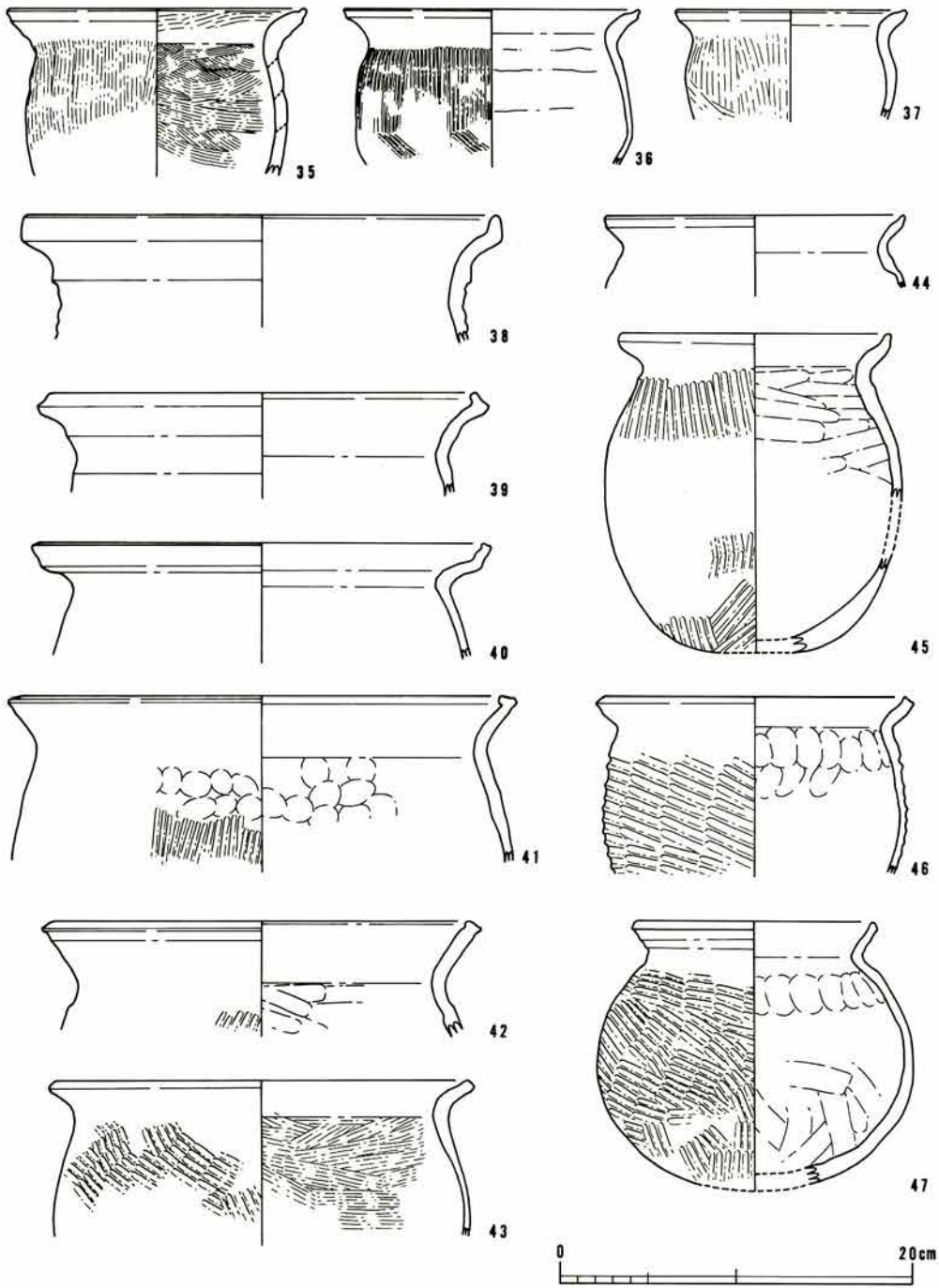


插图85 平安時代土器（3） 旧河道（3）

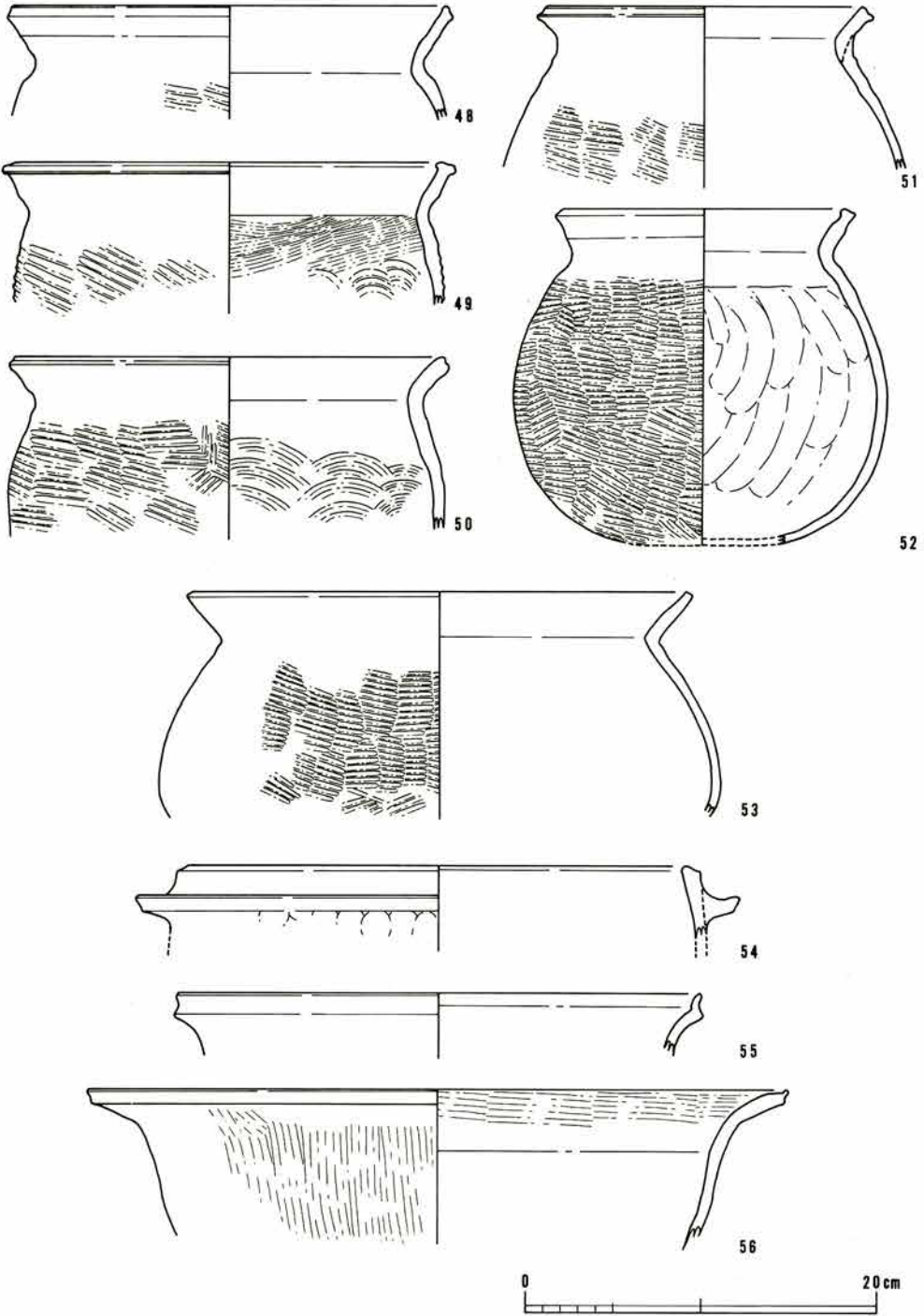


插图86 平安時代土器（4）旧河道（4）

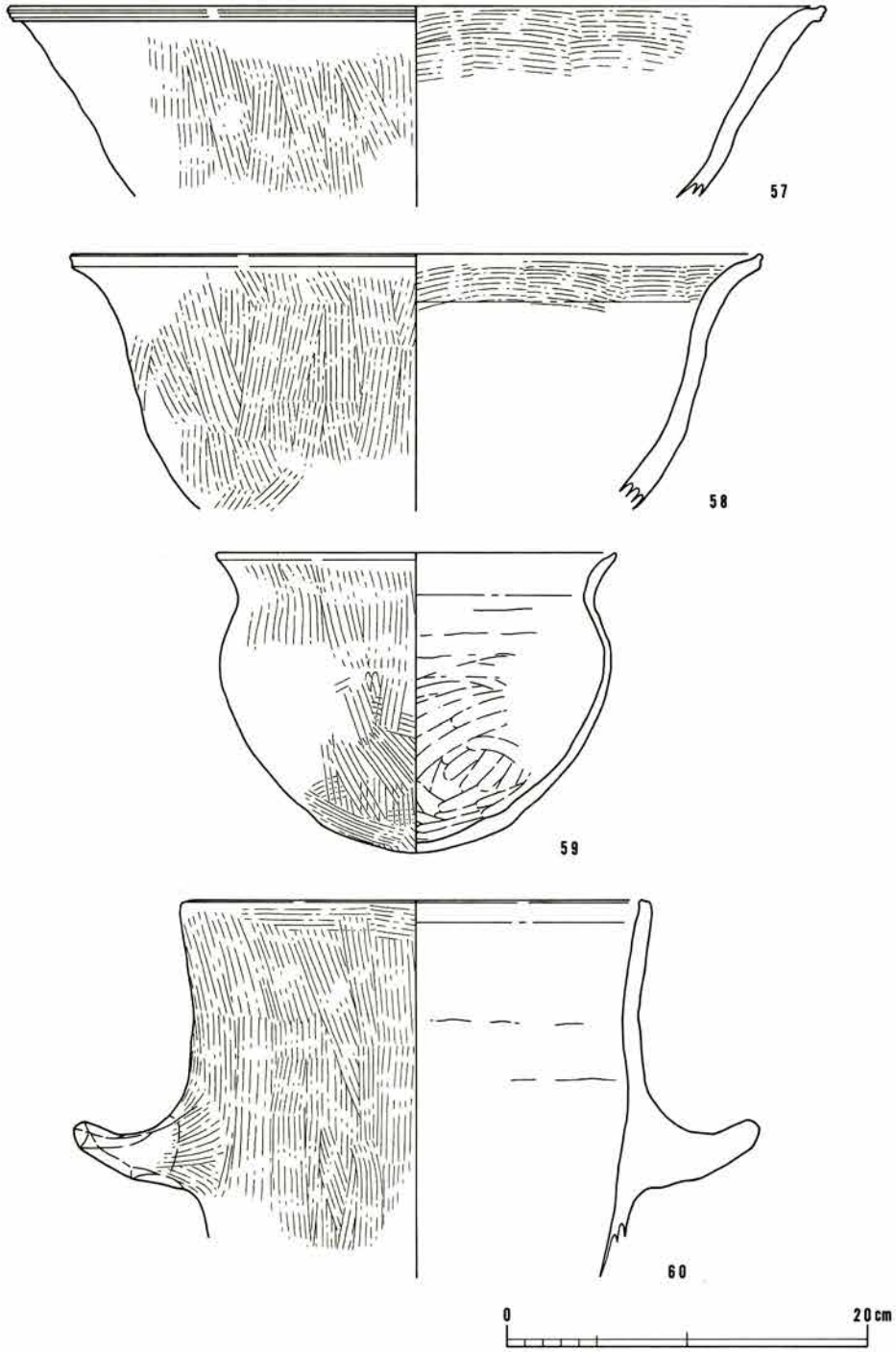


插图87 平安時代土器（5）旧河道（5）

る。体部の調整後、口縁部外面を横方向のナデ調整、内面を横方向のハケ調整により仕上げる。口径37.9cm～44.7cmと大型である。

鉢B (59) は、体部上半が一端狭まり、頸部をもつものである。口縁部は「く」字形にゆるやかに外反し、端部をわずかにつまみ上げるようなナデ調整により仕上げている。底部は丸底で、体部最大径は肩部近くにある。

口縁部から体部にかけての外面を縦方向のハケ調整により仕上げ、体部内面は下から上方にすり上げるような指ナデ調整により仕上げられている。口縁部は、内外面とも外面のハケ調整の後横方向のナデ調整により仕上げられている。口径22.1cmと、鉢Aに比べると小型である。

甗 60の1個体が出土している。体部から口縁部にかけてわずかに外傾気味に立ち上がり、口縁端部を内側にわずかにつまみ出している。口縁上端部下11cmに把手が付く。外面は、口縁部付近を横方向のハケ調整を施した後、縦方向のハケ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。口縁部は横方向のナデ調整が施されている。

なお本器種については、形態上・技法上古墳時代の甗とほぼ同じ特徴を示すものである。下層から当該期の遺物もわずかではあるが出土しているため、この土器についても当初は当該期のものと考えた。しかし、神戸市西区上池遺跡出土の平安時代中期の一括資料⁽¹⁾のなかにも、ほぼ同タイプの甗が出土していることから、この土器についても、当代のものと判断した。

(2) 須恵器 (61～126)

杯A・蓋・碗・鉢・甕・壺・羽釜の各器種が出土している。杯Aと碗が量的に多く、この2形式で大半を占める。

杯A 当形式の大半は旧河道の下層から出土している。底部が平高台状をなすもの(杯Ab)となさないもの(杯Aa)とに大別できる。

杯Aaは、①体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるもの(61・63～69・71・72)と、②直線的に立ち上がるもの(62・70・73～76・81・82)とに分けられる。①は、口縁部を外反させるものと、体部からの立ち上がりの延長でおさめるものがある。ただし、後者についても、わずかではあるが、外反を意識したナデが口縁端部に認められる。②については、口縁端部を丸くおさめるものが多い。ただし、70・81・82と比較的大型の個体については口縁部を外反させ端部を薄くおさめている。

なお81については、内面の一部と外面全体に墨が付着しており、硯に転用されていた可能性が考えられる。

杯Abは、内湾気味に立ち上がる体部に対して、口縁部はわずかに外反傾向にある。底部外面は明瞭な段が認められるが、内面見込みには明瞭な段落ちは認められない。ただし、段落ちを意識した強いナデ調整は観察でき、特に80においては、わずかに段落ちを認めることができ

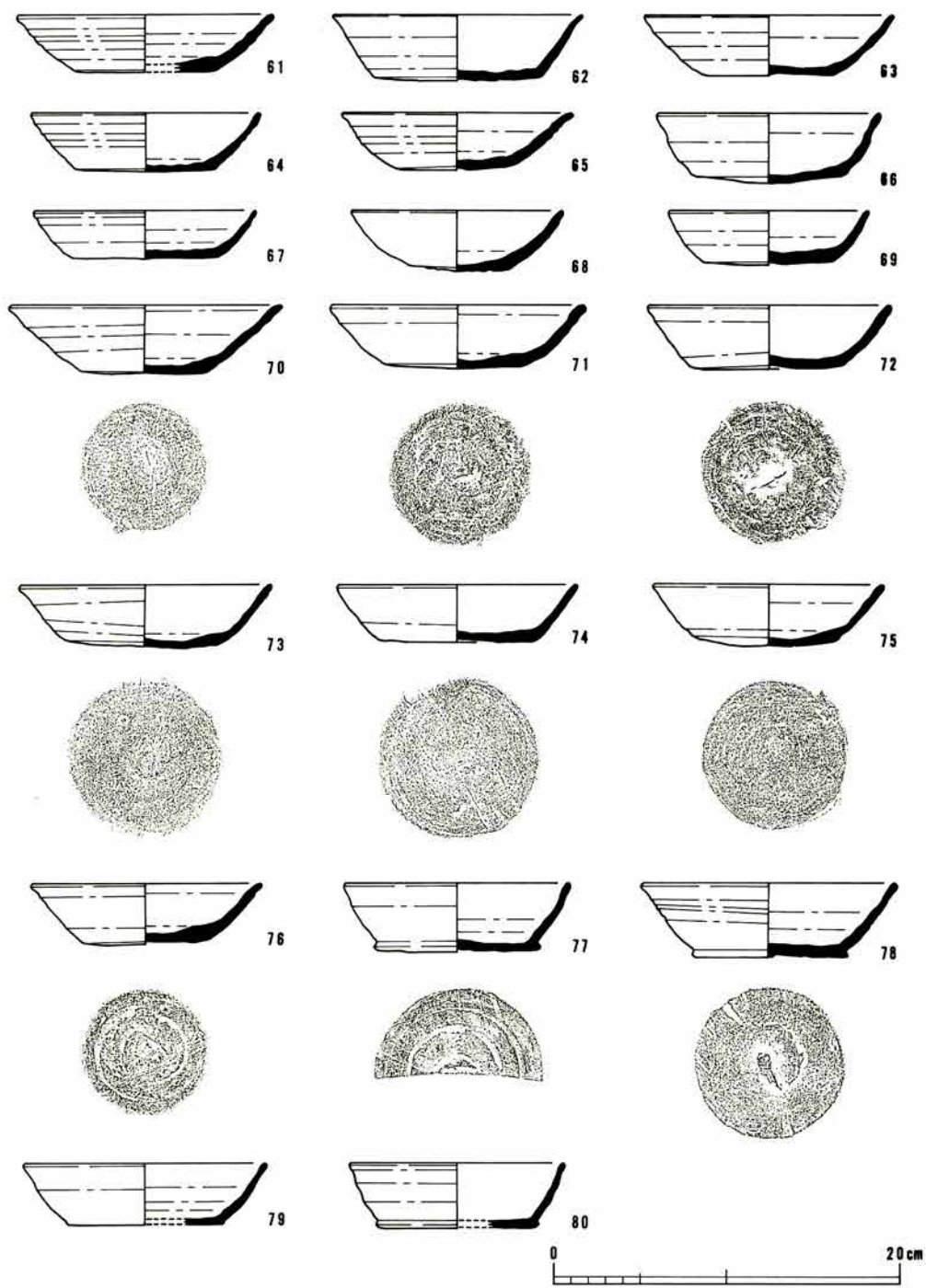


插图88 平安時代土器（6）旧河道（6）

る。また、口径に対して底径が大きい点も、ひとつの特徴である。

蓋 椀Aに対応する器種である。出土量もわずかで、図化できたのは1個体のみである。天井部中央を欠損しているため、つまみが付くかどうか判断できない。ただし、残存する天井部がヘラ切りにより切り離されており、これは相野窯跡群向上・古城1号窯跡出土の蓋の特徴と一致するものである。したがって、つまみはつかない可能性が高い。

なおこの土器は硯として転用されたようで、一部墨の付着が認められ、内面全体が使用により磨滅している。

椀 形態の特徴から椀A～椀Eの5型式に細分できる。

椀A(84)は、基本的に杯Bの大型化したものである。体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部は直線的である。口縁端部に強いナデ調整を施し、端部をうすくおさめる。

高台は、体部をヘラ切りにより切り離した後、貼り付けられている。断面方形をなし、高台高は0.5cmである。

椀B(85)は、いわゆる稜椀である。図化した1個体のみが出土している。内湾する体部と外反する口縁部の境は明瞭な稜をなす。口縁端部内面には1条の沈線が施されている。高台は断面長方形をなし、外方に踏ん張る。

椀C(86・87)は、体部から口縁部にかけて直線的にのびる体部に輪高台が付くものである。出土量は少なく、図化できたのは2個体のみである。ただし、この2個体はより詳細に観察すると、タイプを異にする。

86は、高台が断面逆台形をなし、高台高0.7cmと比較的低い。体部から口縁部の器壁はほぼ一定しており、87と比べると厚い傾向にある。高台は、体部を回転糸切りによる切り離し後、貼り付けられている。(椀Ca)

これに対して87は、高台は体部をヘラ切りによる切り離し後貼り付けられ、断面逆三角形を呈する。器壁は一定しておらず体部と口縁部の境は薄くなっている。相野窯跡群産と推定される。(椀Cb)

椀D(88～91・94)は、内外面とも一段落ち平高台をなす底部に、直線的にのびる体部がつくものである。底部の切り離し方法により、ヘラ切りによるもの(Db-88～91)と、回転糸切りによるもの(Da-94)とに大別できる。Daは、口縁端部を外反させる点と、口径に対して底径が小さい点がDbと大きく異なる。Dbについては、相野窯跡群産と考えられる。

なお91は、内外面に墨が若干付着しており、硯に転用されたものと考えられる。

椀E(92・93・95～116)は、椀Dに対して、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部を大きく外反させる点が大きく異なる。また、口径に対して底径が小さく、底部は全て回転糸切りにより切り離されている。また、各個体の、内外面とも挽き上げ痕が顕著であり、胎土も全体的に精良である。形態的には椀D aの発展形として捉えることが可能である。

口縁端部と内面見込みの特徴から碗Ea・Eb・Ecの3タイプに細分できる。碗Eaは、口縁端部をわずかに外反させ、端部を薄くおさめる。内面見込みには明瞭な段は認められない。碗Ebは、口縁端部は強いナデが施されるが、明瞭な外反は認められない。また、端部を肥厚させ丸くおさめる。内面見込みは明瞭な段落ちが認められる。碗Ecは、碗Ea同様に口縁端部を強く外反させ、端部を薄くおさめる。また内面見込みも明瞭な段落ちが認められる。

さらに法量の点からは、大型と小型のものに分けられる。相対的に碗Eaが小型で、碗Eb・Ecは大型である。

なお、92・98・102～107・109・111・112・115の内面には多量の墨の付着が認められ、硯に転用されていたようである。

鉢 形態的特徴から、鉢Aと鉢Bの2タイプに分類できる。

鉢A(114)は、基本的な形態は碗Eとほぼ同じである。ただし、口縁部の形態が若干異なる。内湾しながら立ち上がる体部に対して、口縁部を外反させ、端部を外方につまみ出すように強くナデ調整を施している。また、底径が碗Eよりも大きい。底部は回転糸切りにより切り離されている。

鉢B(117)は、内湾しながら立ち上がる体部に玉縁状の口縁部が付くものである。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

甕 甕Aが出土している。

甕A(118)は、図化できたのは1個体のみで、口頸部のみ残存する。頸部から口縁部にかけて大きく外反しながら立ち上がり、端部に外側下方につまみ出すようなナデ調整を施し上方に肥厚させるとともに、外傾する端面をもつ。口頸部内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。なお、わずかに残存する体部外面には、縦方向のタキ整形痕が認められる。

壺 壺A・壺B・壺Cの3タイプが出土している。

壺A(119～122)は、いわゆる双耳壺と称される壺である。ただし、底部から口縁部まで残存するものは出土していない。口縁部は、119のように端部を上方につまみ上げ薄くおさめるものと、120・121のように端部を外反気味につまみ上げるものとに分かれる。肩部は、119・122とも、1条の断面三角形の凸帯を貼り付けた後、耳を貼り付けている。

壺B(123)は、平底をなす底部である。壺Aの底部の可能性も考えられるが、相野窯跡群などの出土例と比べると、体部の立ち上がりが緩やかであるため、別の型式に分類した。底部はヘラ切りによって切り離されている。

壺C(124・125)は、輪高台の付く壺である。2個体とも体部上半以上が残存しないため、全体の形態は復元できない。相野窯跡群の類例から判断すると短頸壺になる可能性が高い。125については、体部内面を板状工具による横方向のナデ調整により、体部外面は縦方向のタキ整形の後ナデ調整により、それぞれ仕上げられている。また、124の体部外面も板状工具によ

り横方向を主体としたナデ調整により仕上げられている。

羽釜 (126) 図化できたのは1個体に限られ、しかも小片のため口径を復元することはできない。口縁端部は外方水平方向につまみ出され、上端面をもつ。罫は比較的口縁端部に近い位置に貼り付けられている。罫以下の体部外面はタタキ整形により、内面は板状工具によるナデ調整により仕上げられている。胎土中に2mm大の砂粒が多量に含まれる。相野窯跡群産と考えられる。

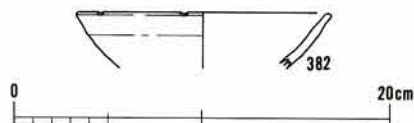
(3) 灰釉陶器 (128)

小瓶 (128) の1個体のみである。底部から頸部付近までは完存するが、口縁部を欠く。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

(4) 緑釉陶器 (127・382)

皿と碗が出土している。

皿 口縁部は、外反傾向にある。胎土は須恵質である。



挿図90 平安時代土器 (8) 旧河道 (8)

碗 口縁部は強い横ナデ調整が施され、体部との境に稜をもつ。口縁端部には輪花が認められるが、小片のためその数は復元できない。胎土は須恵質である。

(5) 黒色土器 (129~160)

碗と皿が出土している。碗がほとんどで、皿は1個体のみである。

碗 底部の形態において、輪高台をなすもの (碗A-137~144) と、平高台をなすもの (碗B-145~156・158~159) とに大別できる。出土量は後者の方が多い。ただし、碗A・碗Bの区別なくほとんどの個体は、内外面とも黒化したB類碗と称されるものである。

碗Aは、内外面のミガキの特徴から、137・138と139~144とに分けられる。(碗Aa・碗Ab)

碗Aaは、幅1~2mmの細筋のミガキを丁寧に施すものである。ただし両者は、磨き方、口縁端部及び高台の形態において異なる。

137は内面を見込みからか口縁部にかけて螺旋状にミガキを施している。高台は断面逆三角形を呈する。口縁部は2段の強い横ナデ調整が施され、端部を丸くおさめる。

これに対して138は、内面見込みに一定方向のミガキを施した後、体部~口縁部は圏線状に施されている。高台は137に比べて低く、断面は方形に近い三角形を呈し、不安定なものである。口縁部は体部に対してわずかに肥厚気味で、端部内面に1条の沈線が施されている。

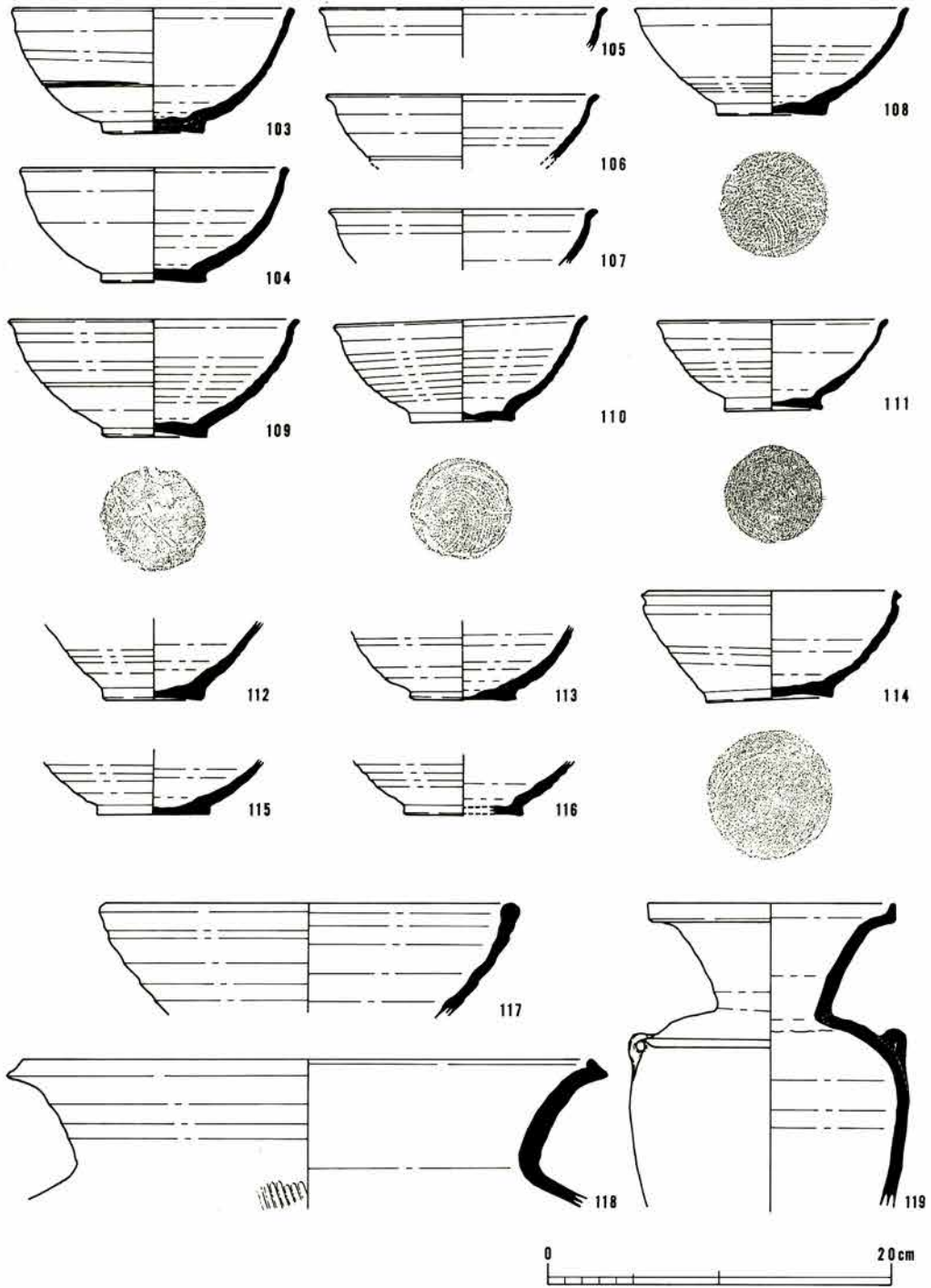


插图91 平安時代土器（9）旧河道（9）

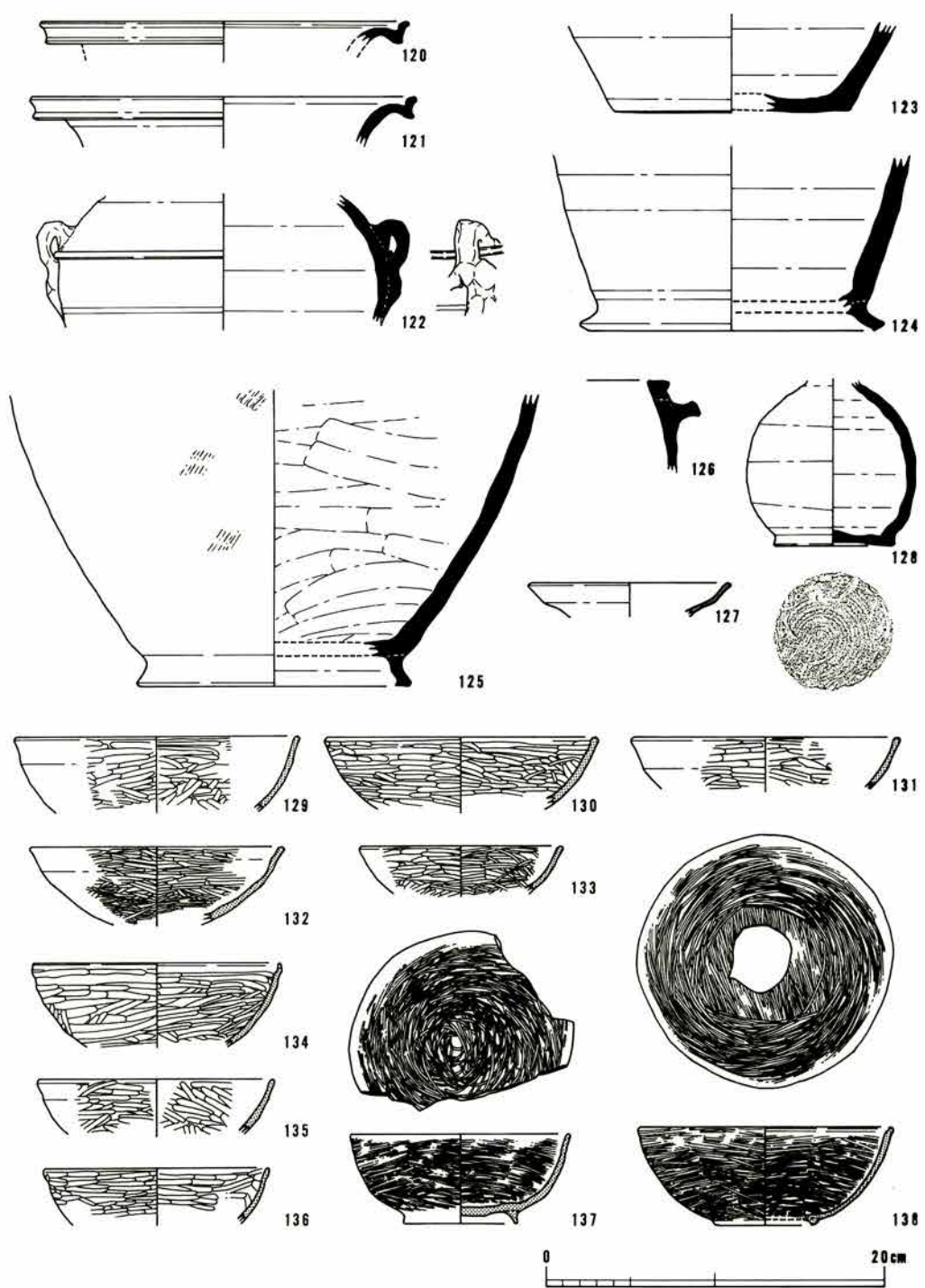


插图92 平安時代土器 (10) 旧河道 (10)

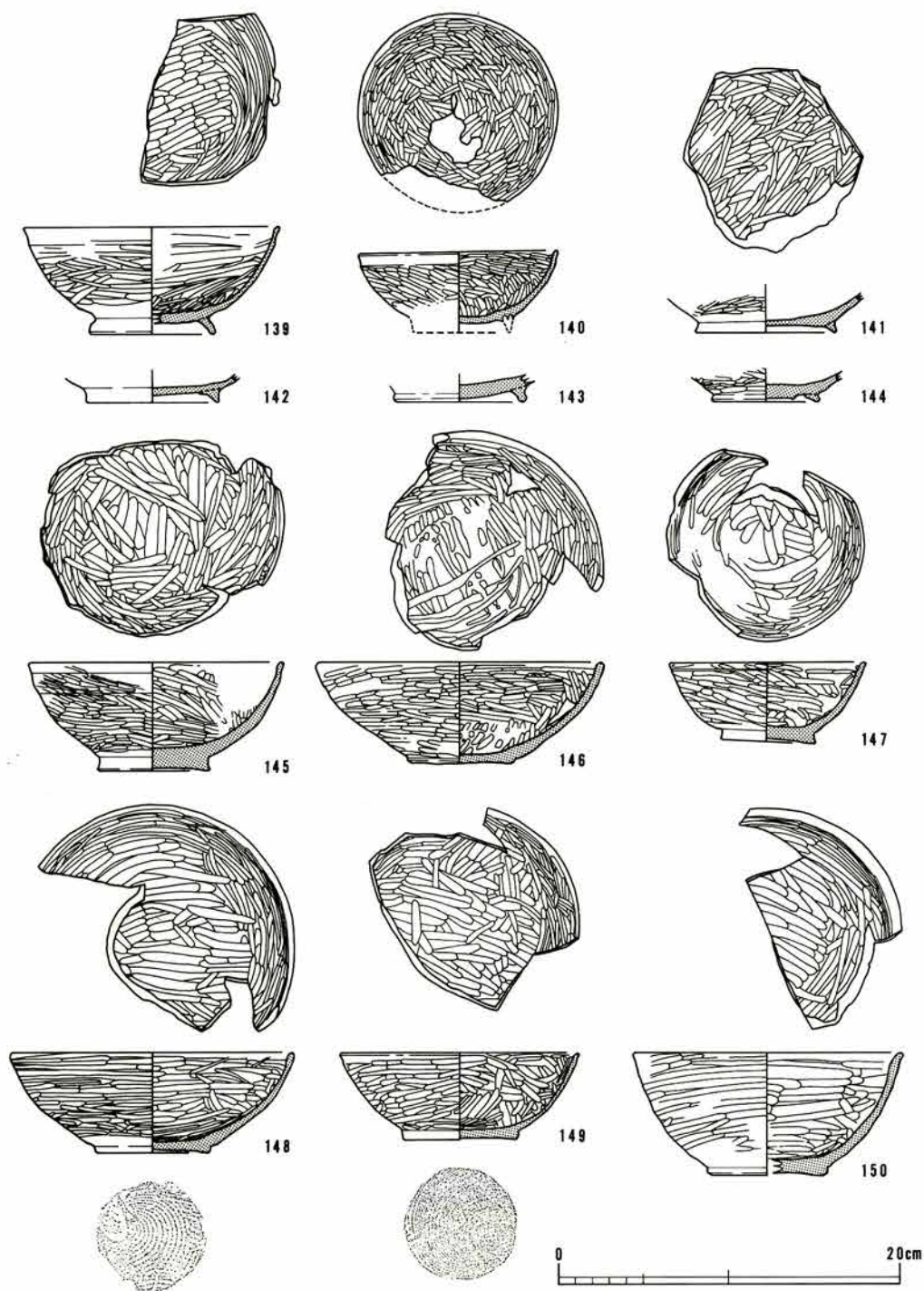
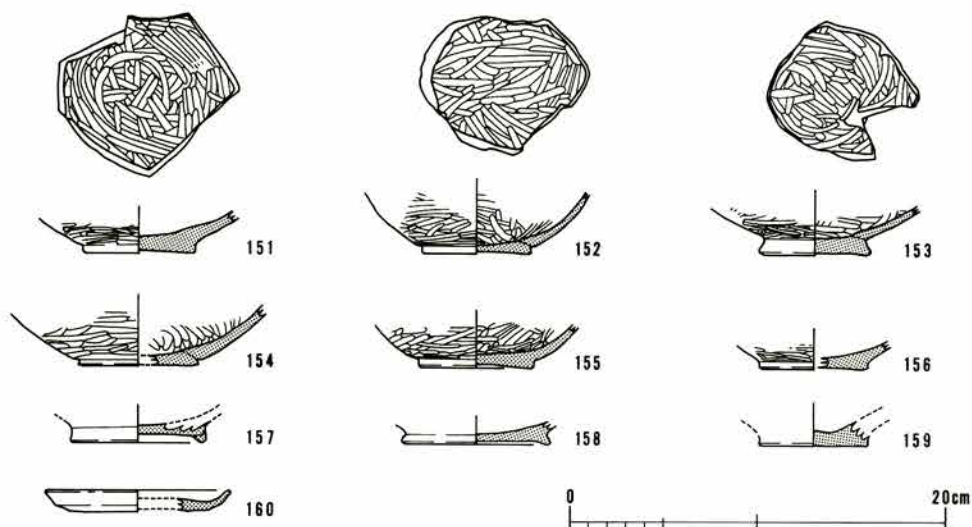


插图93 平安時代土器 (11) 旧河道 (11)



挿図94 平安時代土器 (12) 旧河道 (12)

碗Abは、ミガキの幅が数mmと粗いミガキにより仕上げられている。また、それぞれのミガキの1回に施される長さが短い傾向にある。法量的にも口径が小さい傾向にある。このなかで139は、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部は1段の強い横ナデ調整により外反傾向にある。高台は、断面逆台形を呈し、外方に踏ん張る。高台高は0.8cmと図化した黑色土器のなかで最も高い。ミガキは、内面見込みに一定方向に施した後圈線状に施されている。

140は、内面のミガキ方向が大きく異なる。見込みから口縁部にかけて螺旋状に比較的丁寧な施されている。口縁部は、1段の強い横ナデ調整によりわずかに外反傾向にある。高台は剥離しているため不明である。なおこの土器は、当遺跡出土の黑色土器にあってはめずらしく、内面のみ黑色化したA類碗に分類されるものである。

碗Bは、法量的に碗Baと碗Bbの大きく2つに分類できる。

碗Baは深い碗形を呈するものである。口径に対して底径が小さく明瞭な平高台をなす。口縁部は、端部を外反させるものと、強いナデにより外反気味のものの2タイプが認められる。

碗Bbは、碗Baに対して全体的に浅い傾向にあるものである。口径に対して底径が大きく、わずかに平高台をなすが、平底に近いものである。

両タイプとも、底部は回転糸切りにより切り離されている。また、内外面とも横方向のヘラミガキが施されているが、碗Aに比べてミガキの単位は粗い傾向にある。また内面見込みは、一定方向のミガキが施されている。

Ⅲ 口縁部は1段の横ナデ調整により仕上げられている。内外面とも黑色化している。

3. 鎌倉時代の土器（挿図95～107）

（1）出土状況

当該期の遺物は、井戸・墓・柱穴などの遺構内と、旧河道内出土の土器とに大きく2つに分けられる。量的には後者が大半を占める。なお、旧河道出土の土器の取り上げについては、前節で述べた通りである。

（2）土師器（161～216・317・339～355・363～367）

器種としては小皿・大皿・杯・鍋・羽釜の各器種が出土している。

小皿

底部の形態から、皿Cと皿Abの2タイプに分類できる。

皿Cは底部を手捏ねにより整形するものである。（161～172）多くの土器は、手捏ねの後ナデ調整により仕上げられている。口縁部は、各個体とも横方向のナデ調整により仕上げられているが、そのナデ調整を1段のみ施すもの（162・165～167・169～171）と2段にわたり施すもの（163・164・168）とが認められる。また内面見込みは、一定方向のナデ調整により仕上げられている。

なお161については、他の小皿と整形方法が若干異なる。底部を手捏ねにより整形している点は同じであるが、口縁部については横方向のナデ調整を施さず、指押さえにより整形するといった大変稚拙な造りである。

法量的には、口径6.8cm～9.8cm、器高1.1cm～1.9cmとほぼ一定している。また、器高指数は13～20である。

この他、土器溜出土の一群の小皿（挿図107-339～343）も、上記の小皿と特徴を異にする。（皿F）底部から口縁部にかけて、手捏ねにより仕上げる点は161と同じである。しかし、底部が平底というより丸底に近い形態をとる点が、他の小皿と大きく異なる。

次に皿Abは、底部を回転糸切りにより切り離すものである。（173～178）口縁部も、ロクロを用いた回転ナデ調整により仕上げられている。前者のタイプとは異なり、法量において二つに分けることができる。173～176のように口径が9.0cm～9.8cmと大きなものと、177・178のように口径が7.2cm～7.4cmと小さいものとである。両者とも、前者のタイプに比べて器高が低い傾向にある。

このなかで、174の土器は、形態・法量ともに異質である。口縁部をロクロナデにより挽き上げた痕が顕著で、口径に対して器高が高い傾向にある。

大皿

図化できたのは、器高の点において若干偏差が認められるが、基本的には同じタイプのもの

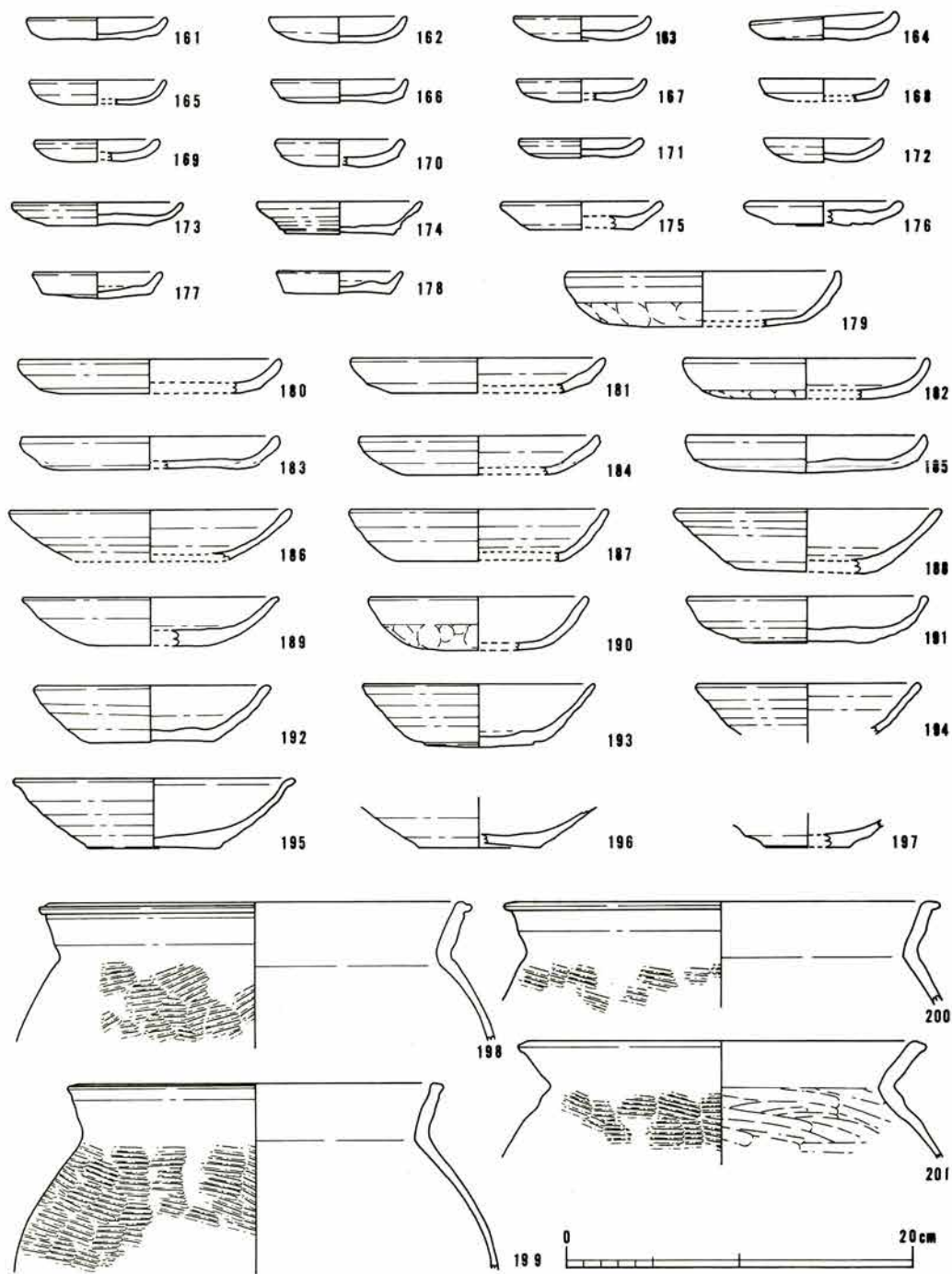


插图95 鎌倉時代土器（1）旧河道（1）

である。底部は手捏ねによって整形されており、小皿のようにナデ調整は施されていない。このため、指頭圧痕が顕著に認められる。内面見込みはナデ調整が施されており、この調整の後、口縁部を2段の横方向のナデ調整により仕上げている。

口径は13.7cm～16.6cmで、器高は1.9cm～3.2cmである。

杯Ab

基本的には、小皿Abと同じ整形技法によってつくられている。つまり、底部は回転糸切りにより切り離され、体部から口縁部はロクロによる回転ナデ調整により仕上げられている。このため、法量および形態的には大皿と区別しがたいものもあるが、この整形技法を基準とし、ロクロによる回転ナデ調整により仕上げられているものについては杯と判断した。

形態的には、平底の底部から体部・口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、全体として逆台形を呈する。191のように体部から口縁部にかけて内湾気味のものや、195のように口縁部をわずかに外反させるものも認められる。

鍋

量的には比較的多く出土しているが、図上復元も含めて底部まで完存するものはない。最も良好に残存し、全体の形態が推定できるのは213である。他の鍋も基本的にはこれとほぼ同様の形態をなすものと推定される。

これによると、体部は下膨れ傾向が顕著で、最大径が底部付近にある。底部は鍋底状をなす。また、体部上半は直線的である。口縁部は体部上半に対して「く」字形に屈曲し、端部をナデ調整により外方水平方向につまみ出している。ただし、いくつかの土器に個体差が認められる。199・205～207のように体部が全体的に球形を呈するものや、口縁端部について210のようにつまみ出す意識の認められないものもある。

口頸部は、内外面とも2段の横方向のナデ調整により仕上げられるのが基本的である。体部外面は、水平方向ないし左上がり方向を基本としたタタキ整形により仕上げられている。これに対応するように内面には同心円文が認められる。ただし、多くの土器はこの同心円文を消すようにナデ調整を施している。また、上半頸部付近にはヘラナデ調整を施している。

この他、体部内面の調整については、201・203のようにヘラ状工具によるナデ調整を施すものや、205のように上半部のみであるがハケ調整を施すものも認められる。さらに、207～209・211のように、内面頸部付近に指押さえ痕が顕著なものも認められる。

各個体とも頻繁に使用されたようで、口縁部から体部にかけての外面には煤が、同じく口縁部から体部にかけての内面には煮溢れ痕が顕著に認められる。

羽釜

図化できたのは3個体のみである。形態的に、羽釜Ba(214・215)と羽釜Bb(216)の二者に分けることが可能である。

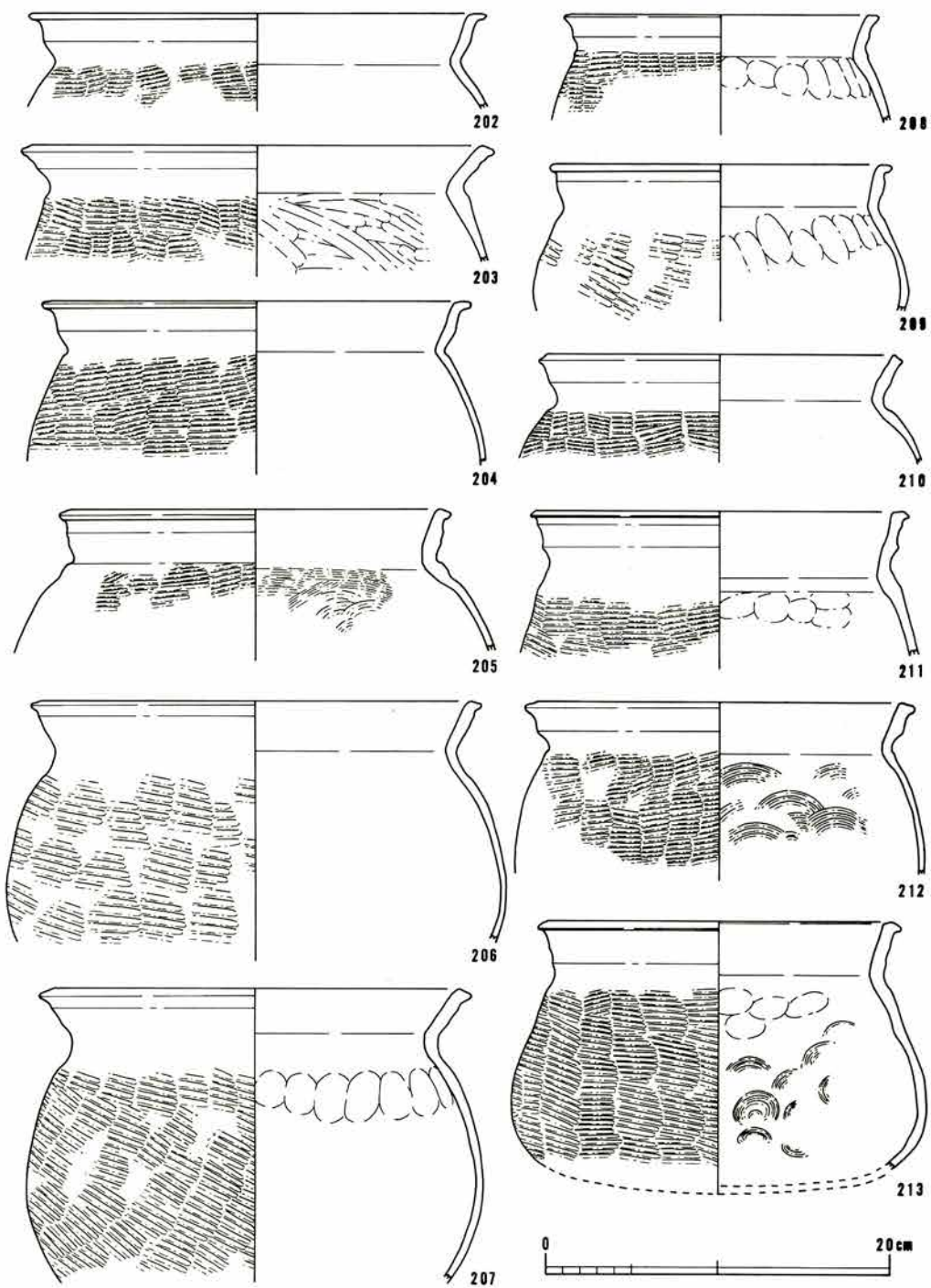
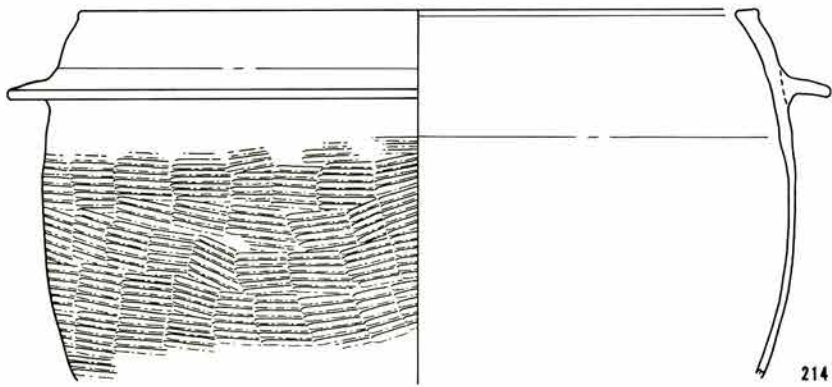
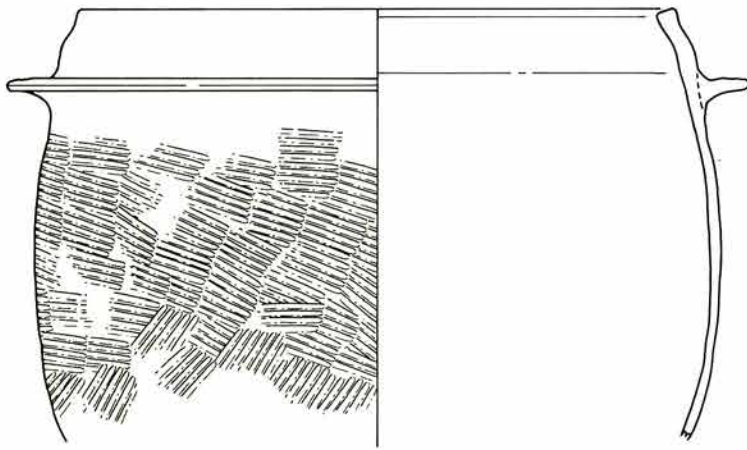


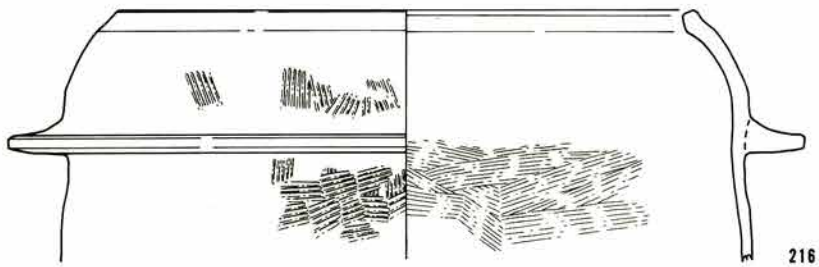
插图96 鎌倉時代土器（2）旧河道（2）



214



215



216



插图97 鎌倉時代土器（3）旧河道（3）

羽釜Baについては、ほぼ球形の体部に幅の狭い鐳が付くものである。口縁部は内傾し、端部は上方にわずかにつまみ出すようなナデ調整を施す。鐳の貼り付けられる位置は比較的口縁端部に近く、この貼り付けられた部分より上は横方向のナデ調整により仕上げられている。

体部外面は水平ないし左上がり方向を主体としたタタキ整形により仕上げられている。なお215には、下半部に水平方向のタタキ整形後、縦方向のタタキ整形が施されている。内面は、タタキ整形にともなう同心円文がナデ調整により消されている。

口径31.5cm～35.8cmと、鍋に比べて大型である。

羽釜Bbについては、口縁部が大きく内湾する点が大きな特徴である。口縁部は、縦方向のタタキ整形の後、内外面を横方向のナデ調整により仕上げられている。体部外面は、縦方向の後水平方向のタタキ整形により仕上げられている。内面は横方向を主体としたハケ調整により仕上げられている。

口径30.9cmと当タイプについても大型である。

以上3個体の羽釜についても、外面に多量の煤の付着が認められ、盛んに使用されたようである。

(3) 須恵器 (217～229・321～324・356～358・360・361・368～375)

土師器に比べると出土量は極端に少なく、椀・小皿・捏鉢・甕が出土しているにとどまる。

椀F

口縁部から底部まで残存しないものもあるが、基本的には同じタイプに分類できるものである。平底の底部からはほぼ斜上方に直線的に立ち上がり、口縁端部が肥厚するものである。底部から体部への立ち上がりはわずかに内湾気味のものも認められる。底部は回転糸切りにより切り離されている。

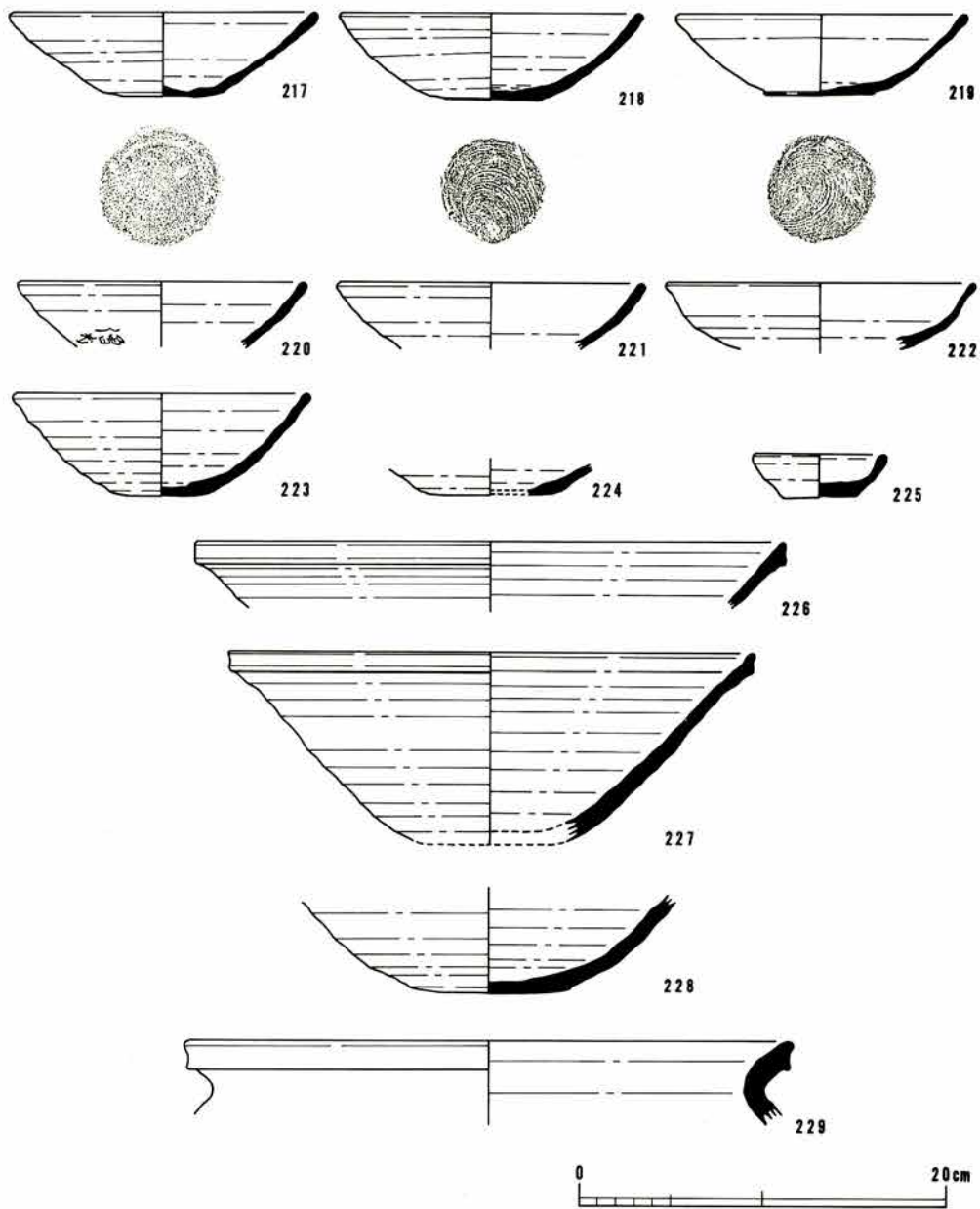
小皿

図化できたのは225の1個体のみである。底部は回転糸切りにより平底をなす。この底部から口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は肥厚している。内外面ともロクロによる回転ナデ調整により仕上げられている。口径7.0cmと小型である。

捏鉢

3個体図化できたが、口縁部から底部まで残存するものはない。3個体とも基本的には同タイプに分類されるものと考えられる。平底の底部からはほぼ直線的に体部が立ち上がる。口縁端部は上方につまみあげられ、外端面をなす。残存する228の底部は回転糸切りにより切り離されている。

なお227の内面下半は、使用により器表面が顕著に磨滅している。



挿図98 鎌倉時代土器（4）旧河道（4）

甕B

図化できたのは1個体のみである。体部から「く」字形に短く屈曲する口縁部を有し、端部を上方にわずかにつまみ上げている。頸部から口縁部にかけては、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。体部外面は、わずかしか残存していないため明確に判断できないがタキ目が認められ、内面は板状工具によるナデ調整によって仕上げられている。

口径32.6cmと比較的大型の器種である。

(4) 瓦器 (230~316・325~331・331~337・359・362・367~381)

器種としては小皿・椀と鉢が出土している。椀が大多数を占め、量的にまとまって出土している。各個体とも土器自体の残存状況が非常に良好である。このため、暗文についても詳細に観察できた。

小皿

図化した土器は、形態および基本的な整形技法の点において同じ特徴をもつものである。底部は手捏ねにより整形され、口縁部を横方向のナデ調整により仕上げている。また底部内面は、ナデ調整により仕上げられている。

このため、底部外面は指頭圧痕が顕著である。また口縁部のナデ調整については、2段にわたって行われるもの(230~238・240・242)と、1段のみのも(239・241・243)との二者が認められる。特に2段のナデ調整については、上段のナデは口縁端部をつまみあげるようなナデで、端部はわずかに面をもつ。

暗文が施されているのは、239の1個体のみである。ほぼ等間隔に平行文が施されている。法量的には、口径はほぼ一定しており、特に8cm前後のものが多い。

椀

比較的まとまって出土しているが、基本的な形態は同じである。断面逆三角形の貼り付け高台に、椀形の体部が付くものである。体部は、内型を用いたものと考えられ、外面には指頭圧痕が顕著に認められる。口縁部は、横方向のナデ調整によって仕上げられているが、1段のナデによるもの、2段のナデによるもの、そして3段のナデによるものとが認められる。3段のナデ調整を施すものについては、強いナデ2段と弱いナデ1段の組合せが一般的である。そして、2段のナデ調整を施すものと3段のナデ調整を施すものに、端部を上方につまむようなナデを加えるものが比較的多く見られ、端面を成している。

なお、口縁部の形態において、特異な特徴を有するものに247がある。3段のナデ調整により仕上げられているのであるが、内面にわずかな沈線が施されている。他の瓦器椀には認められない特徴である。

また、高台の断面形については、図化したもののなかに断面逆台形状を呈するものも少なか

らず認められる。しかし、実際に土器を見てみると、基本形態は逆三角形で、部分的に押しつぶされて断面逆台形を呈しているものがほとんどである。

ところで高台についても、特異な特徴を有するものが1点存在する。それは284で、高台が二重に貼り付けられている。外側の高台に対して内側の高台は、細い粘土紐をそのまま貼りつけた程度のもので、断面は蒲鋒形を呈している。外側・内側ともに同一面に接地する。

当遺跡出土の瓦器碗で大きく異なるのは暗文の施し方で、大きく二つに分けることができる。外面に暗文を施すもの（碗A-240~248）と、施さないもの（碗B-249~315）の二者である。量的には後者が大半を占める。

碗Aについては、内面と外面とではその密度が明らかに異なる。内面は大変密に丁寧に施されているが、外面については大変粗い傾向にある。しかも、内面については同心円状に連続させているが、外面については何分割かして、その間を数往復させる程度である。ただし、内外面とも、暗文の原体は同じものを使用しており、相対的に碗Bより細筋である。

また、内面見込みにも暗文が施されているが、確認できるものはすべてジグザグ文である。なお、246については、底部外面にも暗文が施されている。特にこの暗文は、底部外面から体部下半まで続くものであることが高台剥離面で観察でき、高台を貼り付ける以前に施されている点が注目される。

次に碗Bであるが、個体によってその密度に差が認められる。相対的に碗Aの内面に施すものよりは粗い傾向にある。特に、口縁部のナデ調整が1段のものについては、粗い傾向が指摘できる。逆に3段のナデ調整を施すものには、粗く施されるものは認められなく、密に施されているものが多い。内面見込みについては、確認できるものは全て暗文が施されているが、いずれもジグザグ文である。これらのなかで、二重に高台が貼り付けられていた284が、ジグザグ文を直交する方向に施しているのが、唯一異なるものである。

なお、285については、246同様底部外面に暗文が認められるが、体部外面には暗文が全く施されていない。

以上指摘した特徴の他に、底部外面に墨書したものが認められる（280~283）。280は「米光」と明確に判読できものである。当遺跡を含む地域に関する文献に「米光保」の記述がみられ、これとの関連で注目される。次に281は、十字を基本とした墨書であるが、文字であるのか記号であるのかは判断できない。最後に282と283は丸印を墨書したものである。

鉢

1個体のみ出土で、しかも口縁部がわずかに残存するのみである。端部内面を玉縁状に肥厚させるものである。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。内面については炭素の吸着が不十分である。

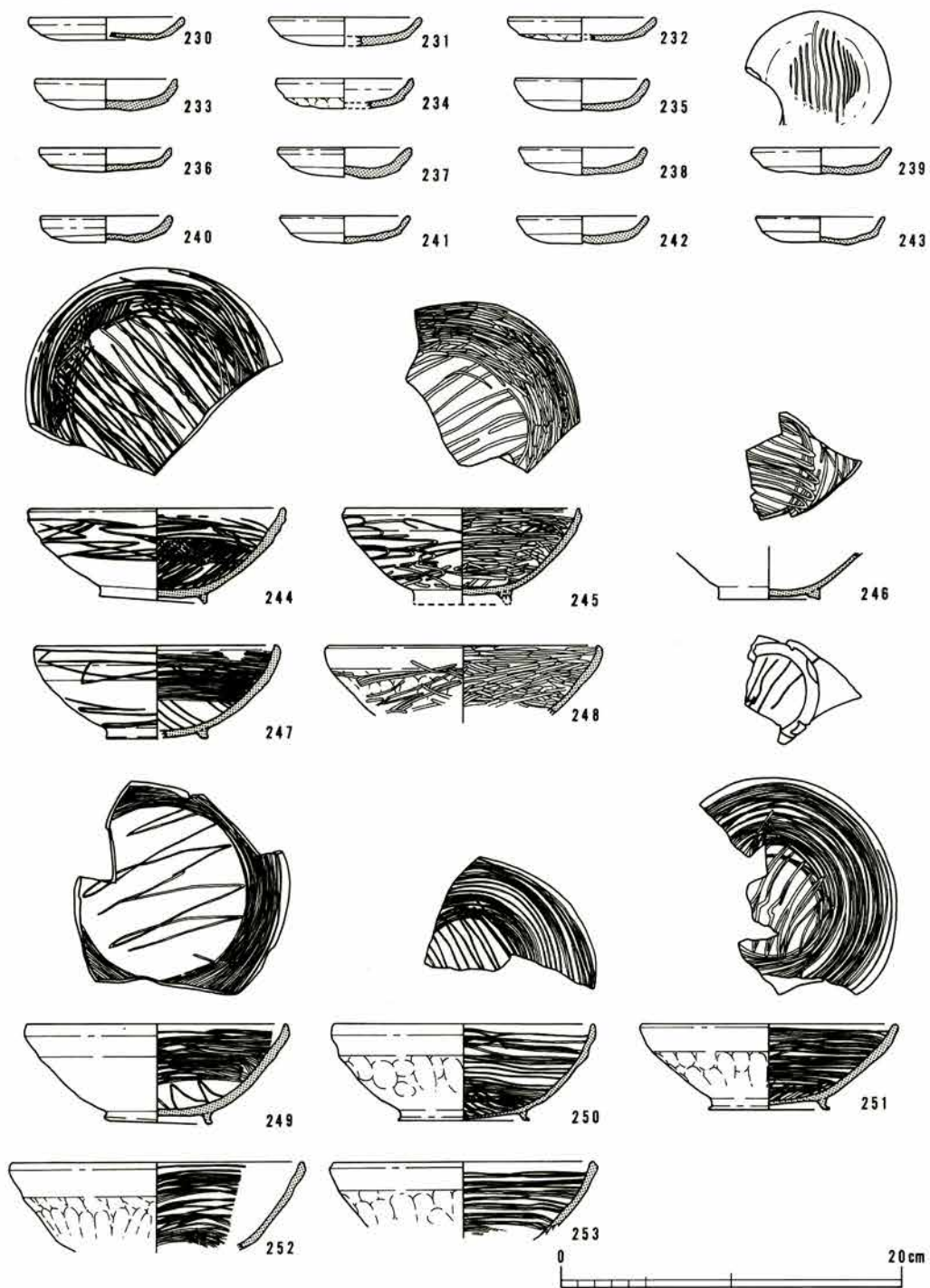
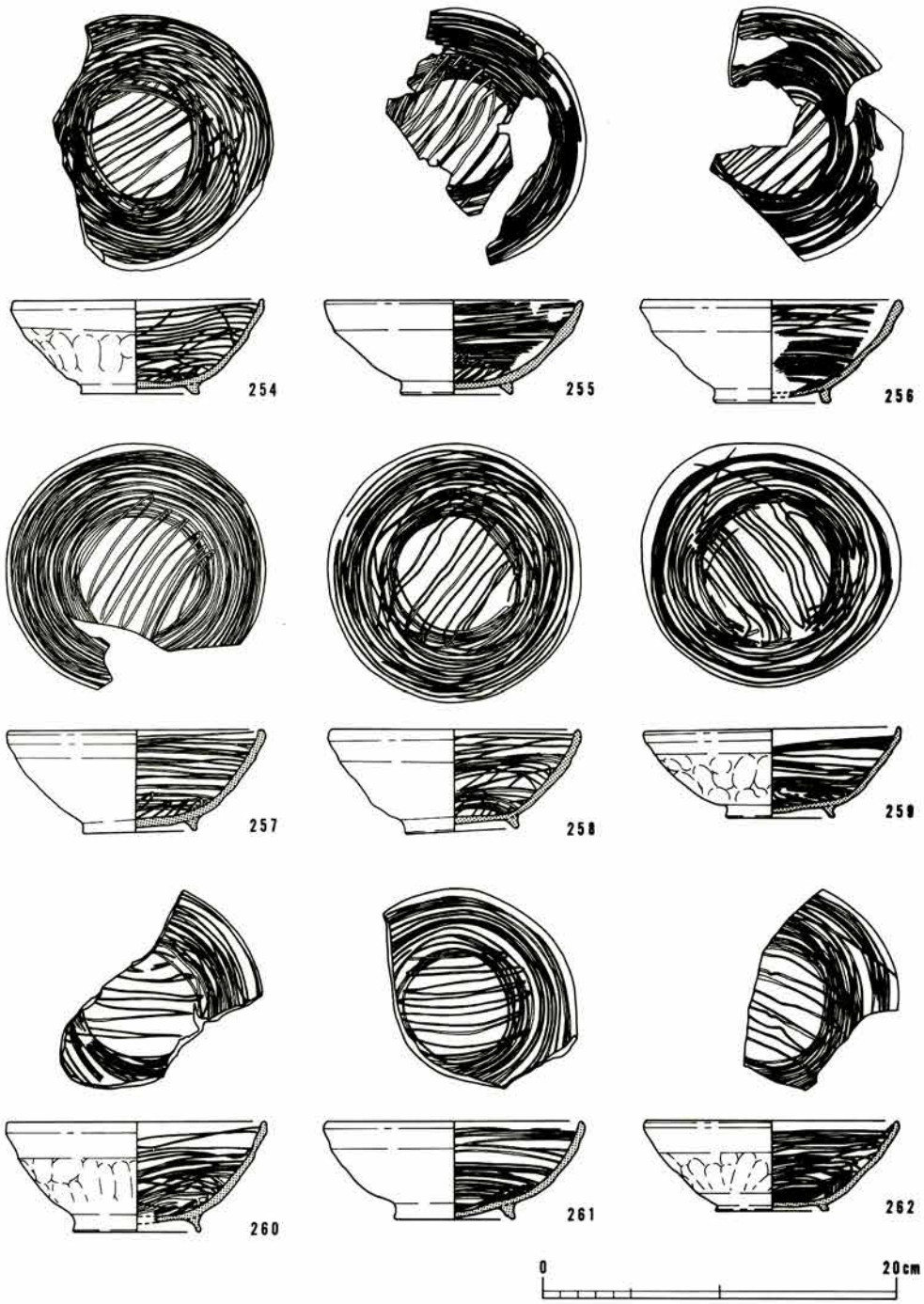


插图99 鎌倉時代土器（5） 旧河道（5）



挿図100 鎌倉時代土器（6） 旧河道（6）

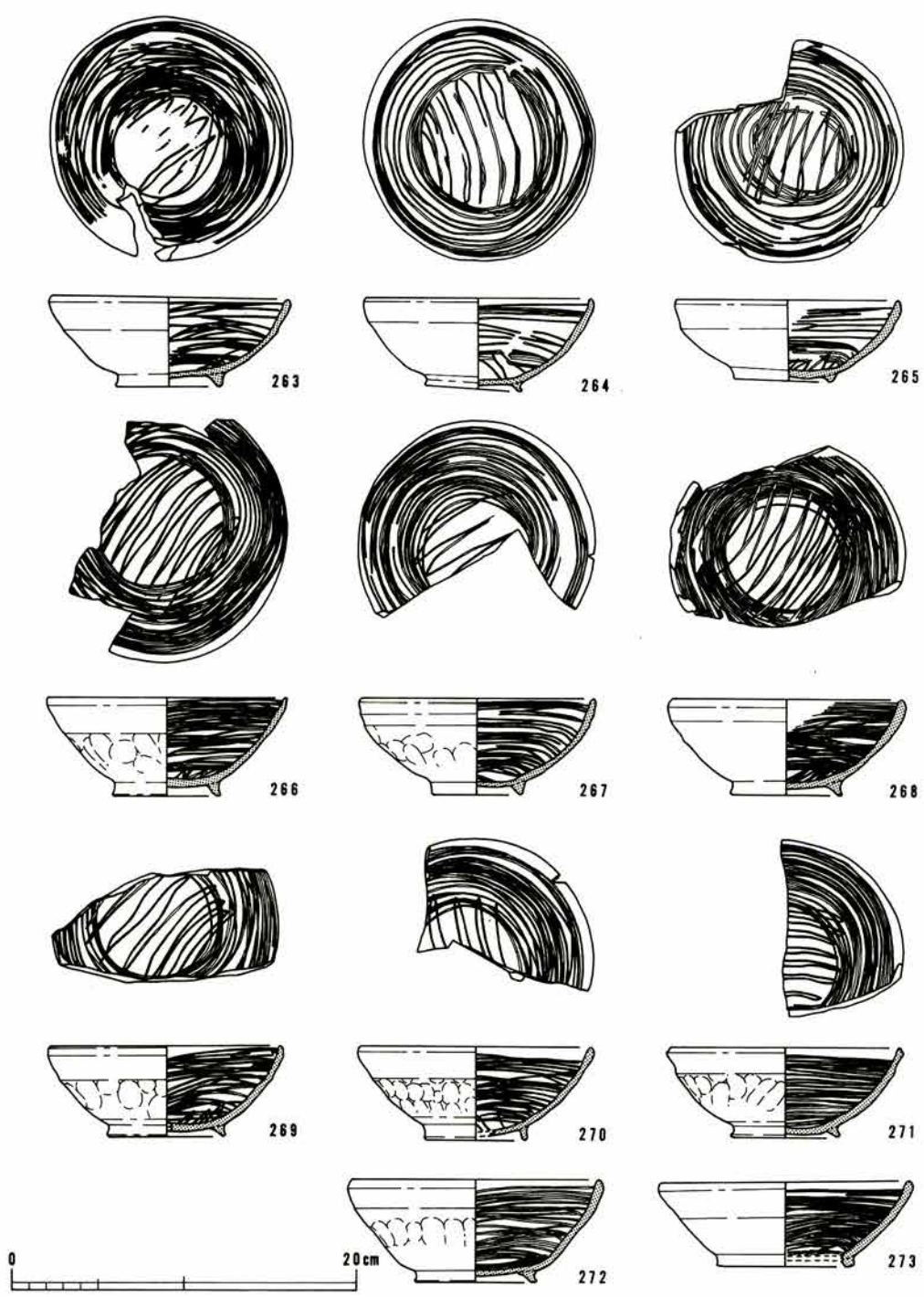


插图101 鎌倉時代土器（7） 旧河道（7）

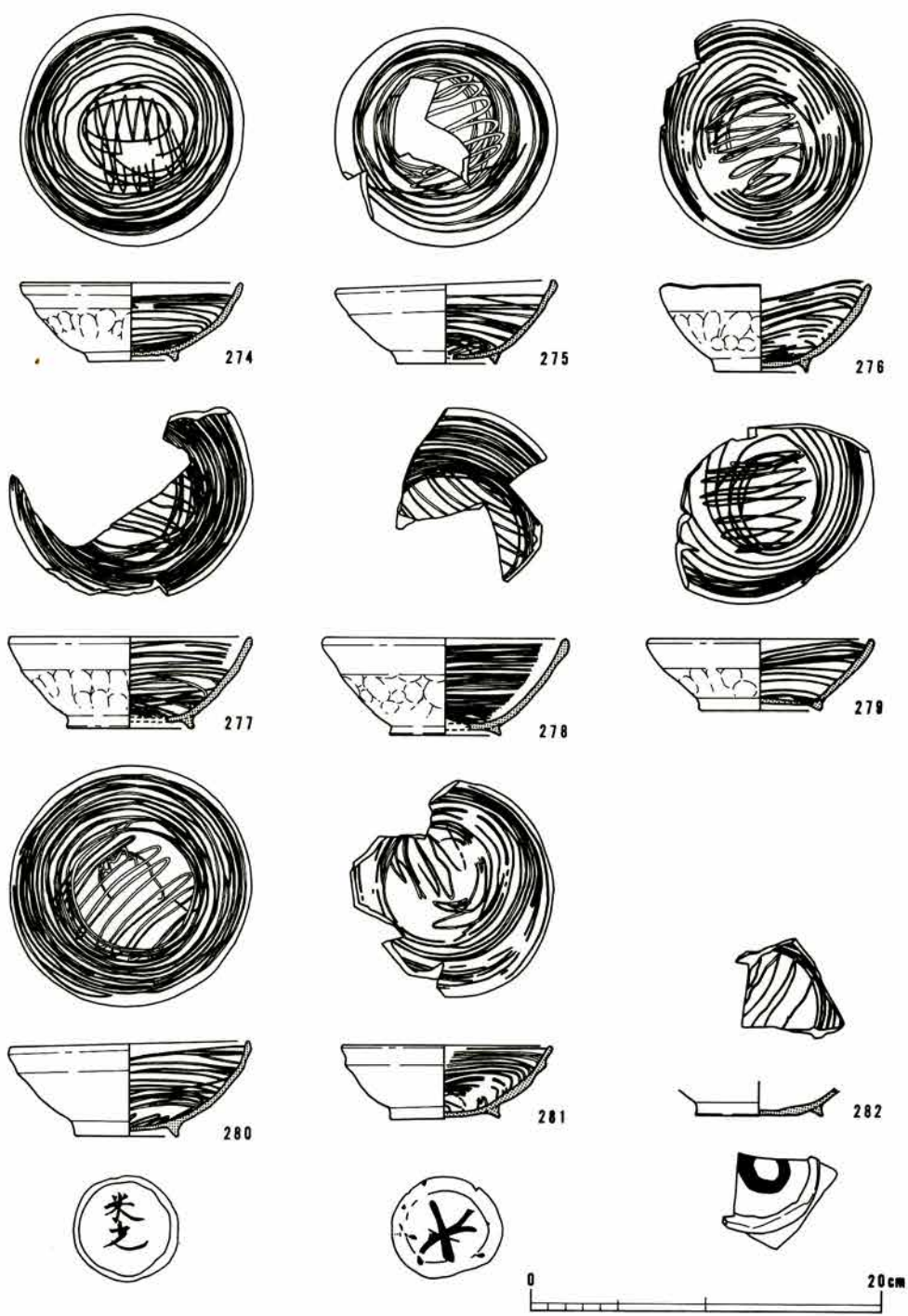


插图102 鎌倉時代土器（8）旧河道（8）

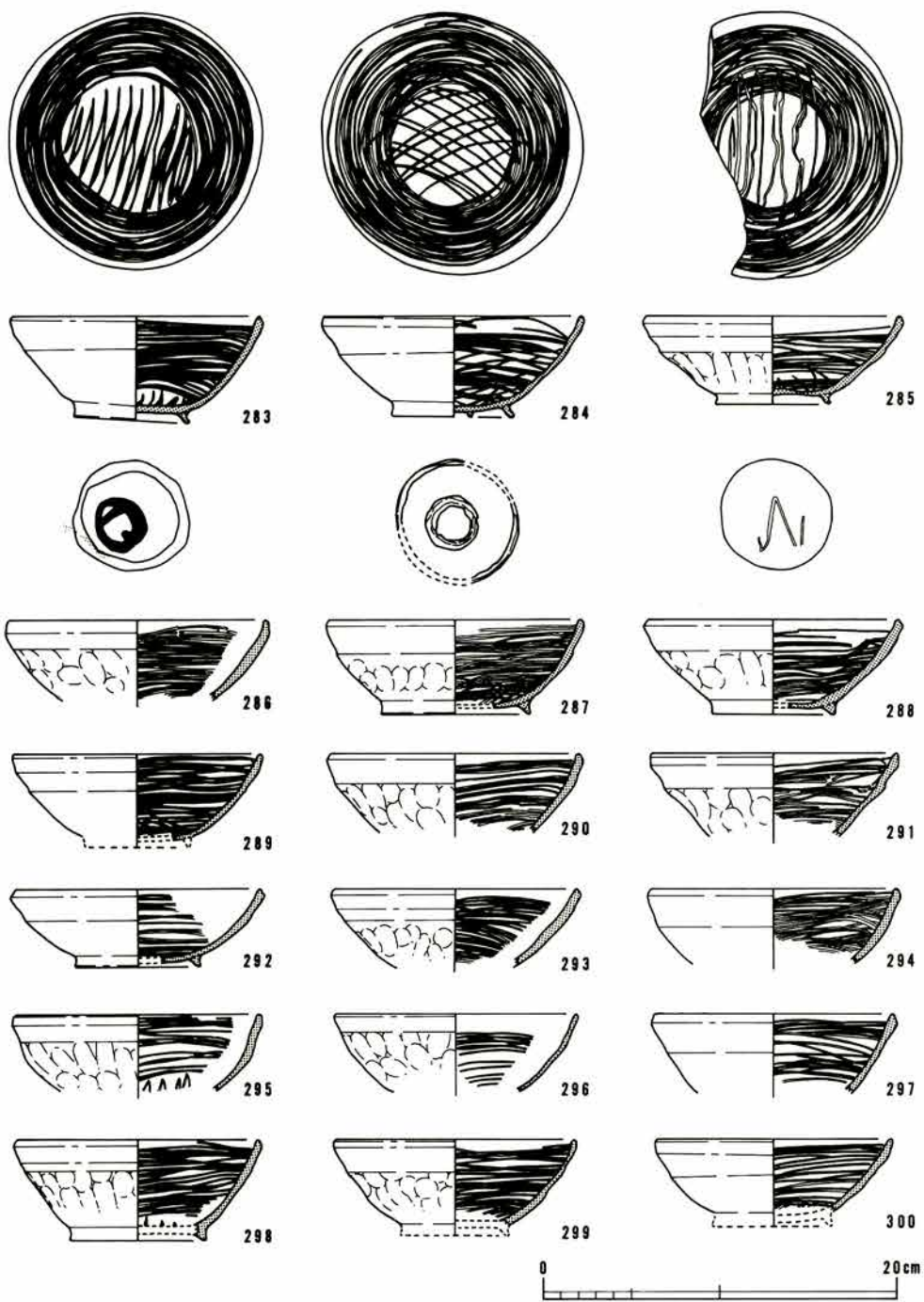


插图103 鎌倉時代土器（9） 旧河道（9）

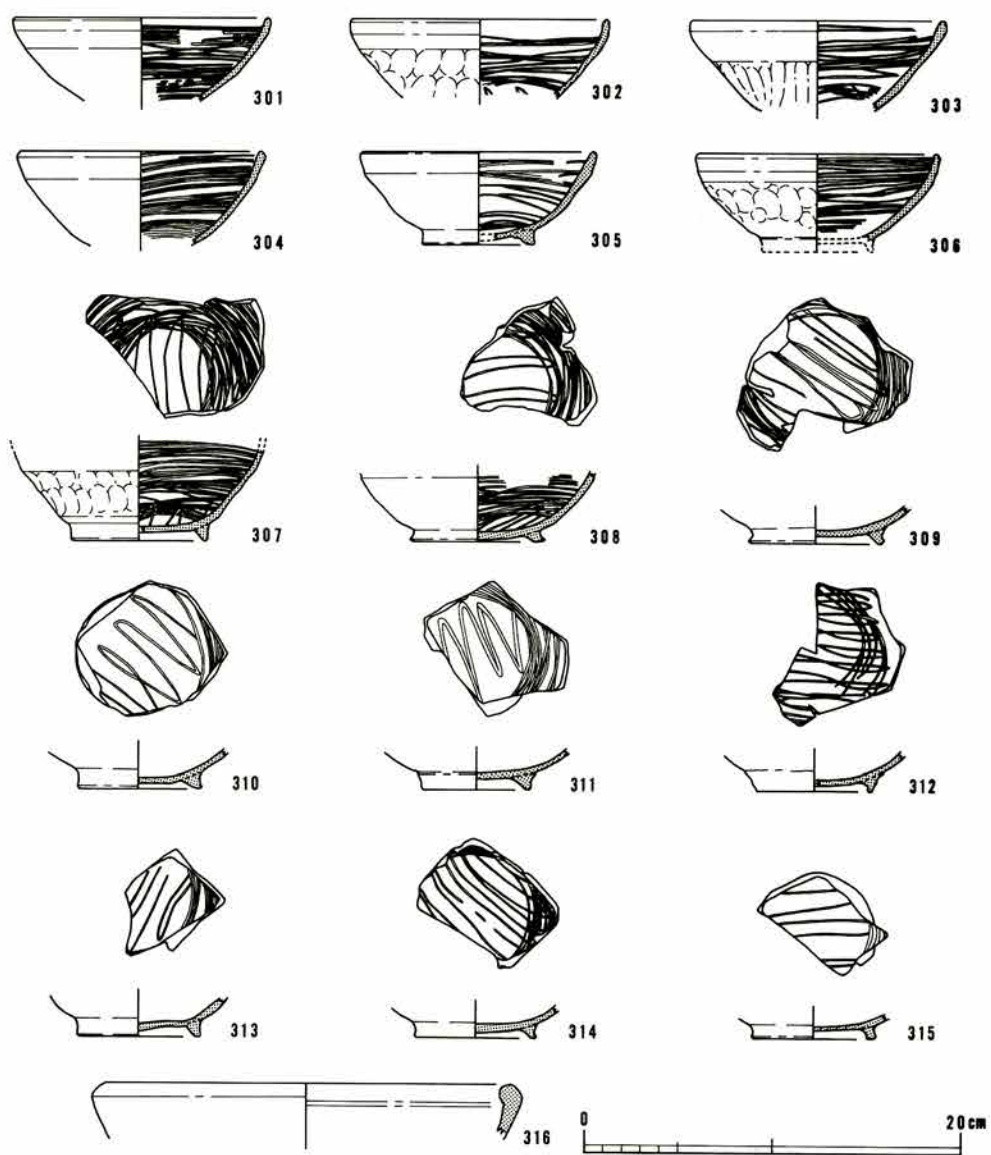


插图104 鎌倉時代土器 (10) 旧河道 (10)

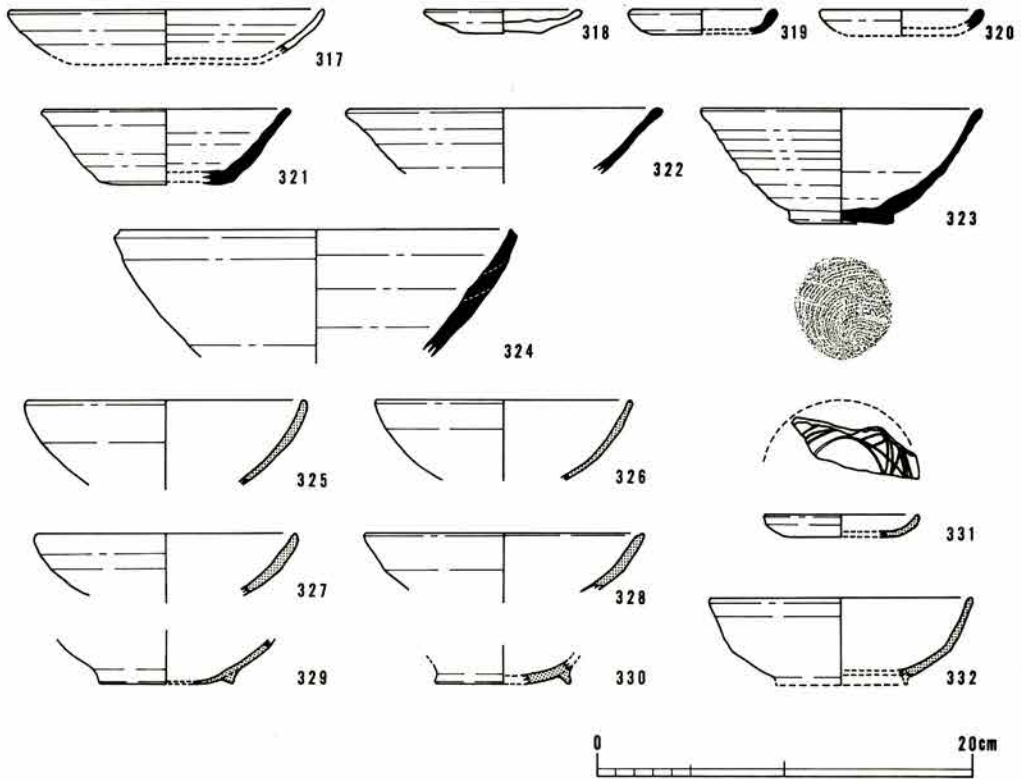


插图105 鎌倉時代土器 (11) 柱穴

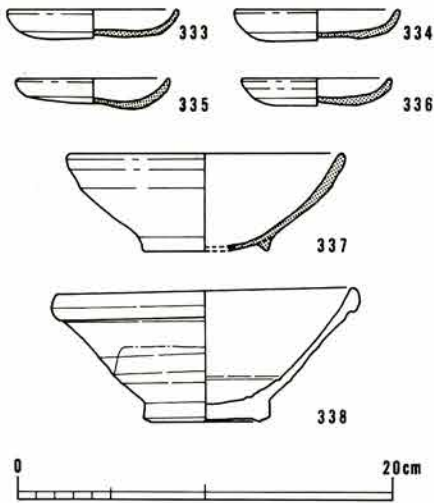


插图106 鎌倉時代土器 (12) 墓 1

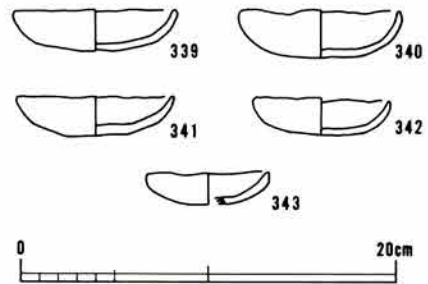
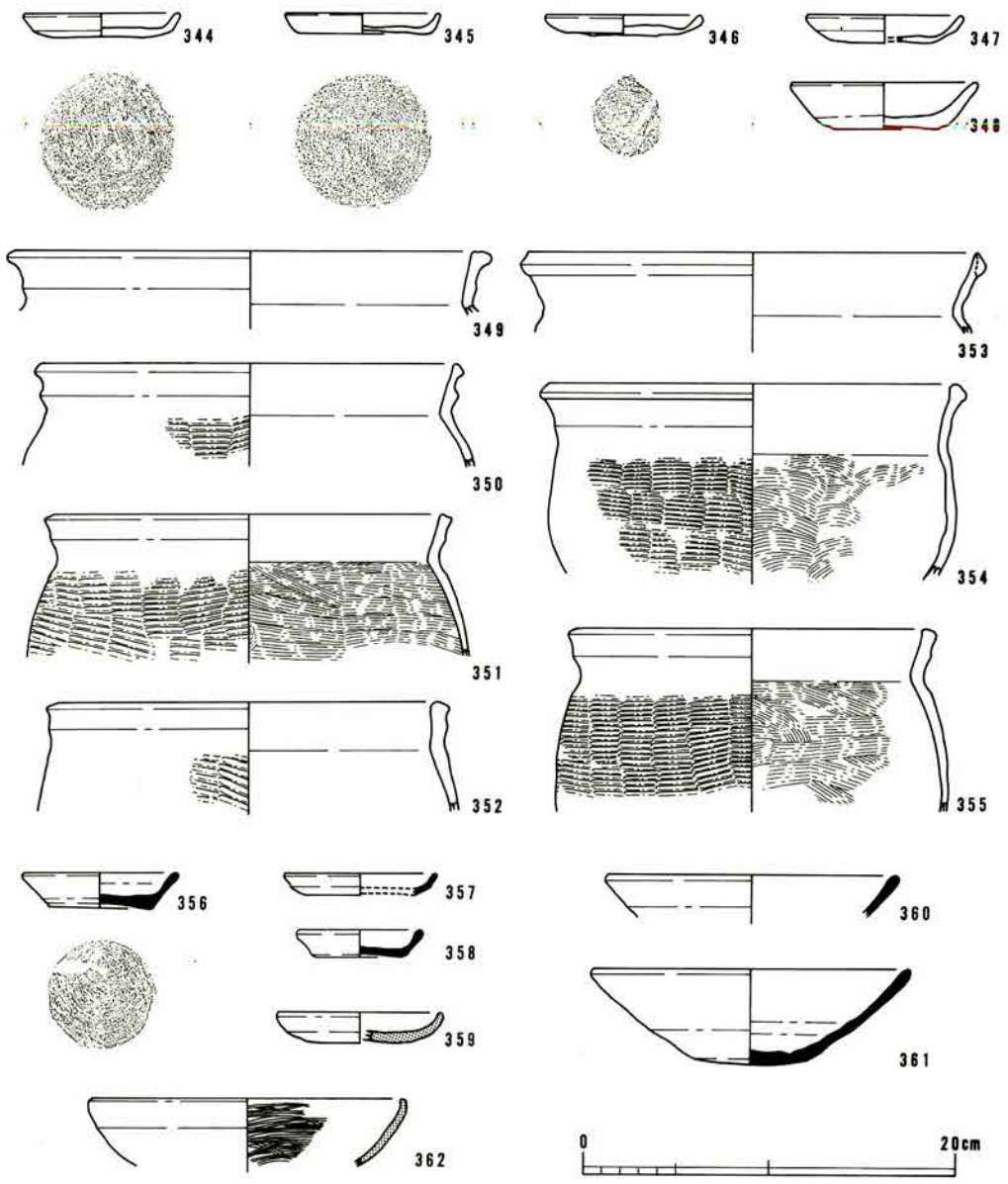


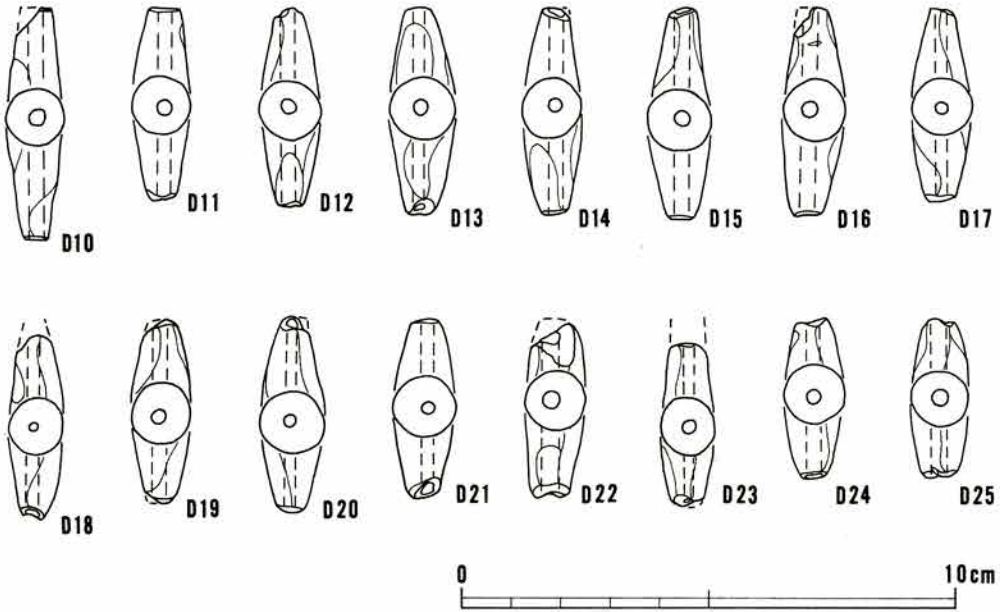
插图107 鎌倉時代土器 (13) 土坑 3



挿図108 鎌倉時代土器 (14) 土境

4. 土製品（挿図109）

土錘が16点出土している。いずれも旧河道上層から出土している。全てが完存するものではないが、いずれも同じタイプに分類されるもので、平面形は紡錘形を呈する。中心部に径3mmの穴が穿たれている。最大径はほぼ中央部にあり、1.1cm～1.9cmとほぼ一定している。また長さは、D10が4.6cmとやや長い、他は3.5cm前後と一定している。



挿図109 平安～鎌倉時代土錘 旧河道

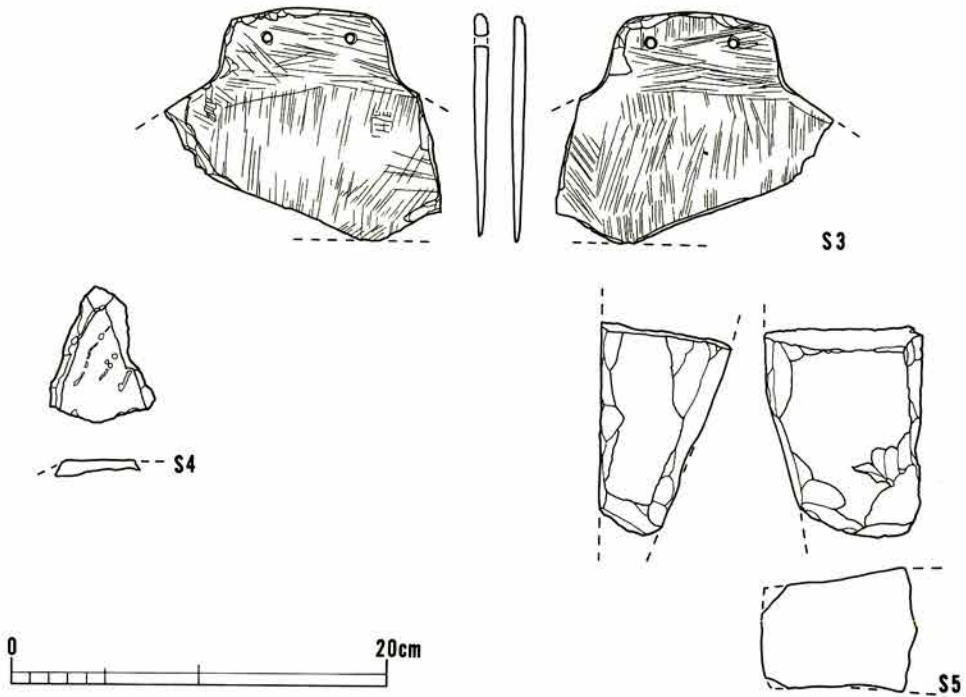
5. 石製品（挿図110）

3点出土しているが、完存するものはない。いずれも、旧河道下層から出土している。

S1は、石庖丁と考えられ、全面にわたって偏平に研磨され、下端のわずかに残存する部分は薄く仕上げられ、刃部状を呈する。上端部には台形状の突起が削り出され、径6mmの穴が2穴穿たれている。また、両面にわたって擦痕が顕著に観察される。厚さは7.5mmである。平安～鎌倉時代の土器に伴って出土しているという時代背景を考えると、どのように使用されていたのかは推定できない。

S2は砥石の小片で、残存する擦面は1面である。残存する規模は7.1cm×5.6cmである。

S3も砥石である。残存状況はよくなく、擦面をなす2面が残存するのみである。残存する規模は、11×8.4×6.9cmである。



挿図110 平安～鎌倉時代石製品 旧河道

6. 木製品 (挿図111～123)

井戸1および旧河道・東堀から出土している。井戸1から出土した木製品は、W1の水溜に転用されていた曲物側板を除いては、埋土内から出土したものである。

出土した木製品のなかで、図化できたのは92点で、主な内容は、木筒・容器・農具・紡織具・服飾具・祭祀具・食事具・漆器・加工材に分類できる。以下、その概要について報告する。

(1) 木筒 (挿図111)

井戸1から4点呪符木筒が出土している。溜水の水溜の上で4点が纏まって発見されており、ヒノキ板を用い長さ約20cm、幅約2cm、厚み2mmの木筒032型式で上の括れ部には紐痕が見られ、結束され使用されていたと考えられる。木筒の表記は、表に異なった符録を付け、呪句「急急如律令」は同じとし、裏に書体・位置を変えるが同じ呪句「九九八十一 井」を用いている。井戸を埋め、魂鎮めの際に使用された4種類の呪い札である。

(2) 容器 (挿図112・113・115~120)

盆・曲物・折敷が出土している。

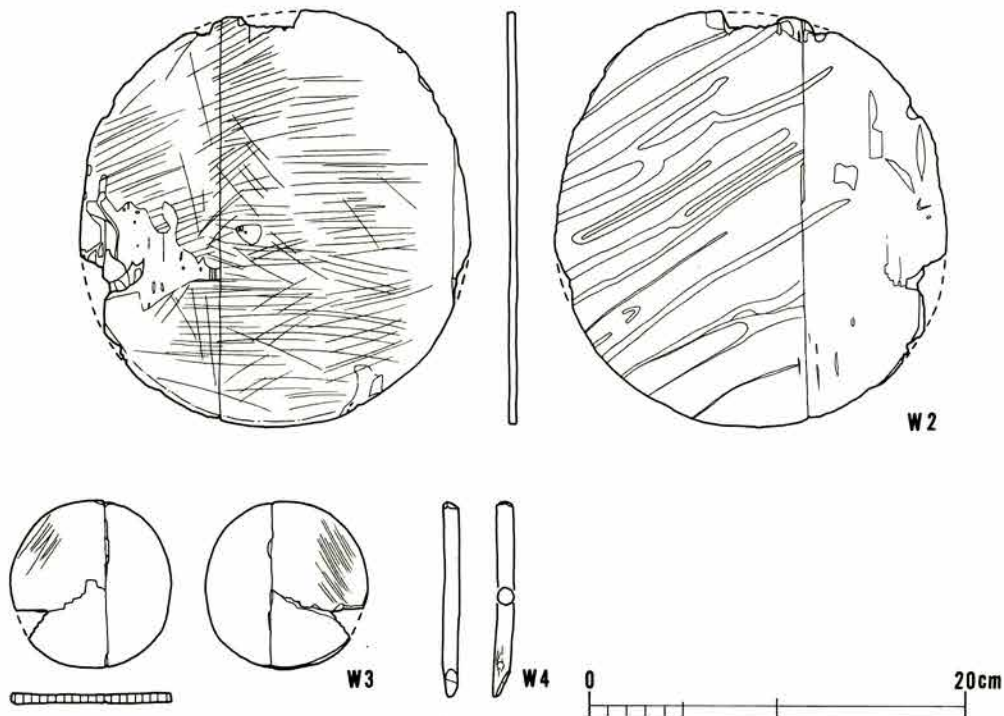
盆 2点 (W14・W15) 出土している。2点とも完存するものはないが、皿形を呈する割物である。平面形は正円形をなすものと推定される。W14は、旧河道から出土したもので、口縁部の立ち上がりは1.2cmである。W15は、東堀から出土している。口縁端部を欠く。

曲物 図化できたのは21点である。完存するものはなく、側板のみが残存するものと、底板のみが残存するものとに分けられる。

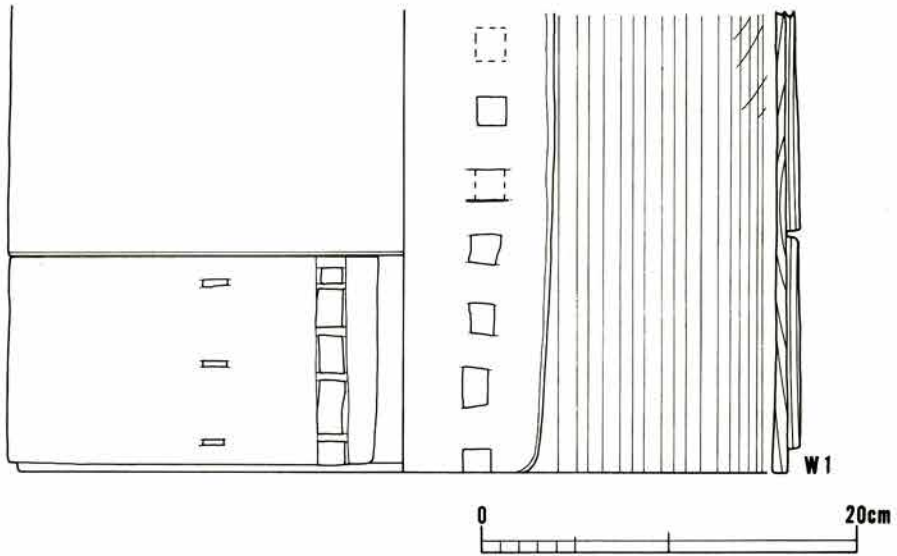
側板のみが残存するものは、井戸1の水溜に転用されたW1の1点のみである。上端部を欠くため、正確な規模は明らかにできない。径44.8cmを測り、残存高は24.4cmである。1ヶ所で綴じ合わされており、その綴じ方は、残存する範囲で1列下外7段綴じ⁽²⁾である。

この側板の周囲に箍が2段にわたって巻かれている。上段の箍は残存状況が悪く、その綴じ合わせ方法は不明である。下段の箍は、幅11cmを測り、1ヶ所で綴じ合わされている。その綴じ合わせ方法は、1段上内下外5段綴じである。

底板のみが残存するものは、その平面形が正円形ないそれに近いものと不整形なものに分けられるが、後者のものはW27の1点のみである。前者については、大きさにおいて径約6cm (W16) から39.7cm (W33) とバリエーションが認められる。



挿図112 平安～鎌倉時代木製品 (2) 井戸1 (2)



挿図113 平安～鎌倉時代木製品（3） 井戸1（3）

W1～3が井戸1、W18・W20・W26・W27・W31・W32が東堀、他は旧河道から出土している。

折敷 10点出土している。ただしW27については、折敷とは断定できない。完存するものはなく、W38が側板と底板共残存する以外は、全て底板のみの残存である。平面形は、ほぼ正方形に近いものと、長方形を呈するものとの2者がある。また大きさについても、個体差が認められる。そして約半数の折敷には針書刻線が認められるが、特にW39～W41については両面に認められる。

W38については、全体の約3/4残存するものであるが、平面形は正方形に近い長方形を呈するものと考えられる。側板は、幅1.7cmを測る。底板との綴じ合わせは3ヶ所確認でき、側板の中央部に穴をあけ、底板からの紐を通して綴じ合わせている。また、側板のコーナー部分にはケビキが入れられている。

W34・W35・W42・W43・W46が旧河道からの出土以外は、東堀からの出土である。

(3) 農具 (挿図114)

確実に農具に分類できるのはW9の木錘のみである。

木錘 W9の1点が出土している。一部を欠くものの、ほぼ完存するものである。丸材の両端3cmを残し、中央部に向かって円錐状に削り込んでいる。両端部の径4.3cm、中心部の径1.4cmを測り、全長は12.5cmである。旧河道から出土している。

(4) 紡織具 (挿図114)

紡錘車が出土している。

紡錘車 W10の1点が出土している。ほぼ完存する製品で、不整形な円板の中央に径0.45cmの穴が開けられている。この穴内には、心棒が残存している。旧河道から出土している。

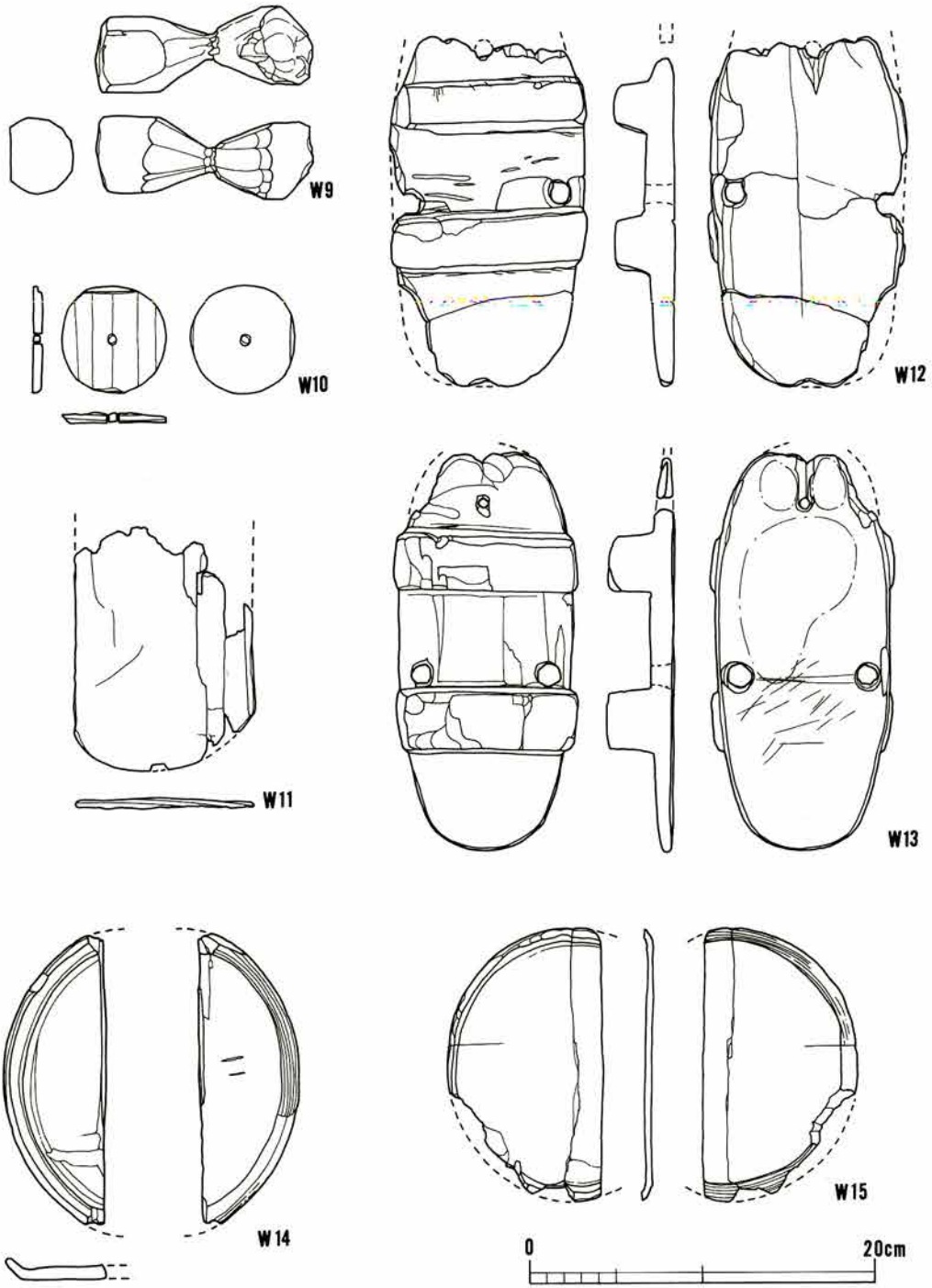
(5) 服飾具 (挿図114)

下駄と草履が出土している。

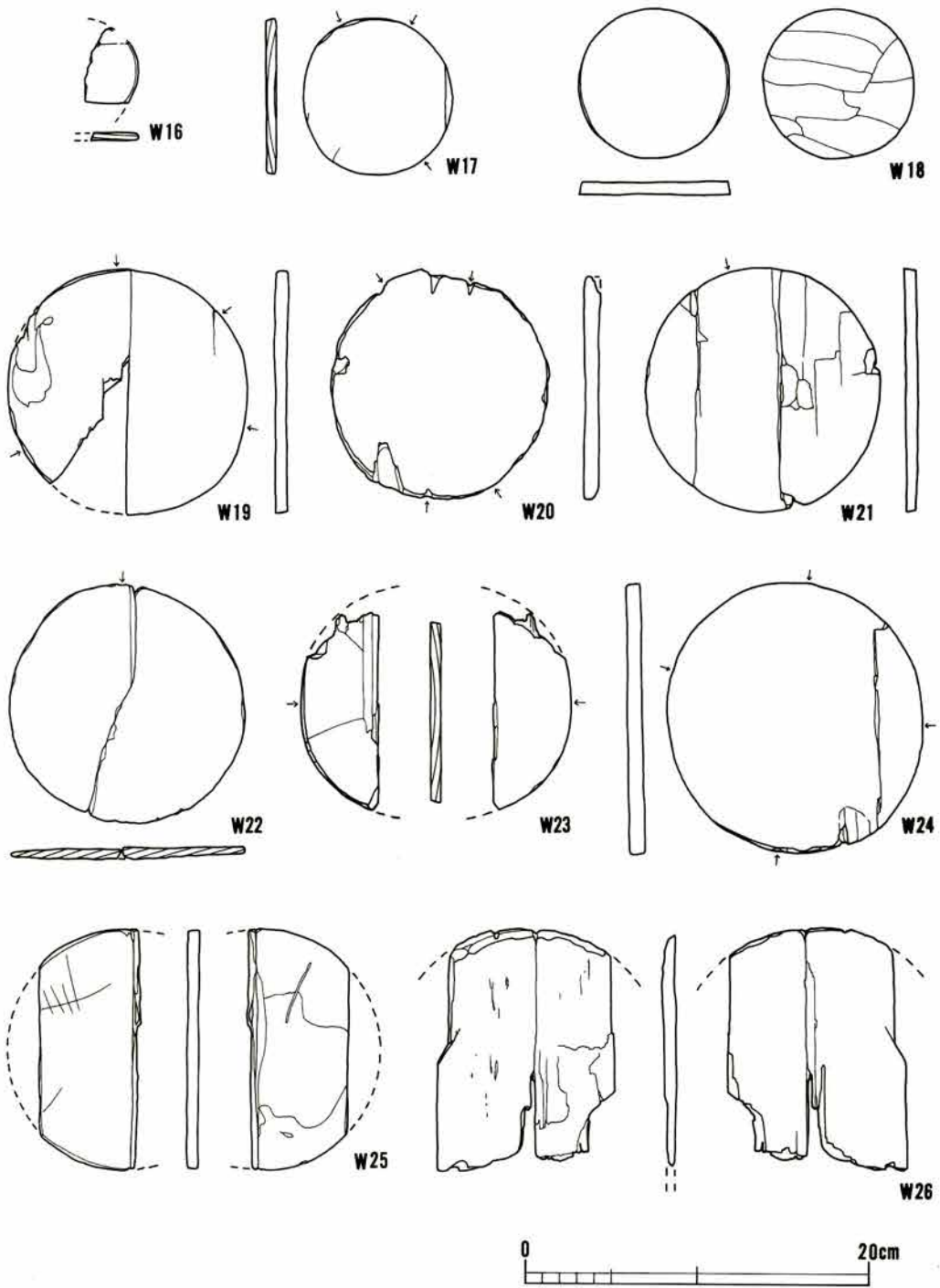
下駄 W12とW13の2個体が出土している。2点ともほぼ完存する製品で、同じタイプに分類されるものである。台と歯を一木からつくる連歯下駄で、鼻緒孔の位置も、前壺を前歯の前にあけ、後壺も後歯の前にあけている。前壺の位置は、台のほぼ中央部である。台下面を基準とした歯の高さは、W12が1.5cm、W13が2.7cmである。

W12が東堀から、W13が旧河道から出土している。

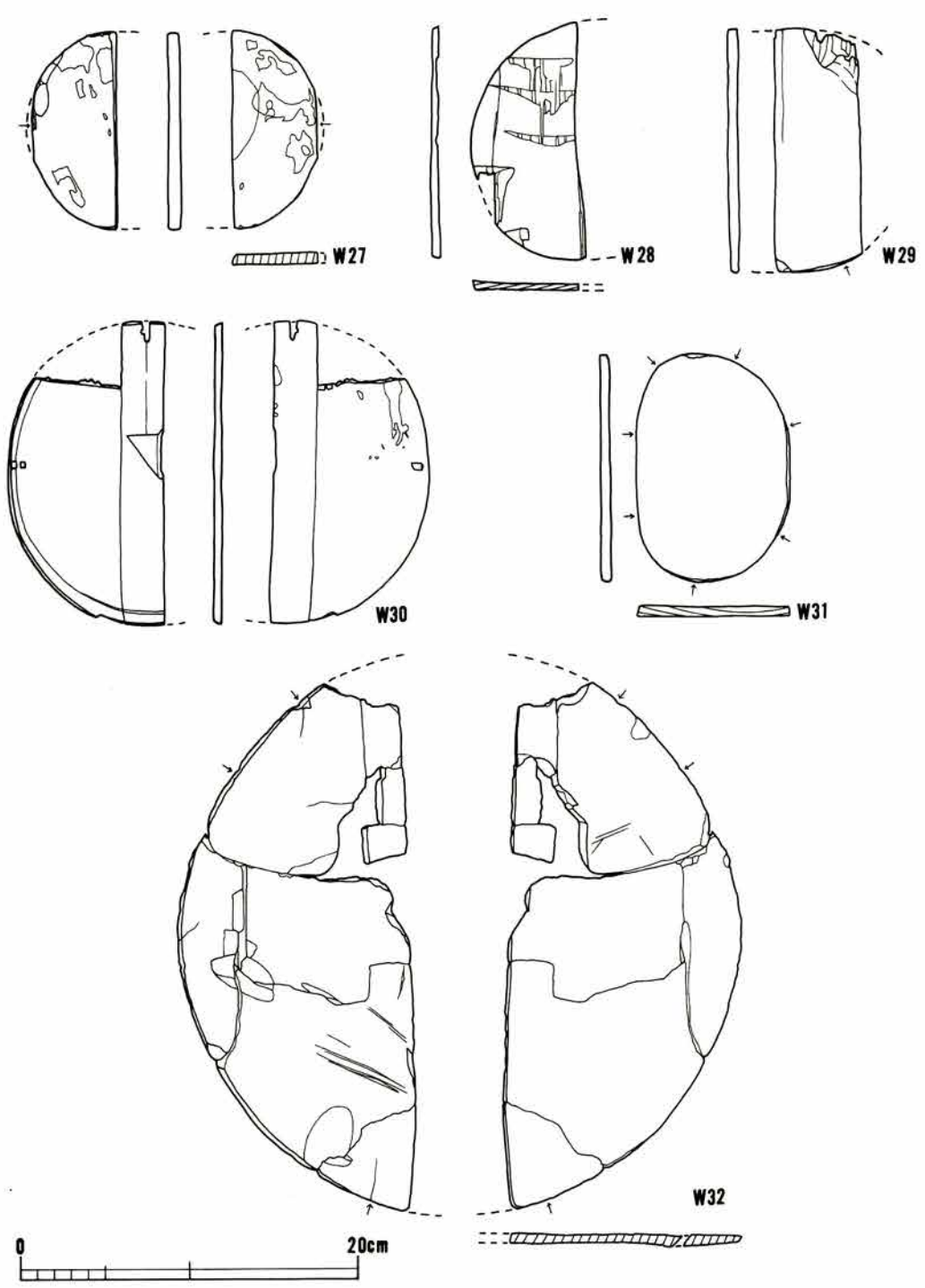
草履 W11の1点が出土している。ただし完存するものではなく、形態およびその厚さからの推定であり、草履と断定できるものではない。旧河道から出土している。



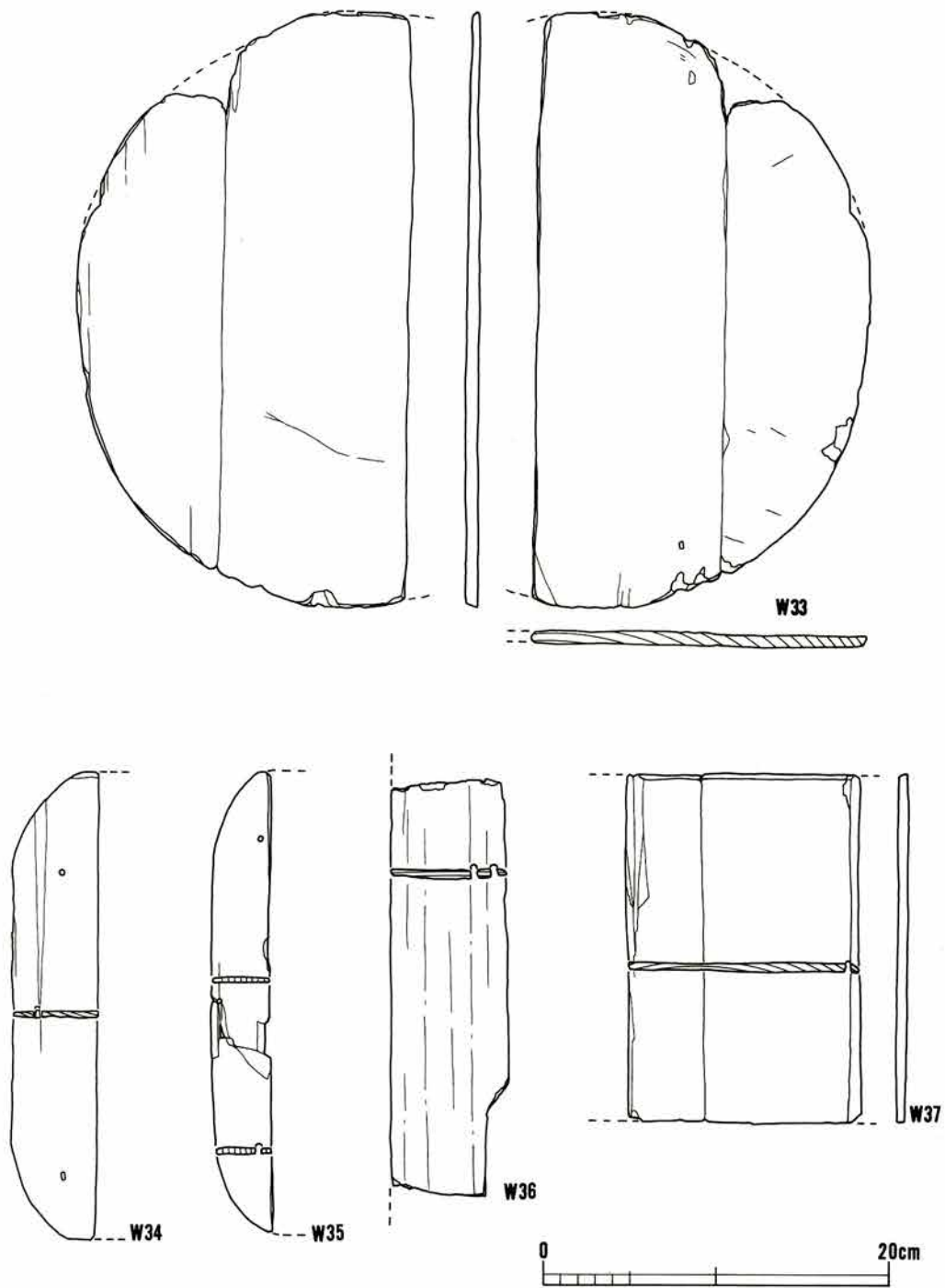
挿図114 平安～鎌倉時代木製品（4）旧河道（1）



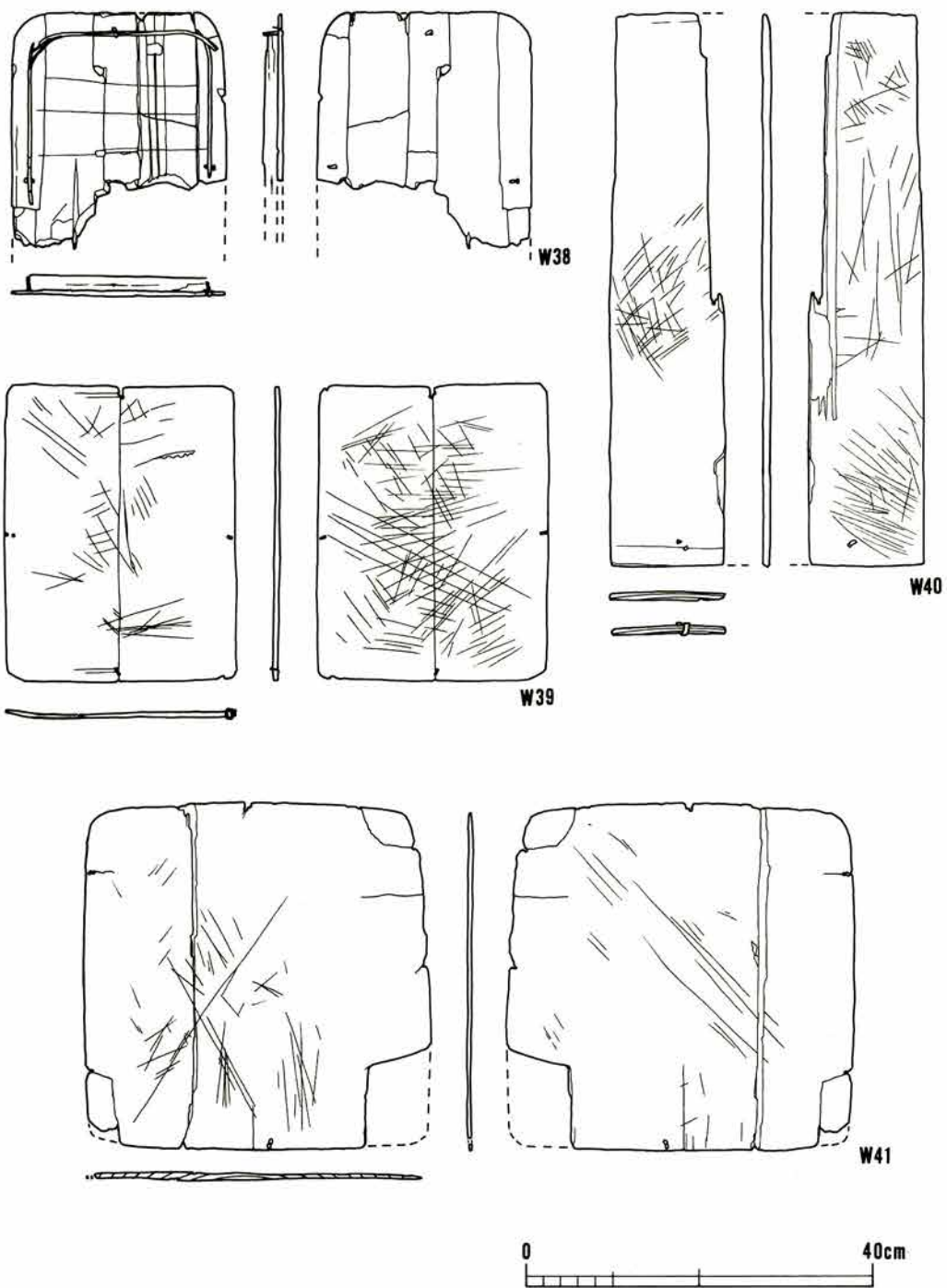
挿図115 平安～鎌倉時代木製品 (5) 旧河道 (2)



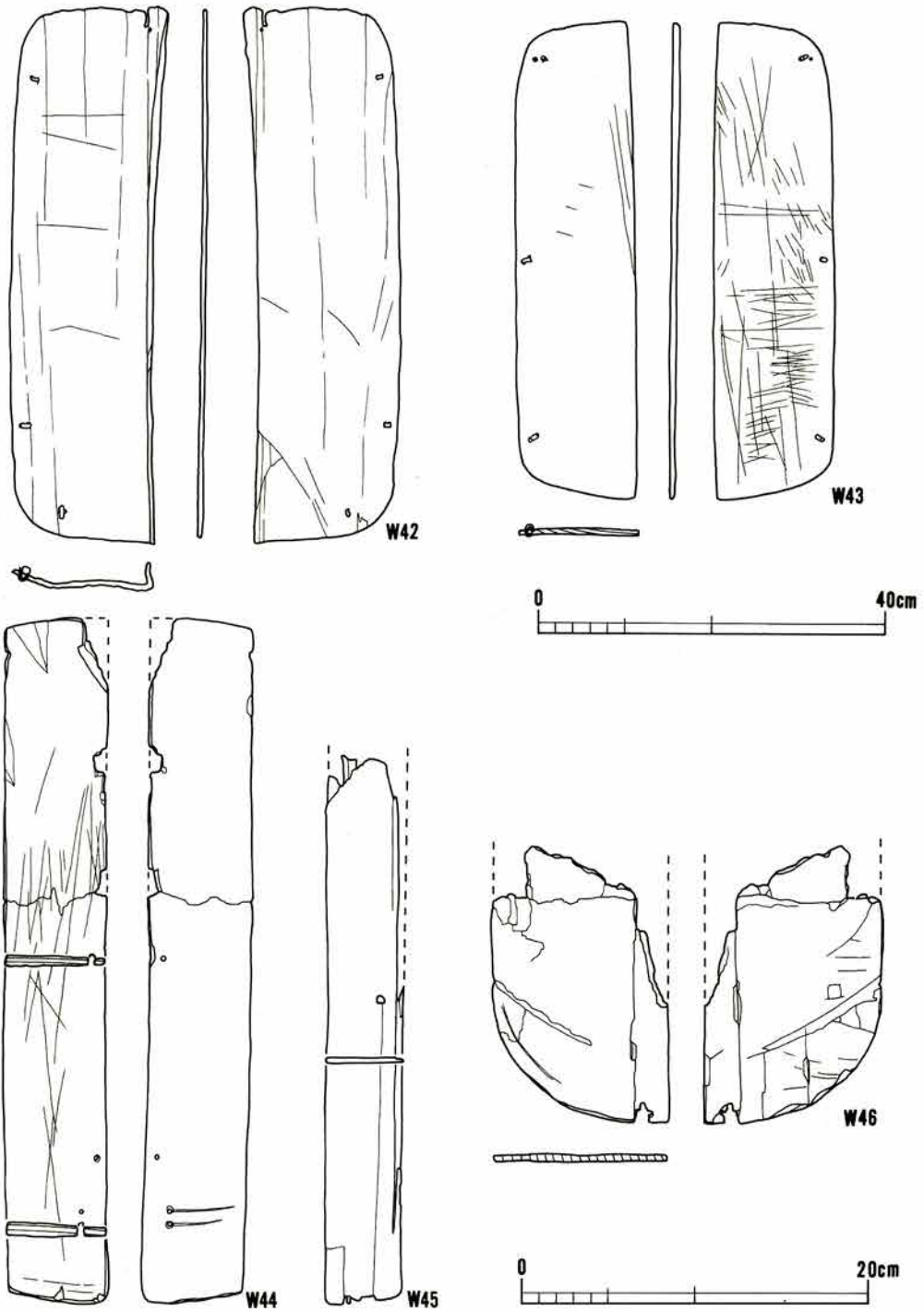
挿図116 平安～鎌倉時代木製品 (6) 旧河道 (3)



挿図117 平安～鎌倉時代木製品（7） 旧河道（4）



挿図118 平安～鎌倉時代木製品（8）旧河道（5）



挿図119 平安～鎌倉時代木製品（9）旧河道（6）

(6) 祭祀具(挿図120・121)

人形・木剣・斎串・他が出土している。

人形 9点出土している。完存するのは2点に限られるが、9点とも正面全身人形に分類されるものである。W55が東堀から出土している以外は、全て旧河道から出土している。

W47は、全長16.6cmと大変小型で、完存する製品である。ただし、厚さが7mmと他の人形と比べて厚く、仕上げも雑で平滑に仕上げられていない。頭部は山形にかたどられ、表面には目と口が墨書によって表現されている。頸部は2辺の等しいV字形に切り込まれ、肩部はなで肩をなす。胴部には手の表現は認められない。腰部は一辺(下辺)の短いV字形に切り欠かれている。脚部はいわゆるO脚形をなし、脚の先を切り欠くことによって足首を表現している。

W48は、腰部以下を欠くものであるが、残存する部位から判断して小型に分類されるものである。頭部を直線的に表すが、表面には目・口等の表現は認められない。頸部は台形状に切り欠かれ、頸部高が他の人形と比較して高く、4.2cmを測る。肩部は怒肩に近い。胴部には手の表現は認められない。

W49は、胴部下半から脚部にかけて残存するもので、W44同様小型に分類される。腰部をわずかな切り欠きによって表現し、胴部と脚部の境をなす。脚部の先端は、削り込み尖らす。

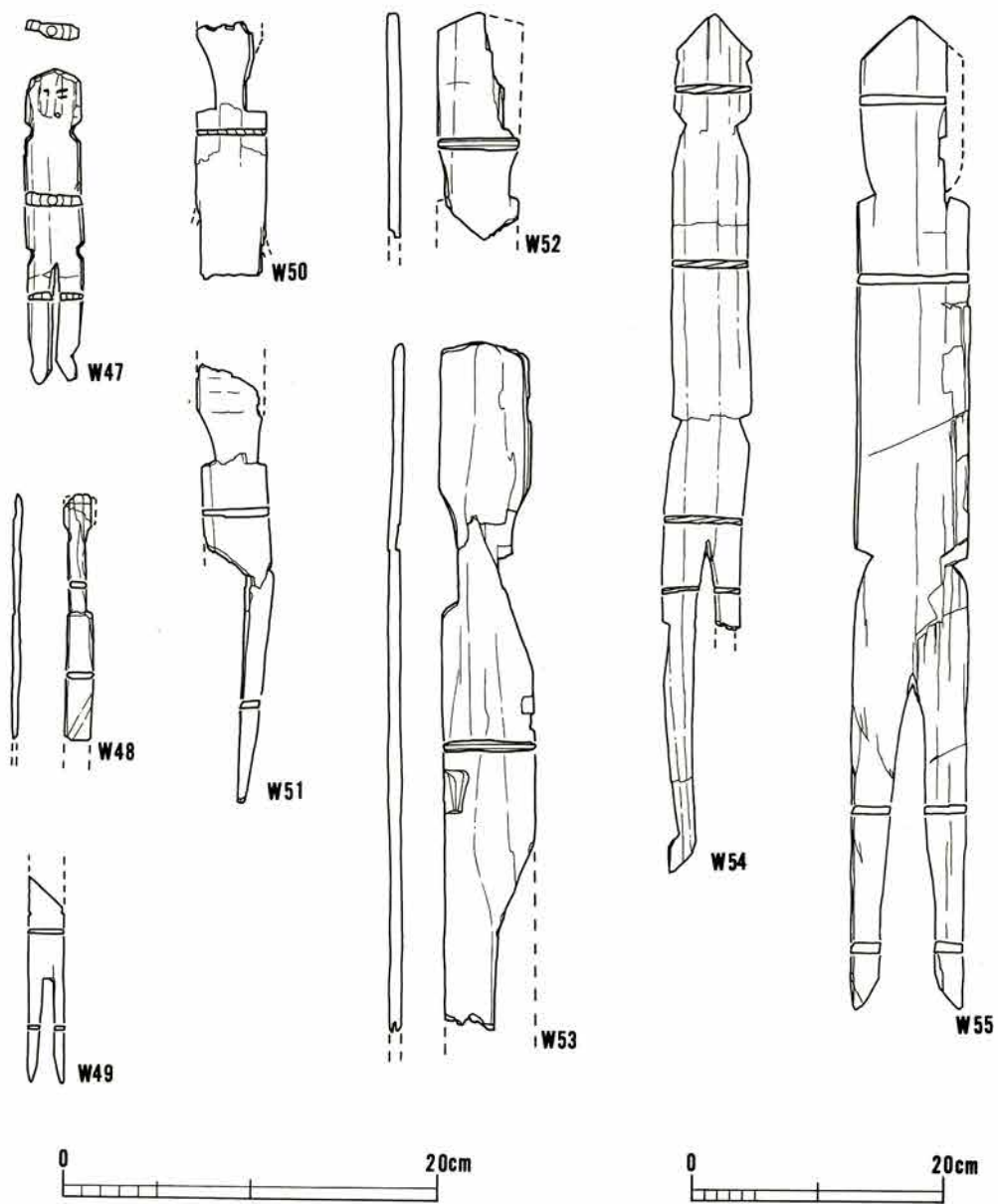
W50は、頭部下半から腰部まで残存するもので、W43～W45よりは大型に分類される。頸部は「L」字形に切り欠かれ、肩部は水平に近い怒肩をなす。手は残存しないが、胴部中位より下に切り欠き痕が認められる。腰部も、わずかな切り欠きによって表現されている。

W51は、頭部下半から脚部まで残存するものであるが、脚部は片足のみで、先端部を欠く。頭部には、刃物のあたりによる眉・目・口の表現が認められる。頸部は一辺の長いV字形に切り欠かれ、肩部は怒肩をなす。胴部には手の表現は認められない。腰部はわずかな切り欠きにより表現されている。

W52は、頭部から肩部まで残存するもので、W50・W51よりさらに大型に分類されるものである。頭部は山形をなし、表面には目を表現したと考えられる墨痕らしきものが認められる。頸部は、W51と同じタイプの切り欠きが入れられており、肩部は怒肩をなす。

W53は頭部から胴部の一部まで残存するもので、W52とほぼ同じ大きさのものと考えられる。頭部はゆるやかな山形をなすが、表面には目・口等の表現は認められない。頸部は片側の一部を欠くが台形状に切り欠かれ、肩部はなで肩をなす。胴部には手の表現は認められない。

W54は、片方の足を欠くが他は完存する。全長66.9cmのかなり大型の人形である。頭部は山形をなすが、その下端に切り欠きを入れ、烏帽子状のものを表現している。目・口等の表現は認められない。頸部はV字形に切り欠かれ、肩部はなで肩をなす。胴部には手の表現は認められない。腰部は一辺が長いV字形に切り欠かれ、脚部にも一カ所切り欠き認められる。脚部はO脚をなし、先端を切り欠き足首を表現している。



挿図120 平安～鎌倉時代木製品 (10) 旧河道 (7)

なお、当製品は、W47と平面的にも層位的にも近接した位置から出土している。

W55は、頭部の一部を欠損するが、ほぼ完形に近いものである。全長77.8cmを測るかなり大型の人形である。頭部は山形をかたどるが、表面には目・口等の表現は認められない。頸部にはV字形に切り欠かれ、肩部は怒肩をなす。胴部には手の表現は認められない。腰部はV字形の切り欠きにより表現されている。脚部は全体的に開き気味で、先端部を削り込み爪先を表現している。

剣形 W56の1点のみが出土している。柄のみが残存するもので、刀身部を欠く。削り込みによって柄頭を表現している。また、柄の刀身部側の一部を太くし、茎を表現している。旧河道から出土している。

斎串 W58の1点が出土している。先端部を欠くが、他は完存する。細長い板材の上端部を圭頭状に、下端を剣先状に削り出している。上端近くの両側面には、少なくとも3回以上の切り込みが認められる。旧河道から出土している。

その他 W57の1点である。下端部に短いながら脚状の切り込みが認められ、またその脚部の上に腰部の表現とも考えられるV字形の切り込みが認められる。このため、当製品については、人形の可能性も考えられるが、脚部が大変短く類例が見当たらないことと、頭部まで残存しないことから、不明品として報告する。東堀から出土している。

(7) 食事具 (挿図121)

杓子・しゃもじが出土している。

杓子 W65とW68の2点が出土している。いずれも旧河道から出土している。身の一部を欠くがほぼ完形に近いもので、直線的な柄に小判形の身が付くものである。

W61は、側面からみると、身と柄は一直線ではなく約170°の偏角をなす。また身の周縁部は薄く仕上げられている。復元される身の幅は2.4cmで、長さは5cmである。

W64は、側面からみると、身と柄は一直線をなす。身の周縁部は中央部に比べて薄くかつ丸く仕上げられている。復元される身の幅は2.4cm、長さは4.2cmである。

しゃもじ W66とW67の2点出土している。いずれも旧河道からの出土である。2点とも柄の端部を欠くが、身は完存する。側面からみると、身と柄は一直線をなす。また、身の周縁は中心部に比べて薄く仕上げられている。W66は、身の幅5.3cm、長さ8.8cmを測り、W67は、身の幅4.5cm、長さ7.9cmを測る。

(8) 漆器 (挿図121)

椀と小皿が出土している。

椀 W62とW63の2点出土している。いずれも旧河道からの出土である。

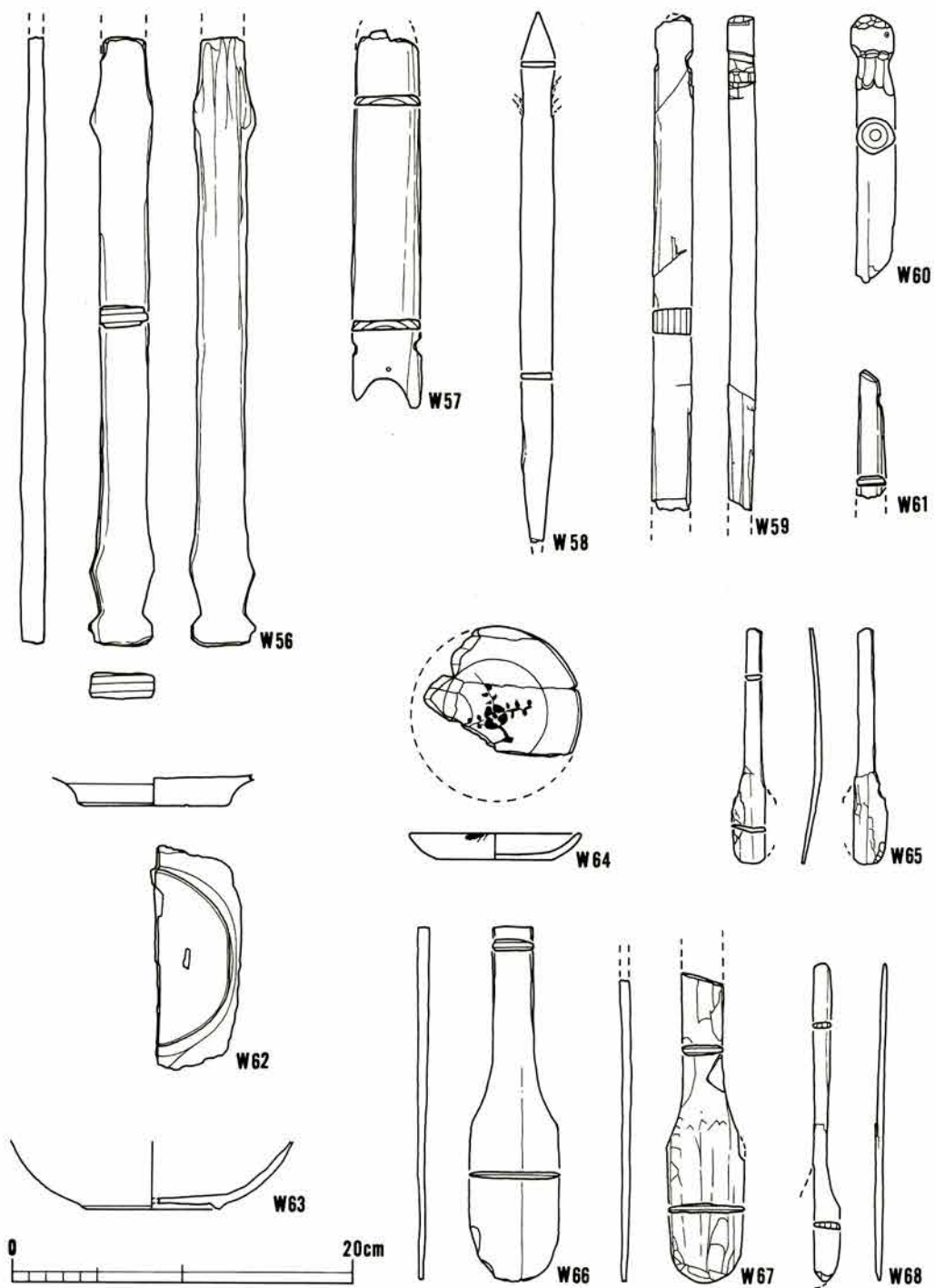


插图121 平安～鎌倉時代木製品 (11) 旧河道 (8)

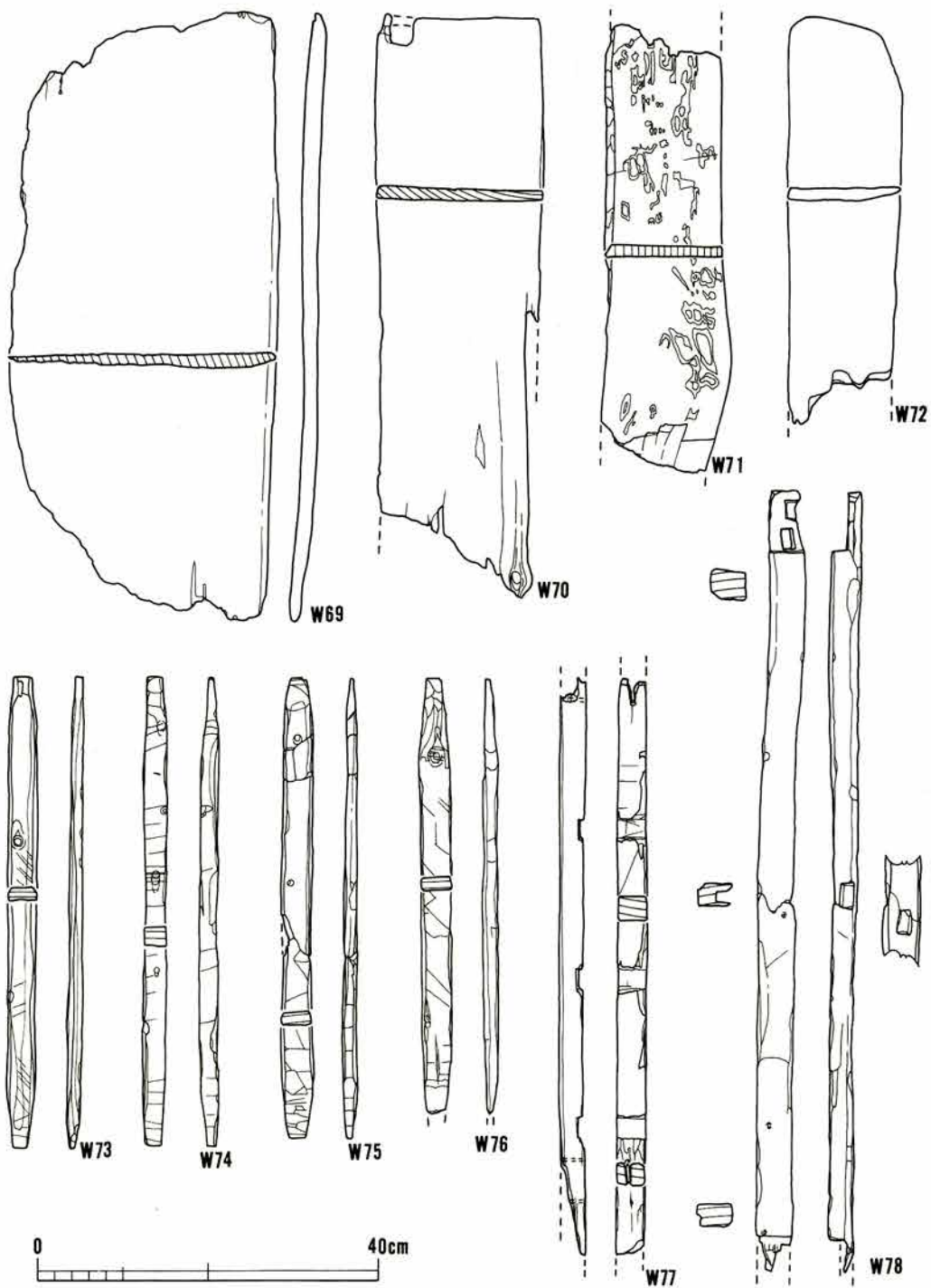
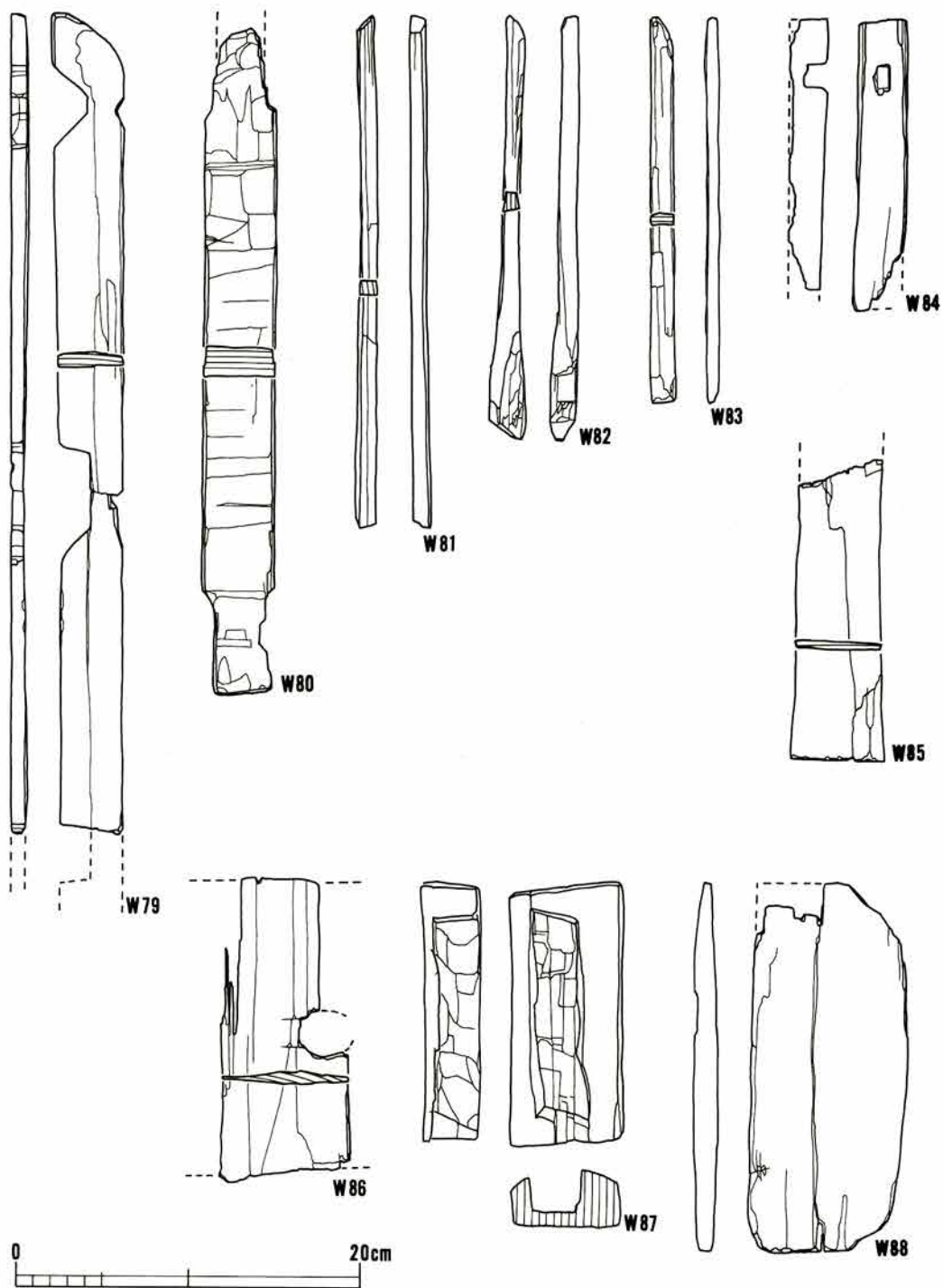
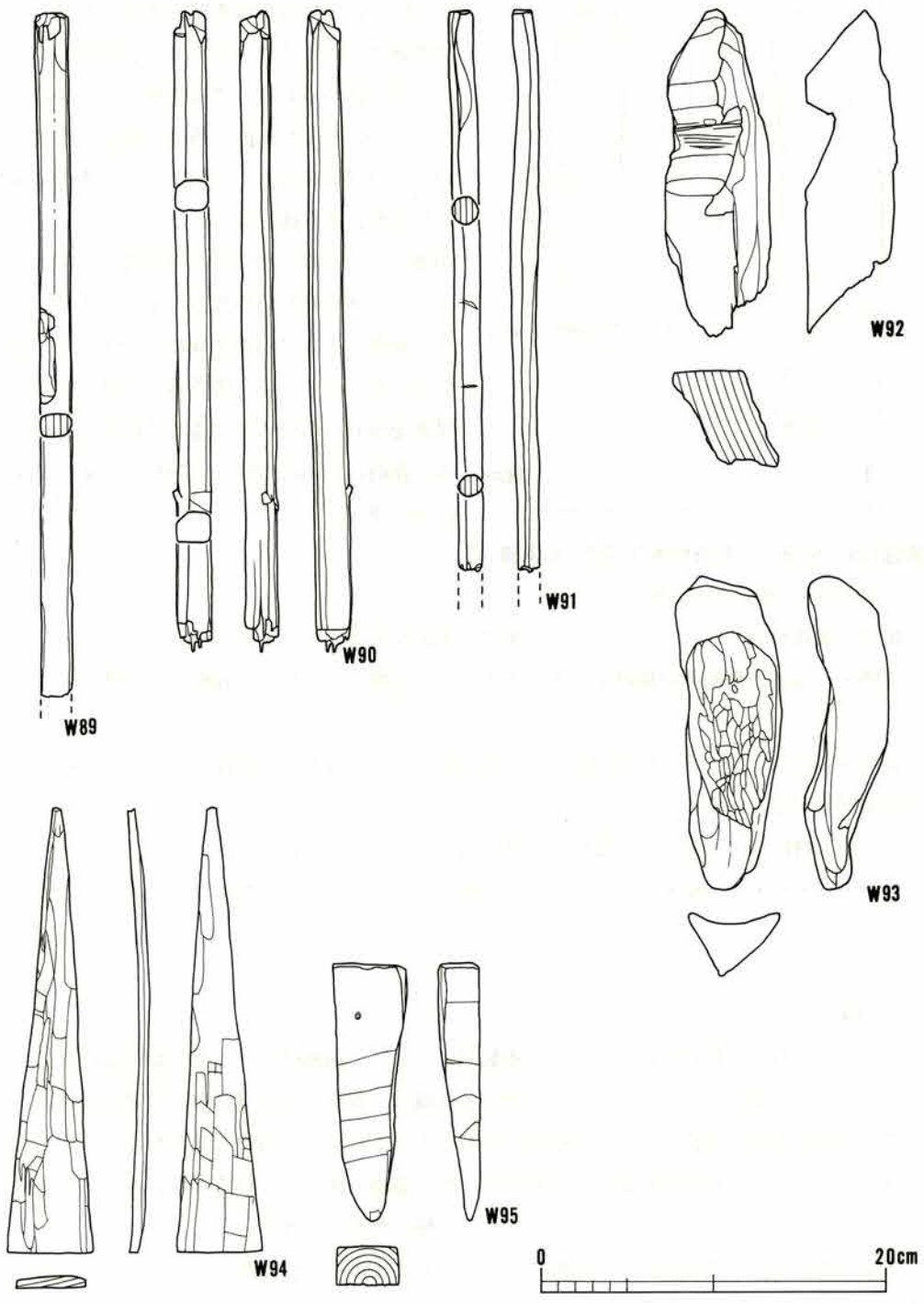


插图122 平安～鎌倉時代木製品 (12) 旧河道 (9)



挿図123 平安～鎌倉時代木製品 (13) 旧河道 (10)



挿図124 平安～鎌倉時代木製品 (14) 旧河道 (11)



W62は、平高台をなす椀の底部である。ロクロ挽きにより仕上げられており、底部にロクロの爪痕が認められる。漆は残存していない。

W63は、底部が断面三角形の輪高台をなすもので、口縁部を欠く。内外面とも黒漆が塗られているが、残存状況はよくない。

小皿 W64の1点のみが旧河道から出土している。全体の約2/3が残存する。平底の底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめている。底部外面を除く内外面に黒漆を塗り、内面には朱漆で花模様を描いている。器高は1.5cmを測り、口径は15cm、底径は6.8cmである。

挿図125 平安～鎌倉時代木製品(15) 旧河道 (12)

(9) 加工材 (挿図122～125)

用途・機能が明らかにできないものである。未製品も含まれるものと考えられる。

W69～W72は比較的薄い板材で、その大きさから曲物ないし折敷の底板の可能性も考えられる。

W72～W78については、角材であるが、加工状況およびほぞ穴の存在から、井戸枿材ないし建築部材の可能性が考えられる。

他の加工材については、その機能・性格を明らかにできない。

W69・72・82・83・86・88～91・93が旧河道から出土している以外は、東堀からの出土である。

(10) 小結

以上、平安時代～鎌倉時代にかけての木製品について、旧河道出土のものを中心にまとめた。これらの製品についてみると、食具・紡織具・容器・服飾具などの日常生活に係わるものと、呪符木簡・祭祀具のように祭祀に係わるものと大きく分けることができる。これらのなかで、祭祀具が官衙関係および寺院関係以外の遺跡で出土している点が、注目すべき点と考えられる。そこで以下、祭祀具を中心に若干の検討を加えてみたい。

先述したように、当遺跡出土の祭祀具は人形・剣形・斎串で、人形が大半を占める。このため、以下人形を中心にみていくことにする。

当遺跡出土の人形の特徴をまとめると、以下の諸点が指摘できる。

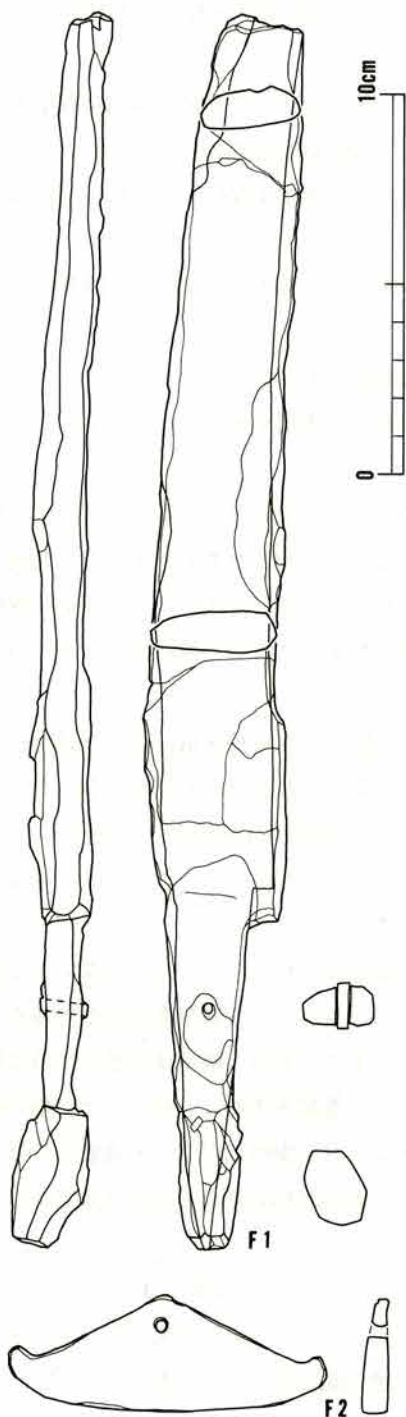
- ①大きさに注目すると、W47～W49、W50・W51、W52・W53、W54・W55の大きく4グループに分類できる。
- ②頭部の形態については、頭部が残存するものは全て山形をなす。また頭部表面に顔を表現するものは、W47とW51・W52の3点に限られる。製品自体が旧河道から出土しており、遺存状況が全体的に良好なことから、表現が消滅している可能性は少ない。したがって、顔の表現は盛んではなかったものと考えられる。
- ③肩部については、なで肩のものと、怒肩の2タイプが認められるが、全体的に後者のタイプの方が多い。
- ④胴部が残存する製品に限ると、手を表現したものは認められない。
- ⑤足先については、先端を尖らせるだけのものと、足首まで表現するものが認められるが、後者の方が多い。

ところで、人形については出土例の増加に伴い研究が盛んになってきている。このような研究状況のなかで、人形に認められる型式差が年代的な変遷を反映したものであることが明らかとなってきている⁽³⁾。そこで、このような編年的研究をふまえて、相伴土器からは平安時代前期～鎌倉時代初頭までとかなりの年代幅をもち、時期を特定できない当遺跡出土の人形の年代観について検討してみたい。

ここで、年代を検討するうえで良好な資料が、旧但馬国にあたる袴狭遺跡（兵庫県出石郡出石町）で出土している。当該遺跡では約8000点を越える多量の人形が出土しているのであるが、そのなかで、『延喜六年（906年）』と墨書された木簡を含む層の直上の水田土壌層から、初田館跡出土の人形と特徴を同じくするものが出土している⁽⁴⁾。したがって、このような特徴を有する人形は、10世紀初頭にその一定点を置くことができる。

以上のように、類例は少ないが、平安時代前半～中頃に位置付けられるのではないかと考えられる。このことは、旧河道の下層から出土していることから、肯首できるものである。人形は、人間の形代として、罪・穢を流す祓に用いられたものである。祓は律令祭祀体系に位置付けられ、多くの人形は平城宮・長岡宮を始めとした古代都城を中心に、国府などの地方官衙跡から出土している。しかし、今回の調査で明らかとなった平安時代の遺構・遺物からは、地方官衙を想定させるようなものは認められない。また、地方官衙の存在を推定させるような伝承等も不明である。

このようななかで、久下隆史の研究⁽⁵⁾が注目される。『丹波史』記載からすると、当遺跡の所在する初田の地は、鎌倉時代前期においては「犬甘保」に比定され、承久の乱以前から犬甘保・主殿保を酒井氏が領有し、承久の乱以後はその地頭職を得ていた。ただし、「犬甘保」の初源については不明である。しかし、嵐 瑞徴は、宮廷の犬養部と関連するのではないかと想定されている⁽⁶⁾。したがって、当地については、少なくとも平安時代においては、宮廷との



挿図126 鎌倉時代金属製品 墓1

何らかのつながりが存在したものと考えられる。そして、先に検討した平安時代に位置付けられる人形は、上記の宮廷との関連を傍証する資料と考えることができるのではないだろうか。つまり、「犬甘保」の成立時は、人形の示す年代と対応するのではないかと考えられる。このような視点からみると、旧河道出土の11世紀前半と位置付けられる織内型の黒色土器碗が注目される。(第6章 第2節) つまり、この年代が上記の年代を示しているのではないかと考える。

以上のような推測が成り立つならば、平城宮を中心に展開していた律令祭祀の地方への展開過程の一端を示しているものと考えられる。

5. 金属製品

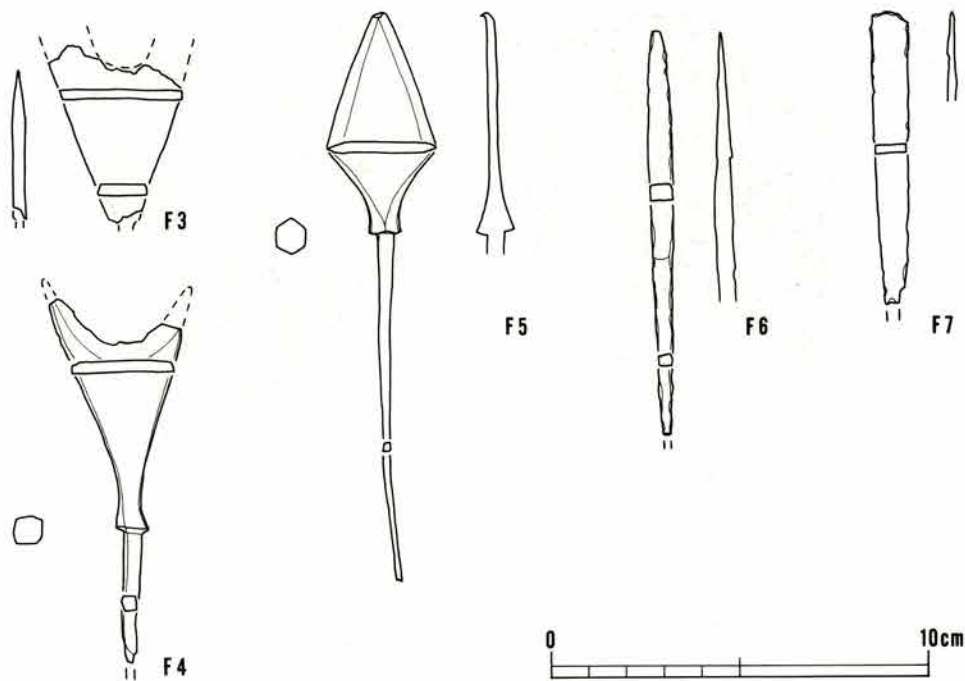
墓1と旧河道及び包含層から出土している。墓1は鉄器に限られ、旧河道内からは鉄器と金銅品が出土している。また、製品ではないが、旧河道内からは鉄滓片が数片出土している。

(1) 墓1出土の金属製品(挿図126)

小刀(F1)と火打金(F2)が出土している。

F1は切先を欠くが、他は完存する。残存長32.4cmを測り、刃部長は23.2cmである。刃部は断面三角形を呈し、刃部幅3.3cm、棟幅1.1cmを測る。茎は刃部に対して幅が狭く造られ、先端が尖る平面三角形を呈する。目釘穴が1穴認められ、その径は4mmである。表面に木質の柄の痕跡が認められる。

F2は、完存するものである。山形に分類され、両サイドが反り返るものである。中央上部に径3mmの紐穴が1穴穿たれている。打撃部の



挿図127 平安～鎌倉時代金属製品（1） 旧河道（1）・包含層

厚さは7mmである。

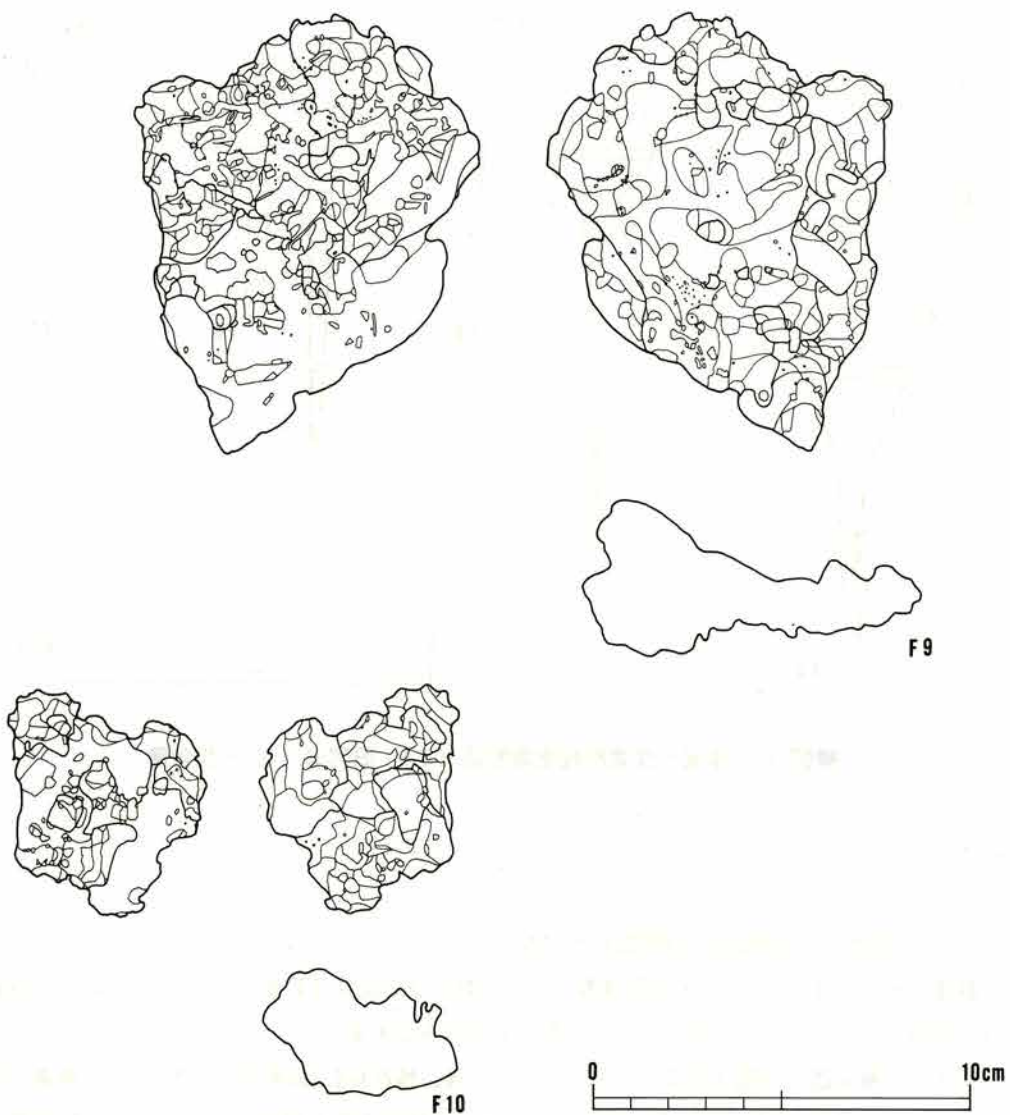
（2）旧河道出土の金属製品（挿図127・129）

鉄鏃（F3・4・5・6）・不明鉄器（F7）および刀装具（F8）が出土している。鉄鏃は4点出土しているが、完存するのはF5の1点のみである。

F4は、雁又鏃に分類されるものである。F4は、残存長4.5cmを測り、残存する身部の長さは6cmで、厚さは3.5mmである。関部は7.5×8mmの断面方形を呈する。また、茎の断面形も方形である。

F5は、平根鏃に分類されるもので、打ち込まれた際の衝撃で先端部が反り返っている。全長14.9cmを測り、身部の長さは5.8cmである。身部の最大幅は2.95cmを測り、その厚さは3mmである。身部の縁は両面から研ぎ、刃部を形成している。関部は断面六角形をなし、その径は8～9.5mmである。茎部は、断面2.5×2.5mmの方形を呈する。

F6は、鑿先状を呈するもので、先端部に向かって薄く狭くなっている。このため、身部と茎部の区別は困難である。残存長10.5cmを測る。断面は長方形を呈し、最大部における規模は、4.5mm×6mmである。



挿図128 平安～鎌倉時代金属製品（2） 旧河道（2）

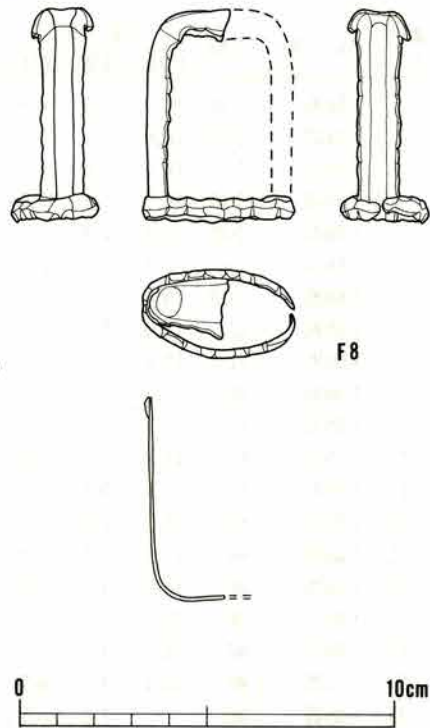
F 7は、平面鑿先状を呈するもので、基部を欠く。鉄鏃あるいは工具の可能性も考えられるが、現段階においては器種の特定は困難である。残存長7.6cmを測る。断面は長方形を呈し、厚さ2mmと薄く仕上げられている。

F 8は、一部を欠くが、石突あるいは柄頭と考えられるが、特定できない。内面には木装の漆が付着している。

(3) 包含層出土の金属製品 (挿図127)

F 3 の 1 点 が 出 土 し て い る 。 F 2 同 様 雁 又 鎌 に 分 類 さ れ る も の で あ る が 、 身 部 の 一 部 が 残 存 す る の み で あ る 。

- 註 (1) 前田佳久「上池遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989
(2) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代篇』1985
(3) 金子裕之「古代の木製模造品」『研究論集 VI』(奈良国立文化財研究所学報 第38冊) 1980
(4) 兵庫県教育委員会大平 茂の教示による。
(5) 久下隆史「鎌倉・南北朝期における酒井氏の動向」『鳳鳴紀要』第5号 兵庫県立篠山鳳鳴高等学校 1986
(6) 嵐 瑞徴「地頭 酒井氏の展開」



挿図129 平安～鎌倉時代金属製品 (3)
旧河道 (3)

表6 平安時代遺物観察表 土器(1)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
1	土師器	小皿	10.9	1.8	8.8	3/12	底部回転糸切り
2	土師器	小皿	10.8	2.1	6.6	3/12	底部回転糸切り
3	土師器	小皿	10.1	1.6	6.2	2/12	底部回転糸切りの後ナデ
4	土師器	小皿	10.1	2.1	4.6	3/12	底部回転糸切り
5	土師器	小皿	10.0	2.4	5.5	3/12	底部回転糸切り
6	土師器	小皿	7.9	1.6	6.0	3/12	底部回転糸切り
7	土師器	小皿	10.6	2.4	6.7	12/12	底部ヘラ切りの後ナデ
8	土師器	皿	15.0	2.8	5.8	2/12	底部回転糸切り
9	土師器	皿	13.6	3.3	5.8	1/12	底部回転糸切り
10	土師器	皿	14.0	3.0	6.2	6/12	底部回転糸切り
11	土師器	杯	15.3	3.8	7.2	3/12	底部回転糸切り
12	土師器	杯	11.9	4.1	6.0	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・内面に二次焼成痕
13	土師器	杯	10.9	3.3	7.2	4/12	底部ヘラ切り後ナデ
14	土師器	杯	11.5	3.0		3/12	
15	土師器	椀	11.8	4.1	5.9	6/12	底部ヘラ切り後ナデ
16	土師器	椀	14.7	4.8	8.0	11/12	底部ヘラ切り後ナデ
17	土師器	椀	12.5	4.0	5.6	/12	底部回転糸切り
18	土師器	椀	12.5	4.2	6.4	12/12	底部ヘラ切り後ナデ・見込みに墨付着
19	土師器	椀	12.1	4.5	6.7	9/12	底部ヘラ切り後ナデ
20	土師器	椀	—	<u>1.6</u>	6.7	12/12	底部ヘラ切り後ナデ
21	土師器	椀	—	<u>2.5</u>	6.0	12/12	底部回転糸切り
22	土師器	椀	—	<u>2.9</u>	8.8	11/12	底部周辺部のみ糸切り
23	土師器	托	9.1	<u>2.3</u>	—	2/12	
24	土師器	甕	16.8	<u>9.4</u>	—	3/12	
25	土師器	甕	23.9	<u>8.8</u>	—	1/12	体部内面以外ハケ仕上げ
26	土師器	甕	24.5	<u>14.5</u>	—	1/12	体部外面ハケ仕上げ
27	土師器	甕	27.7	<u>4.4</u>	—	1/12	体部外面ハケ仕上げ
28	土師器	甕	28.1	<u>22.4</u>	—	2/12	体部外面ハケ仕上げ・外面下半に煤付着
29	土師器	甕	25.7	<u>5.5</u>	—	4/12	外面ハケ仕上げ
30	土師器	甕	23.9	<u>7.8</u>	—	2/12	外面ハケ仕上げ
31	土師器	甕	23.6	<u>13.3</u>	—	3/12	外面ハケ仕上げ
32	土師器	甕	22.8	<u>13.6</u>	—	3/12	外面ハケ仕上げ
33	土師器	甕	22.6	<u>6.4</u>	—	2/12	外面ハケ仕上げ
34	土師器	甕	16.3	<u>6.8</u>	—	3/12	外面ハケ仕上げ
35	土師器	甕	16.8	<u>9.5</u>	—	3/12	内外面ハケ仕上げ
36	土師器	甕	16.6	<u>8.7</u>	—	11/12	外面タタキ原体によるナデ
37	土師器	甕	13.0	<u>6.2</u>	—	5/12	外面ハケ仕上げ
38	土師器	甕	26.6	6.1	—	1/12	外面タタキ・内面ヘラ削り

表6 平安時代遺物観察表 土器(2)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
39	土師器	甕	24.0	<u>5.8</u>	—	2/12	内外面ナデ仕上げ
40	土師器	甕	25.2	<u>6.5</u>	—	4/12	体部外面水平方向のタタキ
41	土師器	甕	27.4	<u>9.3</u>	—	2/12	外面タタキ原体によるナデ・外面に煤付着
42	土師器	甕	23.7	<u>6.5</u>	—	2/12	外面タタキ仕上げ
43	土師器	甕	23.5	<u>8.8</u>	—	2/12	外面タタキ・内面ハケ仕上げ・外面に煤付着
44	土師器	甕	17.0	<u>4.1</u>	—	1/12	内外面ナデ仕上げ
45	土師器	甕	15.2	<u>18.1</u>	—	8/12	外面タタキ原体によるナデ・外面に煤付着
46	土師器	甕	17.2	<u>10.0</u>	—	5/12	外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
47	土師器	甕	13.4	<u>14.9</u>	—	8/12	外面左上がり方向のタタキ・外面上半に煤付着
48	土師器	甕	24.8	<u>6.4</u>	—	2/12	外面水平方向のタタキ
49	土師器	甕	24.1	<u>8.0</u>	—	3/12	外面タタキ・内面ハケ仕上げ・外面に煤付着
50	土師器	甕	24.0	<u>9.8</u>	—	12/12	外面タタキ・内面同心円文・外面に煤付着
51	土師器	甕	15.9	<u>9.2</u>	—	5/12	外面タタキ・内面ナデ・外面に煤付着
52	土師器	甕	15.9	<u>17.3</u>	—	12/12	外面タタキ・内面ヘラナデ・外面に煤付着
53	土師器	甕	28.3	<u>12.7</u>	—	5/12	外面タタキ・内面ナデ
54	土師器	羽釜	28.2	<u>3.8</u>	—	3/12	
55	土師器	鉢	29.8	<u>3.5</u>	—	2/12	内外面ともナデ仕上げ
56	土師器	鉢	39.5	<u>8.9</u>	—	4/12	体部内面以外ハケ仕上げ
57	土師器	鉢	44.7	<u>10.4</u>	—	6/12	体部内面以外ハケ仕上げ
58	土師器	鉢	37.9	<u>13.9</u>	—	5/12	体部内面以外ハケ仕上げ
59	土師器	甕	22.1	16.5	—	1/12	外面ハケ・内面ユビナデ
60	土師器	甕	24.9	<u>19.5</u>	—	3/12	外面ハケ・内面ナデ
61	須恵器	杯	14.6	3.3	8.4	2/12	底部ヘラ切り後ナデ・内面に墨付着
62	須恵器	杯	14.4	3.8	9.6	6/12	底部ヘラ切り後ナデ・内面に墨付着
63	須恵器	杯	14.3	3.5	7.6	5/12	底部ヘラ切り後ナデ・内面に墨付着
64	須恵器	杯	13.2	3.4	8.1	6/12	底部ヘラ切り後ナデ
65	須恵器	杯	13.0	3.3	6.9	6/12	底部ヘラ切り後ナデ・内面に墨付着
66	須恵器	杯	12.8	4.0	8.3	4/12	底部ヘラ切り後ナデ
67	須恵器	杯	12.7	2.8	8.4	3/12	底部ヘラ切り
68	須恵器	杯	11.9	3.5	5.7	12/12	底部ヘラ切り・内面墨付着
69	須恵器	杯	11.5	3.1	7.5	4/12	底部ヘラ切り後ナデ
70	須恵器	杯	15.3	4.1	7.2	4/12	底部ヘラ切り後ナデ・内面に墨付着
71	須恵器	杯	14.3	3.7	8.2	3/12	底部ヘラ切り後ナデ・内面に墨付着
72	須恵器	杯	13.8	3.7	8.3	6/12	底部ヘラ切り後ナデ
73	須恵器	杯	14.3	3.7	8.8	3/12	底部ヘラ切り後ナデ・内外面に墨付着
74	須恵器	杯	13.9	3.3	9.1	5/12	底部ヘラ切り
75	須恵器	杯	12.9	2.5	8.3	12/12	底部ヘラ切り・内外面に墨付着
76	須恵器	杯	13.3	3.6	7.2	12/12	底部ヘラ切り

表6 平安時代遺物観察表 土器(3)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
77	須恵器	杯	13.0	4.0	9.8	4/12	底部へら切り
78	須恵器	杯	14.2	4.3	8.9	11/12	底部へら切り後ナデ・内外面に墨付着
79	須恵器	杯	13.9	3.4	9.1	3/12	底部へら切り
80	須恵器	杯	12.4	3.7	9.5	3/12	底部へら切り
81	須恵器	杯	16.6	3.7	7.4	2/12	底部へら切り・内外面に墨付着
82	須恵器	杯	14.2	4.0	7.0	2/12	底部へら切り後ナデ
83	須恵器	蓋	16.4	<u>1.8</u>	—	2/12	内面に煤付着
84	須恵器	椀	16.3	6.1	9.1	9/12	底部へら切り後高台貼付
85	須恵器	椀	16.4	6.0	9.9	4/12	底部へら切り後高台貼付
86	須恵器	椀	16.8	5.9	8.2	4/12	底部へら切り後高台貼付
87	須恵器	椀	15.1	5.3	7.5	2/12	底部へら切り後高台貼付
88	須恵器	椀	12.5	4.5	7.1	1/12	底部へら切り後ナデ
89	須恵器	椀	14.0	5.3	6.9	5/12	底部へら切り
90	須恵器	椀	13.9	4.8	7.0	2/12	底部へら切り後ナデ
91	須恵器	椀	13.8	5.4	7.0	2/12	底部へら切り・内外面に墨付着
92	須恵器	椀	12.0	5.2	6.1	3/12	底部回転糸切り・内面に墨付着
93	須恵器	椀	12.4	5.4	5.8	9/12	底部回転糸切り
94	須恵器	椀	13.2	5.1	5.4	9/12	底部回転糸切り・内外面に墨付着
95	須恵器	椀	11.0	4.5	5.2	3/12	底部回転糸切り
96	須恵器	椀	—	<u>3.1</u>	6.3	3/12	底部回転糸切り後ナデ
97	須恵器	椀	—	<u>2.1</u>	5.7	6/12	底部回転糸切り
98	須恵器	椀	14.6	<u>3.5</u>	—	1/12	内面に墨付着
99	須恵器	椀	14.1	6.0	5.7	12/12	底部回転糸切り
100	須恵器	椀	13.9	5.7	5.4	6/12	底部回転糸切り
101	須恵器	椀	14.2	5.6	5.9	6/12	底部回転糸切り
102	須恵器	椀	14.5	5.7	6.1	6/12	底部回転糸切り・内面に墨付着
103	須恵器	椀	16.0	7.2	5.9	6/12	底部回転糸切り・内面に墨付着
104	須恵器	椀	15.1	6.6	6.1	3/12	底部回転糸切り・内外面に墨付着
105	須恵器	椀	16.6	<u>2.5</u>	—	1/12	内面に墨付着
106	須恵器	椀	15.6	<u>2.8</u>	—	1/12	内面に墨付着
107	須恵器	椀	15.5	<u>3.3</u>	—	1/12	内面に墨付着
108	須恵器	椀	15.8	6.2	6.4	3/12	底部回転糸切りの後ナデ
109	須恵器	椀	16.8	6.8	6.2	5/12	底部回転糸切り・内面に墨付着
110	須恵器	椀	14.5	6.1	6.1	2/12	底部回転糸切り
111	須恵器	椀	13.3	5.3	5.8	6/12	底部回転糸切り・内面に墨付着
112	須恵器	椀	—	<u>4.5</u>	5.8	12/12	底部回転糸切り・内面墨付着
113	須恵器	椀	—	<u>4.3</u>	6.2	9/12	底部回転糸切り・外面墨付着
114	須恵器	鉢	14.3	6.4	7.3	8/12	底部回転糸切り

表6 平安時代遺物観察表 土器(4)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
115	須恵器	碗	—	3.2	6.6	6/12	底部回転糸切り
116	須恵器	碗	—	3.2	7.0	2/12	底部回転糸切り・内面使用で磨滅
117	須恵器	鉢	23.9	6.6	—	1/12	内外面とも横ナデ
118	須恵器	甕	32.9	8.5	—	4/12	体部外面タタキ整形
119	須恵器	壺	14.4	17.6	—	5/12	双耳壺・肩部1条凸帯
120	須恵器	壺	21.8	1.4	—	1/12	
121	須恵器	壺	22.8	3.0	—	2/12	
122	須恵器	壺	—	7.6	—	2/12	双耳壺・肩部1条凸帯
123	須恵器	壺	—	5.3	13.9	2/12	底部へラ切り
124	須恵器	壺	—	10.3	18.1	1/12	
125	須恵器	壺	—	—	16.2	6/12	内面板状工具によるナデ
126	須恵器	羽釜	—	—	—	1/12	鏝以下外面タタキ整形
127	緑釉陶器	皿	11.6	2.0	—	1/12	全面施釉
128	灰釉陶器	小瓶	—	9.6	7.0	11/12	底部回転糸切り
129	黒色土器	碗	16.7	4.4	—	1/12	内外面ミガキ・B類碗
130	黒色土器	碗	15.9	4.2	—	3/12	内外面ミガキ・B類碗
131	黒色土器	碗	15.6	3.1	—	1/12	内外面ミガキ・B類碗
132	黒色土器	碗	14.9	4.6	—	1/12	内外面ミガキ・B類碗
133	黒色土器	碗	11.9	2.8	—	1/12	内外面ミガキ・B類碗
134	黒色土器	碗	14.6	4.9	—	4/12	内外面ミガキ・A類碗
135	黒色土器	碗	13.9	3.2	—	1/12	内外面ミガキ・B類碗
136	黒色土器	碗	13.2	3.3	—	3/12	内外面ミガキ・B類碗
137	黒色土器	碗	12.8	5.2	6.6	4/12	内外面ミガキ・B類碗
138	黒色土器	碗	14.7	5.7	5.4	12/12	内外面ミガキ・B類碗
139	黒色土器	碗	15.0	6.3	7.5	3/12	内外面ミガキ・B類碗
140	黒色土器	碗	11.6	4.1	—	9/12	内外面ミガキ・A類碗
141	黒色土器	碗	—	2.3	8.3	12/12	底部糸切り後高台貼付け・B類碗
142	黒色土器	碗	—	1.7	7.6	4/12	外面のミガキ不明
143	黒色土器	碗	—	1.6	7.9	12/12	
144	黒色土器	碗	—	1.8	6.3	9/12	内外面ミガキ・B類碗
145	黒色土器	碗	14.7	6.2	6.6	1/12	底部回転糸切り・B類碗
146	黒色土器	碗	16.6	5.9	6.2	3/12	底部回転糸切り・B類碗
147	黒色土器	碗	11.4	4.8	5.5	4/12	底部回転糸切り・B類碗
148	黒色土器	碗	16.4	5.8	6.6	4/12	底部回転糸切り・B類碗
149	黒色土器	碗	13.9	5.1	6.7	3/12	底部回転糸切り・B類碗
150	黒色土器	碗	15.7	7.2	7.0	3/12	底部回転糸切り・B類碗
151	黒色土器	碗	—	2.2	5.9	12/12	底部回転糸切り・B類碗
152	黒色土器	碗	—	3.4	5.8	12/12	底部回転糸切り・B類碗

表6 平安時代遺物観察表 土器(5)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
153	黒色土器	碗	—	2.7	5.9	12/12	底部回転糸切り・B類碗
154	黒色土器	碗	—	3.2	6.4	4/12	底部回転糸切り・B類碗
155	黒色土器	碗	—	2.4	6.1	6/12	底部回転糸切り・B類碗
156	黒色土器	碗	—	1.5	5.8	4/12	底部回転糸切り・B類碗
157	黒色土器	碗	—	1.1	7.3	9/12	底部糸切り後高台貼付け・B類碗
158	黒色土器	碗	—	1.2	8.0	3/12	底部回転糸切り・B類碗
159	黒色土器	碗	—	1.3	5.9	4/12	底部回転糸切り・B類碗
160	黒色土器	小皿	9.8	1.1		1/12	B類碗・内外面ともミガキ

表6 鎌倉時代遺物観察表 土器(1)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
161	土師器	小皿	7.9	1.3		11/12	底部手握ね
162	土師器	小皿	7.9	1.5		11/12	底部手握ね
163	土師器	小皿	7.8	1.4		8/12	底部手握ね
164	土師器	小皿	8.3	1.6		12/12	底部手握ね
165	土師器	小皿	7.8	1.4		4/12	底部手握ねの後ナデ調整・内面に若干煤付着
166	土師器	小皿	7.8	1.4		11/12	底部手握ね
167	土師器	小皿	7.4	1.3		6/12	底部手握ね
168	土師器	小皿	7.3	1.3		3/12	底部手握ね
169	土師器	小皿	7.2	1.2		4/12	底部手握ね
170	土師器	小皿	7.2	1.5		6/12	底部手握ねの後ナデ調整
171	土師器	小皿	7.1	1.1		4/12	底部手握ね
172	土師器	小皿	6.8	1.3		3/12	底部手握ねの後ナデ調整
173	土師器	小皿	9.8	1.3		2/12	底部手握ね
174	土師器	小皿	9.5	1.9	6.3	12/12	底部回転糸切り
175	土師器	小皿	9.0	1.6	5.9	3/12	底部回転糸切り
176	土師器	小皿	8.6	1.4	6.0	2/12	底部回転糸切り
177	土師器	小皿	7.4	1.5		3/12	底部回転糸切り
178	土師器	小皿	7.2	1.3	6.2	6/12	底部回転糸切り
179	土師器	大皿	16.6	3.2		1/12	底部手握ね
180	土師器	大皿	15.1	1.9		2/12	底部手握ね
181	土師器	大皿	14.7	2.0		2/12	底部手握ねの後ナデ・内面二次焼成?
182	土師器	大皿	14.0	2.3		5/12	底部手握ね
183	土師器	大皿	14.7	1.9		3/12	底部手握ね

表6 鎌倉時代遺物観察表 土器(2)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
184	土師器	大皿	13.8	2.2		2/12	底部手握ね
185	土師器	大皿	13.7	2.2		6/12	底部手握ねの後ナデ
186	土師器	杯	16.1	2.9		2/12	内外面回転ナデ調整
187	土師器	杯	14.9	3.0	9.5	3/12	内外面回転ナデ調整
188	土師器	杯	15.2	3.7	7.7	6/12	底部回転糸切り
189	土師器	杯	14.8	2.8	7.3	3/12	底部回転糸切り
190	土師器	杯	12.5	3.1		2/12	底部手握ね
191	土師器	杯	13.8	2.7	7.5	3/12	底部回転糸切り
192	土師器	杯	13.4	3.3	7.2	8/12	底部回転糸切り
193	土師器	杯	13.4	3.6	6.4	3/12	底部回転糸切り
194	土師器	杯	12.8	2.9	-	3/12	内外面回転ナデ調整
195	土師器	杯	16.2	4.0	7.9	3/12	底部回転糸切り
196	土師器	杯	-	2.3	7.2	4/12	底部回転糸切り
197	土師器	杯	-	1.6	5.1	3/12	底部回転糸切り
198	土師器	鍋	24.0	8.0	-	3/12	外面に煤付着
199	土師器	鍋	20.7	10.8	-	3/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
200	土師器	鍋	23.8	5.7	-	3/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
201	土師器	鍋	22.5	6.7	-	3/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
202	土師器	鍋	25.7	5.4	-	1/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
203	土師器	鍋	26.3	6.7	-	3/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
204	土師器	鍋	24.9	9.5	-	3/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
205	土師器	鍋	21.4	8.2	-	1/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
206	土師器	鍋	25.0	13.9	-	4/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
207	土師器	鍋	23.7	17.0	-	4/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
208	土師器	鍋	17.4	6.2	-	2/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
209	土師器	鍋	18.7	8.5	-	4/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
210	土師器	鍋	20.2	6.1	-	4/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
211	土師器	鍋	20.9	8.3	-	11/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
212	土師器	鍋	21.4	9.9	-	1/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
213	土師器	鍋	20.1	14.2	-	4/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
214	土師器	羽釜	35.8	19.4	-	6/12	体部外面水平方向のタタキ・外面に煤付着
215	土師器	羽釜	31.5	22.6	-	10/12	体部外面タタキ整形・外面に煤付着
216	土師器	羽釜	30.9	13.3	-	3/12	体部外面タタキ整形・内面ハケ・外面に煤付着
217	須恵器	椀	16.2	4.6	6.5	12/12	底部回転糸切り
218	須恵器	椀	16.2	4.7	5.7	8/12	底部回転糸切り・外面僅かに墨付着
219	須恵器	椀	15.6	4.5	6.0	8/12	底部回転糸切り・内外面に墨付着
220	須恵器	椀	15.6	3.6	-	2/12	外面に「僧義」の墨書
221	須恵器	椀	16.5	3.6	-	4/12	

表6 鎌倉時代遺物観察表 土器(3)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
222	須恵器	椀	16.7	3.6	—	2/12	
223	須恵器	椀	16.0	5.6	5.8	6/12	底部回転糸切り
224	須恵器	椀	—	1.6	6.8	3/12	底部回転糸切り
225	須恵器	小皿	7.0	2.4	4.1	12/12	底部回転糸切り
226	須恵器	捏鉢	32.6	3.9	—	1/12	
227	須恵器	捏鉢	28.6	10.3	—	4/12	内面に使用痕
228	須恵器	捏鉢	—	5.4	8.8	6/12	底部回転糸切り
229	須恵器	甕	32.6	4.6	—	1/12	体部外面タタキ整形
230	瓦器	小皿	9.0	1.3	—	5/12	底部手握ね・暗文なし
231	瓦器	小皿	8.7	1.7	—	3/12	底部手握ね・暗文なし
232	瓦器	小皿	8.6	1.3	—	1/12	底部手握ね・暗文なし
233	瓦器	小皿	8.3	1.8	—	11/12	底部手握ね・暗文なし
234	瓦器	小皿	7.9	1.7	—	3/12	底部手握ね
235	瓦器	小皿	7.8	1.8	—	6/12	底部手握ね・暗文なし
236	瓦器	小皿	7.7	1.4	—	10/12	底部手握ね・暗文なし
237	瓦器	小皿	7.7	1.8	—	11/12	口縁部二段ナデ・暗文なし
238	瓦器	小皿	7.4	1.6	—	12/12	口縁部二段ナデ・暗文なし
239	瓦器	小皿	7.9	1.5	—	9/12	口縁部一段ナデ
240	瓦器	小皿	7.5	1.5	—	12/12	口縁部二段ナデ・暗文なし
241	瓦器	小皿	7.5	1.6	—	11/12	口縁部一段ナデ・暗文なし
242	瓦器	小皿	7.6	1.6	—	12/12	口縁部二段ナデ・暗文なし
243	瓦器	小皿	7.4	1.6	—	11/12	口縁部一段ナデ・暗文なし
244	瓦器	椀	15.1	5.6	6.2	6/12	口縁部二段ナデ・内外面暗文
245	瓦器	椀	13.8	5.4	—	4/12	口縁部二段ナデ・内外面暗文
246	瓦器	椀	—	2.7	6.0	6/12	底部外面暗文あり
247	瓦器	椀	14.1	5.4	5.8	4/12	口縁部三段ナデ・内外面暗文
248	瓦器	椀	16.0	4.1	—	3/12	口縁部三段ナデ・内外面暗文
249	瓦器	椀	15.3	5.8	5.8	2/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
250	瓦器	椀	15.2	5.6	7.8	3/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
251	瓦器	椀	15.0	5.0	7.1	6/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
252	瓦器	椀	17.2	5.2	—	1/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
253	瓦器	椀	15.2	4.5	—	4/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
254	瓦器	椀	14.9	5.1	6.5	7/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
255	瓦器	椀	14.6	5.3	6.4	6/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
256	瓦器	椀	14.5	5.8	6.3	5/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
257	瓦器	椀	14.3	5.9	6.3	9/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
258	瓦器	椀	14.0	5.9	6.2	12/12	口縁部三段ナデ・内面暗文
259	瓦器	椀	14.3	5.2	5.8	12/12	口縁部三段ナデ・内面暗文

表6 鎌倉時代遺物観察表 土器(4)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
260	瓦器	碗	14.6	6.2	7.2	3/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
261	瓦器	碗	14.5	5.4	6.7	4/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
262	瓦器	碗	14.2	5.1	6.4	2/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
263	瓦器	碗	13.8	5.3	5.9	11/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
264	瓦器	碗	13.2	5.4	5.5	12/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
265	瓦器	碗	13.0	4.9	5.7	9/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
266	瓦器	碗	13.8	5.7	6.2	6/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
267	瓦器	碗	13.6	5.5	5.3	9/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
268	瓦器	碗	13.2	5.4	6.2	6/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
269	瓦器	碗	13.4	5.2	6.6	2/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
270	瓦器	碗	13.5	5.3	5.8	4/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
271	瓦器	碗	13.4	5.2	6.4	3/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
272	瓦器	碗	14.5	5.0	8.0	8/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
273	瓦器	碗	14.4	6.0	7.1	2/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
274	瓦器	碗	12.6	4.6	5.1	11/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
275	瓦器	碗	12.4	4.8	5.7	11/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
276	瓦器	碗	11.8	5.2	5.5	11/12	口縁部一段ナデ・内面暗文
277	瓦器	碗	13.9	5.2	7.4	4/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
278	瓦器	碗	13.8	6.5	6.3	1/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
279	瓦器	碗	12.7	4.0	7.1	2/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
280	瓦器	碗	13.6	5.5	6.1	12/12	口縁部二段ナデ・内面暗文・底部外面に墨書
281	瓦器	碗	12.0	4.2	6.3	6/12	口縁部二段ナデ・内面暗文・底部外面に墨書
282	瓦器	碗	—	1.6	7.3	3/12	内面暗文・底部外面に墨書
283	瓦器	碗	14.1	6.1	6.6	12/12	口縁部三段ナデ・内面暗文・底部外面に墨書
284	瓦器	碗	14.6	5.7	6.8	12/12	口縁部二段ナデ・内面暗文・底部二重高台
285	瓦器	碗	14.4	4.9	6.4	7/12	口縁部三段ナデ・内面暗文・底部外面に暗文
286	瓦器	碗	14.6	4.5	—	1/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
287	瓦器	碗	14.3	5.2	8.6	3/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
288	瓦器	碗	14.2	5.3	6.8	4/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
289	瓦器	碗	14.1	4.8	—	2/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
290	瓦器	碗	14.1	4.4	—	4/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
291	瓦器	碗	14.0	4.7	—	6/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
292	瓦器	碗	13.8	4.3	7.2	1/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
293	瓦器	碗	13.9	4.5	—	2/12	口縁部三段ナデ・内面暗文
294	瓦器	碗	13.9	4.2	—	4/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
295	瓦器	碗	13.8	4.3	—	2/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
296	瓦器	碗	13.8	4.4	—	2/12	口縁部一段ナデ・内面暗文
297	瓦器	碗	13.4	4.5	—	6/12	口縁部二段ナデ・内面暗文

表6 鎌倉時代遺物観察表 土器(5)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
298	瓦器	碗	13.7	5.7	7.8	3/12	口縁部三段ナデ・内面暗文
299	瓦器	碗	13.4	4.8	—	5/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
300	瓦器	碗	13.2	4.0	—	9/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
301	瓦器	碗	13.5	4.4	—	3/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
302	瓦器	碗	13.5	4.1	—	3/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
303	瓦器	碗	13.4	4.8	—	3/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
304	瓦器	碗	12.9	5.0	—	4/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
305	瓦器	碗	12.8	4.9	5.8	3/12	口縁部一段ナデ・内面暗文
306	瓦器	碗	12.6	4.9	—	3/12	口縁部二段ナデ・内面暗文
307	瓦器	碗	—	4.0	7.2	6/12	内面暗文
308	瓦器	碗	—	3.7	7.2	3/12	内面暗文
309	瓦器	碗	—	2.1	7.2	2/12	内面暗文
310	瓦器	碗	—	2.1	6.6	12/12	内面暗文
311	瓦器	碗	—	2.2	5.8	4/12	内面暗文
312	瓦器	碗	—	2.1	6.2	10/12	内面暗文
313	瓦器	碗	—	2.1	6.6	3/12	内面暗文
314	瓦器	碗	—	1.8	6.6	4/12	内面暗文
315	瓦器	碗	—	1.3	6.6	6/12	内面暗文
316	瓦器	鉢	21.7	2.9	—	1/12	内外面ロクロナデ
317	土師器	大皿	16.8	2.3	—	4/12	
318	土師器	小皿	8.2	1.2	4.4	2/12	底部回転糸切り
319	須恵器	小皿	7.6	1.3	—	3/12	
320	須恵器	小皿	8.4	1.1	—	3/12	
321	須恵器	坏	13.2	4.0	7.1	4/12	底部回転糸切り
322	須恵器	碗	16.6	3.5	—	2/12	
323	須恵器	碗	14.7	6.0	5.5	2/12	底部回転糸切り・内外面に火襷痕あり
324	須恵器	鉢	21.0	6.8	—	2/12	内面板状工具によるナデ
325	瓦器	碗	14.8	4.5	—	2/12	口縁部二段のナデ・内外面の暗文不明
326	瓦器	碗	13.6	4.2	—	2/12	口縁部二段のナデ・内外面の暗文不明
327	瓦器	碗	13.8	3.3	—	2/12	口縁部二段のナデ・内外面の暗文不明
328	瓦器	碗	14.8	3.1	—	1/12	口縁端部内面に1条の沈線・内外面の暗文不明
329	瓦器	碗	—	—	7.0	4/12	内外面の暗文不明
330	瓦器	碗	—	—	7.0	2/12	内外面の暗文不明
331	瓦器	小皿	8.2	1.2	—	1/12	底部手捏ね
332	黒色土器	碗	13.9	4.2	—	1/12	口縁部ヨコナデ・底部輪高台の痕跡あり
333	瓦器	小皿	9.0	1.5	—	4/12	底部手捏ね・内面の暗文不明
334	瓦器	小皿	8.7	1.7	—	12/12	底部手捏ね・内面の暗文不明

表6 鎌倉時代遺物観察表 土器(6)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
335	瓦器	小皿	8.1	1.6		3/12	底部手握ね・内面暗文なし
336	瓦器	小皿	7.9	1.5		4/12	底部手握ね・内面暗文なし
337	瓦器	椀	14.6	4.0		6/12	口縁部二段のナデ・内外面の暗文不明
338	白磁	碗	15.7	6.9		12/12	
339	土師器	小皿	8.5	2.1		2/12	底部～口縁部手握ね
340	土師器	小皿	8.3	2.5		6/12	底部～口縁部手握ね
341	土師器	小皿	8.2	2.1		6/12	底部～口縁部手握ね
342	土師器	小皿	7.0	1.9		12/12	底部～口縁部手握ね
343	土師器	小皿	6.4	1.7		3/12	底部～口縁部手握ね
344	土師器	小皿	8.2	1.3		11/12	底部回転糸切り
345	土師器	小皿	8.2	1.1	7.1	12/12	底部回転糸切り
346	土師器	小皿	8.3	1.2	6.1	6/12	底部回転糸切り
347	土師器	小皿	8.3	1.5	4.2	3/12	
348	土師器	杯	9.8	2.5	5.5	5/12	底部回転糸切り・口縁部回転ナデ
349	土師器	鍋	25.2	<u>3.4</u>		1/12	口縁部内外面横ナデ
350	土師器	鍋	22.3	<u>5.5</u>		1/12	口縁部内外面横ナデ・体部内面ナデ調整
351	土師器	鍋	21.0	<u>7.6</u>		4/12	口縁部内外面横ナデ・体部内面ハケ調整
352	土師器	鍋	20.4	<u>5.8</u>		1/12	口縁部内外面横ナデ・体部内面ナデ調整
353	土師器	鍋	24.2	<u>4.3</u>		3/12	口縁部内外面横ナデ
354	土師器	鍋	22.0	<u>10.5</u>		2/12	口縁部内外面横ナデ・体部内面ハケ調整
355	土師器	鍋	18.7	<u>9.7</u>		2/12	口縁部内外面横ナデ・体部内面ハケ調整
356	須恵器	小皿	8.3	1.9	5.8	12/12	底部回転糸切り
357	須恵器	小皿	8.1	1.2	5.9	2/12	底部回転糸切り
358	須恵器	小皿	6.5	1.5	4.6	6/12	底部回転糸切り
359	瓦器	小皿	8.6	1.6		2/12	底部手握ね
360	須恵器	椀	15.6	<u>2.3</u>		1/12	
361	須恵器	椀	17.0	5.2	6.1	5/12	底部回転糸切り
362	瓦器	椀	16.8	<u>3.6</u>		2/12	口縁部三段のナデ
363	土師器	小皿	8.6	1.3	8.0	6/12	底部回転糸切り
364	土師器	小皿	8.5	1.5	5.7	3/12	底部回転糸切り
365	土師器	小皿	7.6	1.2	5.5	6/12	底部へら切り
366	土師器	小皿	9.2	2.0		4/12	底部手握ね
367	土師器	小皿	8.4	1.6	6.3	11/12	底部回転糸切り
368	須恵器	小皿	8.2	1.6	4.3	3/12	底部回転糸切り
369	須恵器	小皿	7.5	1.4	5.0	2/12	底部回転糸切り
370	須恵器	椀		<u>2.2</u>	6.0	4/12	底部回転糸切り
371	須恵器	椀	15.4	<u>2.9</u>		2/12	外面にわずかに墨付着
372	須恵器	椀	16.3	5.0	5.4	2/12	底部回転糸切り

表6 鎌倉時代遺物観察表 土器(7)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
373	須恵器	碗	15.9	4.7	6.5	2/12	底部回転糸切り
374	須恵器	鉢	21.8	5.6		1/12	
375	須恵器	鉢	27.5	4.0		1/12	
376	瓦器	小皿	9.2	1.7		1/12	底部手捏ね・口縁部二段のナデ
377	瓦器	小皿	9.0	1.5		3/12	底部手捏ね・口縁部二段のナデ
378	瓦器	小皿	8.8	1.3		4/12	底部手捏ね・口縁部二段のナデ
379	瓦器	小皿	7.7	1.7		4/12	底部手捏ね・口縁部二段のナデ
380	瓦器	碗	14.6	5.1	9.0	3/12	口縁端部内面に沈線・外面の暗文不明
381	瓦器	碗	13.7	6.0	6.4	2/12	口縁部一段のナデ・内外面の暗文不明

表6 平安～鎌倉時代遺物観察表 木製品(1)

遺物 番号	種 別	器 種	法量 (cm)			樹 種	特 徴・そ の 他
			長さ	幅	厚さ		
W1	井戸水溜	曲物				ヒノキ	径44.8cm・残存高24.4cm／側板のみ
W2	容器	曲物	21.7	20.8	0.4	ヒノキ	底板
W3	容器	曲物	8.7	0.8	0.4	ヒノキ	底板
W4	加工木		10.1	0.1	0.9		
W9	農具	木錘	12.2	4.4	3.6	ツバキ	
W10	紡織具	紡錘車			0.6	コウヤマキ	径6cm・穴径0.4cm
W11	服飾具	草履?	14.0	10.3	0.4	ヒノキ	
W12	服飾具	下駄	19.8	11.5	1.4	ホオノキ	
W13	服飾具	下駄	22.8	10.6	1.2	スギ	鼻緒径1.4cm・0.7cm
W14	容器	盆	16.3	5.8	0.7	ヒノキ	器高1.2cm
W15	容器	盆	15.5	9.0	3.5	ヒノキ	
W16	容器	曲物底板	4.3	2.8	0.5		
W17	容器	曲物底板	8.9	8.6	0.6	ヒノキ	完存
W18	容器	曲物底板	8.5	8.7	0.7	スギ	板目取り
W19	容器	曲物底板	14.0	13.9	0.7		4ヶ所に木釘穴／板目取り
W20	容器	曲物底板	12.7	13.0	0.9	ヒノキ	5ヶ所に木釘穴(径3mm)
W21	容器	曲物底板	13.8	13.5	0.7	ヒノキ	3ヶ所に木釘穴／柁目取り
W22	容器	曲物底板	13.6	13.6	0.5	ヒノキ	2ヶ所に木釘穴／柁目取り
W23	容器	曲物底板	11.3	4.6	0.6		2ヶ所に木釘穴／裏面に刃物傷あり
W24	容器	曲物底板	14.7	12.4	0.8	ヒノキ	4ヶ所に木釘穴／板目取り
W25	容器	曲物底板	13.7	5.6	0.6		針書刻線あり／両面漆付着／板目取
W26	容器	曲物底板	13.8	10.4	0.7	ヒノキ	板目取り
W27	容器	曲物底板	11.5	5.0	0.8	スギ	両面に漆付着／柁目取り／木釘穴有
W28	容器	曲物底板	13.9	6.8	0.4		板目取り
W29	容器	曲物底板	14.1	5.1	0.5		1ヶ所に木釘穴／漆付着?
W30	容器	曲物底板	17.6	9.2	0.4		漆の付着痕?／板目取り
W31	容器	曲物底板	13.1	9.0	0.6		7ヶ所に木釘穴(径1mm)
W32	容器	曲物底板	30.6	18.9	0.6	ヒノキ	3ヶ所に木釘穴
W33	容器	曲物底板	33.7	19.3	0.9	ヒノキ	2ヶ所に木釘穴
W34	容器	折敷	26.6	5.0	0.4	ヒノキ	3ヶ所に小穴
W35	容器	折敷	26.2	3.6	0.3	ヒノキ	3ヶ所に小穴
W36	容器	折敷	23.8	6.8	0.5	ヒノキ	2ヶ所に孔
W37	容器	折敷?	19.9	13.7	0.5	ヒノキ	
W38	容器	折敷	26.9	24.5	0.7	ヒノキ	側板残存
W39	容器	折敷	33.1	26.4	0.6	スギ	両面に針書刻線
W40	容器	折敷	62.0	13.3	0.8	ヒノキ	両面に針書刻線
W41	容器	折敷	37.3	39.6	0.5	ヒノキ	両面に針書刻線

表6 平安～鎌倉時代遺物観察表 木製品(2)

遺物 番号	種 別	器 種	法量 (cm)			樹 種	特 徴・そ の 他
			長さ	幅	厚さ		
W42	容器	折敷	60.0	16.5	0.5	ヒノキ	4ヶ所に綴孔
W43	容器	折敷	58.3	6.5	0.6	ヒノキ	片面に針書刻線／3ヶ所に針書刻線
W44	容器	折敷	35.9	5.8	0.5	ヒノキ	4ヶ所に小孔／片面に針書刻線
W45	容器	折敷	21.3	4.4	0.3		1ヶ所に小孔
W46	容器	折敷	15.7	10.3	0.4	ヒノキ	
W47	祭祀具	人形	16.6	3.0	0.7	カヤ	芯持ち材使用
W48	祭祀具	人形	12.8	1.6	0.4		
W49	祭祀具	人形	11.0	1.9	0.2		
W50	祭祀具	人形	13.2	3.7	0.3	ヒノキ	
W51	祭祀具	人形	23.0	3.6	0.4	ヒノキ	刃物で目・眉・口を表現
W52	祭祀具	人形	11.3	4.3	0.6	ヒノキ	墨痕?有り
W53	祭祀具	人形	36.1	4.9	0.4	ヒノキ	
W54	祭祀具	人形	66.9	6.5	0.4	スギ	
W55	祭祀具	人形	77.8	9.0	0.7	ヒノキ	
W56	祭祀具	剣形	35.4	3.8	1.3	スギ	
W57	祭祀具?	?	26.7	4.0	0.6	ヒノキ	
W58	祭祀具	斎串	30.5	1.9	0.4	ヒノキ	
W59	加工材	有頭棒	28.5	2.2	1.5	ヒノキ	
W60	加工材	有頭棒	15.5	2.2	2.1		
W61	加工材	不明	73.5	1.7	0.5	ヒノキ	
W62	漆器	椀					底径9cm／残存高1.9cm
W63	漆器	椀				クリ	底径8cm／残存高3.7cm
W64	漆器	小皿				トチノキ	口径15cm／底径6.8cm／器高1.5cm
W65	食事具	杓子	13.5	1.9		ヒノキ	
W66	食事具	しゃもじ	20.2	5.3	0.4	スギ	
W67	食事具	しゃもじ	17.7	4.5	0.5	ツガ	
W68	食事具	杓子	18.3	1.0	0.3	ヒノキ	
W69	加工材	板材	69.2	31.0	1.2	ヒノキ	榫目取り
W70	加工材	板材	66.9	19.6	1.4	ヒノキ	方形の穿孔あり
W71	加工材	板材	48.8	13.8	1.4		
W72	加工材	板材	47.0	13.3	1.6		
W73	加工材	角材	54.1	3.4	1.5	ヒノキ	
W74	加工材	角材	53.7	2.7	2.2	ヒノキ	
W75	加工材	角材	52.6	3.6	1.6	ヒノキ	
W76	加工材	角材	50.3	3.7	1.6		
W77	加工材	部材	66.3	3.5	2.9	ヒノキ	3ヶ所に挟り
W78	加工材	部材	89.5	4.2	2.6	ヒノキ	ほぞ・ほぞ孔あり

表6 平安～鎌倉時代遺物観察表 木製品(3)

遺物 番号	種 別	器 種	法量 (cm)			樹 種	特 徴・そ の 他
			長さ	幅	厚さ		
W79	加工材	不明品	46.8	4.2	0.7	ヒノキ	
W80	加工材	部材	37.8	4.1	1.6		
W81	加工材	棒製品	29.4	1.2	0.9		
W82	加工材	棒製品	24.3	2.2	1.1		
W83	加工材	棒製品	21.9	1.5	0.7		
W84	加工材	部材	16.8	2.9	2.0	二葉マツ	方形の穿孔あり
W85	加工材	板材	17.1	5.4	0.4		
W86	加工材	板材	17.3	7.6	0.5		中央に円形の挽り込み
W87	加工材	部材	15.0	6.1	3.2	ヒノキ	
W88	加工材	板材	21.1	8.1	1.3		
W89	加工材	棒製品	33.9	1.8	1.3		
W90	加工材	棒製品	36.7	2.0	1.7		
W91	加工材	棒製品	32.8	1.4	1.6	ヒノキ	
W92	加工材	部材	18.6	6.0	0.5	ヒノキ	
W93	加工材	不明品	18.1	5.6	3.1		漆膜付着
W94	加工材	不明品	25.3	4.9	0.7		
W95	加工材	不明品	14.8	3.6	0.2		
W96	加工材	不明品	36.8	12.1	0.8		

表6 平安～鎌倉時代遺物観察表 金属製品

遺物 番号	種 別	器 種	法量 (cm)・(g)				特 徴・そ の 他
			長さ	幅	厚さ	重量	
F1	武具	小刀	32.4	3.3	1.1		目釘穴1穴/棟幅1.1cm
F2	生活具	火打金	3.1	8.4	0.7		
F4	武具	鍔	9.5	3.5	0.7		雁又鍔
F5	武具	鍔	14.9	2.9	0.3		
F6	武具	鍔	10.5	0.6	0.4		断面長方形
F7	工具	不明	7.6	0.8	0.2		先端刃部形成
F8	刀装具		5.6	4.0	0.1		内面に漆付着
F9	鉄滓						
F10	鉄滓						
F3	武具	鍔	4.6	3.6	0.3		

第4節 室町時代の遺物

1. 出土状況

室町時代の遺物は館の堀（南堀、東堀、北堀、小型堀）、井戸2基、池、溝、掘立柱建物の遺構から出土しており、主に堀・井戸内で保存状況が良いものがある。

遺物としては、1.土器（国内産として土師器、丹波焼、備前焼、瀬戸・美濃焼の陶器と瓦器があり、輸入品として中国明代の青花、青磁、白磁がある）、2.石製品、3.木製品（竹製品）4.金属製品（鉄、銅、鉛製品）がある。

2. 土器（挿図130～141）

包含層出土で所属が決めがたい遺物と細片を除き、土師器35点(24.5%)、須恵器2点(1.4%)、瓦器1点(0.7%)、丹波焼48点(34.0%)、備前焼9点(6.3%)、瀬戸・美濃焼18点(12.7%)、中国陶磁器28点〔青花11点、白磁10点、青磁7点〕(19.8%)の計141点を図化した。

生産地別にみると地元周辺の丹波、東播の35点(60.2%)、遠隔地の備前、瀬戸・美濃、大和の28点(19.8%)、輸入の中国陶磁器の28点(19.8%)で、地元産が6割、遠隔地の国産陶器類と中国陶磁器が各々2割である。さて、私たちが調査した摂津・三田市中尾城跡出土土器（16世紀前半）117点のうち地元産（摂津、丹波）95点(81.2%)、遠隔地（備前、瀬戸・美濃）19点(16.2%)輸入3点(2.6%)と組成が異なる。中尾城跡は土師器が極端に少なく丹波焼が補完している点を除くと輸入陶磁器の比率が極端に少ない例である。一方、初田館跡は中世都市近くの遺跡と比較すると遠隔地の陶器類と輸入陶磁器が2割均衡と輸入陶磁器比率が低いが、流通経路から遠く離れた地域の集落の比率とは異なる。

土器を供膳・調理・貯蔵・その他に分けると供膳〔皿46点、小杯3点、碗23点、天目碗6点、徳利2点〕80点(56.7%)、調理〔鉢2点、擂鉢32点、捏鉢2点、卸皿1点〕39点(27.6%)、貯蔵〔壺11点、小壺1点、甕7点〕20点(14.1%)、その他〔風炉1点、耳付水注（水滴）1点〕2点(1.4%)となる。再び、中尾城跡と比較すると供膳20%、調理30%、貯蔵43%とは異なり、初田館跡では圧倒的に供膳が多く、貯蔵と逆転する。これは初田館跡は日常生活空間で、中尾城跡は非日常空間という遺跡の性格を表している。供膳具のうち土師器34点(68.0%)、瀬戸・美濃16点(20.0%)、備前2点(2.5%)、輸入陶磁器28点(35.0%)となり、中世都市周辺の遺跡の土器組成に近い。調理具は土師器・須恵器2点(5.1%)、丹波32点(82.5%)、備前4点(10.2%)、瀬戸・美濃1点(2.5%)となり、地元の丹波焼が多くを占める。また、貯蔵具は須恵器1点(5.0%)、丹波16点(80.0%)、備前3点(15.0%)となり、調理具と同じ比率となり窯業生産地を控える地域の消費形態を示している。

ここで、種別毎に概観することにする。

1) 土師器

皿(1~16、56~58、62~64、77~80、95~100)30点と播鉢(40)1点がある。

皿を検討すると、Ⅰ類は粘土円板を手のひらにのせ、指で底を支えるためにヘソを有し、底は丸くなり、ヘソ皿の範疇に入る。幅の広いナデで内面を一周し、口縁へ引き上げ、そして口縁端部をナデ消す。Ⅱ類は平底を作り出し、斜めに口縁を作り出す。底見込みにやや細く鋭いナデ界線を一周させ、少し戻し気味に口縁へ引き上げる。また、皿の法量をみると口径が6.9~13.6cm、器高1.3~2.3cmの幅にはいる(但し、95・97・10を除く)。法量からは5分類でき、A類は口径6.9~8.0cm、器高1.5~1.6cmを計り(1,2,3,4,62,77,78,79,102,103)、10点ともⅠ類に入る。B類は口径8.6~9.7cm、器高1.2~2.4cmを計り(6,7,8,9,10,11,14,56,57,63,96)、11点ともⅠ類に入る。C類は口径9.7~10.2cm、器高1.8cmを計り(5,12,13)、3点ともⅡ類に入る。D類は口径12.4~13.0cm、器高2.1cmを計り(92,98)、2点ともⅠ類に入る。E類は口径12.1~13.6cm、器高1.9~2.3cmを計り(15,16,58,80)、4点ともⅡ類に入る。まとめるとⅠ類の小皿Aと中皿Bと大皿D、Ⅱ類の中皿Cと大皿Eとがある。遺構別の土師器皿をみると南堀・井戸2・池2ではA・B・C・E類が出土している。天文2年(1533)消失の山科寺内町出土の一括土師器と共有するものである。また、Ⅱ類の皿(64)に墨書がある。

播鉢(39)は底部しかないが備前焼播鉢を模倣した土師器の播鉢である。6本1単位の櫛目を広い間隔で放射状に割り付けている。そして一箇所にヘラで綾杉文を描いており、使用痕が著しい。

2) 須恵器

中世須恵器は東播磨魚住窯産の甕(86)と捏鉢(105)があり、室町時代前半に属する。

3) 瓦器

瓦器は大和産の風炉(27)が1点出土しており、当時の喫茶を天目碗と共に示している。

4) 丹波焼

丹波焼は調理・貯蔵具に限り48点出土している。調理具は鉢1点、播鉢28点、捏鉢3点の計32点で貯蔵具は壺10点、小壺1点、甕5点の計16点である。播鉢は中尾城跡で分析したようにヘラで卸目を約6本1単位で6~8単位に放射状に割付ける手法であり、片口部に手印を小さく描く。播鉢は完形に復元できるものは91のみである。播鉢と捏鉢の比率も(中尾城跡32:3/初田館跡28:3)一般的な消費地の傾向となる。甕は口縁端部の沈線が残るもの(29)と丸くなるもの(52)がある。

3) 備前焼

備前焼は供膳具の徳利2点(40,69)と調理具の鉢・播鉢3点と貯蔵具の壺(28)・甕(42)2点がある。丹波焼との比率は(中尾城跡7:91/初田館跡9:48)少し異なる。甕は「三入」銘があり三石入りの甕で内面に黒色付着物がある。壺(28)と甕(61)は備前焼Ⅳ期、他は備前焼Ⅴ期に属する。

4) 瀬戸・美濃焼

瀬戸・美濃焼は供膳具の皿8点と碗3点と天目碗6点の計17点と調理具の卸皿1点とその他の書に使う耳付水注(水滴)1点がある。瀬戸・美濃焼の供膳具は輸入陶磁器青磁を写したものが多く、その代用品として広く流通している。皿は中皿口径17cm(18,36,37)、小皿口径10.7~11.2cm(30~32)で全面灰釉施釉で腰に稜をもち高台が低く、高台内底面に輪トチン跡が残る(32)。皿見込みに十六弁印花文(38)、三枚カタバミ印花文(65)がある。大窯Ⅰ期に属するものが多い。碗は全面灰釉施釉の口径12cmの丸碗(19)と口径12~13cmの鉄釉天目碗(19,33,34,81~83,104)であり、口縁形から大窯Ⅰ期(19,82)とⅡ期(33,34,81~83,104)に属する。卸皿は土壇7で述べたように室町前半に属する。耳付水注は口径3.1cm、胴径6.1cm、底径4.0cm、高さ4.1cmで鉄釉が施され、糸きり底であり、大窯Ⅰ期に属する。

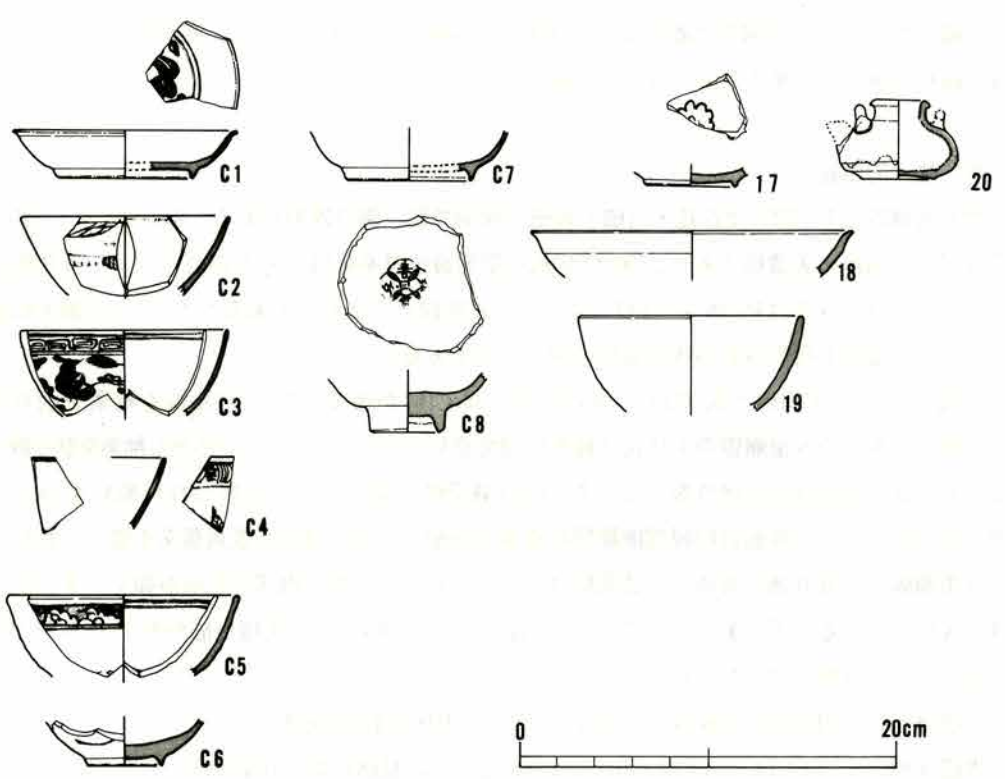
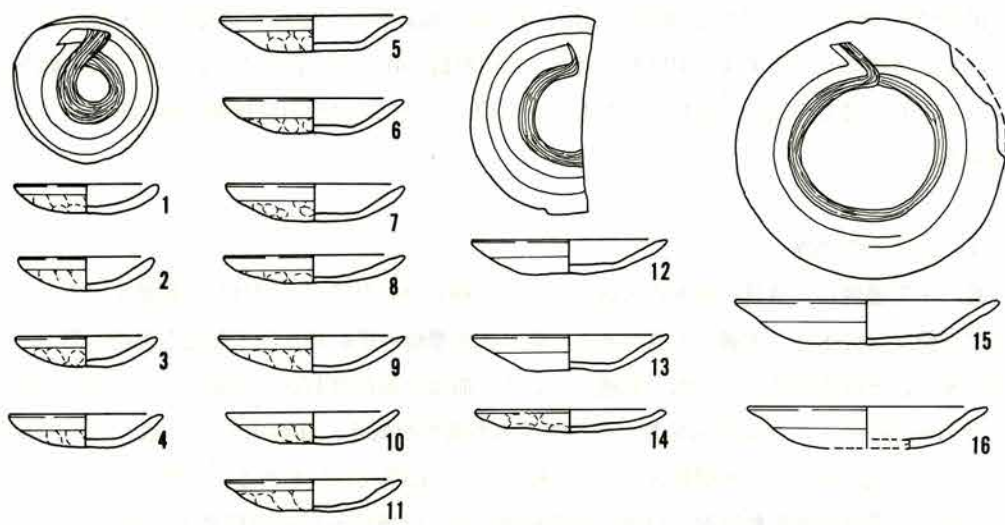
5) 輸入陶磁器

輸入陶磁器(C1~C27)は青花・白磁・青磁の種別で皿、碗の器形がある(但し、C13・C25は青磁写しの瀬戸・美濃焼であり、C6は18C代の肥前波佐見系染付であり訂正する)。時期的にはC2,C5,C16の3点は16C後半に属し、C15は天正年間に下るものであるが大方は16C前半に属している(遺跡下層の鎌倉時代の遺物の混入も若干ある)。

青花は皿(C1,C9,C19)と碗(C2,C3,C4,C5,C10,C15,C16)がある。C1は口縁端を釉薬を削り取り、底見込みにのみ重圏線の中に花文様を呉須で描いている。高台畳付け部分も釉薬を削り取っている。底の釉薬は刷毛塗りをしている。C9は碁筭底で畳付け部分は釉だれが酷いものか、削り取られている。外面は口縁部圏線間に波濤文を配し、重圏線下に芭蕉葉文を描く。底見込みは重圏線内に五弁蓮花を描く。透明釉は厚く施されているが、内部の気泡が強く、また焼成時の火膨れもある下手の製品である。C19は底のみで重圏線の上に文様が描かれているが不明である。畳付け部の釉は削られている。

白磁は皿(C7,C12,C20)と碗(C11,C18,C21,C22)と小杯(C17)がある。

青磁は碗(C8,C13,C14,C23,C24,C26,C27)のみである。見込みに「春夏秋冬」(C8)、「寿」(66)の印花があるものや細蓮弁文碗である。



挿図130 室町時代土器(1) 南堀(1)

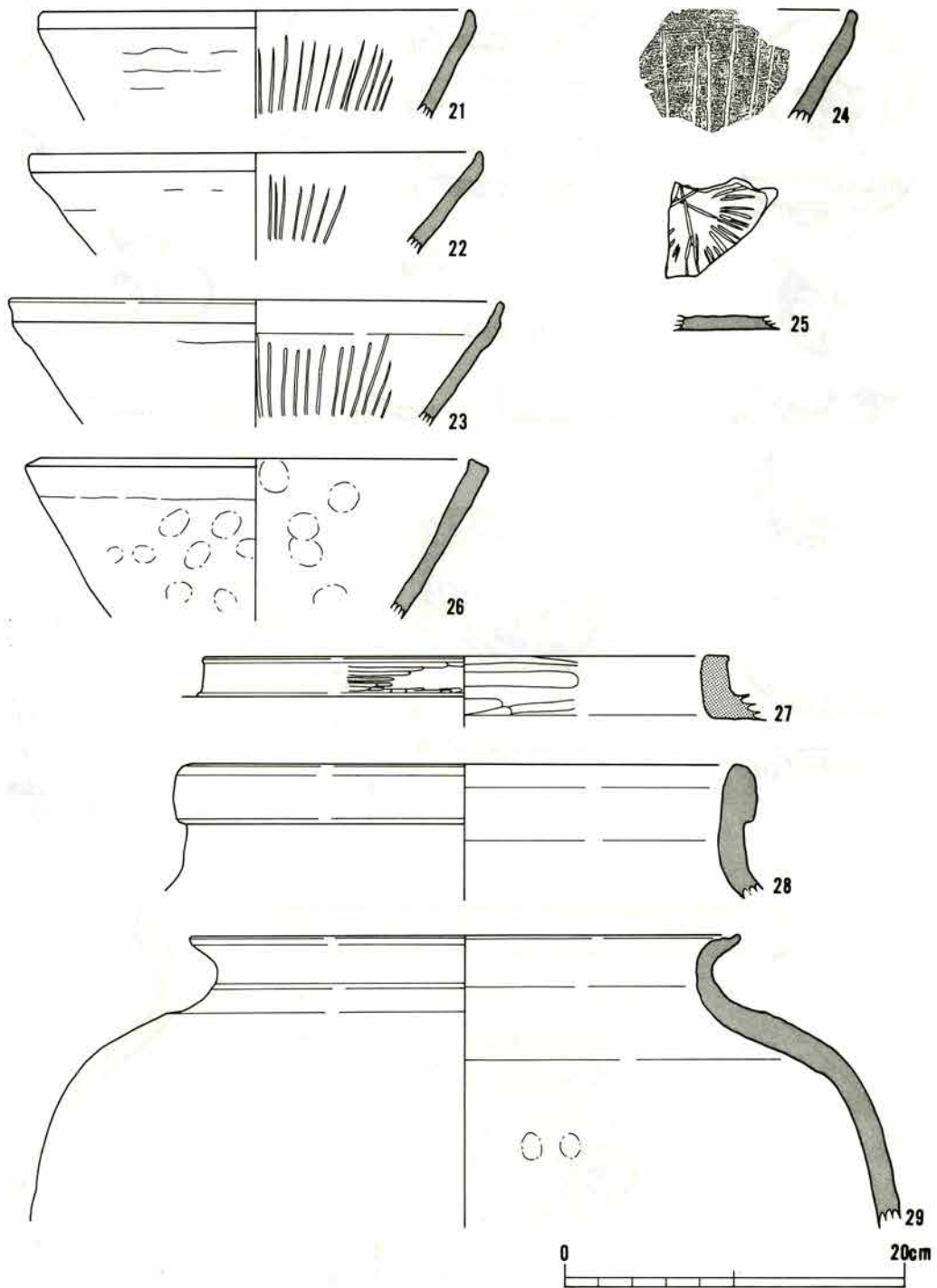


插图131 室町時代土器(2) 南堀(2)、土製品

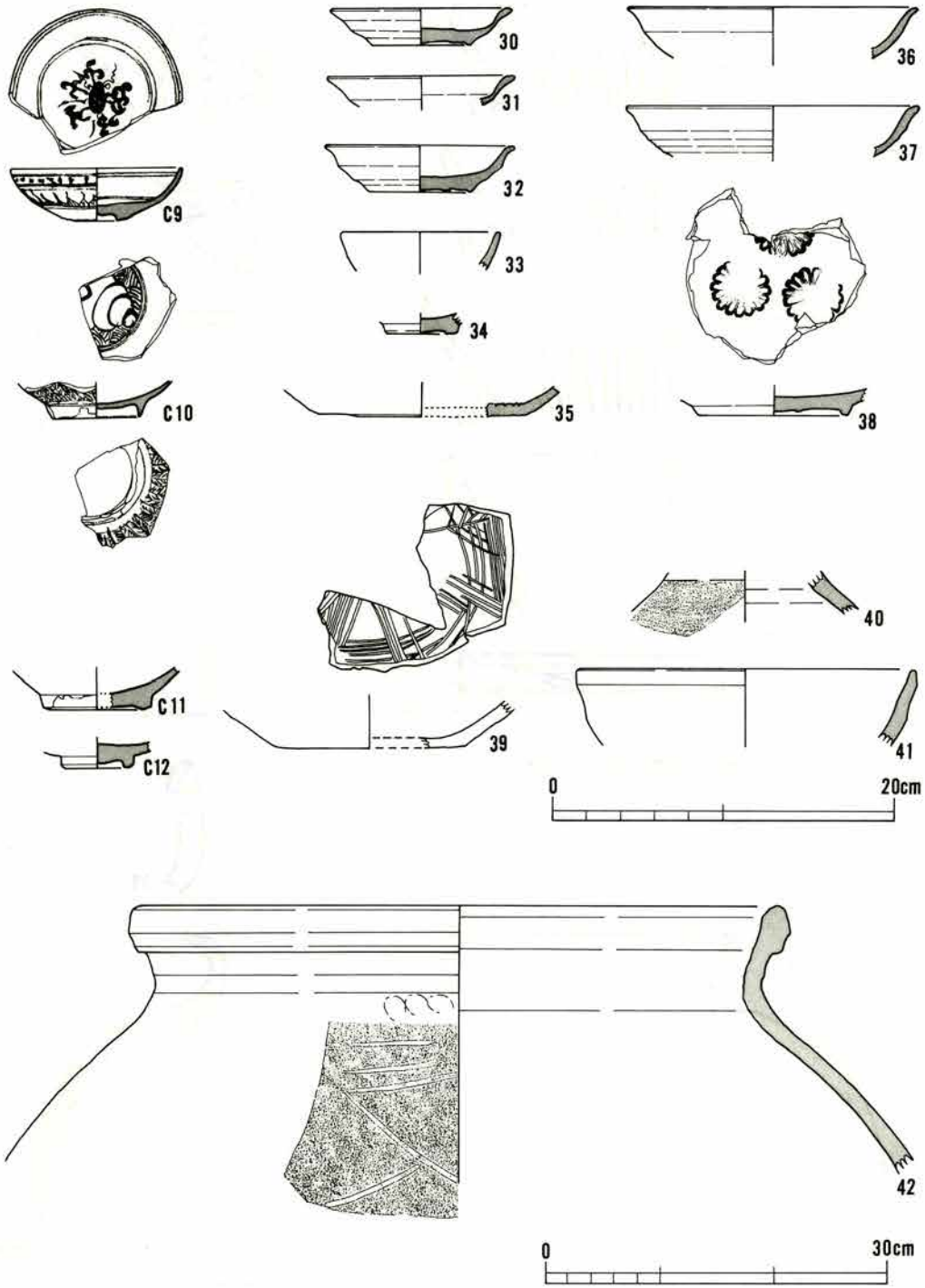
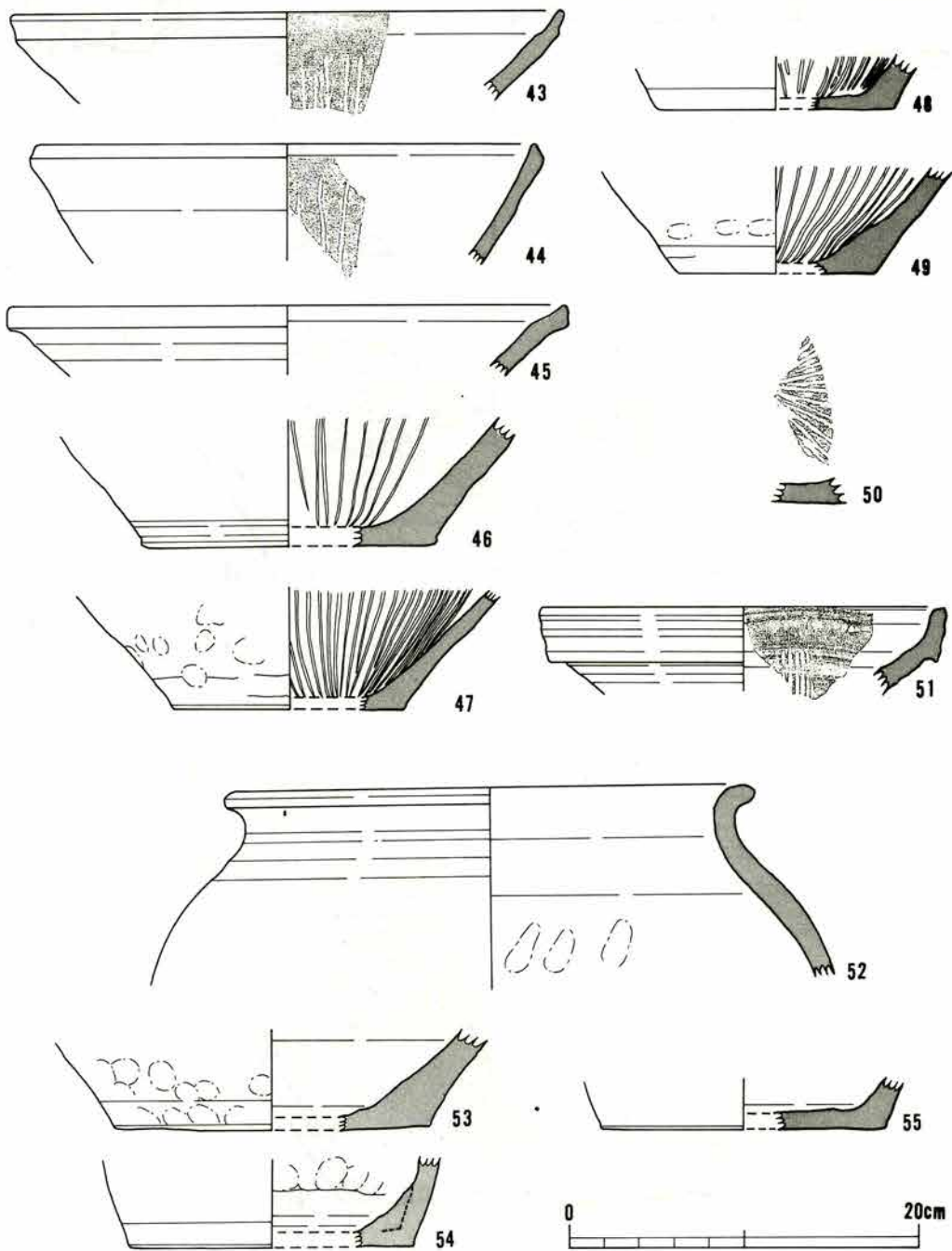
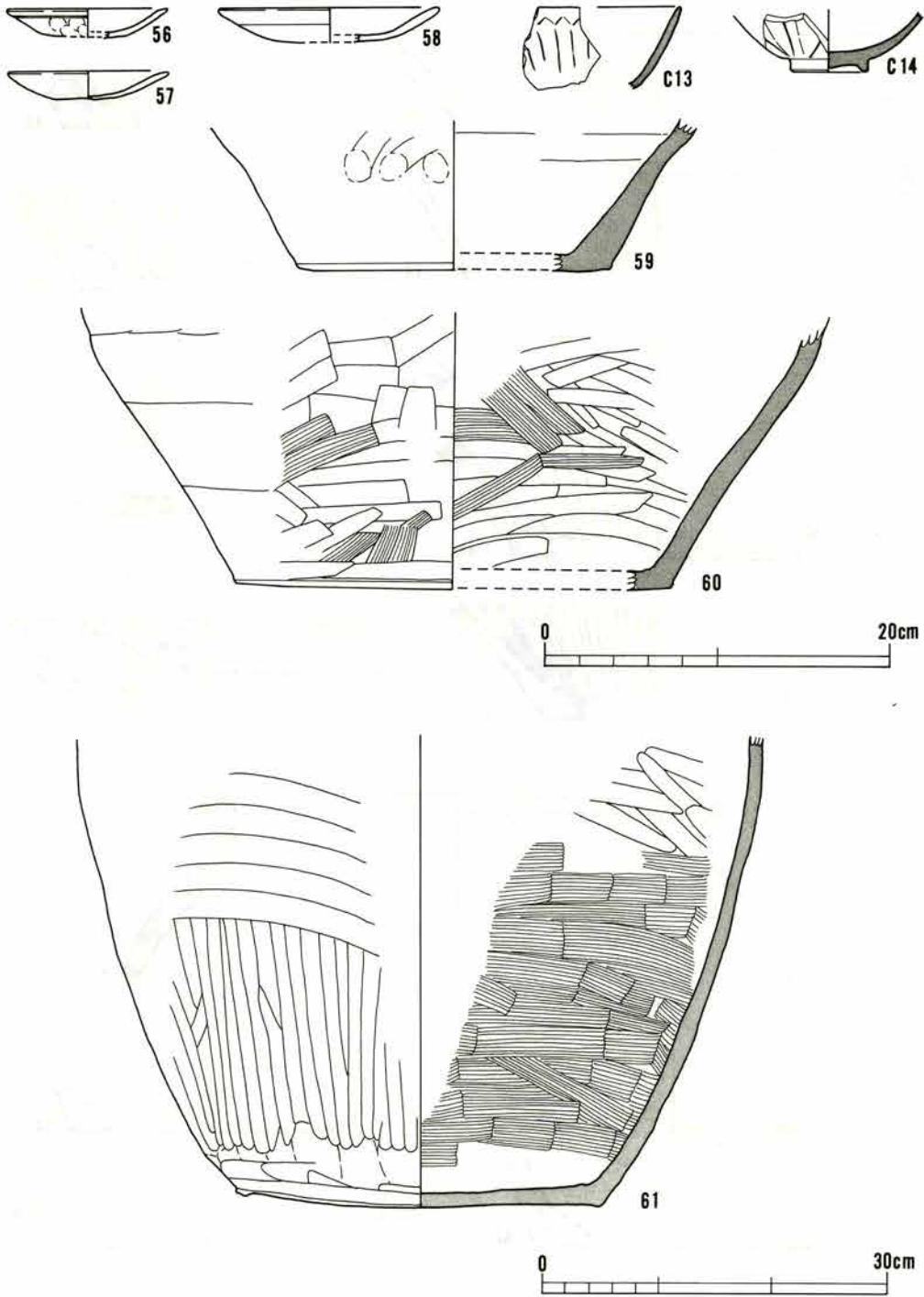


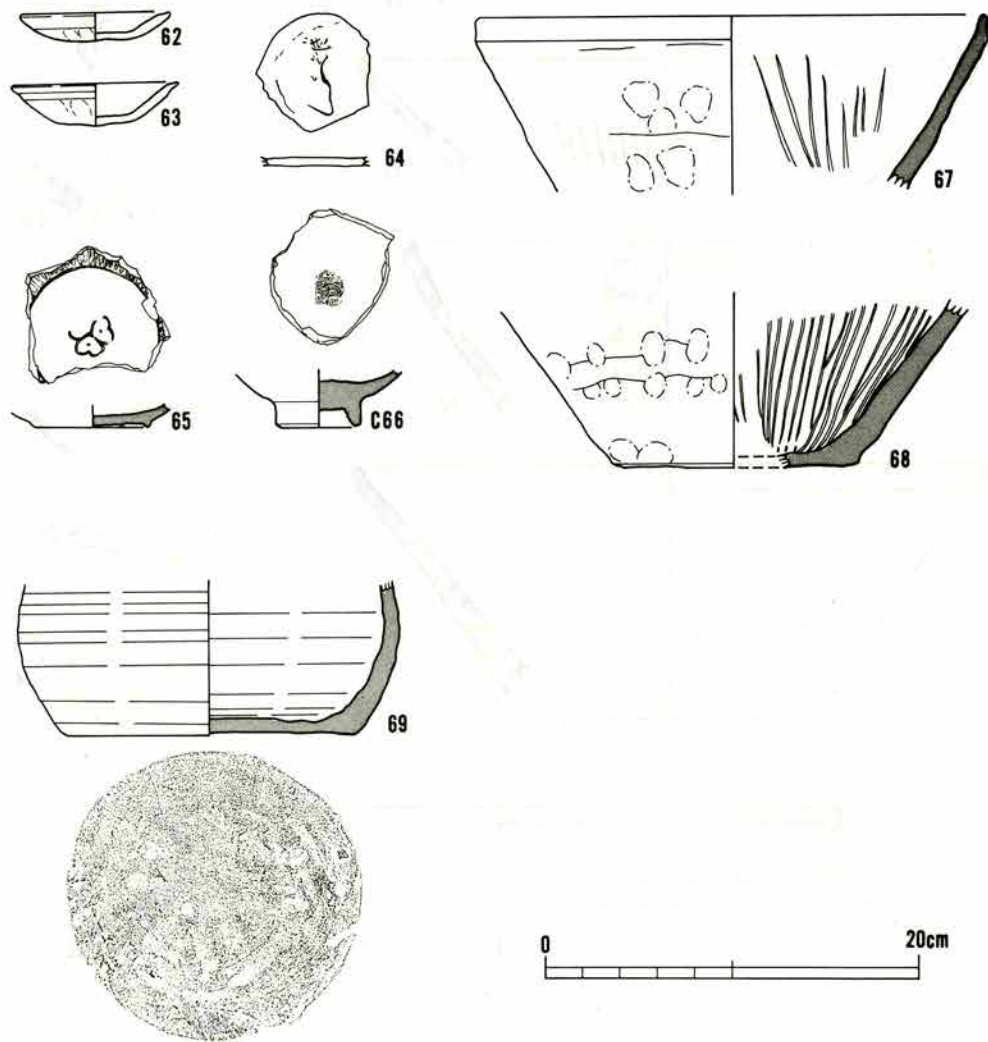
插图132 室町時代土器(3) 北堀(1)



挿図133 室町時代土器(4) 北堀(2)



挿図134 室町時代土器(5) 東堀(1)



挿図135 室町時代土器(6) 井戸2・3

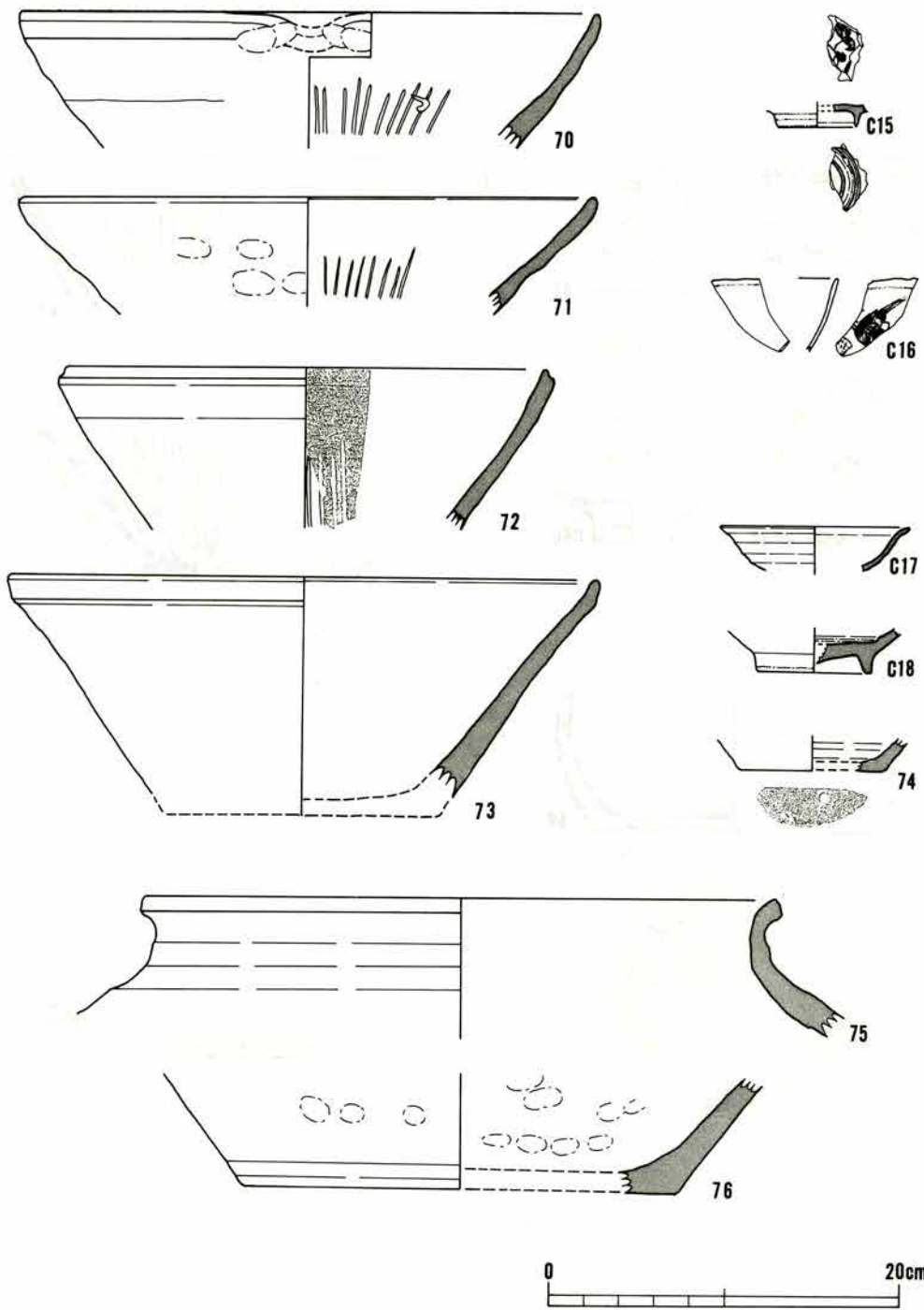
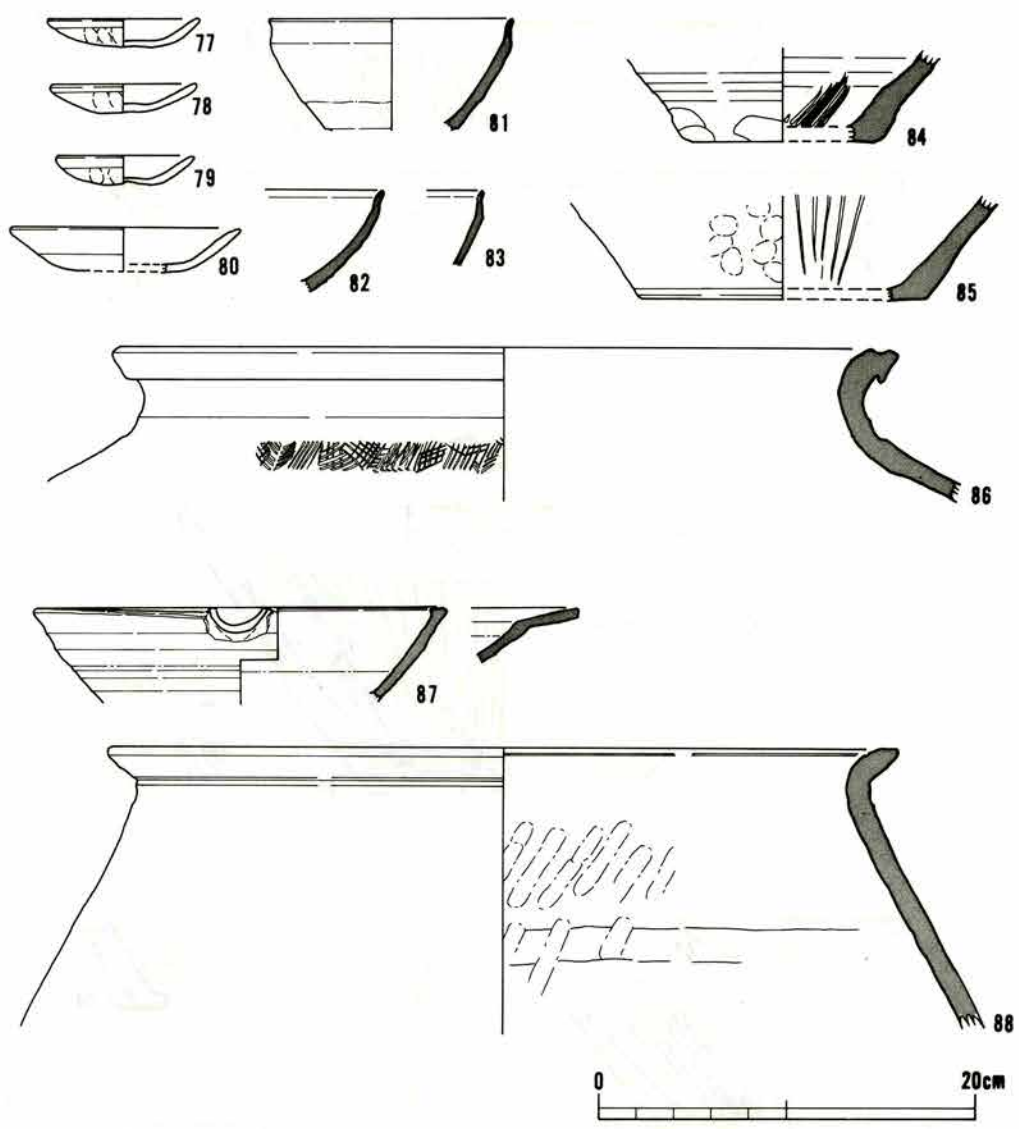


插图136 室町時代土器(7) 小型堀



挿図137 室町時代土器(8) 池2・土壌7

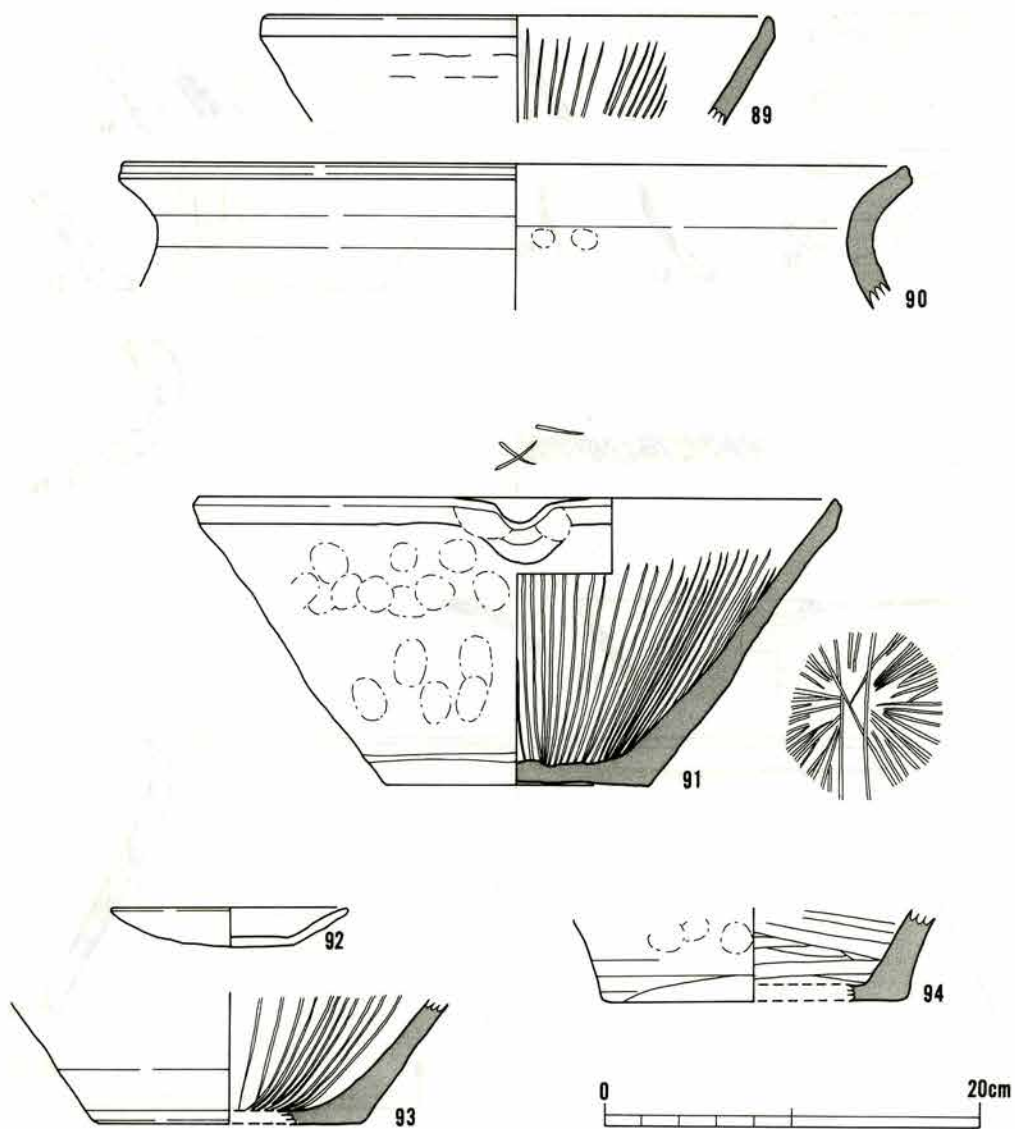


插图138 室町時代土器(9) 溝3・溝1・池1

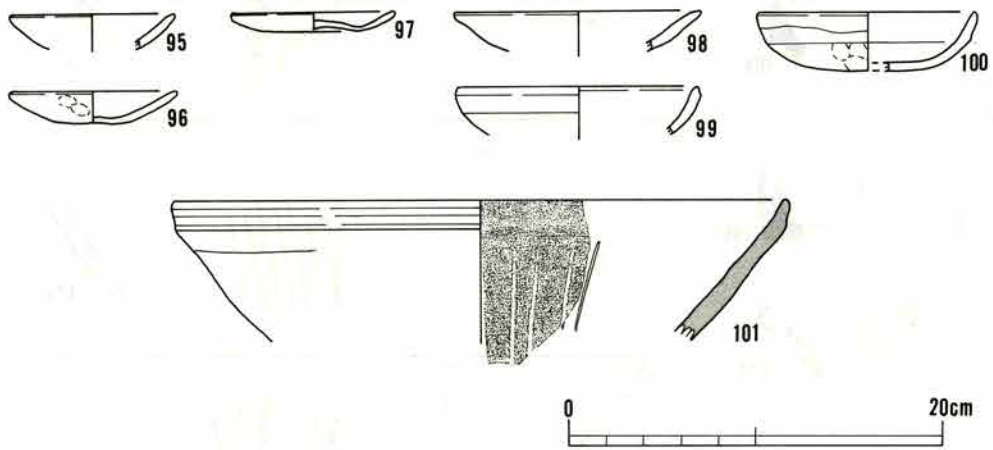


插图139 室町時代土器 (10) 柱穴他

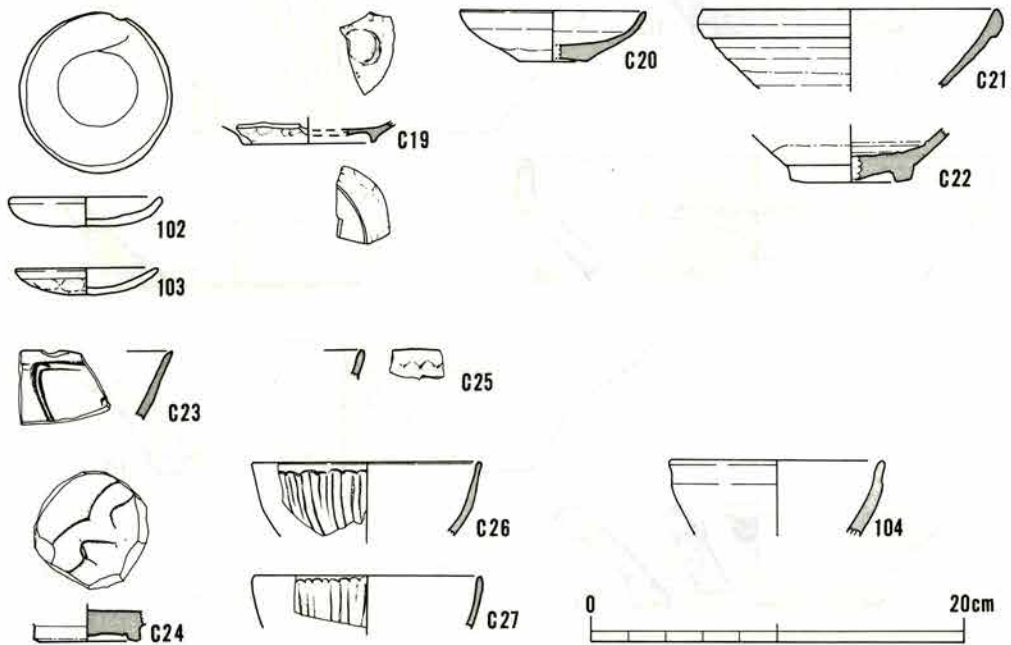


插图140 鎌倉・室町時代土器(1) 包含層 (1)

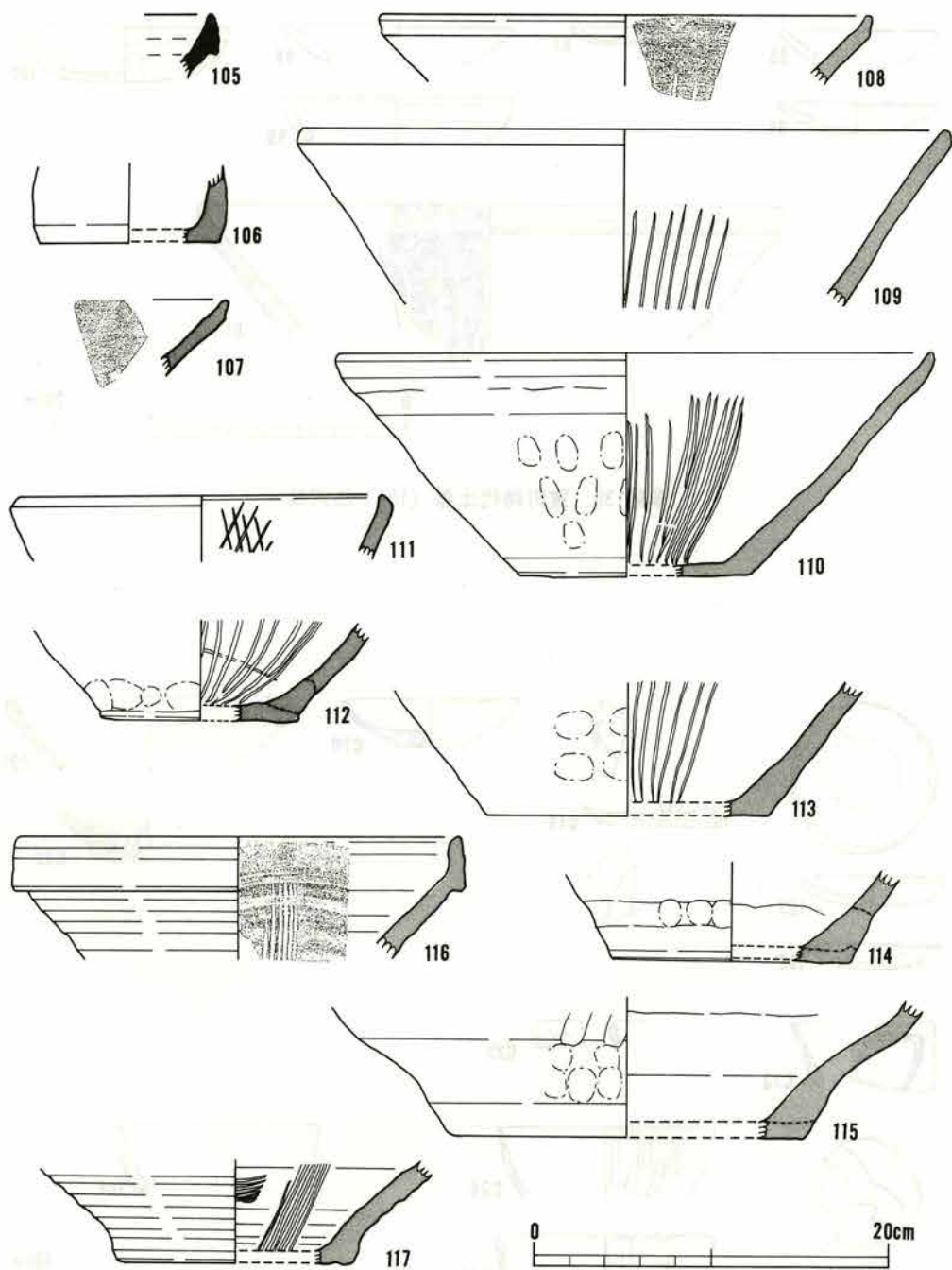


插图141 鎌倉・室町時代土器(2) 包含層(2)

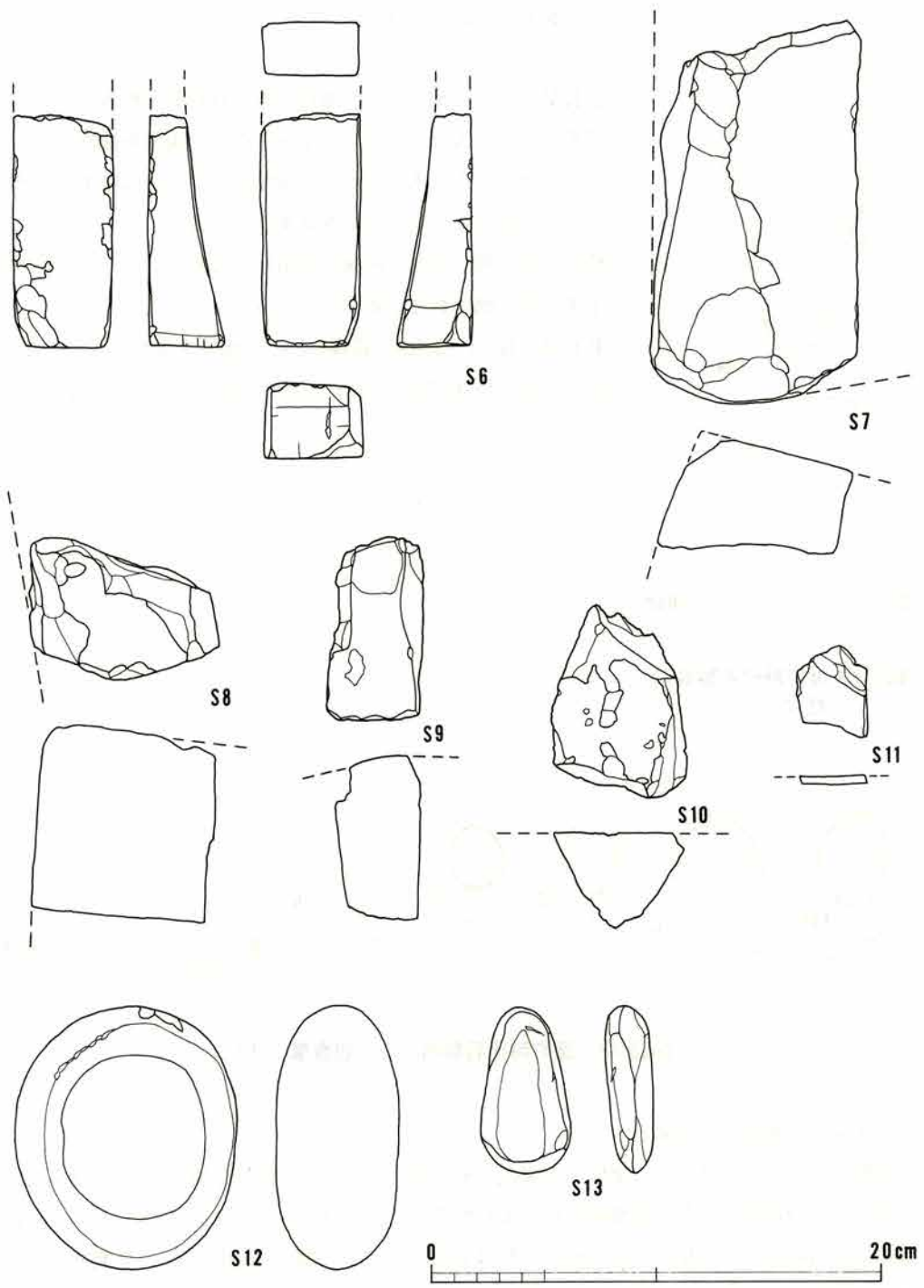
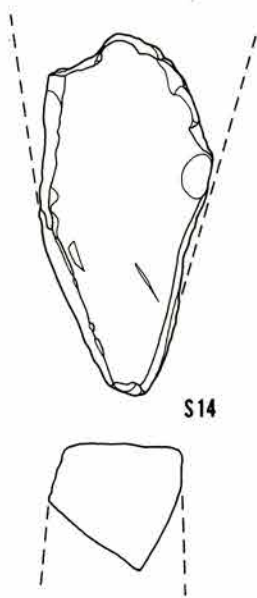


插图142 室町時代石製品(1) 砥石・磨石



3. 石製品 (挿図142~144)

石製品として、砥石 7 点、磨石 2 点と碁石 5 点がある。

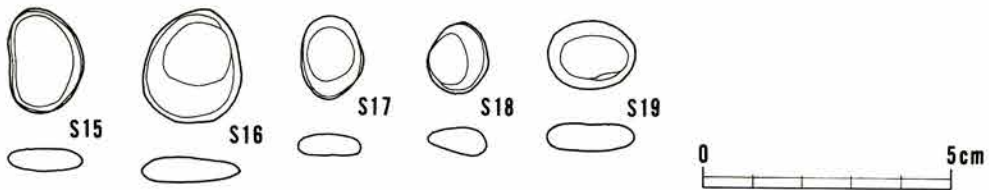
砥石は砂岩と大理石を用い、1～5 面の使用痕が観察される。S6、S11 は携帯用と考えられる。南堀や井戸 2 から出土のように折れたり、欠けたりしたものを廃棄している。

磨石は敲打痕があり、側縁が使用による磨滅がみられる(S12)と小型で少し磨かれている(S13)がある。

碁石は長径2.1～2.2cmと長径1.4～1.7cmの2種類(S15～S18)の那智黒石と長径1.8cmの白石(S19)がある。



挿図143 室町時代石製品(2)
柱穴



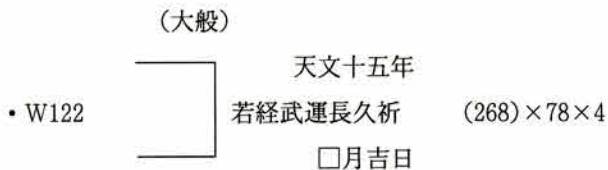
挿図144 室町時代石製品(3) 包含層(2)

4. 木製品 (挿図145~156)

木製品は井戸 2、井戸 3、南堀と北堀から多く出土しており、86点を図化した。木製品は奈良国立文化財研究所の『木器集成図録』等を参考とし、分類を試みると、木筒 1 点(0.5%)、容器 19 点(10.3%)、食事具 2 点(1.0%)、農具 2 点(1.0%)、服飾具 5 点(2.7%)、遊戯具 1 点(0.5%)、武器 1 点(0.5%)、祭祀具 9 点(4.9%)、建築具 18 点(9.8%)、加工材 5 点(2.7%)と不明品 14 点(7.6%)がある。

1) 木簡

南堀の一括遺物の中に転読札(W122)がある。上部を欠損しているが「(奉転読大般) 若経武運長久祈」と読む。祈願は天文15年(1546)□月吉日で、願主は裏面の墨痕が無く不明である。転読札は復元すると長さは40cm近くになり(残存26.8cm)、幅7.8cmで厚さ0.4cmを計る。天文15年は管領職細川晴元らが丹波国に走り、翌年には丹波国より入京を計るという混乱の時でもあった。先の天文9年には諸国悪疫が流行し、後奈良天皇が「般若心経」を書写し、祈祷をしており、初田館跡においても混乱の鎮静と武運=戦勝祈願が行われたことが判る。転読札が魔除けの羽子板(完形品)とともに鏝が放たれた南堀に発見されたことは、祈願後の初田館跡のあり方を暗示している。



2) 容器

容器は供膳具の漆碗4点と碗2点、柀1点、竹筒2点、曲物桶4点、結桶5点と栓1点がある。漆碗は井戸2(W97,W98)と北堀(W165,W166)で出土しており、井戸2周辺に集中している。碗2点は体部に二条沈線が刻まれており、W167はW97と同じ口径16cmである。W97は高台が高く、W98は黒漆の上に朱漆書文様があり、W165,W166と同じ法量で口径14cmで、高台が低い。生地はクリ・トチノキを使用している。

柀は内法15.0×15.0×7.5cmを計り、5寸四角で高さ2寸5分となり中世の一升柀で、スギ1寸9分幅の板を3枚並べ底板とし、側板4枚を組み合わせ木釘で留める。

竹筒はいずれもマダケ属を用い、W104は底の縁近くによって小穿穴があり、水鉄砲?を考えてしまう。一方、W105は節を除去し大部に丸穴を穿っており用途不明であるが、容器とした。

曲物桶のうちW111は井戸3出土ヒノキ材で作られており、口径20.3cm、高さ15.3cmを計り、W112は同じくヒノキ材使用した曲物の底板である。

結桶は井戸の釣瓶として用いられたもの(W100)と井戸3の井戸側として用いられたもの(W119~121)と容器として用いられたもの(W111)がある。W100は下に2帯のタガの跡がみられ、高さ21.9cmを計る。井戸側は遺構で詳しく述べられている。W172は北堀から出土した破片である。

3) 食事具

食事具はスギ材の箸の折れ(W99)が井戸2から漆碗とともに出土している。W128は比較的残りがよく、長さ23.9cmを計る。ツガ材を使用。

4) 農具

農具は木錘(W101)と大足(W140)が井戸2と南堀から出土している。木錘はナラ類の心持材を削りだして作っており樹皮を残す。筵、薦などを編む錘りとして使用される。

W140は大足の枠になるもので弓の耳に削り出して結束する部分を片方のみ残す。

5) 服飾具

服飾具の下駄5点が井戸3(W116)、南堀(W131~133)、北堀(W169)から出土している。カキノキ、クリ、ミズキ、ヌルデとそれぞれ材が異なる。丸下駄(大・小)、角下駄があり、足が高いものもある。

6) 遊戯具

遊戯具の羽子板(W123)は、モミ材で完形品としては貴重な出土例で、長さ31.5cm、幅10.5cm厚さ0.9cmを計り、柄は長さ9.2cm、幅2.4cmで肩は二段に作りだし装飾性がある。

7) 武器

武器として南堀出土のカヤ材の弓(W141)1点がある。大足と比べ太く頑丈である。弓箭の削りもしっかりしている。

8) 祭祀具

祭祀具は(1)小形で面取りがあるもので井戸2出土のヒノキ材のW108、井戸3出土のW113、W114、南堀出土のW129、W130と(2)有孔小形の井戸2出土のヒョウタンW109、ツバキW110と(3)細有孔板W126、W170と(4)斎串? W127に分ける。

9) 建築具

建築具は(1)橋脚や柱材で二葉マツ材のW161~164、W142・W143と、(2)柵杭で横棧を通すほぞ穴を持つクリ材のW179、W180で長さ140cmを超えるもので、北堀から出土しており土塁際に柵列の存在を復原できる。(3)家屋の板葺屋根材などに用いられる釘穴をもつW144~W147、W179-W183でモミ材を多く使うが、他にツガ、スギ材が有る。(4)道具としてヒイラギ材(楔はツバキ)の掛矢が2点北堀から出土している。作業台として転用時の刀痕が多くみられる。

10) 加工材

丁寧に細工が施される用途不明の木製品が多く出土している(W106、W133、W135、W137~139、W173)。

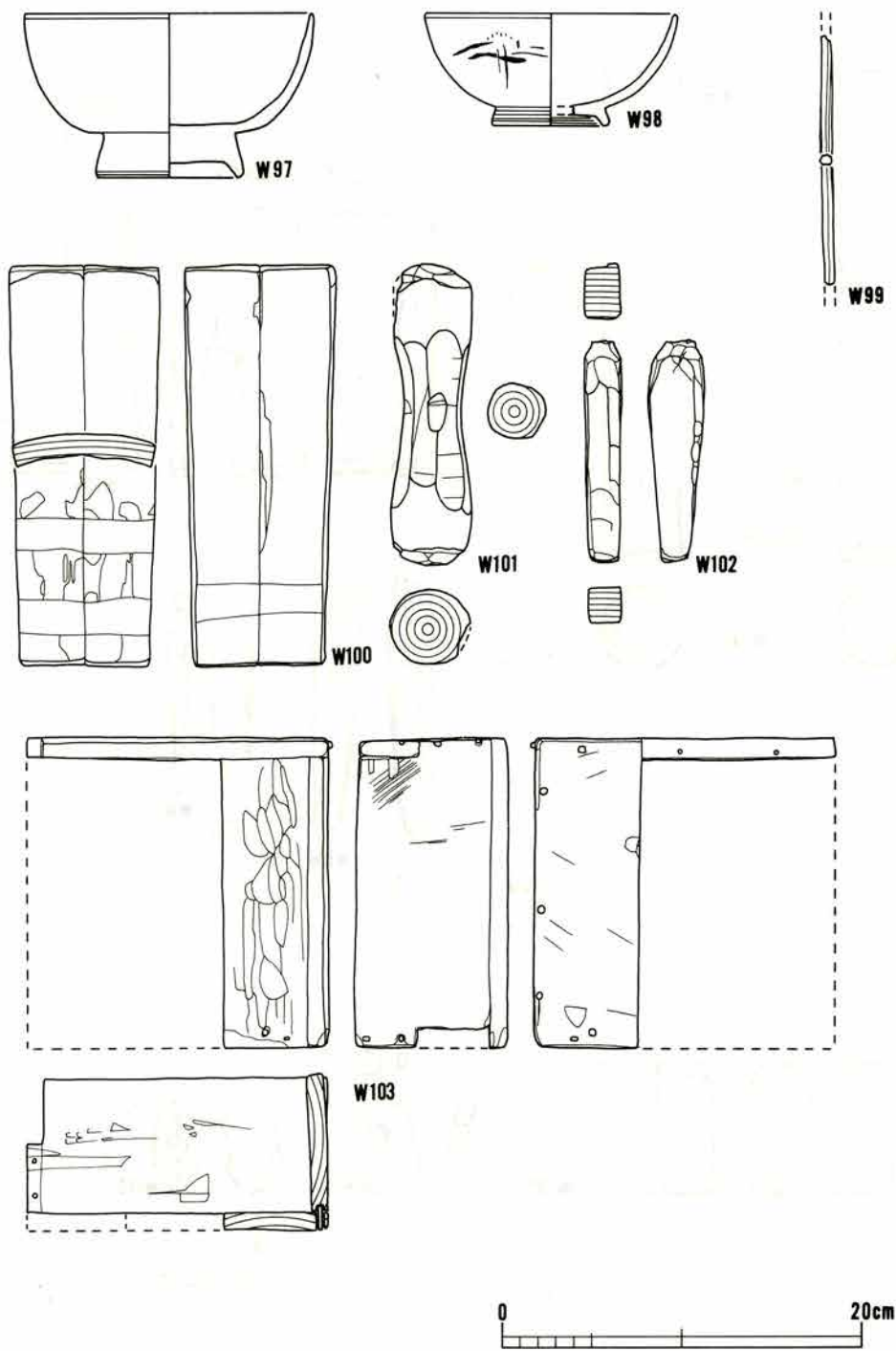
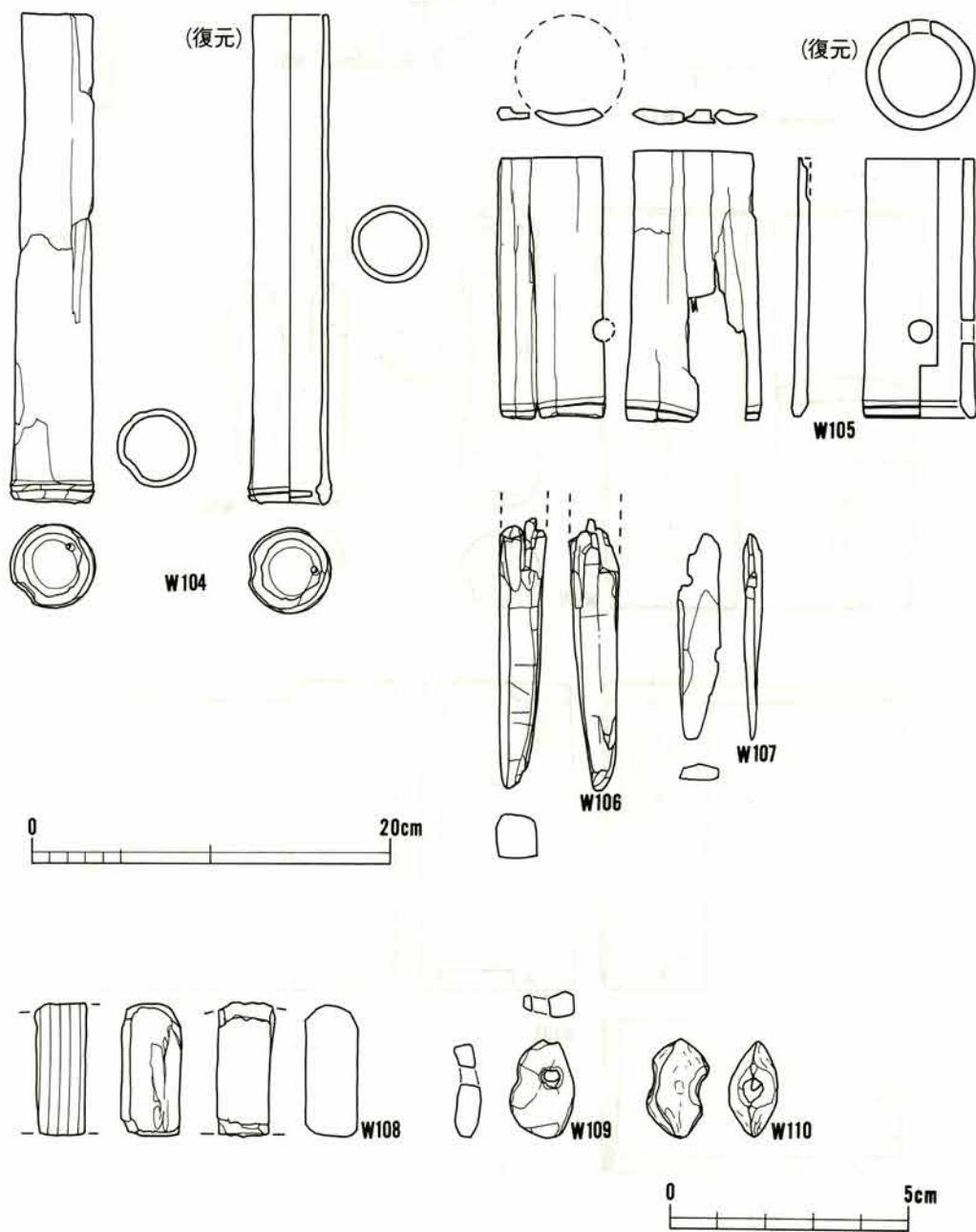


插图145 室町時代木製品(1) 井戸 2



挿図146 室町時代木製品(2)・竹製品 井戸 2

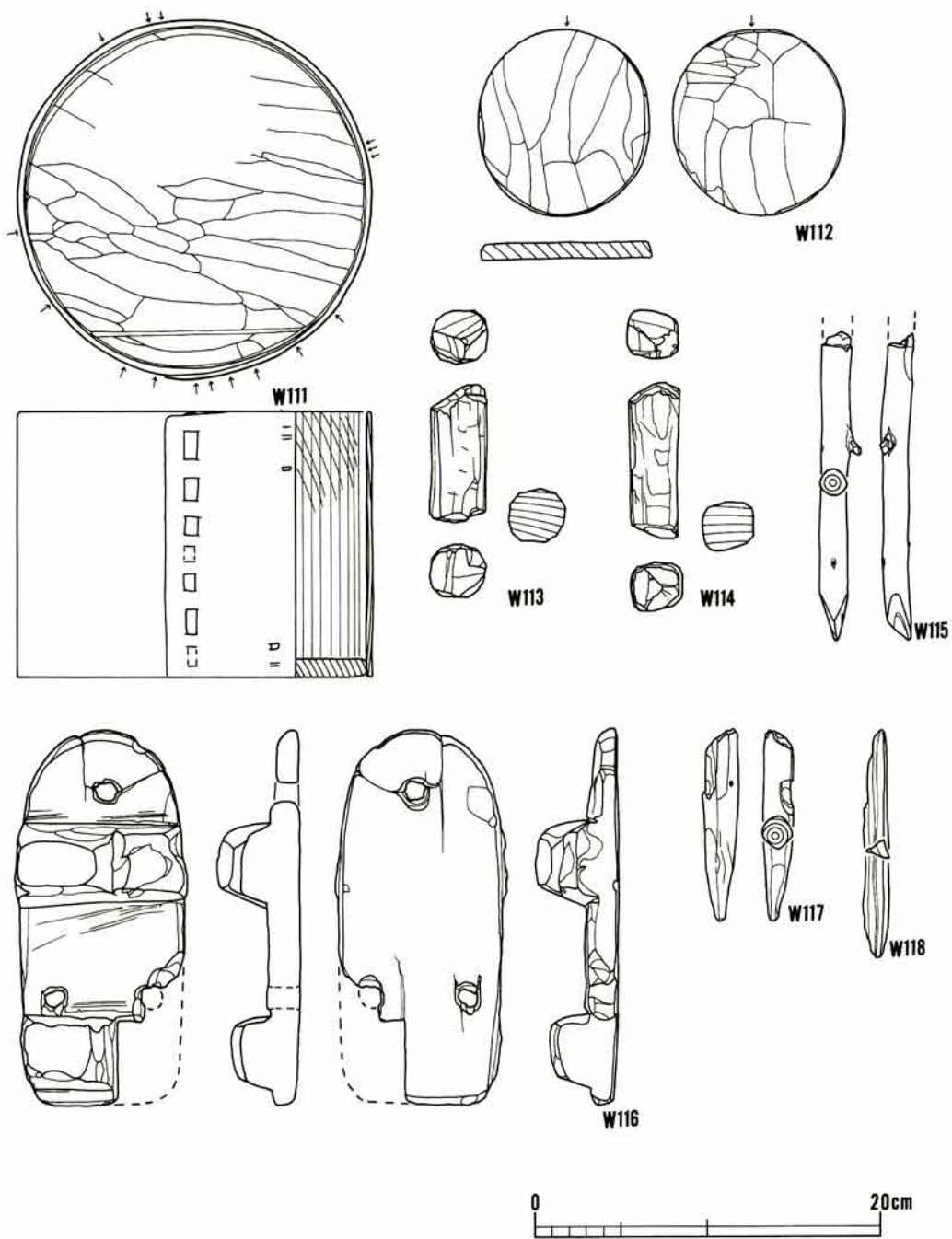


插图147 室町時代木製品(3) 井戸3(1)

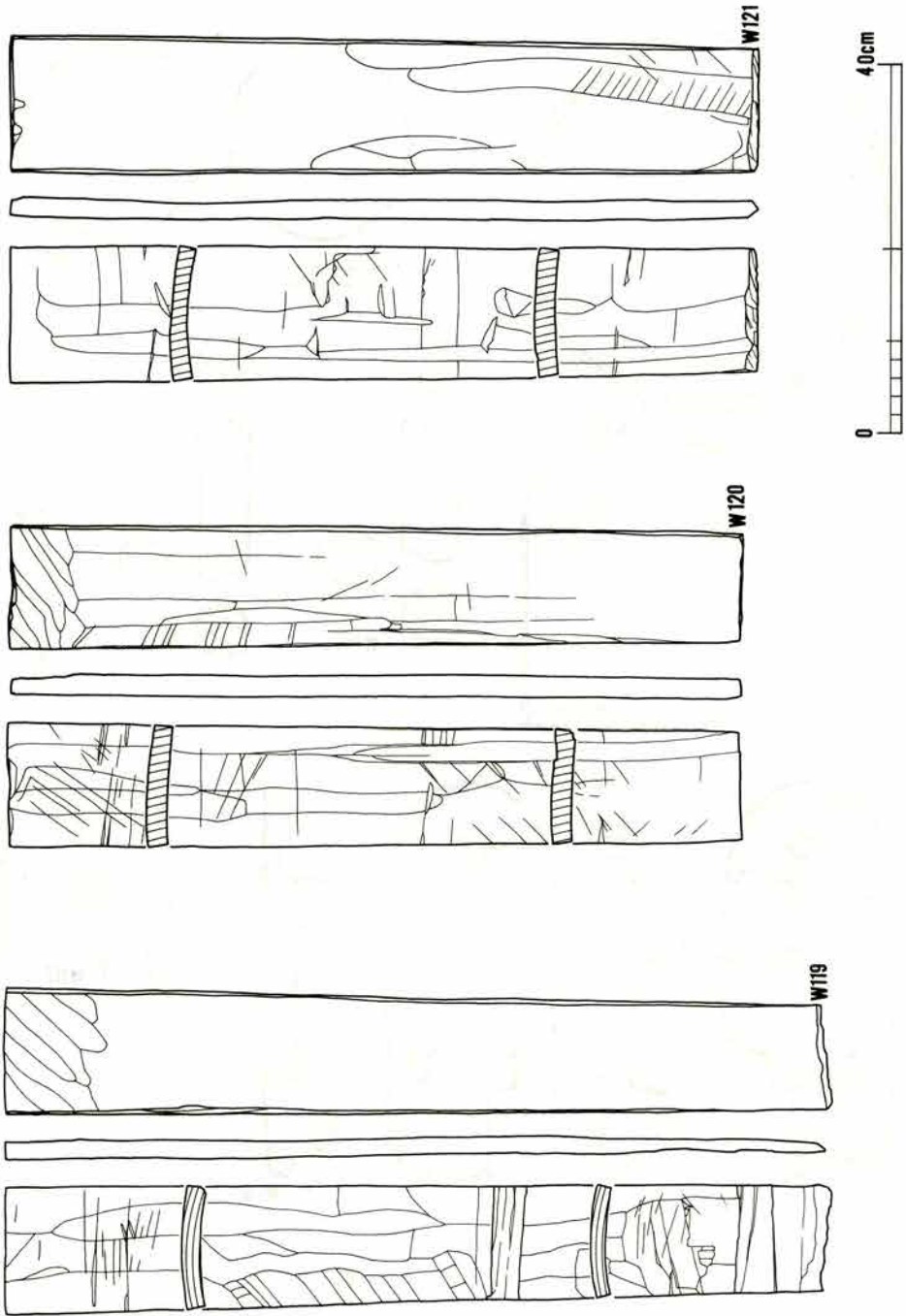
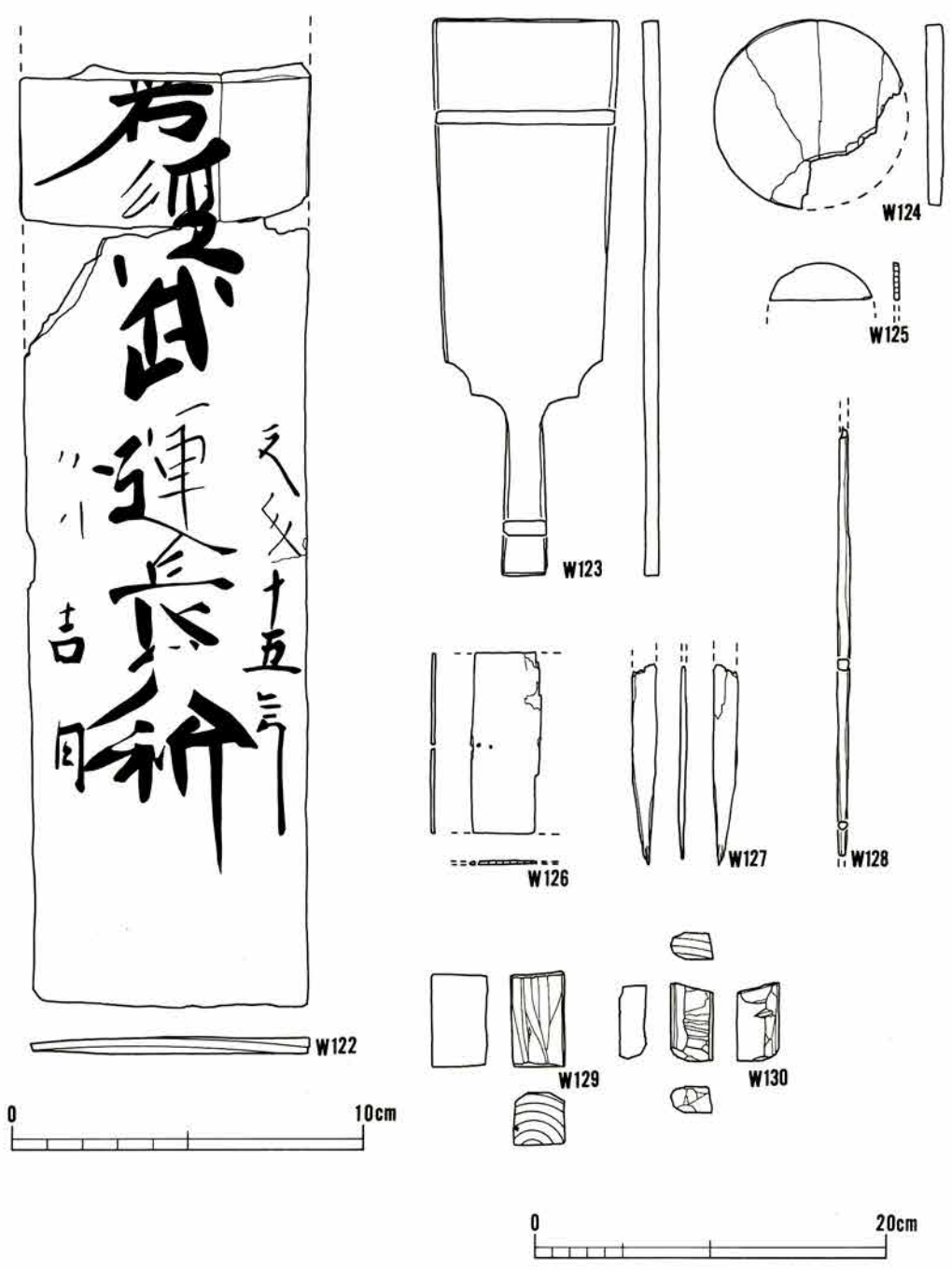
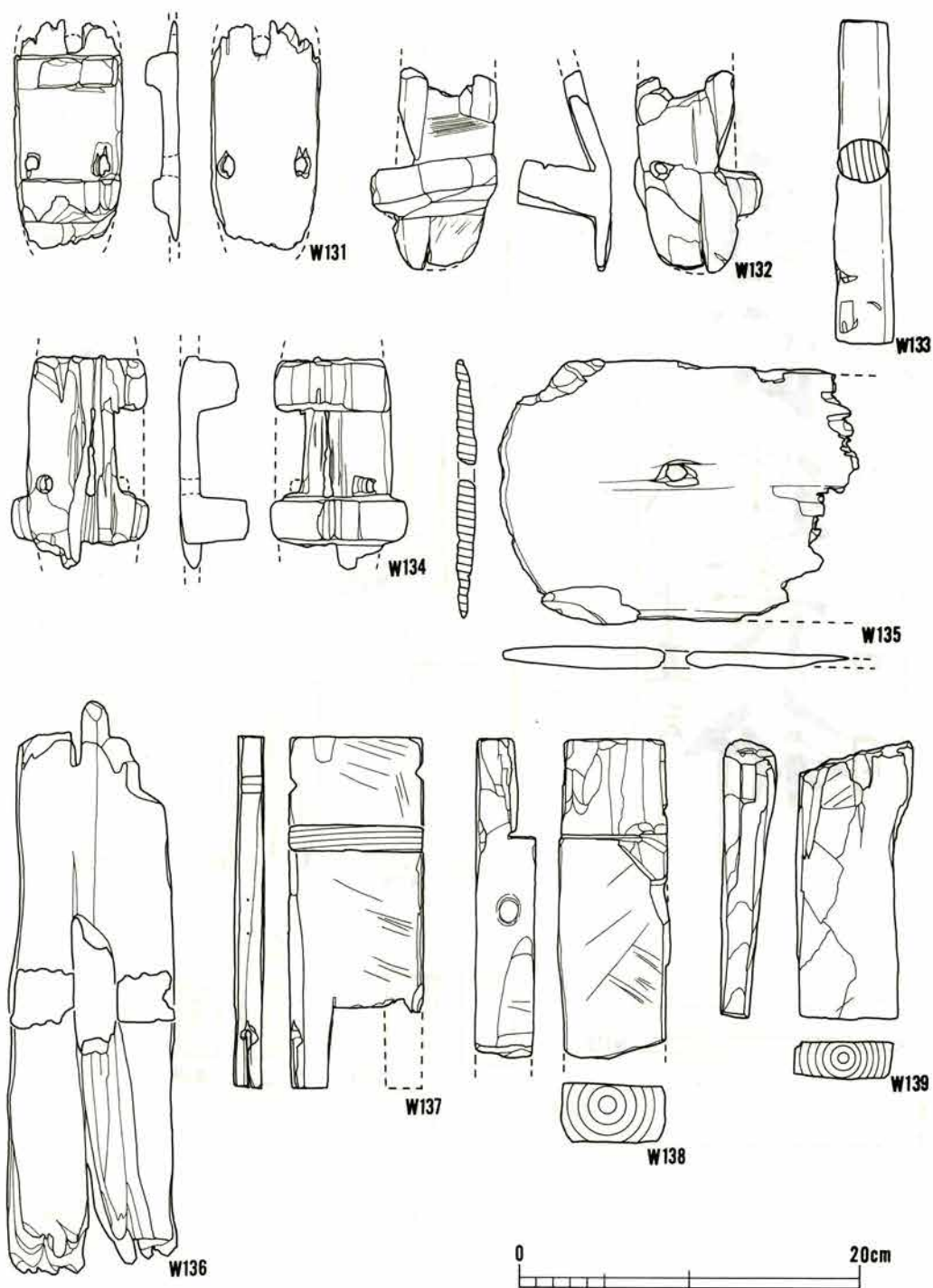


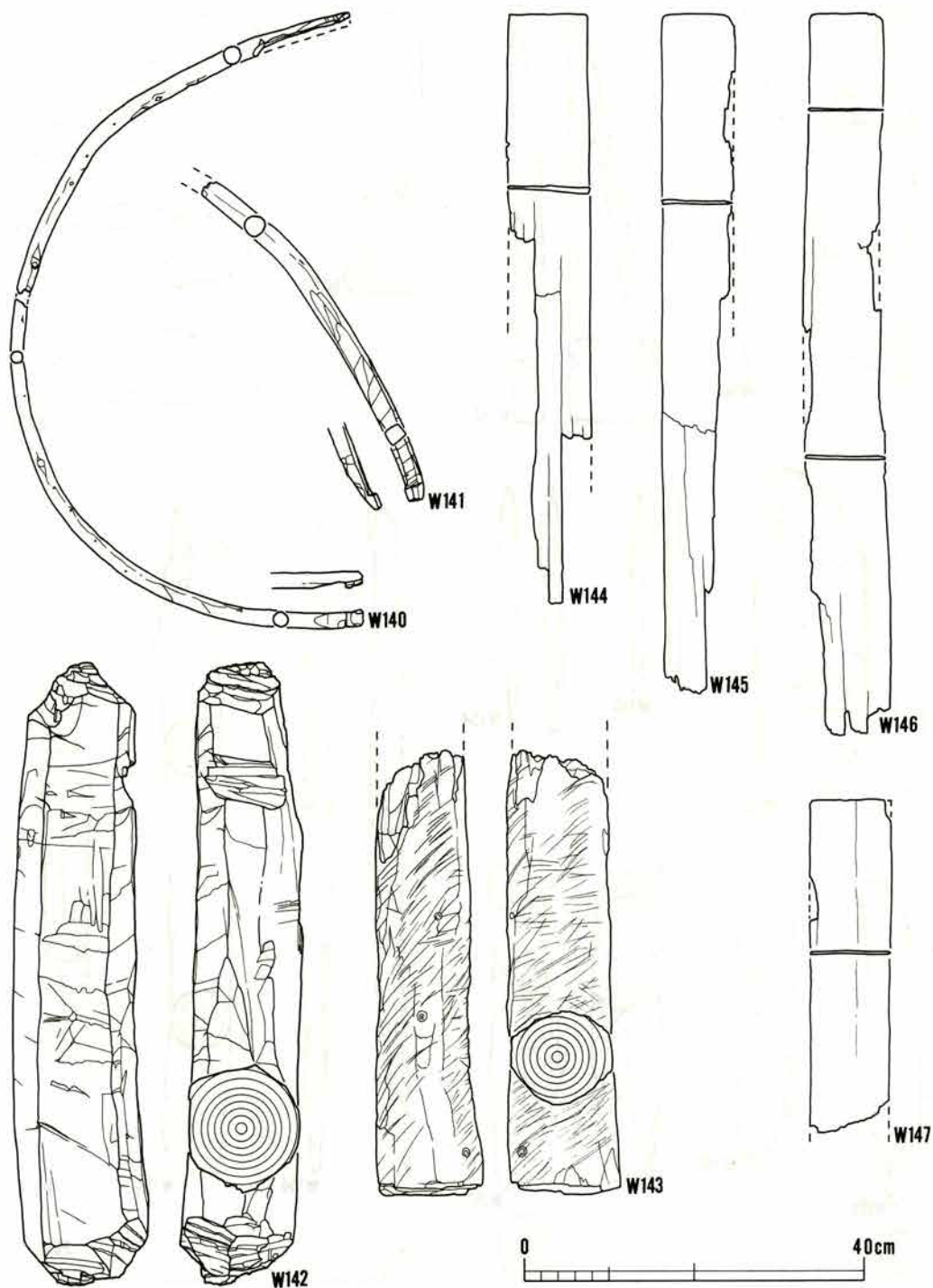
插图148 室町時代木製品(4) 井戸3(2)



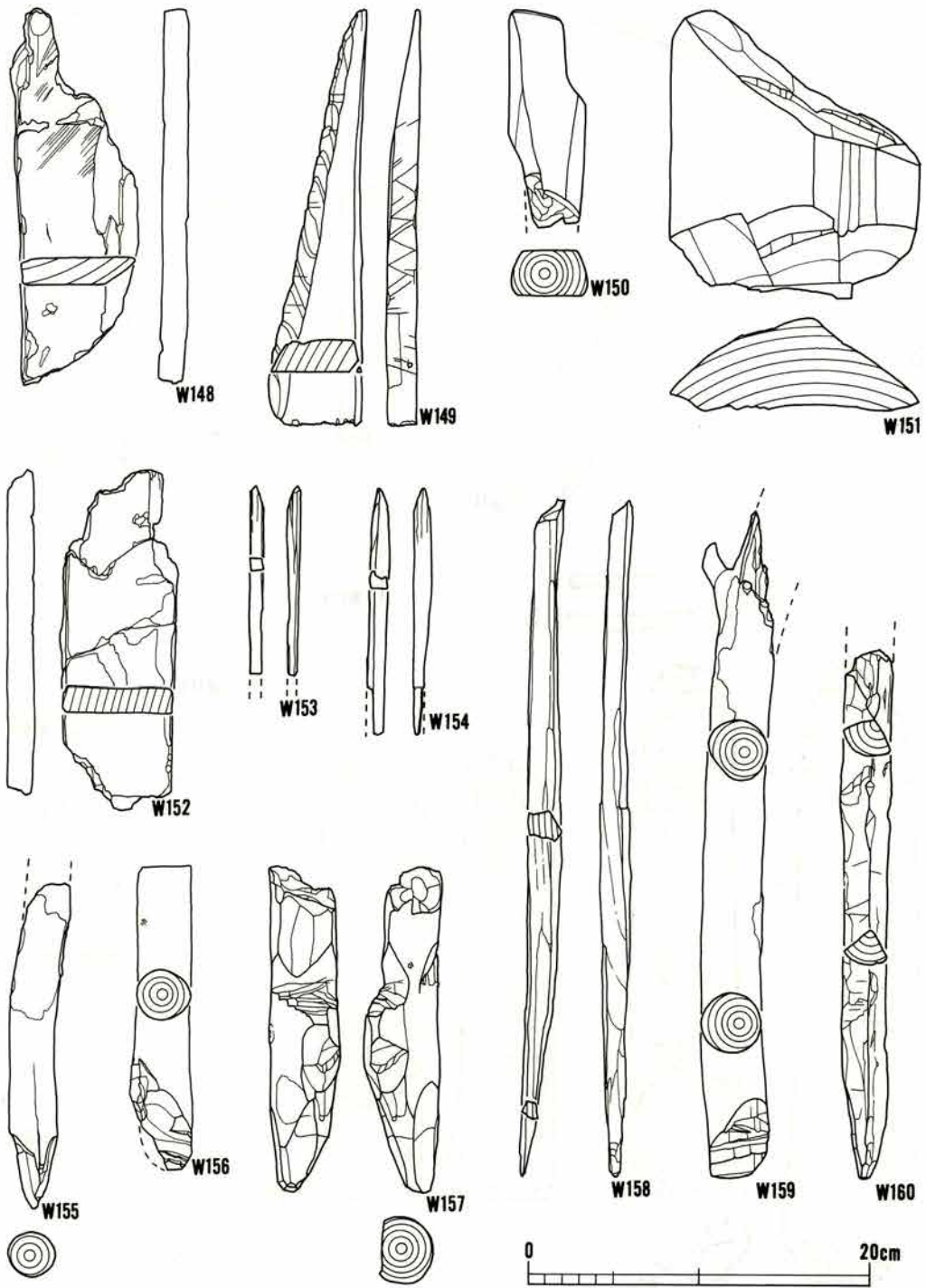
挿図149 室町時代木製品(5) 南堀(1)



挿図150 室町時代木製品(6) 南堀(2)



挿図151 室町時代木製品(7) 南堀(3)



挿図152 室町時代木製品(8) 南堀(4)

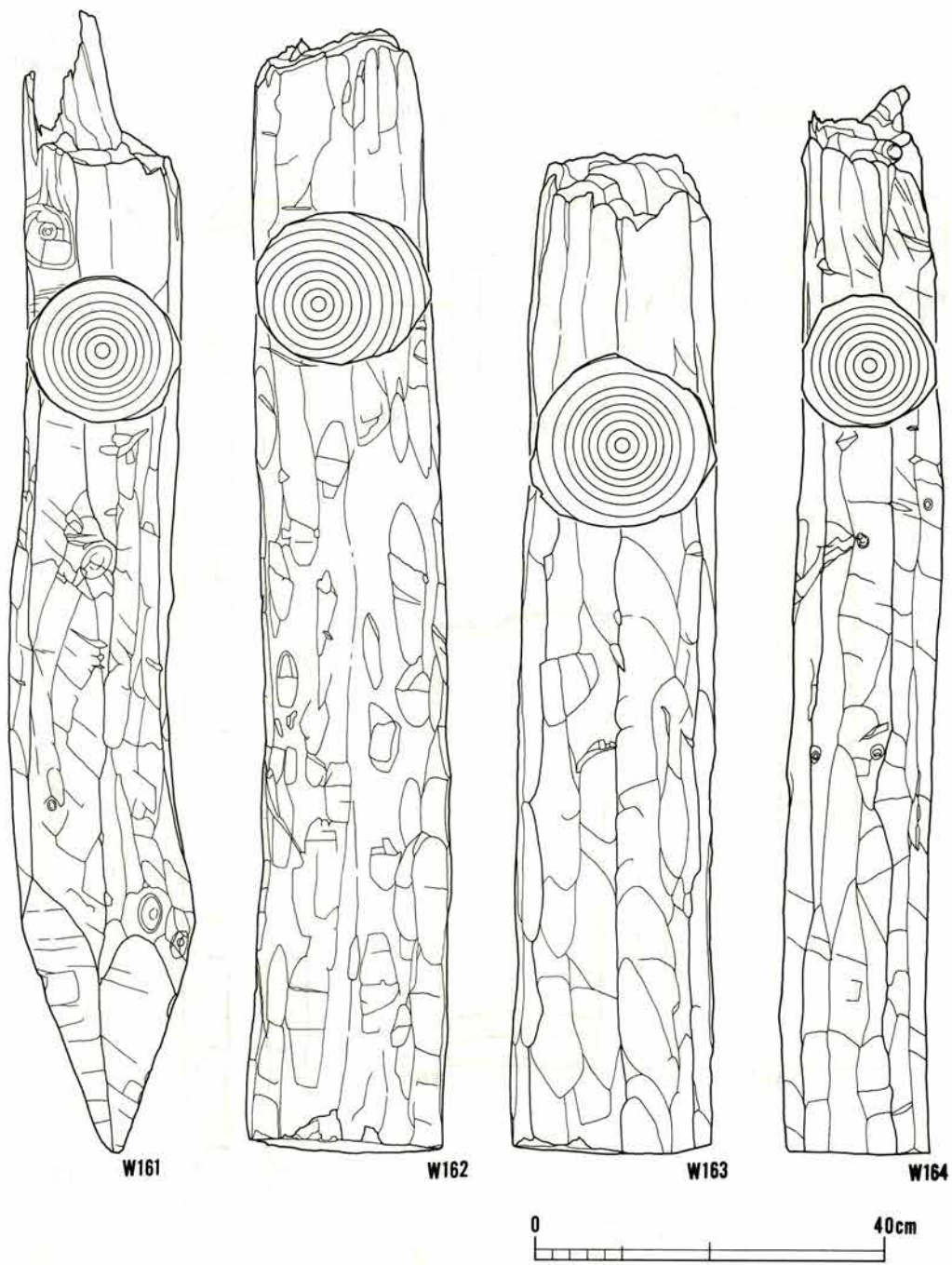
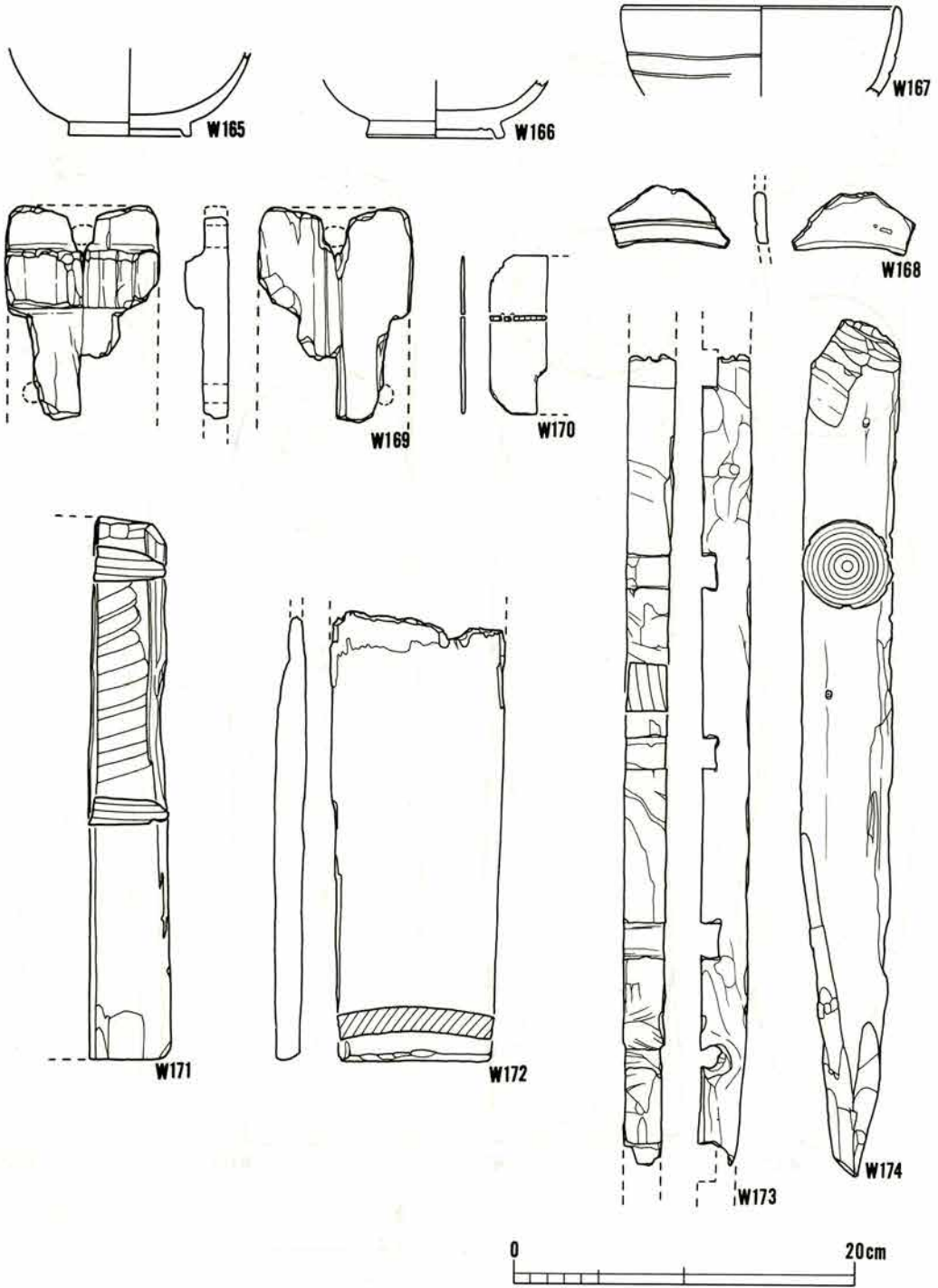
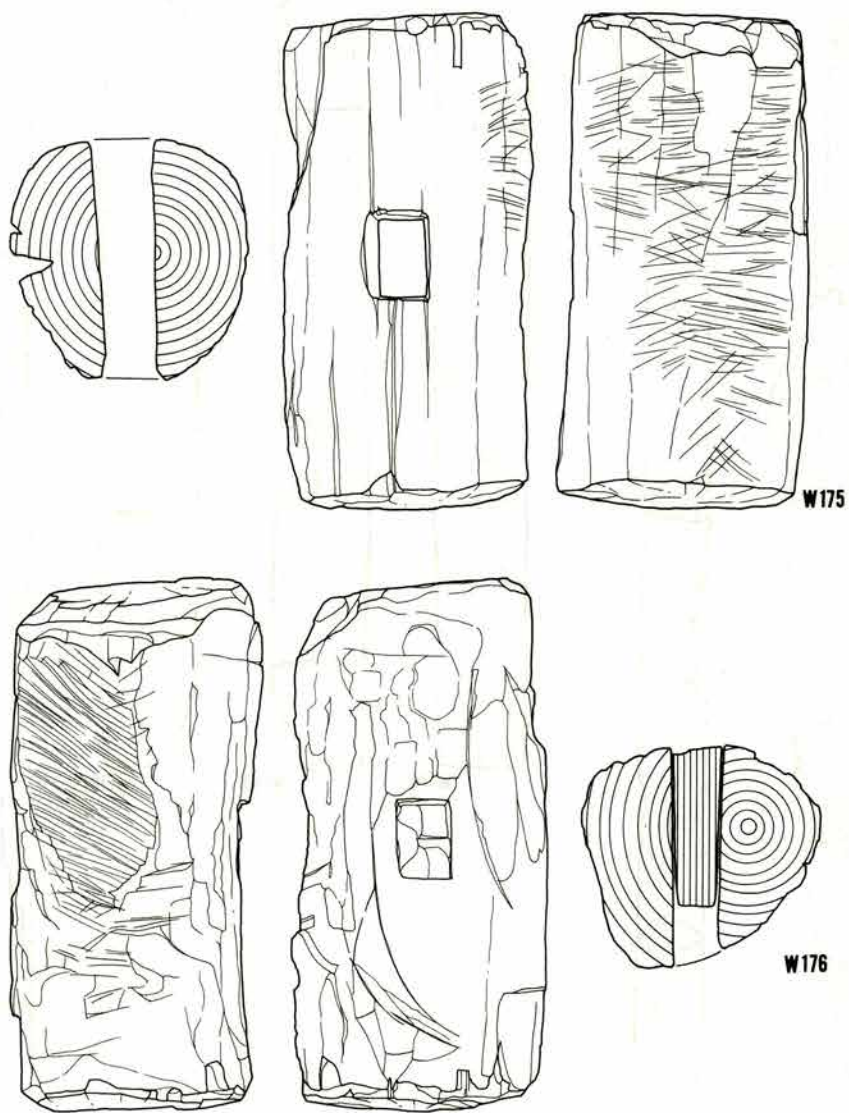


插图153 室町時代木製品(9) 南堀(5)



挿図154 室町時代木製品(10) 北堀 (1)



挿図155 室町時代木製品(11) 北堀(2)

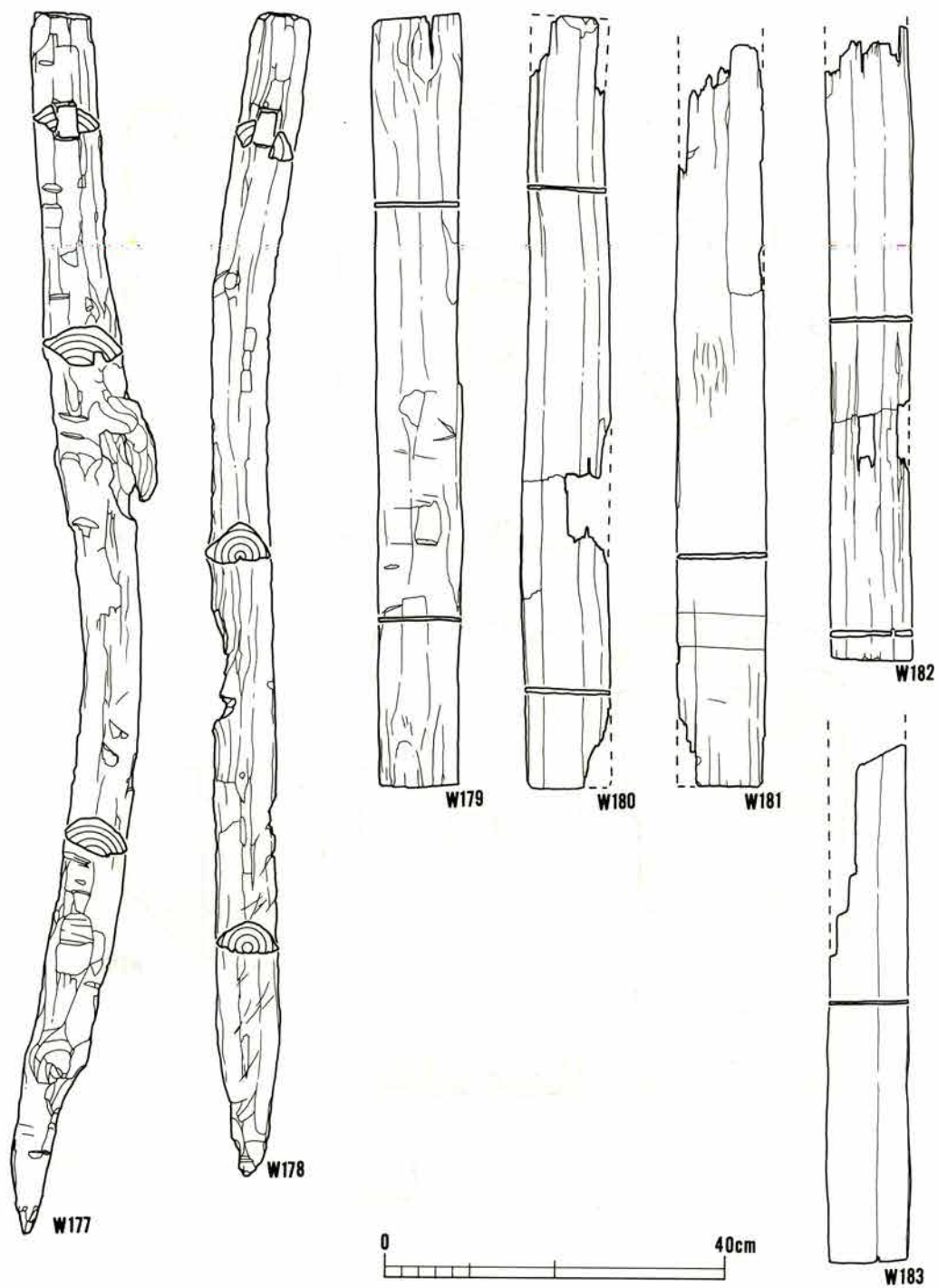


插图156 室町時代木製品(12) 北堀 (3)

11) 松明

松明または薪の燃え残りW180はスギ材である。

12) 不明木製品

全く用途を検討しえなかった不明木製品が多くある。

4. 金属製品 (挿図157～160)

金属製品は井戸2、井戸3と南堀から出土した48点の内、武器9点(23.6%)、生活具4点(10.5%)、調度具1点(2.6%)、建築具17点(44.7%)、農具3点(7.8%)と不明金属製品4点(10.5%)がある。鉄製品の他、銅・鉛製品がある。

1) 武器

武器は小柄1点(F16)、刀子2点(F42・43)、筭1点(F41)、鎌2点(F25・26)とやや新しい包含層出土の鉛の鉄砲玉3点(F46～48)がある。特に小柄は井戸2出土で魂鎮めの際に、使用されたものか非常に保存状況の良いものである。

2) 農具

農具の鎌は井戸2出土で魂鎮めの際に、使用し祭祀具となったF11とその口金F42と包含層出土の鎌F44がある。

3) 建築具

建築具としては17本の釘があり、先折れ・頭折れを含めて考えると1寸(3.1～3.3cm)3本、1寸5分(4.4～4.5cm)6本、2寸3分(7.0cm)1本、2寸6分(5.9～8.0cm)5本の平釘16本、頭巻1本、合釘1本(2寸)となる。井戸2から6本まとまって出土している他、柱穴から2寸釘がある。

4) 調度具

井戸3から調度具に付く蟬形赤銅の飾金具(F23)が1点出土しており、内面は漆が付着している。

5) 生活具

生活具として南堀から五徳(F24)と楔(F27)がある。五徳は輪状に幅1.6cmの細板を曲げ、3ヶ所で脚を挟み込む。挟み込んだ後、焼き延ばし閉じている。堀内で出土したが良い残りをしている。他に茶釜?(F40)や蓋のつまみ状鉄製品(F45)がある。

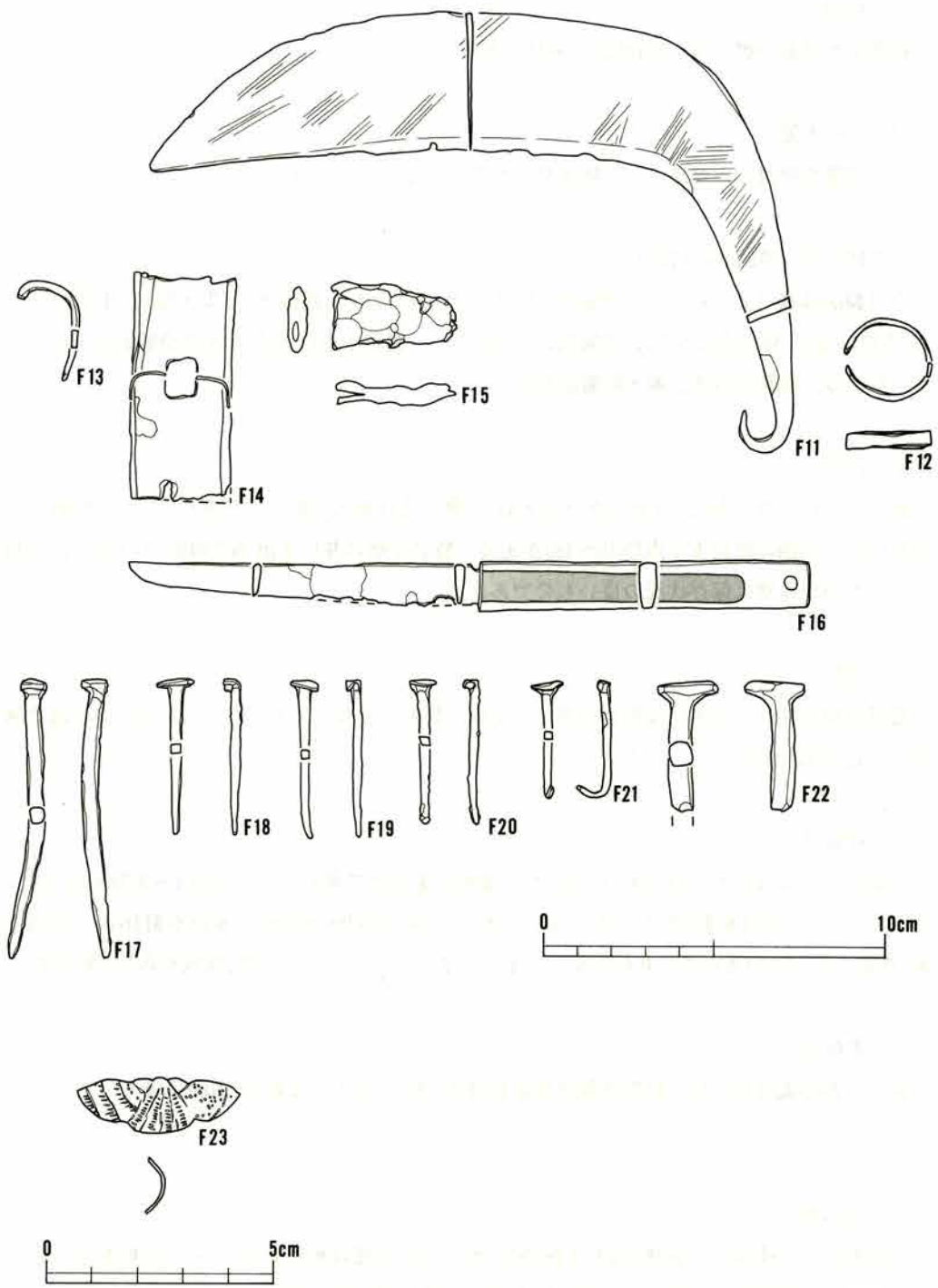


插图157 室町時代金属製品(1) 井戸 2

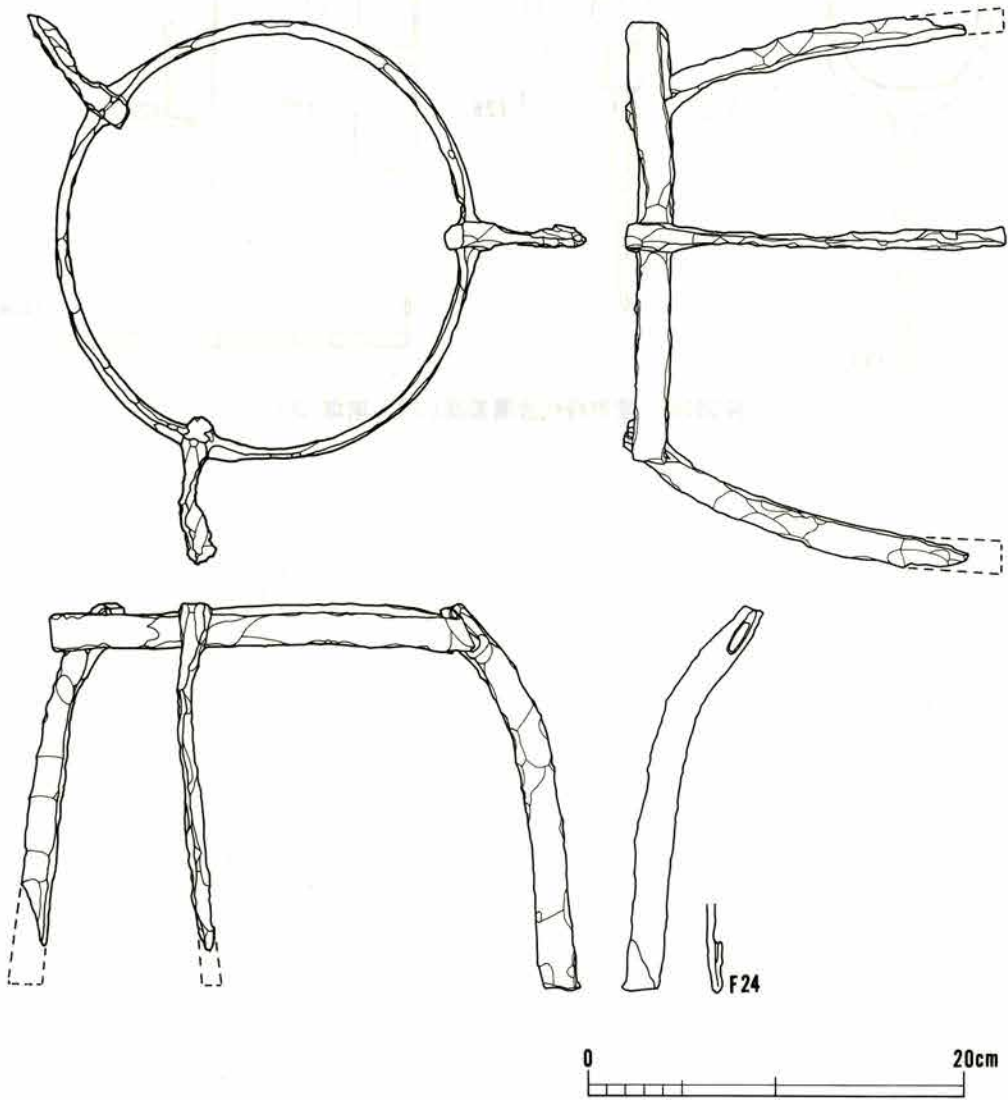


插图158 室町時代金属製品(2) 南堀(1)

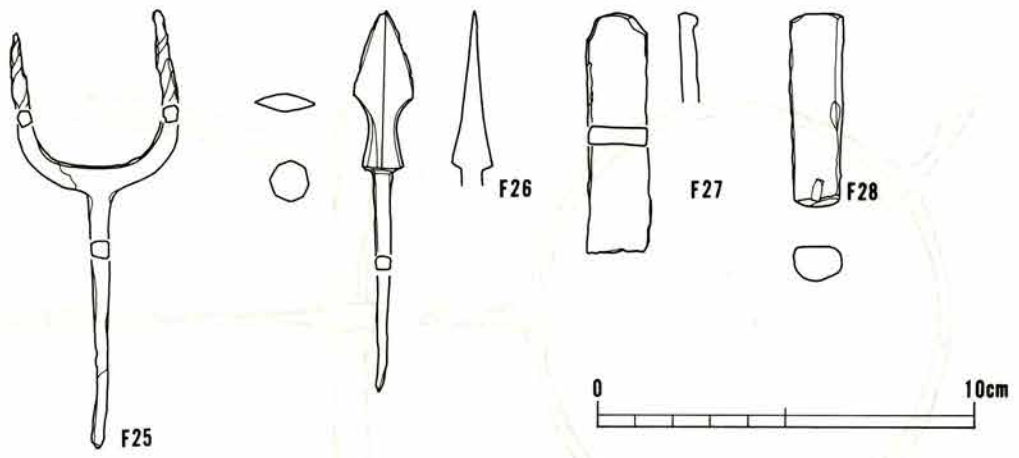


插图159 室町時代金属製品(3) 南堀(2)

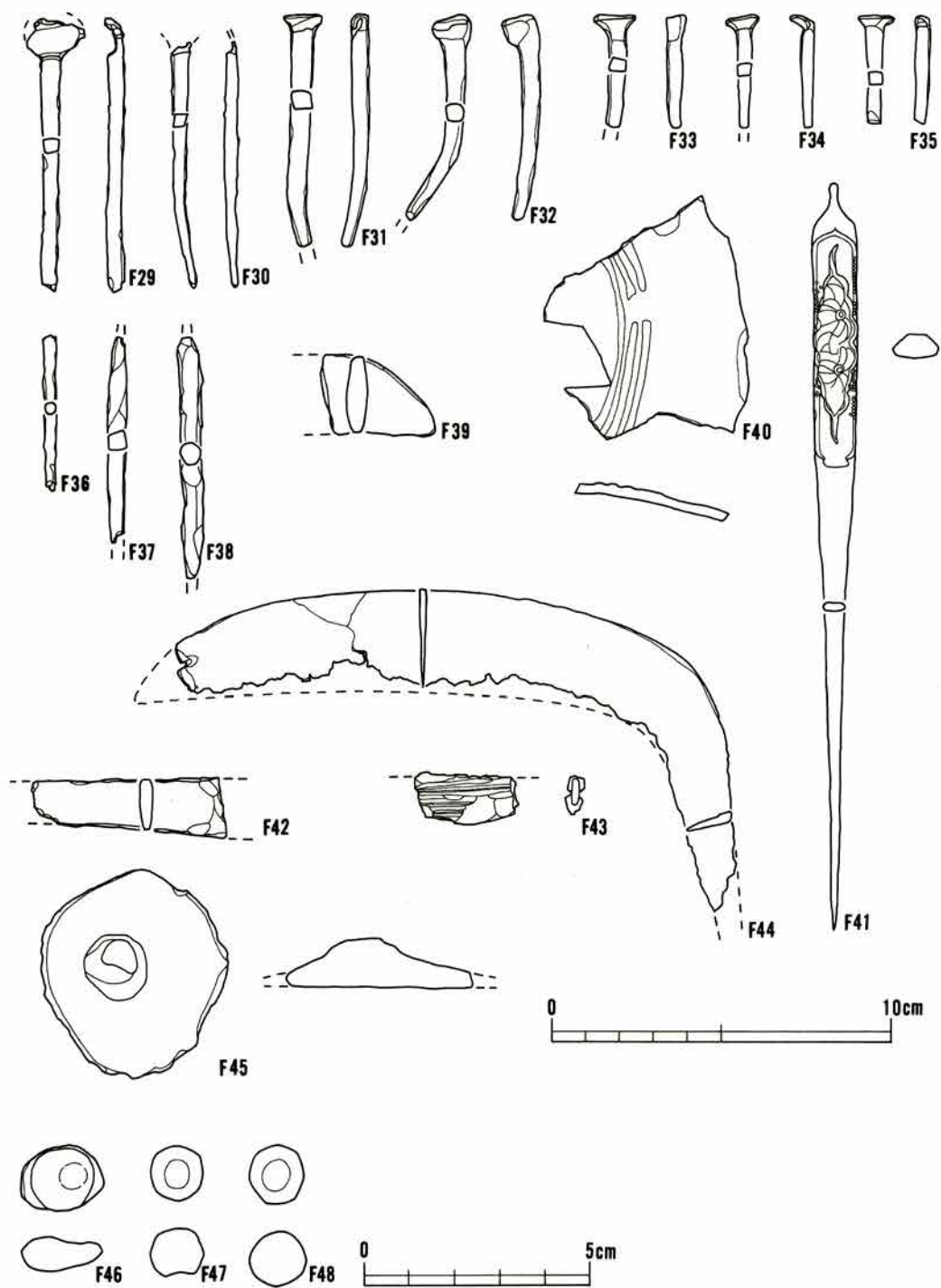


插图160 室町時代金属製品(4) 包含層

表7 室町時代の遺物観察表(1) 土器(1)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考	
			口径	器高	底径			
1	土師器	皿	7.4	1.5		12/12	小皿A 手整形、指押え、へそ、底ナデ	南堀2区
2	土師器	皿	6.9	1.7		5/12	小皿A	南堀0区
3	土師器	皿	7.3	1.6		6/12	小皿A 底中心一ナデ	南堀0区
4	土師器	皿	8.0	1.7		11/12	小皿A ナデ幅広い	南堀0区
5	土師器	皿	9.7	1.8	4.5	5/12	中皿C 底ナデ、外ナデ段有り	南堀0区
6	土師器	皿	9.3	1.9		10/12	中皿B 底ナデ1.5cm 灯明皿	南堀
7	土師器	皿	9.2	1.9		4/12	中皿B 底ナデ1.0cm	南堀1区
8	土師器	皿	9.4	1.4		5/12	中皿B 底ナデ1.0cm	南堀0区
9	土師器	皿	9.7	1.9		12/12	中皿B 底ナデ1.0cm、底中心一ナデ	南堀0区
10	土師器	皿	9.0	1.7		12/12	中皿B 底ナデ、へそ 灯明皿	南堀下層
11	土師器	皿	9.2	1.7		12/12	中皿B 底ナデ、底中心一ナデ	南堀2区
12	土師器	皿	10.1	1.8	4.5	8/12	中皿C 底深いナデ	南堀1区
13	土師器	皿	10.2	1.8	4.5	4/12	中皿C 底ナデ1.0cm、	南堀0区
14	土師器	皿	9.6	1.2		4/12	中皿B 手のひら整形、口縁波状	南堀0区
15	土師器	皿	13.6	2.3	7.5	11/12	大皿E 底深い1.0cm深いナデ	南堀1区
16	土師器	皿	12.4	2.2		3/12	大皿E	南堀1区
C 1	青花	皿	11.9	2.5	7.1	2/12	口禿、疊付釉カキオトシ 界線	南堀0区
C 2	青花	碗	11.0	<u>4.2</u>		10/12	界線、16C 後半	南堀0区
C 3	青花	碗	11.2	<u>4.6</u>		3/12	雲文、界線、雷文	南堀0区
C 4	青花	碗				3/12	蓮子碗、界線	南堀0区
C 5	青花	碗	12.4	4.3		3/12	雲文、界線、16C 後半(福建周辺)	南堀0区
C 6	染付	碗		<u>2.4</u>	4.0	<u>6/12</u>	国産18C 波佐見系、疊付釉カキオトシ	南堀1区
C 7	白磁	皿		<u>2.6</u>	6.8	<u>3/12</u>	疊付釉カキオトシ、漆繫ぎ	南堀0区
C 8	青磁	碗		<u>3.2</u>	4.0	<u>12/12</u>	「春夏秋冬」 高台まで釉、削り出し	南堀0区
17	瀬戸・美濃	皿		<u>1.0</u>	5.0	<u>3/12</u>	8弁菊花文スタンプ、全面施釉	南堀1区
18	瀬戸・美濃	皿	17.0	2.4		2/12		南堀2区
19	瀬戸・美濃	碗	12.0	<u>5.1</u>		4/12	丸碗、口縁平ら、下端 5mmケズリ	南堀4区
20	瀬戸・美濃	水滴	3.1	4.1	4.0	<u>10/12</u>	耳付水注、糸切り底、鉄釉、大窯I期	南堀0区
21	丹波	播鉢	25.4	<u>6.4</u>		2/12	一本引き	南堀下層
22	丹波	播鉢	26.2	<u>5.9</u>		2/12	一本引き(21)と同一個体?	南堀0区
23	丹波	播鉢	29.0	<u>7.3</u>		2/12	一本引き太い	南堀1区
24	丹波	播鉢				2/12	一本引き、軟質焼成弱い	南堀2区
25	丹波	播鉢				<u>2/12</u>	底 5~6本・6単位で割付け	南堀3区
26	丹波	捏鉢	25.1	<u>9.2</u>		2/12	紐造2cm	南堀0区
27	瓦器	風炉	30.6	<u>3.6</u>		3/12	細いヘラミガキ	南堀0区
28	備前	壺	32.4	<u>7.9</u>			IV期	南堀0区
29	丹波	甕	32.0	<u>17.0</u>		6/12	口縁段造り出し	南堀0区
C 9	青花	皿	10.2	3.1	3.4	6/12	芭蕉葉文、碁筍底	北堀5区

表7 室町時代の遺物観察表(2) 土器(2)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考	
			口径	器高	底径			
C10	青花	碗		2.0	5.2	5/12	蓮子碗、巻貝、畳付釉掛けしない	北堀5区
C11	白磁	碗	6.9	2.5	6.4	4/12	削り出し高台	北堀4区
C12	白磁	小杯	7.3	2.0	4.3	12/12	削り出し高台	北堀4区
30	青花	碗		2.0	5.2	5/12		北堀5区
31	白磁	碗	6.9	2.5	6.4	4/12		北堀5区
32	白磁	小杯	7.3	2.0	4.3	12/12		北堀5区
33	瀬戸・美濃	碗	9.3	2.2			天目碗口縁、鉄釉、二次焼成で釉荒れ	北堀
34	瀬戸・美濃	碗		1.2	4.0	2/12	天目碗底、鉄釉	北堀
35	瀬戸・美濃	卸皿		1.7	12.2		灰釉、へら卸目、糸切り底	北堀6区
36	瀬戸・美濃	皿	17.0	3.0		6/12	丸い体部	北堀5区
37	瀬戸・美濃	皿	17.1	3.0		3/12	6mm幅の削り	北堀5区
38	瀬戸・美濃	皿		1.5	8.6			北堀4区
39	土師器	播鉢		2.7	11.1		6本櫛卸目とへら綾杉文	北堀
40	備前	徳利					へら記号	北堀5区
41	丹波	鉢	19.5	4.4		2/12		北堀7区
42	備前	甕	56.4	23.3		2/12	「三入」	北堀6区
43	丹波	播鉢	31.6	5.0		2/12		北堀6区
44	丹波	播鉢	28.5	6.7				北堀6区
45	備前	鉢	31.6	3.9		1/12	V期	北堀7区
46	丹波	播鉢		7.1	16.9	2/12	底、一本引き6本単位	北堀4区
47	丹波	播鉢		6.7	13.2	4/12	底、一本引き6本単位	北堀6区
48	丹波	播鉢		3.1	13.5	4/12	底	北堀6区
49	丹波	播鉢		6.1	11.2		底、重ね焼き痕	北堀6区
50	丹波	播鉢					底、一本引き5本単位	北堀6区
51	備前	播鉢	22.9	4.9		2/12	6本櫛目、IV期	北堀5区
52	丹波	壺	30.4	11.0		2/12	口縁轆挽き上げ	北堀6区
53	丹波	壺		5.6	18.0		底	北堀6区
54	丹波	壺		5.1	16.2		底	北堀6区
55	丹波	壺		2.9	16.4		底	北堀6区
56	土師器	皿	9.1	1.7		12/12	小皿B、底ナデ、指整形	東堀3区
57	土師器	皿	9.1	1.6			小皿B、底ナデ、ヘソ	東堀3区
58	土師器	皿	12.6	1.9			大皿E、底ナデ、深いナデ	東堀4区
C13	瀬戸・美濃	碗				1/12	細蓮弁文碗、青磁碗写し	東堀4区
C14	青磁	碗		3.5	4.5		縞蓮弁文碗、片切彫り、下層混入	東堀2区
59	丹波	壺		8.7	18.4	2/12	底	東堀6区
60	丹波	甕		15.8	25.8	6/12	底	東堀1区
61	備前	甕		40.5	31.8	4/12	底、1.2cm幅ケズリ、V期	南堀1区
62	土師器	皿	7.8	1.5		7/12	小皿A、底ナデ	井戸2

表7 室町時代の遺物観察表(3) 土器(3)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
63	土師器	皿	8.6	2.2	4.0	3/12	小皿B、底ナデ 井戸2
64	土師器	皿					小皿、墨書 井戸2
65	瀬戸・美濃	皿		1.2	6.1		三枚カタバミ印花 井戸2
66	青磁	碗		3.0	4.5		「寿」、削り出し高台 井戸2
67	丹波	播鉢	26.6	9.2		2/12	一本引き 井戸2
68	丹波	播鉢		8.7	2.2		底、一本引き6本単位 井戸2
69	備前	徳利		8.0	15.7		V期 井戸3
70	丹波	播鉢	32.6	7.5		2/12	片口、手印 小型堀
71	丹波	播鉢	32.5	6.6		2/12	口縁 小型堀
72	丹波	播鉢	27.0	9.1		1/12	口縁 小型堀
73	丹波	鉢	33.5	12.4		2/12	口縁 小型堀
C15	青花	碗		1.3	4.5	1/12	天正年間、呉須明るい 小型堀
C16	青花	碗				1/12	16C 後半 小型堀
C17	白磁	小杯	10.9	2.5		1/12	8mmの細いケズリ 小型堀
C18	白磁	碗		.6	6.7		削り高台 小型堀
74	備前	徳利		1.8	8.2		底、V期 小型堀
75	丹波	壺	36.0	7.9			口縁部ナデによる段造り出しの退化 小型堀
76	丹波	甕		6.6	24.9		1.5mm幅のケズリ 小型堀
77	土師器	皿	7.9	1.5		12/12	小皿A、底ナデ、小ヘソ 池2
78	土師器	皿	7.6	1.7		11/12	小皿A、底ナデ 池2
79	土師器	皿	7.2	1.5		9/12	小皿A、底ナデ、小ヘソ 池2
80	土師器	皿	12.1	2.3	6.0	5/12	大皿E、底ナデ、平滑ナデ 池2
81	瀬戸・美濃	碗	13.0	5.9		3/12	天目碗、大窯II期、鬼板 池2
82	瀬戸・美濃	碗				2/12	天目碗、大窯I期、8mmケズリ 池2
83	瀬戸・美濃	碗				2/12	天目碗 池2
84	備前	播鉢		4.8	10.3		6本櫛目 池2
85	丹波	播鉢		5.5	15.1		
86	須恵器	甕					13~14C、砂粒 池2
87	瀬戸・美濃	卸皿	22.0	4.9		2/12	
88	丹波	甕	42.0			2/12	14C 稲荷山窯産?、N字状口縁 土壌7
89	丹波	播鉢	27.0	5.7		3/12	口縁 溝2
90	丹波	甕	41.6	7.5		2/12	口縁 溝2
91	丹波	播鉢	34.0	15.0	14.0	11/12	手印×小さい 溝1
92	土師器	皿	12.4	2.1	6.5	6/12	大皿D 土壌
93	丹波	播鉢		6.6	14.4		底 土壌
94	丹波	壺		4.8	16.2		底 土壌
95	土師器	皿	8.7	1.8		2/12	小皿B
96	土師器	皿	8.6	1.7		2/12	小皿B

表7 室町時代の遺物観察表(4) 土器(4)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考	
			口径	器高	底径			
97	土師器	皿	8.6	1.0		2/12	小皿、ヘソ	
98	土師器	皿	13.0	2.1		2/12	大皿D	
101	丹波	播鉢	32.6	<u>7.4</u>			縁	
102	土師器	皿	7.8	1.7		12/12	小皿A	包含層
103	土師器	皿	7.4	1.4		5/12	小皿A、底ナデ	包含層
C19	青花	皿		<u>1.1</u>	7.0		畳付釉ケズル	包含層
C20	白磁	皿	10.1	2.7	3.5	2/12	12C	包含層
C21	白磁	碗	16.4	<u>4.2</u>		5/12		包含層
C22	白磁	碗		<u>2.9</u>	6.5			包含層
C23	青磁	碗					刻弁文碗	包含層
C24	青磁	碗		<u>1.7</u>	5.8		刻弁文碗、面子転用	包含層
C25	瀬戸・美濃	碗					蓮弁文碗、青磁写し、C13と同一固体?	包含層
C26	青磁	碗	12.4	<u>3.9</u>			蓮弁文碗	包含層
C27	青磁	碗	12.3	<u>2.8</u>			蓮弁文碗	包含層
104	瀬戸・美濃	碗				2/12	天目碗	包含層
105	須恵器	捏鉢					鎌倉時代、磨滅、魚住産	包含層
106	丹波	小壺		<u>4.2</u>	10.1		幅1cmのケズリ	包含層
107	丹波	播鉢					口縁	包含層
108	丹波	播鉢	27.4	<u>3.8</u>			口縁	包含層
109	丹波	播鉢	36.2	<u>9.8</u>		2/12	口縁	包含層
110	丹波	播鉢	34.1	12.4	14.2	2/12	口縁	包含層
111	丹波	播鉢	20.4	<u>3.5</u>			口縁	包含層
112	丹波	播鉢		<u>7.2</u>	16.0		底	包含層
113	丹波	播鉢		<u>7.4</u>	16.1		底	包含層
114	丹波	捏鉢		<u>4.8</u>	14.0		底	包含層
115	丹波	壺		<u>7.7</u>	20.2		底	包含層
116	備前	播鉢	24.8	<u>6.8</u>		3/12	IV期、6本櫛目	包含層
117	備前	播鉢		<u>6.9</u>	13.3		116と同一個体?	包含層

表7 室町時代の遺物観察表(1) 石器(1)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			石 材	特 徴・備 考
			長さ	幅	厚さ		
S 6	生活具	砥石	10.2	4.4	3.3	砂岩	5面磨 包含層
S 7	生活具	砥石	16.9	9.2	4.3	砂岩	2面磨 南堀0区
S 8	生活具	砥石	8.4	6.2		砂岩	1面磨
S 9	生活具	砥石	8.4	4.2	3.7	砂岩	1面磨 井戸2
S10	生活具	砥石	8.4	6.0	4.1	大理石	1面磨 井戸2
S11	生活具	砥石	4.0	3.1	0.4	砂岩	1面磨 包含層
S12	生活具	磨石	11.5	9.8	5.4	花崗岩	池2
S13	生活具	磨石	7.3	4.0	2.1	砂岩	井戸2
S14	生活具	砥石	14.4	7.0	5.0	砂岩	1面磨
S15	遊戯具	碁石	2.1	1.5	0.4	頁岩	黒色珪質頁岩(那智黒) 包含層
S16	遊戯具	碁石	2.2	2.0	0.5	頁岩	黒色珪質頁岩(那智黒) 包含層
S17	遊戯具	碁石	1.4	1.2	0.6	頁岩	黒色珪質頁岩(那智黒) 包含層
S18	遊戯具	碁石	1.3	1.7	0.6	頁岩	黒色珪質頁岩(那智黒) 包含層
S19	遊戯具	碁石	1.8	1.5	0.5	?	包含層

表7 室町時代の遺物観察表(6) 木製品(1)・竹製品

遺物 番号	種 別	器 種	法量 (cm)			樹 種	特 徴・備 考
			口径 長さ	器高 幅	厚さ		
W 97	容器	漆碗	16.0	9.0	0.5	クリ	高台が高い 井戸2
W 98	容器	漆碗	14.0	6.5	0.3	トチノキ	黒漆下地、朱漆文様 井戸2
W 99	食事具	箸	13.6	0.6	0.5	スギ	井戸2
W100	容器	桶	21.9	8.1	1.1	モミ	井戸2
W101	農具	木錘	16.5	4.4	4.0	ナラ類	井戸2
W102	容器	栓	12.0	1.8	1.9	ヒノキ	井戸2
W103	容器	枡	16.9	16.8	0.9	スギ	井戸2
W104	容器	竹筒	26.8	R4.6	0.3	マダケ属	底に小穿孔 井戸2
W105	容器	竹筒	14.2	R6.0	0.6	マダケ属	体部に丸孔、節無し 井戸2
W106	加工材		14.7	2.5	2.8	サカキ	井戸2
W107		松明	11.2	2.4	0.9	スギ	井戸2
W108	祭祀具		2.7	1.2	1.1	ヒノキ	井戸2
W109	祭祀具		2.0	1.3	0.5	ヒョウタン	有孔 井戸2
W110	祭祀具		2.0	1.3	1.0	ツバキ	有孔 井戸2
W111	容器	曲物	20.3	15.9	0.3	ヒノキ	井戸3
W112	容器	曲物	10.6	9.9	1.0	ヒノキ	底板 井戸3
W113	祭祀具		7.7	3.2	3.0		井戸3

表7 室町時代の遺物観察表(7) 木製品(2)

遺物 番号	種 別	器 種	法量 (cm)			樹 種	特 徴・備 考
			口径 長さ	器高 幅	厚さ		
W114	不明		8.8	2.9	2.6		井戸3
W115	不明	杭	17.4	1.5	1.5	スギ	井戸3
W116	服飾	下駄	21.3	9.9	2.0	カキノキ	井戸3
W117	不明		11.0	R1.9	1.9		井戸3
W118	不明		13.1	1.4	1.0		井戸3
W119	容器	桶	90.8	13.7	2.0		第1段井戸側 井戸3
W120	容器	桶	80.4	13.3	2.1		第2段井戸側 井戸3
W121	容器	桶	82.1	14.6	2.1		第3段井戸側 井戸3
W122	木簡	札	26.5	7.9	0.4	モミ	南堀
W123	遊戯具	羽子板	31.1	10.5	0.8	モミ	南堀
W124	容器	曲物	10.5	10.6	0.9		底板 南堀
W125	容器	曲物	R6.0	2.1	0.3		南堀
W126	祭祀具	有孔板	10.1	3.9	0.2	スギ	南堀
W127	祭祀具	斎串	10.8	1.4	0.3		南堀
W128	食事具	箸	23.9	0.5	0.4	ツガ	南堀
W129	祭祀具		5.1	3.1	3.0		南堀
W130	祭祀具		2.4	4.4	1.5		南堀
W131	服飾具	下駄	13.1	6.3	1.0	クリ	南堀
W132	服飾具	下駄	11.7	5.8	0.9	ミズキ	南堀
W133	服飾具	下駄	12.3	8.0	1.1		南堀
W134	加工材	棒	18.7	3.4	2.5		南堀
W135	加工材	蓋板?	15.3	20.3	1.3	スギ	南堀
W136	不明		33.2	9.6	3.5		南堀
W137	加工材		20.4	7.3	1.6	スギ	南堀
W138	加工材		18.5	6.6	3.5	ヒノキ	南堀
W139	加工材		16.2	6.7	3.1		南堀
W140	農具	大足	70.4	81.5	1.4	カヤ	南堀
W141	武器	弓	37.5	2.0	2.4	カヤ	南堀
W142	建築具	柱材	71.2	12.7	14.6	二葉マツ	南堀
W143	建築具	柱材	51.0	11.9	10.6	二葉マツ	南堀
W144	建築具	板材	68.3	9.6	0.6	モミ	釘穴 南堀
W145	建築具	板材	78.4	8.6	0.5		南堀
W146	建築具	板材	83.4	9.3	0.4	モミ	釘穴 南堀
W147	建築具	板材	38.7	9.4	0.3		南堀
W148	不明		21.4	7.0	1.0		南堀
W149	不明		24.1	5.5	1.8		南堀
W150	不明		12.6	4.5	2.6		南堀

表7 室町時代の遺物観察表(8) 木製品(3)

遺物 番号	種 別	器 種	法量 (cm)			樹 種	特 徴・備 考
			口径 長さ	器高 幅	厚さ		
W151	不明		16.6	14.6	5.0		南堀
W152	不明		18.7	8.8	1.5		南堀
W153	不明		10.8	0.8	0.7		南堀
W154	不明		14.2	1.1	1.0		南堀
W155	不明		18.8	2.9	2.6		南堀
W156	建築具	杭	17.6	3.1	2.8	モミ	南堀
W157	建築具	杭	18.7	4.5	3.8	モミ	南堀
W158	建築具	杭	39.0	1.9	1.8		南堀
W159	建築具	杭	38.8	R3.5	3.5		南堀
W160	建築具	杭	60.5	5.0	3.9		南堀
W161	建築具	橋脚材	128.2	18.0	17.0	二葉マツ	南堀
W162	建築具	橋脚材	126.1	21.6	18.4	二葉マツ	南堀
W163	建築具	橋脚材	112.5	21.9	20.5	二葉マツ	南堀
W164	建築具	橋脚材	121.0	15.9	14.9	二葉マツ	南堀
W165	容器	漆碗		4.9	0.3	クリ	北堀
W166	容器	漆碗		3.3	0.6	クリ	北堀
W167	容器	碗	16.0	5.3	0.6	クリ	北堀
W168	容器	碗	3.6	7.1	0.6		北堀
W169	服飾具	下駄	12.3	9.0	1.4	ヌルデ	北堀
W170	祭祀具		9.1	3.4	0.3	モミ	有孔 北堀
W171	不明		31.5	4.8	1.6		北堀
W172	容器	桶	26.0	10.2	1.4		北堀
W173	加工材	梓	46.7	2.8	2.8	ヒノキ	北堀
W174	不明	杭	49.8	R5.3	5.1		北堀
W175	建築具	掛矢	26.1	13.2	13.3	ヒイラギ	北堀
W176	建築具	掛矢	28.0	13.5	13.3	ヒイラギ	楔はツバキ 北堀
W177	建築具	柵杭	140.2	7.3	4.5	クリ	北堀
W178	建築具	柵杭	133.4	7.5	4.5	クリ	北堀
W179	建築具	板材	88.8	9.8	5.0	ツガ	北堀
W180	建築具	板材	89.0	8.9	0.5	スギ	北堀
W181	建築具	板材	85.0	10.1	0.6	モミ	北堀
W182	建築具	板材	72.7	9.4	0.7	モミ	釘孔 北堀
W183	建築具	板材	59.7	9.2	0.3		北堀

表7 室町時代の遺物観察表(9) 金属製品

遺物 番号	種 別	器 種	法量 (cm)			樹 種	特 徴・備 考
			長さ	幅	厚さ		
F11	農具	鎌	18.9	3.9	0.1	鉄製品	井戸2
F12	農具	鎌口金	3.5	0.4	0.1	鉄製品	井戸2
F13	建築具	釘	2.8	0.5	0.2	鉄製品	井戸2
F14		座金	6.5	3.0	0.1	鉄製品	井戸2
F15	不明		3.6	2.0	0.5		井戸2
F16	武器	小柄	19.8	1.2	0.2	鉄・銅製品	井戸2
F17	建築具	釘	8.0	0.5	0.5	鉄製品	井戸2
F18	建築具	釘	4.4	0.3	0.2	鉄製品	井戸2
F19	建築具	釘	4.5	0.2	0.2	鉄製品	井戸2
F20	建築具	釘	4.1	0.2	0.2	鉄製品	先折れ 井戸2
F21	建築具	釘	3.4	0.2	0.2	鉄製品	先折れ 井戸2
F22	建築具	釘	3.7	0.7	0.7	鉄製品	折れ 井戸2
F23	調度具	飾金具	3.6	1.2	0.1	銅製品	井戸3
F24	生活具	五徳	20.1	23.0	0.5	鉄製品	南堀
F25	武器	鍬	11.5	4.4	0.4	鉄製品	南堀
F26	武器	鍬	10.0	1.5	0.4	鉄製品	南堀
F27	生活具	楔	6.3	1.5	0.4	鉄製品	南堀
F28	不明		5.0	1.3	1.0	鉄製品	南堀
F29	建築具	釘	7.9	0.4	0.4	鉄製品	先折れ
F30	建築具	釘	7.1	0.3	0.3	鉄製品	頭折れ
F31	建築具	釘	6.7	0.6	0.5	鉄製品	先折れ、頭巻
F32	建築具	釘	5.9	0.5	0.5	鉄製品	先折れ
F33	建築具	釘	3.3	0.5	0.4	鉄製品	折れ 包含層
F34	建築具	釘	3.3	0.4	0.3	鉄製品	先折れ 包含層
F35	建築具	釘	3.1	0.4	0.3	鉄製品	折れ 包含層
F36	建築具	釘	4.5	0.3	0.3	鉄製品	包含層
F37	建築具	釘	6.0	0.5	0.5	鉄製品	合釘折れ 包含層
F38	建築具	釘	7.0	0.6	0.6	鉄製品	包含層
F39	不明		3.4	2.3	0.6	鉄製品	包含層
F40	生活具	茶釜?	6.9	5.9	0.3	鉄製品	溝
F41	武器	筭	21.6	1.3	0.7	銅製品	包含層
F42	武器	刀子	5.8	1.8	0.4	鉄製品	包含層
F43	武器	刀子	3.0	1.5	0.3	鉄製品	包含層
F44	農具	鎌	16.6	2.9	0.2	鉄製品	東堀
F45	生活具	蓋?	6.5	5.5	1.5	鉄製品	包含層
F46	武器	鉄砲玉	1.8	1.4	0.8	鉛製品	包含層
F47	武器	鉄砲玉	1.1	1.2	1.0	鉛製品	包含層
F48	武器	鉄砲玉	1.2	1.3	1.2	鉛製品	包含層

第5節 江戸時代の遺物

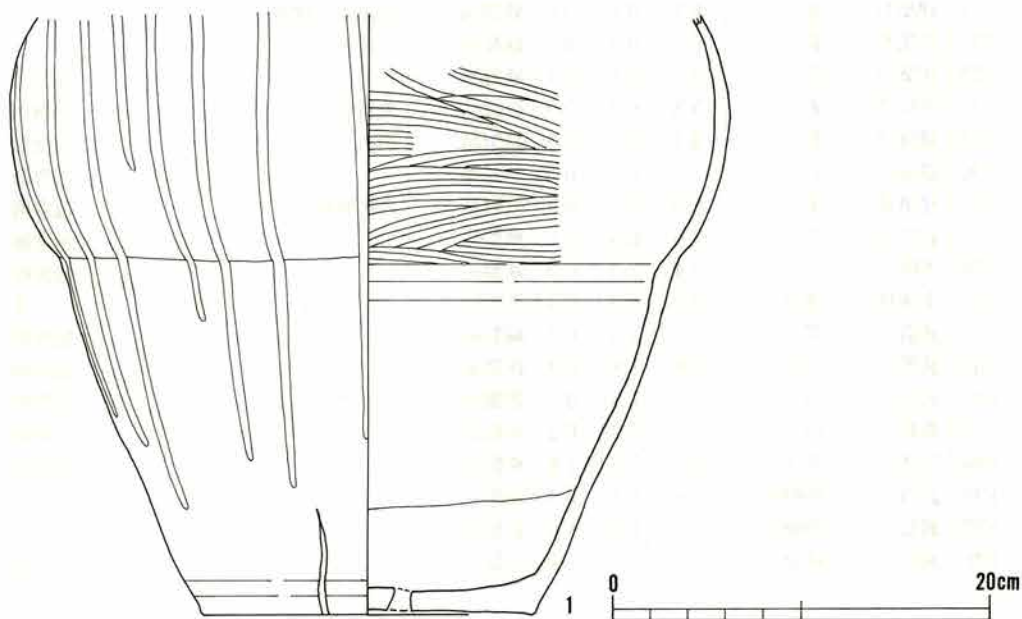
1. 出土状況

江戸時代の遺物は主として表土や黄褐色砂礫土層から出土している。この時期は畑・粘土採掘穴・井戸・屋敷地などが調査区内にあって、畑が耕作され徐々に土塁を浸食していったと考えられる。遺物は調査区南側の館内に集中する傾向があるが、概ね全域から出土した。

2. 土器

遺構の遺物

遺構の遺物には便所の小便溜に据えられていた丹波焼の便甕がある。肩部の直下から残存するもので、胴部の最大径は38.0cm、底部は17.4cmである。外面は褐色の地に黒色鉄釉をかけるもので、残存部には外面に鉄釉の垂れ流れた筋が残る。胴部の上方1/3のところで胴が湾曲して外方に大きく脹らむ、底部は焼成時の焼け歪みで割れが生じている。胴部の脹らみは輪積みの境で粘土が撓んだと考えられる。底部の割れには漆喰が充填され漏水を防いでいる。



挿図161 江戸時代土器(1) 便所

包含層の遺物

皿(2~4)いずれも陶器質のもので口径4.9~12.8cmである。2は肉厚になるもので、手づくねで仕上げている。内外面に薄い釉がかかる。3は口縁部のみの破片で、器壁は薄く手づくねで仕上げている。内面には黄褐色の釉がかかるもので、京焼風の色調を持つ。4はロクロを使用するもので、内面と外面の口縁端に仕上げナデを施し器壁を平滑にしている。さらに、内外面には鉄釉を漬け掛けする。底部は切り離した後に、丁寧に調整している。

壺蓋(5)細頸壺などの蓋と思われる。灰白色を呈するため焼成時には、還元炎を受けたと思われる。天井には宝珠形のつまみを持つ。

徳利(6・11)6は胴部上半の破片である。内面にはロクロの細かい水挽き痕跡が残る。11は徳利の底部と考えられる。やはりロクロの水挽き痕跡が残る。

小壺(10)口径7.7cmの小型の壺片である。塩・醤油などを入れる容器と思われる。

仏花瓶(7~9)神仏にお供えする花をさす容器である。7は肩まで残るが、8・9は何れも底部の破片である。底部の直径5.8~9.3cmを測る。何れも高さの割に底部が大きく、胴の下半で大きく屈曲する。外面に薄い釉がかかる。

匣鉢(12~15)陶器質の小型鉢である。いずれも大きな底部から、体部が直線的に立ち上がるもので、肉厚なつくりである。14・15は明らかに窯道具の匣鉢である。窯場から持ち込んで日用品として使用したのであろうか。

鉢(16・18・22)16は外面に褐色の釉がかかるもので、飛びカンナ模様を施している。全体に薄く、胴は直線的に立ち上がる。口縁部には小さく華奢な蓋受けが付いている。18は肉圧なもので斜め上方に開く体部を持ち、口縁端部には面を持つ。22は植物などを栽培する植木鉢である。大型で肉厚になるもので口縁部は外方に大きく折れる。口縁部の上面は面をなし、ここに波状文を施している。波状文は針金などの先端の鋭利なもので施文されている。

壺(19~21)何れも口縁部のみの破片である。19・20は口縁部の直下に鏝状のものを貼り付けている。細片のためどのような器形になるかは不明である。21も口縁部片である。花入れなどの器形になるとと思われる。

播鉢(23~34)何れも丹波焼の播鉢である。26・27は口径が30.6~31.3cmで、口縁の断面が三角形ないしやや上方に延びるものである。卸目は細片のため明瞭ではないが、26ではおそらく7本単位と考えられる。器壁は薄く0.8cm程度である。内面に薄く自然釉がかかる。

24・25は口縁部の直径が28.3~29.5cmで、口縁部が一旦くの字に屈曲した後、大きく上方に延びて先端で膨らむか、面を持つものである。卸目は25で7本、26で7本以上の単位である。

25には注ぎ口の左端の痕跡が認められた。

23・28は口縁部の直径が32.4~38.0cmで、他のものに比べ肉厚である。口縁部がくの字に屈

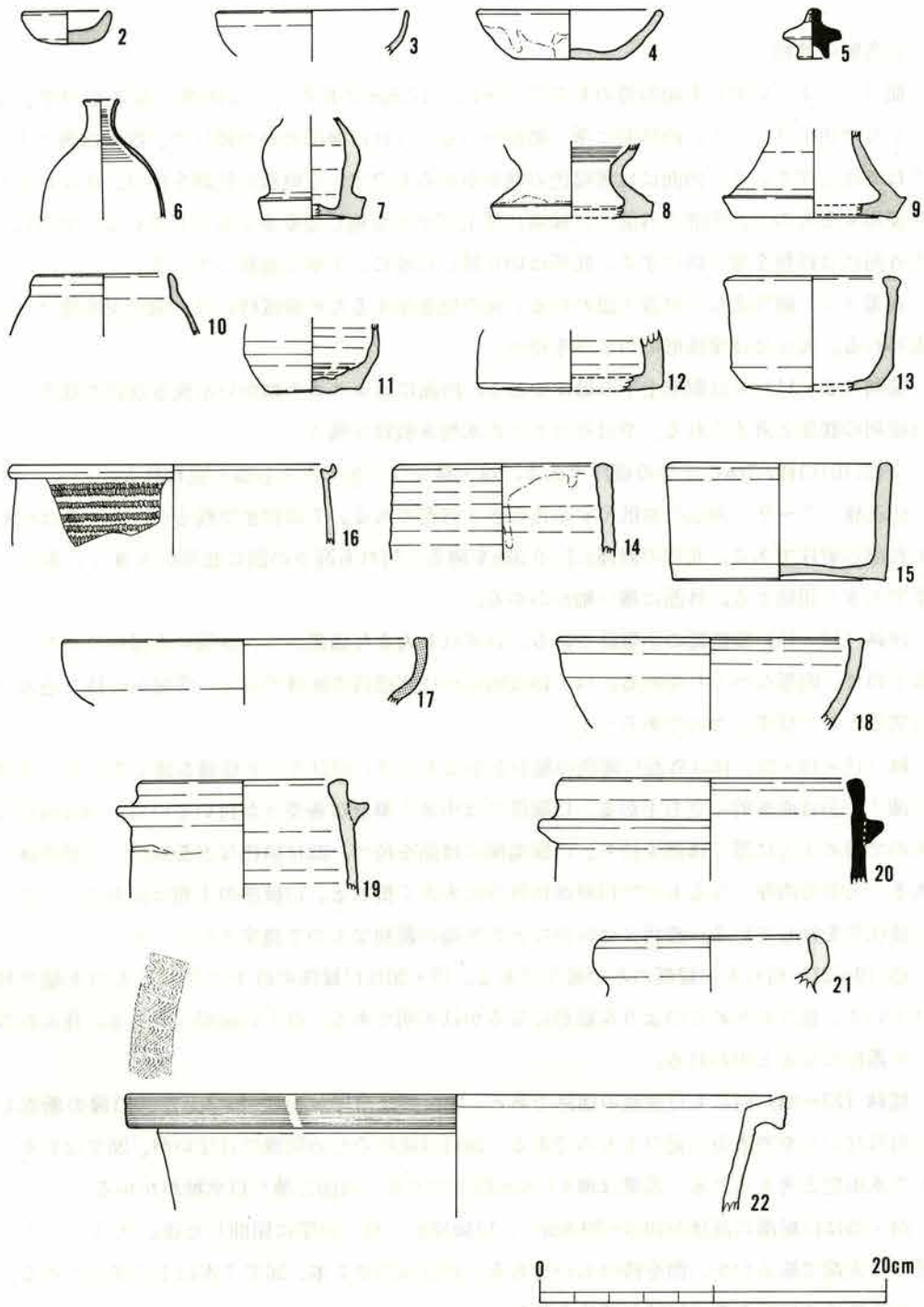


插图162 江戸時代土器 (2) 包含層 (1)

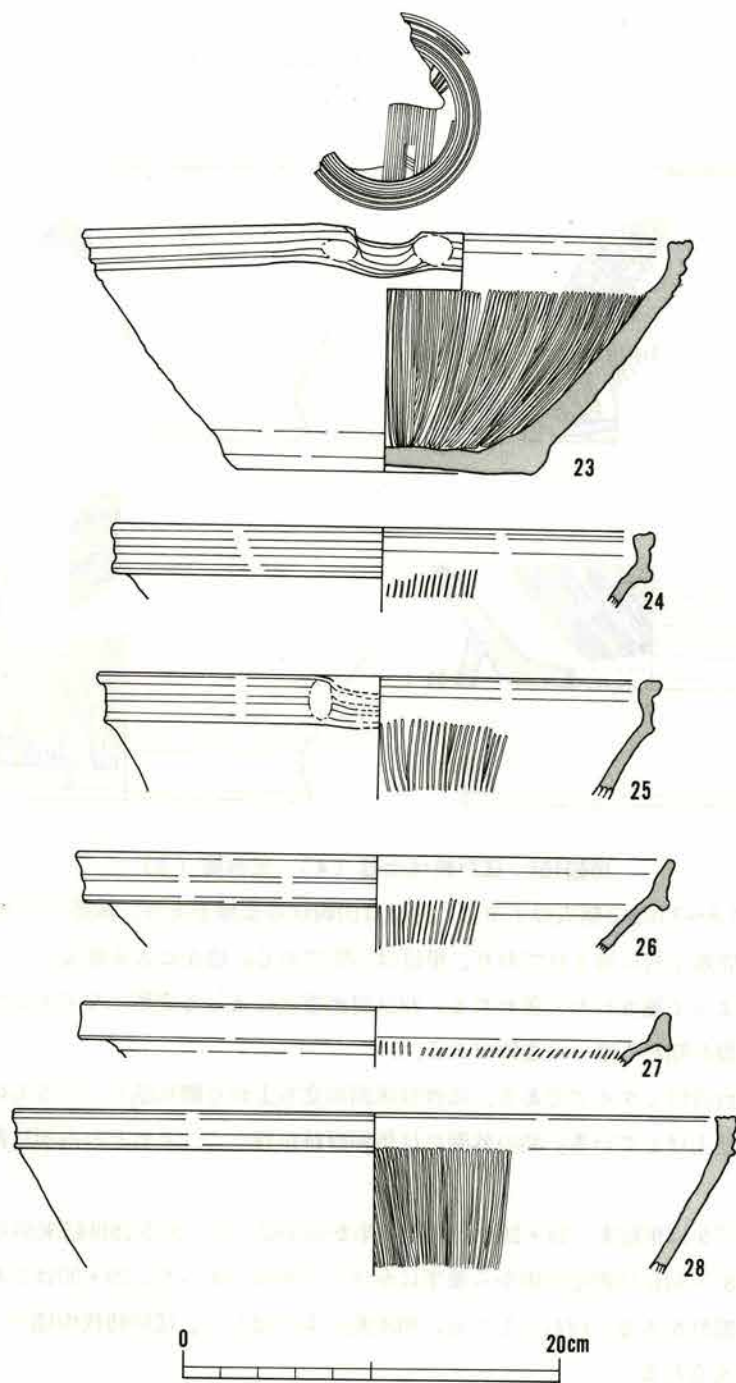
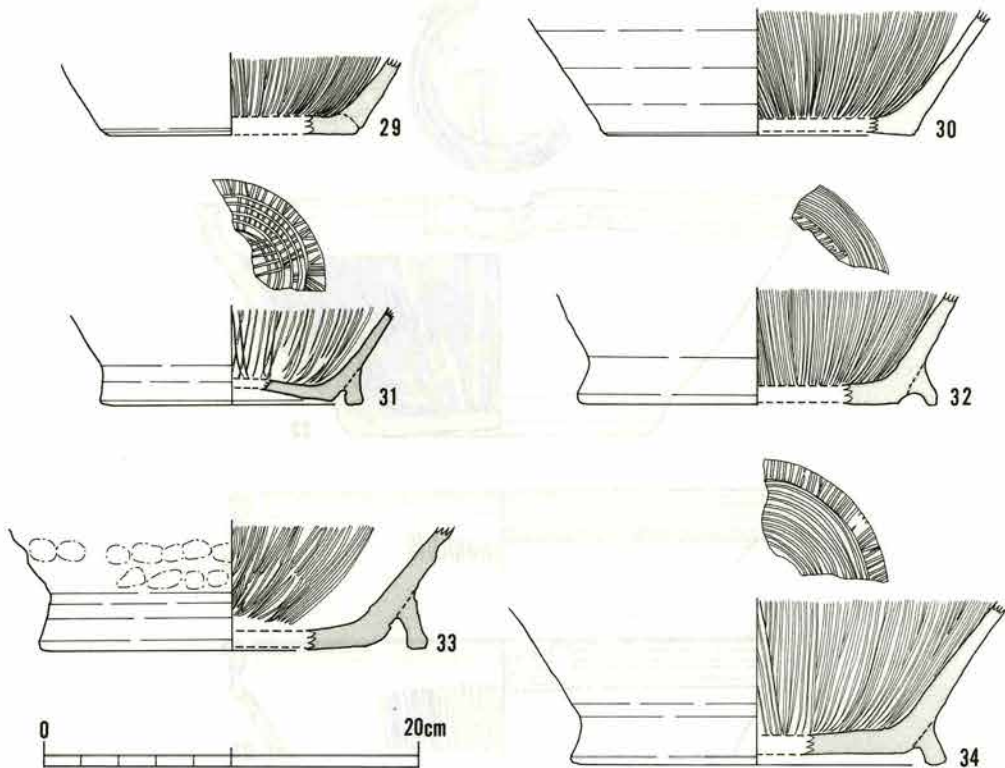


插图163 江戸時代土器 (3) 包含層 (2)



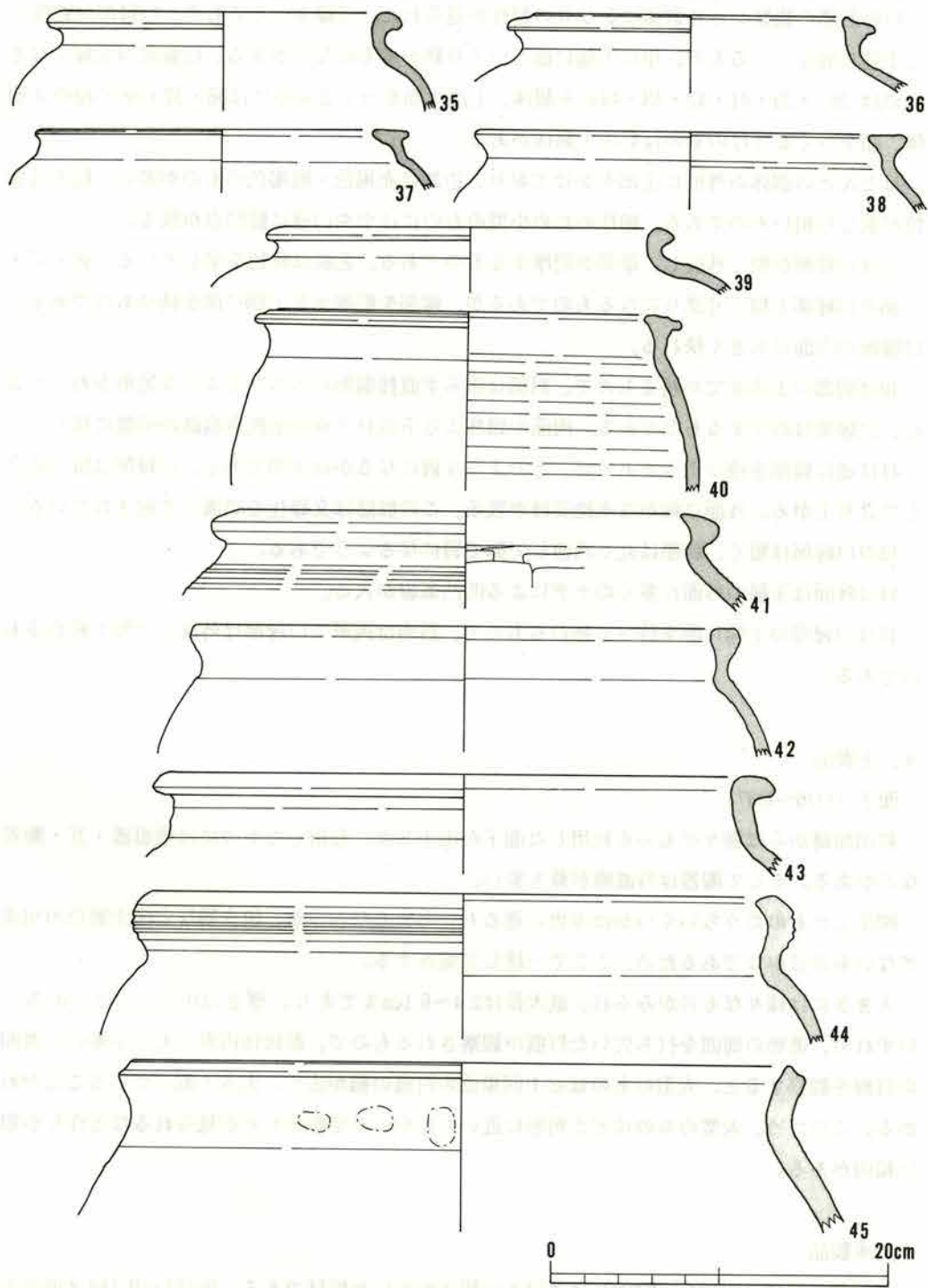
挿図164 江戸時代土器（4）包含層（3）

曲せず内面は1.8~3.0cmの幅広のナデで、外面は凹線状の条線をもち、体部との境は明瞭である。卸目は隙間無く密に施されており、単位は不明である。篋先による施文ではなく針金などの細い道具によって施されたと思われる。23は実測復元によって完形になるもので底部から口縁部までの全貌が知れる唯一の遺物である。

31~34は高台の付くタイプである。高台は体部の立ち上がり際に貼りつけるもので、体部同様外面をナデ仕上げしている。33の外面には指頭痕跡が目立つ。それぞれ内面に薄く自然釉がかかる。

時期は26・27が17世紀末、24・25が18世紀前半から中頃、31・33が18世紀末から19世紀前半、底部の破片は31~34が18世紀の中から後半にかけてのものであった。29・30はこれよりさらに新しくなる可能性がある。何れにしても、明治期のもではなく、江戸時代中頃から後半にかけての遺物と考えられる。

甕（35~45）何れも丹波焼の甕である。口径は19.0~38.0cmとかなりの幅がある。図化できたものは僅かで、大半が口縁部の破片であり、全体の形を復元できるものはなかった。掲載したものは11個体である。



挿図165 江戸時代土器 (5) 包含層 (4)

口縁形態の観察から各個体にかなりの個性が見られた。玉縁をつくるもの、口縁部が肥厚して上端に面をつくるもの、単に上端に面をつくり終わるものなどがある。口縁部が玉縁になるものは 35・39・41・42・43・44 の 6 個体、上端に面をつくるものには 36・37・38・40 の 4 個体、面をつくるだけのものは 45 の 1 個体がある。

ほとんどの個体が外面に土部を^{とべ}かけており、色調は赤褐色・暗褐色のものが多い。胎土は砂粒が混じり粗いものである。細片のため小型のものにはやや口径に疑問点が残る。

35は口縁部が短く外反し、端部が肥厚するものである。色調は灰色を呈している。36・37・38の口縁部も短く寸詰りになるものであるが、端部を肥厚させ上端に面を持つものである。口縁部の内面は大きく抉れる。

40は胴部の上半までが残るもので、肩部は張らず直接胴部につながるような器形を有しており、口縁部は直立するものである。内面の頸部より下はロクロの水挽き痕跡が明瞭に残る。

41は逆に肩部を持つようであるが、どのような肩になるかは不明である。口縁部は短く直立して立ち上がる。外面に細かな水挽痕跡が残る。この痕跡は文様化を意識して施されている。

42の口縁部は短く、肩部は丸く湾曲して撫で肩になるようである。

44は外面は玉縁の外面に多くのナデによる凹凸条線が入る。

45は口縁部の上端に面を持って終わるもので、器肉は肉厚で口縁部は外反して短く終わるものである。

3. 土製品

面子 (D26～D37)

初田館跡からは種々のものを転用した面子が出土した。転用したものには須恵器・瓦・陶器などがある。そして陶器は丹波焼が最も多い。

図示したもののうちいくつかは中世に遡るものもあるだろうが、包含層など出土層位の明確でないものばかりであるため、ここで一括して報告する。

大きさには様々なものがみられ、最大長は2.4～6.1cmまであり、厚さは0.5～1.0cmである。いずれも、遺物の周囲を打ち欠いた打痕が観察されるもので、形状は円形のものが多い。周囲の打痕を観察すると、大型のものほど1回単位の打痕の幅が広く、大きく割っていることがわかる。このため、大型のものほど五角形に近いものや、不定形のものが見られるなど作りが粗い傾向がある。

4. 木製品

井戸側の板材 (W184～W190) は井戸4に組まれていた板材である。W184～W188は周囲を覆った側板で、W189～W190は横棧である。側板は、W184で長さ97.6cm、幅17.3cm、厚さ1.6cm、

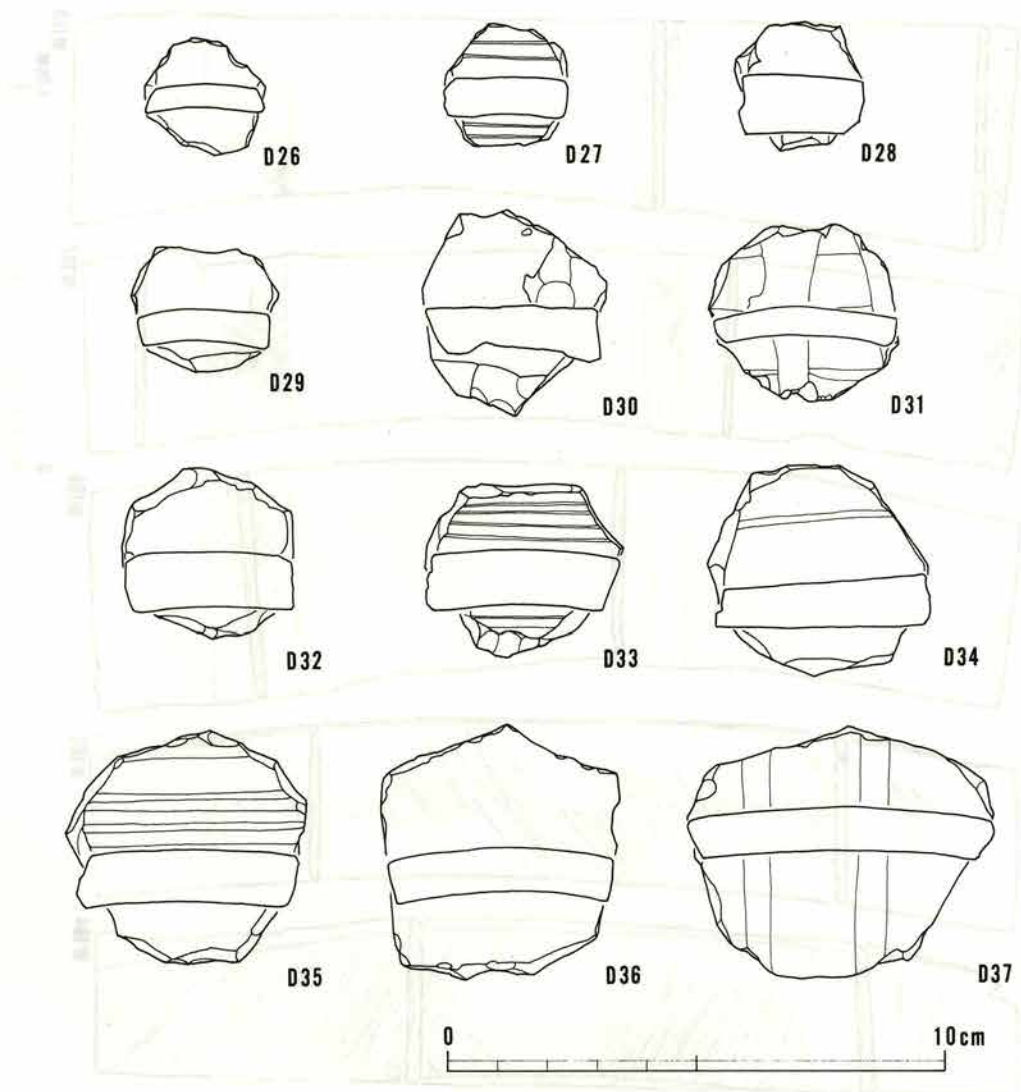
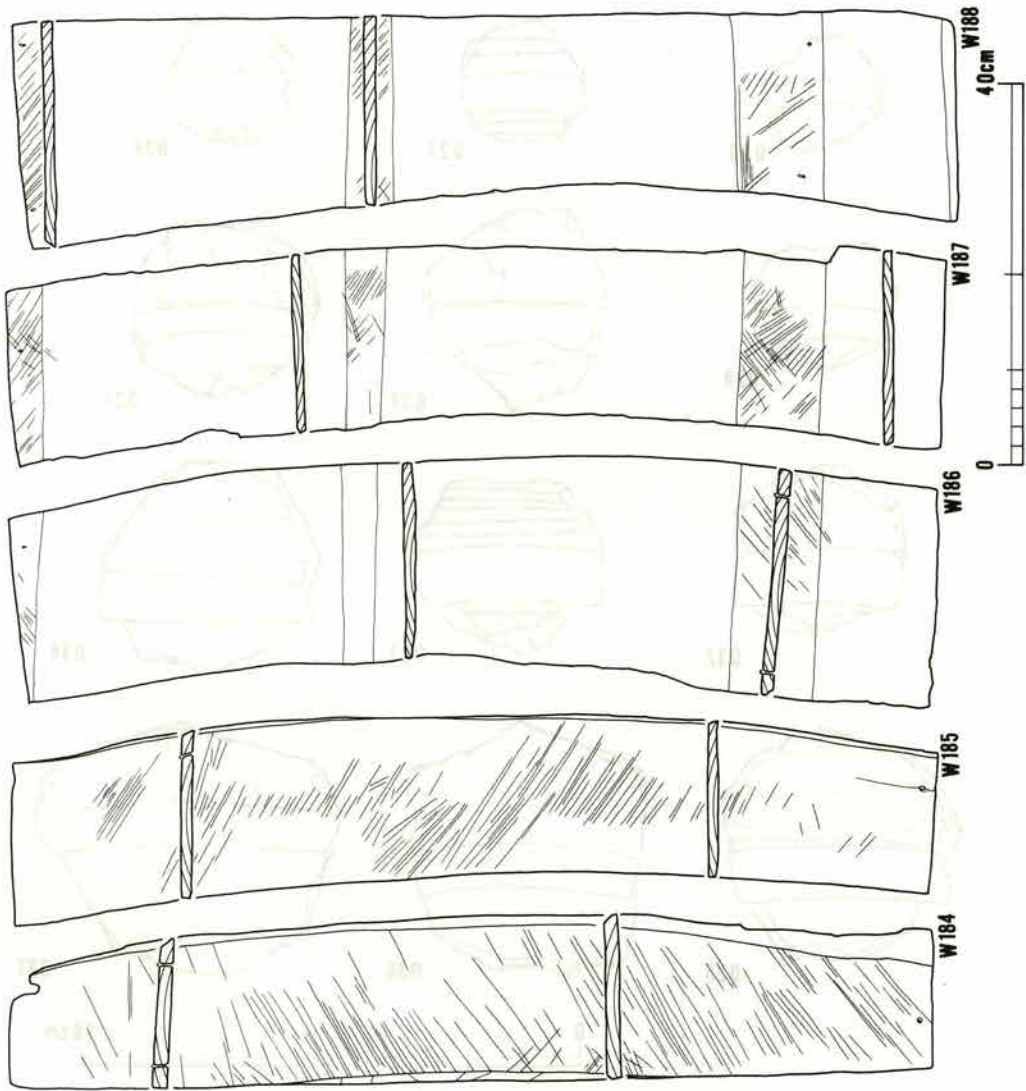


插图166 江戸時代土製品 包含層



挿図167 江戸時代木製品 (1) 井戸 4 (1)

W185で長さ97.4cm、幅17.7cm、厚さ1.2cm、W186で長さ98.0cm、幅23.9cm、厚さ1.4cm、W187で長さ99.8cm、幅20.3cm、厚1.2cm、W188で長さ99.4cm、幅23.6cm、厚さ1.4cmである。板材の上・中・下に3段の横棧が当たっていた痕跡が観察できる。

板は鋸引きによって製材されたと思われ、鋸の切断面に線状の凹凸が残っている。

横棧(W189・W190)は両端にほぞ穴を切り込んだ角材である。ほぞ穴は隅柱に差し込んで使用されていた。W189で長さ108.0cm、最大幅5.5cm、W190は長さ122.8cm、最大幅10.8cmである。いずれも井戸上段の南面に使用していた横棧である(図版103も同様)。

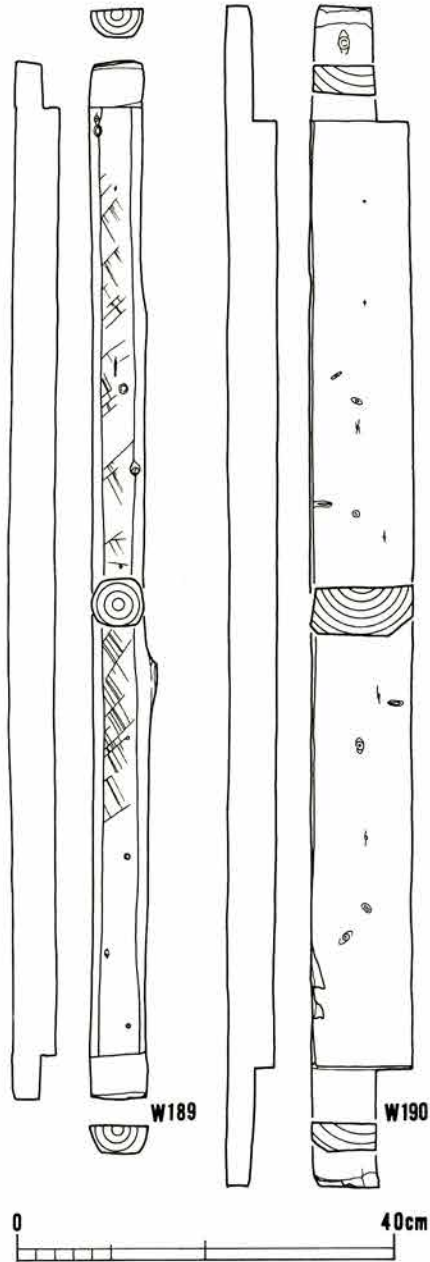
仕上げは粗く鋸などで引いて整形した後、軽くカンナをかけている。W189は加工されていない面もあり、外面に樹皮が依存する部分も見られた。

杭(W192~W196)は館東堀の肩付近で検出された木杭で、水田の境に打ち込まれたものである。いずれも、館の堀の法面より上で検出され、打ち込まれた状態で残っていた。江戸時代に水田を館の内側に拡大した際に、その境の土留め板を支える目的で打ち込まれたと思われる。杭は何れも、先端を手斧ではつって尖らせるもので、粗い作りである。

矢板(W199~W200)W199とW200は厚さ1~2cm前後の矢板で、先端は両端をはつて尖らせている。いずれも下端のみの破片である。

建築部材(W191・W197)は、やはり館の東堀の上層などで出土したものである。館周囲の堀を埋め戻した時に一緒に投げ込まれたものと思われる。W191は板材である。両面を加工し前後の両端は折れている。ほぞなどの切込みは認められない。

W197も両面を加工するもので前後の両端は下端が円形に整形されている。上端は一部に残る板端の状況から直線であったと考えられる。ほぞなどの切込みは認められない。



挿図168 江戸時代木製品(2)
井戸4(2)

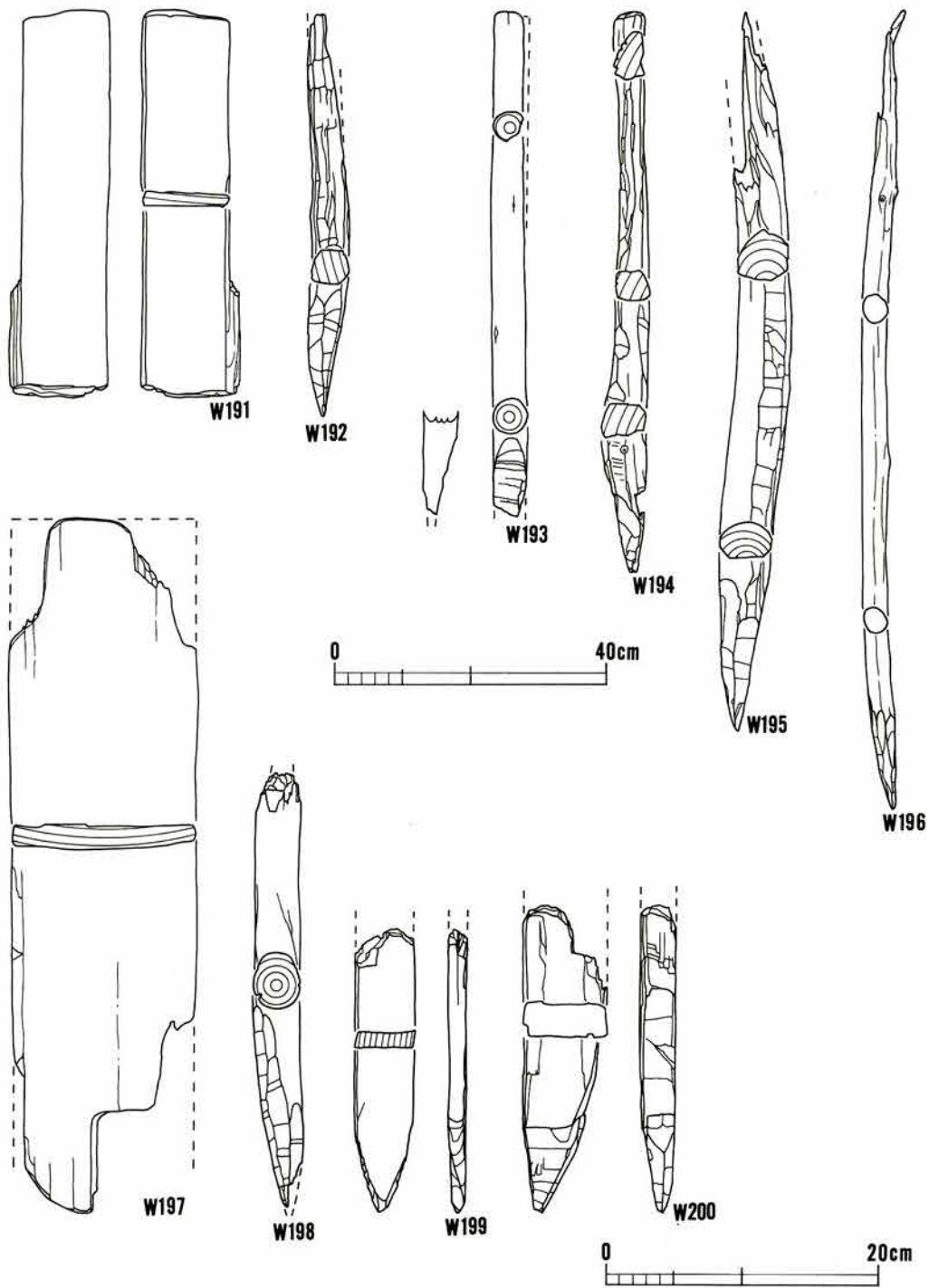
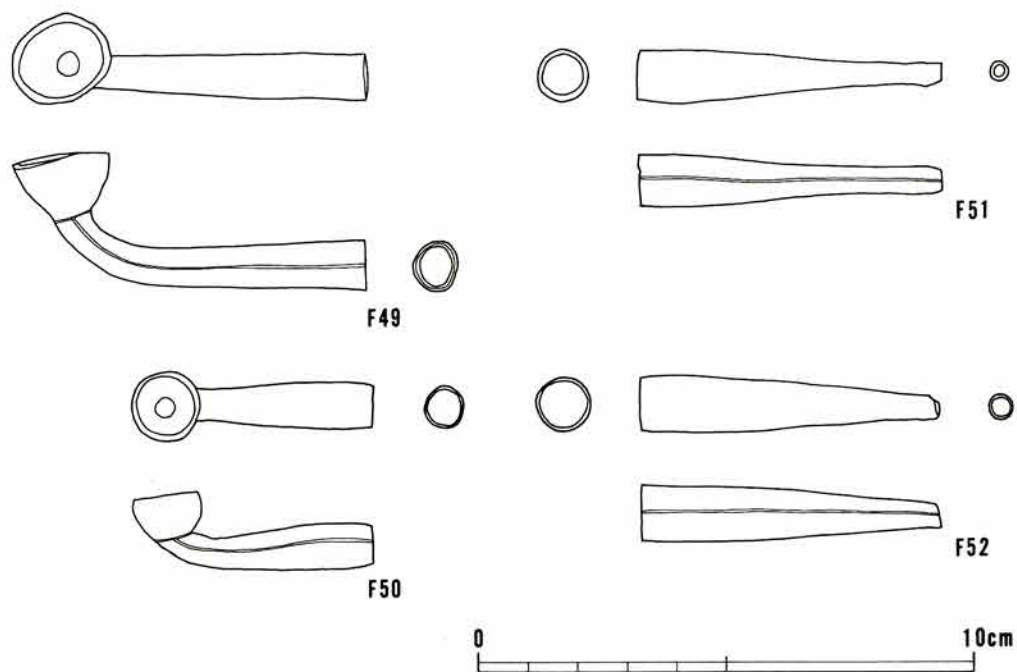


插图169 江戸時代木製品（3）水田他

4. 金属製品

煙管（F49～F52）F49・F50は煙管の雁首、F51・F52は煙管の吸口である。いずれも銅製のもので、板状にしたものを丸め側面で臘着している。雁首は脂返しを省略したもので直接火皿を接合している。どの部分にも羅字は残存しておらず、雁首と吸口のセット関係は不明である。F49は長さ7.1cm、直径1.0cmで、火皿がやや楕円形に変形している。雁首は直線的な形状である。F50はやや小型のもので長さ4.8cm、直径0.9cmで、管の中程でやや脹らみ羅字の接合部ですぼまる。吸口は先端を若干欠く破片で、F51が長さ6.1cm、直径1.0cm、F52が長さ6.0cm、直径1.1cmである。いずれも羅字接合部が太く先端に行くほど細くなる。

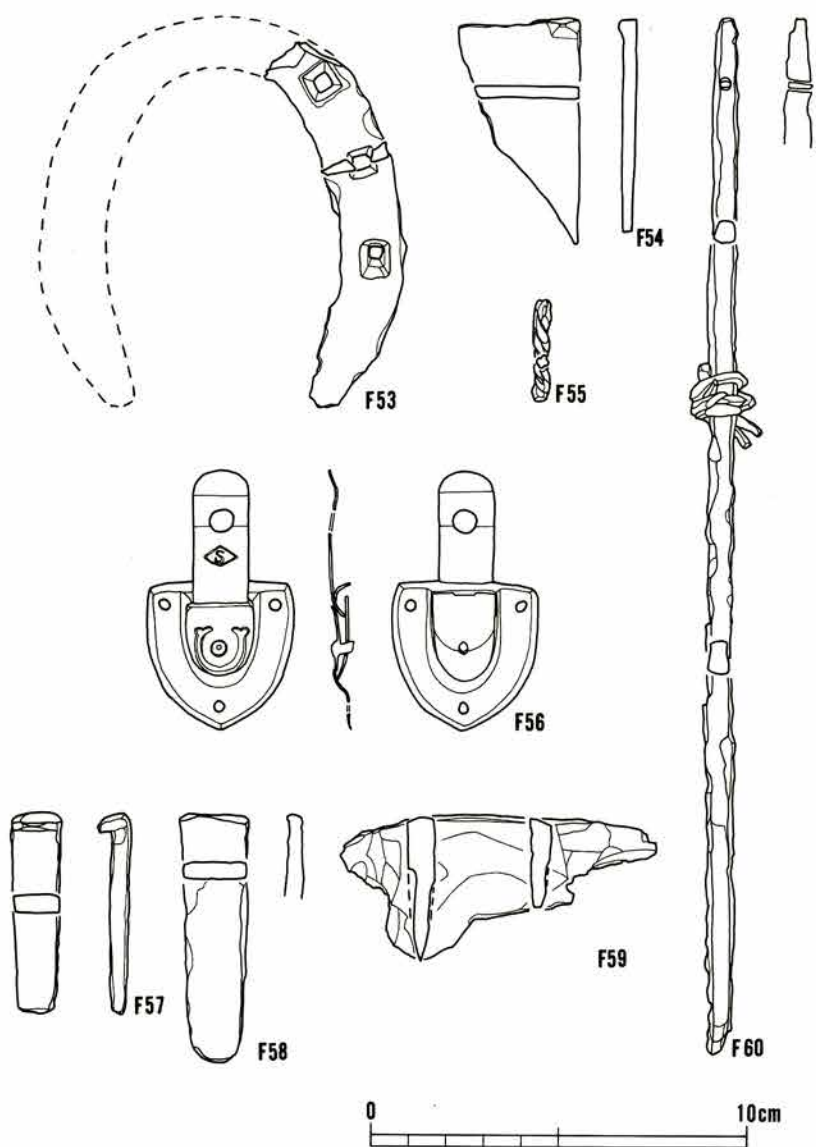


挿図170 江戸時代金属製品（1） 包含層

F51はやや辣蕪状にすぼまる形態をとっている。

蹄鉄（F53）家畜の足に打ちつけた蹄鉄である。出土したものはカーブをもつ棒状の破片であるが、全体はU字形になると思われる。残存部での法量は長さ9.4cm、最大幅3.7cmを測る。復元形から想定すると長さ11.0cm、幅7～8cm前後の大きさになると思われる。残存部には3ヶ所の鋌留穴が観察される。断面は内側にやや薄く、外側に厚く作られている。

留め金具（F56）家畜の鞍などに取りつけられた留め金具である。長さ6.8cm、幅3.9cmである。



挿図171 江戸時代金属製品(2) 包含層

たがね (F57~F58) 木割りなどに使用されるたがねである。F57は長さ5.2cm、幅1.3cm、厚さ0.5cmである。F58は長さ6.5cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmである。F57は頭部を叩かれたためか先端が「く」の字に曲がっている。F58も殴打のため先端が膨らんでいる。

火箸 (F60) 長さ27.2cm、直径0.6cmの火箸である。2本で1対と考えられるがこの内1本が出土した。上端には火箸を繋ぐため、直径0.3cmの穴が開けられている。この穴に針金の輪などを通して1対の火箸が離れないようにしていたのであろう。中程よりやや上部に針金が巻き

付けられており、先端が欠けた火箸であるため、役に立たなくなった火箸を別の用途に使用したのではないかと考えられる。

不明品（F54・F55・F59）F54は鋼材の切れ端と思われる。左上の先端に小さな隆起が観察される。長さ5.9cm、幅3.3cmである。F55は針金状の銅線を縫ったものである。F59も鋼材の破片である。長軸は8.4cm、短軸は3.8cmである（図版102のF61は井戸4出土の瓶の蓋で、F62・F63は針金である）。

表8 江戸時代遺物観察表(1) 土器(1)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
1	丹波焼	甕	—	—	17.4	6/12	外面土部釉がかかる。底部焼け歪み 便所
2	陶器	皿	4.9	—	17.4	6/12	内外面に透明釉をかける
3	陶器	皿	12.8	—	—	4/12	内外面に透明釉をかける
4	丹波焼	皿	10.3	—	—	4/12	内外面に透明釉をかける
5	丹波焼	蓋	3.2	2.8	—	5/12	
6	丹波焼	德利	1.8	—	—	10/12	内面ロクロ水挽き痕跡顕著
7	丹波焼	瓶子	—	—	5.8	8/12	
8	丹波焼	瓶子	—	—	8.9	3/12	
9	丹波焼	瓶子	—	—	9.3	4/12	
10	丹波焼	壺	7.7	—	—	3/12	
11	丹波焼	德利	—	—	5.4	1/12	
12	丹波焼	匣鉢	—	—	10.5	1/12	
13	丹波焼	匣鉢	11.3	6.4	14.4	7/12	
14	丹波焼	匣鉢	11.6	—	—	5/12	
15	丹波焼	匣鉢	12.0	6.6	12.3	8/12	
16	丹波焼	鉢	18.4	—	—	3/12	
17	瓦質	—	20.8	—	—	3/12	
18	丹波焼	鉢	17.1	—	—	2/12	器種不明
19	丹波焼	花入	11.5	—	—	3/12	
20	丹波焼	花入	16.8	—	—	2/12	
21	丹波焼	壺	12.7	—	—	5/12	
22	丹波焼	鉢	37.8	—	—	1/12	
23	丹波焼	播鉢	32.4	12.5	15.8	10/12	
24	丹波焼	播鉢	28.3	—	—	1/12	
25	丹波焼	播鉢	29.5	—	—	4/12	
26	丹波焼	播鉢	31.3	—	—	3/12	

表8 江戸時代遺物観察表(2) 土器(2)

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			口径	器高	底径		
27	丹波焼	播鉢	30.6	-	-	1/12	
28	丹波焼	播鉢	38.0	-	-	2/12	
29	丹波焼	播鉢	-	-	13.2	3/12	
30	丹波焼	播鉢	-	-	16.5	1/12	
31	丹波焼	播鉢	-	-	14.0	10/12	底部に輪高台を貼り付ける。
32	丹波焼	播鉢	-	-	18.2	11/12	底部に輪高台を貼り付ける。
33	丹波焼	播鉢	-	-	19.0	6/12	底部に輪高台を貼り付ける。
34	丹波焼	播鉢	20.0	-	?	3/12	
35	丹波焼	甕	12.8	-	-	4/12	
36	丹波焼	甕	10.3	-	-	4/12	
37	丹波焼	甕	3.2	2.8	-	5/12	
38	丹波焼	甕	1.8	-	-	10/12	
39	丹波焼	甕	-	-	5.8	8/12	
40	丹波焼	甕	-	-	8.9	3/12	
41	丹波焼	甕	-	-	9.3	4/12	
42	丹波焼	甕	7.7	-	-	3/12	
43	丹波焼	甕	-	-	5.4	1/12	
44	丹波焼	甕	-	-	10.5	1/12	
45	丹波焼	甕	11.3	6.4	14.4	7/12	

表8 江戸時代遺物観察表(3) 土製品

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			長軸	短軸	厚さ		
D26	丹波焼	面子	2.4	-	0.5	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。
D27	丹波焼	面子	2.5	-	0.7	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。
D28	丹波焼	面子	2.6	-	1.0	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。
D29	丹波焼	面子	2.9	-	0.6	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。
D30	丹波焼	面子	4.1	-	1.0	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。
D31	丹波焼	面子	3.8	-	0.5	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。
D32	丹波焼	面子	3.3	-	1.1	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。
D33	丹波焼	面子	4.0	-	1.0	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。
D34	丹波焼	面子	4.4	-	1.0	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。
D35	丹波焼	面子	4.9	-	1.0	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。
D36	丹波焼	面子	5.0	4.1	0.8	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。
D37	丹波焼	面子	6.1	4.2	0.8	12/12	周囲を打ち欠いて成形する。

表8 江戸時代遺物観察表(4) 木製品

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			長さ	幅	厚さ		
W184	木製品	側板	97.6	17.3	1.6	6/12	両面は鋸引き 井戸4
W185	木製品	側板	97.4	17.7	1.2	4/12	両面は鋸引き 井戸4
W186	木製品	側板	98.0	23.9	1.4	4/12	両面は鋸引き 井戸4
W187	木製品	側板	99.8	20.3	1.2	5/12	両面は鋸引き 井戸4
W188	木製品	側板	99.4	23.6	1.4	10/12	両面は鋸引き 井戸4
W189	木製品	横棧	108.0	5.5	5.0	8/12	両端に柄を切る 井戸4
W190	木製品	横棧	122.8	10.8	5.5	3/12	両端に柄を切る 井戸4
W191	木製品	板材	55.5	—	9.3	4/12	建築部材 井戸4
W192	木製品	杭	57.6	5.5	—	3/12	先端を手斧ではつて尖らず 水田
W193	木製品	杭	72.4	5.0	—	11/12	先端を手斧ではつて尖らず 水田
W194	木製品	杭	82.0	6.0	—	11/12	先端を手斧ではつて尖らず 水田
W195	木製品	杭	103.0	7.3	—	?	先端を手斧ではつて尖らず 水田
W196	木製品	杭	114.7	3.7	—	?	先端を手斧ではつて尖らず 水田
W197	木製品	板材	52.0	13.7	1.7	10/12	建築部材
W198	木製品	杭	31.4	4.0	—	6/12	先端を手斧ではつて尖らず
W199	木製品	矢板	20.6	4.1	1.2	6/12	先端を手斧ではつて尖らず
W200	木製品	矢板	22.1	6.2	2.2	6/12	先端を手斧ではつて尖らず

表8 江戸時代遺物観察表(5) 金属製品

遺物 番号	種 別	器種	法量 (cm)			残存率	特 徴・備 考
			長さ	幅	厚さ		
F49	真鍮製品	煙管	7.1	1.0	—	12/12	雁首
F50	真鍮製品	煙管	4.8	0.9	—	12/12	雁首
F51	真鍮製品	煙管	6.1	1.0	—	11/12	吸口
F52	真鍮製品	煙管	6.0	1.1	—	10/12	吸口
F53	鉄製品	蹄鉄	9.4	3.7	0.6	4/12	鋌留穴2ヶ所残る。
F54	鉄製品	?	5.9	3.3	0.3	?	
F55	銅製品	銅線	0.4	0.2	—	?	
F56	鉄製品	留金具	6.8	3.9	0.5	12/12	
F57	鉄製品	楔	5.2	1.3	0.5	12/12	
F58	鉄製品	楔	6.5	1.8	0.4	12/12	
F59	鉄製品	?	3.8	8.4	0.8	?	
F60	鉄製品	火箸	27.2	0.6	—	12/12	上端に紐通し穴。銅線を巻き付ける。

第6章 ま と め

第1節 古墳時代の集落について

竪穴住居址1～4は集中して検出されたが、それぞれが1時期に存在していないことは明らかである。竪穴住居址1・2は切り合いから2→1の順、3は建物の方向が竪穴住居址2と同じ向きを持つ。4については2に近い向きを持つが軒が近接しすぎるため同時に存在したとは考えられない。

さらに、遺物の時期を考慮に入れると、後述するように竪穴住居址1・2は竪穴住居址2が5世紀末前後、1が6世紀前半、3は5世紀末と考えられる。従って、竪穴住居址2と3が同時期頃で、集落は5世紀末頃から形成されたと考えられる。竪穴住居址4は5世紀末から6世紀前半頃のものであろう。

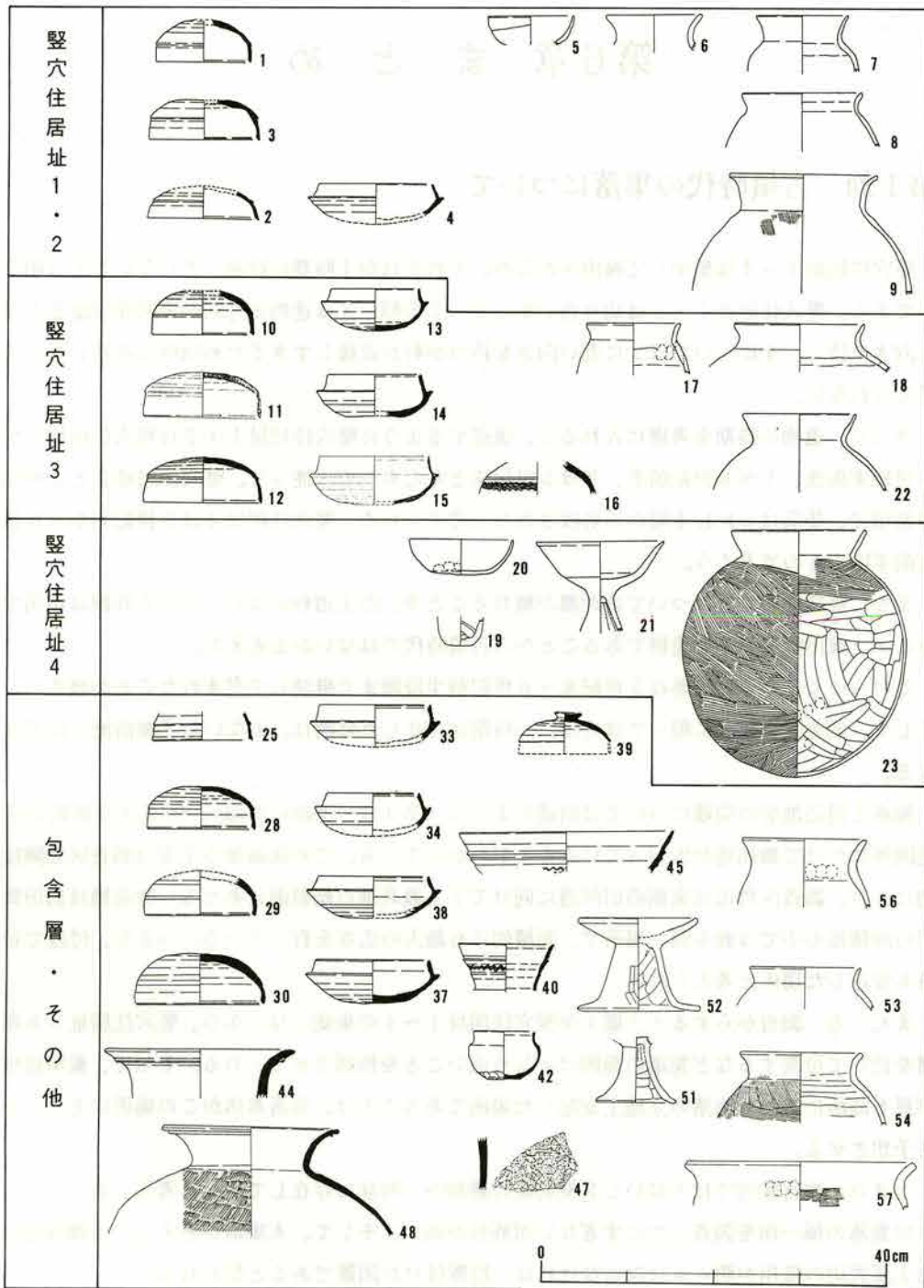
また、竪穴住居址5については距離が離れることや、出土遺物がないことから詳細は不明であるが、検出状況や方形建物であることから古墳時代ではないかと考えた。

これらのことから、集落は5世紀末～6世紀前半段階まで継続して営まれたことが窺える。そして、調査区の範囲に限って言えば、一時期に存在した建物は、1ないし2棟前後と推定される。

集落と周辺地形の問題については前述のように（第3章 遺跡の環境）、調査区の東側から範囲外にかけて微高地が広がっていることがわかっている。この微高地の頂部は調査区東隣接地にあり、調査区周辺は東側の旧河道に向けて下る微高地の傾斜面にあたる。微高地は初田周辺の沖積地の中では最も高い場所で、面積的にも最大の広さを有している。つまり、付近では最も安定した場所と考えられる。

また一方、調査からすると土壌1が竪穴住居址1～4の東側で見つかり、竪穴住居址5も距離を於いて位置するなど集落の範囲はかなり広いことを推測させてくれる。そして、東隣接地が最も高所にあたり集落の立地上安定した場所であることは、集落本体がこの場所にあることを予想させる。

つまり、調査区内では1ないし2棟前後の建物が一時期に存在していたと考えられるが、これは集落の極一部を調査したにすぎない可能性が高い。そして、本集落を考えるには微高地の頂上部周辺の様相が明らかにならなければ、位置付けが困難であると思われる。



挿図172 古墳時代の土器集成図

第2節 平安時代～鎌倉時代の土器について

1. はじめに

当該期の土器については、土器自体の残存状況は良好であるが、旧河道出土のものが大半で一括性に欠く。このために、以下の論は、今後当地域における中世土器研究のたたき台に供されるべきものと考えている。

当該期の土器については、瓦器の出現の有無を基準に平安時代と鎌倉時代とに分け、旧河道出土土器を中心に報告してきた。しかし、この時期区分はあくまでも便宜的なものであり、出土層位から大きな流れとして平安時代→鎌倉時代と前後関係をつかむことができるという程度のものである。また、それぞれの共伴関係についても確かなものではない。

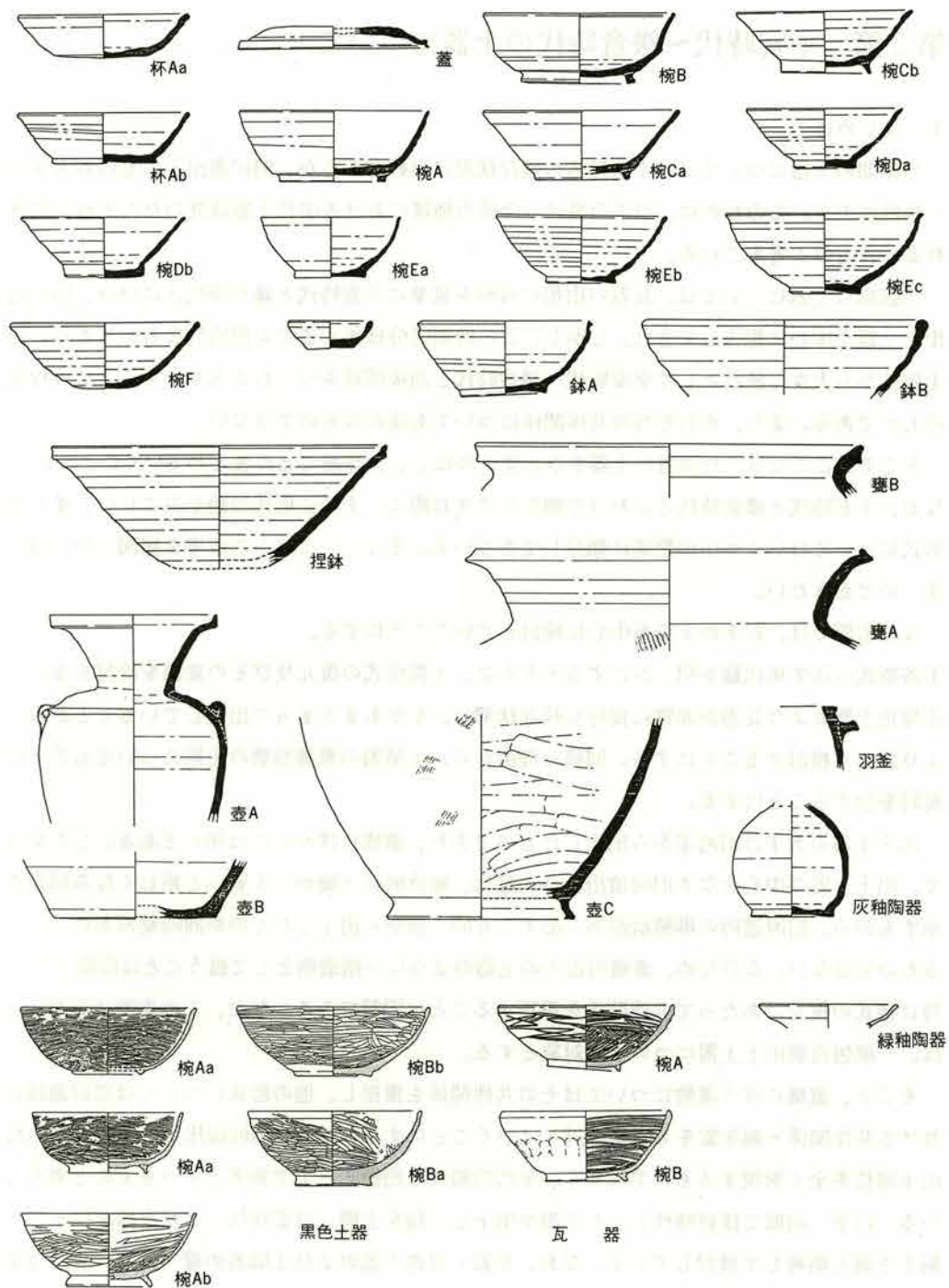
そこで、ここでは一旦両者の土器をひとまとめにし、各器種ごとにまとめていくことにする。なお、平安時代と鎌倉時代とにわけて報告してきた際に、すでに形式分類をおこない、多くの形式についてはいくつかの型式に細分してきている。そこで、これらの成果を挿図173・174にまとめておきたい。

なお本節では、以下の2点を中心に検討していくことにする。

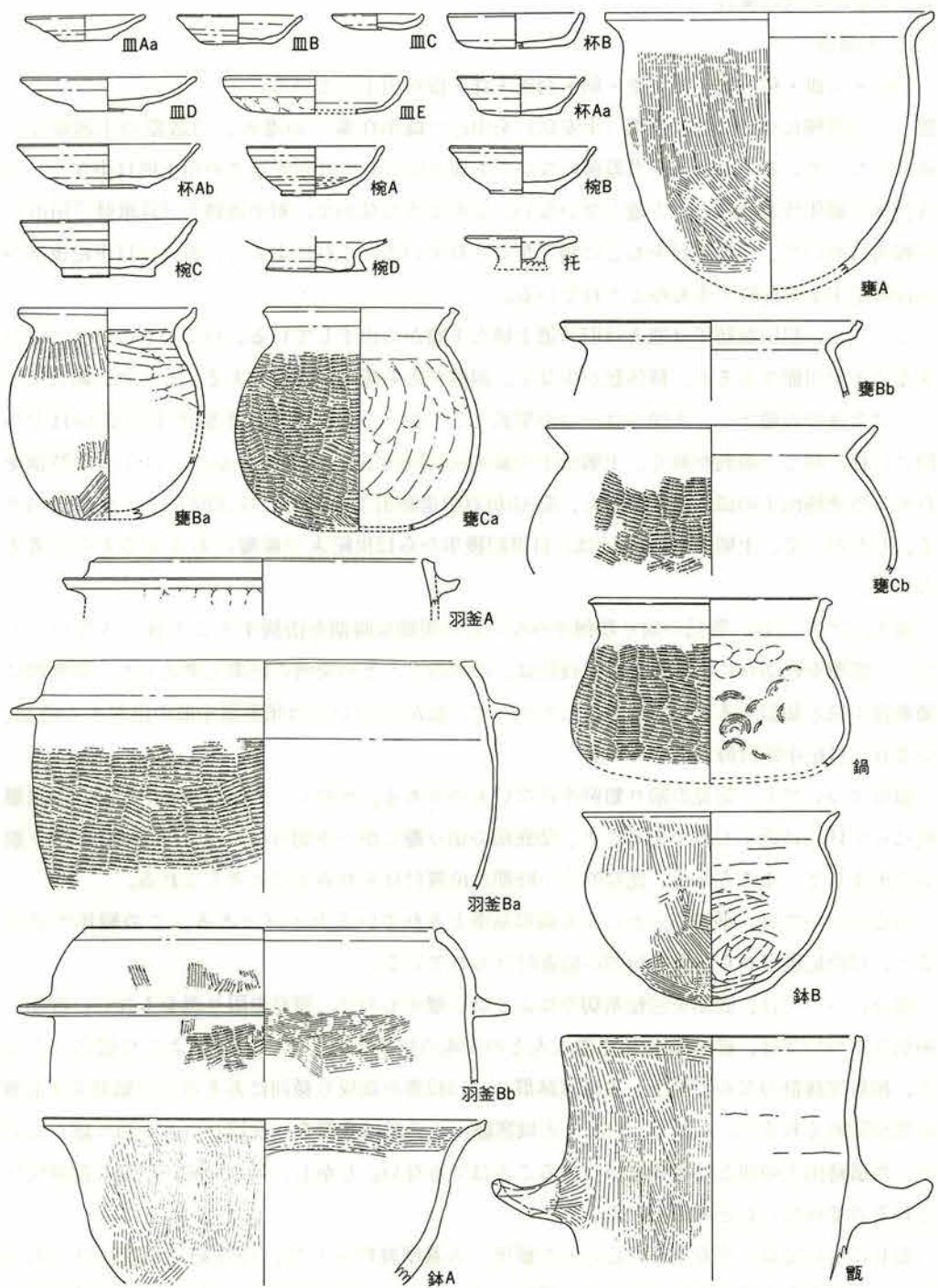
- ①各型式の示す年代観を明らかにするとともに、土器様式の復元及びその変遷を検討する。
- ②黒色土器および瓦器が非常に良好な残存状態で、しかもまとめて出土していることから、より詳しく検討することにする。同様の理由から、土師器の煮沸形態の土器についても若干の検討を加えることにする。

出土土器の大半は旧河道から出土したものであり、遺構に伴うものは僅かである。したがって、出土土器の中心をなす旧河道出土の土器は、層位的に下層から上層へと新しくなる傾向を示すものの、旧河道内の堆積状況から必ずしも同一層から出土したものが同時期のものといえるものではない。このため、遺構内出土の土器のように一括遺物として扱うことは危険であり、特に様式の復元にあたって共伴関係を重視することは困難である。なお、この作業にあたっては、一部包含層出土土器についても対象とする。

そこで、遺構に伴う遺物についてはその共伴関係を重視し、他の形式については周辺遺跡における共伴関係・編年案をもとに検討していくことにする。なお、旧河道出土土器については、出土層位を全く無視するものではなく、年代的傾向を把握する上で参考とすべきものと考えている。以下、前節で鎌倉時代とした土器が出土した層を上層、平安時代とした土器が出土した層を下層と略称して検討していく。なお、瓦器・黒色土器および土師器の甕・鍋については項を改めて検討する予定である。



挿図173 平安～鎌倉時代の土器器種分類（1）



挿図174 平安～鎌倉時代の土器器種分類 (2)

2. 土器の年代の検討

(1) 土師器

小皿・大皿・杯・椀・托・甕・鍋・羽釜・鉢・甌が出土している。

皿 当器種については、京都（平安京）を中心に編年作業⁽¹⁾が進み、当該期の土器編年の基準となっている。しかし、当器種のなかでも皿Aについては平安京での出土例は少なく、皿A自体の編年作業はほとんど進んでいない。このようななかで、対中遺跡⁽²⁾（兵庫県三田市）の報告において、一括資料をもとに編年がなされている。これによると、皿Aは11世紀後半から12世紀末まで存続するものとされている。

ところで、初田館跡では皿Aは旧河道上層と下層から出土している。いくつかの型式に細分することが可能であるが、個体数が少なく、個体差との識別が困難である。そこで、細分については今後の課題とし、本節では一つの型式として扱うことにする。下層出土の皿Aaは全体的に口径に対して器高が高く、上層出土の皿Abは器高が低い傾向にある。このような特徴を有する当遺跡出土の皿Aのなかでも、皿Abが対中遺跡出土の資料とほぼ同じタイプに該当する。したがって、上層出土の皿Abは、11世紀後半から12世紀末の範疇におさまるものと考えられる。

皿Aaについては、管見の限り類例をみないため明確な時期を指摘することはできない。ただし、底部を糸切りにより切り離す技法は、須恵器工人との交流の結果と考えられ、形態的に須恵器小皿と類似するものである。したがって、皿Aaについては須恵器小皿の出現する時期、つまり12世紀中頃以降と考えたい。

皿Bについても、管見の限り類例をみないものである。ただし、当型式については、①法量的にみて坏Aに近いものであること、②底部の切り離しがへら切りによっていること、③下層から出土していることから、比較的古い時期に位置付けられるものと考えられる。

皿Cについては、平安京においても編年基準とされているタイプである。この編年⁽³⁾によると、12世紀後半から13世紀初頭に位置付けられている。

皿Dについては、底部を回転糸切りにより切り離すもので、管見の限り例をみない。底部の糸切りについては、皿Aa同様須恵器工人との交流の結果と考えたい。このような視点で見ると、相野窯跡群のなかの向上・古城窯跡群に、口縁部が端反り傾向にある点など類似する形態の皿が認められる⁽⁴⁾。ただし、向上・古城窯跡出土の皿は底部をへら切りにより切り離しており、当遺跡出土の皿とは直接結びつけることはできない。しかし、ほぼ同様の時期に位置付けられるのではないかと考えられる。

皿Eについては、平安京を中心とした編年⁽⁵⁾の基準資料として、12世紀に位置付けられている。口縁部を2段ナデによるもの（皿Ea）と、1段ナデによるもの（皿Eb）とに分類でき、前者を12世紀前半に、後者を12世紀後半に位置付けている。

皿Fについては、土器溜りより一括して出土したものであるが、量・形態的特徴から13世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

杯 上層から杯Abが、下層から杯Aaと杯Abが出土している。

杯Aaについては、須恵器の杯Aの模倣と考えられ、9世紀後半に位置付けられる。

杯Abについては、平安京においてはあまり類例の見られないものである。形態的・技法的に須恵器碗Faを模倣したものと考えられる。須恵器碗Faは12世紀後半に位置付けられることから、当器種についてもほぼ同時期に位置付けたい。対中遺跡においても、杯Eに分類され、11世紀後半から12世紀末まで存続するものとされている⁽⁶⁾。また、同じく三田市に位置する川除・藤ノ木遺跡においてもわずかながら出土が認められ、12世紀代を中心とした時期に位置付けられている⁽⁷⁾。

碗 下層のみから、碗A・碗B・碗C・碗Dの4タイプが出土している。

碗Aについては、先述したように、形態的・技法的に相野窯跡群産の碗の模倣あるいはその影響下にあるものと考えられる。したがって、当タイプについては、相野窯跡群の操業期間である9世紀後半から11世紀末初頭と考えられる。特に内面見込みの特徴から、相野窯跡群産の碗と類似する。よって、10世紀後半と考えられる。

碗Bについては、底部を回転糸切りにより切り離す点のみが碗Aと異なる。したがって、時期的には碗Aとほぼ同時期に位置付けられるものと考えられる。

碗Cについても、碗A・碗B同様、形態的・技法的に相野窯跡群産の影響下にあるものと考えられる。特に、当遺跡出土の須恵器碗Dbに類似することから、それとほぼ同時期の10世紀前半に位置付けたい。

碗Dについては、底部のみしか残存しないこともあり、他に類例を求めにくい。ただし、川除・藤ノ木遺跡においてわずかに出土が認められ、12世紀前半に位置付けられている⁽⁸⁾。そこで、当器種についても12世紀前半を中心とする時期に位置付けたい。

托 川除・藤ノ木遺跡で類例が認められ、12世紀前半に位置付けられている⁽⁹⁾。よって、当遺跡出土の托についても、ほぼ同年代と考えたい。

羽釜 上層から羽釜B、下層から羽釜Aが出土している。

羽釜Aについては、口縁部と鏝のみしか残存しないが、体部が長胴で底部が砲弾形を呈するものと推定される。このような特徴をもつ羽釜の類例は、比較的多く認められる。川除・藤ノ木遺跡においては、10世紀後半に位置付けられている⁽¹⁰⁾。

羽釜Bについては、羽釜Ba・羽釜Bbとも他に例をみないものである。ただし羽釜Aaの類例としては、魚住古窯跡群40号窯跡出土遺物で羽釜B類と報告されている⁽¹¹⁾。40号窯跡の時期については、当該報告書において年代は示されていないが、共伴する須恵器から判断すると、13世紀前半から中頃と考えられる。

羽釜Bbについても、羽釜Baと同じく魚住40号窯跡出土遺物のなかで羽釜C類と報告されている⁽⁴²⁾。羽釜Baと時期的な差はないものと考えられる。

鉢 鉢A・鉢Bとも下層のみから出土している。

鉢Aについては、相野窯跡群出土の鉢のなかに、ほぼ同形態のものが認められる。そして、相野窯跡群で焼成された鉢は、胎土中に小礫を多く含むもので、土師器工人との関係が考えられる。このことは、相野窯跡群が操業されていた時期には、鉢Aが存在していたことを否定するものではない。また、距離的にやや離れるが西播磨の小犬丸遺跡包含層から同タイプの鉢が出土している⁽⁴³⁾。この包含層は時期幅をもつが、10世紀代の須恵器と対応するものと考えられる。このように、相野窯跡群の操業年代および小犬丸遺跡の年代から、10世紀を中心とした時期を考えたい。

なお、鉢Bについては、明確な類例等がないためその位置付けは困難である。ただし、外面の縦方向のハケ調整を中心とした調整手法は当遺跡出土の土師器の甕Aに類似することから、甕Aと時期的に大差ないものと考えられる。したがって、9世紀後半～10世紀前半に位置付けたい。

甕 先述したように、上池遺跡⁽⁴⁴⁾出土例(SX02)に類似するものである。このSX02における共伴資料の須恵器をみると、相野窯跡群でも古く位置付けられる向上・古城窯跡群と時期的に近いものと考えられる。よって、9世紀後半から10世紀前半と位置付けたい。

(2) 須恵器

杯・蓋・椀・鉢・捏鉢・壺・甕の各器種が出土している。

杯 杯Aと杯Bが出土している。両タイプとも下層から出土している。

杯Aについては、杯Aaと杯Abとに細分できたが、特に杯Abについては、底部の形態が相野窯跡群産の椀形態の底部に類似するものである。したがって、底部の形態から判断すると、椀形態の出現期に位置付けられるものと考えられる。当該資料の生産窯が明らかでないため時期を特定することは困難である。しかし、相野窯跡群では10世紀代に椀の出現が確認されていることを参考にすると、9世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

杯Aaについては、形態的・法量的に個体差が目立つため、時期の特定は困難である。このなかの一部については、形態的に相野窯跡群出土の杯Aと類似するものである。したがって、杯Aaの少なくとも一部は、杯Ab同様、9世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

蓋 下層のみから出土している。この土器は、先述したように、相野窯跡群産と考えられるものである。当窯跡群においては、蓋の生産は向上・古城窯1・2号窯跡のみに限られる。よって、9世紀後半に位置付けられる。

椀 上層および包含層から椀Fが、下層から椀A～椀Eが出土している。

腕Aは、口縁端部が端反りしない点などから、次に述べる腕Cと比べてより古い特徴を示すものと考えられる。形態的に近いものとして、向上・古城1号窯跡灰原およびこれより若干古く位置付けられる貝谷窯跡出土資料⁽¹⁵⁾のなかにみられる。したがって、向上・古城1号窯跡と同じ時期、あるいはそれより若干古い時期と考えられ、9世紀後半に位置付けたい。

腕Bは、いわゆる稜腕である。小川真理子によると、当遺跡出土資料のように口縁端部内面に沈線をもつものは、丹波・但馬に分布が認められるようである⁽¹⁶⁾。そして、当遺跡の近くでは、竜円寺遺跡と西木ノ部遺跡で出土が認められている。しかし竜円寺遺跡出土の資料⁽¹⁷⁾は当遺跡出土資料とはタイプを異にすると考えられる。西木ノ部遺跡出土資料のなかには、包含層出土資料および溝出土資料のなかに類似するものが認められる⁽¹⁸⁾。この他、三田市の溝ノ尾遺跡ピット出土土器のなかに、当遺跡出土資料と類似する稜腕が出土している⁽¹⁹⁾。西木ノ部遺跡出土資料については、現在整理中ということもあり、年代は明らかではないが、溝ノ尾遺跡出土資料については8世紀の範疇におさまるものと報告されている。しかし、当遺跡では8世まで遡る遺物が皆無であることから、9世紀代に位置付けておきたい。

腕Cは、腕Caと腕Cbとに細分され、腕Cbについては相野窯跡群産と推定される。当該古窯跡群においては、腕Aと分類されるもので、類似するものが西谷池窯跡に認められる。この窯跡の年代から10世紀後半と考えられる。

腕Caについては、底部の技法は篠窯跡⁽²⁰⁾に求められる。しかし、形態的・法量的特徴からは、相野窯跡群向上・古城1号窯跡出土資料に類似するものである。篠窯跡では10世紀前半～中頃に、向上・古城1号窯では9世紀後半～10世紀前半に位置付けられることから、10世紀前半と位置付けたい。

腕Dについても、腕Daと腕Dbとに細分されるが、腕Dbについては先述したように相野窯跡群産と推定されている。特に、底部内外面とも明瞭に一段落ち平高台をなす点から、古城山窯跡出土の腕に近い特徴を有している。当該窯跡は、10世紀前半と推定されていることから、当器種についても、この時期に位置付けられるものとする。

腕Daについては、生産窯を明らかにすることはできず、時期の特定も困難である。ただし、特に口径に対して底径が小さい点、および体部が内湾気味に立ち上がる点などの特徴から、腕Dbより新しい傾向にあり、後述する腕Eへの移行形態と考えられる。したがって、腕Dbより新しく、10世紀後半に位置付けたい。

腕Eについては、腕Ea・腕Eb・腕Ecと細分される。腕Ecは神出古窯址群産と考えられ、当該窯址の編年（以下、森田編年と略称）において、神出I期第1段階に位置付けられるものである⁽²¹⁾。腕Ebについては、腕Ecより1段階新しく位置付けられる。なお当型式については、形態・技法的に類似するものが鍋子1号窯址採集遺物に認められる⁽²²⁾。よって今後、当該窯址との関係も考慮に入れる必要があろう。

椀Fは、椀Eに後続するタイプである。形態の特徴から、①底部は平高台の痕跡をとどめ内面がわずかに落ち込み、体部は内湾気味立ち上がる椀Fa、②底径が小さく、体部が内湾気味に立ち上がる椀Fb、③器高が低くなり、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる椀Fcの3タイプに細分できる。椀Faは森田編年の神出Ⅰ期第2段階、椀Fbは神出Ⅱ期第1段階、椀Fcは神出Ⅱ期第2段階に対応し、それぞれ12世紀前半、12世紀後半、13世紀前半に位置付けられている。

小皿 上層から出土している。他の遺跡においては、一般的に椀Fと共伴して出土している。なかでも小皿の形態から、椀Fbと時期的に平行するものと考えたい。

鉢 下層のみから出土しており、鉢Aと鉢Bの2タイプが出土している。

鉢Aについては、兵庫県内においては類例はあまり認められないが、京都丹波に位置する篠窯跡群の報告で鉢Cに分類されている⁽²⁰⁾ものと同タイプと考えられる。ただし、当該報告において鉢Cと分類されているものなかには、当遺跡出土の鉢Aと同形態のものは認められない。当遺跡出土の鉢Aは、口径に対して器高が低く、体部の内湾傾向が顕著である。法量的には椀Eに近い。したがって、篠窯跡群の報告においては、鉢Cは第Ⅲ期1段階（10世紀第2四半期）まで存続するものと位置付けられているが、法量的にみて椀Eに近いことから、11世紀代まで下るのではないかと考えられる。

鉢Bについては、平安京左京内膳町S K 19出土資料⁽²⁰⁾に類例が認められる。当該報告においては鉢Bに分類され、10世紀後半に位置付けられている。

捏鉢 上層と柱穴および包含層（挿図14）から出土している。旧河道出土の口縁部が残存する2個体については同タイプと考えられる。神出古窯址群産と考えられ、当該窯跡の編年において12世紀後半～13世紀前半に位置付けられている。これに対して柱穴出土のものは、神出古窯址群産の可能性が高いが、旧河道出土のものより古く12世紀前半と考えられる。また、包含層出土の375は13世紀前半に、374は13世紀後半に位置付けられる。

壺 壺A・壺B・壺Cの3タイプが出土しており、いずれも下層から出土している。

壺Aは、いわゆる双耳壺と称されるものである。1条ないし2条の凸帯を貼り付けた後耳を貼りつけるもので、相野窯跡群においては、操業期間を通じて生産されている。特に耳の貼り付け方法から判断して、10世紀中頃～後半と考えられる。

壺Bについては、底部が残存するのみである。形態から時期を特定することは困難である。しかし、底部をヘラ切りによって切り離していることから、相野窯跡群産と技術的に共通する。したがって、当型式についても、9世紀後半から11世紀初頭と考えたい。

壺Cについても、全体の形態は復元できないが、相野窯跡群産と考えられるものである。当該窯跡群においても壺Cと分類されているもので、操業期間の前半に限られている。したがって、当型式については、9世紀後半から10世紀中葉と考えたい。

甕 下層から甕Aが、上層から甕Bが出土している。

甕Aは、その特徴から相野窯跡群産と考えられる。頸部の立ち上がり方および口縁端部の特徴から比較的早く考えられ、10世紀前半と位置付けられる。

甕Bは、口縁端部のつまみ上げ状のナデが退化していることから、魚住古窯跡群の編年⁽²⁵⁾を参考にすると、13世紀前半まで下がるものと考えられる。

羽釜 先述したとおり相野窯跡群産と考えられるものである。当器種は、操業期間を通して生産されていることから、9世紀後半から11世紀初頭と考えたい。

(3) 灰釉陶器

小瓶が1点出土している。生産窯を特定することはできない。しかし、消費地における出土例をみると、平安京三条三坊S X07出土の一括資料⁽²⁶⁾のなかに、比較的まとまった灰釉陶器の出土が認められる。それらの出土例と比べると、体部の脹らみが若干異なるものが、同タイプと判断できる。当該遺構については9世紀後半から10世紀初頭に位置付けられている。したがって、当遺跡出土の小瓶についても、同様な時期を考えたい。

(4) 緑釉陶器

皿と碗が下層から出土している。

皿・碗ともに残存状況が良好とはいえず、時期の特定は困難である。他の器種の示す年代を考慮に入れて、9世紀から10世紀にかけての時期を考えたい。

(5) 白磁

墓1から碗が出土している。白磁碗のなかでも出土例が多い型式のひとつで、一般に12世紀から13世紀の遺構から出土している。共伴する瓦器碗の年代(後述)からも、首肯できるものと考えられる。

3. 土師器煮沸具の検討

(1) はじめに

当遺跡からは、甕・鍋が量的にまとまって出土しており、いくつかの型式に分けることができた。これらの型式をみると、時期差を内包しているようで、煮沸具としての変化つまり甕から鍋への変化をある程度追うことができるのではないかと考えられる。そこで、甕から鍋への変遷をその形態差を中心に検討してみたい。

(2) 甕から鍋への変化

当遺跡出土の甕と鍋のなかで最も古いものは甕A、最も新しいものは鍋と考えられる。したがって、甕B・甕Cがこの両者の中間の移行形態をなすものと考えられる。以下、この前提をもとに、甕から鍋への変遷をみてみたい。

第1段階—甕Aの段階

長胴の砲弾形をなす体部に、短く「く」字形に外反する口縁部が付くものである。当段階において、すでに口縁端部の形態に次段階への動きが認められる。端部をわずかではあるが、つまみあげるものである。

甕Aの年代を判断できるような資料は、管見の限り認められない。しかし、当器種はより古代的要素を残すもので、当遺跡のなかでも最も古い時期に位置付けられるものとする。

第2段階—甕Bの段階

前段階の、口縁端部のつまみ上げが顕著になる。また、体部の形態についても、前段階の長胴傾向から、全体的に球形への指向が認められる。さらに、体部外面の調整において、縦方向のタタキ原体を用いてのナデが施されている。これは、前段階の縦方向のハケ調整段階から、次段階におけるタタキ整形技法の本格的採用への移行状況を示しているものといえよう。

当段階からのタタキ技法の使用に関しては、須恵器工人との相互交流の結果と考えられる。この甕自体が具体的にどこで生産されているかは明らかでないが、当遺跡の比較的近くで生産されたものと考えられる。この生産段階において、須恵器生産におけるタタキ整形技術を甕の製作に導入したものと考えられる。当遺跡付近では、相野窯跡群において須恵器工人の存在が確認されている。当遺跡においても、相野窯跡群産の製品が少なからず認められ、須恵器工人との交流を伺うことができる。したがって、当段階の年代を相野窯跡群が操業される9世紀後半以降と位置付けたい。

第3段階—甕Cの段階

まず体部が球形に近くなり、次段階の鍋の形態に近くなる。また、体部外面の整形技法として、タタキ整形が本格的に導入される。52(挿図86)は、まさに鍋になる直前形態を示すものといえよう。ただし、口縁部の形態がわずかに内湾傾向である点が、鍋との違いを示している。また、甕Cのなかに、タタキの方向が水平方向のものと、若干斜め方向のものが認められるが、後者の方はわずかに古い傾向を示しているものと考えられる。つまり、縦方向のタタキから水平方向のタタキへの移行状況を示しているものと考えられる。

なお、井根口遺跡⁽²⁷⁾柱穴(SP6)出土の甕は、より鍋に近い傾向をもつものと判断され、口縁部において外方へのつまみだしが認められる。

第4段階—鍋の段階

当段階で鍋が成立する。当段階の鍋については、一部で「丹波型鍋」と称される⁽²⁸⁾ように、

丹波・三田地域を中心に多く出土が認められる。これらの出土資料から12世紀末～13世紀初頭と位置付けられる。

(3) 小結

以上、甕から鍋の変化を4段階にわけてみてきた。大きくは、第1段階、第2・3段階、第4段階の3つに分けることができる。第1段階は古代的な様相を残す純粋な甕の段階、第2・3段階は甕から鍋への移行段階、第4段階は鍋の成立段階といえよう。特に第2・3段階については、バラエティーに富み、個体差が目立つ。これは、第2段階における須恵器工人との技術交流を受けて、煮沸具の定形化への模索段階とみることができる。そして、第4段階において、鍋として定形化するものと考えられる。

ところで、甕Cについては、鍋とは呼称せず、甕としてあつかつてきた。しかし、両者を区別することは大変困難である。今後、甕と鍋の違いについては、その使用方法をもとにして検討していく余地があろう。

4. 黒色土器・瓦器について

(1) はじめに

当遺跡の所在する丹波地域の瓦器についての研究では、山本三郎による堀ノ内遺跡及び岩崎遺跡出土の瓦器の資料紹介⁽²⁹⁾が最初のものとして指摘できる。そして橋本久和は、この資料および他の多紀郡内の出土資料をもとに、「丹波型」の設定を行い、畿内中央部とは異なる地域色をもった瓦器の存在を指摘している⁽³⁰⁾。これを受けて、伊野近富らは亀岡盆地における瓦器の分類・編年を試み、「丹波型」にも3タイプ存在することを明らかにしている⁽³¹⁾。そしてこの背景として、丹波地域のなかにもいくつかの生産地が存在するのではないかと指摘している。

以後、瓦器について積極的に論じられたものは少なく、伊野近富が大内城跡（福知山市）の報告⁽³²⁾で、平田博幸が多利遺跡群（氷上郡）の報告⁽³³⁾で、それぞれ分類・編年を行っている程度である。

また、丹波地域を中心とした黒色土器については、西日本全域にわたって考察した森 隆の研究⁽³⁴⁾においても、実態が明らかでない地域の一つとなっている。一方当地域に隣接する丹後地域では、比較的研究が進んでおり、当地域出土の黒色土器にも当該地域との類似が認められることから注目される。まず、いち早く当該地域の黒色土器についてまとめたのが高橋美久二⁽³⁵⁾であり、続いて杉原和雄の研究⁽³⁶⁾がある。両氏とも、当該地域の黒色土器は畿内とは形態を異にするものであり、須恵器碗の形態と類似から須恵器工人との関係に注目されている。近年では竹原一彦が両氏の研究を受けて、総括的に分類・編年を行っている⁽³⁷⁾。

ところで、先に挙げた「丹波型瓦器椀」の発端となった堀ノ内遺跡であるが、その位置を検討すると、ほかでもない当初田館跡にあたる。つまり、「丹波型瓦器」の基準となった資料は、今回報告した当遺跡の表採資料であったことになる。そしてこのような「丹波型瓦器」発祥の地で、残存状況の良好な多くの瓦器を得ることができた。したがって、「丹波型瓦器」の再検討を行う上で良好な資料と考えられる。また、瓦器より層位的に下層から黒色土器の出土も確認している。

さらに、瓦器と黒色土器との関係については、橋本久和が指摘した⁽³⁸⁾ように、これまで積極的に論じられることはなかった。この点においても、当遺跡出土の黒色土器・瓦器は、資料的価値の高いものと考えられる。そこで以下、①黒色土器の年代観・地域性の検討、②瓦器の年代観・地域性の検討、③黒色土器と瓦器の関係、の順に検討を加えていくことにしたい。

(2) 黒色土器の検討

当遺跡出土の黒色土器は、椀Aと椀Bとに大きくわけることができる。

椀Aは、その形態・内外面のミガキなどの特徴から畿内中央部にみられる黒色土器B類椀と考えられる。当該地域の黒色土器については、橋本久和⁽³⁹⁾をはじめ、近年では森 隆⁽⁴⁰⁾が検討をおこなっている。これによると、当遺跡出土の黒色土器椀Aは、橋本編年によるとIb期(11世紀前半)に位置付けられている。森 隆もほぼ同様の年代観を示している。

椀Bについては、底部を回転糸切りにより切り離し、平高台を呈する点が特徴である。このようなタイプの黒色土器椀は、一見したところ丹後地方に多く認められるものと類似する。

当該地方の黒色土器についてまとめた竹原一彦⁽⁴¹⁾によると、10世紀末から13世紀前半まで存続し、大きく4段階に区分されている。そして第1段階から第4段階へは、内外面のミガキの疎略化・器高指数の低下・平高台から平底への変化を、主要な変化として捉えている。これによると、当遺跡出土の黒色土器椀Bとは細部の形態などにおいて若干異なるものの、椀Baが第Ⅱ段階1型式(11世紀後半)に、Bbは第Ⅲ段階1型式(12世紀前半)に対応するものと考えられる。

しかし、当該地方の黒色土器の椀の大半は、内黒タイプのA類椀である。これに対して、当遺跡出土の黒色土器は全てB類椀である。したがって、当遺跡出土の黒色土器椀Bを無条件に丹後地方と結びつけることは危険である。

そこで注目されるのが、森 隆が丹後地方の黒色土器の分析において、その形態・技法が須恵器工人の系譜をひくものであるとの指摘⁽⁴²⁾である。このような観点から黒色土器椀Bをみると、椀Baについては神出古窯址群における森田編年の第Ⅶ期第1段階の須恵器椀に、椀Bbについては同編年の第Ⅶ期第2段階の須恵器椀に、それぞれ類似することがわかる。以上の観点からより具体的な年代を求めると、椀Baが11世紀中頃～11世紀後半、椀Bbが12世紀前半に

位置付けられるものと考えられる。また、148（挿図93）は、この両者の中間形態として位置付けられる。

以上のことから、椀A→椀Ba→椀Bbと変化するものといえる。つまり、11世紀の前半に畿内地域から黒色土器の直接的な導入があり、11世紀後半以降、畿内からの直接的な影響を受けず、地域性を顕在化させた形で根付いていったものといえよう。

ところで椀BのB類椀については、丹波・三塚遺跡⁽⁴³⁾、東奥1号墳⁽⁴⁴⁾、多利遺跡群⁽⁴⁵⁾など丹波地方に少なからずその分布が認められる。また、やや南へ下るが、北摂にあたる三田盆地の対中遺跡⁽⁴⁶⁾、川除・藤ノ木遺跡⁽⁴⁷⁾などにおいてもその出土が認められる。これらの出土遺跡の年代を検討すると、川除・藤ノ木遺跡では11世紀後半、他遺跡では12世紀前半から中頃に位置付けられている。

以上のことから、当遺跡に代表されるような椀Bbは、丹波から北摂地域まで分布することが明らかとなった。現在のところその出土点数は少ないが、他地域からの搬入と考えるのではなく、当該地域におけるひとつの型式として理解できるのではないかと考えたい。

（3）瓦器の検討

当遺跡出土の瓦器については椀と小皿が出土しているが、出土量が多い椀を中心に進めていくことにする。

まず、山本三郎が紹介した堀ノ内遺跡出土の瓦器椀（以下、紹介資料）と、今回報告する瓦器椀との比較・検討をおこなってみたい。ただし、紹介資料を実見することができなかつたため、実測図による比較であることを断っておく。

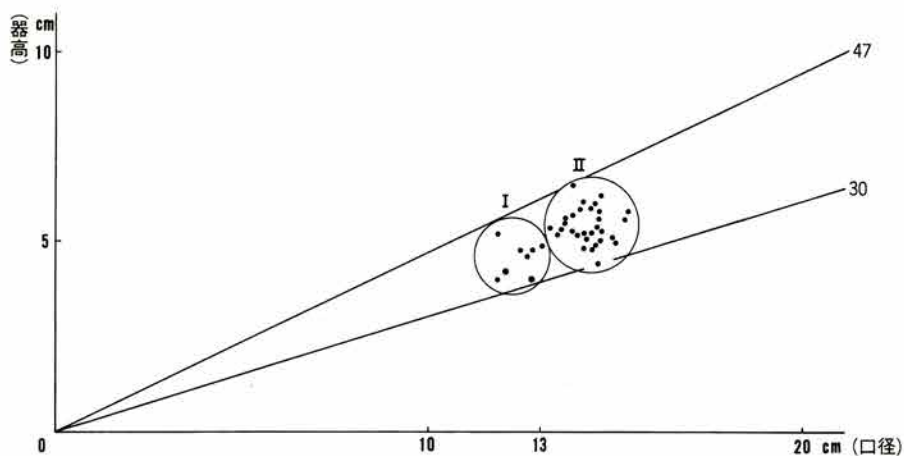
紹介資料では、4個体の瓦器椀について紹介されている。このうち、1個体は底部のみであるため、比較・検討対象となるのは3個体である。これら3個体に認められる特徴は、今回報告した椀Bに対応するものである。したがって、橋本久和によって「丹波型」とされた瓦器椀は、当遺跡の椀Bに分類したものであることになる。以上のことを前提として、当遺跡出土の瓦器椀について検討していくことにする。

ところで瓦器の編年的研究において、その編年の基準となっているのは、①内外面のミガキ調整の粗雑化、②高台の矮小化、③法量の変化などである。そこで、当遺跡出土の瓦器椀について、以上の各基準ごとに検討を加えていきたい。なお、他の編年・分類においてはあまり重視されていない口縁部のナデ調整についても、検討基準に付け加えたい。

①内外面のミガキについて

当遺跡出土の瓦器椀は、内外面にミガキを施す椀Aと内面のみにミガキを施す椀Bの2タイプが出土している。

椀Aについては、内面のミガキは比較的丁寧な、かつ密に施されている。一方外面について



挿図175 瓦器碗の法量

は、内面に比べてかなり粗くなっている。ただし、245（挿図99）のように碗Aのなかでも比較的多くのミガキを施すもの（ミガキa）と、247（挿図99）のように数条程度のもの（ミガキc）まで個体差が認められる。このミガキの単位は内外面とも同じである。

碗Bについては、内面のミガキにおいて、当遺跡出土の碗のなかで最も密に磨かれているものを基準とすると、密なもの（ミガキa）、粗いもの（ミガキc）、ミガキaとcの中間のもの（ミガキb）の3タイプに分類できる。

②高台の形態について

碗A・碗Bの区別に関係なく、断面逆三角形を呈するものが大半を占める。他は逆台形ないしそれに近い形態をなす。いずれも高台高は3～5mmと全体的に低い傾向にある。

③法量について

法量を明らかにできる瓦器碗全てを対象にその分布を表したのが、挿図175である。

これをみると、瓦器碗は全体的に器高指数30～47の間に分布する。この指数の分布度数をみると、37・38を中心とした標準分布をなす。これは、紹介資料の器高指数と一致する。さらに、碗Aと碗Bとに分けてみると、碗Aは37～39に集中する。碗Bについては、碗全体の分布と同じである。

このように器高指数からみると、明確なグルーピングはできない。しかし、口径および器高の大きさ自体をみると、口径12.5cm前後（I）と口径13.5～14.5cm（II）の2グループに分けることができる。

④口縁部のナデ調整について

当遺跡出土の瓦器碗は、碗A・碗Bの区別なく、口縁部に強いナデ調整を加えている。この

ナデ調整については、1段のみ施すもの、2段にわたって施すもの、3段にわたって施すものの3タイプが認められる。2段のナデが最も多く、3段のナデ、1段のナデと続く。

以上4つの基準についてみてきた。各基準において認められたバリエーションを組み合わせると以下ようになる。(表21)

まず外面のミガキの有無を基準に、椀Aと椀Bとに大きく分類できる。

椀Aについては、外面のミガキが粗いもの(ミガキc)とやや密なもの(ミガキa)とが出土しているが、前者の土器については断面形が逆台形を呈する。前者を椀Ac、後者を椀Aaと呼ぶことにする。ただし、法量および口縁部のナデ調整には明確な差は認められない。瓦器一般に認められる変化傾向を参考にすると、椀Aa→椀Acと変化するものと考えられる。

次に椀Bについてみてみたい。口縁部のナデ調整が2段のもの3段のものがあるが、3段のものはミガキaの土器に限られる。また1段のものは2個体のみであるが、全てミガキcの土器である。2段のものについては、ミガキa・b・cそれぞれと対応する。次に高台の断面形であるが、逆台形のはミガキaに限られる。逆三角形のものは、ミガキa・b・cそれぞれと対応する。最後に法量に注目すると、Iグループに分類されるものは、ミガキcに限られる。これに対して、法量IIグループに分類されるものは、ミガキaとbに対応する。

以上のことから、椀Bについては、互いの重複はあるものの次の3タイプに分類できる。

①内面のミガキが密でかなり丁寧(ミガキa)。高台の断面形は逆台形ないし逆三角形。口縁部は2段ないし3段のナデ。法量はIIグループ。

②内面のミガキがやや粗い(ミガキb)。高台の断面形は逆三角形に限られる。口縁部のナデは2段のナデに限られる。法量はIIグループ。

③内面のミガキは粗い(ミガキc)。高台の断面形は逆三角形に限られる。口縁部のナデは2段ないし1段のナデ。法量はIグループ。

このように、①と③が両極に、そして②が両者の中間に位置付けられる。以後、①を椀Ba、②を椀Bb、③を椀Bcと言い換える。伊野近富等の編年案⁽⁴⁶⁾によると、椀Ba→椀Bb→椀Bcと変化するものと考えられる。

以上椀Aおよび椀Bについて、編年基準となる要素の組合せから、椀Aが2タイプに、椀Bが3タイプにと計5タイプに分類できることが明らかとなった。そこで、これら5タイプについての年代的検討をおこないたい。

まず椀Aと椀Bとでは、他の編年案を参照にすると、椀Aの方が古く位置付けられる。亀岡盆地における編年⁽⁴⁶⁾によると、椀Aは12世紀後半に位置付けられ、椀Bについては13世紀から出現するようである。当遺跡の近辺では、年代を特定できるような良好な資料は管見の限り見当たらない。このなかで、報告されている資料としては、同じ多紀郡内に位置する板井・寺ヶ谷遺跡建物跡5出土資料⁽⁴⁶⁾が参考となる。当該遺構は、Ⅲ期(12C末～13C初頭)に位置付け

られているが、当該資料のなかに椀Acと同じタイプの資料が出土している。ただし共伴資料をみると、13世紀代までは下らないものと考えられる。したがって、大きな傾向としては、亀岡盆地で認められた傾向が、多紀郡内においても当てはまるものと考えられる。また、大内城跡の編年⁽⁶⁰⁾においても、椀Aと同タイプの椀がIV期（12世紀末～13世紀初頭）に位置付けられている。よって、椀Aを12世紀後半、椀Baを13世紀前半と位置付けたい。また、椀Bcについては、大内城跡の編年のV期、亀岡盆地における編年のII-2期に対応し、それぞれ13世紀中頃と考えられている。したがって、椀Bcは13世紀中葉に位置付けられる。そして、椀Bbは椀Baと椀Bcの中間に位置付けられることから、13世紀前半～中葉に位置付けられるものと考えられる。なお椀Aについては、先に椀Aa→椀Acと変化する傾向が認められると指摘した。しかし、両型式の間にはどのくらいの時期差があるのかは明らかにできない。今後の課題とした。

次に、以上の年代観をもとに、当遺跡を中心とした瓦器椀の地域性については「丹波型瓦器」についての検討をおこなってみたい。特に、当遺跡で量的に最も多く出土している椀Bを中心にみていくことにする。

当遺跡出土の椀Bと同じ特徴を有するものは、多紀郡では板井・寺ヶ谷遺跡⁽⁶¹⁾、西木ノ部遺跡⁽⁶²⁾などから出土している。この他、氷上郡では国領遺跡⁽⁶³⁾、河津館址⁽⁶⁴⁾、東奥1号墳⁽⁶⁵⁾においても、同じ特徴を有する瓦器椀の出土が報告されている。この他、京都丹波にあたる大内城跡などにおいても同タイプの椀の出土が認められる⁽⁶⁶⁾。

この一方で、上記と同じ地域内あるいは同じ遺跡内においても、西木ノ部遺跡、多利遺跡群、丹波三ツ塚遺跡などにおいては、初田館跡出土の椀Bと特徴を異にする椀が出土している。これらの遺跡出土の資料は、口縁部を1段ないし2段のナデ調整する点は共通しているが、口縁部は肥厚せず、端面をなすようなナデ調整は認められない。

このように、同じ地域内においても、少なくとも2タイプは存在することは明らかである。したがって、橋本久和が掘ノ内遺跡（初田館跡）表採資料をもとに、「丹波型」と命名した瓦器椀は、丹波地域出土の全ての瓦器椀を特徴付けるものでないことは明らかである。これは、先に紹介したように伊野近富が亀岡盆地において3タイプが認められるとの指摘⁽⁶⁰⁾と一致する。つまり、以前においては「丹波型」と一口にいわれてきたが、丹波地域内においても、幾つかの特徴を異にした瓦器椀が存在することは明らかである。

以上の特徴は、出土資料は少ないが椀Aについてもいえる。まず西木ノ部遺跡においては、口縁部が肥厚せず端部を薄く仕上げるものが出土している⁽⁶¹⁾。内面見込みの暗文も、螺旋状に施す点は当遺跡出土の瓦器椀と異なる。この他、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり口縁端部を薄く仕上げる多利遺跡群出土の瓦器椀⁽⁶²⁾も、また特徴を異にする。これらの特徴は、先にみた椀Bと平行する時期のそれぞれのタイプにつながるものと考えられる。

さらにもう少し古く位置付けられる資料として、東奥第1号墳⁽⁶⁵⁾及び丹波三ツ塚遺跡⁽⁶⁶⁾出土資料にみられる底部を糸切りにより切り離すタイプも認められる。

このように、少なくとも、12世紀中頃からは、同じ丹波地域内においていくつかのタイプが存在することは明らかといえよう。

ところで、橋本久和は「丹波型」の系譜について、北摂地方との関係でとらえている⁽⁶⁵⁾。そこで、最後に当該地域の瓦器碗との比較・検討を行ってみたい。

まず、能勢地域では広瀬和雄らによって当該期の土器がまとめられている⁽⁶⁶⁾。これによると、初田館跡で最も古く位置付けられた碗Aと同タイプの碗の出土が認められる。資料数が少ないため推測の域をでないが、少なくとも12世紀後半においては、能勢地域と丹波地域とでは共通するタイプの瓦器碗が存在するものといえよう。したがって、この段階より一段階古い時期の瓦器が注目される。ここで、参考となるのが、ほぼ12世紀前半と位置付けられている三田市対中遺跡溝4出土の瓦器碗⁽⁶⁷⁾である。断定はできないが、いわゆる「和泉型」に分類されるものと考えられる。また、ほぼ当時期に位置付けられている川除・藤ノ木遺跡出土⁽⁶⁸⁾の瓦器碗のなかにも和泉型および楠葉型と考えられる碗の出土が認められる。

以上のことから、12世紀前半には畿内型の瓦器碗が少なくとも北摂地域にもたらされており、続く12世紀中葉頃に地域性を顕在化させていったものといえよう。ただし、12世紀後半に位置付けられる川除・藤ノ木遺跡出土の瓦器碗は、初田館出土の碗Aとは特徴を異にする。また13世紀初頭と考えられる十倉遺跡⁽⁶⁹⁾井戸1出土の瓦器碗も、見込みに格子状の暗文が施されているように、初田館出土の瓦器碗とはまた異なる特徴を示している。このように、地域性については多様に展開していったものと考えたい。この具体的な展開については今後の課題としたい。

最後に、小皿について触れておきたい。小皿は碗に比べて出土量が少ないが、内面にミガキを施すもの(皿A)と施さないもの(皿B)の2タイプに分類できる。皿Aは量的にわずかである。

時期的な位置付けであるが、皿と碗の良好な共伴資料に欠く。しかし、ミガキの粗雑化傾向を考慮に入れると、皿Aは碗Aと、皿Bは碗Bと対応するものと考えたい。より具体的なことについては、今後の資料の増加をまちたい。

(4) 小結

最後に、黒色土器と瓦器の関係について触れて、まとめとしたい。

これまでの検討結果からすると、黒色土器碗A(11世紀前半)→黒色土器碗Ba(11世紀中頃～後半)→黒色土器碗Bb(12世紀前半)→瓦器碗A(12世紀後半)→瓦器碗Ba(13世紀前半)→瓦器碗Bb(13世紀前半～中葉)→瓦器碗Bc(13世紀中葉)と変化することが明らかと

なった。したがって、当地域においては、おおよそ12世紀中葉頃に黒色土器から瓦器へと変化するものと言えよう。ただし、この時期つまり黒色土器碗Bbと瓦器碗Aとの間に位置付けられる資料を欠く。このため、黒色土器から瓦器への具体的な変化を捉えることはできない。今後の課題と言えよう。

特に12世紀中葉頃は、北摂地域の瓦器碗に畿内型から在地型への変換がなされたようである。したがってこの時期は、北摂地域から丹波地域にかけて、黒色土器から瓦器への変化と瓦器の畿内型から在地型への変化が複雑に絡み合っているものと推測される。今後、当地域における当該期の資料に注目したい。

5. まとめ

以上の検討結果を踏まえて、平安～鎌倉時代の土器様式の復元を試みたい。これまで検討してきた器種のなかで比較的型式変化を追うことができ、それぞれの編年観が確立しつつある碗形態の土器を中心に段階設定をすることにする。具体的には、黒色土器・瓦器・須恵器の碗を対象とし、それぞれの碗に対応する他の器種を当てはめていくことにする。

まず黒色土器と瓦器については、前述したとおりである。この諸段階に須恵器碗をあてはめてみたい。まず碗Aについては、上記の諸段階よりも古く位置付けられる。碗Bについても同様である。碗Cについても上記の諸段階より古く位置付けられるが、碗A・碗Bよりも新しく位置付けられ、碗Cbは碗Caよりさらに新しく位置付けられる。碗Dbについては、碗Caと同じ段階に位置付けられる。碗Daについては碗Cbとほぼ同じ時期に位置付けられる。碗Eについては、黒色土器碗Baと同じ段階に位置付けられる。碗Fについては、碗Faが黒色土器碗Bbと、碗Fbが瓦器碗Aと、碗Fcが瓦器碗Baとそれぞれ同じ段階に位置付けられる。

以上をまとめると以下の9段階を設定することができ、以下の器種が対応する。そして主な器種についてまとめたのが、挿図171～174である。

第1期（9世紀後半）－須恵器碗A・碗B

土師器の杯Aa・皿D・甕A・鉢B・甗、須恵器の蓋・杯Aa・杯Abが対応する。

第2期（10世紀前半）－須恵器碗Ca・碗Db

土師器の碗Aと須恵器の甕Aが対応する。

第3期（10世紀後半）－須恵器碗Cb・碗Da

土師器の碗A・碗B・羽釜A、須恵器の壺Aが対応する。ただし、須恵器の壺Aについては、当該期のなかでは比較的古く位置付けられるものとする。

第4期（11世紀前半）－黒色土器碗A









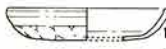
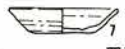
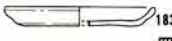



土師器の甕Baが対応する。

	黑色土器椀	瓦器椀	小皿	杯・椀	蓋・椀・小皿
900				71 杯Aa 78 杯Ab	83 蓋 84 椀A
1000				89 椀Db 94 椀Da	86 椀Ca 87 椀Cb
1100	138 黒Aa 145 黒Ba 148 黒Bb			109 椀Ec 92 椀Ea	
1200	146 黒Bb			218 椀Fa 223 椀Fb	
		244 瓦A	239 瓦小皿A		369 小皿
		283 瓦Ba	236 瓦小皿B	217 椀Fc	
		281 瓦Bc			

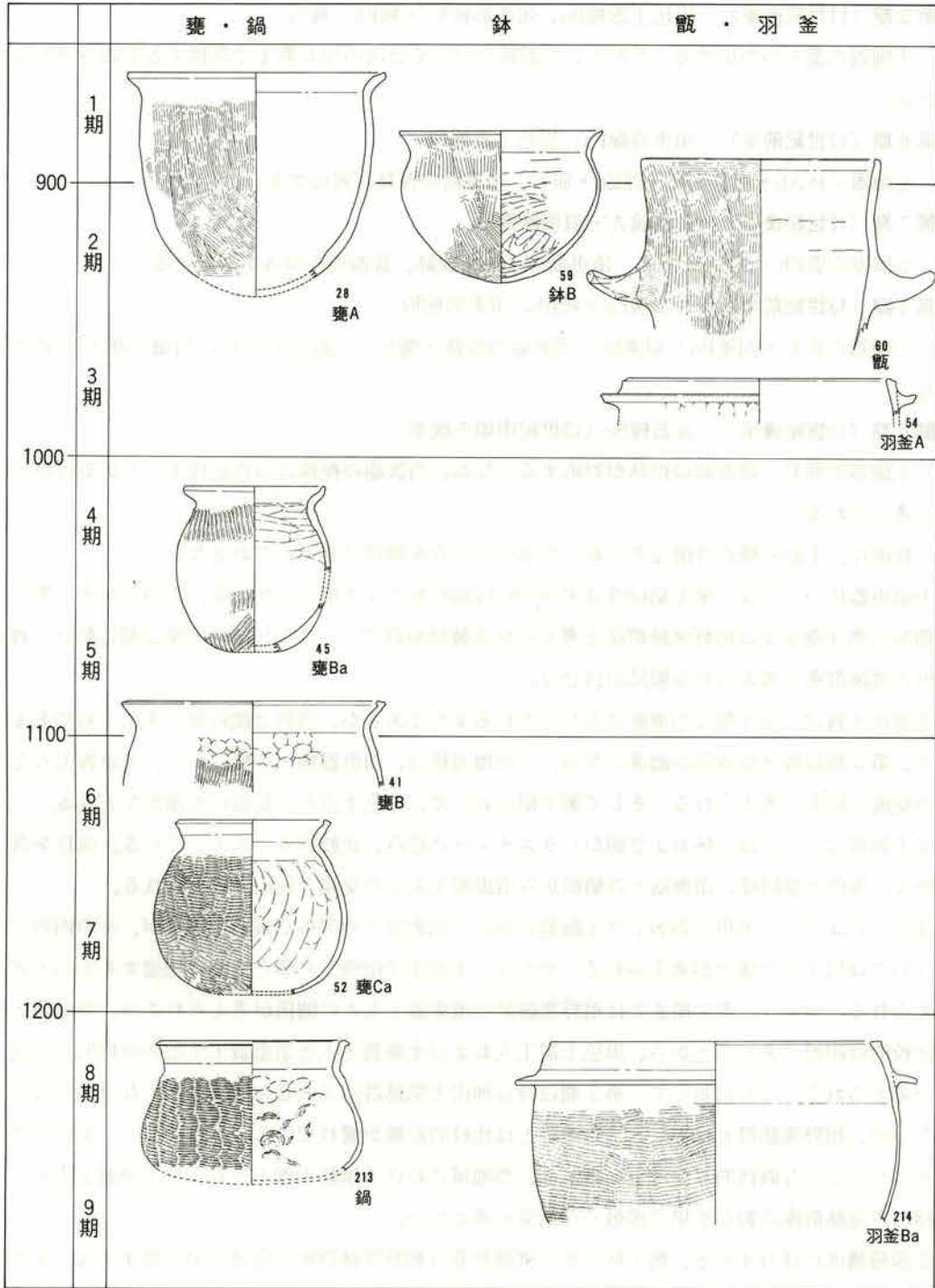
挿図176 平安～鎌倉時代土器の変遷案（1）

		椀	鉢	壺	甕
900	1期				
	2期				
1000	3期				
	4期				
1100	5期				
	6期				
1200	7期				
	8期				
9期					

挿図177 平安～鎌倉時代土器の変遷案(2)

		杯	椀	托	皿	
900	1期	 13 杯Aa			 8 皿D	
	2期		 16 椀C			
1000	3期		 15 椀A	 17 椀B		
	4期					
1100	5期					
	6期	 11 杯Ab	 22 椀D	 23 托	 179 皿Ea	 7 皿B
1200	7期				 183 皿Eb	 4 皿Aa
	8期				 163 皿C	
	9期				 339 皿F	

挿図178 平安～鎌倉時代土器の変遷案（3）



挿図179 平安～鎌倉時代土器の変遷案(4)

第5期（11世紀後半）－黒色土器碗Ba、須恵器碗Ea・碗Eb・碗Ec

土師器の甕Bが対応する。ただし、当器種については次の第6期まで存続するものと考えられる。

第6期（12世紀前半）－須恵器碗Fa、黒色土器碗Bb

土師器の杯Ab・碗D・托・皿Ea・皿B、須恵器の捏鉢が対応する。

第7期（12世紀後半）－瓦器碗A・須恵器碗Fb

土師器の皿Eb・皿Aa・甕Ca、須恵器の小皿・捏鉢、瓦器の小皿Aが対応する。

第8期（13世紀前半）－瓦器碗Ba・碗Bb、須恵器碗Fc

土師器の皿C・羽釜Ba・羽釜Bb、須恵器の捏鉢・甕B、瓦器の小皿B、白磁の碗が対応する。

第9期（13世紀後半）－瓦器碗Bc（13世紀中頃～後半）

土師器の皿F、須恵器の捏鉢が対応する。なお、当該期の捏鉢は14世紀代まで下がる可能性も考えられる。

最後に、上記の様式の復元をとおして気付いた点を簡単にまとめておきたい。

①須恵器については、第4期以外はすべての時期にわたって出土している。このなかで、第1期から第3期までは相野窯跡群産と考えられる製品が目立つ。これに対して第5期以降は、神出古窯跡群産と考えられる製品が目立つ。

②黒色土器は、第4期に当遺跡にもたらされるようであるが、当初は畿内型の黒色土器であるが、第5期以降は地方色が顕著になる。この地方色は、須恵器碗との類似から、須恵器工人との交流の結果と考えられる。そして第7期において、黒色土器から瓦器に変換がなされる。

③土師器については、杯および碗がバラエティーに富み、比較的多く出土している。皿Dを含めて、黒色土器同様、須恵器との類似から須恵器工人との交流の結果と考えられる。

④以上のように、黒色土器および土師器において須恵器との関係が顕著であるが、その内容については以下の2通りが考えられる。それは、上記①で指摘した事と密接に関連するものと考えられる。つまり、第3期までは相野窯跡群の須恵器工人との関係が考えられるが、当遺跡と比較的近距离にあることから、黒色土器工人および土師器工人と須恵器工人との直接的な交流が考えられる。これに対して、第5期以降は神出古窯跡群の工人との関係を考えなければならないが、相野窯跡群とは異なり、当遺跡とは比較的距離が離れている。したがって、上記で考えられたような直接的な交流というより、当地域における黒色土器工人および土師器工人が、神出古窯跡群産の製品を単に模倣した結果と考えたい。

⑤器種構成に注目すると、碗・杯・皿の供膳形態は相野窯跡群産が顕著な第3期までは、須恵器が土師器よりも量的に多い。また神出古窯跡群産が搬入される第5期以降においても、当初（第5期～第7期）は須恵器が圧倒的で、黒色土器の占める割合は少ない。これに対して第8

期以降は瓦器が圧倒的となり、須恵器は少ない。

この他、比較的遠隔地からもたらされたと考えられる器種は、灰釉陶器と白磁碗それぞれ1個体のみである。したがって、当遺跡出土の土器は、各時期をとおして、比較的近距離ないし中距離から入手したものであるといえよう。特に、輸入陶磁器がわずか1点しか出土していない点については、他の同時期の遺跡と比較して極端に少ないといえよう。

- 註 (1) 平良泰久・奥村清一郎・伊野近富「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財調査概要1980-3』京都府教育委員会 1980
伊野近富「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集 第1集』(叻京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- (2) 深井明比古ほか『対中』(兵庫県文化財調査報告書第60冊)兵庫県教育委員会 1988
- (3) 前掲(1)
- (4) 岡崎正雄他『相野窯跡群発掘調査報告書』(兵庫県文化財発掘調査報告書 第115冊)兵庫県教育委員会 1992
以下、当該窯跡群に関する記述は当報告による。
- (5) 前掲(1)
- (6) 前掲(2)
- (7) 山田清朝ほか『川除・藤ノ木遺跡発掘調査報告書』(兵庫県文化財発掘調査報告書 第104冊)兵庫県教育委員会 1992
- (8) 前掲(7)
- (9) 前掲(7)
- (10) 前掲(7)
- (11) 寺島孝一・鋤柄俊夫ほか『魚住古窯跡群発掘調査報告書-中尾土地区画整理事業に伴う-』明石市教育委員会・平安博物館 1985
- (12) 前掲(11)
- (13) 山下史朗ほか『小犬丸遺跡Ⅱ 県道龍野相生線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(兵庫県文化財調査報告 第66冊)兵庫県教育委員会 1989
- (14) 前田佳久「上池遺跡」『昭和61年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1989
- (15) 吉田 昇「貝谷窯跡」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』(兵庫県文化財調査報告書 第62冊)兵庫県教育委員会 1988
- (16) 小川真理子「稜碗の研究-西播磨を中心として-」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会 1990
- (17) 池田正男「竜円寺遺跡」『昭和55年度 兵庫県埋蔵文化財調査年報』兵庫県教育委員会 1982
- (18) 兵庫県教育委員会平田博幸の教示による。
- (19) 西口圭介「溝ノ尾遺跡(AW-71)」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』(兵庫県文化財調査報告書 第62冊)兵庫県教育委員会 1988

- (20) 岡崎研一ほか『京都府遺跡調査報告書 第11冊 篠窯跡群Ⅱ』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- (21) 森田 稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986
- (22) 岸本一郎・森下大輔「東播北部古窯址群の基礎資料－西脇市南部及び加東郡北部に分布する奈良・平安時代の窯址群－」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会 1990
- (23) 前掲(20)
- (24) 前掲(1)
- (25) 大村敬通・水口富夫『魚住古窯跡群』(兵庫県文化財調査報告書 第19冊) 兵庫県教育委員会 1983
- (26) 平尾政幸ほか『平安京三条三坊』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1990
- (27) 河野克人「井根口遺跡」『上小野原地区圃場整備事業に伴う発掘調査概要報告書』(今田町文化財調査報告 第1集) 今田町教育委員会 1991
- (28) 伊野近富「考察」『京都府遺跡調査報告書 第3冊 大内城跡』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984
- (29) 山本三郎「丹波出土の瓦器について(1)」『兵庫考古』第4号 1976
- (30) 橋本久和「瓦器碗の地域色と分布」『上牧遺跡発掘調査報告書』(高槻市文化財調査報告書 第13冊) 高槻市教育委員会 1980
- (31) 石井清司・引原茂治・伊野近富「亀岡盆地出土の瓦器について」『京都考古』第37号 1985
- (32) 前掲(28)
- (33) 平田博幸「多利遺跡群出土の瓦器について」『多利遺跡群発掘調査報告 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(VII)』(兵庫県埋蔵文化財調査報告書第46冊) 兵庫県教育委員会 1987
- (34) 森 隆「西日本の黒色土器生産」『考古学研究』第37巻第2号～4号 1990～1991
高橋美久二「歴史時代の遺物」『林遺跡発掘調査報告書』(網野町文化財調査報告第1集) 京都府網野町教育委員会 1977
- (36) 杉原和雄「丹後地方の黒色土器について」『中上司遺跡発掘調査報告書』(京都府加悦町文化財調査報告 第2集) 加悦町教育委員会 1979
- (37) 竹原一彦「丹後における黒色土器について」『京都府埋蔵文化財論集 第1集－創立五周年記念誌－』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987
- (38) 橋本久和「大阪北部の古代後期・中世土器様相」『高槻市文化財年報－昭和63・平成元年度－』高槻市教育委員会 1991
- (39) 前掲(38)
- (40) 前掲(34)
- (41) 前掲(37)
- (42) 前掲(34)

- (43) 和田晴吾「出土の遺物」『丹波三ツ塚遺跡 II 昭和48・49年度発掘調査概報』丹波三ツ塚遺跡発掘調査団 1975
- (44) 喜谷美宣・真野 修『柏原町東奥第1号墳・拳田古墳発掘調査報告書』（兵庫県文化財調査報告書 第10冊）兵庫県教育委員会 1973
- (45) 前掲（33）
- (46) 前掲（2）
- (47) 前掲（7）
- (48) 前掲（28）・（31）
- (49) 市橋重喜「大山荘周辺地域の遺跡」『丹波大山荘現況調査報告書Ⅲ』西紀・丹南町教育委員会 1987
- (50) 前掲（28）
- (51) 前掲（49）
- (52) 兵庫県教育委員会村上泰樹の教示による。
- (53) 村上泰樹「中世遺構面の調査」『国領遺跡発掘調査報告書（蓮町・井森杉・石風呂地区の調査）』（兵庫県文化財調査報告 第93冊）兵庫県教育委員会 1991
- (54) 村上泰樹「調査の成果 出土遺物」『河津館址－近畿自動車道舞鶴線に伴う埋蔵文化財調査報告書（Ⅵ）』（兵庫県文化財調査報告 第43冊）兵庫県教育委員会 1987
- (55) 前掲（44）
- (56) 前掲（28）
- (57) 兵庫県教育委員会村上泰樹の教示による。
- (58) 前掲（33）
- (59) 前掲（43）
- (60) 前掲（31）
- (61) 村上泰樹「西木ノ部遺跡B地点（No.32地点）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県教育委員会 1985
- (62) 前掲（33）
- (63) 前掲（44）
- (64) 前掲（43）
- (65) 前掲（30）
- (66) 福田英人「古代・中世土器の研究－瓦器」『能勢町における埋蔵文化財の調査1－大阪府能勢町所在塩山7号墳・姫墓遺跡の発掘調査と古代・中世土器の研究－』能勢埋蔵文化財研究会・能勢町教育委員会 1985
- (67) 前掲（2）
- (68) 前掲（7）
- (69) 山上雅弘・畠中 剛「十倉散布地」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会 1988

第3節 室町時代の土器について

遺構別の土器組成を改めて検討し、遺構間の時間幅について地元産の土師器、丹波焼と遠隔地の備前焼、瀬戸・美濃焼、大和の瓦器、そして輸入陶磁器からくる年代観などを考えて見ることにする。併せて供膳具、調理具、貯蔵具、その他の組成について一部言及する。

南堀では、土師器皿は法量から小皿B(1)、中皿C(12)、大皿E(12)のⅡ類のセットがあり、丹波焼は播鉢(23)、捏鉢(26)と甕(29)があり、備前焼は壺(28)1点、瀬戸・美濃焼は灰釉小皿(17)、中皿(18)と丸碗(19)と鉄釉耳付水注(29)があり、輸入陶磁器・中国産磁器は青花皿(C1)、青花碗(C2,C3)と白磁皿(C7)と青磁碗(C8)が出土している。土師器皿は天文年間の特徴を示している。丹波焼も16世紀前半までを示し、備前焼も15世紀後半代から16世紀初頭を示し、瀬戸・美濃焼も大窯Ⅰ期で15世紀後半代から16世紀初頭を示し、中国産磁器は青花碗雲文等に16世紀後半代の破片が混じるが蓮子碗等は16世紀前半を示し、総じて16世紀前半代の土器が多い。この南堀では紀年銘木簡の転読札が出土しており、天文15年(1546)と読める史料で初田館跡に近い年代と考えており、南堀出土土器はこの時期を示している。一方、供膳具として皿(土師器、瀬戸・美濃焼、中国産磁器)、碗(瀬戸美濃焼、中国産磁器)があり、調理具として鉢(丹波焼)がある。また貯蔵具として甕(丹波焼)、壺(備前焼)がある。この組成が初田館跡の一般的な傾向である。

北堀では、土師器播鉢(39)と丹波焼甕(52)と備前焼徳利(40)、甕(42)と瀬戸・美濃焼灰釉小皿2点(30,32)、中皿2点(37,38)と中国産磁器は青花皿(C9)、青花碗(C10)が出土している。北堀出土土器は南堀出土土器に比べ丹波焼、備前焼は下がるが、瀬戸・美濃焼、中国産磁器は同時期を示している。一方、供膳具として皿は瀬戸・美濃焼、中国産磁器のみで、徳利は備前焼が現れる。逆に調理具として播鉢は土師器のみである。貯蔵具として甕は丹波焼、備前焼がある。

東堀では、土師器皿は法量から小皿B(56,58)、大皿E(57)のⅡ類であり、丹波焼は甕(60)、備前焼は甕(61)があり、瀬戸・美濃焼灰釉碗(C13)(青磁写し細蓮弁碗)がある。甕はいずれも15世紀代をしめす。一方、供膳具として皿は土師器、碗は瀬戸・美濃焼のみである。調理具は無く、貯蔵具として甕は丹波焼、備前焼がある。

井戸2では、土師器皿は法量から小皿A(62)、小皿B(63)、大皿E(80)がある。丹波焼は播鉢(67,68)があり、瀬戸・美濃焼は灰釉小皿(65)、そして中国産磁器青磁碗(C66)がある。一方、供膳具として皿は土師器、瀬戸・美濃焼、碗は中国産磁器となる。調理具は丹波焼のみで、貯蔵具は無い。

井戸3では、備前焼徳利(69)1点のみが出土している。

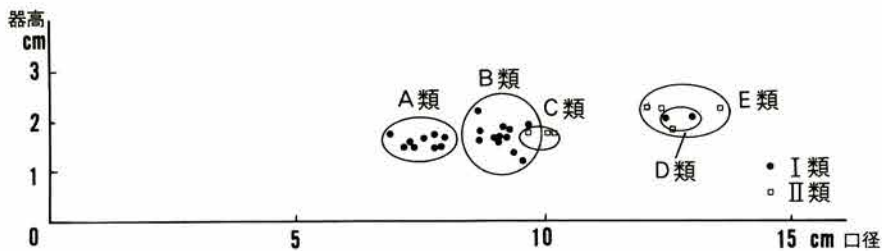
池2では、土師器皿は法量から小皿A(77~79)、丹波焼は播鉢(84)、瀬戸・美濃焼天目碗

(81)がある。天目碗は大窯Ⅱ期でやや下がるが他に大窯Ⅰ期の天目碗もあり、池2は時間幅がある。供膳具として皿は土師器、碗は瀬戸・美濃焼、徳利は備前焼がある。調理具は丹波焼があり、貯蔵具は無い。

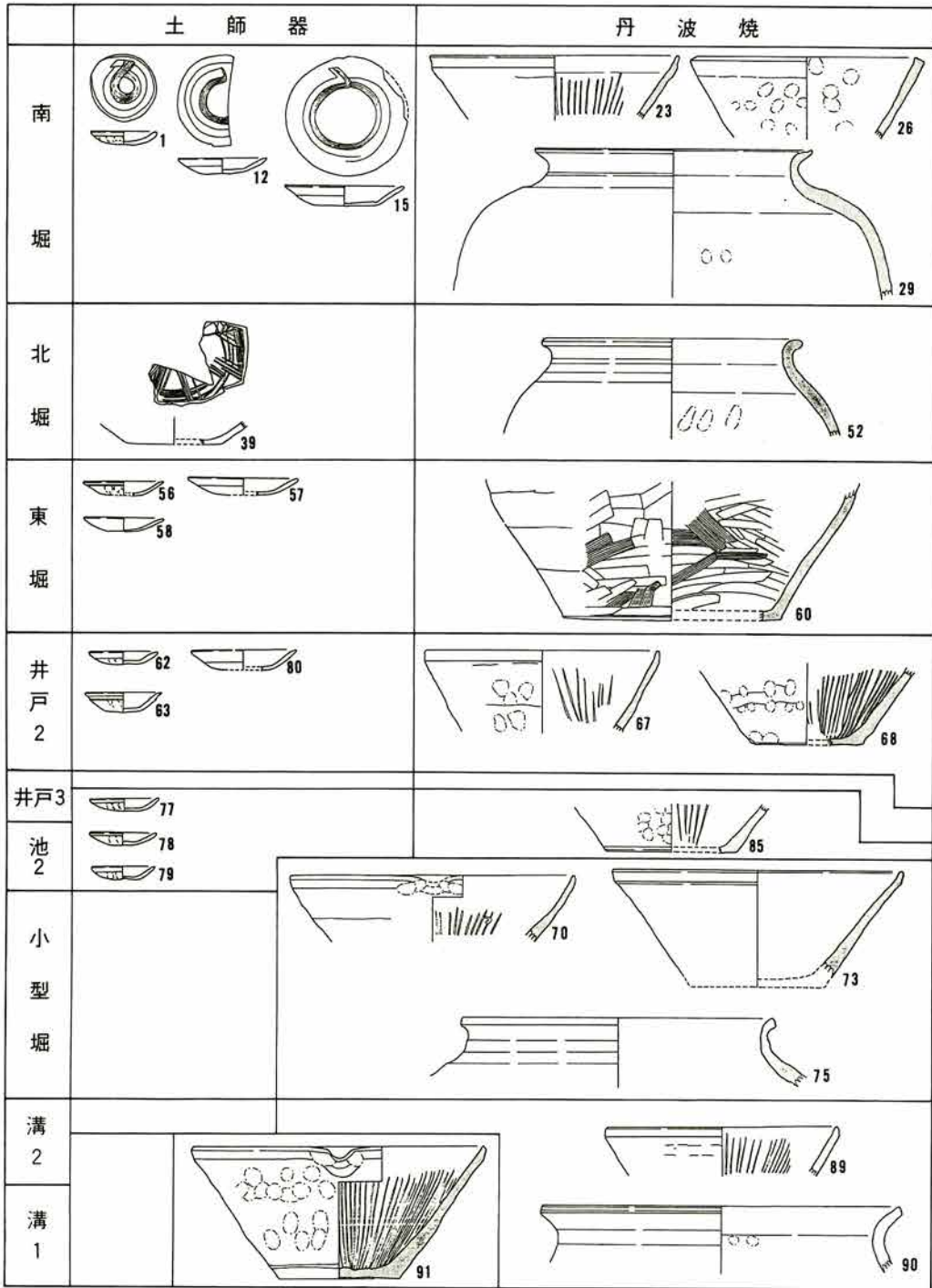
小型堀では、丹波焼は播鉢(70)、捏鉢(73)と甕(75)がある。また、中国産磁器は青花碗(C15, C16)がある。青花碗(C15)は饅頭心で天正年間に下がり後の混じりと考えるが、C16も16世紀後半に下がり、初田館跡ではやや遅くまで残る遺構である。一方、供膳具として碗は中国産磁器、調理具・貯蔵具は丹波焼である。

溝1・溝2からいずれも丹波焼播鉢(91)・(89)と甕(90)があるが組成とはならない。

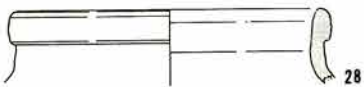
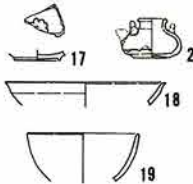
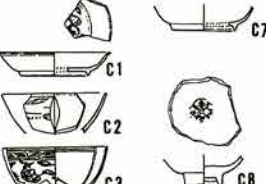
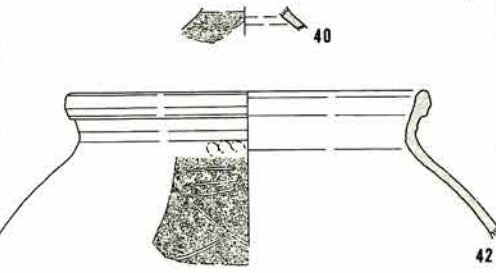
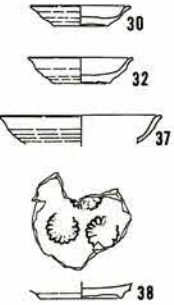
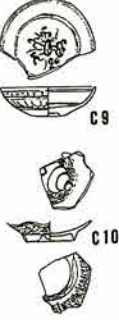
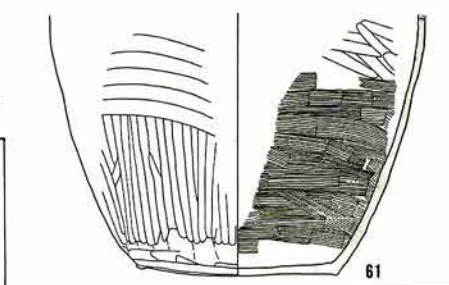



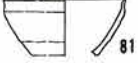




以上、室町時代の土器を遺構別に組成と時間幅の検討をしてきたが、Ⅰ期として土壙7・東堀出土土器群(室町時代前半の15世紀代)、Ⅱ期として南堀出土土器群(室町時代後半の15世紀から16世紀前半代)、Ⅲ期として北堀・井戸2・井戸3・溝1・溝2出土土器群(室町時代後半の16世紀前半代)、Ⅳ期として小型堀出土土器群(室町時代後半の16世紀前半から16世紀後半代)の4期区分が考えられる。Ⅱ期・Ⅲ期は天文15年(1546)を下限に近い時期を考えている。また、土器組成からは供膳具は地元産が主体となり、用途に応じて遠隔地から運ばれた瀬戸・美濃焼と輸入中国産磁器が補完している。調理具・貯蔵具は丹波焼が主体となり備前焼が補完し、特殊な用途(卸皿等)は瀬戸・美濃焼を用いる。



挿図180 室町時代土師器皿の法量



挿図181 室町時代の土器集成図

備 前 焼	瀬戸・美濃焼	中国産磁器
 <p>28</p>	 <p>17 20 18 19</p>	 <p>C7 C1 C2 C3 C8 C8</p>
 <p>40 42</p>	 <p>30 32 37 38 38</p>	 <p>C9 C9 C10 C10 C13</p>
 <p>61</p>	 <p>65</p>	 <p>C66</p>
 <p>69 69</p>	 <p>81</p>	 <p>C15</p>
 <p>84</p>	 <p>C16</p>	 <p>C16</p>

第4節 初田館跡の遺構変遷について

1. はじめに

武庫川源流の田松川流域では、庄境古墳群から中世初田館跡の発掘調査を進めてきた。

今回、初田館跡において古墳時代から江戸時代にかけての複合する遺構を調査し、それぞれ遺構・遺物について各章で述べてきた。ここでは初田館跡の遺構変遷について検討する。

2. 古墳時代後期集落（挿図182）

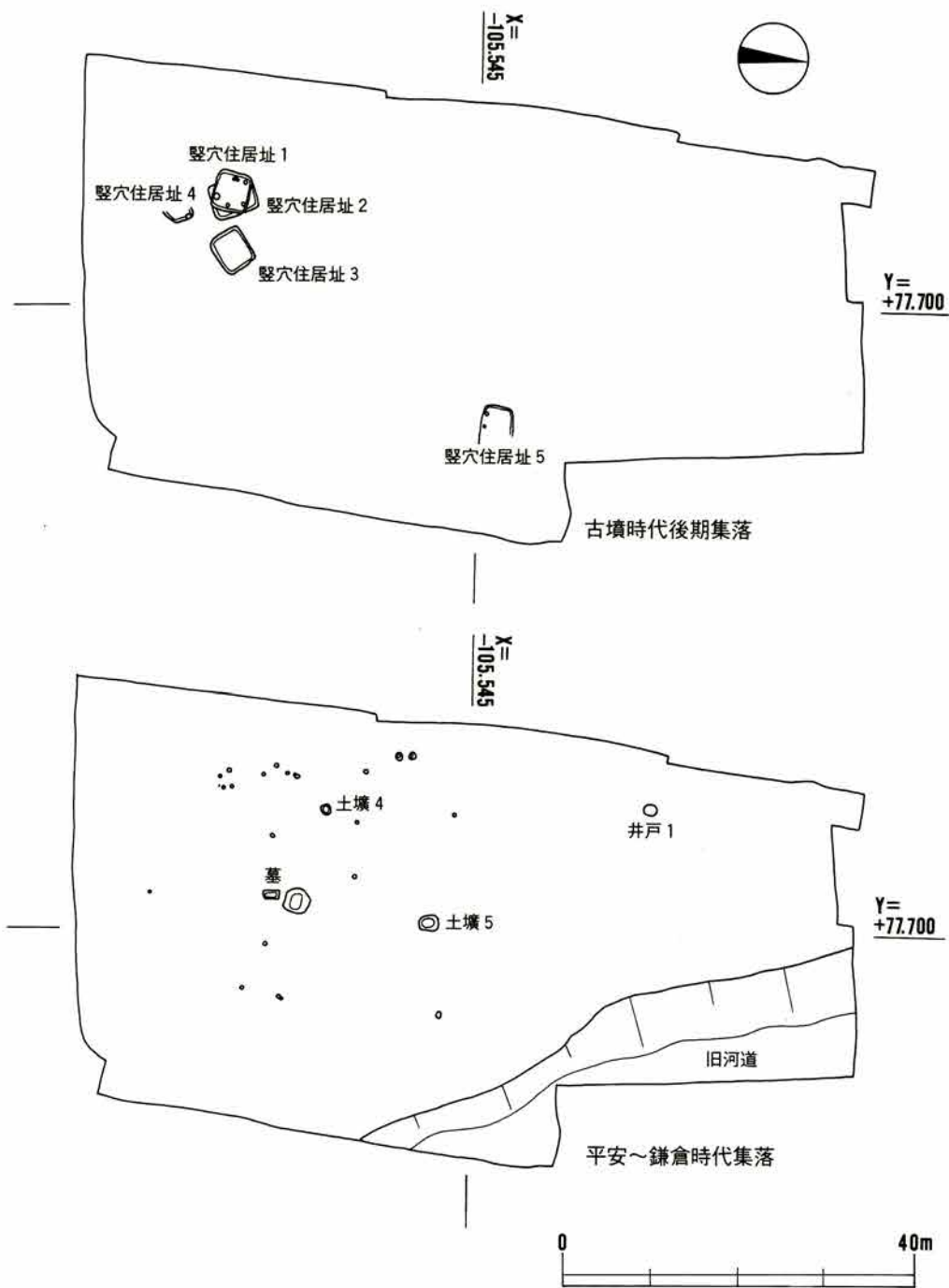
初田館跡の周辺では稲隅遺跡で弥生時代の石剣や又ヶ田坪遺跡で石斧の発見があり、古墳時代後期の庄境古墳群1・2号墳で円墳（横穴式石室）を発掘調査しているが、集落については調査が進んでいなかった。今回、初田館跡下層から古墳時代後期5棟の竪穴住居址が発見されている。田松川が形成された微高地が安定し、初田の地に人々が安定して集落を築いたのは5世紀末であった。竪穴住居址群の検討から竪穴住居址2・竪穴住居址3→竪穴住居址4→竪穴住居址1（竪穴住居址5）と変遷し、6世紀前半へと続く。少なくとも5世紀末に竪穴住居址2・竪穴住居址3の2棟以上で集落を形成しており、6世紀前半の竪穴住居址1では石造竈を西壁際に作り付けており、竈の発現ではやや他地域とは遅れるが貴重な発見となる。後世の特に近畿自動車道建設用地確保後の機械による攪乱と中世の遺構による攪乱で著しく破壊を受けており、集落の一部を復元するに止まっている。

3. 平安時代～鎌倉時代集落（挿図183）

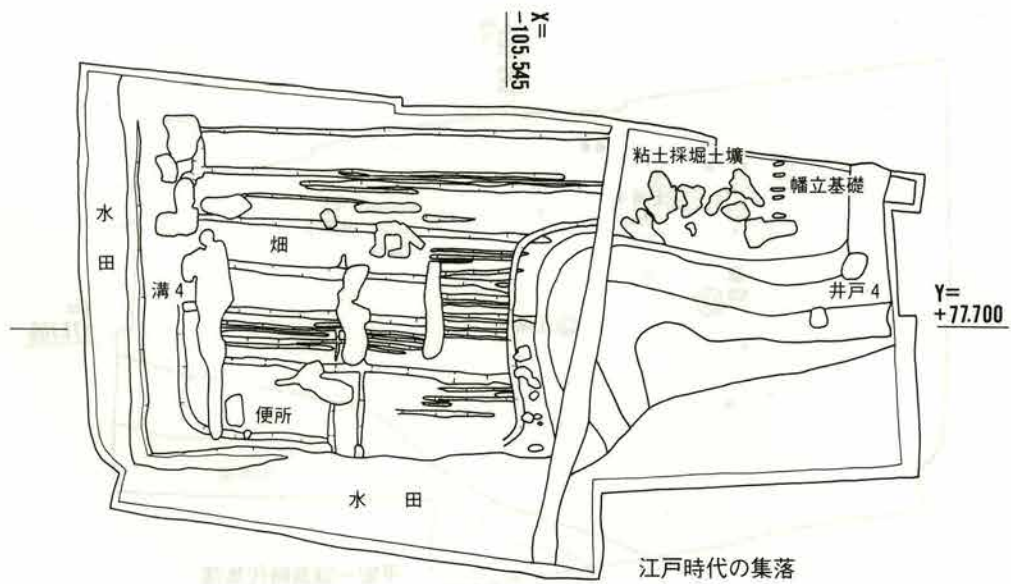
集落の構造を明らかにする遺構は墓1、井戸1、土壇3～6、掘立柱建物の柱穴群と旧河道のみで詳しくは不明である。遺物の分析から第1期（9世紀後半）から第9期（13世紀後半）まで9期に区分している。墓1、井戸1とも第8期（13世紀前半）に属し、鎌倉時代の墓制や呪術祭祀について資料を提示するに止まる。一方、旧河道では豊富な木製品とともに大量の土器群が出土しており、丹波（多紀郡）地域の基準資料となりうる。鎌倉時代承久の乱後、酒井政親が主殿保・犬甘保の地頭・公文職に任ぜられていることと、初田が犬甘保の範囲に入る事などからも重要な資料となるが、初田の遺構を歴史的に評価することは控えておく。

4. 室町時代の初田館跡（挿図183）

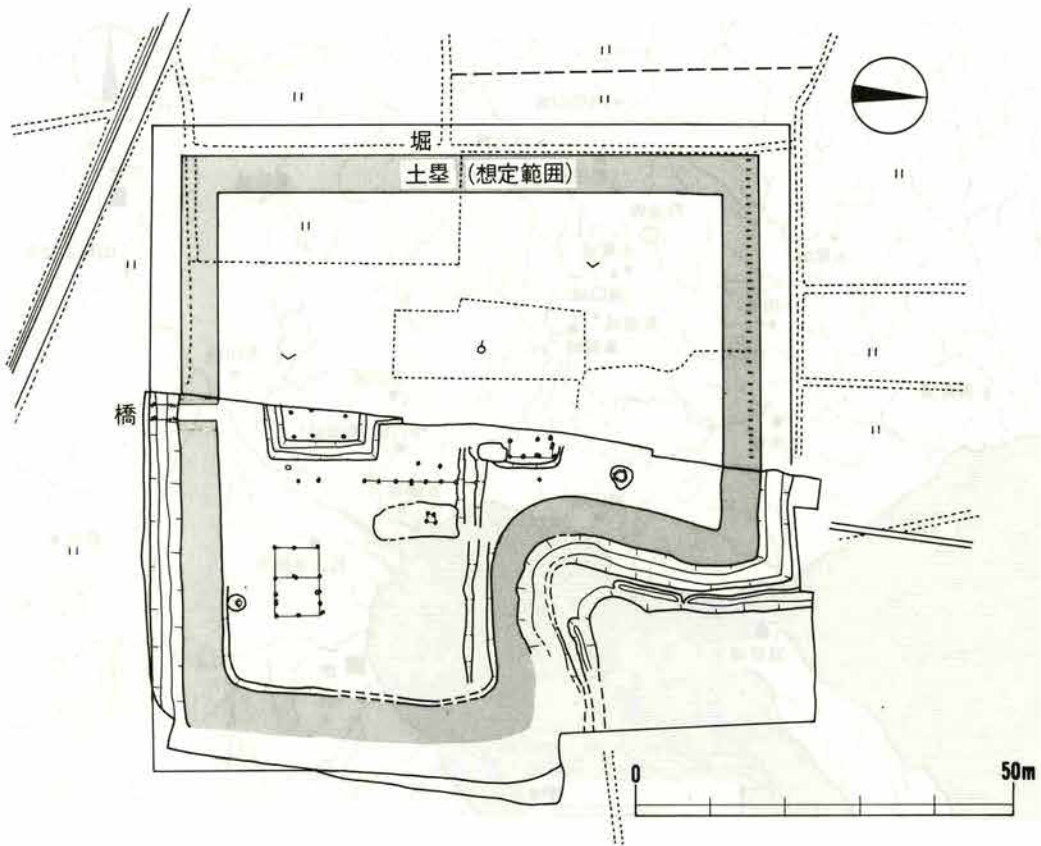
確認調査終了時点から日本道路公団との調査地区の線引きについて種々協議を重ねて、本調査を開始しているが、『丹波志』記載事項や確認調査で述べられているように初田館跡は二重堀構造をもつものかなど、中世城館跡に対する視点が一部欠落していたと考えている。



挿図182 初田館跡遺構変遷図 I



挿図183 初田館跡遺構変遷図II



挿図184 初田館跡遺構図

初田館跡遺構変遷図Ⅱに示すように、堀で囲まれる館跡であることは復元できるが堀幅も調査区の限定から完全に把握出来ず（調査後に少し拡張して調査したが）、二重堀の存在の有無は判らず、豊富な資料を包含する旧河道と東堀の調査も十分に行えなかった。

初田館跡は堀と土塁で囲まれており、中に堀と相似形のような小型堀で囲まれた地区が、南堀中央の橋の正面に位置する。東に井戸3と建物1と柵で仕切られた池2があり、北は溝1・2で区画されている。北は井戸2と建物2が池1と溝3に囲まれている。旧河道はほぼ埋まっていた。館内の構造については次節で詳しく述べられるので省くが、西隣の未調査部分を含め、取り合えず館を復元出来る（挿図184）。また、室町時代前半の遺物群もあるが、初田館跡は15世紀末には機能しており天文15年(1546)を中心に天文年間を通じ、存続していたことが判る（表10 初田館跡関係年表参照）。

ここで、中尾城跡・初田館跡の調査を経験して土器類の消費・流通形態と周辺の城館の在り方を検討してみる必要性があるが、ここでは調査をした天文年間を中心とする初田館跡周辺城

表10 初田館跡関係年表

時代	和暦（西暦）	丹波国の事項	初田館跡の事項
古墳時代			後期集落形成
平安時代	康和4年（1104）	丹波大山荘 立券坪付 「米光保」	「僧義」の墨書き
	養和2年（1181）	平宗盛が丹波国総管となる	「米光」の墨書き
鎌倉時代	建久3年（1192） 承久3年（1221）	源頼朝征夷大將軍となる。 承久の乱 酒井政親が主殿保・犬甘保の地頭・公文職を与えられる。	木棺墓 井戸・呪符木簡
	建治2年（1276） 元弘3年（1333）	「山野用水」宮田荘預所と大山荘地頭との対立 足利尊氏篠村八幡宮社頭で六波羅攻め	酒井氏
室町時代	応仁3年（1467）	応仁の乱おこる。 波多野氏は石見の細川勝元に仕え勲功により細川政元のころ多紀郡をあてがわれる。	初田館 『天文15年』 転読札武運長久折
	永正5年（1509）	波多野元清が八上城を築城。	
	天文元年（1532）	畿内近国の一向一揆大蜂起。法華一揆連合軍山科本願寺を陥落。	
	天文2年（1533）	諸国悪疫流行、後奈良天皇「般若心経」を書写し、祈祷する。	
	天文12年（1543）	細川氏綱、管領職を望み細川晴元と堺に戦う。ポルトガル船、鉄砲を伝える。	
	天文15年（1546）	細川晴元ら丹波国に走る。	
	天文16年（1547）	細川晴元、丹波国より入京を計る。	
	天文19年（1550）	三好長慶・松永久秀が八上城を攻める。	
	弘治3年（1557）	松永久秀が八上城を落とす。	
	永禄6年（1564） 永禄9年（1566）	酒井氏が高仙寺に連名掟書と寄進。 波多野氏、旧城を奪回する。	
安土桃山時代	天正3年（1575）	明智光秀、丹波攻めを開始。	
	天正6年（1578）	八上城が落城する。	
	天正10年（1582）	酒井勘四郎近江で討ち死。	

第5節 初田館跡の構造について

(1) 館の復元

1. 館の規模

前述のように、今回調査を実施した遺構が、その記述内容と現地の地形や、酒井勘四郎を追悼した祠の存在から、『丹波志』にいう初田古館であることは疑いが無い。ここでは初田館跡について調査成果を総括し、多少の分析を行いたい。まず、個々の検討に入る前に館の規模と範囲について触れておきたい。調査は館の堀内部の東3/5について行った。館全体は堀の内側で南北77m、東西76m前後と考えられる。これは一町よりやや小さい規模である。そして、館の形状は北東隅にある入角部分が、旧河道を回避して内側に大きく入り込んでいる。このため館の平面形は方形ではなく「L」字形を呈している。

また、調査の結果と『丹波志』の記述には若干の相違が見られた。この相違についてまとめておきたい。相違点は以下の2点である。①館の存続時期、調査では16世紀前半に周囲を土塁・堀で囲った館となり、やはり16世紀前半の内に廃絶を迎えたことがわかったが、『丹波志』では館は天正年間まで継続したとなっている。②同書では初田館跡は方形の構造になるとしているが、前述のように北東がやや窪んだ「L」字形となっている。

また、田松川を外堀として利用したとしている点については、残念ながら外郭と呼ばれる範囲を調査区に含んでいないため、調査では根拠を得ることができなかった。今回の調査が土塁・堀囲いの内側に限定されたことが惜まれる。しかし、調査状況から館の周辺には、隸属する集落、そして墓地・耕作地などが前時代から継続して広がっていた可能性がある。これについては「4. 周辺の地形」の項で若干のことを後述する。

2. 各遺構について

以下、館（『丹波志』の内堀内をさす。）の各遺構の構造について、復元的に述べておきたい。なお、土塁については事実報告の中では述べていない。しかし、多くの根拠から存在が明らかである。従って根拠を示し、その規模について触れることとする。

土塁 土塁は図のスクリーントーンの幅前後で館周囲を巡っていたと考えられる。

土塁の存在を示すものとして以下のことが指摘できる。先ず調査前の状況からは、①館北辺にはこの部分のみに幅5mの横長の畑が段の上に見られたこと、②酒井神社の祀られた祠周辺が高さ40～50cmの土壇となっており、地元の人々から土塁跡と言いつづえられてきた。（但し、酒井神社の土壇の幅は土塁の想定している幅よりかなり広く、土塁の土を崩して広げたものと

考えられる。)などが挙げられる。

調査の結果からは、③館縁辺に巡る遺構の空白地帯、④近世の畑を区画した溝4が遺構の空白地帯と館内を分けるように存在することなどが挙げられる。これらに加えて周囲に堀が巡る構造から、土塁もこの堀に平行して巡っていたことは明らかである。

土塁の幅については南辺の堀肩と溝4の幅が4m、北端入角部の幅が5m以上であるところから4～5m程度と考えられる。

但し、井戸3は幅4mで土塁の際になることから、南辺については幅4m前後で間違いはないと思われる。南面が細く他の部分に基底幅の広い土塁があることは一般的ではないが、北東入角部の堀肩は明らかに館内側に湾曲しながら入り、北東隅のコーナーで膨らんで東辺に曲がっている。このことから、①入角部で土塁線が角度を持って曲がるものとすればコーナー部分が幅広くなる。②これに対して、土塁が堀に沿って湾曲して設けられていたと考えるならば、幅は南辺と同じでも良いこととなり、2者が考えられる。

復元では、同時期の溝1が直線で走り土塁に平行していたと考えられること。この部分の地盤が旧河道に近いことから崩れやすいと思われることなどから、土塁幅は広いのではないかと考えた。また、東辺の遺構は溝4と堀肩の幅が非常に接近している。これは溝4が土塁基底部を崩して拡がったためと考え、この幅を採用せず4m前後で復元した。

堀 堀については個々の遺構の報告で既に述べた通りである。北東辺の堀外にさらに浅い溝が沿っていることをここでは指摘するに止めたい。この堀の規模は16世紀前半の福田片岡遺跡⁽¹⁾(兵庫県竜野市)の4～5m前後、加茂遺跡⁽²⁾(兵庫県姫路市)の3～4m前後に近い規模で、土塁囲いの館としては一般的な幅である。

橋 橋は幅1間のものでこれに続く土塁開口部も1間で復元した。但し、『丹波志』は間を幅二間半としている。館の橋については痕跡なども含めると、加茂遺跡、長原遺跡⁽³⁾(大阪府大阪市)、柳之御所跡⁽⁴⁾(宮城県平泉町)等出土例がある。また、木橋の他に観音寺遺跡⁽⁵⁾(大阪府松原市)のように土橋で繋ぐものも見られる。

初田館跡の橋は橋脚を支える柱の他にこれを補強する柱がもう1本付くもので、地盤の悪いところでの橋の強度に注意を払っていた。

建物 掘立柱構造の建物を検出したが、礎石建物については検出できなかった。ただし、後述するように主屋が建つ空間に遺構が見られないことから、主屋については礎石構造であったことも考えられる。また、屋根は瓦の出土が見られないこと、堀内から檜の薄板が出土していることから板葺きないしは柿葺きであったと考えられる。

池 池は2箇所検出した。いずれも浅い土壌状の遺構として検出できたもので、石敷であったと考えられる。平面プランや庭園との関係については不明である。但し、池1は小規模なもので、後述するように屋敷境に接することから、会所などの水溜であったことも考えられる。

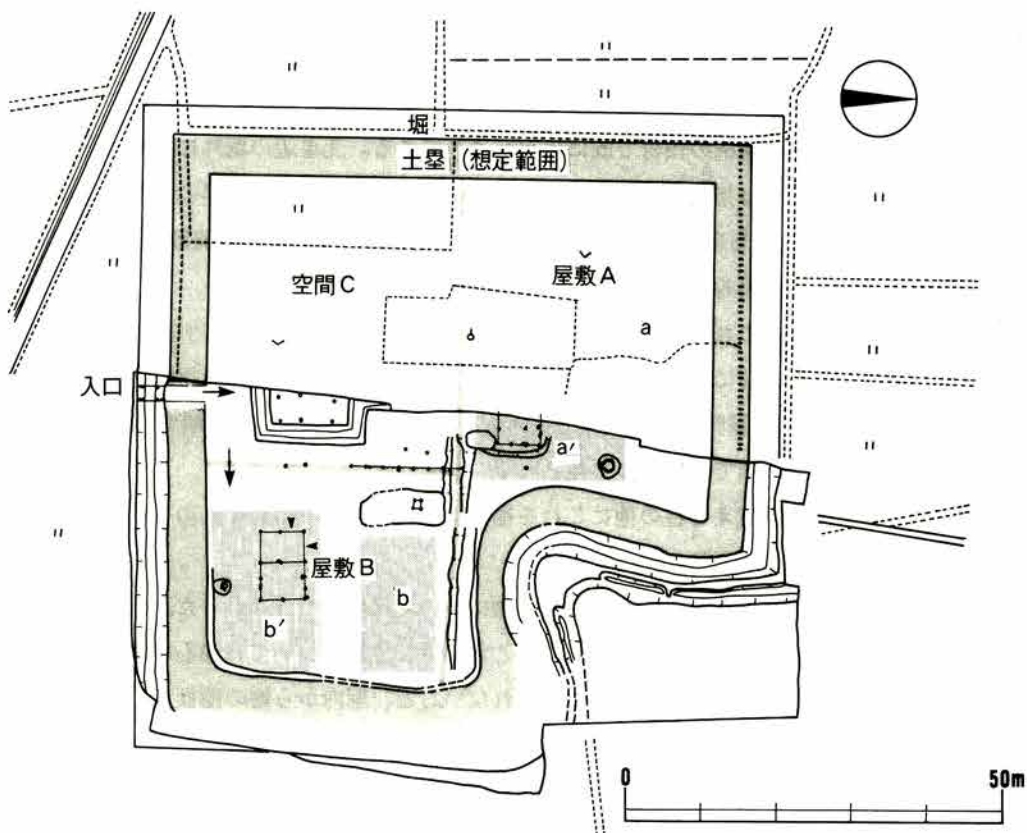
井戸 石組みの井戸2と、石組みと下部は桶を重ねた構造の井戸3の2基を検出した。いずれも土塁で館の隅と考えられるような所に位置している。

小型堀 検出範囲から想定すると、館の縮小したプランになる遺構である。全体が検出出来なかったことから、性格については結論付けられない。しかし、小型堀自体は別な意図で作られたとしても、館を利用する人間にとっては、入口から館内へ直進が不可能な構造である。従って、入口と深く関連をもった遺構と考えることが現時点では自然であろう。

3. 館内の配置と構造

次に館跡の構造を把握するため各区画について述べたい。

内部区画 館の南北の距離をちょうど2等分すると溝1と溝4の間にあたる。東西については小型堀の東辺が2等分した中央にあたる。従って、館の入口部分は中央から西に約7mずれた配置になる。つまり、館は北部分と南部分に大きく2等分され、南面に入口を有する構造と理解できる。また、南北の区画と柵1に区切られる部分から、館内には建物・井戸・池を各1箇



挿図186 初田館跡概念図

所以上保有し、土塁・柵などで囲まれた区画が2箇所復元できる。それぞれを屋敷A・屋敷Bとした。両者は規模から考えると一方が他方に従属するのではなく、それぞれが対等な規模を有していると考えられる。そして、規模・位置から屋敷Aが当主で、屋敷Bがこの一族の住まいと考えられる。個々の屋敷の範囲は屋敷Aが南北34m×東西37mで1260㎡前後、屋敷Bが南北32m×東西28m前後で900㎡前後の広さを有している。

この他、屋敷A・Bの他に小型堀から西に広がるCの部分が残る。大半が調査区外のため実態は不明であるが、やはり屋敷A・Bに匹敵する規模を有している。このためこの部分を仮に空間Cと呼ぶことにした。

また、区画には様々なものが用いられていることも興味もたれる。まず、外周を覆っている4～5m級の土塁・堀がある。この区画が最大のもので、その他には屋敷AとBの区画に、溝あるいは築地状の遺構・柵、入口の折れには小型の堀などが用いられている。これらの区画の仕方は重要度に合わせて嚴重差の度合いを使い分けたものと考えられる。

屋敷A 主の屋敷である。屋敷Aは区画の1部を検出したが調査区の限界から、全体を明確にするには至らなかった。未調査区が大半を占めるため明確な記述ができないが以下のことが考えられる。屋敷Aは溝1の北側にあって残り3辺を土塁で囲まれると考えられる。調査区内では建物2、井戸2、池1を有する。建物2と井戸2が近接している状況は、区画内での位置関係などを考えると、屋敷Bの建物1周辺の様子に類似するもので、同様の厨房空間と考えられる。屋敷Aの区画は西側にさらに異なる1画がないと仮定すれば南北34m、東西40mとやや東西に長い区画である。屋敷Bに比べると、南北はほぼ同じであるが、東西には一回り大きくなる。

屋敷B 屋敷内部について今回の調査で全体を観察できる唯一の屋敷である。東辺を柵1、北辺を溝1 あるいは土塁、南・東辺を土塁で囲まれるもので、区画内に建物1、井戸3、池2が存在している。

屋敷Bは内部への通路は明確ではないが、南側には柵の空白地があるので、このあたりを通路としていたことが予想される。建物1は裏側に井戸3を持ち、農家構造などと比較すると、玄関を北ないし西に向け、西側が土間になる構造と思われる。そして、建物1は間口の方向が北を向くもので構造から主屋とは考えにくく、副屋と考えられる。これに対して、建物1の北側、池2の東側に遺構の希薄な空間が見られる。位置から考えるとこの場所に母屋が存在したのではないだろうか。建物1周辺については井戸の存在から厨房空間を想定できる。

池2は溝4に接するもので、池内に建物3を建てる。池底は恐らく石敷と考えられる。庭園用の池と考えられるが、溝1・溝2が館中央を区画する築地などの雨落ち溝と思われることからこれらの水を溜める機能も果たしたと考えられる。

以上のことから屋敷の構成は、北側中央に母屋を配置し、西に池、南側に厨房空間あるいは

雑舎を有していた。また、池の存在から簡単な庭園を有していたとも考えられるが、池が西側に偏るところから寝殿造りなどに見られるような大規模な庭園は考えられない。

空間C さらに、調査区内には屋敷A・Bに入らない小型堀周辺から西側の地区がある。ここがどのように使用されたかについては、小型堀の様相が判明すれば今少し明確になると思われるが、詳細にはわからない。但し、この地区は西側を入れて考えても、小型堀の入ることを想定すれば、屋敷A・Bよりやや小規模になる。また、土塁・堀に囲まれた館の中が周囲と全く隔絶したものと考えられ、堀周囲に施設が広がらないという前提に立てば、この地区には屋敷以外の機能が想定される。つまり、厩、家人・所従の住居、作業小屋・雑舎などである。しかし、館外部にこれらの施設があれば屋敷である可能性も残される。

入口 入口は小型堀との関係を考えて、正面を入れて直進出来ないことが特徴である。右に曲がれば屋敷Aの屋敷地に進むか、小型堀と柵1の間の通路を抜けるかのコースが考えられる。左側については不明である。しかも小型堀は柱穴の検出から区画内に柵小屋を築いていたと考えられる。明らかに侵入者に対して、奥の屋敷を見透かされないことと、直進されないことを意識して設けられた施設である。

城郭の虎口の例からすると正面に障害物を置いて左右の何方かに曲って進む例はよく知られている。しかし、入口を複雑にするものは16世紀後半から一般的になるもので、初田館跡の段階では、どのようなものを想定してよいかは今後の課題としたい。

4. 周辺の地形

初田館は田松川と東に流れる旧河川の間に挟まれた微高地に立地する。この微高地は南北に長く延びるもので長さ600m、幅150mの広がりを持っている。微高地の頂上部は館内の北東付近にあって、館付近は微高地の中でも最も条件の良い場所である。

この微高地の上に館が単独で存在したのであろうか。『丹波志』に外郭の存在が指摘されていることはすでに述べた。この立地を考えれば、館跡が16世紀後半まで存続していれば外郭が田松川の範囲に広がり城塞化することも頷ける。また、例え館の範囲が広がらないとしても、土塁囲いの館周囲に従属する集落や屋敷が存在する可能性は充分ある。館とその周囲に集落や寺が検出される例は、16世紀後半の国人層の館跡周辺で被官屋敷群が検出された田村遺跡（高知県中村市）⁽⁶⁾・16世紀代の土豪層の館である植田市遺跡（大分県大分市）⁽⁷⁾・中世前期の領主屋敷である阿保境館跡（埼玉県児玉郡神川町）⁽⁸⁾など枚挙に暇がない。

初田館跡でも周囲には、南に初田散布地、北には和鏡を出土する地点が見られるなど中世遺跡の分布が知られる。微高地の広い範囲に遺跡が存在したことが窺え、初田館跡が単独で沖積地の中央に立地したのではない可能性がある。

さらに、初田館跡の存続期間であるが、16世紀前半以前の遺構の検出がある。鎌倉時代の墓・

柱穴・井戸そして旧河道から出土した遺物などである。また、15世紀段階では土塁の下に土壕(SE05)が検出されている。これらは館が土塁・堀囲いになる以前のものである。特に鎌倉時代の墓・井戸については武士階級の館に伴うとおおしくない内容を持っている。初田館跡が少なくとも鎌倉時代以降からなんらかの形態で存続していたことは疑いが無い。

そして、中世前半頃の武士の居館には一町四方以上の規模のものが散見されるが、その館と認識する空間の内部には、領主の住居空間・信仰空間・生産空間など多様なものが含まれている。この広域に囲まれた範囲が当時の「館」として認識されるのである。14～15世紀に普及する土塁・堀囲いの館はこの居住空間のみを囲ったものにすぎないという指摘すらある⁽⁹⁾。

この指摘を借りれば中世前期(鎌倉時代前後)の初田館跡でも広域にわたる堀ないし区画が周囲を囲い、居住空間－屋敷地－を中心に、諸遺構が粗放に点在した姿が予想される。

このようなことを考えると、今回の調査が館内部に限られたことは、検討の余地があった。そして、調査が行われなかった以上、館周囲の微高地に遺跡が広がったのか、そして従属する諸施設が見られたのか、あるいは全く何もなかったのかを検証することはできない。調査は未消化に終わったといわざるをえない。

5. 初田館跡の特徴

以上のように、館内部を復元的に考察してみたが、以下の特徴に要約できると思う。

- ①館は大きく3つの区画に分けられて利用された。
- ②館主の居宅を中心にして建物を配置するのではなく、独立した複数の館を内包するものであった。調査の範囲では少なくとも2つの屋敷A・Bが存在する。
- ③館の主の屋敷は、規模・位置から屋敷Aと考えられる。
- ④屋敷は建物・井戸・池などから構成され、大きく厨房空間と主の住居から構成される。
- ⑤空間Cについては、厩、家人・所従の住居、作業小屋・雑舎などが置かれたか屋敷として利用されたかは不明である。
- ⑥入り口は、館内に進入した後に折れを持つもので工夫が見られた。
- ⑦館は沖積地の微高地上に立地する。
- ⑧この微高地は館の南北に広がるもので、館外部に遺跡の存在が十分考えられた。

(2) 酒井氏と初田館跡

初田館跡の主である初田酒井氏については、享祿2年・4年に宮林殿(酒井惣領家)に当たった文書⁽¹⁰⁾に登場する酒井与太郎と、『高仙寺文書』の永祿7年条に初田菊夜叉丸の名が知られている⁽¹¹⁾。この他、地元の伝承や『丹波志』には初田館跡の館主として酒井勘四郎という名が登場する。『丹波志』では勘四郎は天正年間まで初田館跡の主として居住し波多野氏の滅亡後、

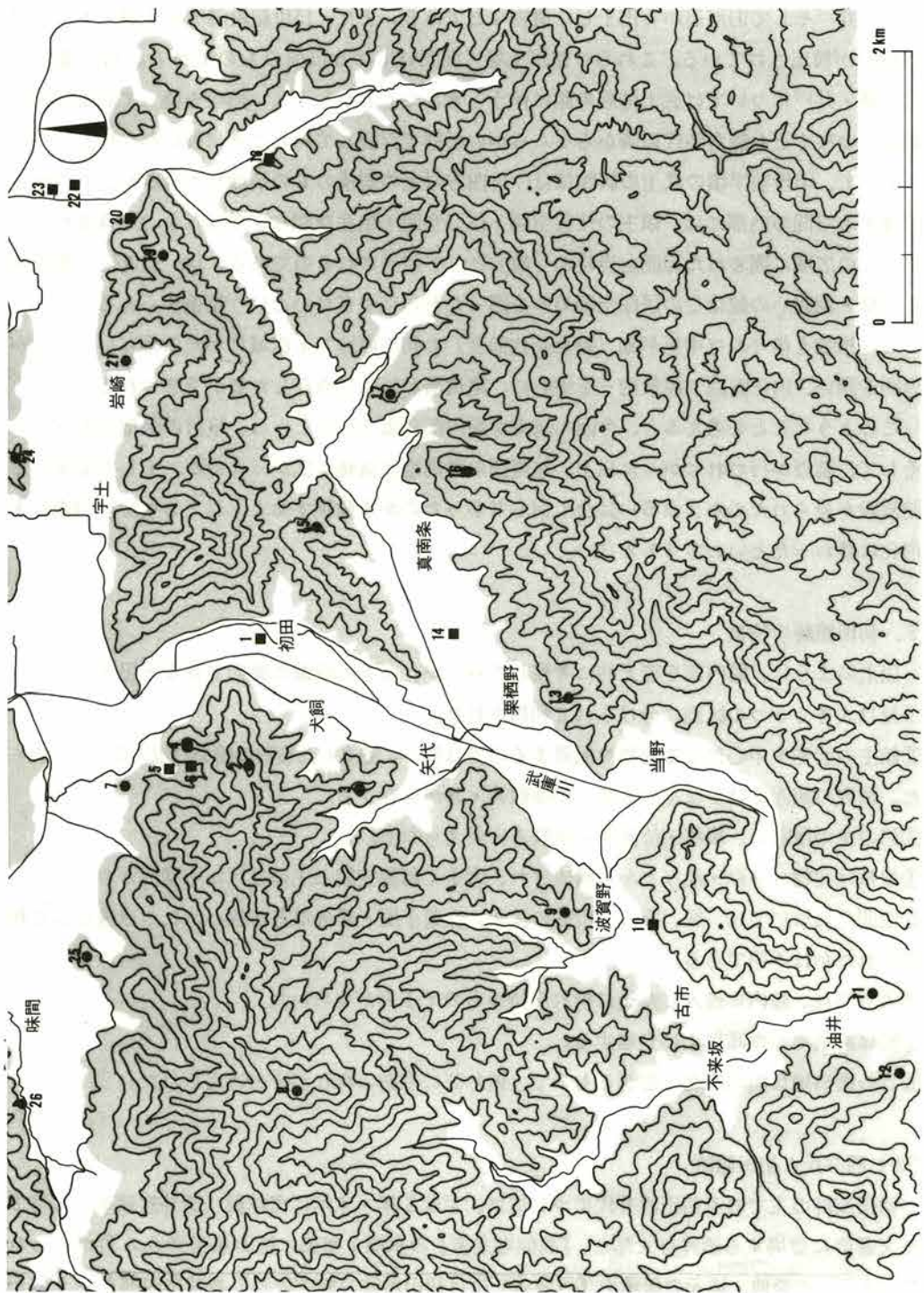


插图187 城館分布图

館を捨てたとしている。しかし、今回の調査から館は勘四郎の代には廃絶していることは先に述べたとおりである。

元来、酒井氏は関東を本貫の地とする鎌倉幕府の御家人であった。篠山盆地に移住するのは犬甘保・主殿保・油井保の3ヶ所に地頭職を得たのが始まりとされる。この範囲は旧の古市村全域にあたるが、同地域は江戸時代には酒井庄と呼ばれていた。この名称にも明らかなように、同氏と地元との繋がりは強く、現在も現地には酒井姓を名乗る家が多い。

酒井氏一族が居住した範囲は、篠山盆地の南西端に位置する武庫川上流域一帯である。南端は摂津との国境まで広がっている。北は初田館跡の北0.9kmの吹新にある庄境付近から、南は油井・小森などの範囲（範囲は挿図187参照）である。吹新から古市にかけては、長さ4.0km、幅0.5kmに渡って谷が直線的に広がる地形となっており、小盆地状の地形を呈している。そして、盆地状地形から派生して、栗栖野から東に分岐する谷に真南条地区、盆地状地形の下流に下ると、東に折れて当野地区がある。この範囲は、先の酒井荘という名称でも明らかなように、長く一地域として意識されていたようである。そして、先の三荘を手に入れたことで酒井氏はこの地域の開発に乗り出し徐々に耕地を広げたのではないと思われる。

当初、3ヶ所であった拠点も、室町時代には栗栖野・波賀野・古市などが登場し、地域内に分村が出現していることがわかる。

また、天正15年の『酒井荘内高帳写』⁽¹²⁾によると、この地域には矢代村・栗栖野村・犬飼村・波賀野村・不来坂村・古市村・油井村・遠野村が知られる。さらに現在の地区名ではこの他に、初田・真南条上・真南条中・真南条下が加わっている。

酒井氏の16世紀頃の位置づけについては、『波多野元清文書』の永禄5年（1562年）条⁽¹³⁾が注目される。これによれば、酒井惣領家である松鶴丸が、味間伊豆守という付近の土豪の人夫役の免除を願い出て許可されている。許可した相手は丹波多紀郡を領した波多野氏である。つまり酒井惣領家は波多野氏と直接の繋がりを持つ立場で、周囲の土豪と波多野氏の間位置する有力な立場にあることが窺われる。

但しこの時期、初田の酒井氏がどのような立場にあったかを示す資料は乏しい。そして、初田地区もまだ犬飼の中に含まれていたと考えられる。初田地区は先の資料でも明らかなように、天正15年以後に村として自立したことが窺える。しかし、初田という名称は、初田与太郎や初田菊夜叉丸の表記でも明らかなように既に戦国時代には存在している。このことについて、先程の『酒井荘内高帳写』が興味深い示唆を与えてくれる。同帳に記載された各村毎の石高を比較すると、矢代村（548.2石）・犬飼村（492.16石）・油井村（462.06石）の順になる。この中で、可耕地や立地から考えると、犬飼村の石高が大きいのが目立つ。これには対岸に位置する初田地区の石高が含まれていることが推定され、この時期の初田地区の状態を表すものとして注目される。

これを裏付けるものに大沢城の位置⁽⁴⁴⁾がある。この山城は初田館跡の詰城として伝承されているが、犬飼村の背後に位置している。そして、城郭の構造は小規模で周囲を小さな帯曲輪が囲むものである。恐らく16世紀後半に下るような遺構ではないと考えられる。これに対し初田の背後には山城がなく、初田が16世紀前半段階では犬飼の領域に含まれており、これが混同されて初田館跡の詰城という位置づけになったのではないだろうか。

一方、当館が存続した16世紀前半までの初田については、初田与太郎の存在から、既に領主的な有力者が存在したことは疑いが無い。但し、初田地区は未だに犬飼の中に内包されており、当館の主も犬飼の酒井氏の一人という立場ではなかったかと考えられる。

その後、先の永禄7年の『高仙寺文書』には署名の中に初田菊夜又丸の名が見え、犬飼を名乗る酒井氏は登場していない。このことから、彼が犬飼・初田の代表者として位置づけられていた可能性がある。これは初田が自立の動きを見せていた表れではないだろうか。しかし、初田館跡自身はこの時期まで存続しておらず、既に廃絶している。転読札の時期を最後に館は沖積地を離れ、現在の初田集落周辺の山麓部に移動したのではないだろうか。そして館の移動と共に初田酒井氏の自立も強化されたと思われる。以上のことを考えると、初田館跡の主は16世紀前半段階では、酒井氏の庶子家の中でも有力な存在ではなかったと考えられる。

(3) 最後に

初田館跡の主は土豪層であることは判明したが、土豪館について少し触れておきたい。土豪層の館としては代表的なものに風呂谷館⁽⁴⁵⁾（三重県伊賀上野市）がある。この館は調査の結果、周囲が土塁・堀囲いであることが判明したもので、規模は南北68m、東西50mを有している。初田館跡より一回り小さい規模である。この他、日置荘遺跡⁽⁴⁶⁾（大阪府美原町北余部）は14世紀段階の館と言われるが、土塁・堀囲みの部分は東西60m、南北65mの規模を有し風呂谷館に近い規模をもっている。さらに付近の館では篠山町瀬利にある大淵氏館⁽⁴⁷⁾は、東側30m、南側54.8m、西側47m、北側35.4mの規模をはかる。しかし、やや歪な形状をなすため面積はおよそ1600㎡である。また、氷上郡春日町にある河津館⁽⁴⁸⁾は土塁・堀部分と館内のトレンチ調査が行われたものであるが、東西約86m、南北約75mの規模を有している。この他、多くの類例を比較するまでもなく土豪層の館は半町～1町未満の規模を有していたことが考えられる。

しかし、半町～1町という規模差は面積比で1：4という開きがある。これらの館の規模はどのような状況から決まるのであろうか。初田館跡の主は土豪層の中でも決して有力なものではないが、土豪館としては必ずしも小規模とはいえない。逆に同じ丹波の中で、大淵館があるがこの館は初田館跡より小規模である。大淵館は大きな山城を持った畑氏の館であるといわれており、初田酒井氏よりは明らかに有力な土豪と考えられる。こう考えると単純に館規模の比

較を行っても、土豪の勢力関係を映し出す結論は得られないことがわかる。やはり、館の周囲も含めた発掘調査が行われ、その内容が明確になる必要があると考えられる。

これに加え今回の調査では館内部の構造についても大きな問題を提起した。15～16世紀前後の館跡研究については、中井均⁽¹⁹⁾・橋口定志⁽²⁰⁾・山本雅靖⁽²¹⁾・室伏徹⁽²²⁾などの論考を初め多くの研究がある。しかし、具体的に地方武士の館内の配置について論じたものは、山本雅靖・室伏徹の研究など未だに数少ないのが現状である。

山本雅靖は伊賀国をフィールドに館所有者の階層を分析して、その分布から当時の伊賀について論じている。その論の素材の1つに先の風呂谷館がある。この館はこれまでいわれてきた土豪館として一般的な構造をとっていると考えられる。館は主の住居を最奥に配置し、入り口近くには被官などの小屋が立つ構造である。そして、井戸は従属する建物が立つ中に置かれている。このことは、風呂谷館跡が全体で機能を補完する関係にあったことを意味している。つまり、主を中心にして求心的な構造を有しているのである。

これに対して初田館跡の井戸は屋敷それぞれが所有している。各屋敷に居住と厨房的な機能が備わるもので、生活上は屋敷Aは屋敷Bに依存しなくてもよい構造となっている。つまり、初田館跡の内部には2人の自立した有力者が存在したと考えられる。

風呂谷館跡のようなタイプは隣国である播磨国でも検出されている。有馬・泉田遺跡⁽²³⁾（兵庫県加西市）は、1辺74m前後の規模を有する館跡である。館は16世紀前半のもので、調査の成果から類推して、土塁・堀囲いであったと思われる。館内部は3区画以上に分かれており、それぞれ溝による区画が行われていた。区画の最大のものは南北50m以上の規模を持っており、ここに館主が住んだと思われる。残念なことに調査区の制限から各区画の規模の詳細については明確にできない部分が多い。しかし、初田館跡のように同規模の屋敷が併存する構造ではなく、館主の屋敷を中心に配置された構造をとることは明らかである。

これに対して、やはり播磨国の例であるが兵庫県姫路市に所在する加茂遺跡⁽²⁴⁾がある。この館は方形居館の調査例としては早い時期に行われたものである。館は中央部に屈曲する堀が走るもので、館内を大きく分割する構造である。そして、西側区画の中央を井戸1排水溝が通ることから、報告では「田の字型に「四角郭」のプランを呈する。」としている。但し、井戸1排水溝を屋敷区画とするには疑問も残るため、館は少なくとも3つ以上の屋敷を内包する構造をとっていたのではないかとと思われる。そして各屋敷には大小があるが堀区画ということを見ると、初田館跡の構造に近い可能性がある。こう見てくると、播磨・丹波の地域には初田館跡型と風呂谷館跡型の二つのパターンの館が混在したと考えられる。

初田館跡はどのような状況で生まれるのだろうか。庶子の分家の際、分与する場所がなく同一屋敷に住む状況や、当主の隠居所として同じ館内が分割されることなどが状況として起りえたと考えられる。特に、西日本では名主・地侍層の台頭が著しく、庶子が惣領と完全な主従関

係にあるよりも、対等な立場で盟主と構成員という関係で結ばれることが多いという。また、戦国大名の支配体制も組織的な官僚支配が行われたのではなく、個人的な人脈による支配が継続しており、当主が隠居しても支配権が解消することが少ない地域という指摘もある⁽²⁵⁾。このような現象が、初田館跡の内部構造に反映したのではないだろうか。しかし、未だ類例が少ないため一般的なパターンなのかどうかについては今後の検討課題とせざるをえない。

ただし、最近の調査例によれば15～16世紀集落については、環濠集落を初めとして多くの成果が上がりつつある。この中には、複数の屋敷区画が集合した集落の存在⁽²⁶⁾など、多様な遺構が検出されている。土豪館の内部構造についても今後多様なパターンが存在することを初田館跡は示唆したと考えられる。この他、土豪館における半町～一町という大きな規模差がどのような条件のもとでの反映であるのかも考古学が解決すべき大きな課題ということがいえよう。

註

- (1). 岡崎正雄他『兵庫県埋蔵文化財調査年報 56～59年度』兵庫県教育委員会1981～1984年刊
- (2). 秋枝 芳・山本博利『加茂遺跡』姫路市教育委員会 1975年
- (3). 永島暉臣編『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』(財)大阪市文化財協会 1983年
- (4). 『柳之御所跡—姿を現した居館跡—』(財)岩手文化振興事業団埋蔵文化財センター1991年刊
- (5). 広瀬和雄『観音寺遺跡発掘調査報告書』1982年刊
- (6). 松田直則他『田村遺跡群』高知県教育委員会 1986年刊
- (7). 波谷忠章・西哲弘他『植田市遺跡Ⅰ』・『植田市遺跡Ⅱ』1989年刊・『植田市遺跡Ⅲ』1989年刊
大分県教育委員会
- (8). 平田重之他『皂樹原・檜下遺跡』皂樹原・檜下遺跡調査会 1989年刊
- (9). 峰岸純夫・橋口定志・広瀬和雄「居館」『季刊自然』ナショナルトラスト財団 1990年刊
- (10). 『兵庫県史 資料編 中世3』兵庫県史編集専門委員会 代表今井林太郎編 1988年刊、「初田与大郎 下地相傳状」『酒井文書20・21』(多紀郡丹南町 酒井嘉幸氏所蔵文書)による。また、以下の記述については同書及び県史第3巻中世編による。
- (11). 前掲(10)文献「栗栖野信政等連署寄進状」『高仙寺文書1』(旧古市 高仙寺旧蔵)
- (12). 前掲(10)文献「酒井荘内高帳写」『酒井文書1』(多紀郡丹南町 酒井義一氏所蔵)
- (13). 前掲(10)文献「波多野元秀書状・酒井豊教・同伊賀守連署書状」『波多野文書3・4』(多紀郡丹南町波多野芳野氏所蔵)
- (14). 城郭の分布については『兵庫県の中世城館・荘園遺跡—兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告—』兵庫県教育委員会 1982年刊行によった。但し大沢城は実地踏査による。
- (15). 駒田利治他『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1984年刊行
- (16). 金光正裕・中村淳磯『日置荘遺跡(その1) (大阪府美原町北余部)』(財)大阪文化財センター 1988年刊行、鋤柄俊夫・市元芳三・本間元樹『日置荘遺跡(その2)』大阪文化財センター 1988年刊

- (17). 前掲(10)文献による。
- (18). 村上泰樹他『河津館址』兵庫県教育委員会 1987年刊
- (19). 中井 均「中世城館の発生と展開」『物質文化』48 1987年刊、「中世の居館・寺そして村落—西日本を中心として—」『中世の城と考古学』石井 進・萩原三雄編 新人物往来社 1991年刊など。
- (20). 橋口定志「絵巻物にみる居館」『生活と文化2号』豊島区立郷土資料館1986年刊行、「中世居館の再検討」『東京考古 五』1987年刊、「方形館はいかに成立するのか」『争点日本の歴史4巻』新人物往来社1991年刊など。
- (21). 山本雅晴「伊賀における中世城館の形態とその問題」『古代学研究』27 1984 年刊、「伊賀惣国一揆の構成者像—中世城館築造主体の性格をめぐって」『大阪文化誌』、「伊賀地域、中世後期における階層構成の一問題—中世城館の遺構の検討をとおして—」『信濃 第38巻 第8号』1986年刊など。
- (22). 室伏徹「高梨氏館跡の発掘調査によせて—十五・十六世紀の館跡・屋敷の郭内配置について—」『信濃第38巻 第8号』1986年刊
- (23). 『平成3年度兵庫県埋蔵文化財専門職員研修会資料—城・館・城下町—』兵庫県教育委員会 1990年、このほか同遺跡については吉識雅仁氏より教示を受けた。
- (24). 前掲(2)文献による
- (25). 『中世の中に生まれた近世』山室恭子 中央公論社 1992年刊
- (26). 森格也・宮下睦夫『横江遺跡発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会 1991年刊
岡本圭司「上町遺跡の発掘調査事業調査」『関西近世考古学研究会Ⅰ』関西考古学研究会 1988年刊など

付 載

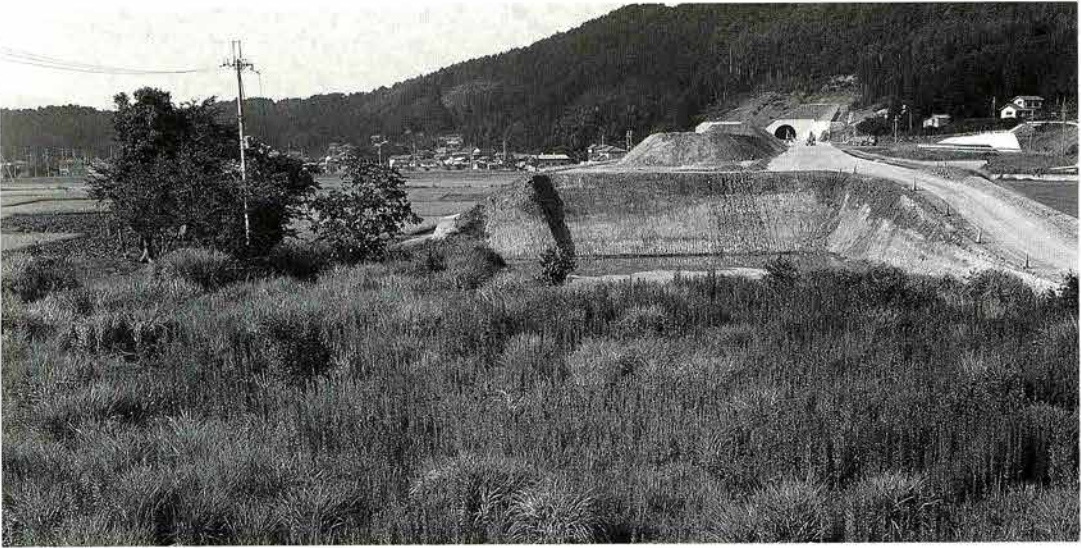
- 付載 1 初田館跡出土木製品の樹種 ……………島 地 謙（京都大学名誉教授）
- 付載 2 初田館跡出土炭化材の樹種 ……………嶋 倉 巳三郎
- 付載 3 初田館跡出土鉄滓の分析結果について ……………高 塚 秀 治（東京工業大学）
- 付載 4 伝初田出土和鏡（又ヶ田の坪出土和鏡）……………岡 崎 正 雄

付載は公開していません

版 图



全景写真（真上より）



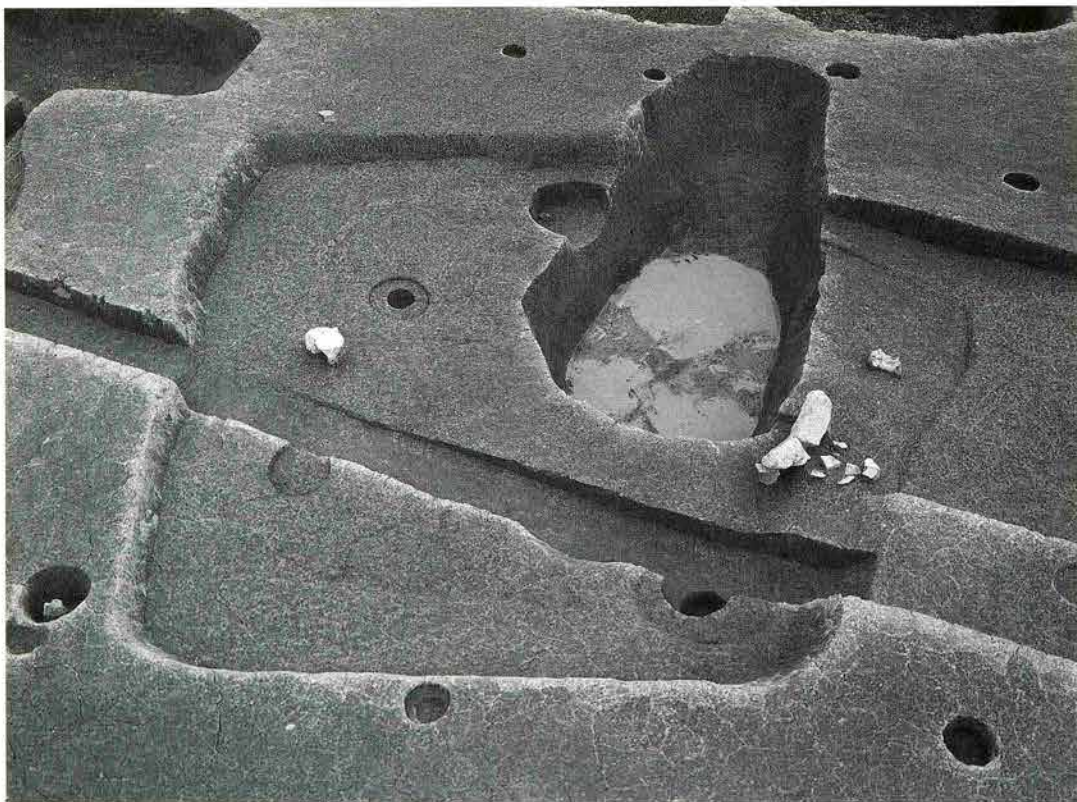
上：調査前の全景(南より) 中：伐採後の全景(北より) 下：調査前の全景(北より)



1. 全景(南より)



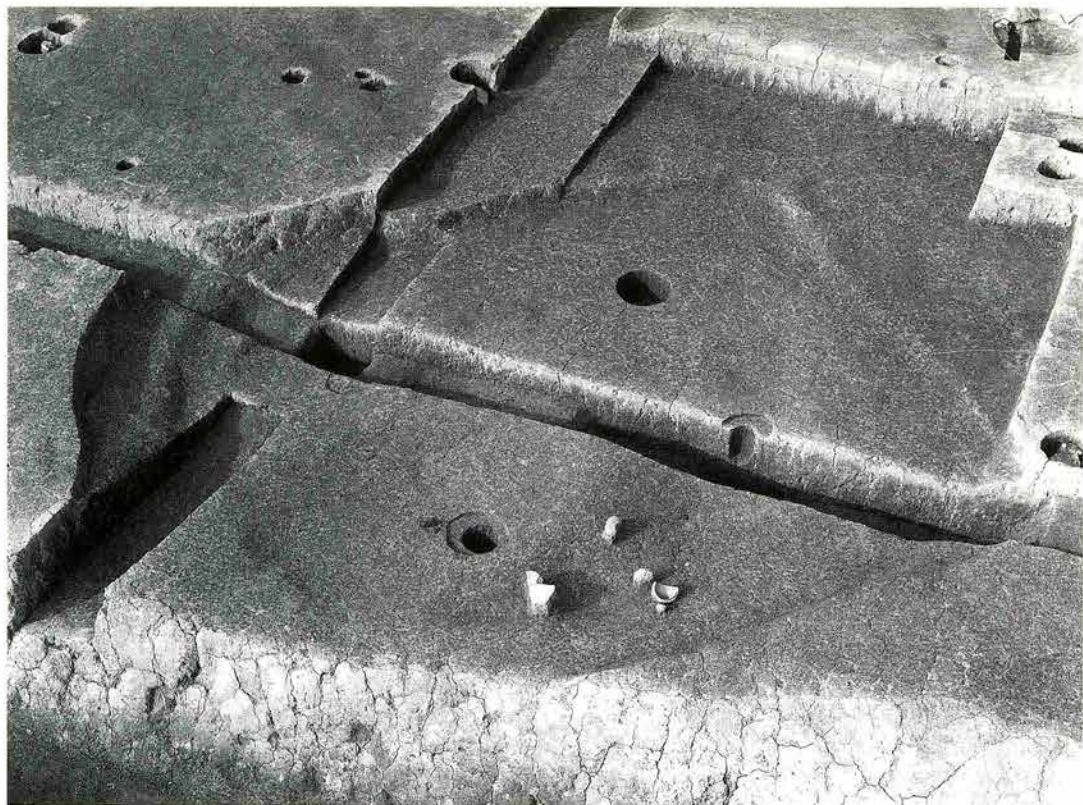
2. 竪穴住居址1~4



1. 竪穴住居址1・2の全景(北より)



2. 竪穴住居址1の竈焚口



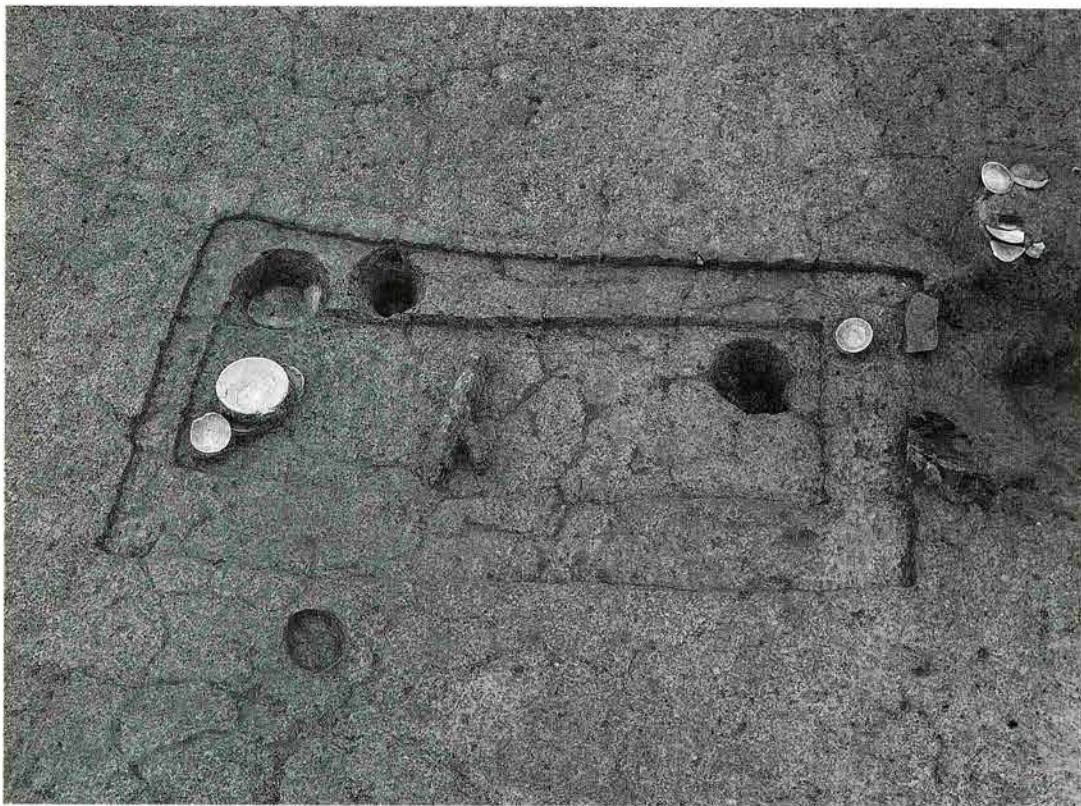
1. 竪穴住居址3の全景(南より)



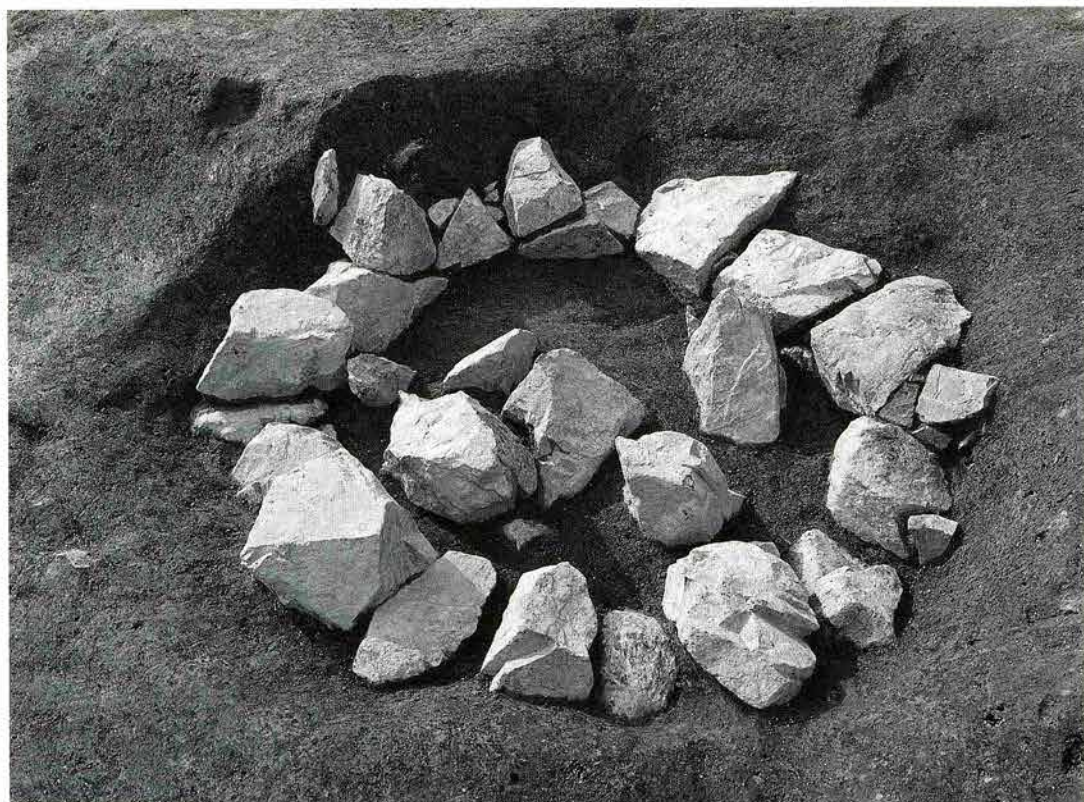
2. 竪穴住居址4の全景(東より)



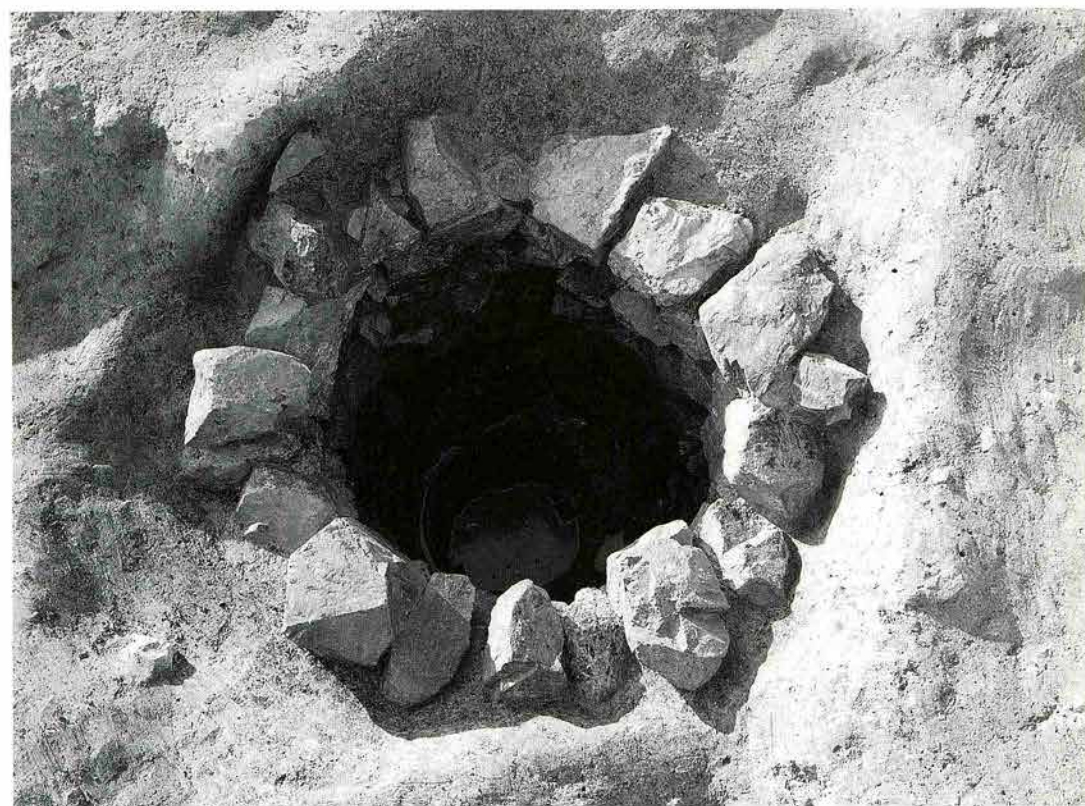
1. 墓と他の遺構群



2. 墓と副葬品



1. 井戸1 上面確認状況



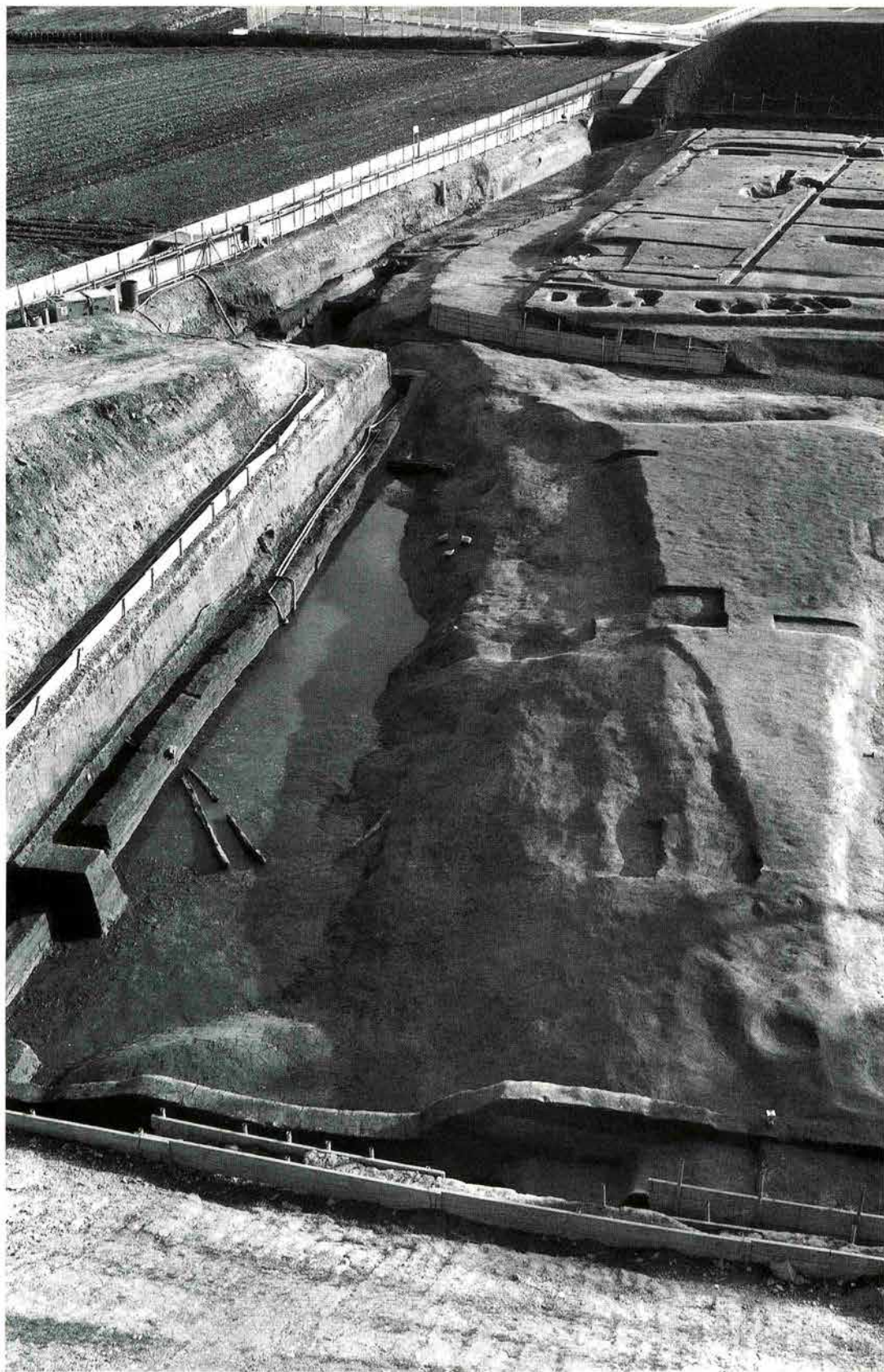
2. 井戸1 全景



1. 井戸1 検出状況



2. 井戸1 半截後断面



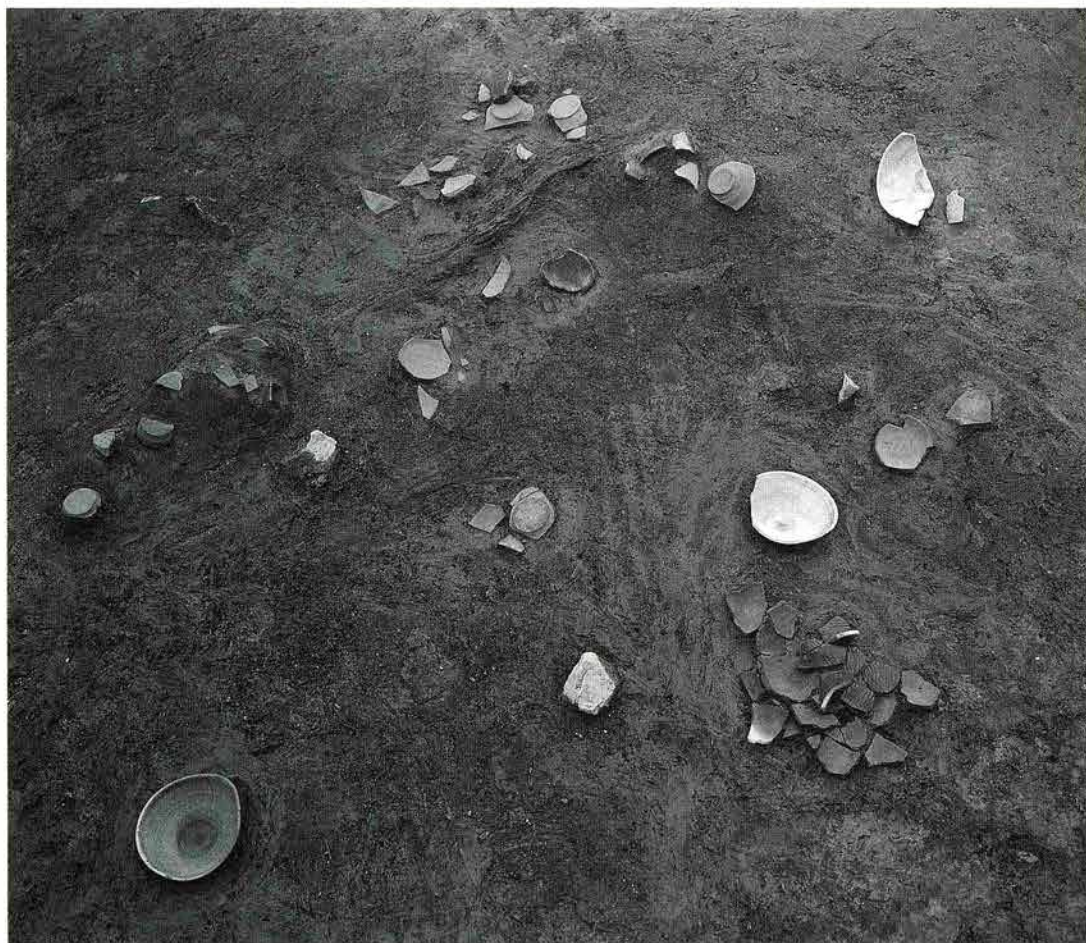
旧河道全景(北より)



1. 旧河道全景 (南より)



2. 旧河道の土層堆積



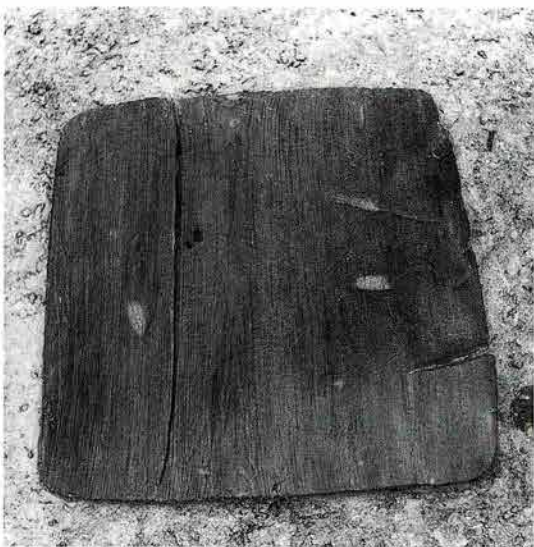
旧河道遺物出土状況 土器群(上・下)



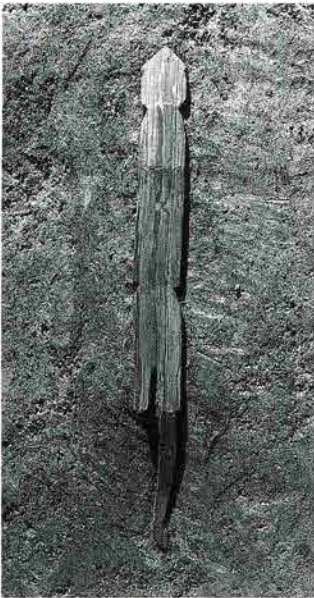
旧河道遺物出土状況 瓦器碗・土師器鍋・下駄・折敷



旧河道遺物出土状況 土器群(上・下)



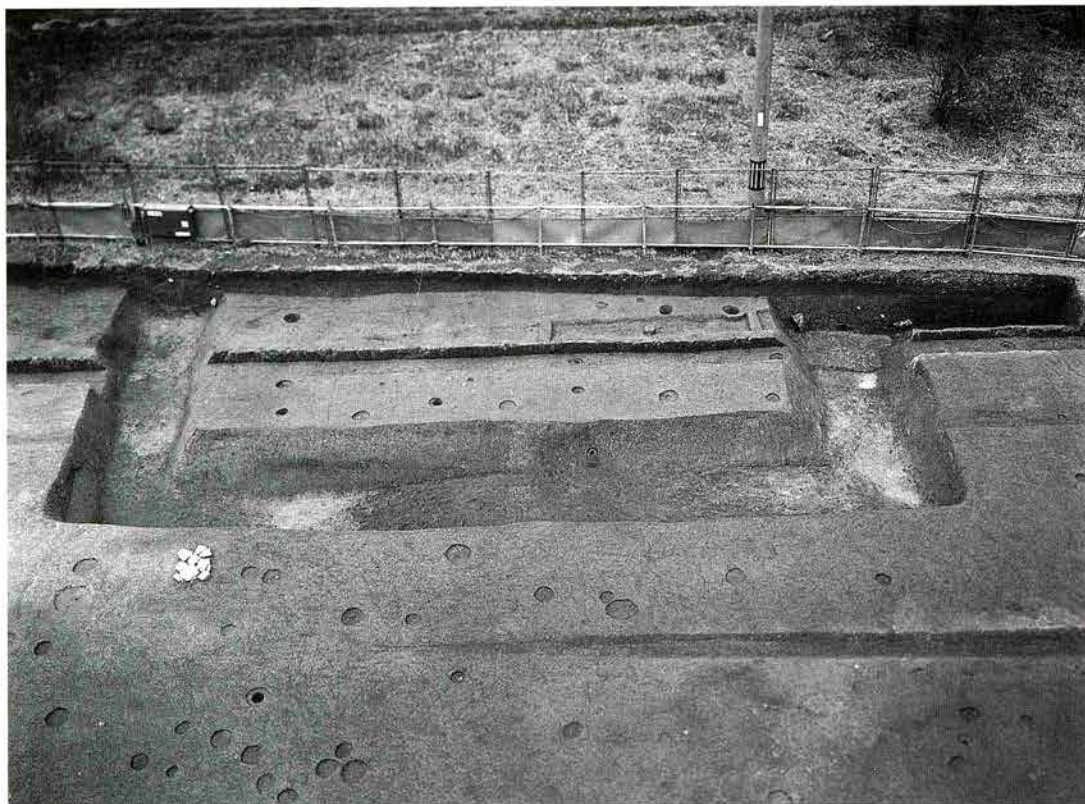
旧河道遺物出土状況 瓦器碗・土師器鍋・下駄・折敷



旧河道遺物出土状況 須恵器碗・土師器鍋・人形他



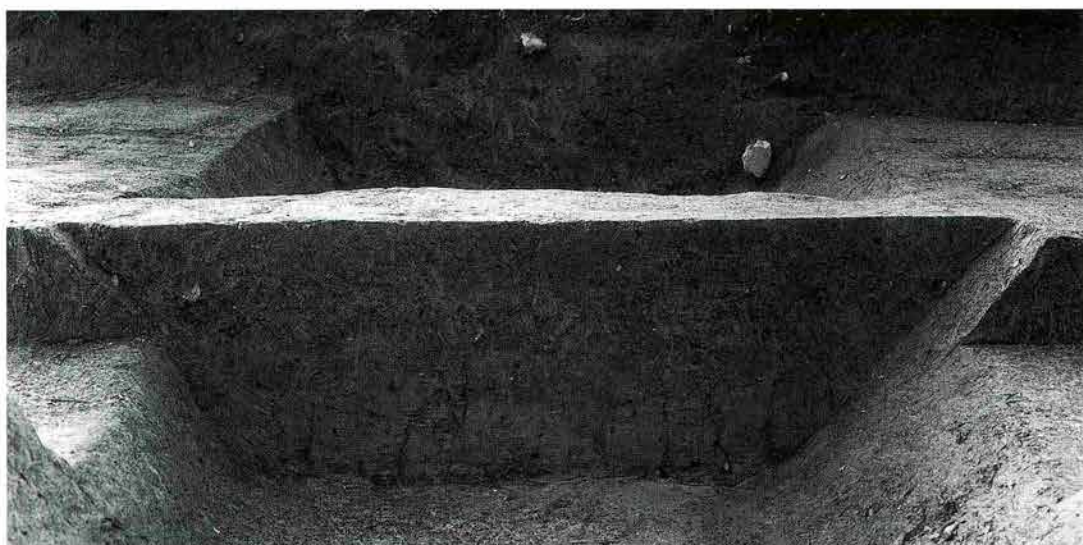
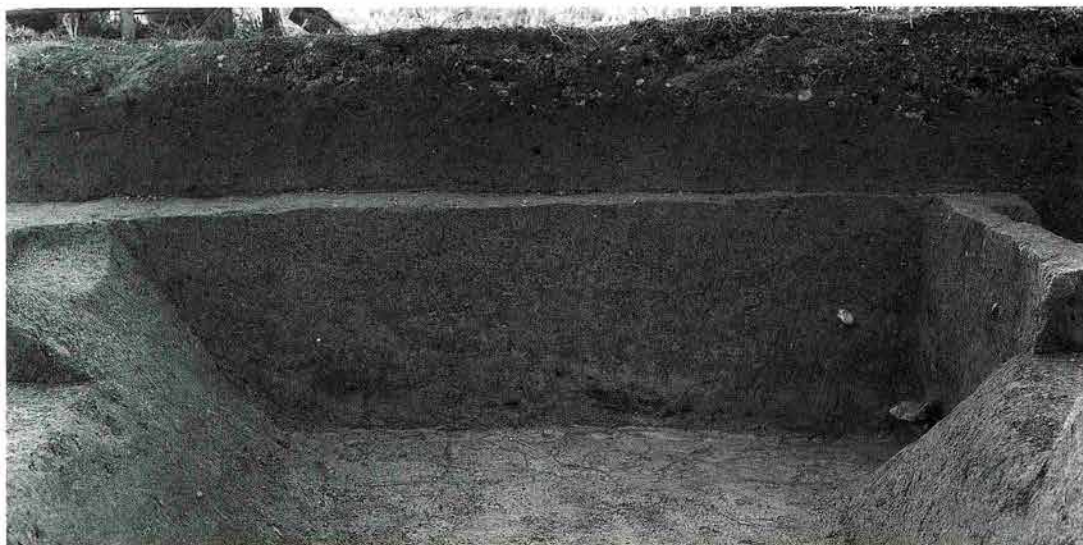
東堀下層遺物出土状況 瓦器碗・土師器鍋他



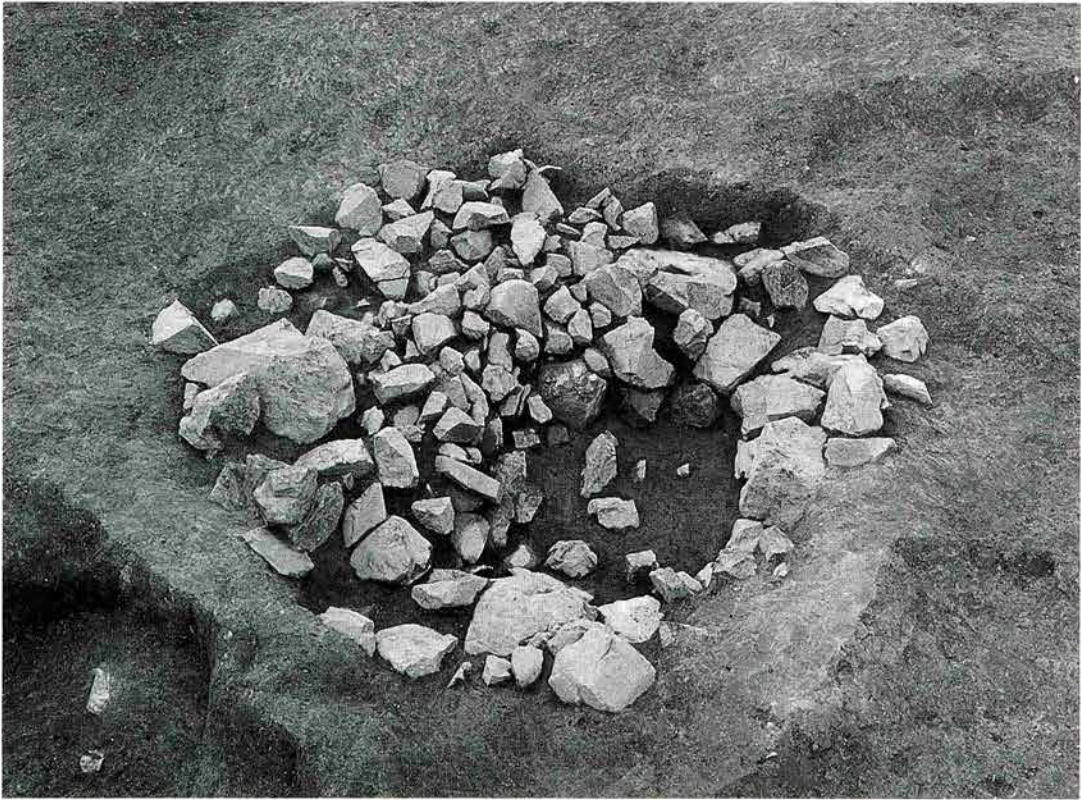
1. 小型堀全景（東より）



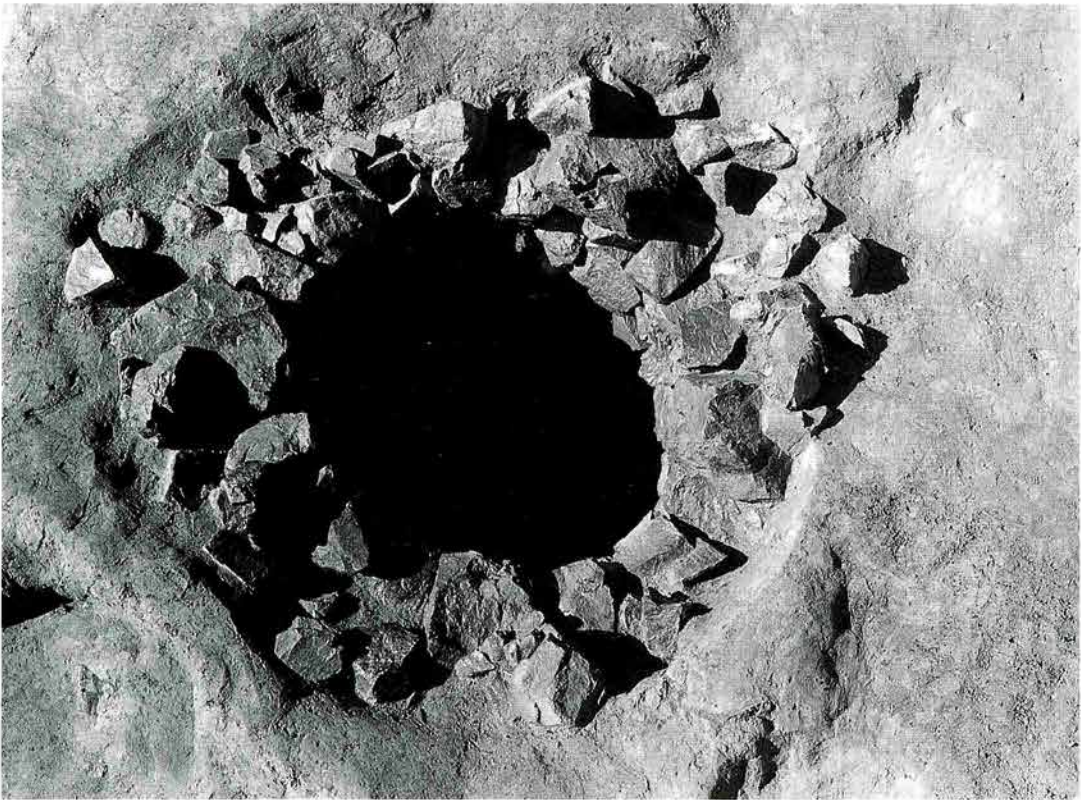
2. 小型堀全景（南より）



小型堀土層堆積 (上：北堀西壁、中：南堀西壁、下：東堀北壁)



1. 井戸2 上面確認状況(東より)



2. 井戸2 全景(東より)



1. 井戸2 検出状況(東より)



2. 井戸2 底胴木西側細部



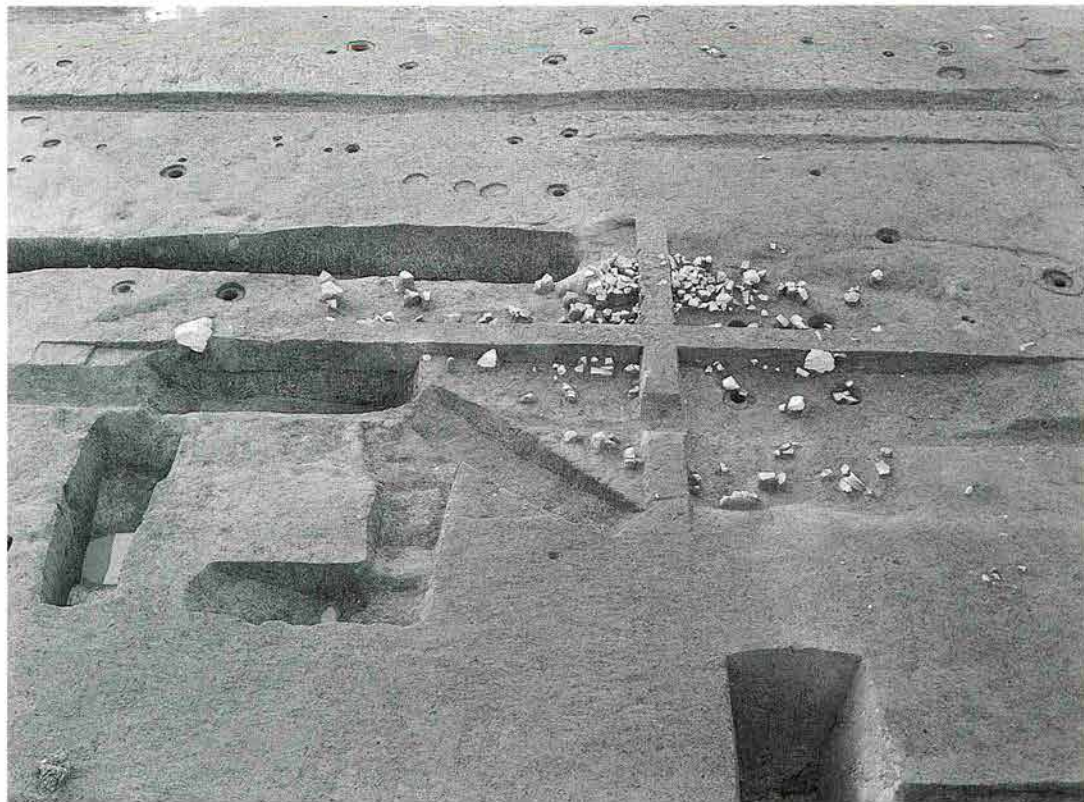
1. 井戸3 全景(北より)



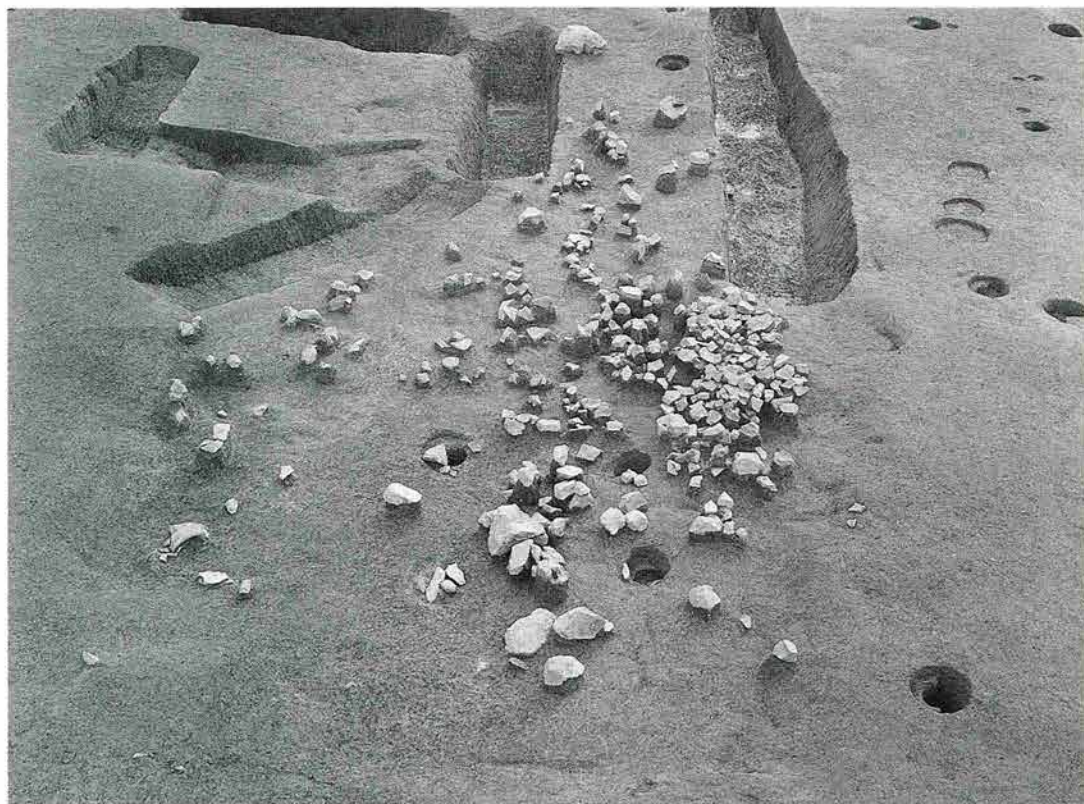
2. 井戸3 掘り方の石組み半截後断面(北より)



井戸3 (上: 第1段桶、中: 桶のたが、下: 遺物出土状況)



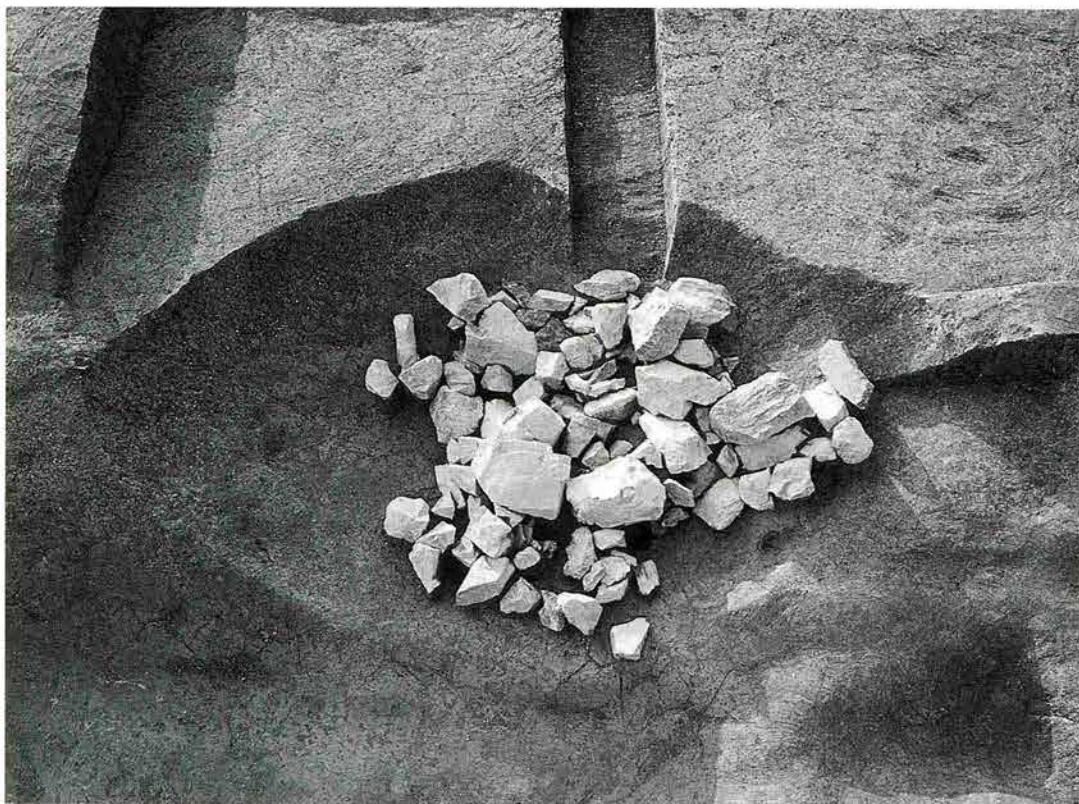
1. 池2 全景確認状況（東より）



2. 池2 全景と建物3（北より）



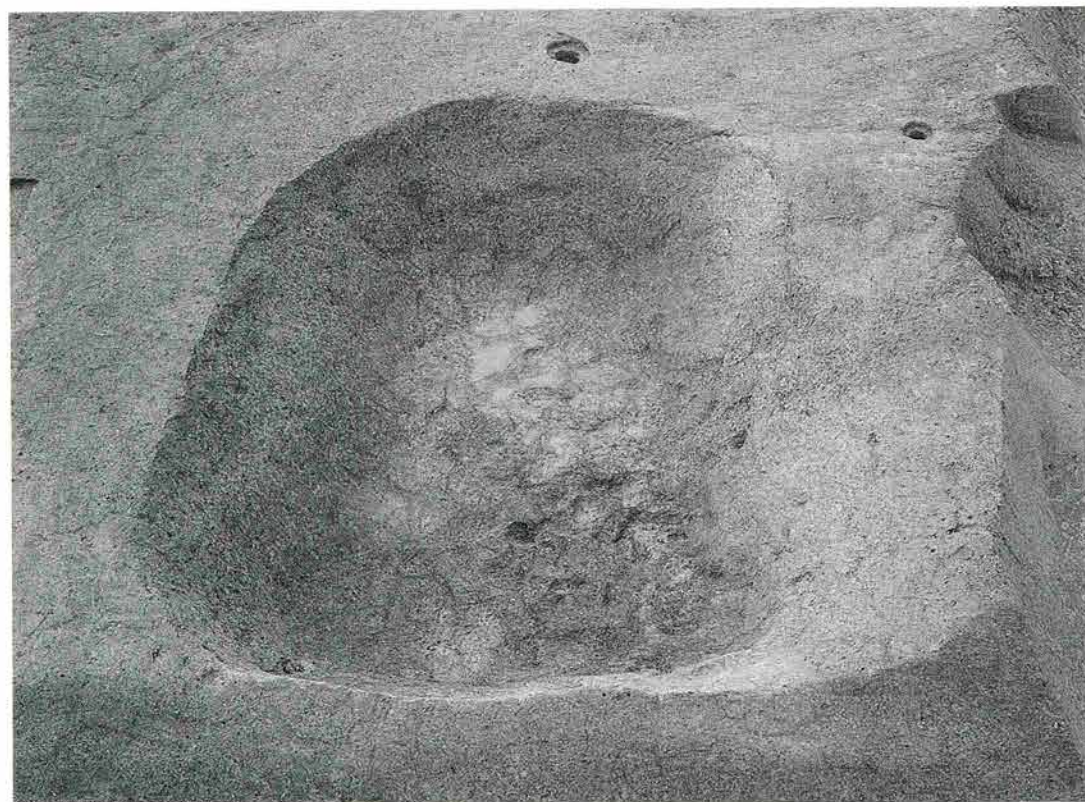
1. 池1 全景（西より）



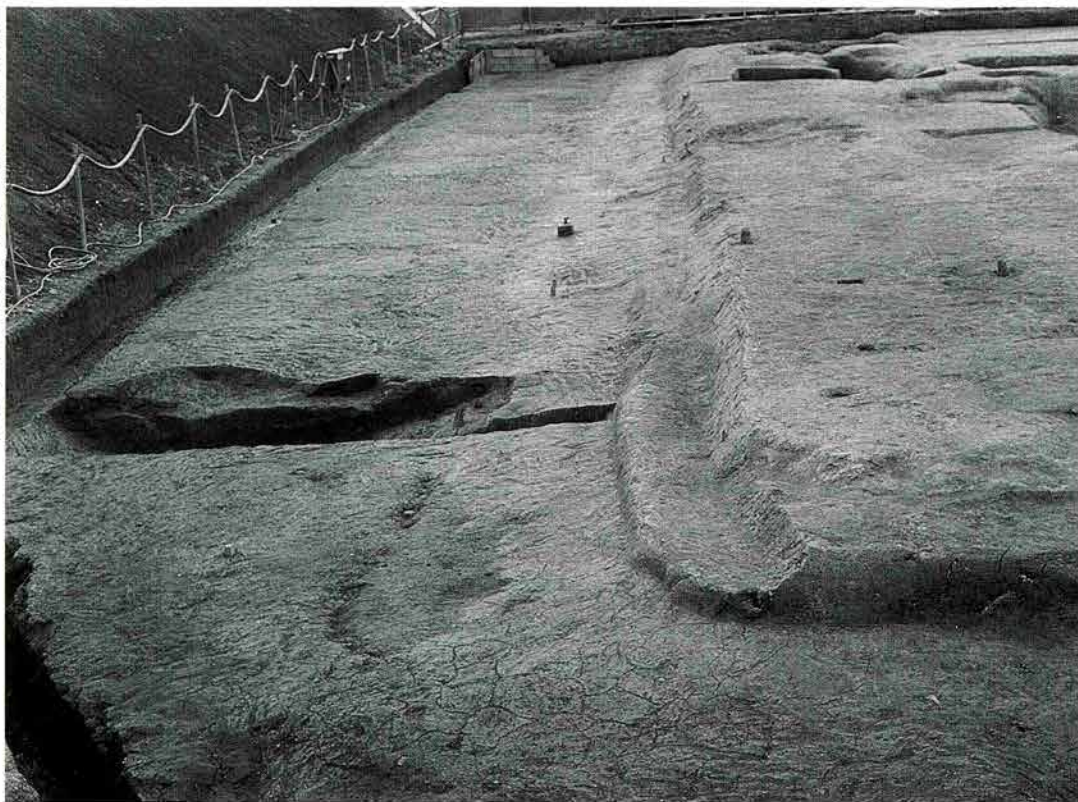
2. 土壇7（東より）



1. 土壙6 土層堆積



2. 土壙6 全景



1. 南堀上面確認状況(東より)



2. 南堀土層堆積状況全景(東より)



1. 南堀橋脚と石出土状況



2. 南堀橋脚全景(東より)



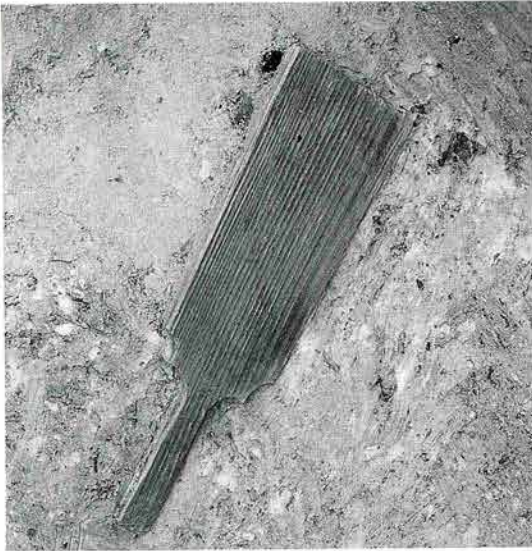
1. 南堀橋脚全景（南より）



2. 南堀橋脚掘り方半截後断面



1. 南堀遺物出土状況（五徳他）



2. 羽子板出土状況



3. 御札出土状況



1. 東堀上面確認状況(南より)



2. 東堀土層堆積状況(南より)



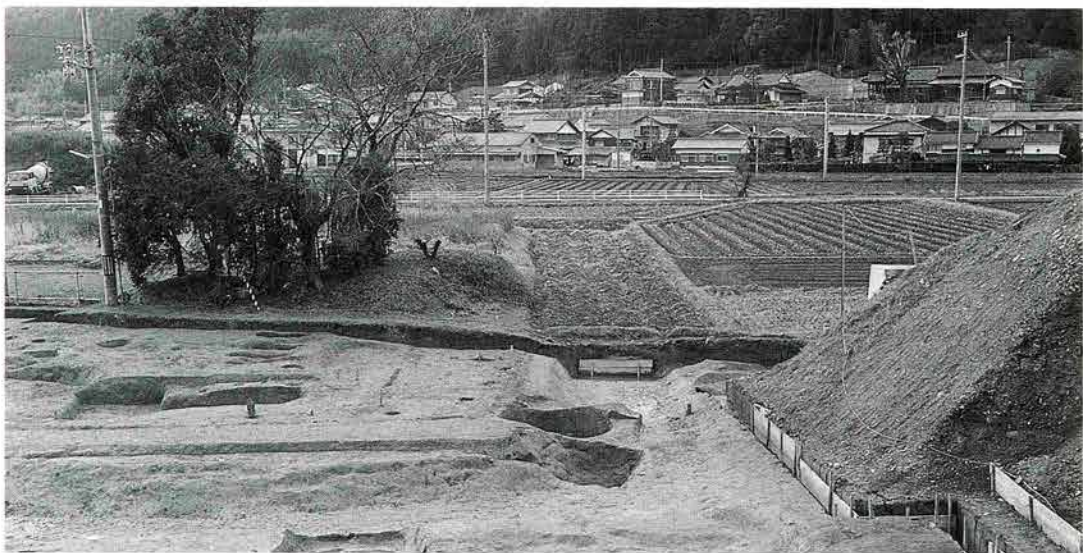
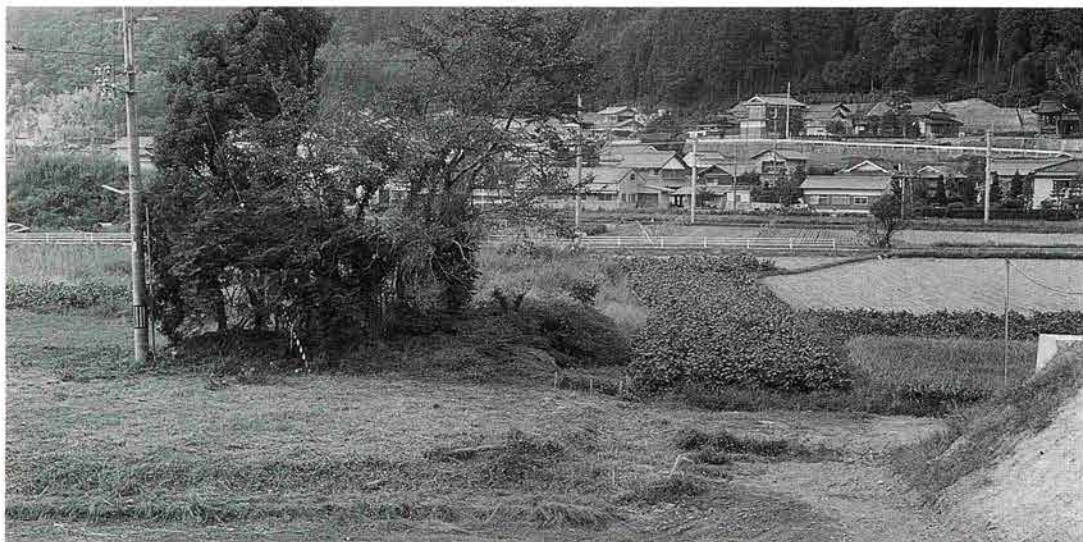
1. 北堀・旧河道全景



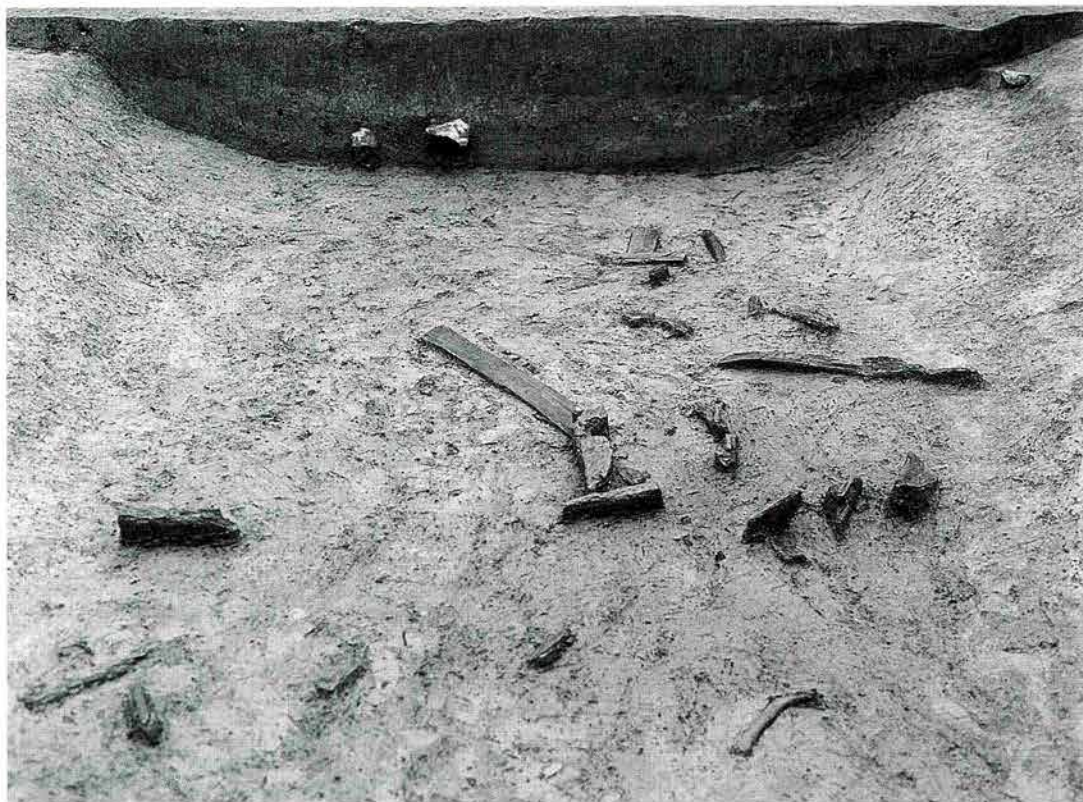
2. 北堀全景



北堀土層堆積状況 (上: 3・4区北壁、中: 3～6区北壁、下: 1・2区西壁)



上：調査前の土塁・北堀全景（東より） 中：北堀上面確認状況（東より） 下：北堀完掘状況



1. 北堀 板出土状況



2. 北堀 板と漆碗出土状況



1. 柵と柱穴（北より）



2. 建物1（東より）



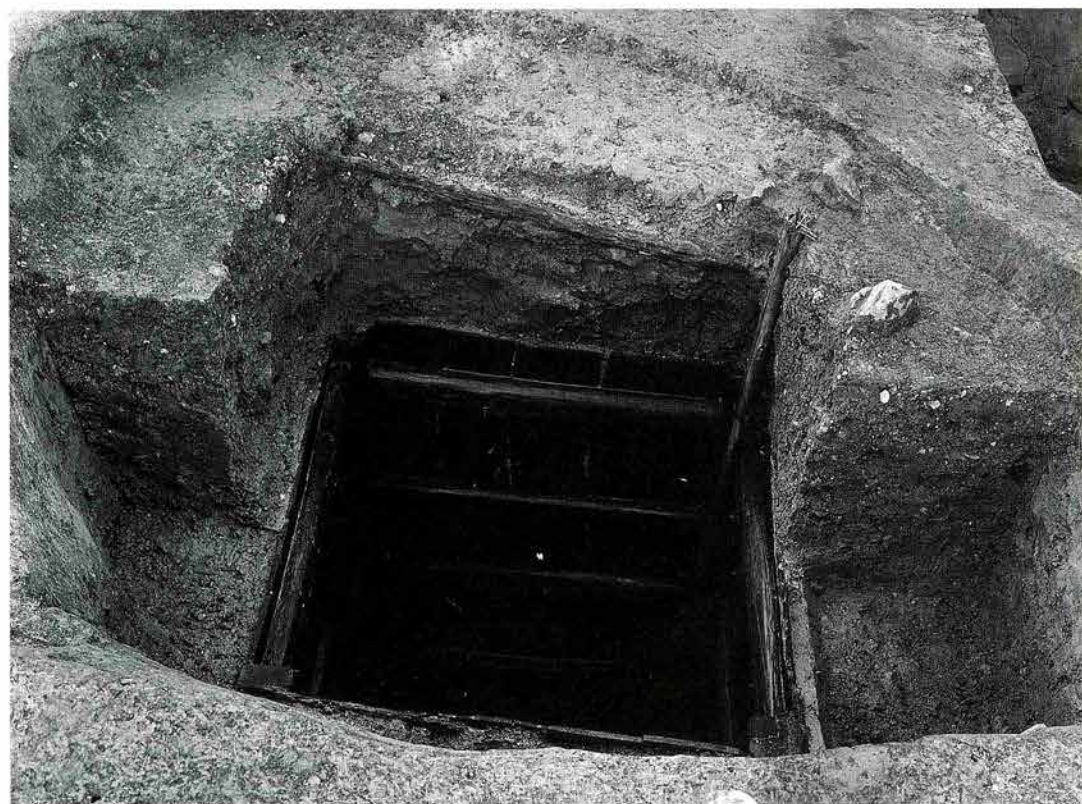
1. 北部上面確認状況(北より)



2. 畑(北より)



1. 井戸4 全景



2. 井戸4 掘り方上層半截後断面



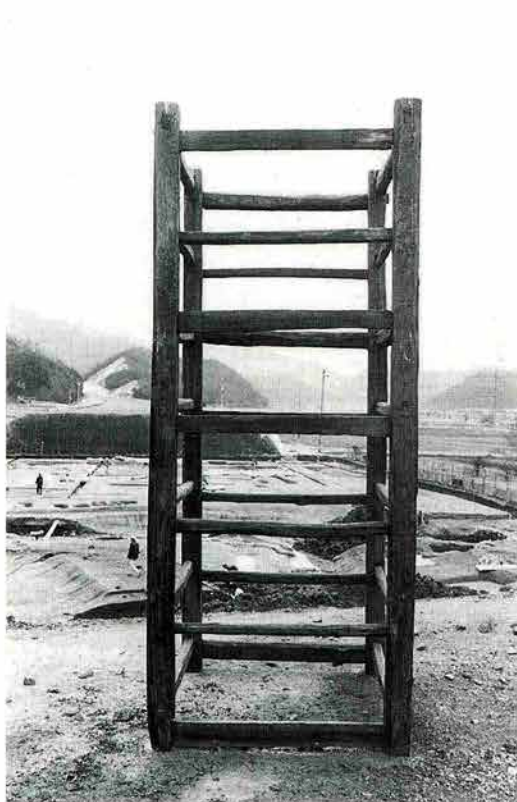
1. 井戸4 木組み全景



2. 井戸4 細部



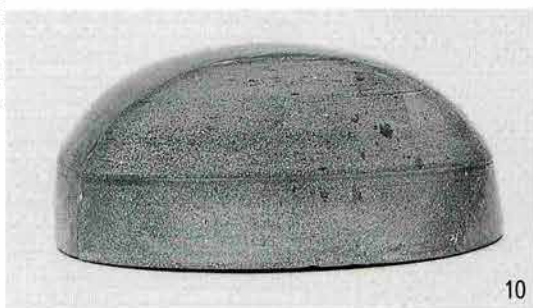
1. 井戸4 半截後断面



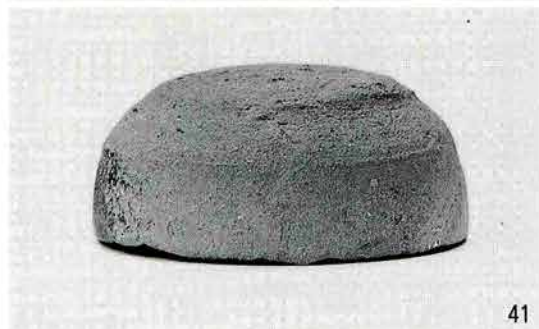
2. 井戸4 井戸枠全景



3. 井戸4 井戸枠細部(上、下)

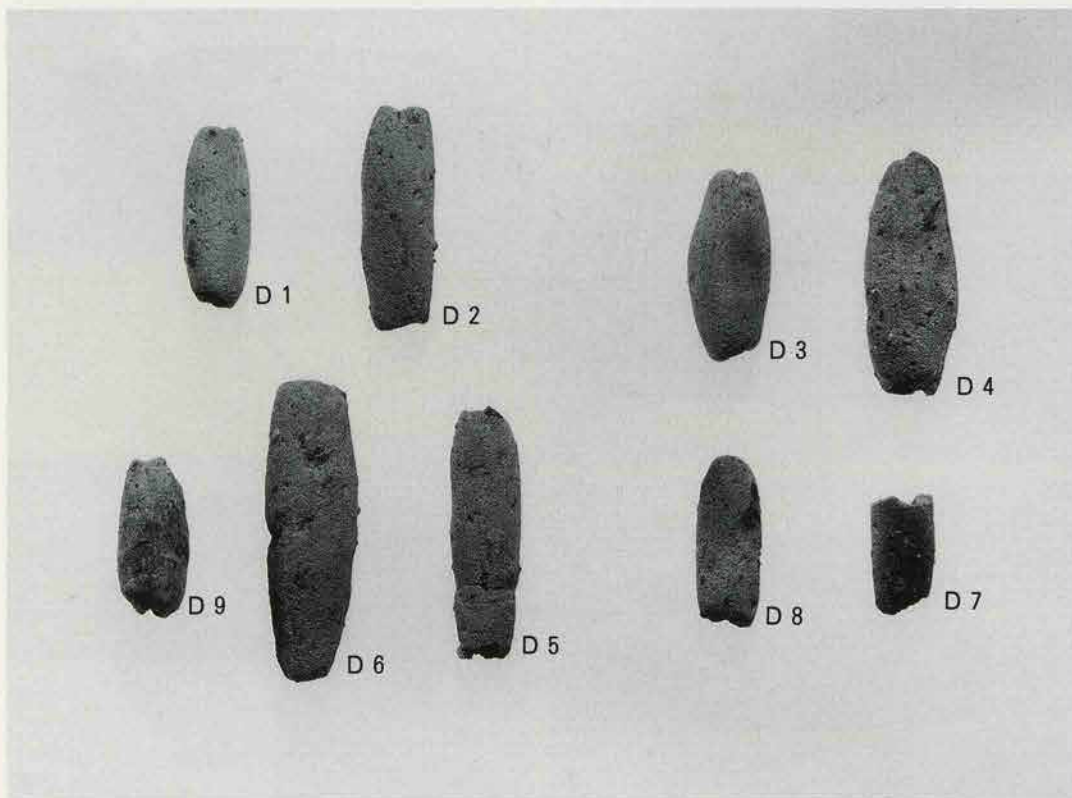


竪穴住居址出土土器(土師器・須恵器)

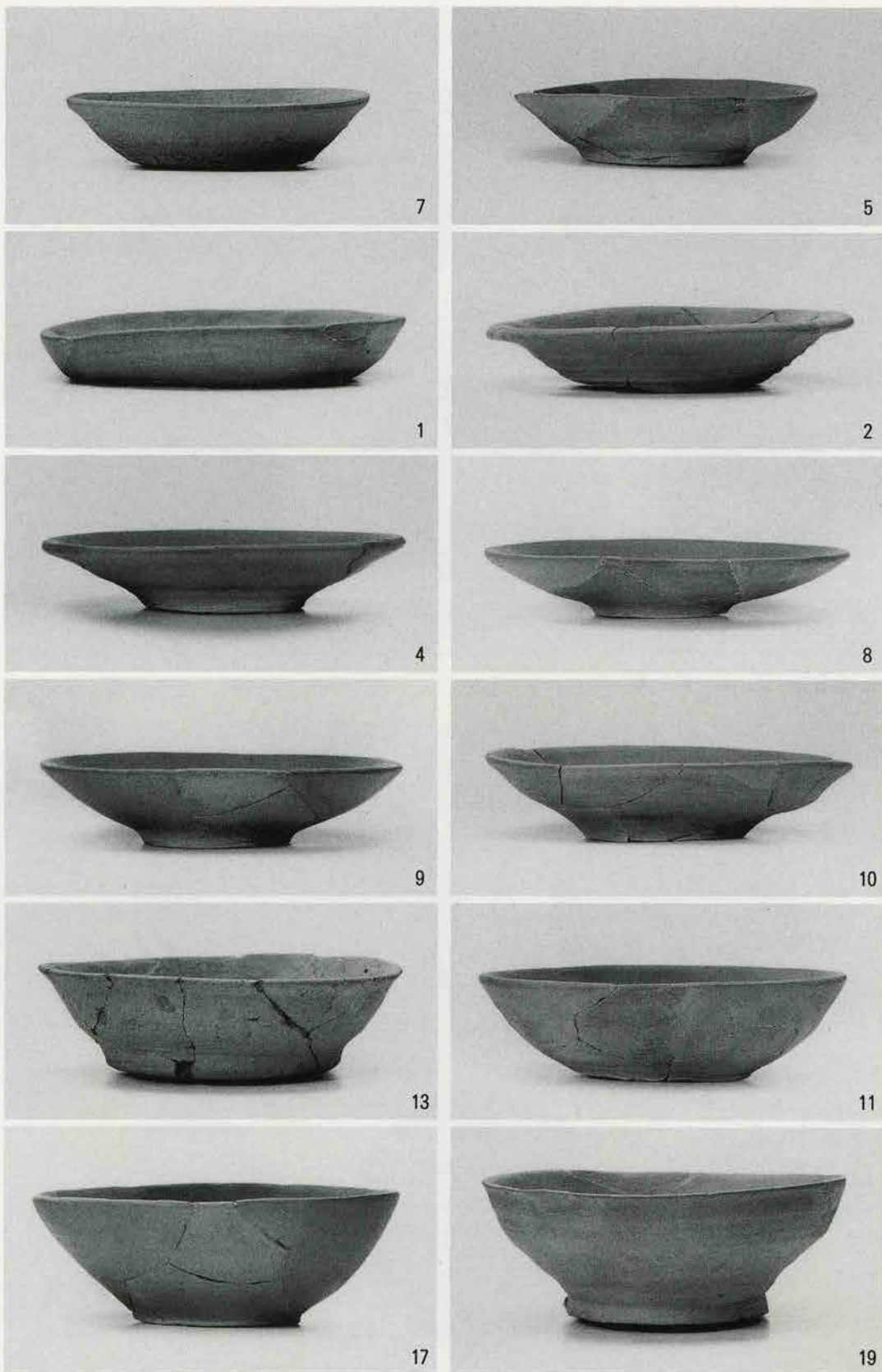




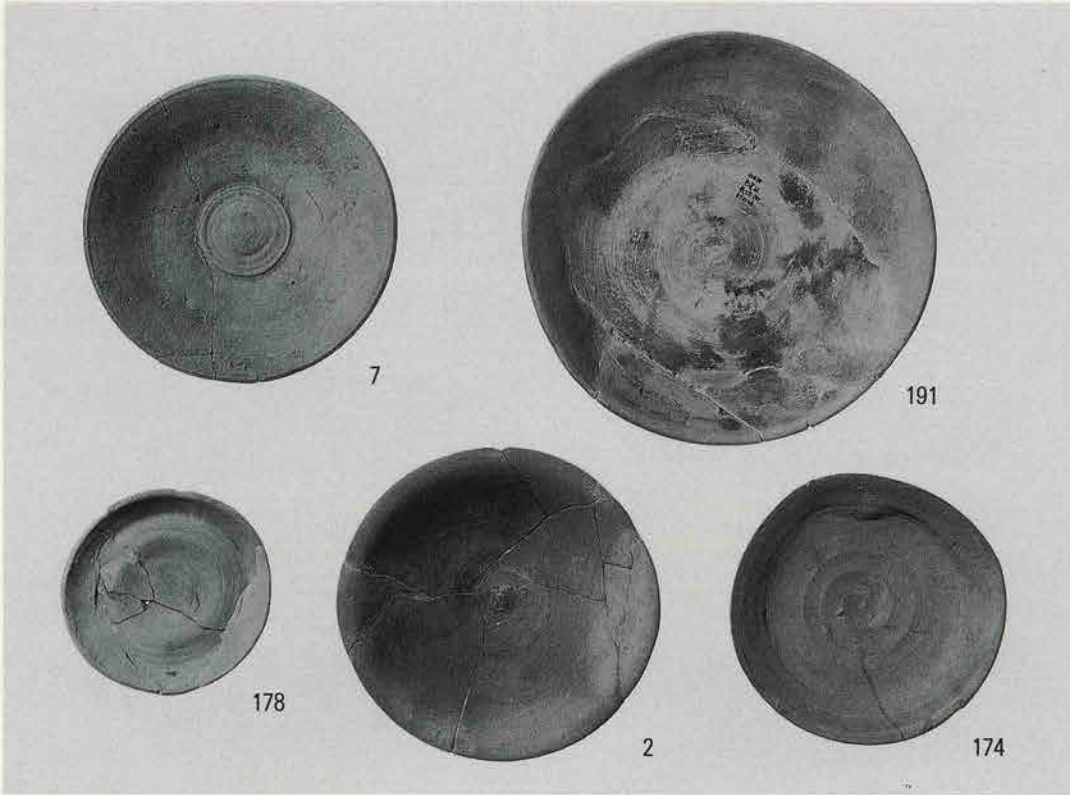
1. 包含層出土土器(土師器・須恵器)



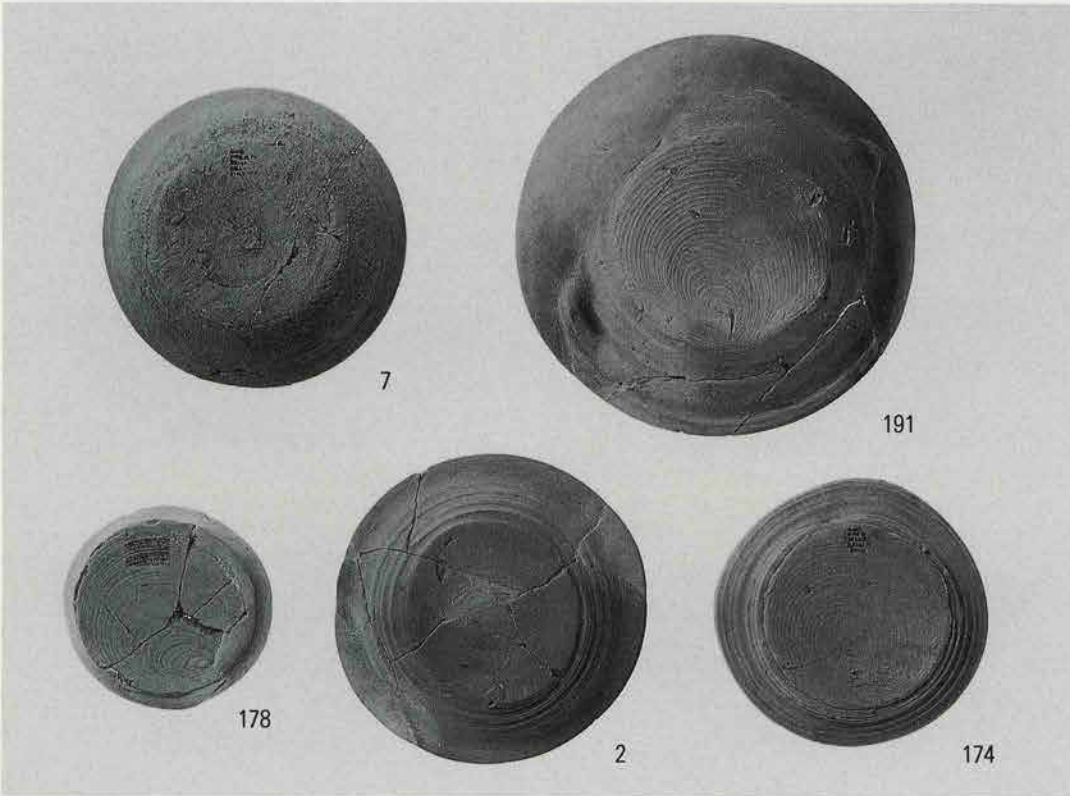
2. 住居址出土土錘



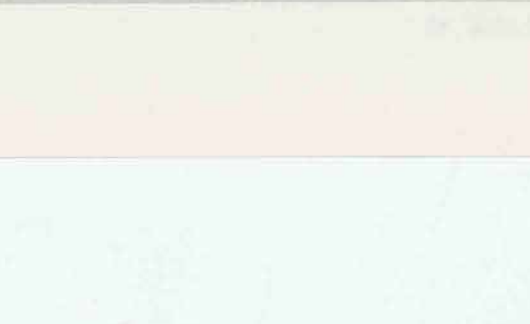
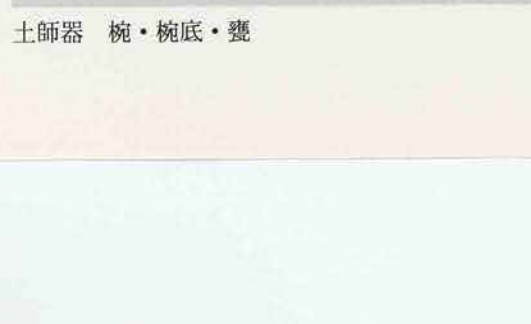
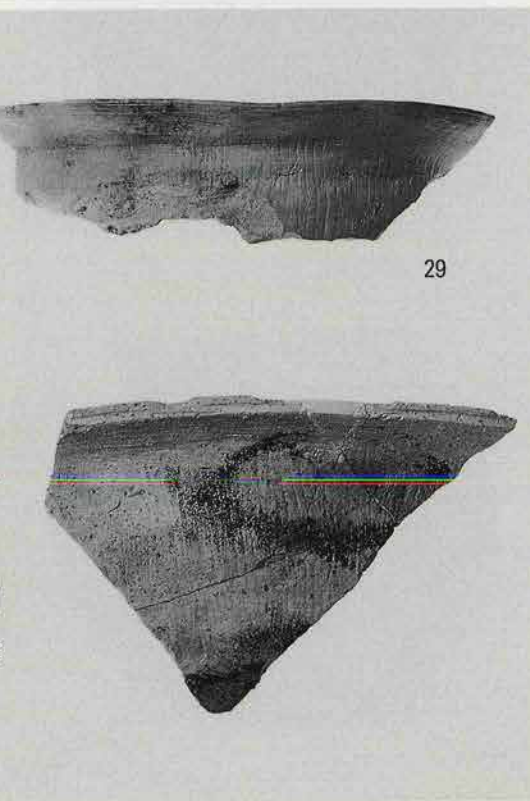
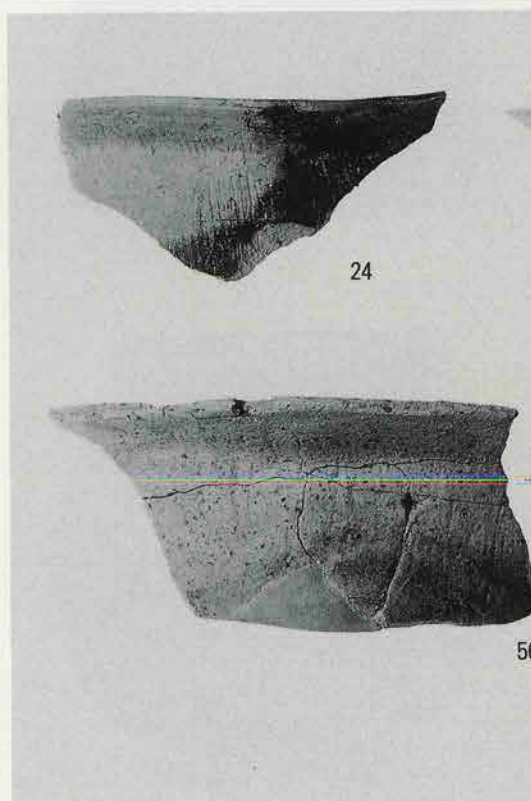
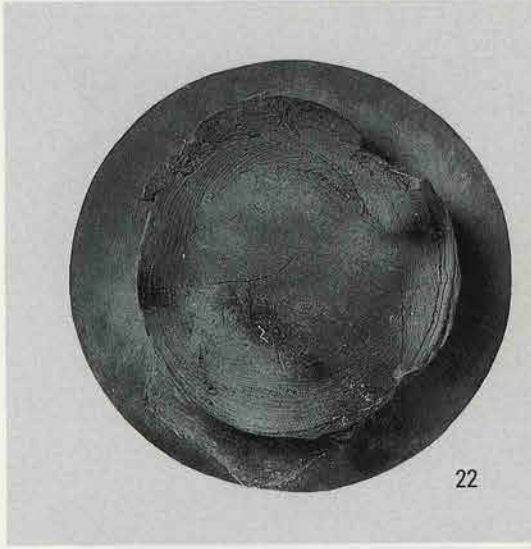
土師器 杯・皿・碗



1. 土師器 杯・皿・碗の見込み



2. 土師器 杯・皿・碗の底



土師器 碗・碗底・甕



36



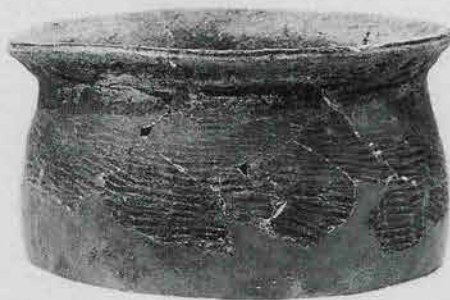
37



46



45



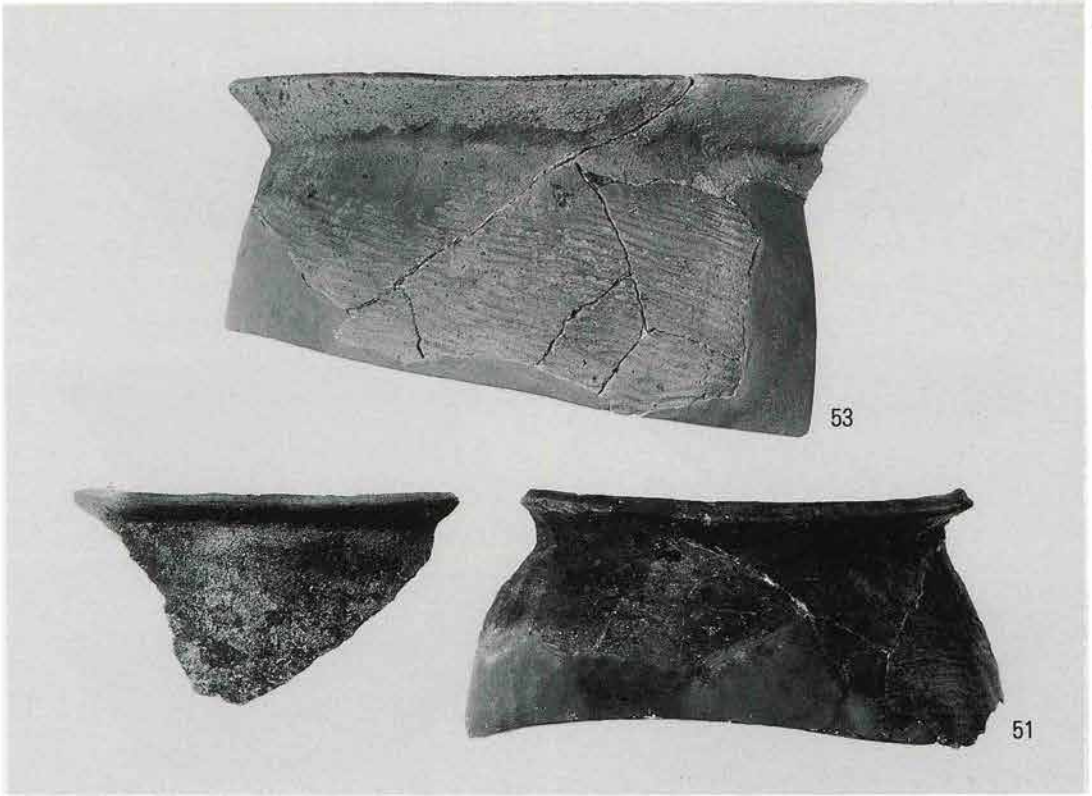
50



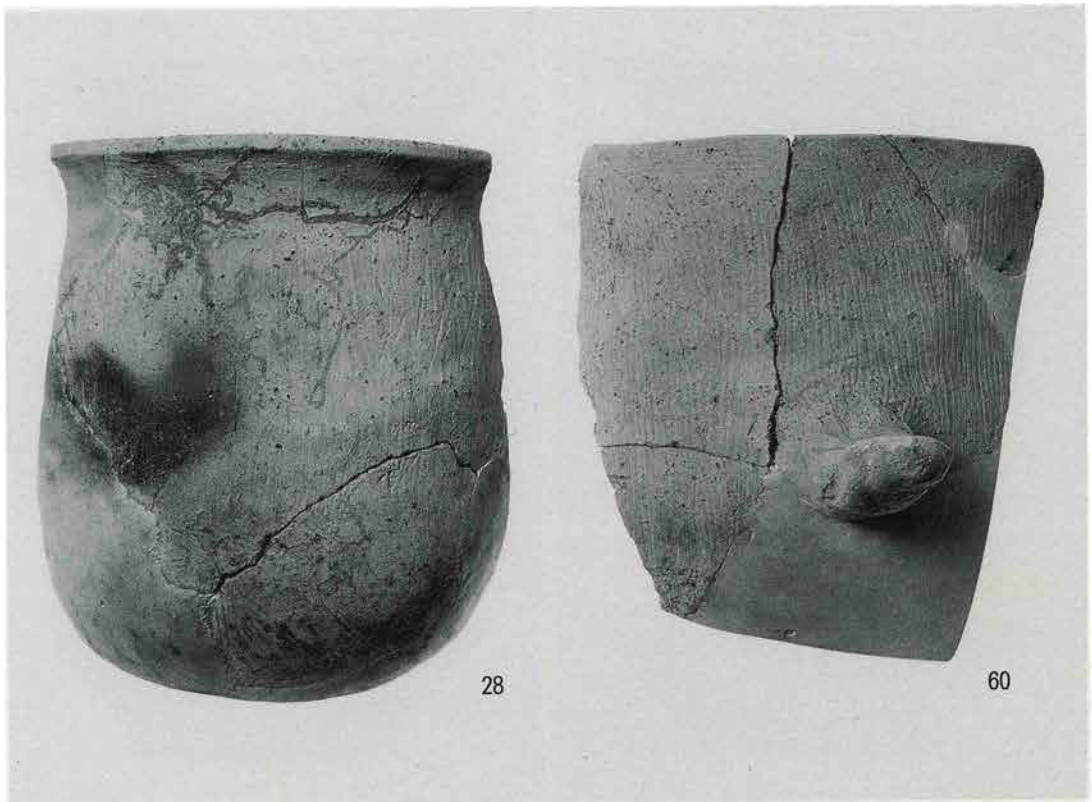
47



52



1. 土師器 甕



2. 土師器 甌



76



70



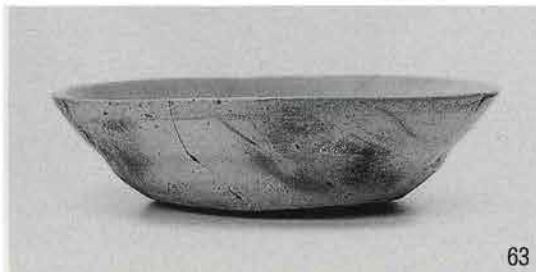
72



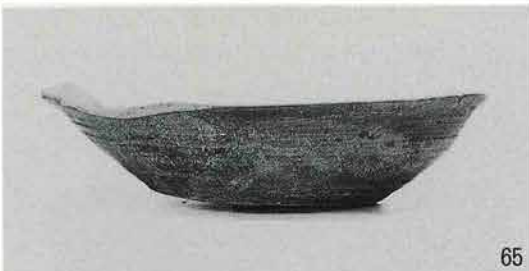
73



66



63



65



71



68



74

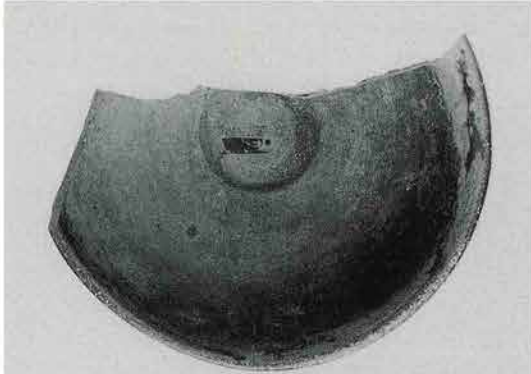
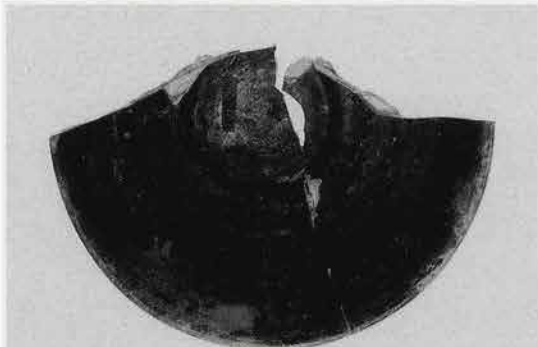


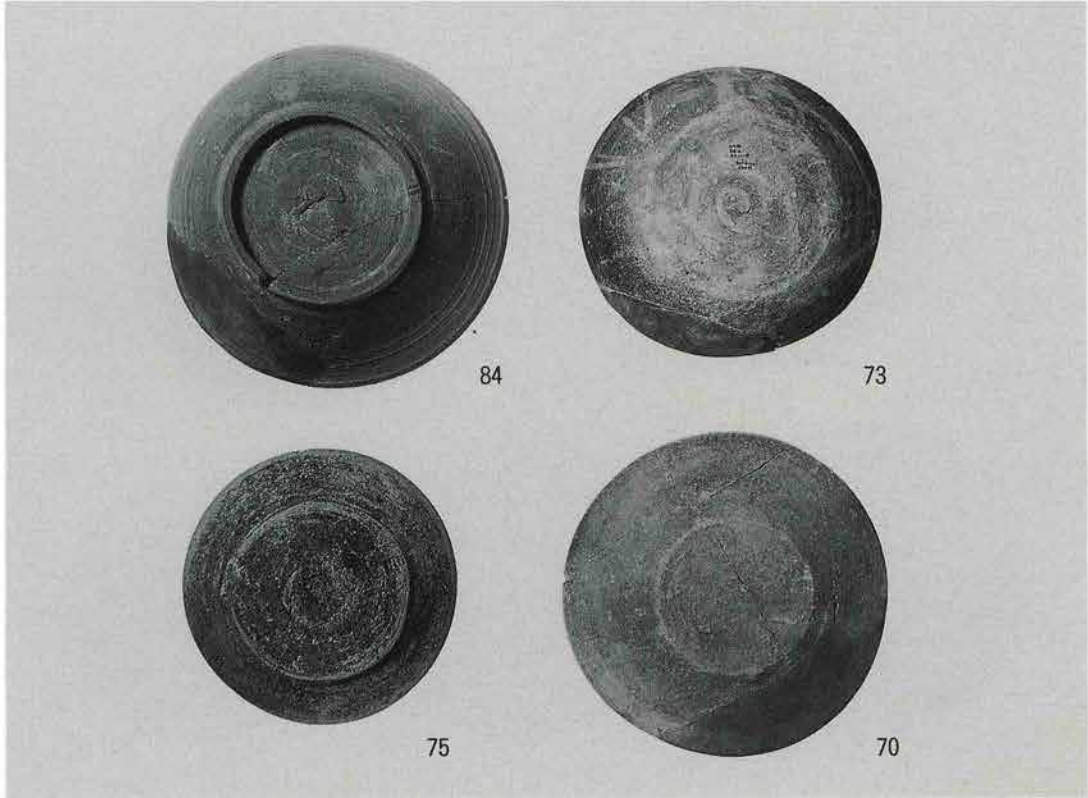
75



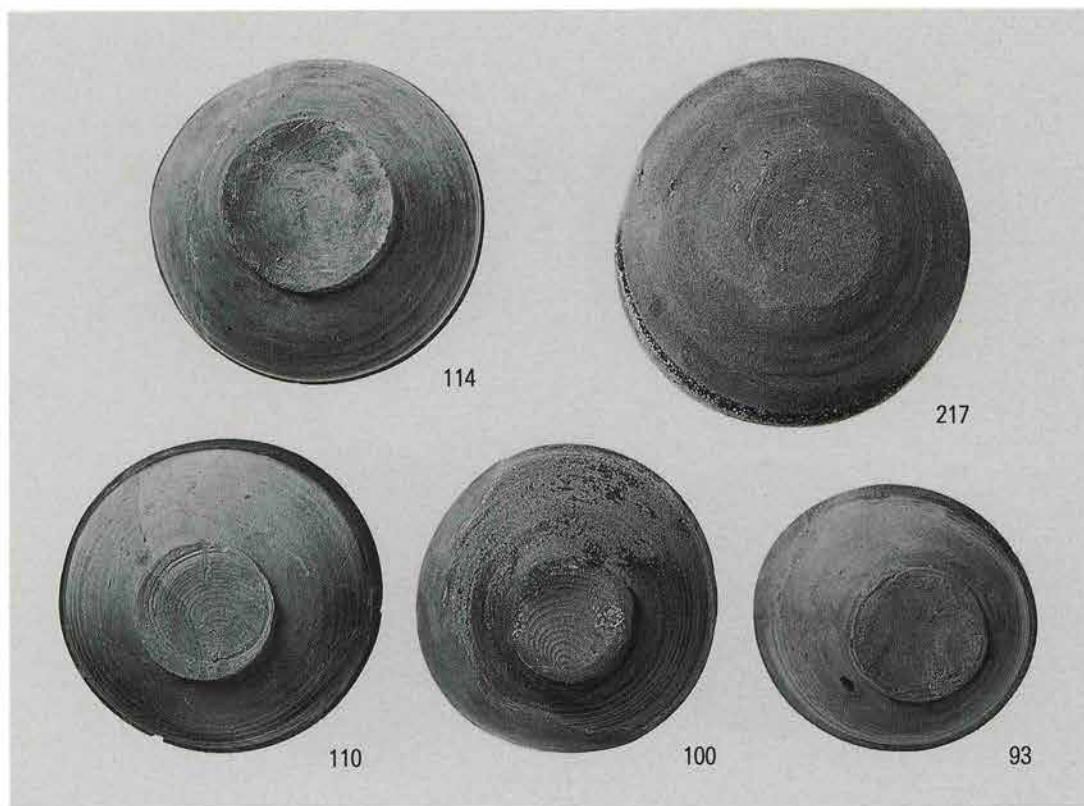
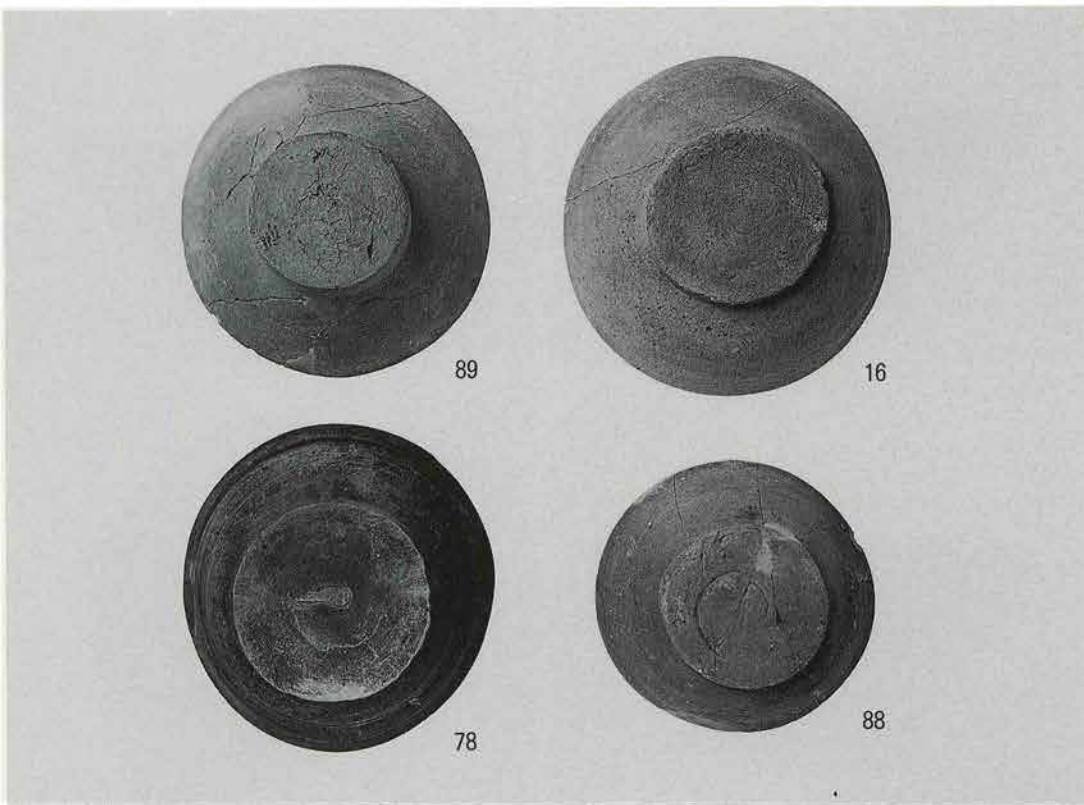
78







須恵器 碗(3)・鉢・瓶、碗と杯の底



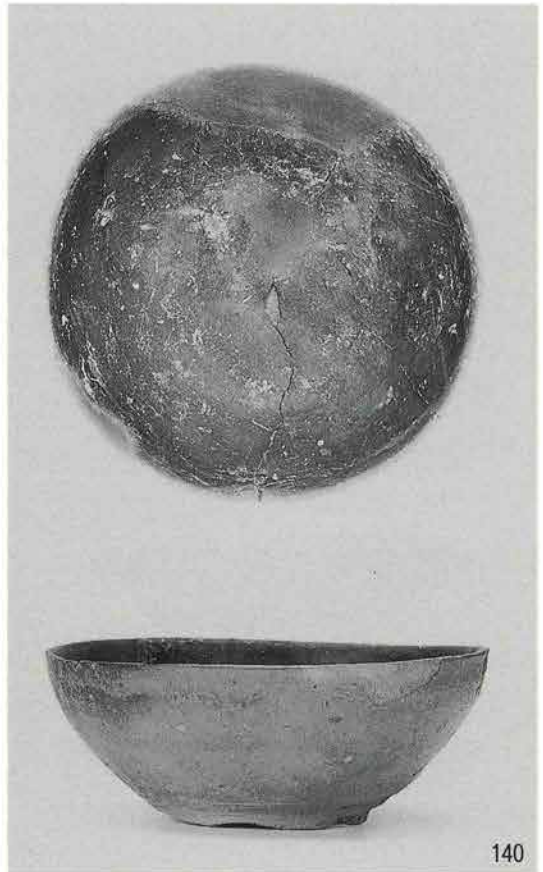
須恵器 碗底



119



147



140

須恵器 壺・黒色土器 碗



145



148



166



174



189



149



150



139



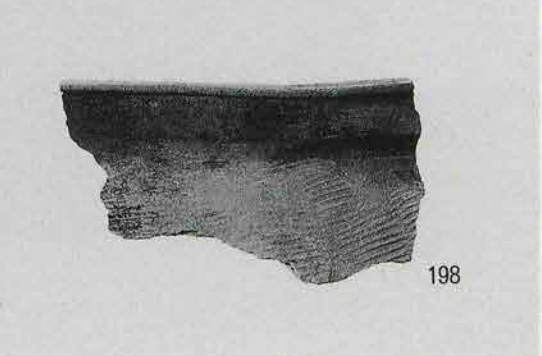
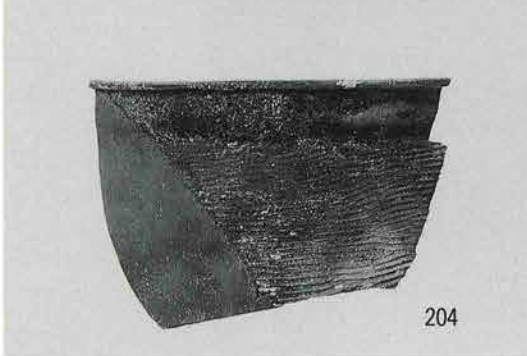
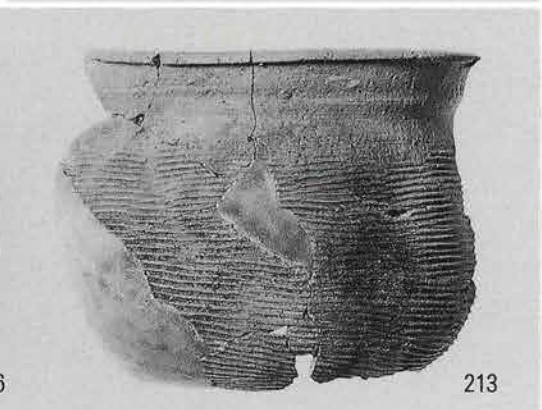
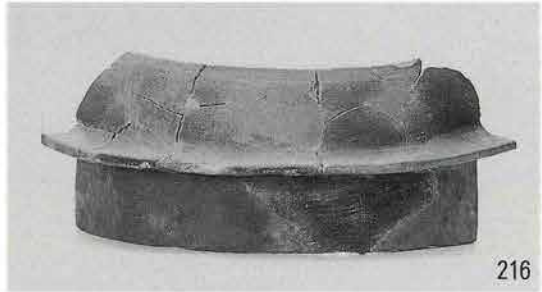
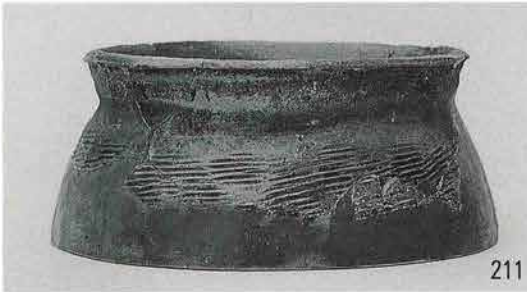
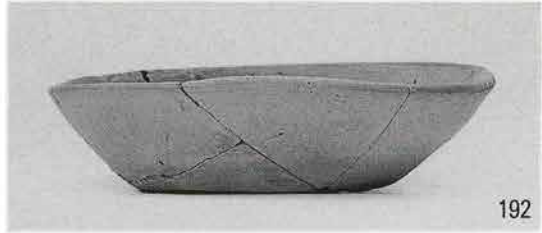
163



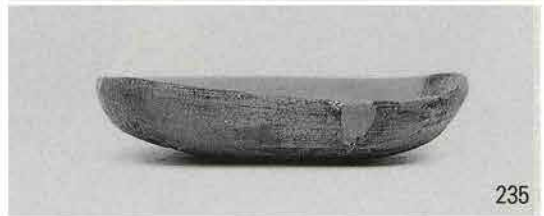
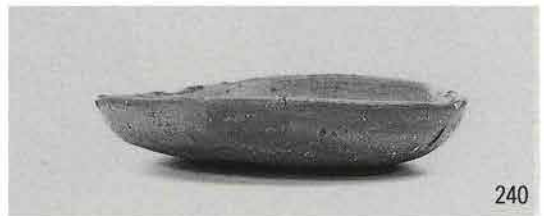
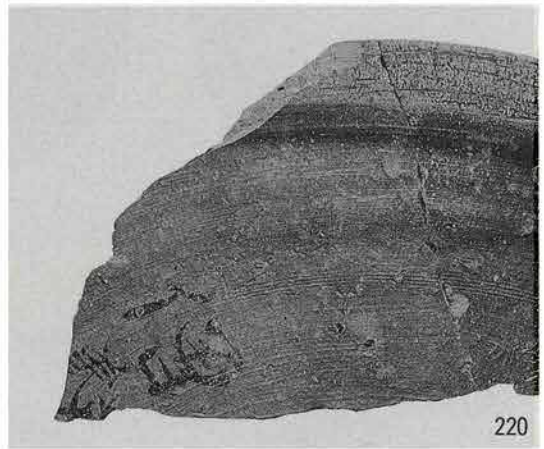
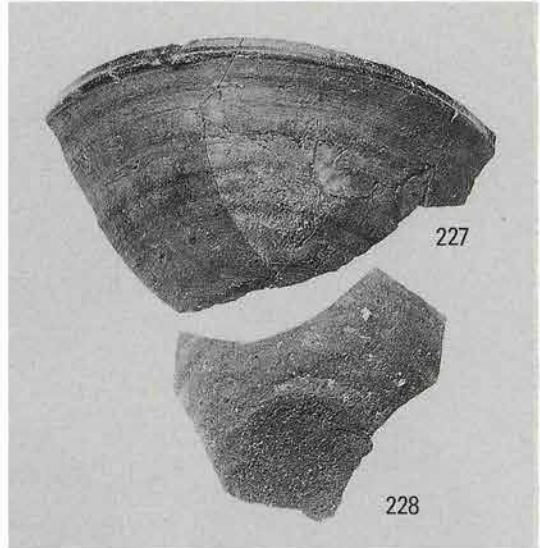
178

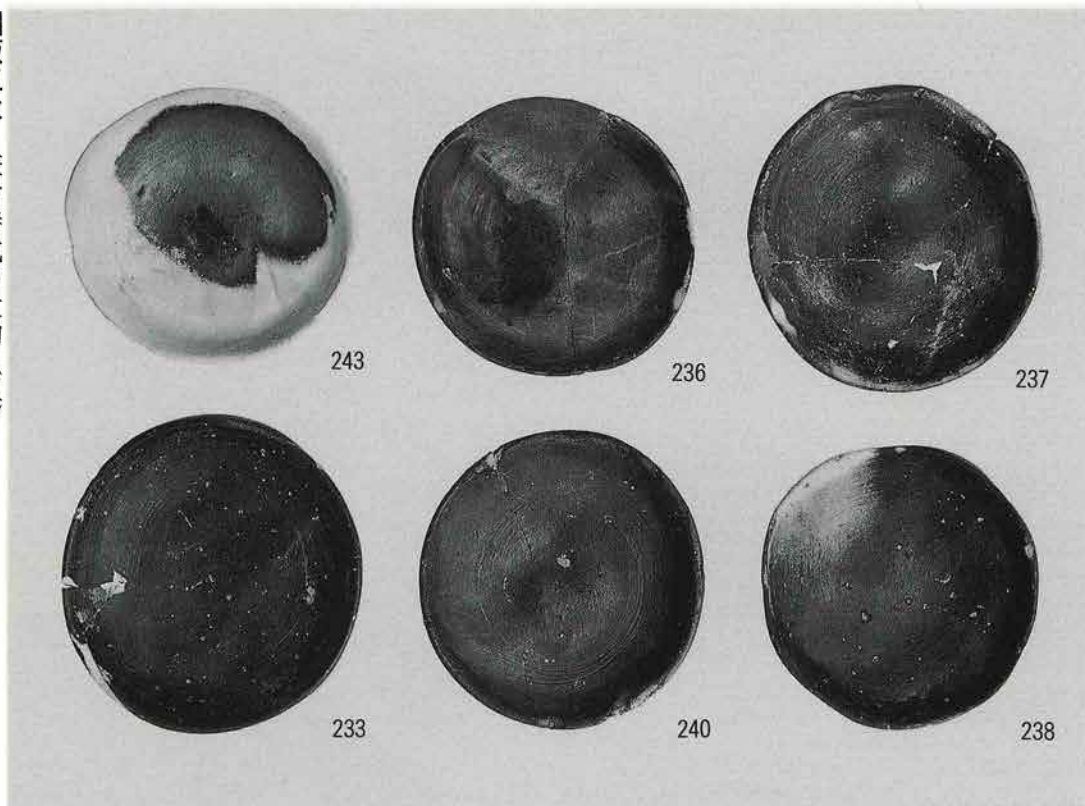


191

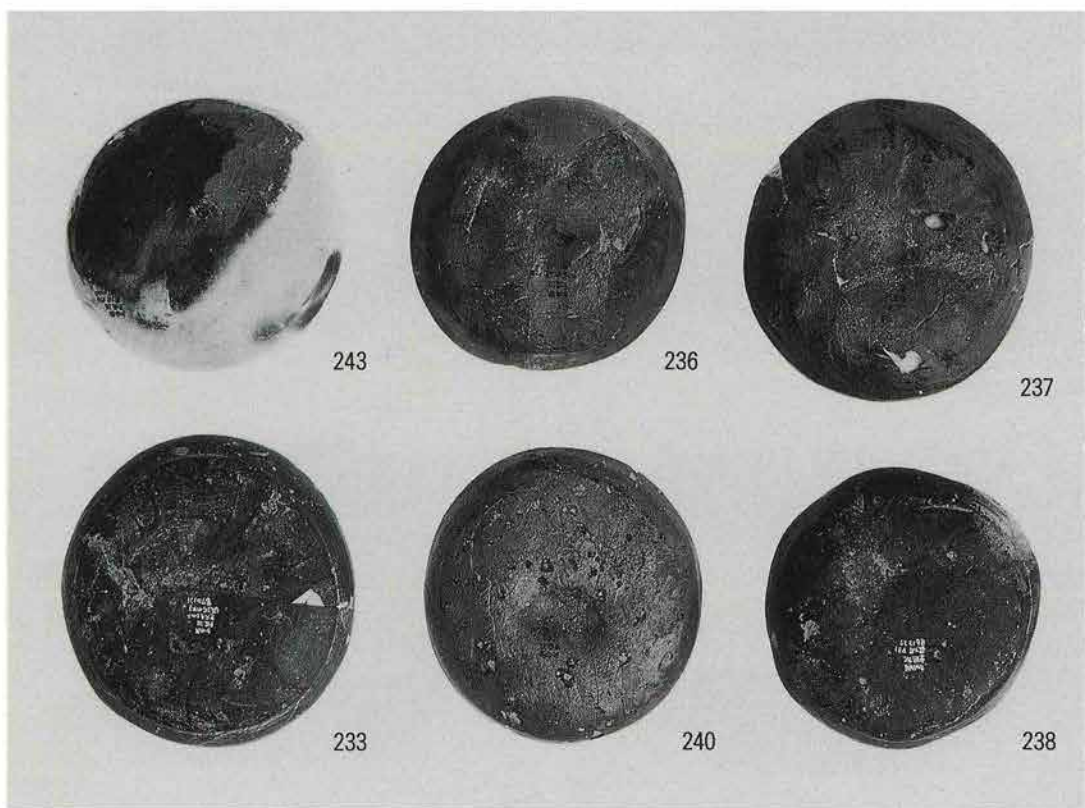








1. 瓦器 皿見込み



2. 瓦器 皿底



瓦器 碗(1)



265



274



263



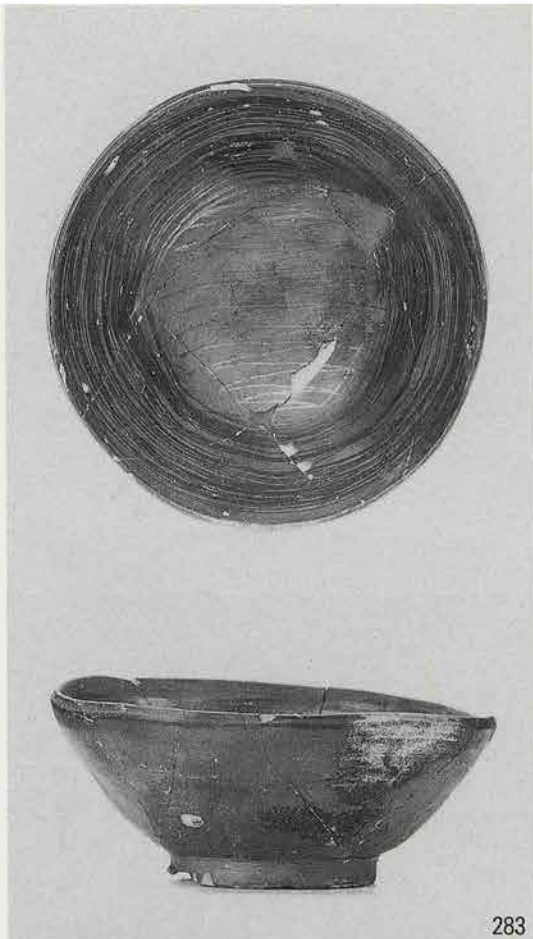
255



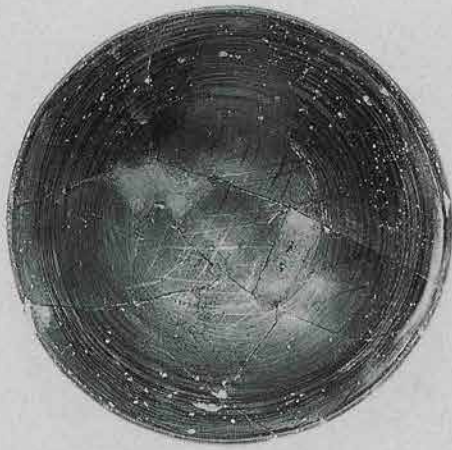
268



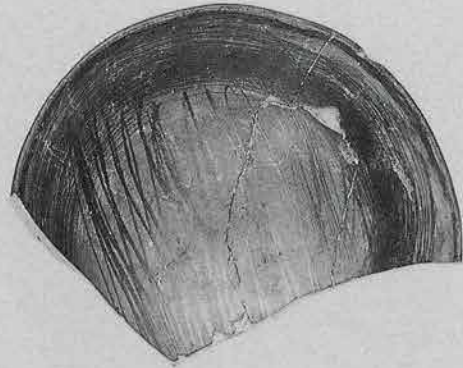
257



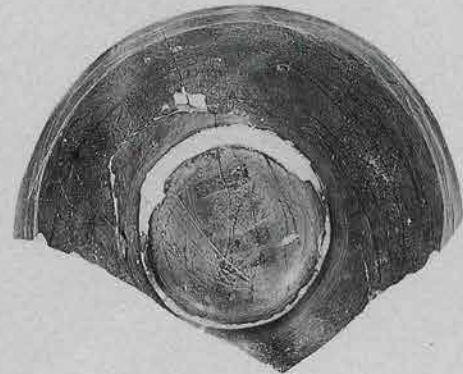
瓦器 碗(3)



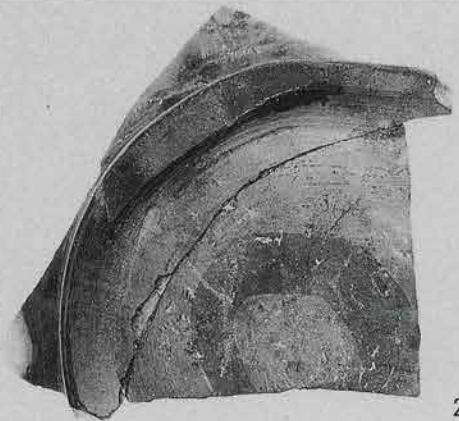
284



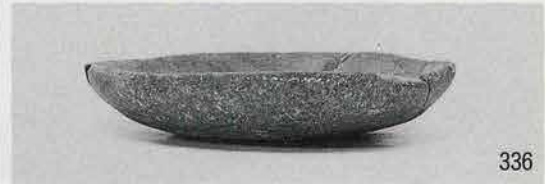
244



256



282

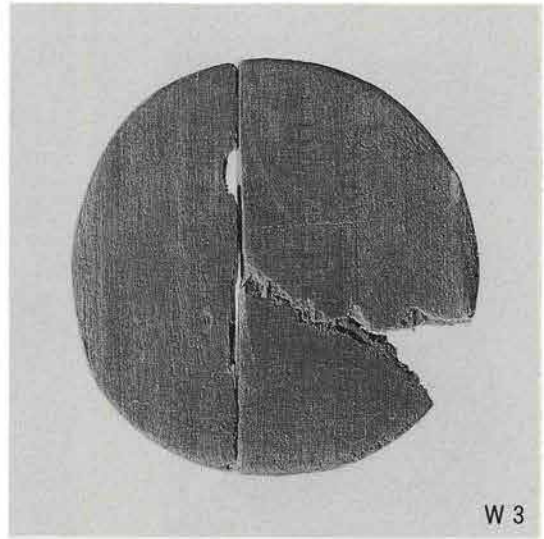
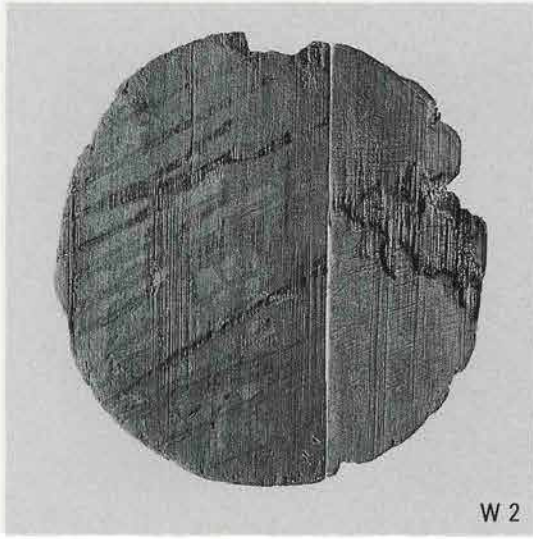


瓦器 碗・墓出土土器(白磁 碗・瓦器 皿)・土壇 3 土師器 皿

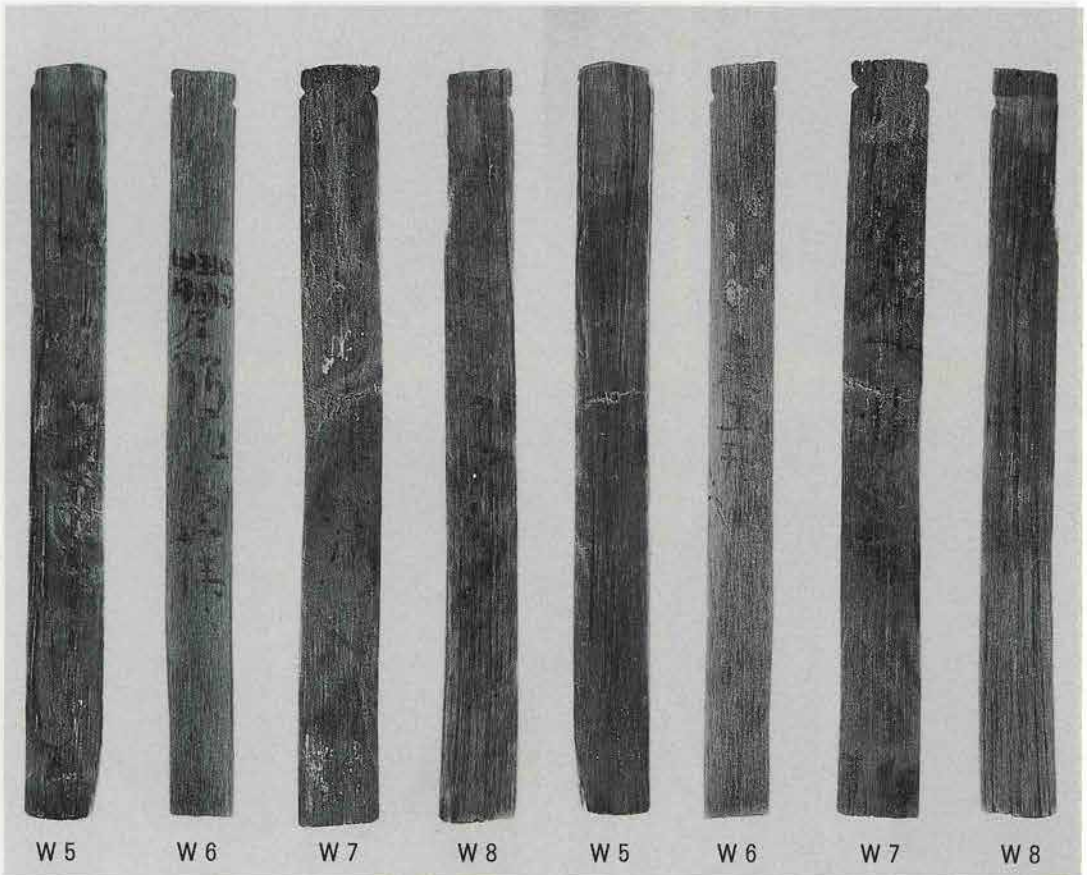


W 1

井戸1出土木製品 曲物

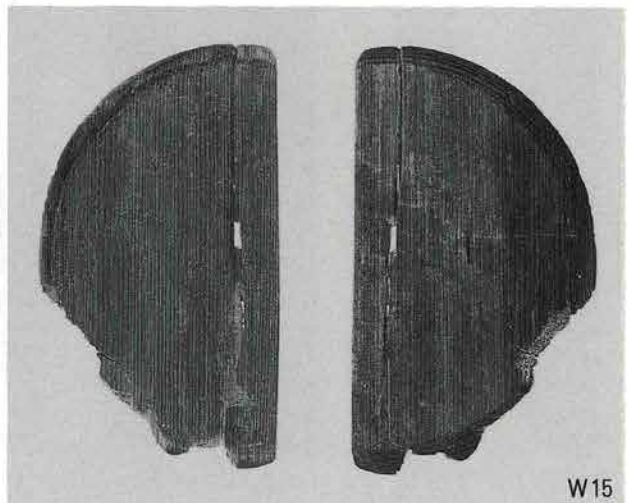
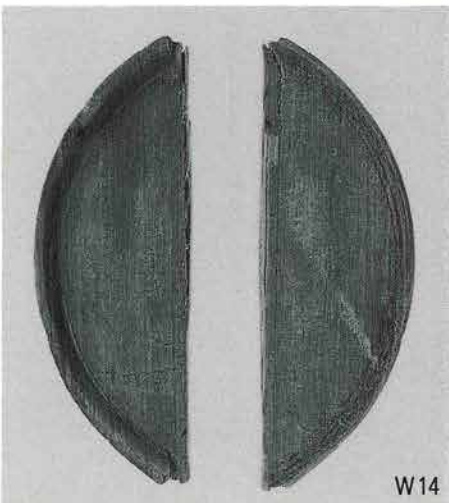
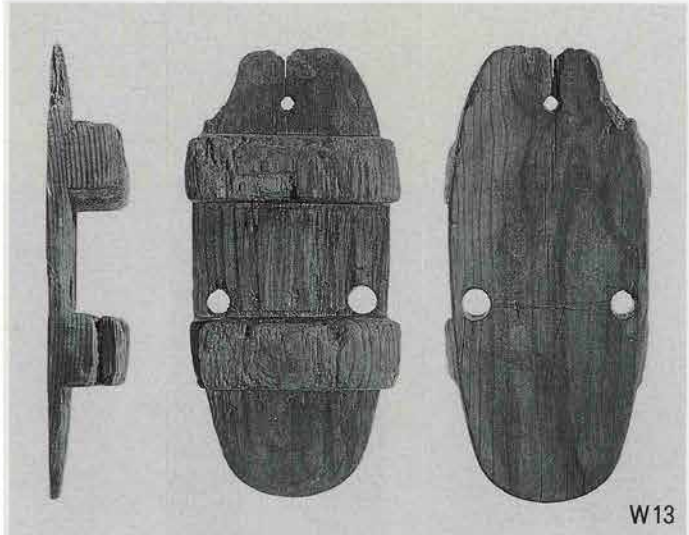
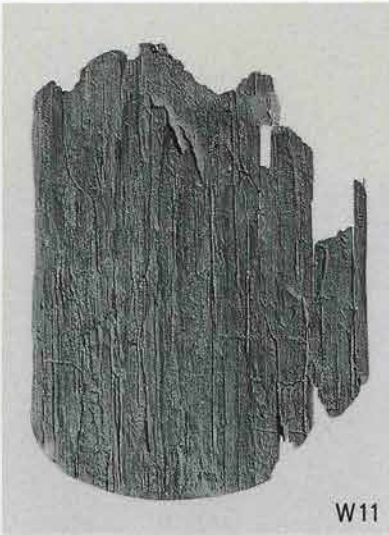
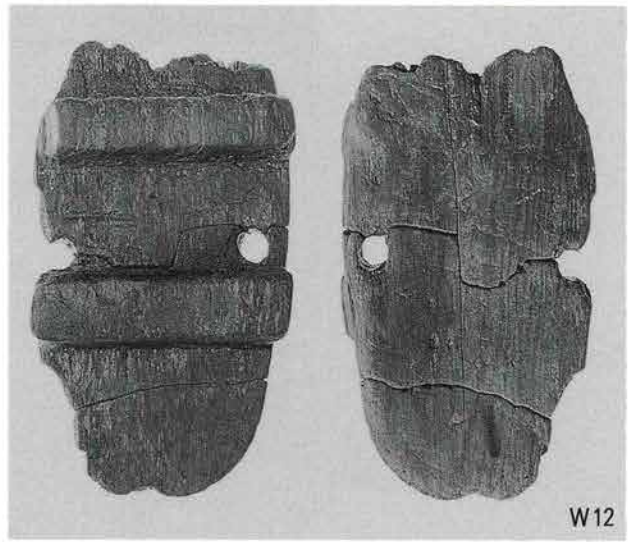
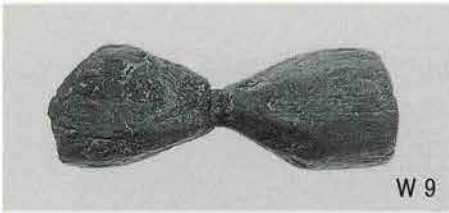


1. 井戸1出土木製品 曲物底板

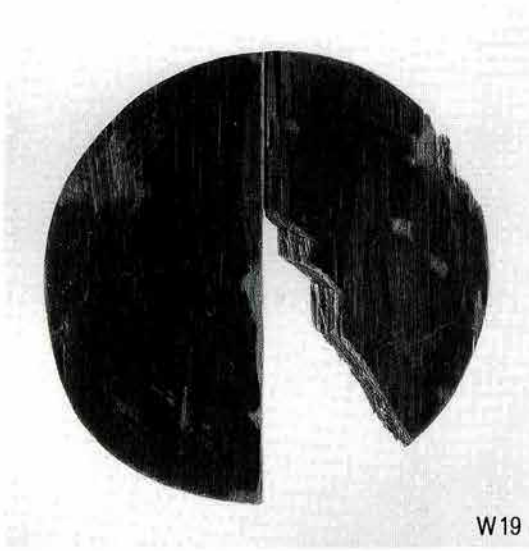


2. 井戸1出土木製品 呪符木簡 (表)

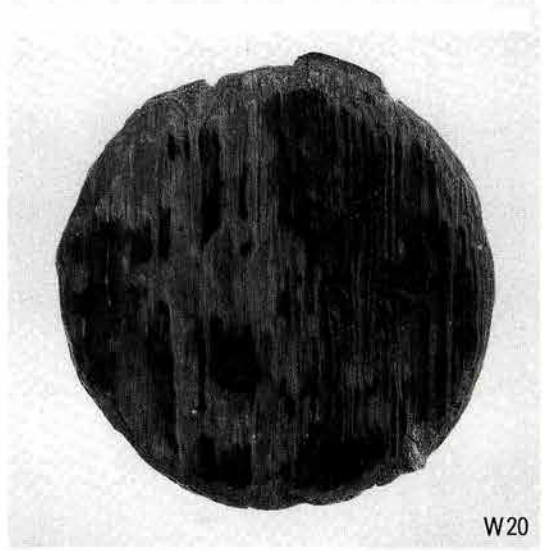
(裏)



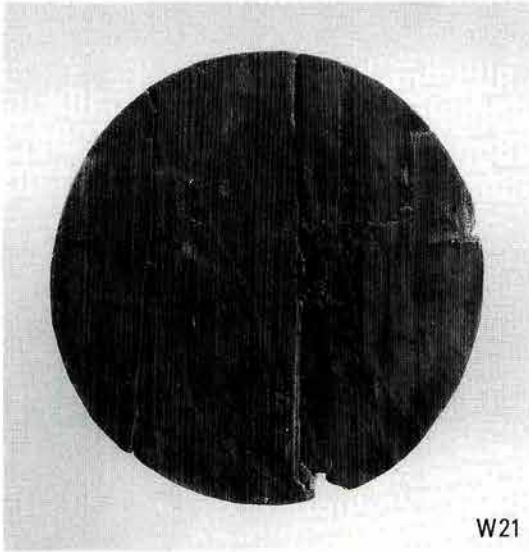
旧河道出土木製品 木錘・下駄・紡錘車・草履・下駄・盆



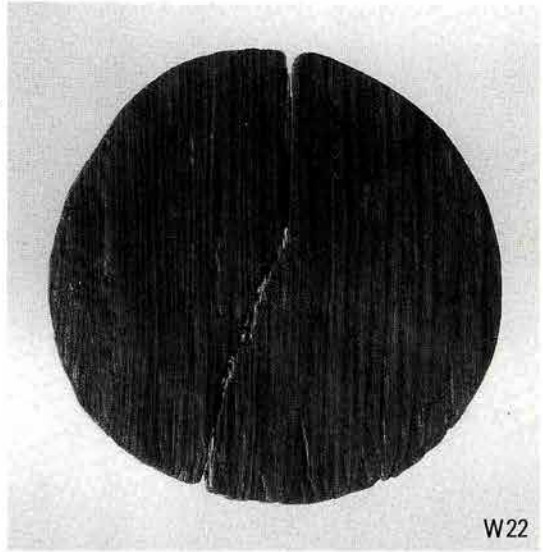
W19



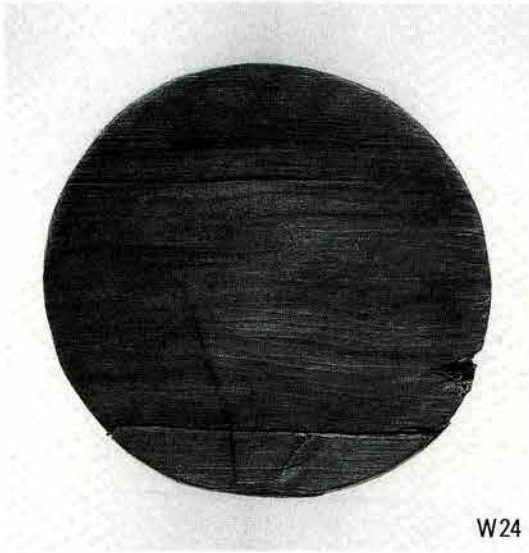
W20



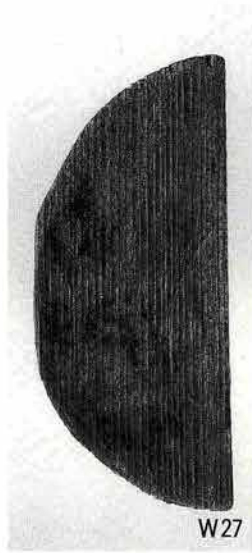
W21



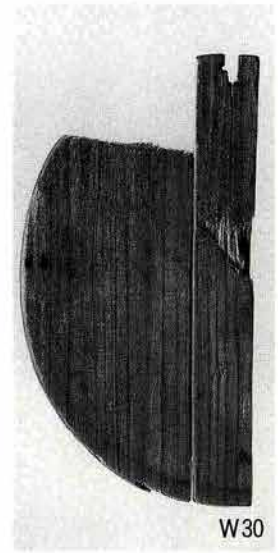
W22



W24

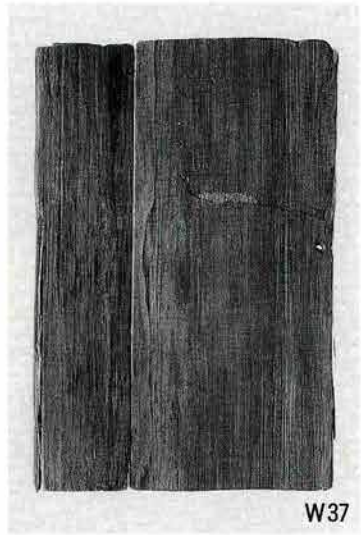
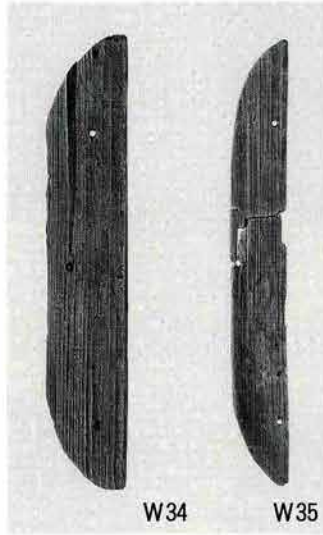
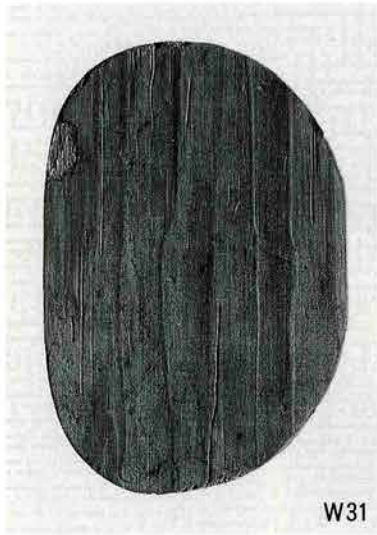
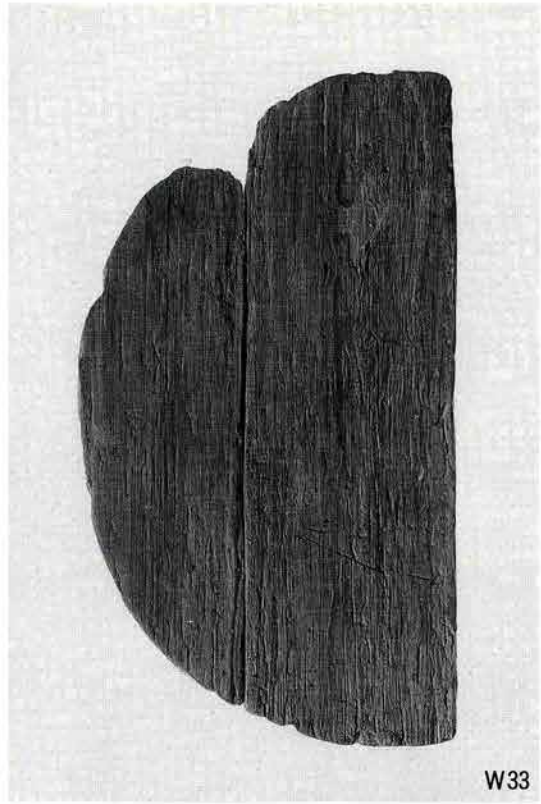
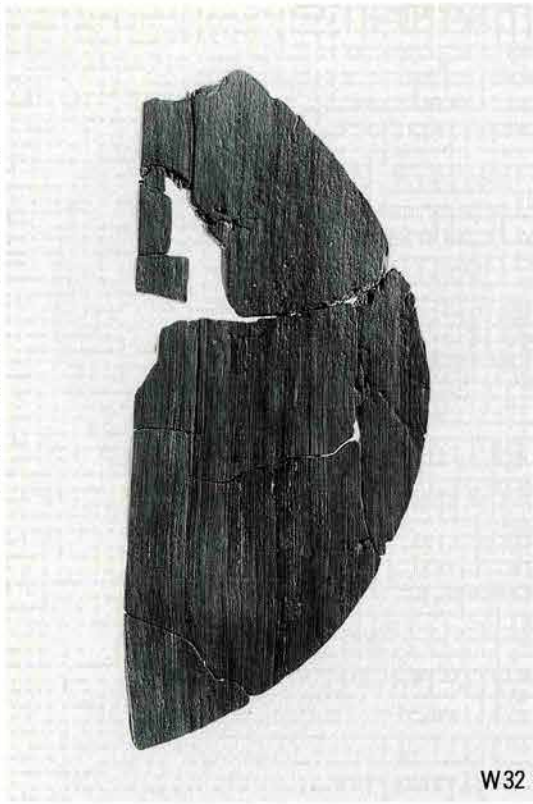


W27

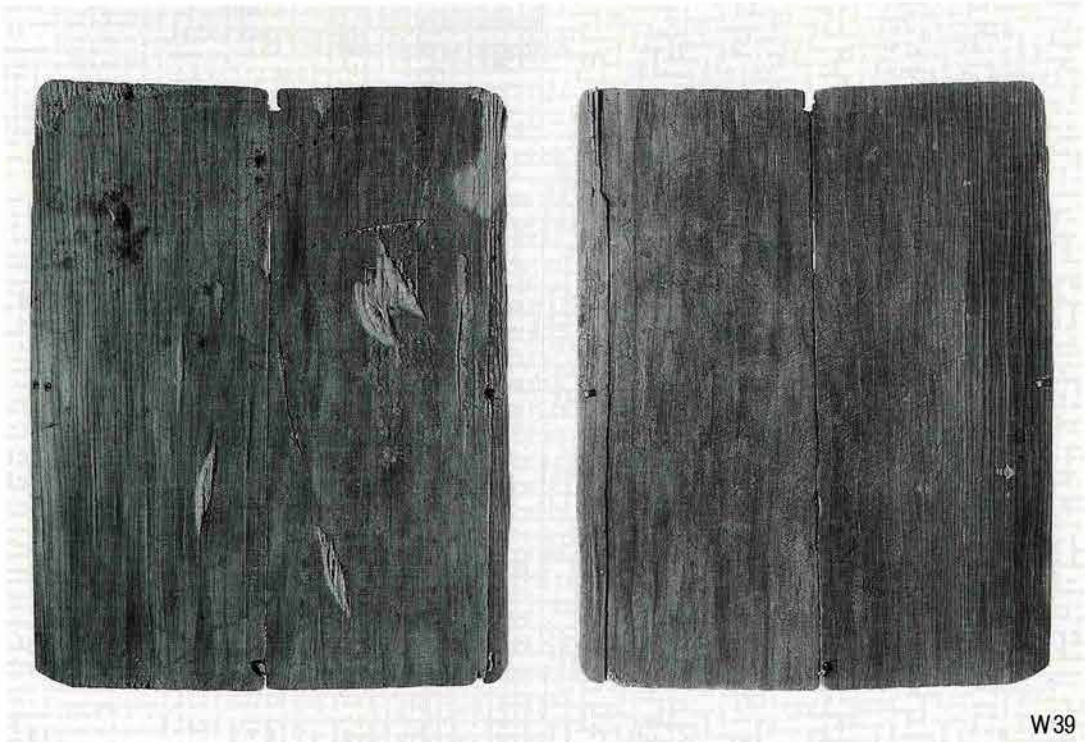
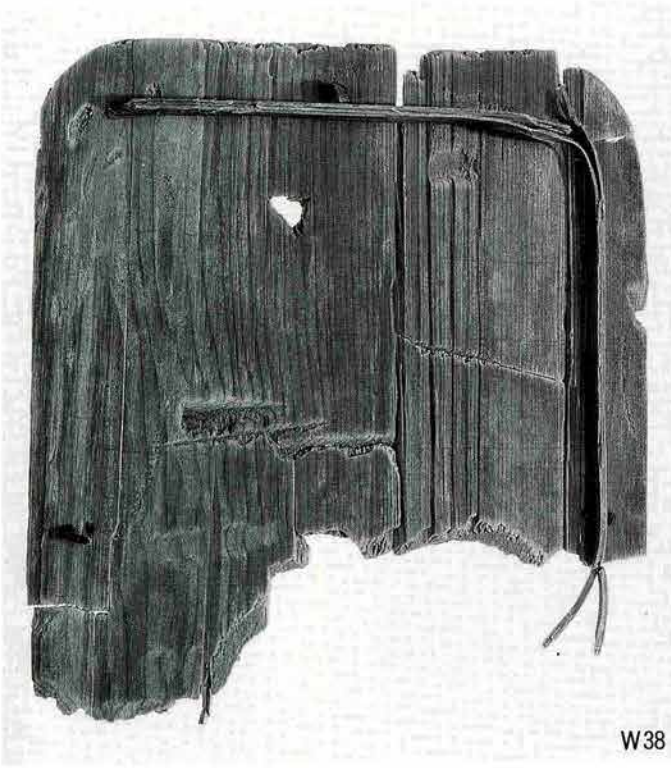


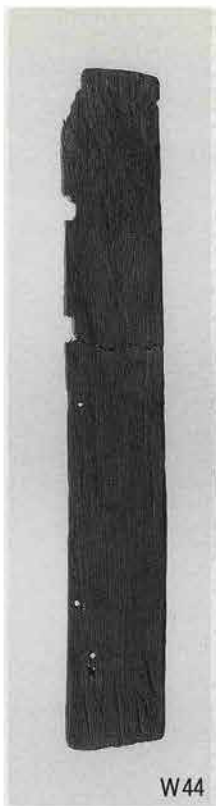
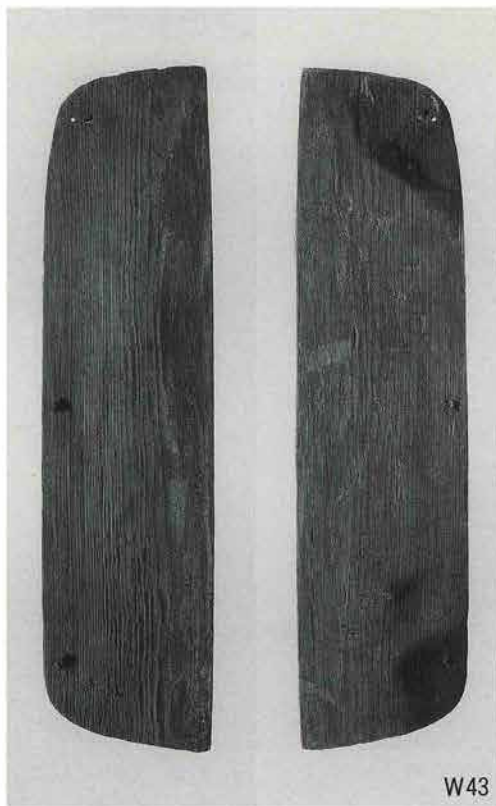
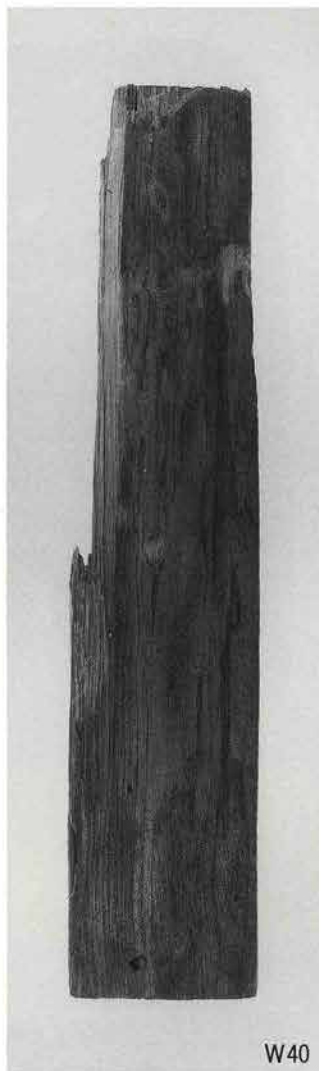
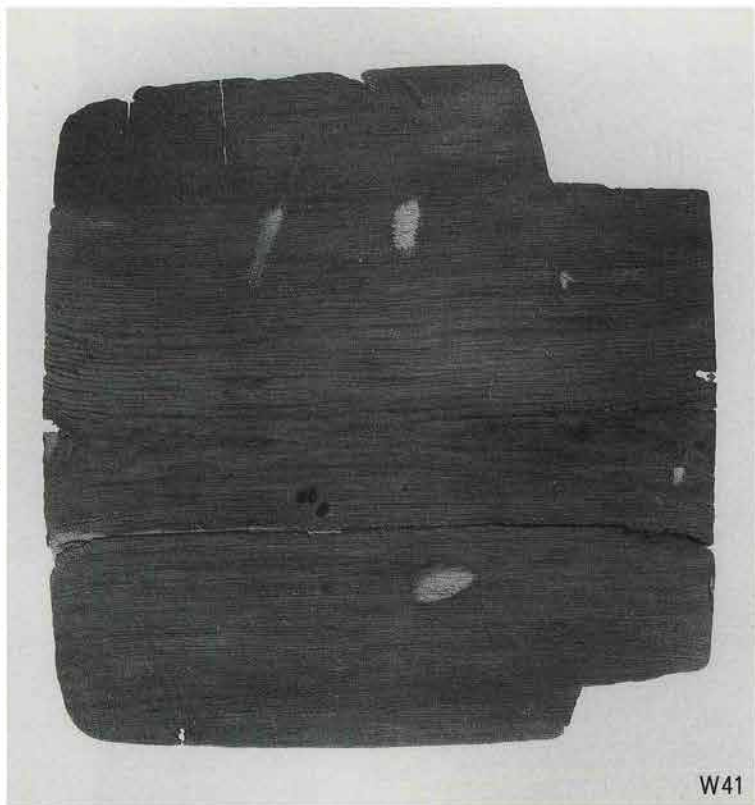
W30

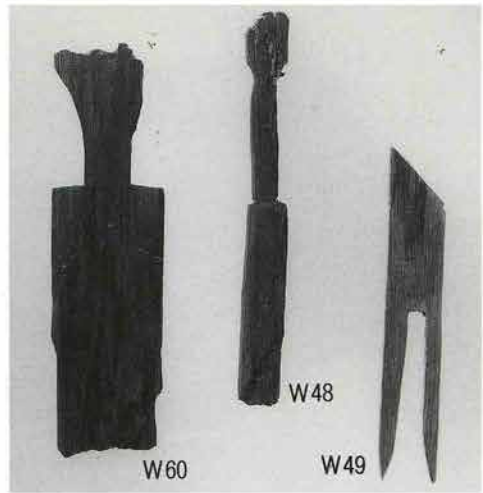
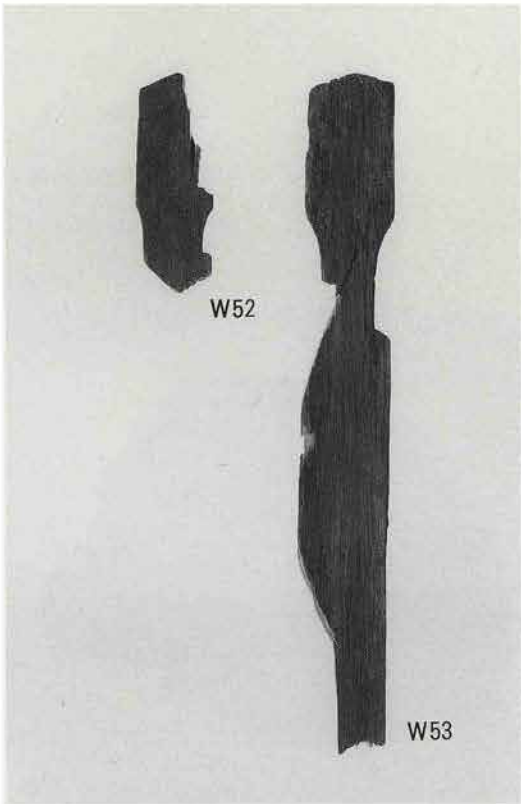
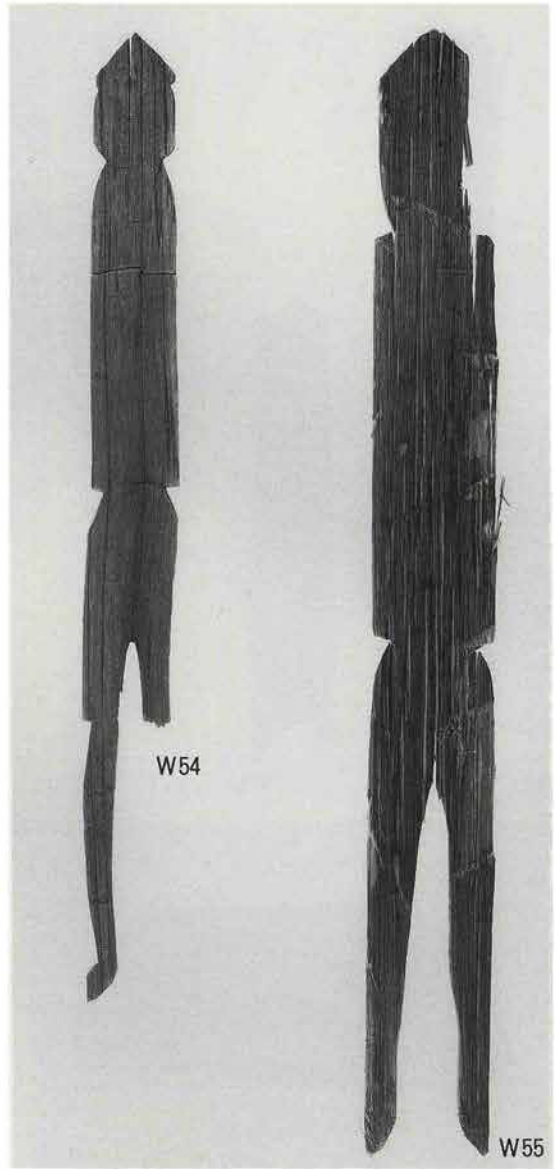
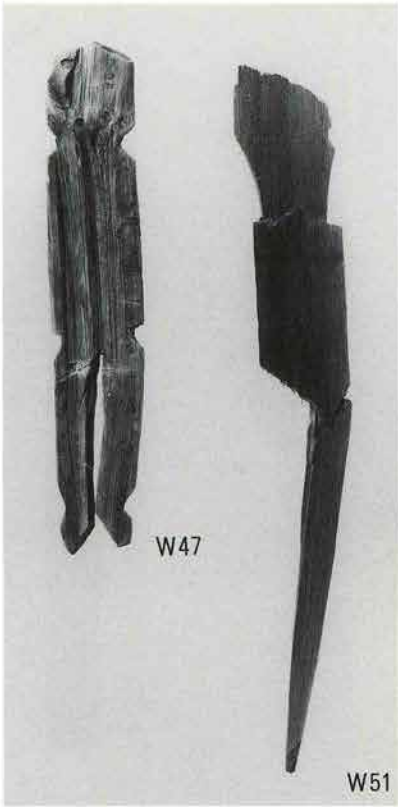
図版六六 平安〜鎌倉時代の遺物(四)



旧河道出土木製品 曲物底板他

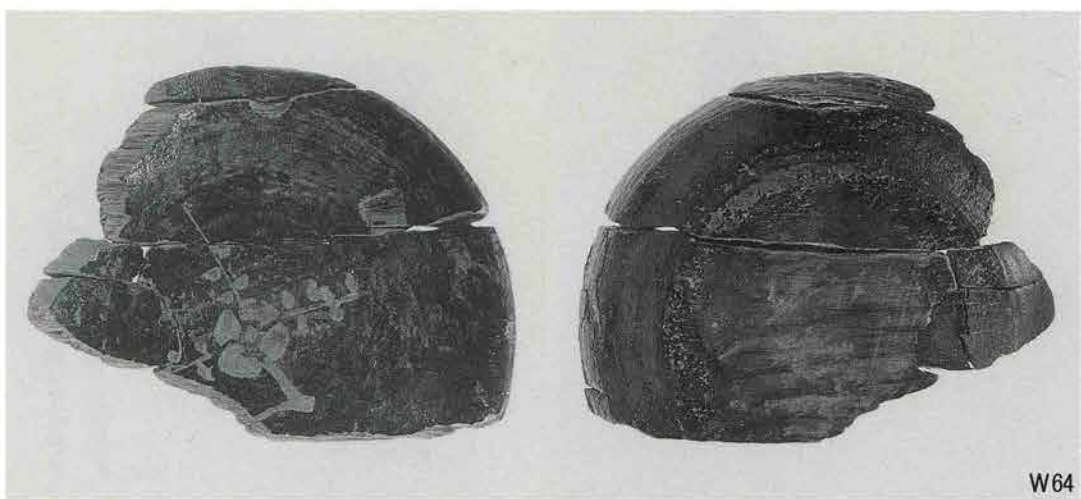
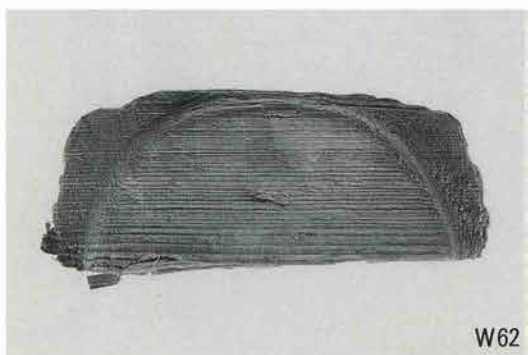
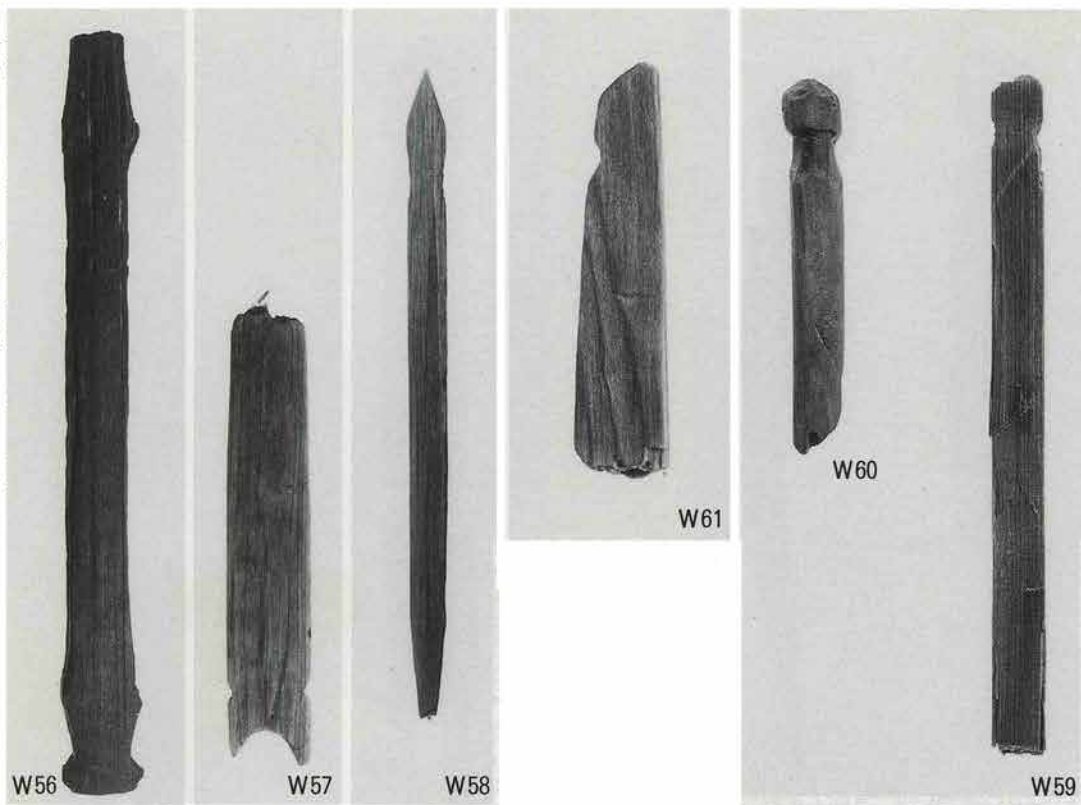




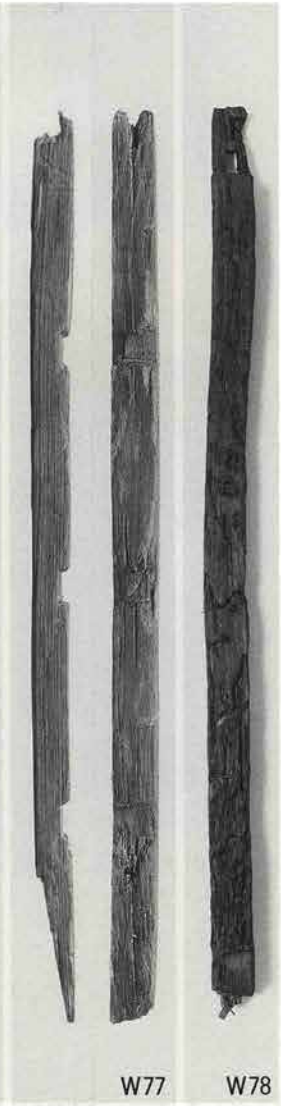
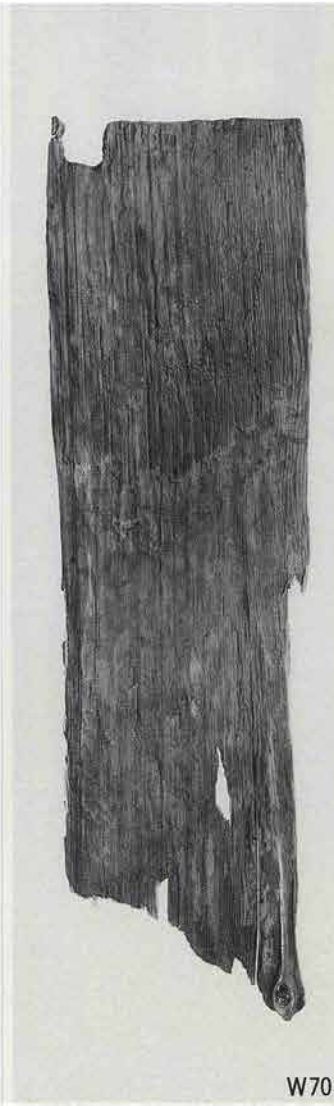
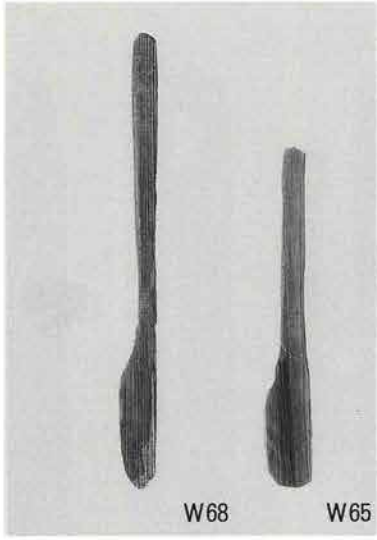
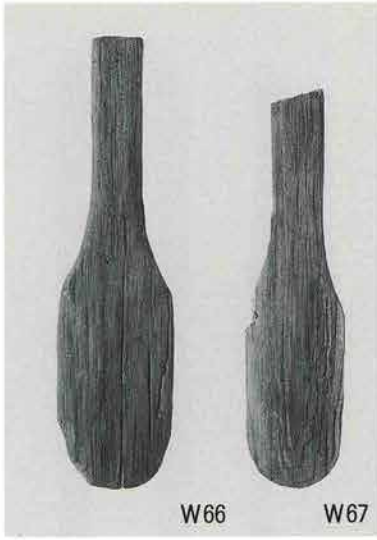


旧河道出土木製品 人形

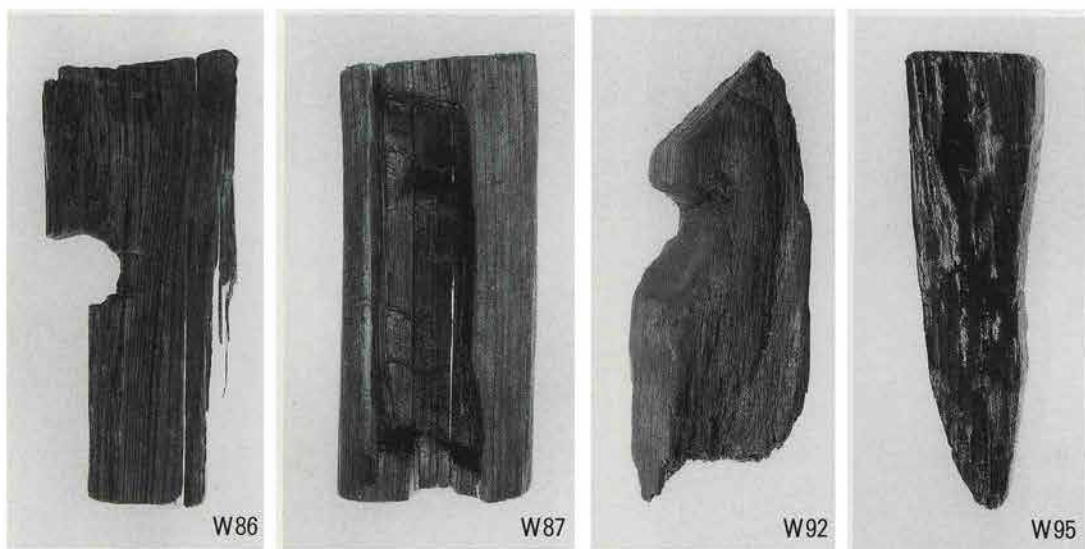
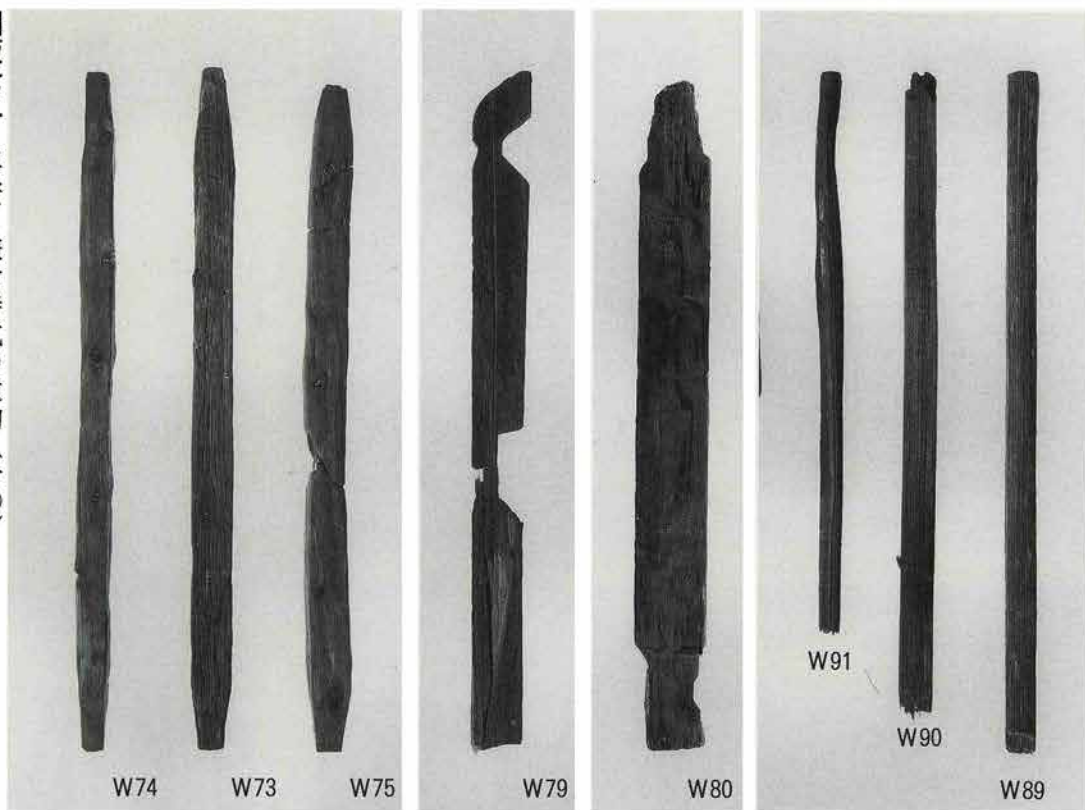
図版七〇 平安〜鎌倉時代の遺物(八)



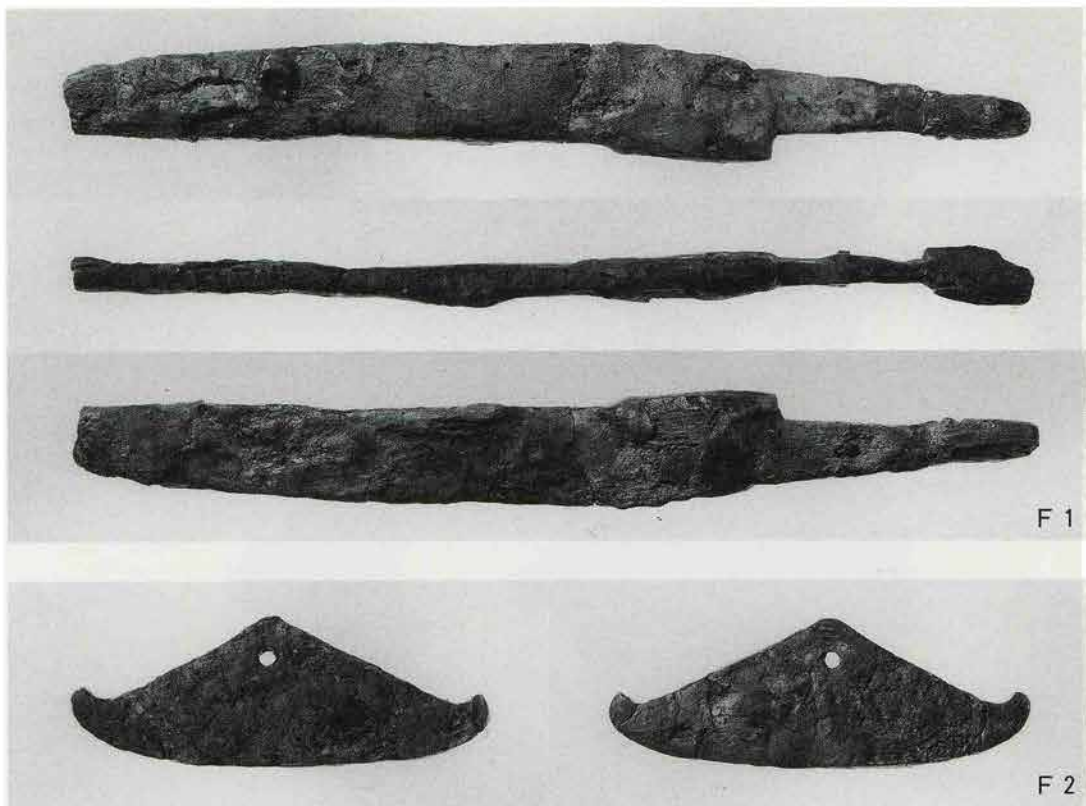
旧河道出土木製品 祭祀具・織具・椀・漆皿



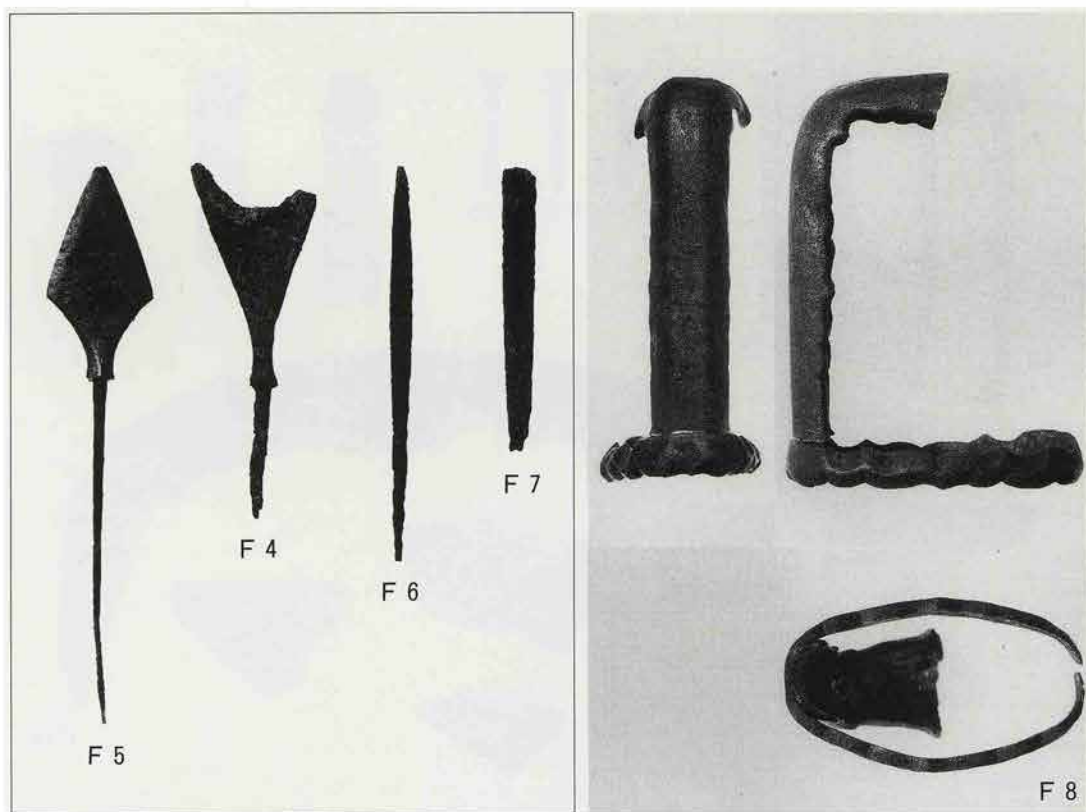
旧河道出土木製品 杓子・匙他



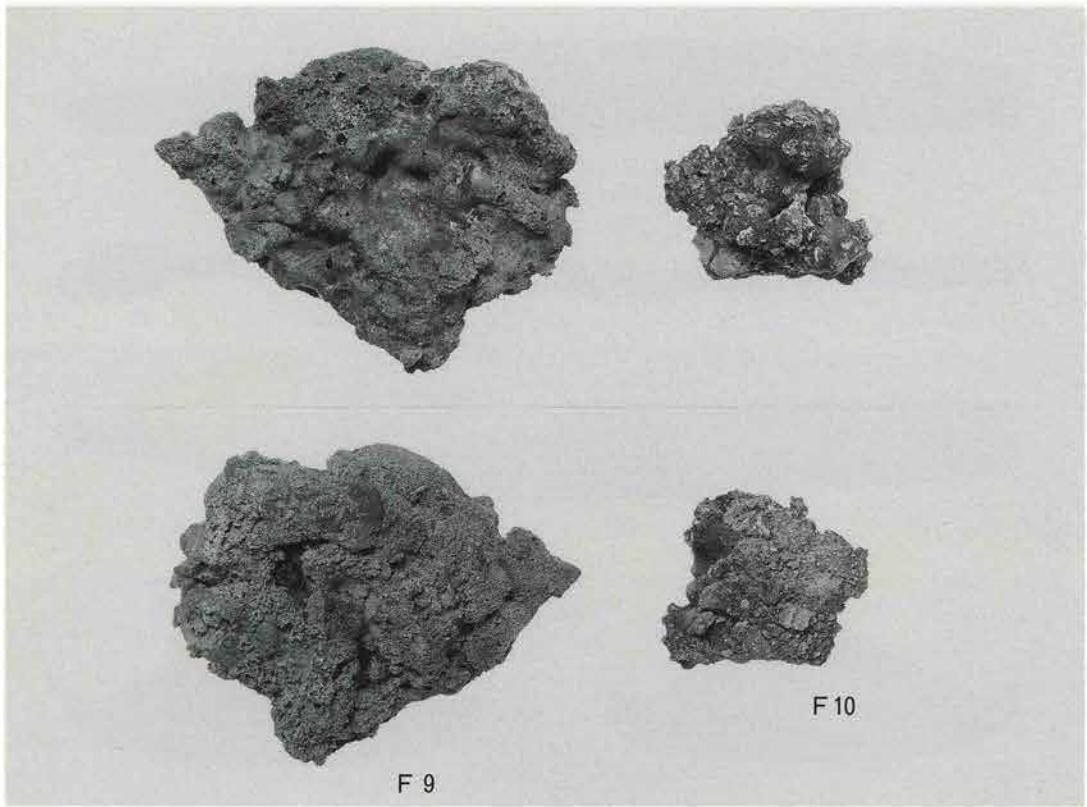
旧河道出土木製品 棒他



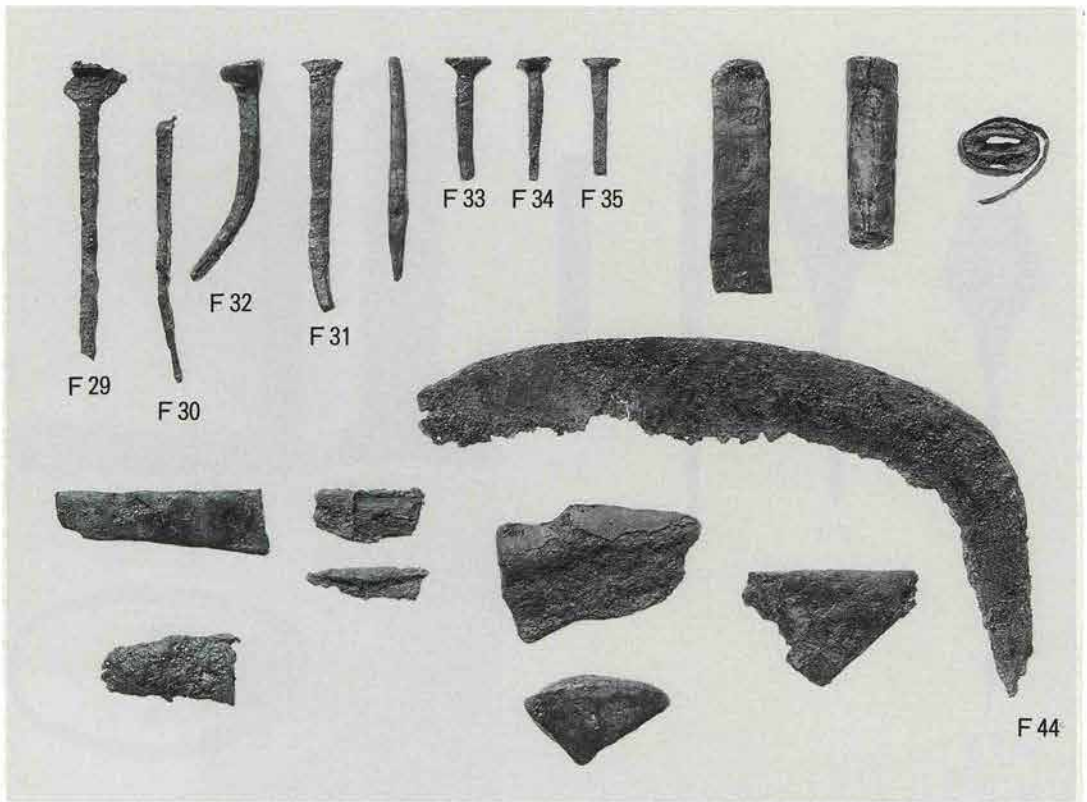
1 墓出土鉄製品 刀・火打金



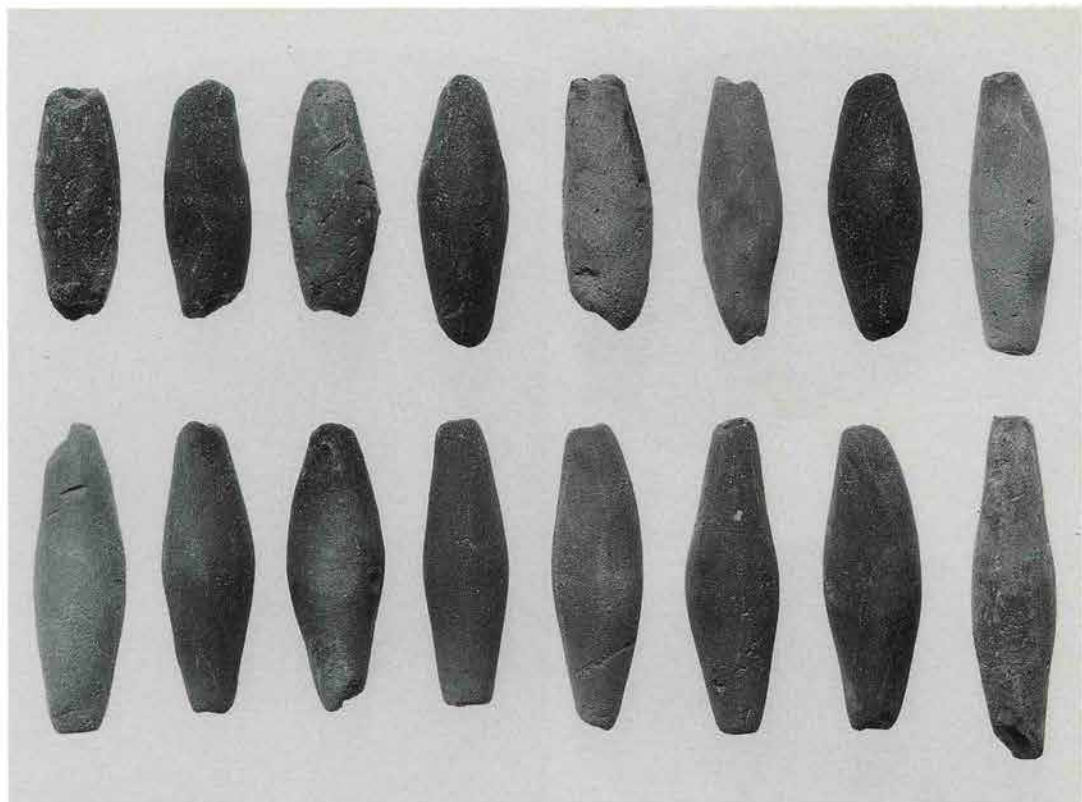
2 東堀、旧河道出土鉄・銅製品 鏃・刀石突



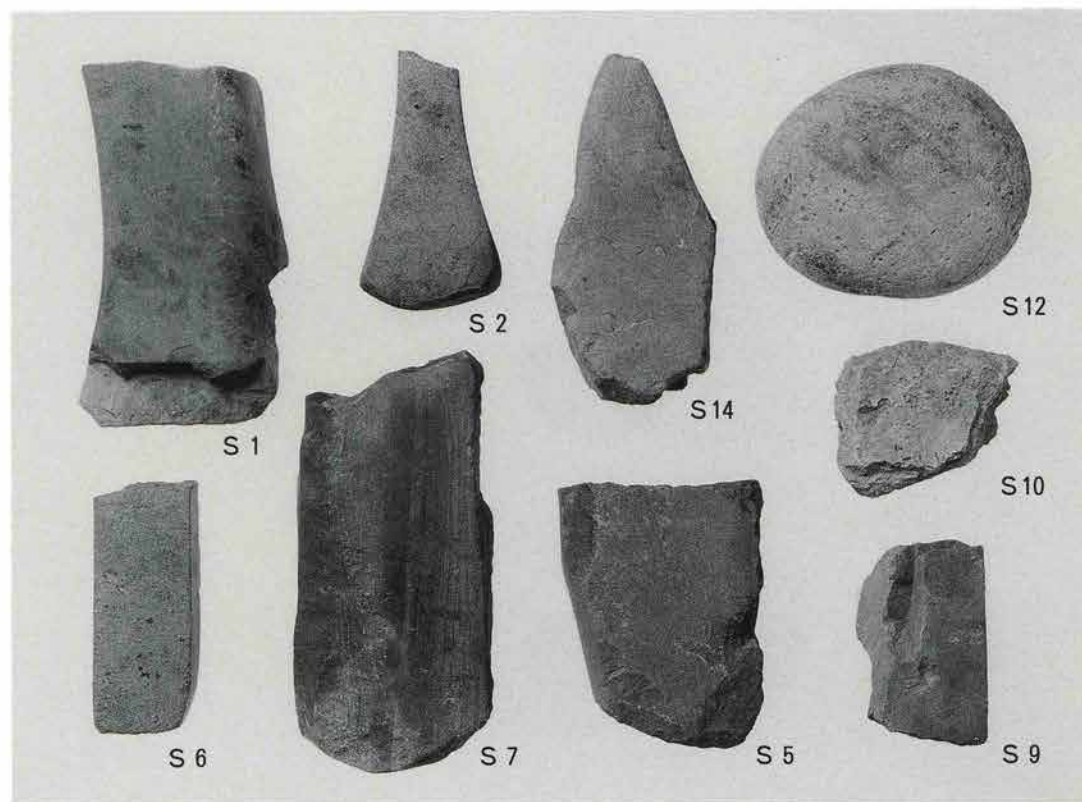
1. 旧河道出土 鉄滓



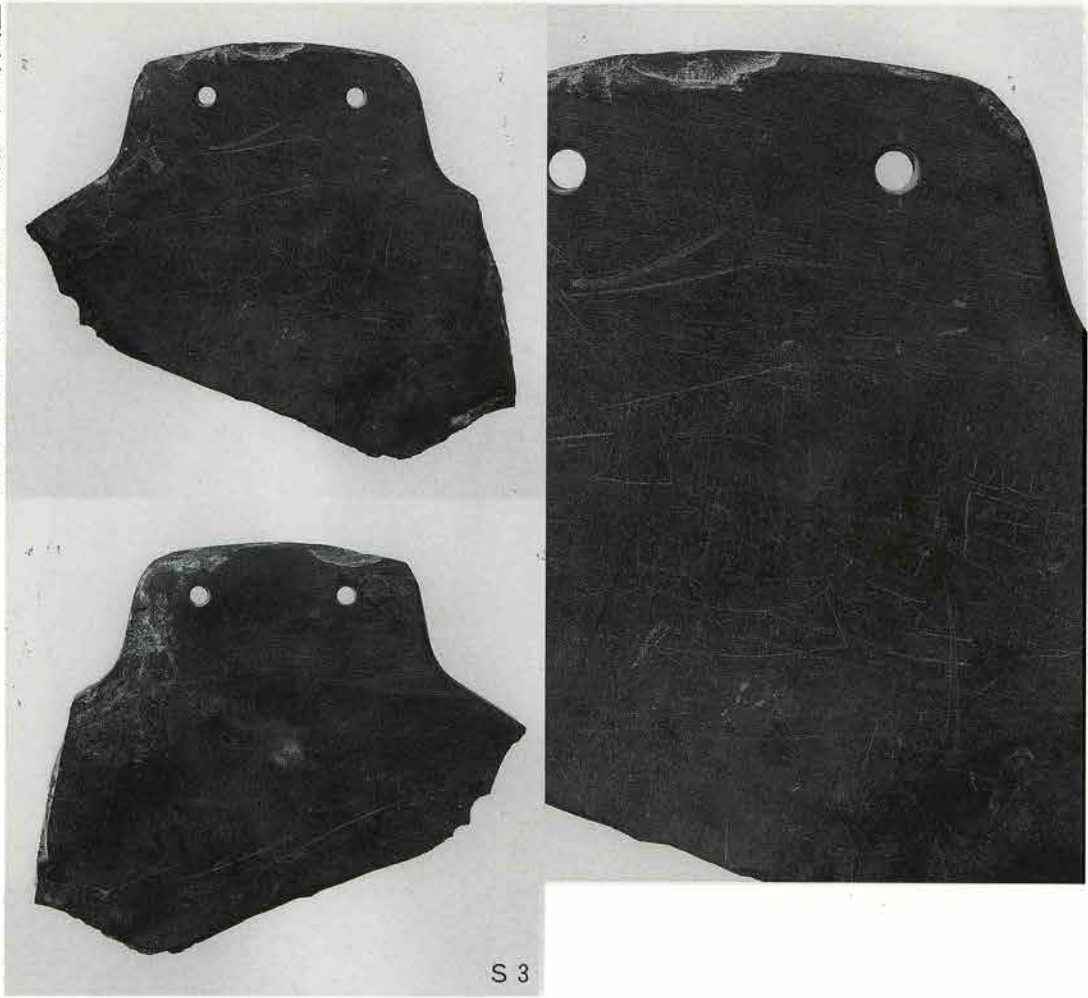
2. 中世包含層出土 鉄・銅製品



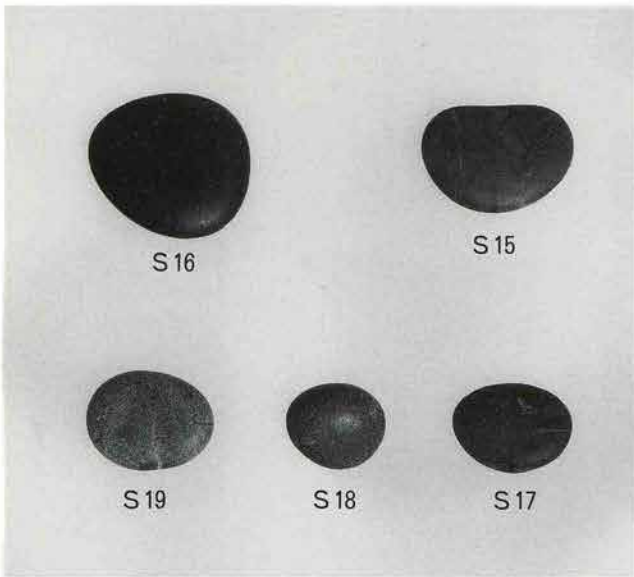
1. 旧河道出土 土錘



2. 砥石 (一部古墳時代の砥石含む)



1. 旧河道出土 石包丁形石製品



2. 基石



56



77



57



78



62



79



63



80

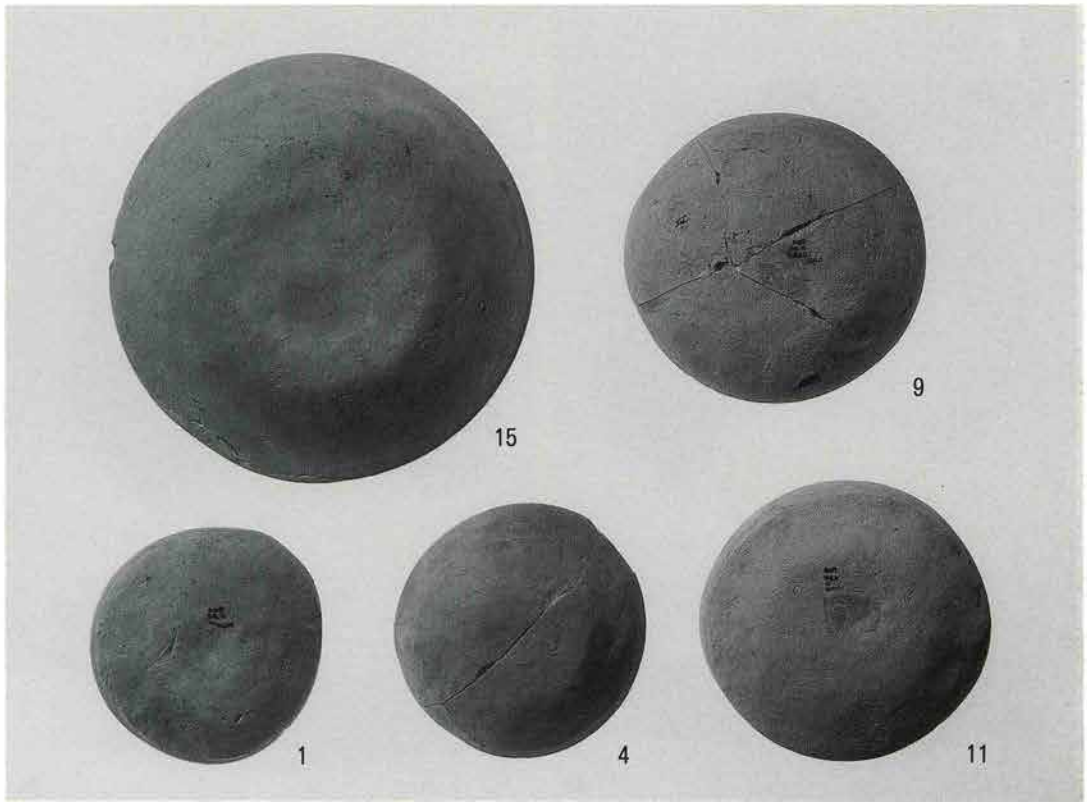
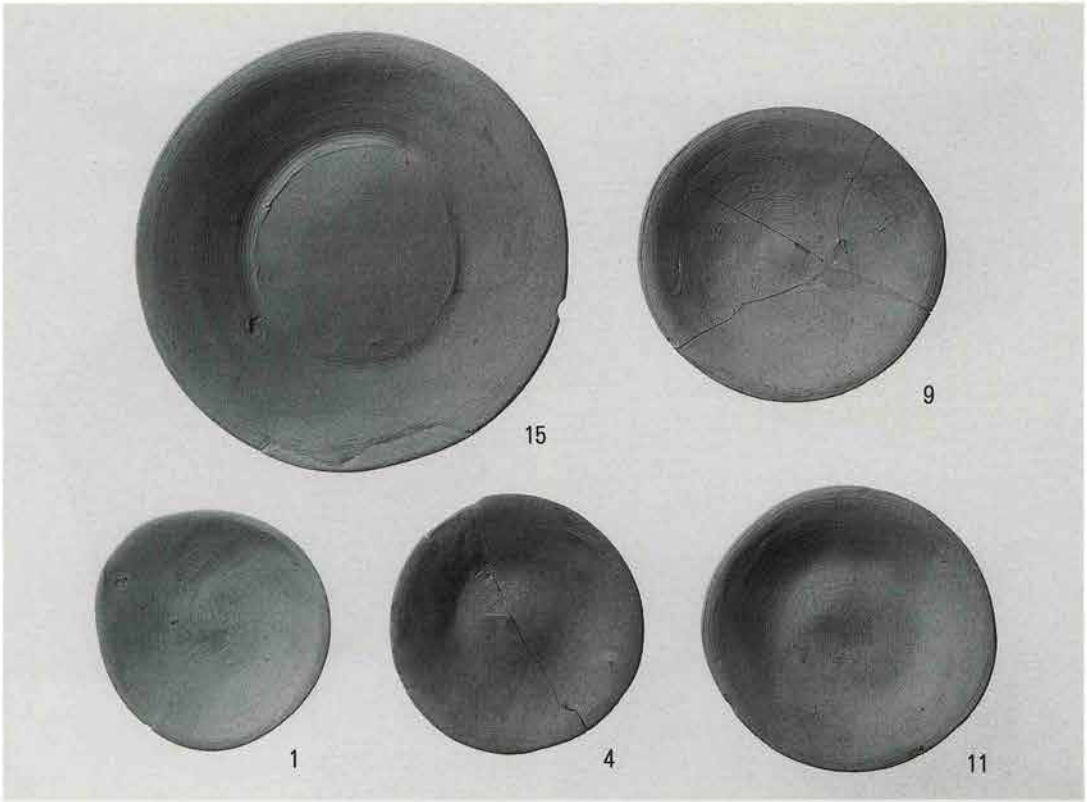


64



102





土師器 皿(3)(上:見込み、下:底)



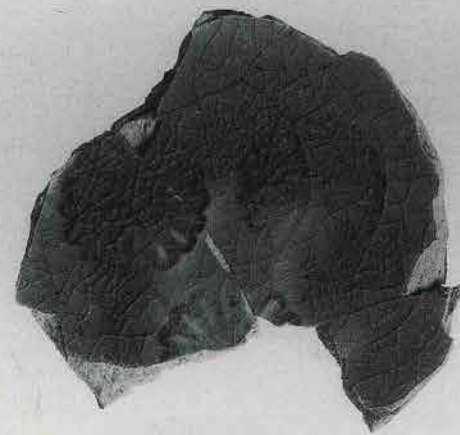
19



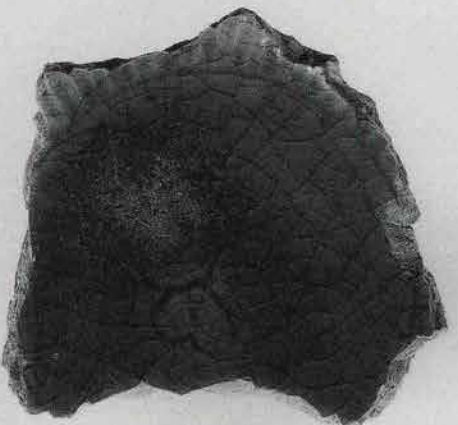
32



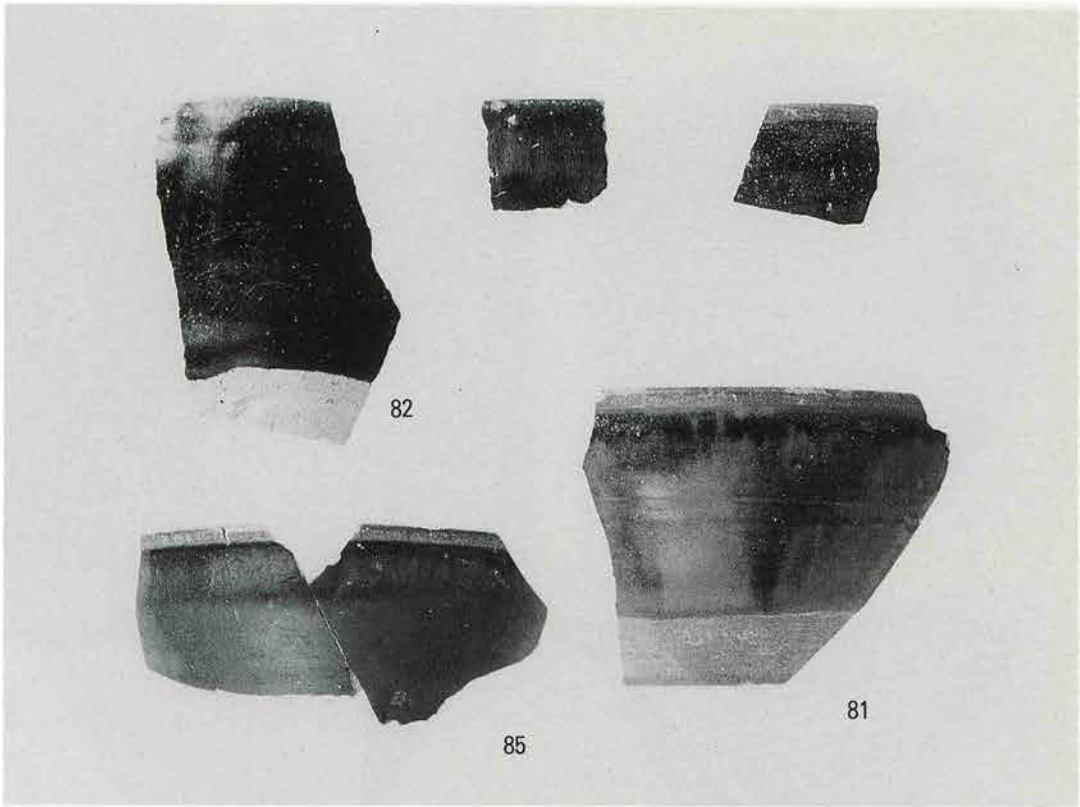
30



38



65



1. 瀬戸・美濃焼 天目碗



2. 瀬戸・美濃焼 水滴



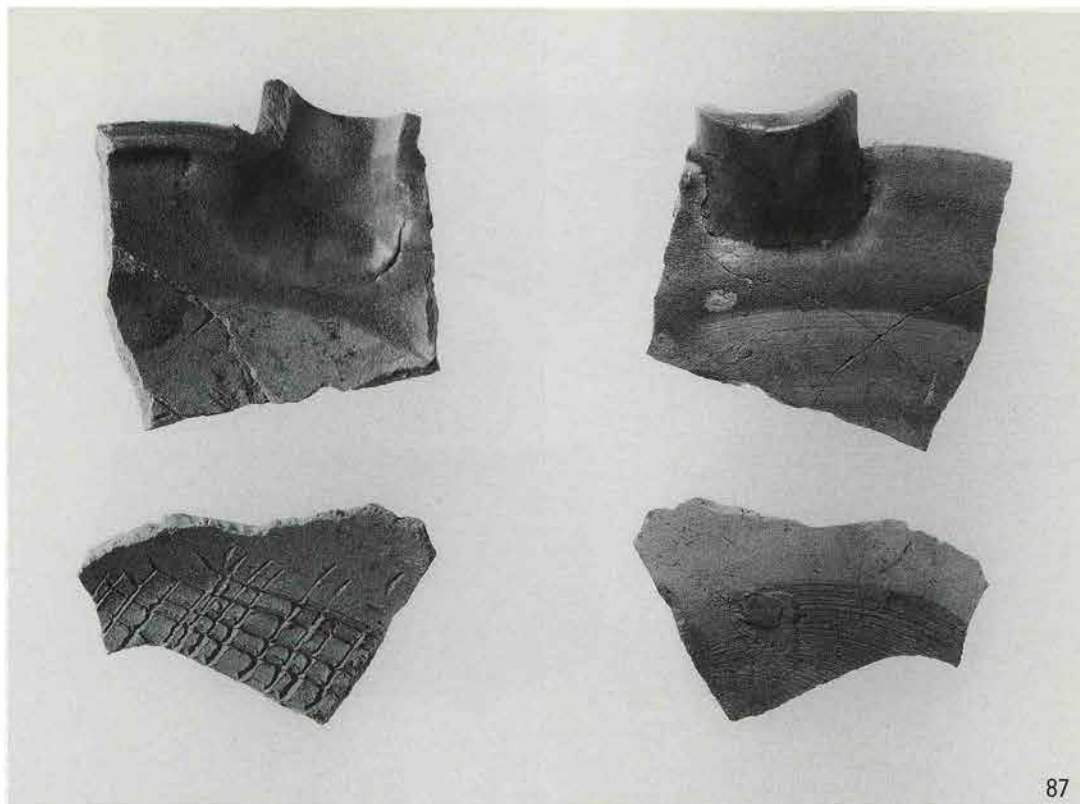
91



60



29



87

1. 瀬戸・美濃焼 卸皿

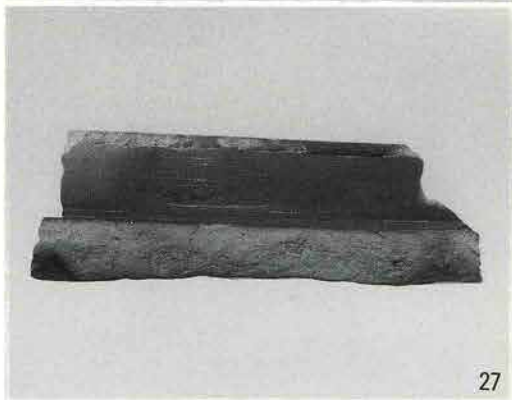


61

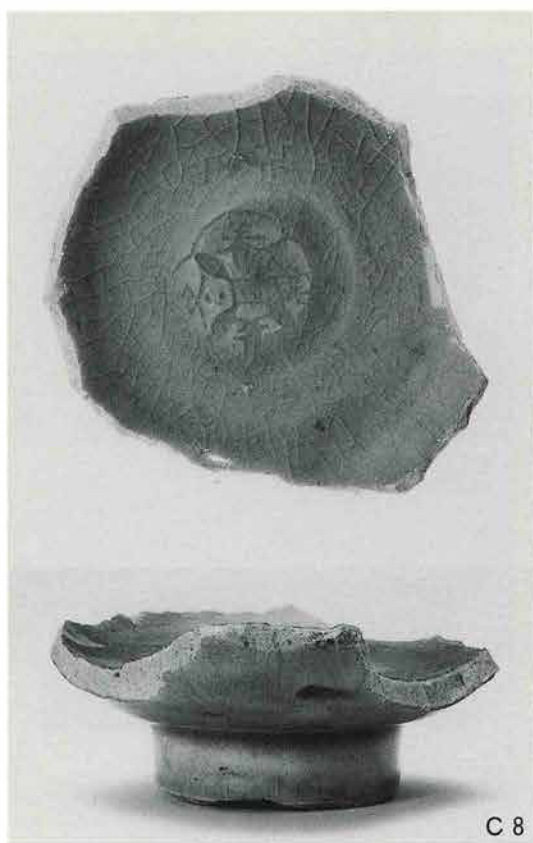
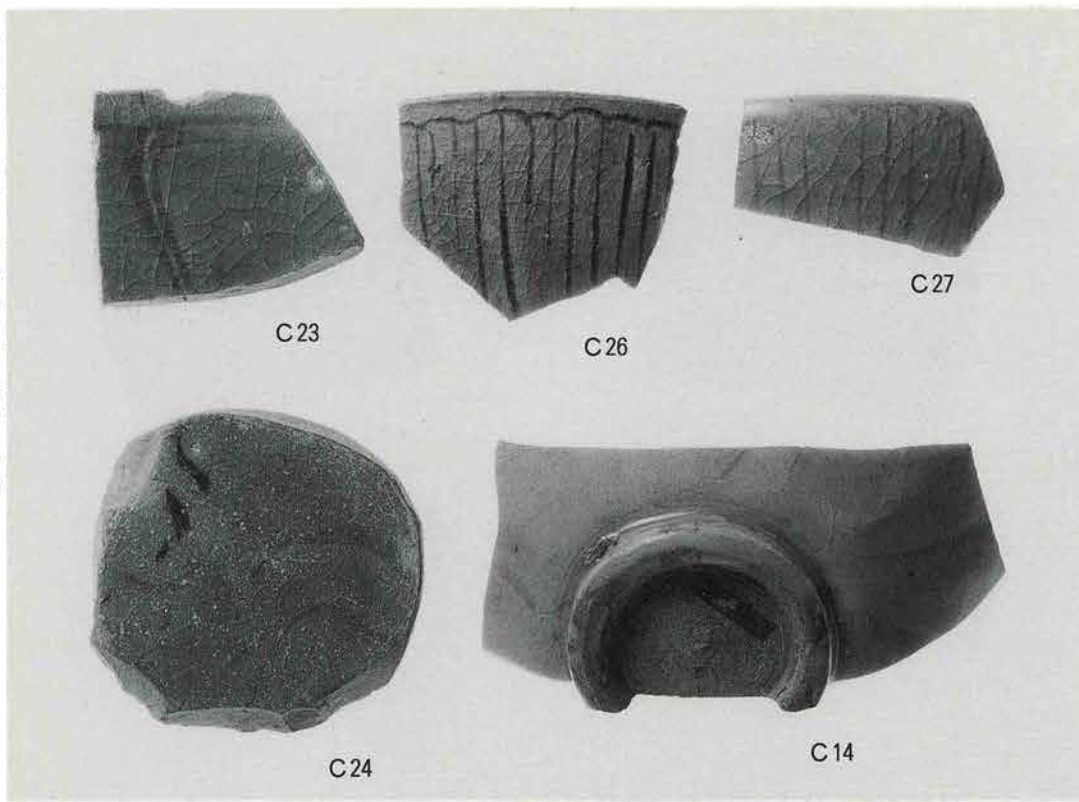
2. 備前焼 甕・徳利、瓦器 風炉



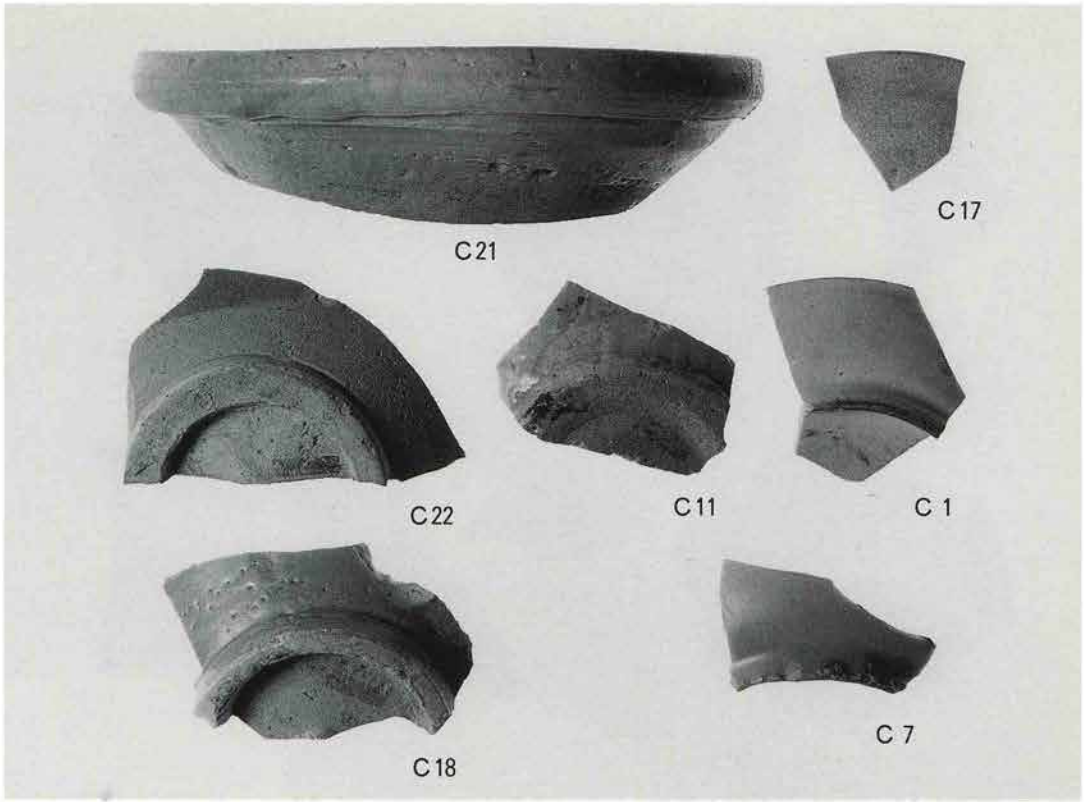
69



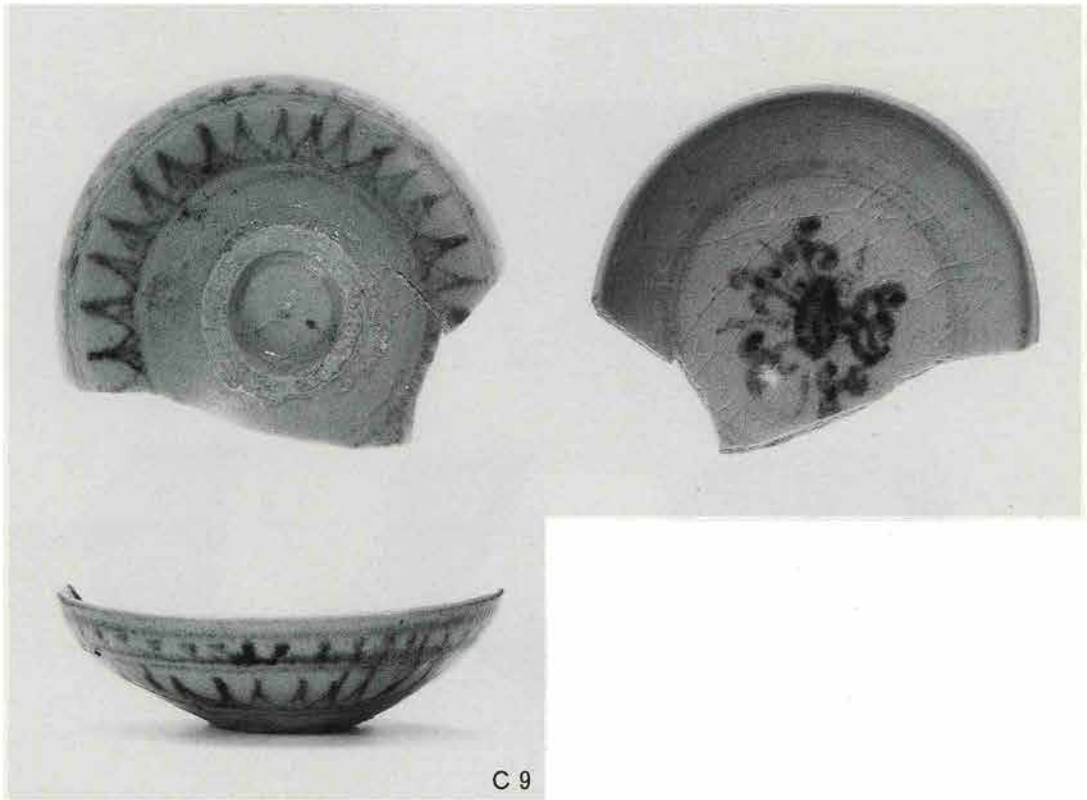
27



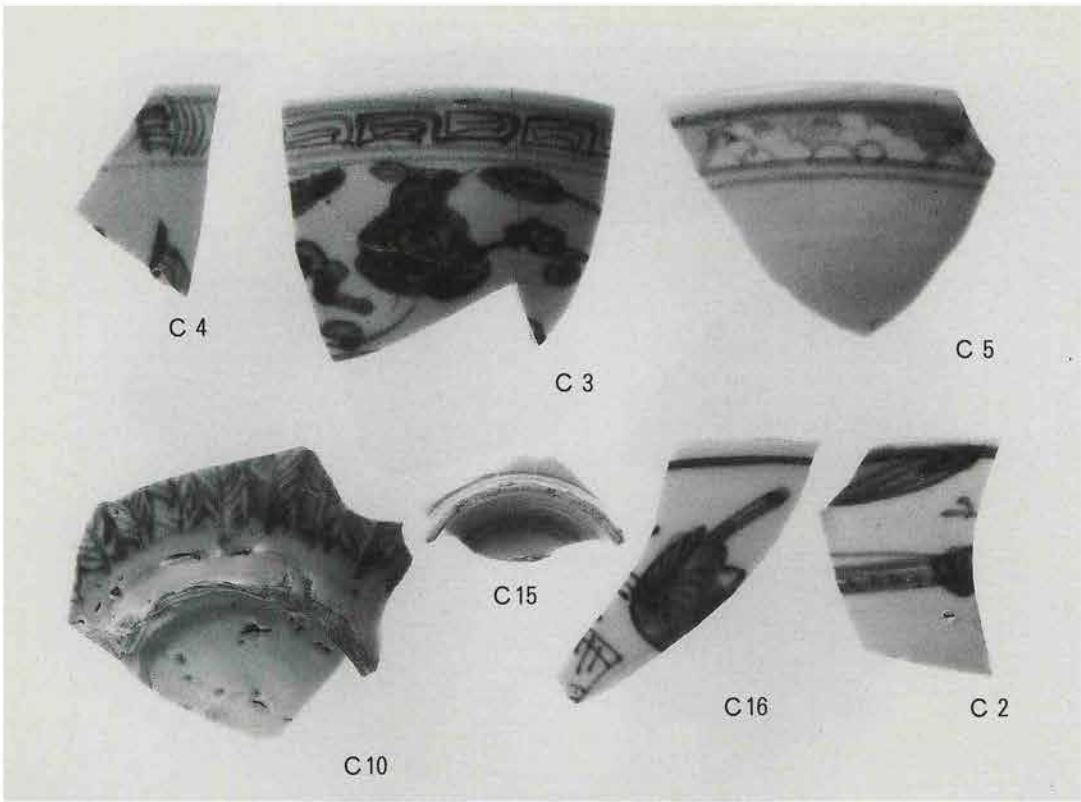
青磁 碗



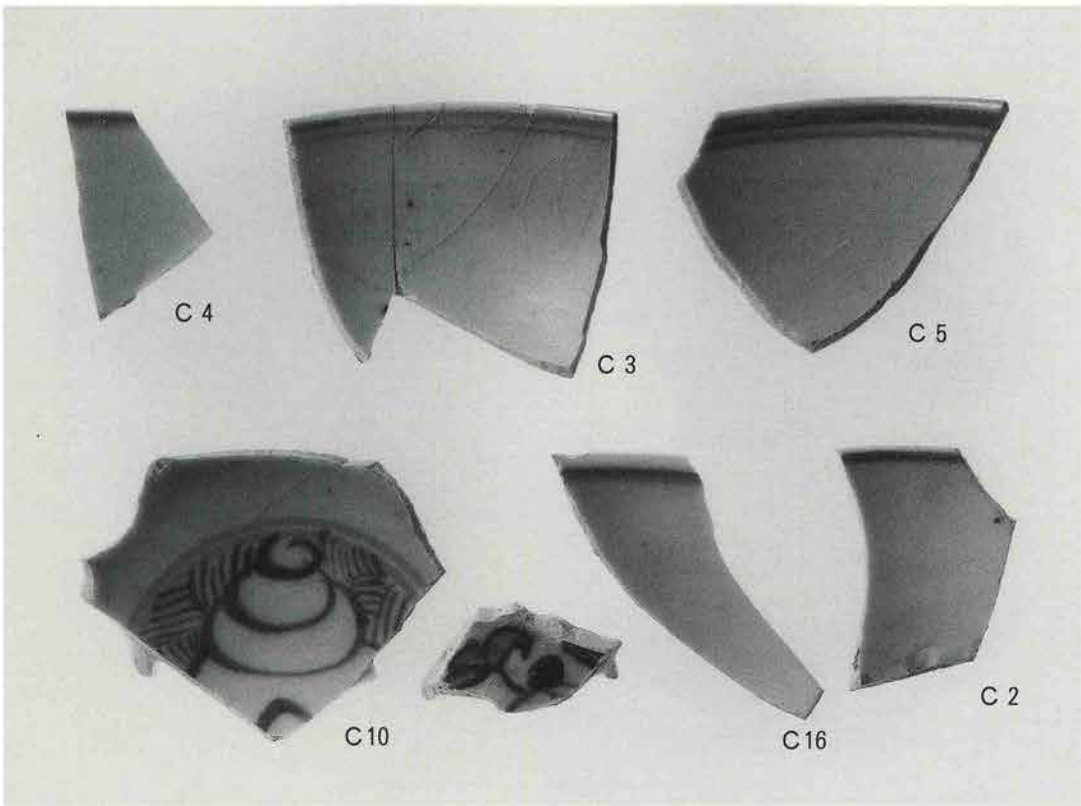
1. 白磁 碗・皿



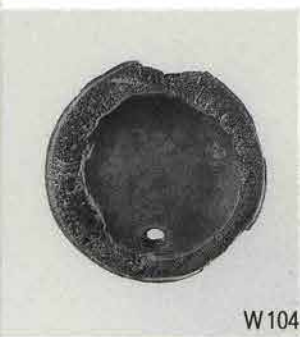
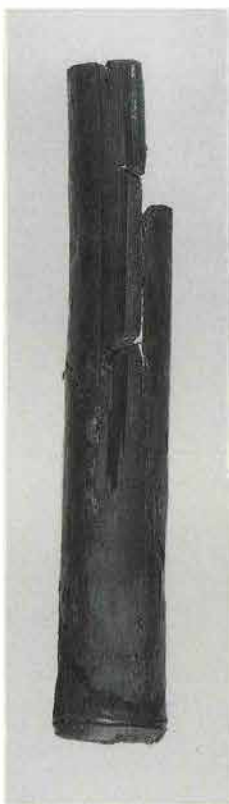
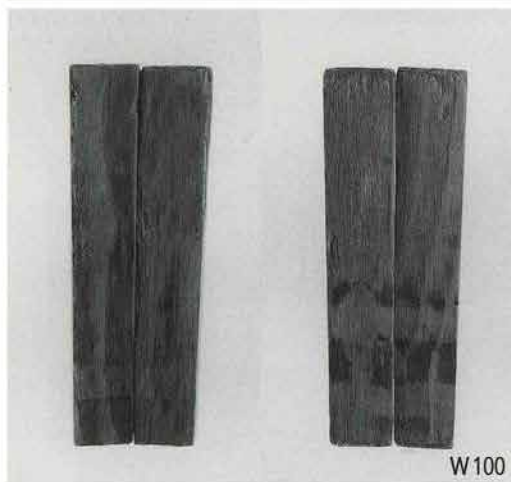
2. 青花 皿



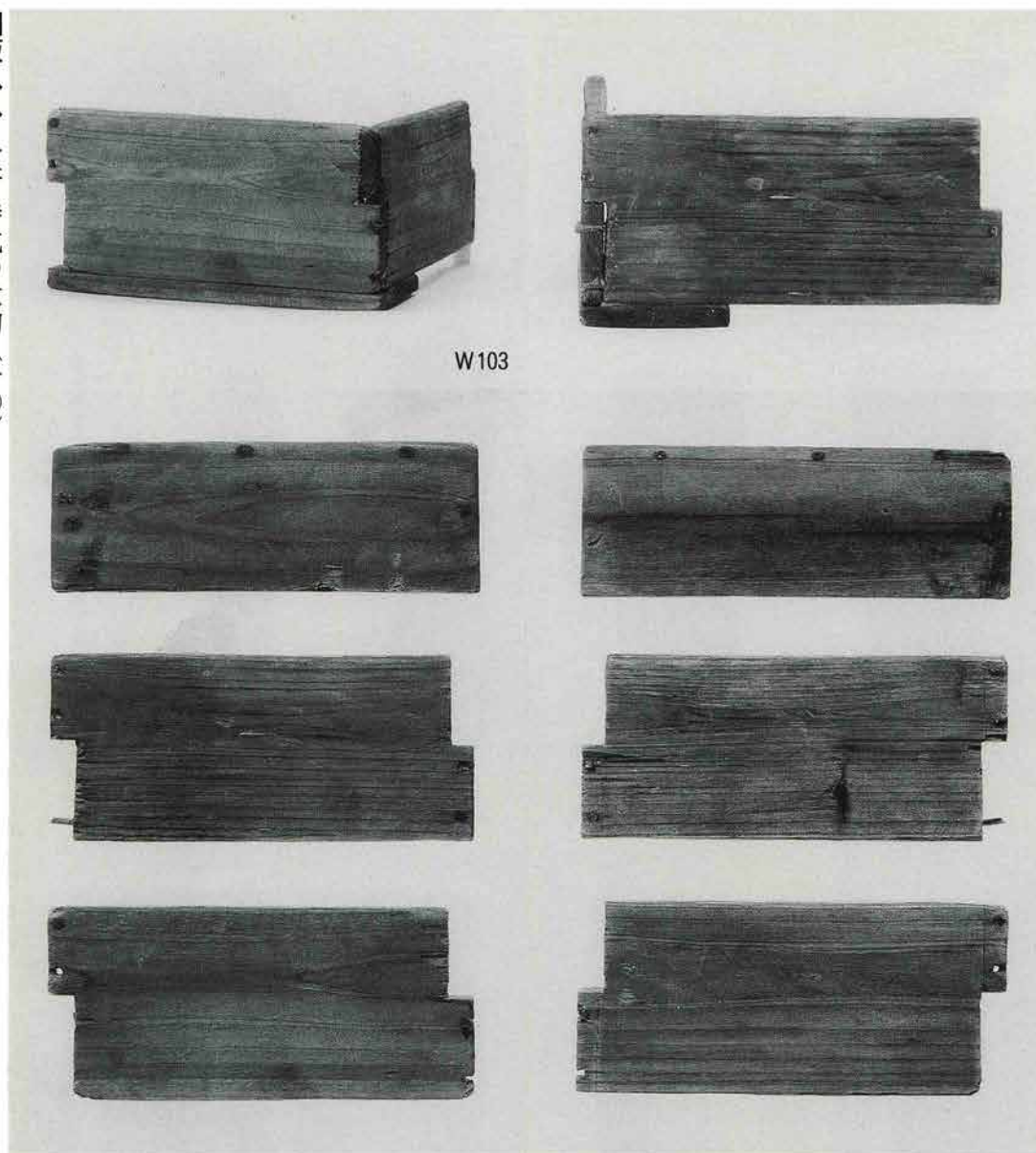
1. 青花 碗 (表)



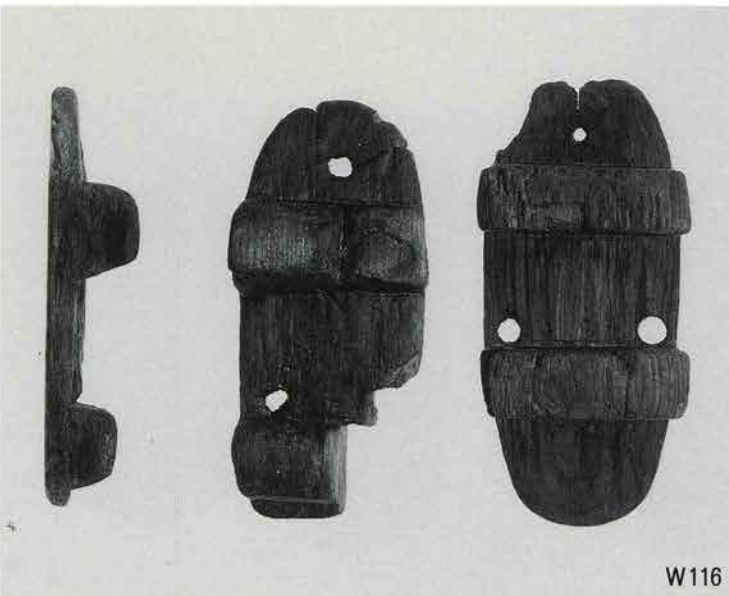
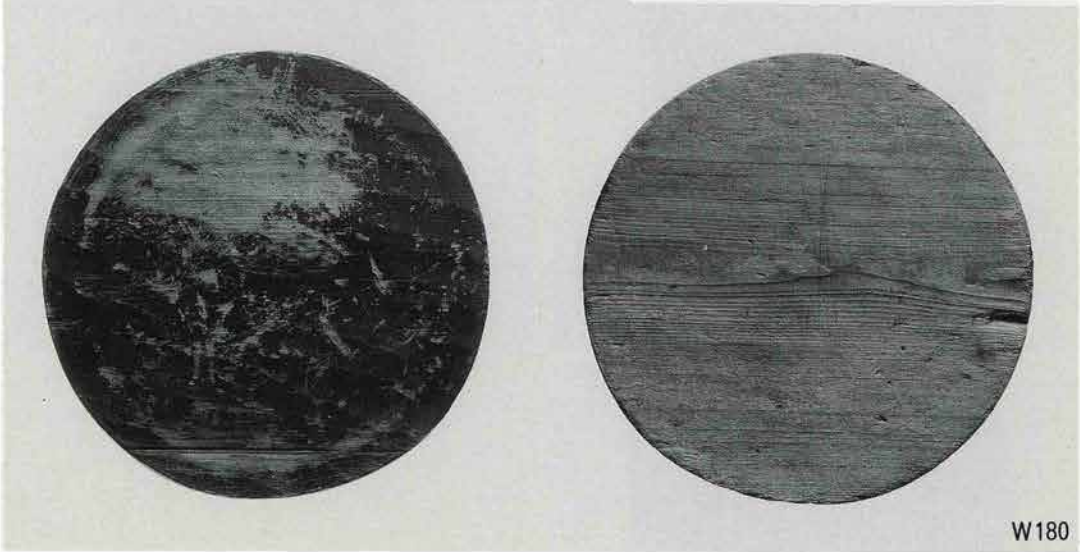
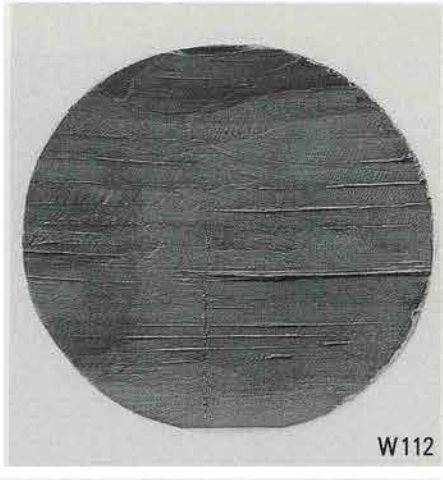
2. 同上 (裏)



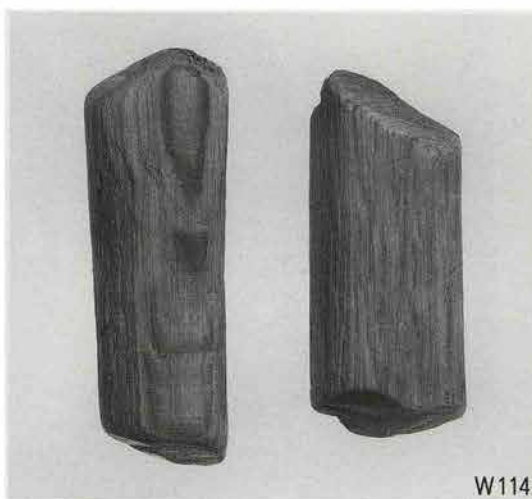
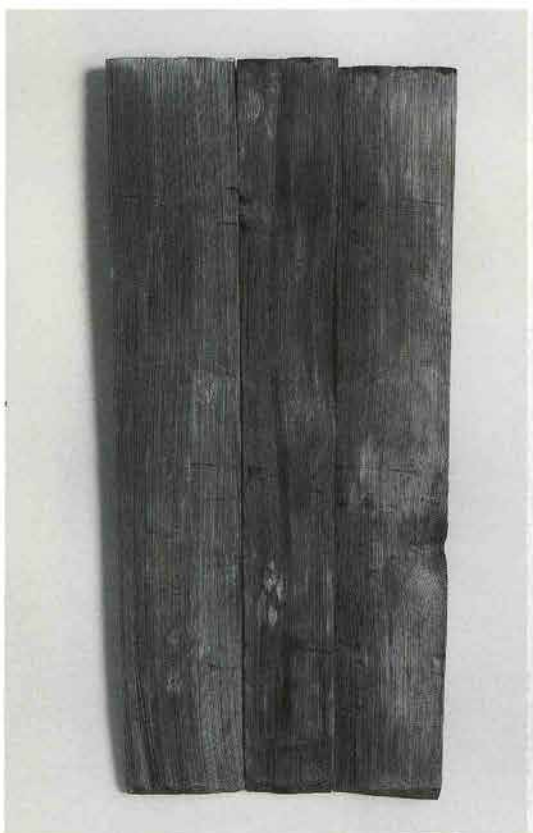
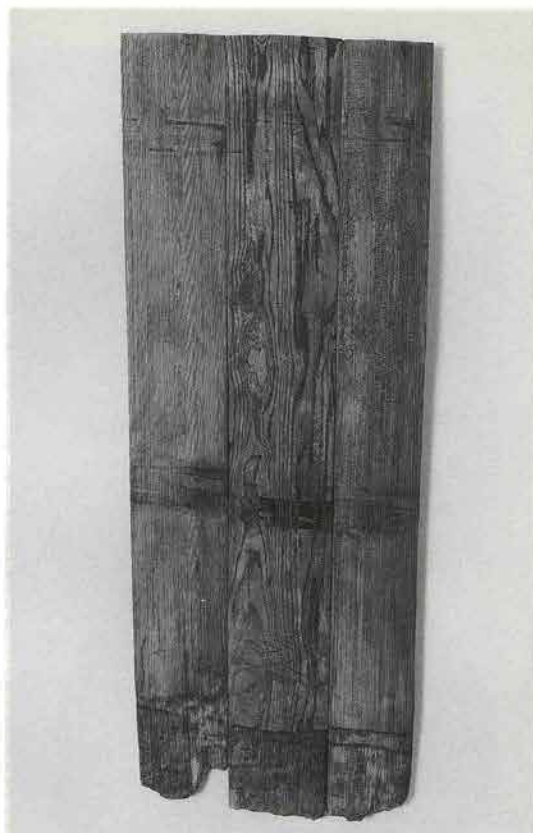
井戸2出土木製品 漆碗・桶・木錘・箸・竹製品他



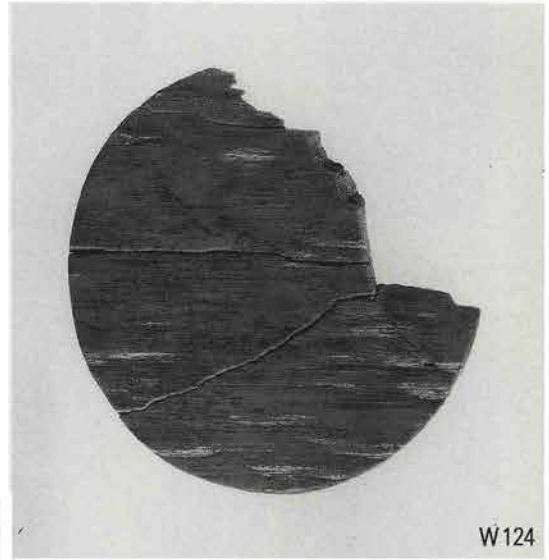
井戸2出土木製品 桁



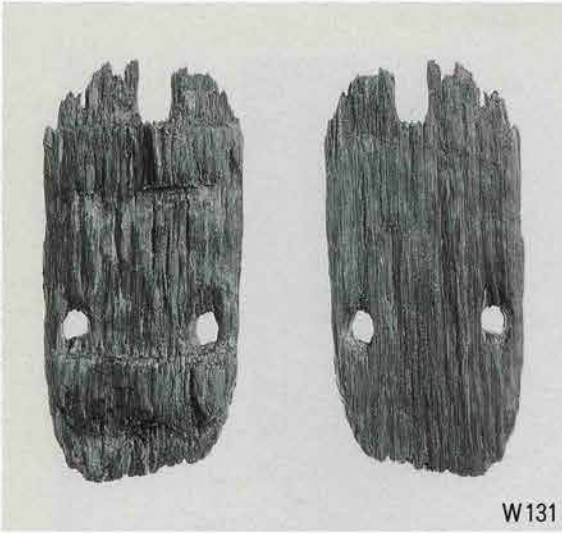
井戸3出土木製品 曲物・底板・下駄・杭



W114



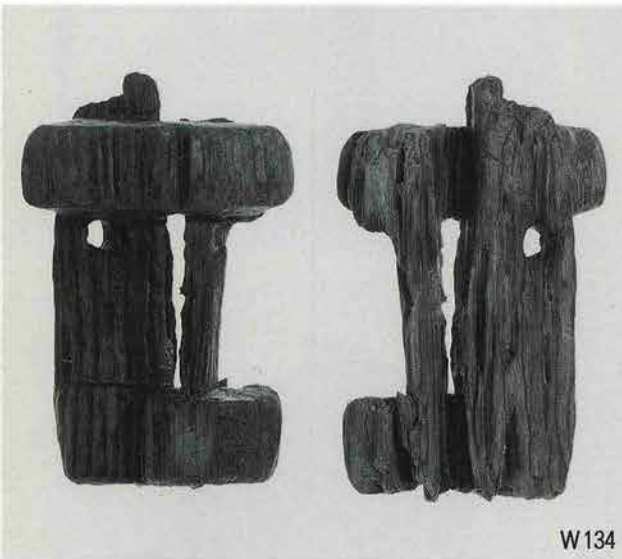
南堀出土木製品 御札・羽子板・箸・曲物底板他



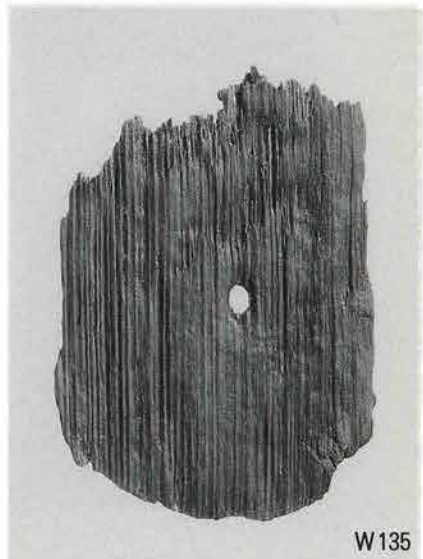
W131



W132



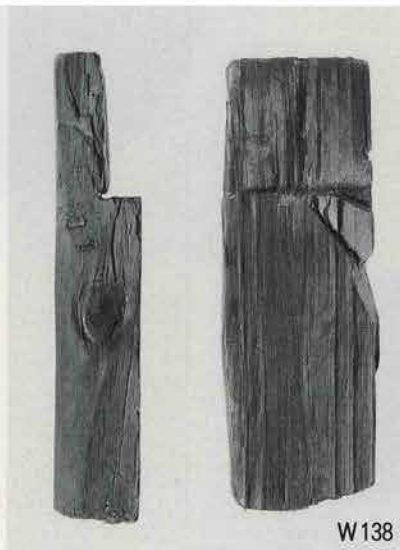
W134



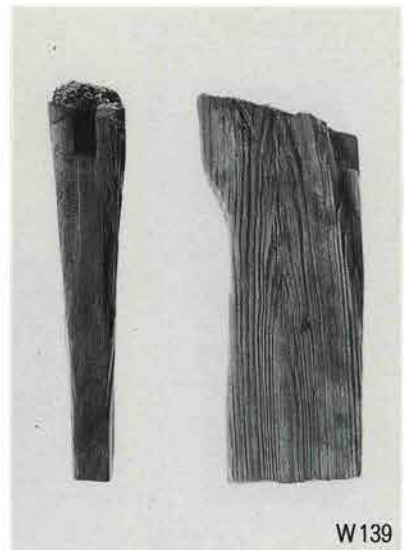
W135



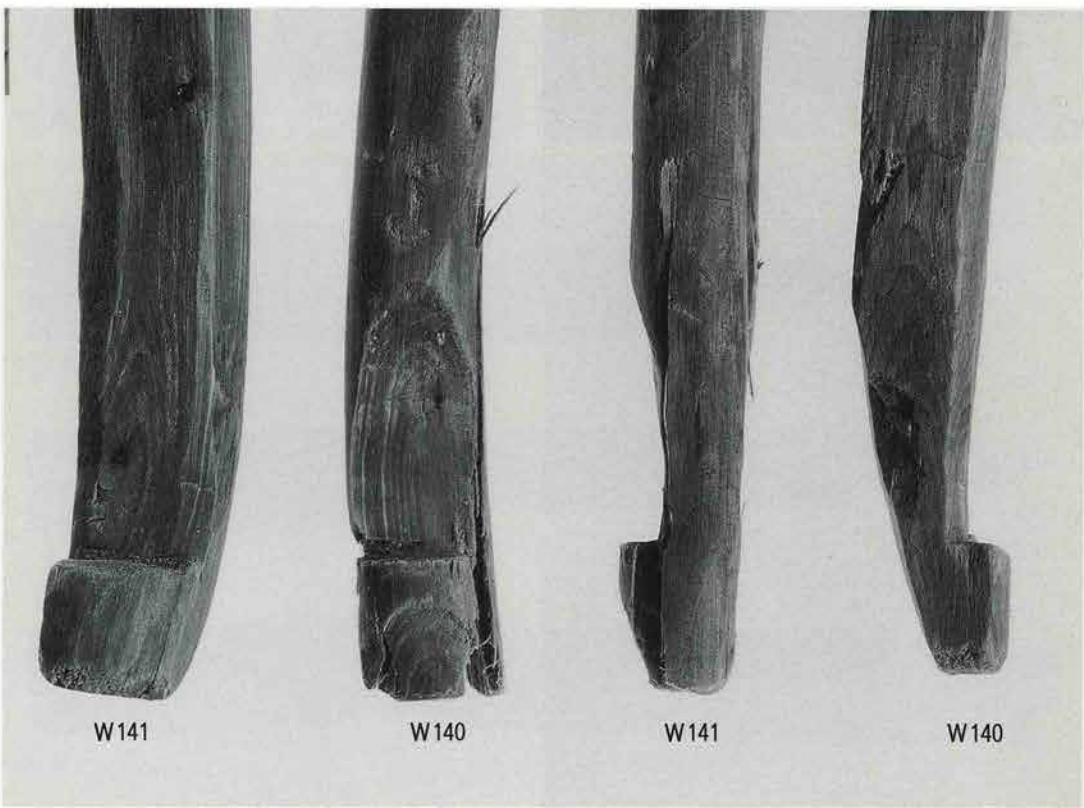
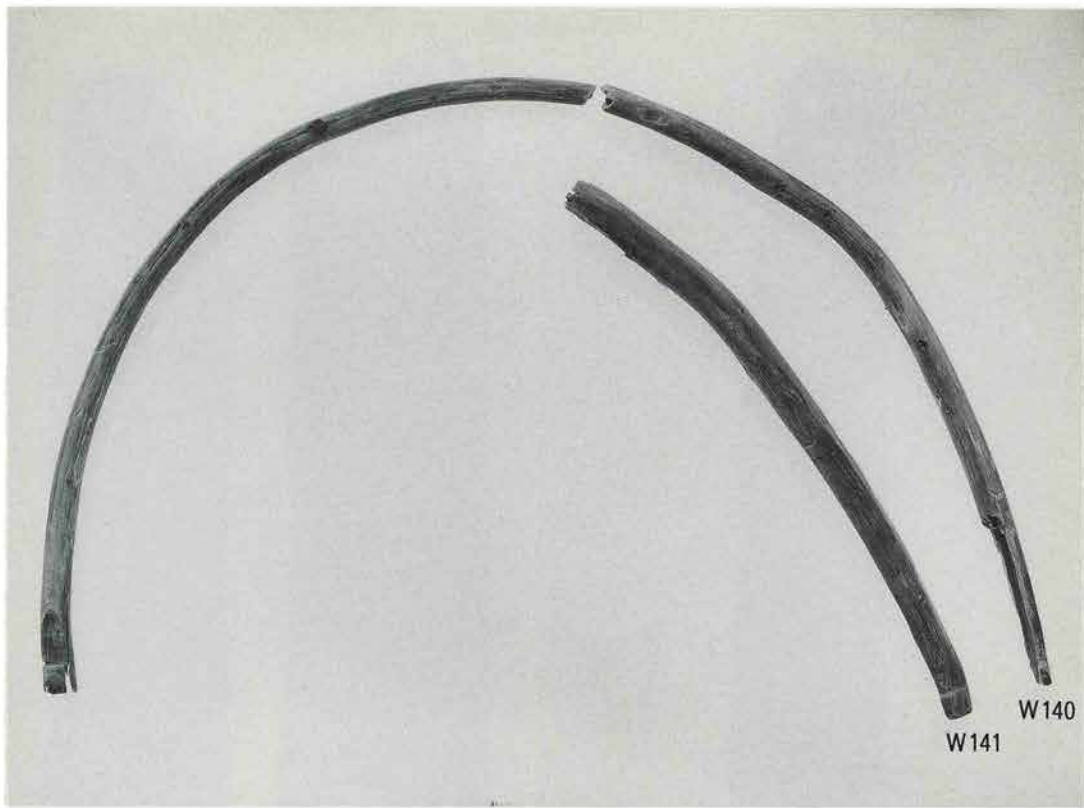
W137



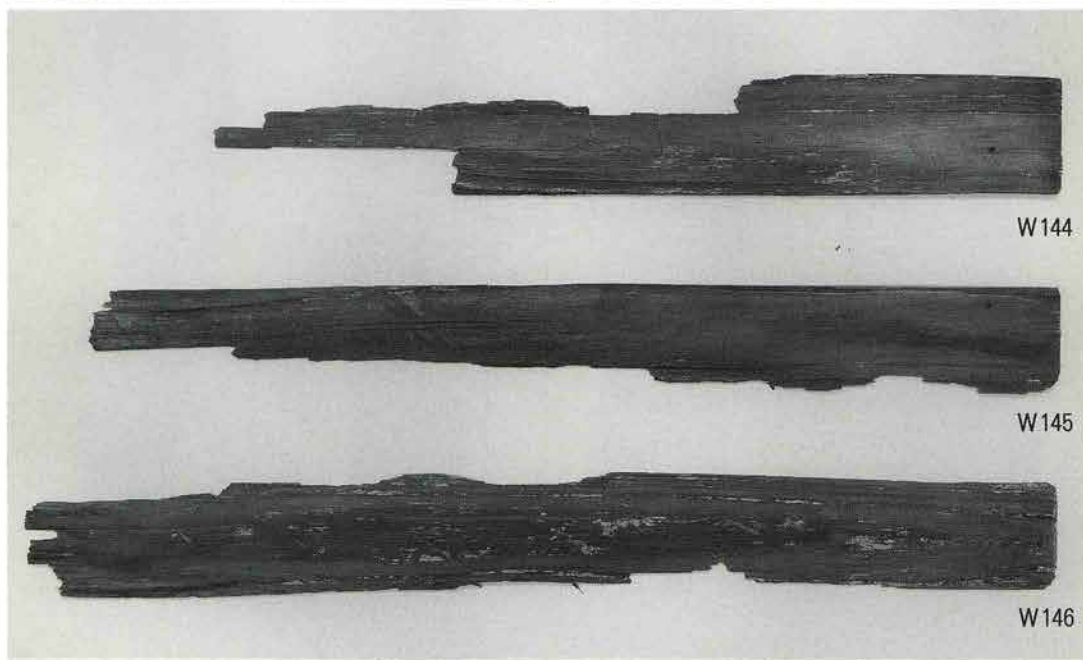
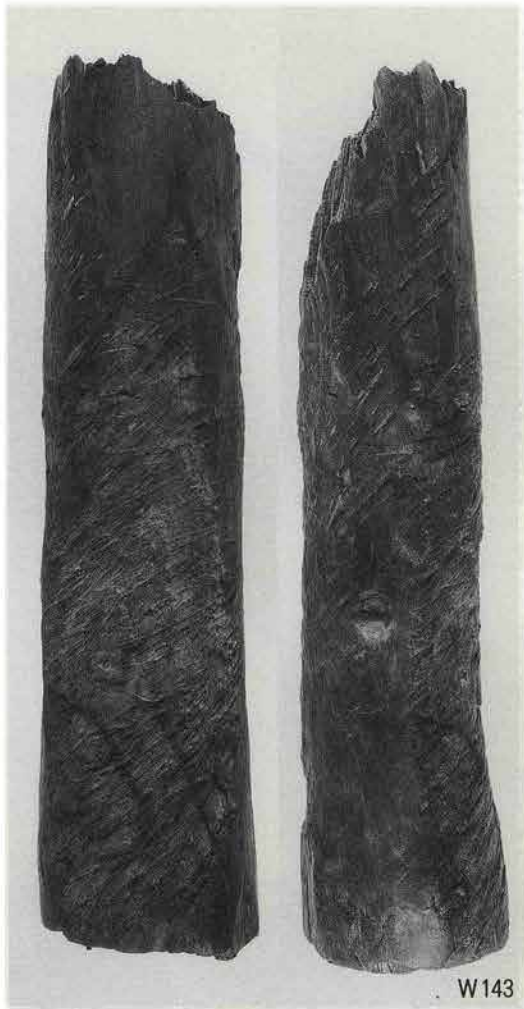
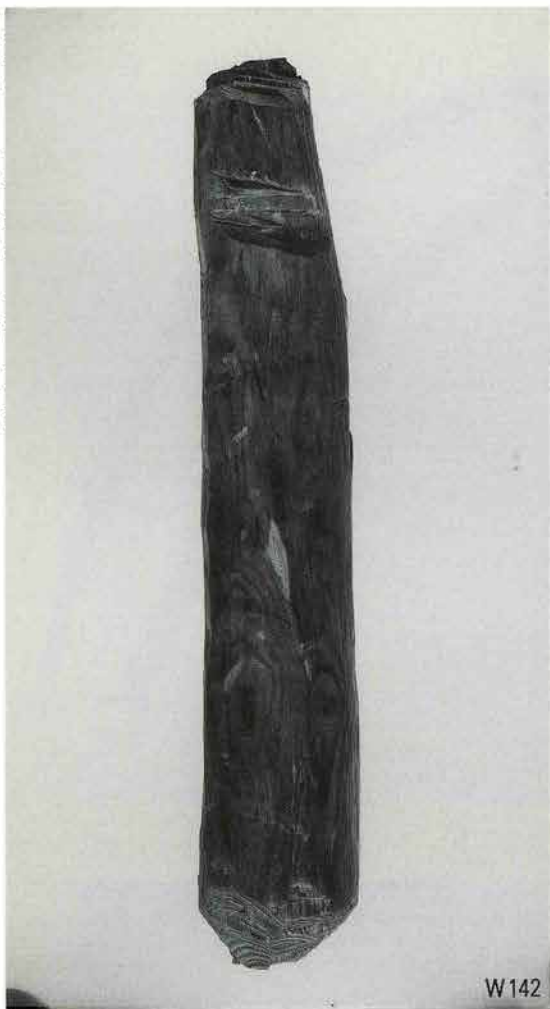
W138

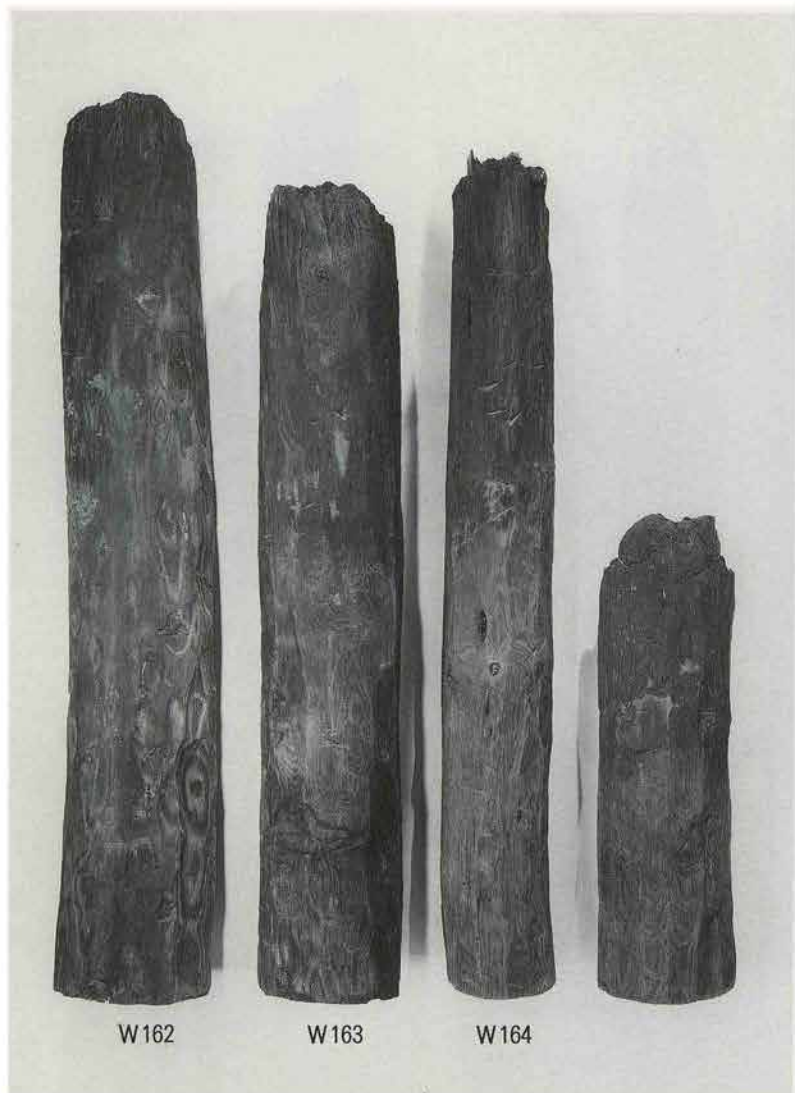


W139



南堀出土木製品 たも網み・弓





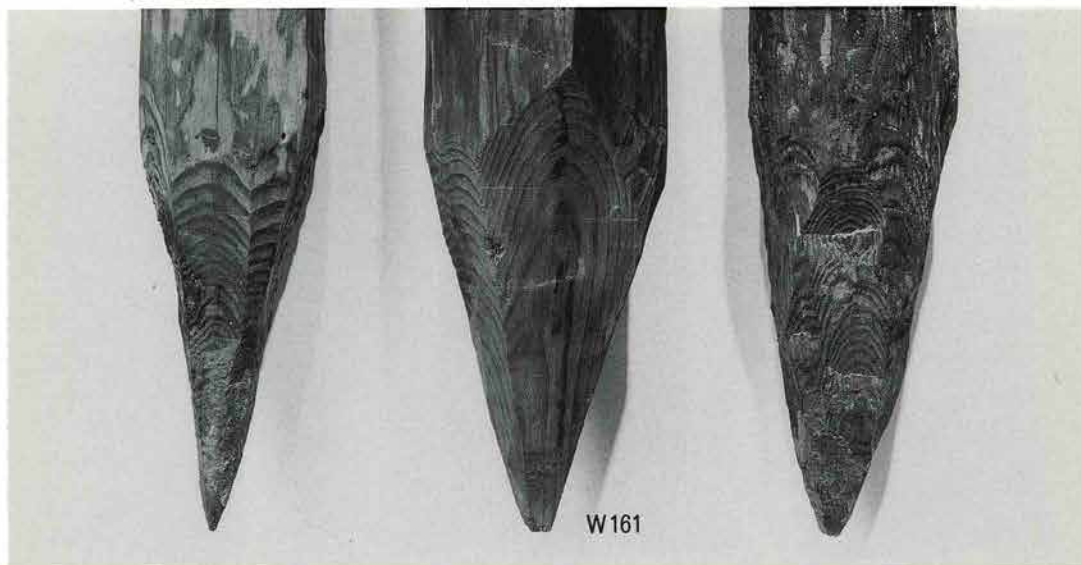
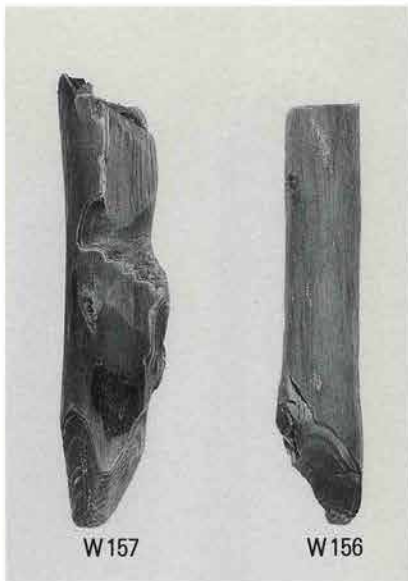
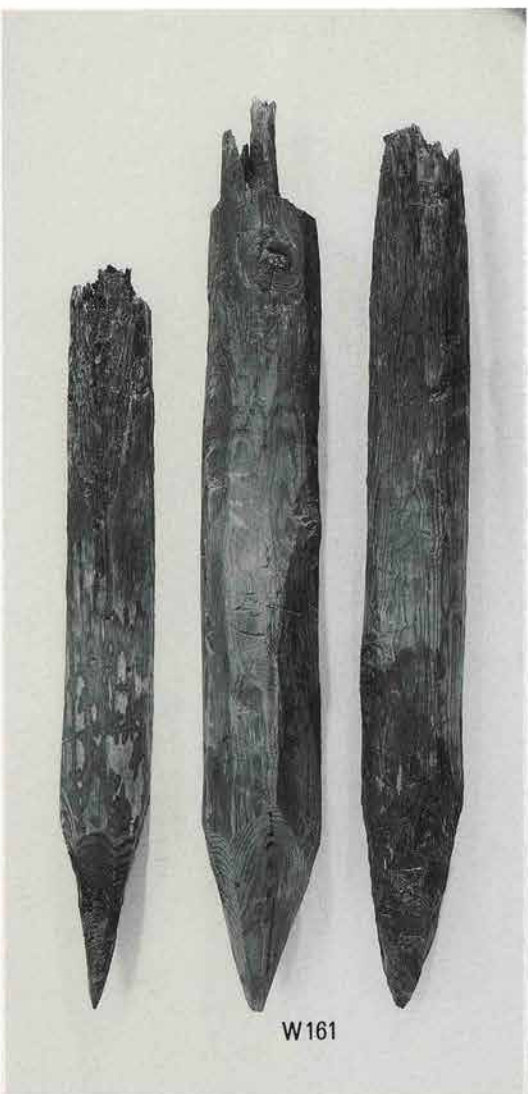
W162

W163

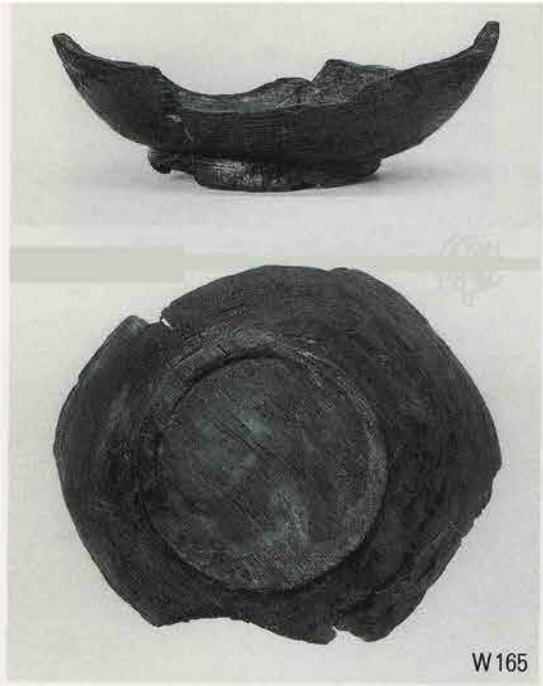
W164



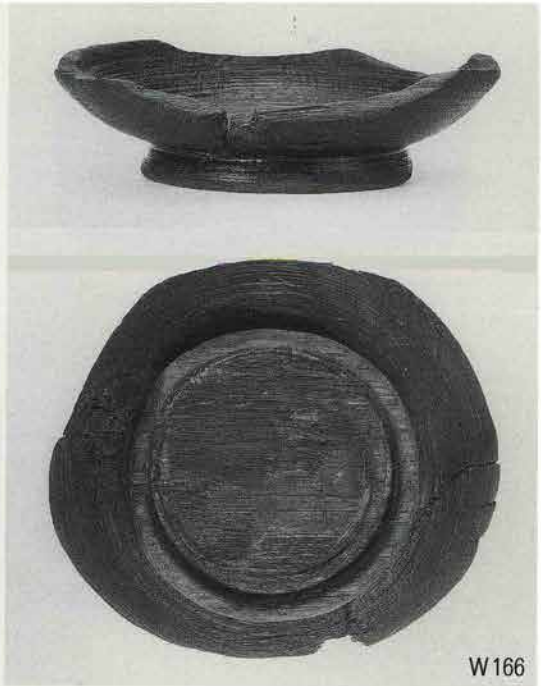
南堀出土木製品 橋脚柱材



南堀出土木製品 橋脚杭材・杭



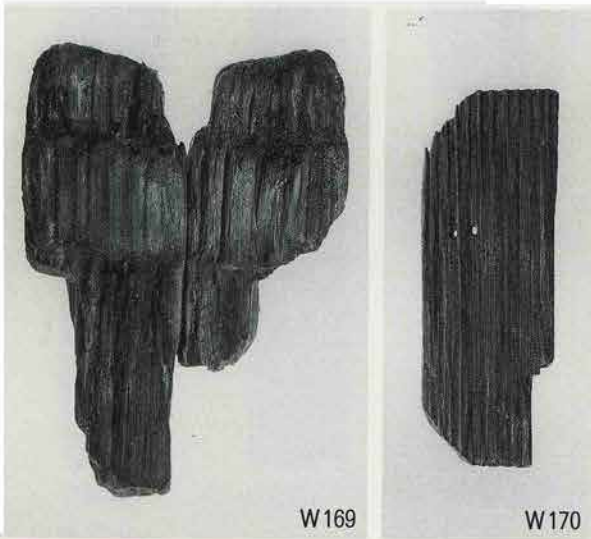
W165



W166

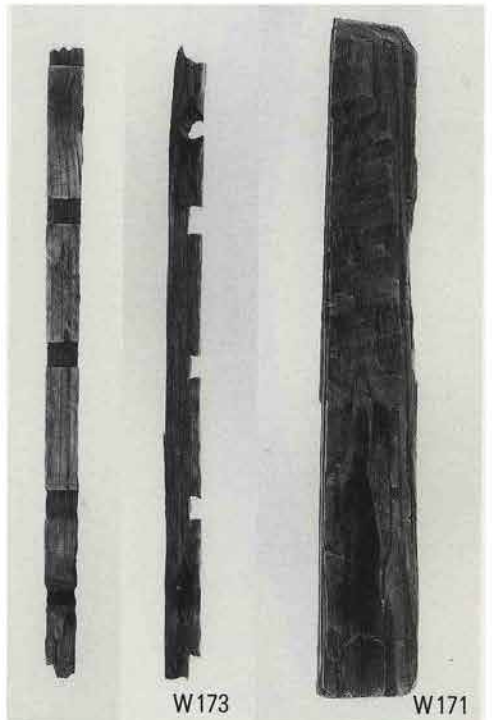


W167



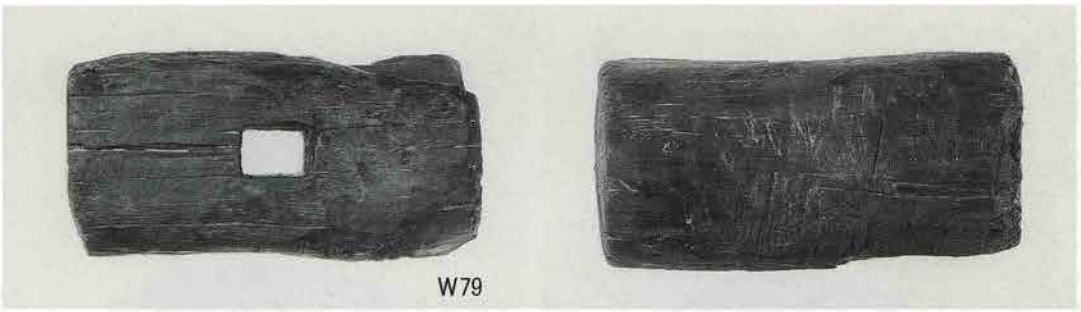
W169

W170

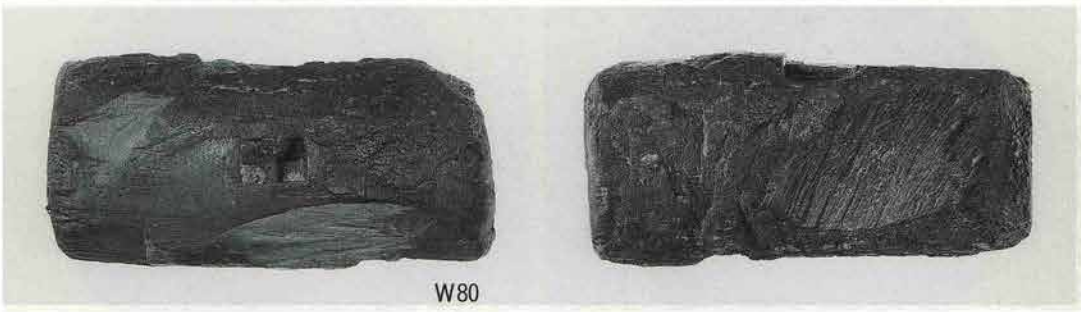


W173

W171



W79

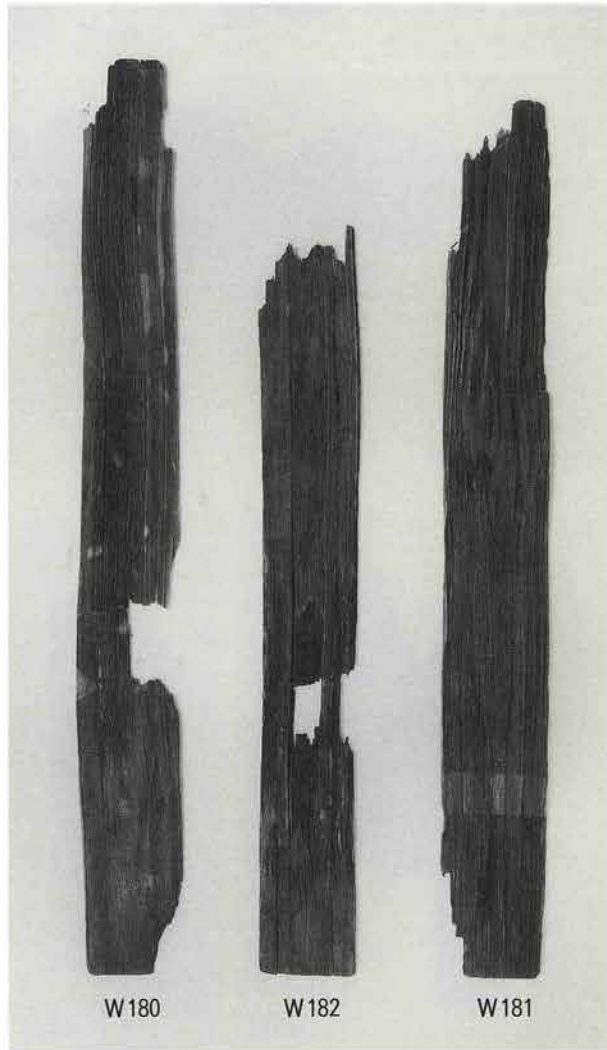


W80



W178

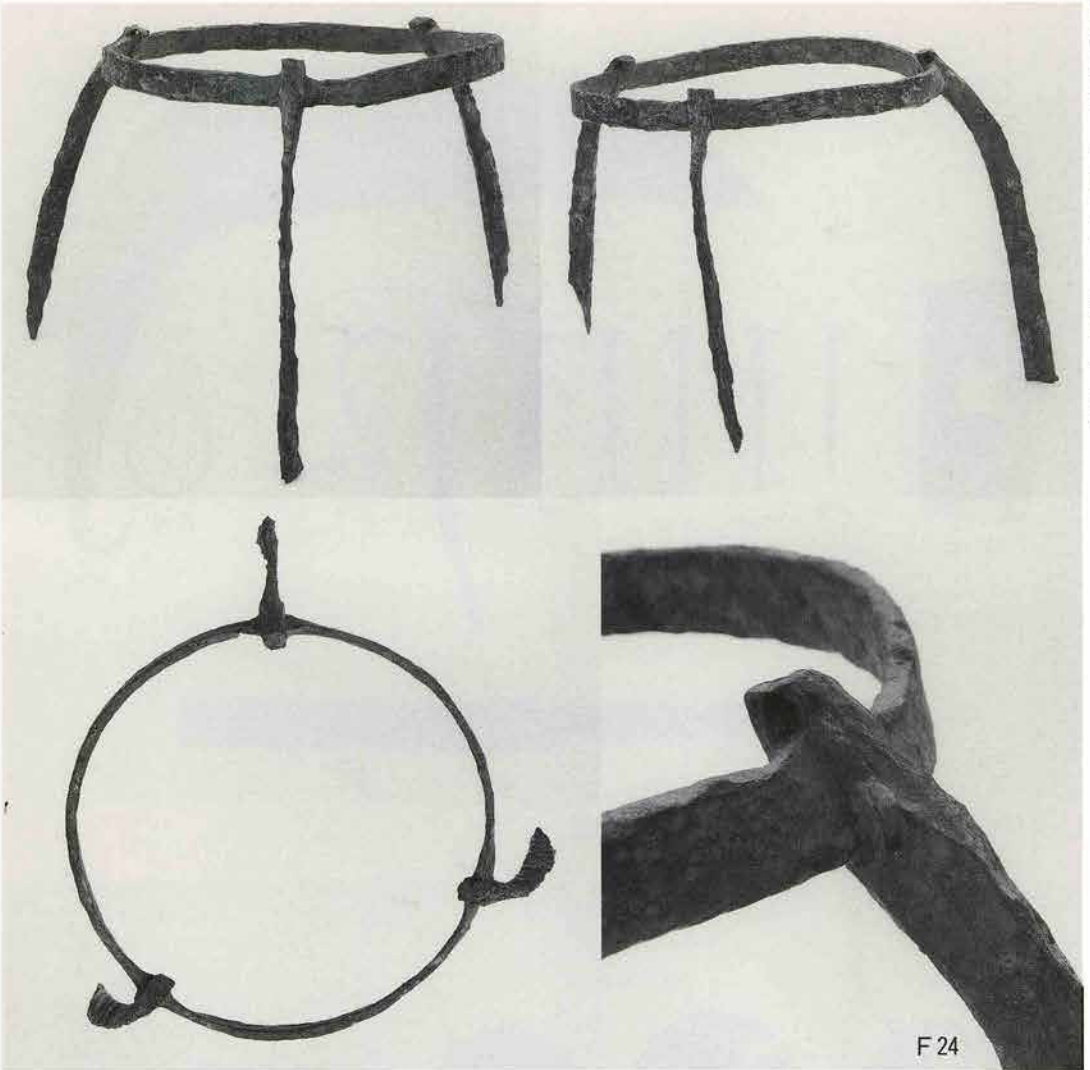
W177



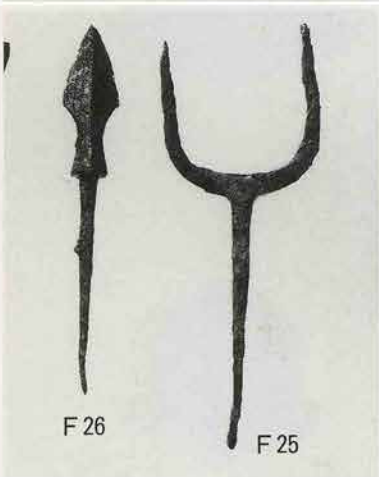
W180

W182

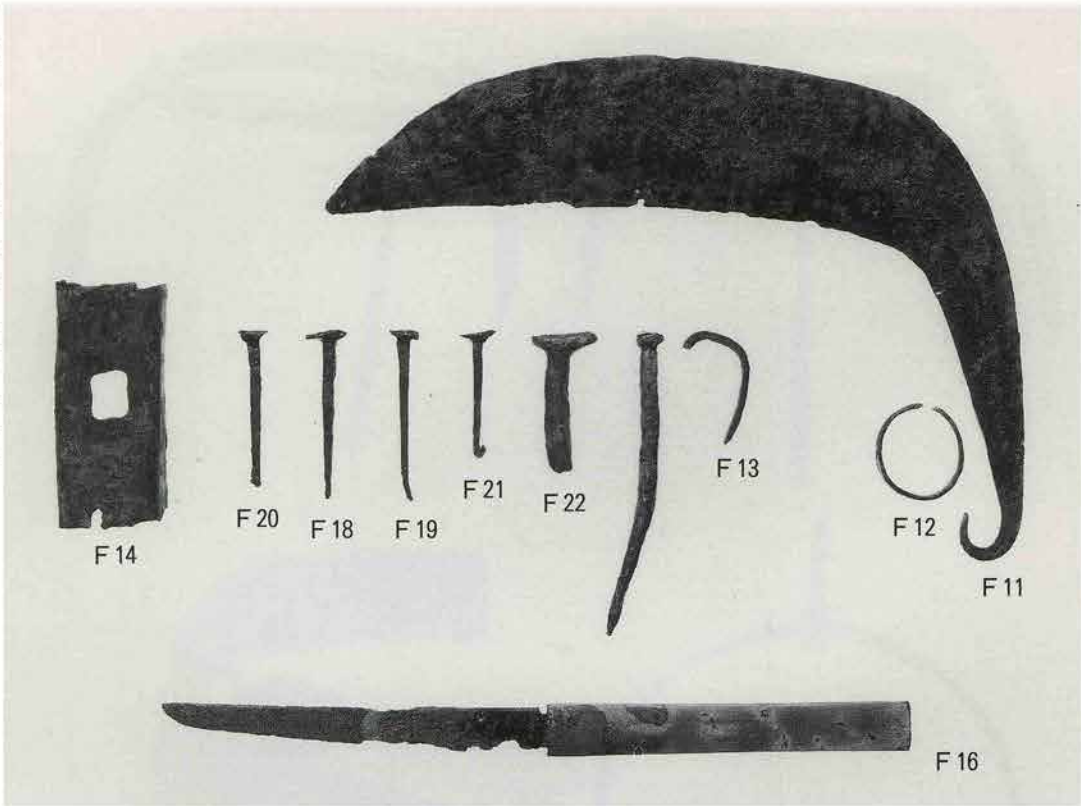
W181



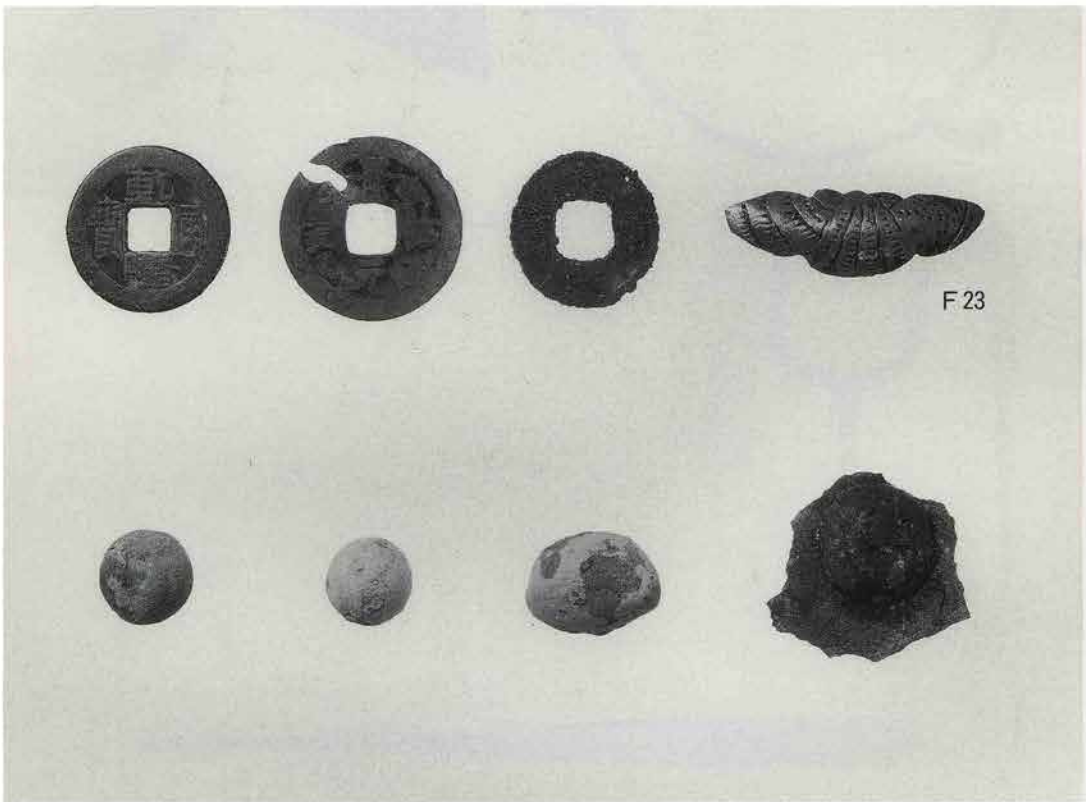
1. 南堀出土鉄製品 五徳・鍬



2. 包含層出土 筈



1. 井戸2出土鉄・銅製品 鉄鎌・鉄釘・小柄他



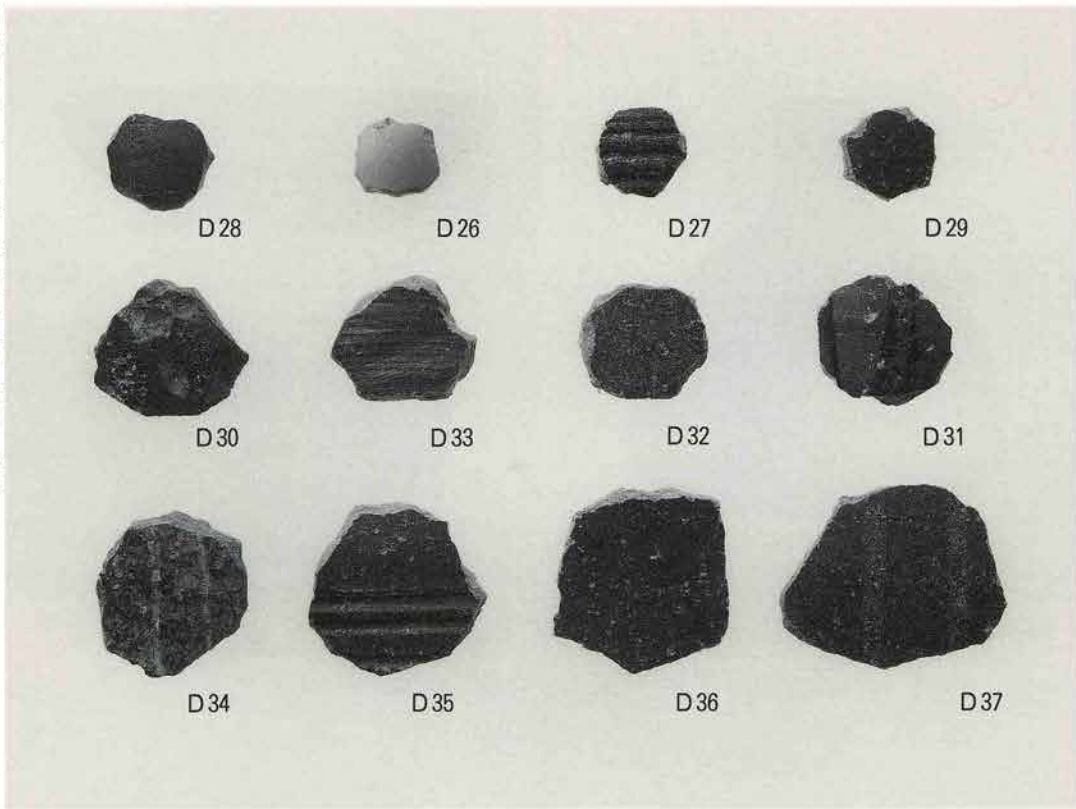
2. 銅製品 銭・飾金具、鉄砲玉



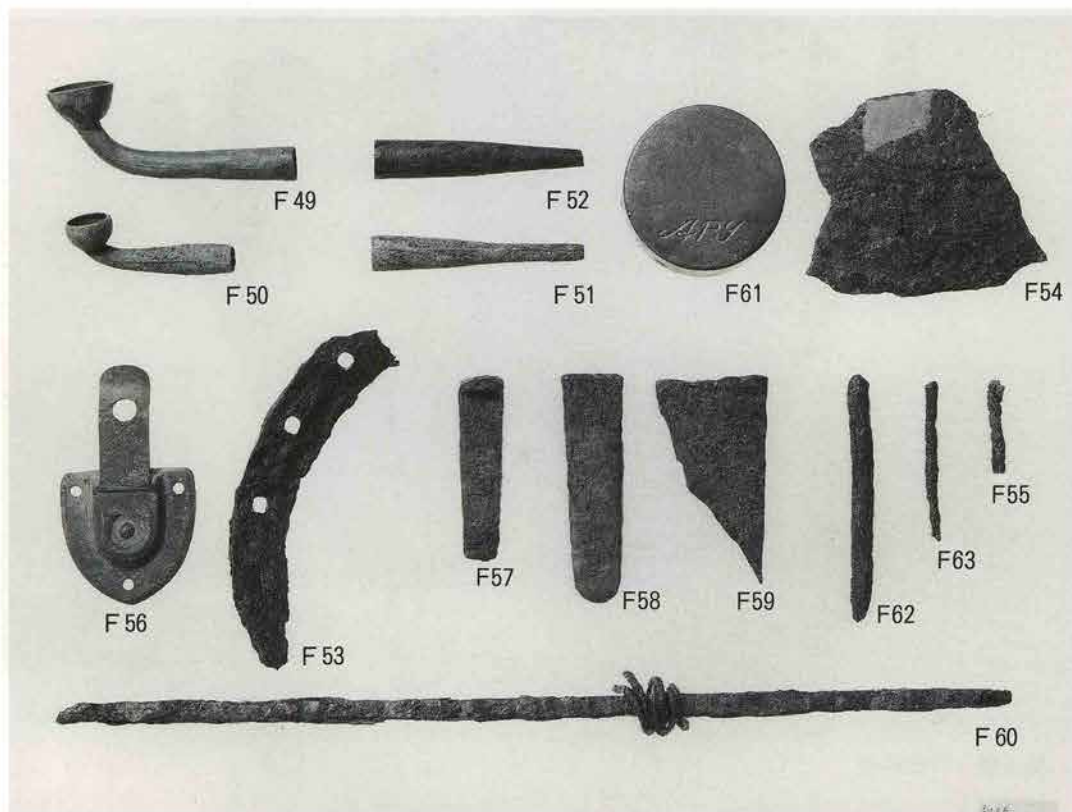
1. 包含層出土土器



2. 便所甕 丹波焼甕



1. 面子



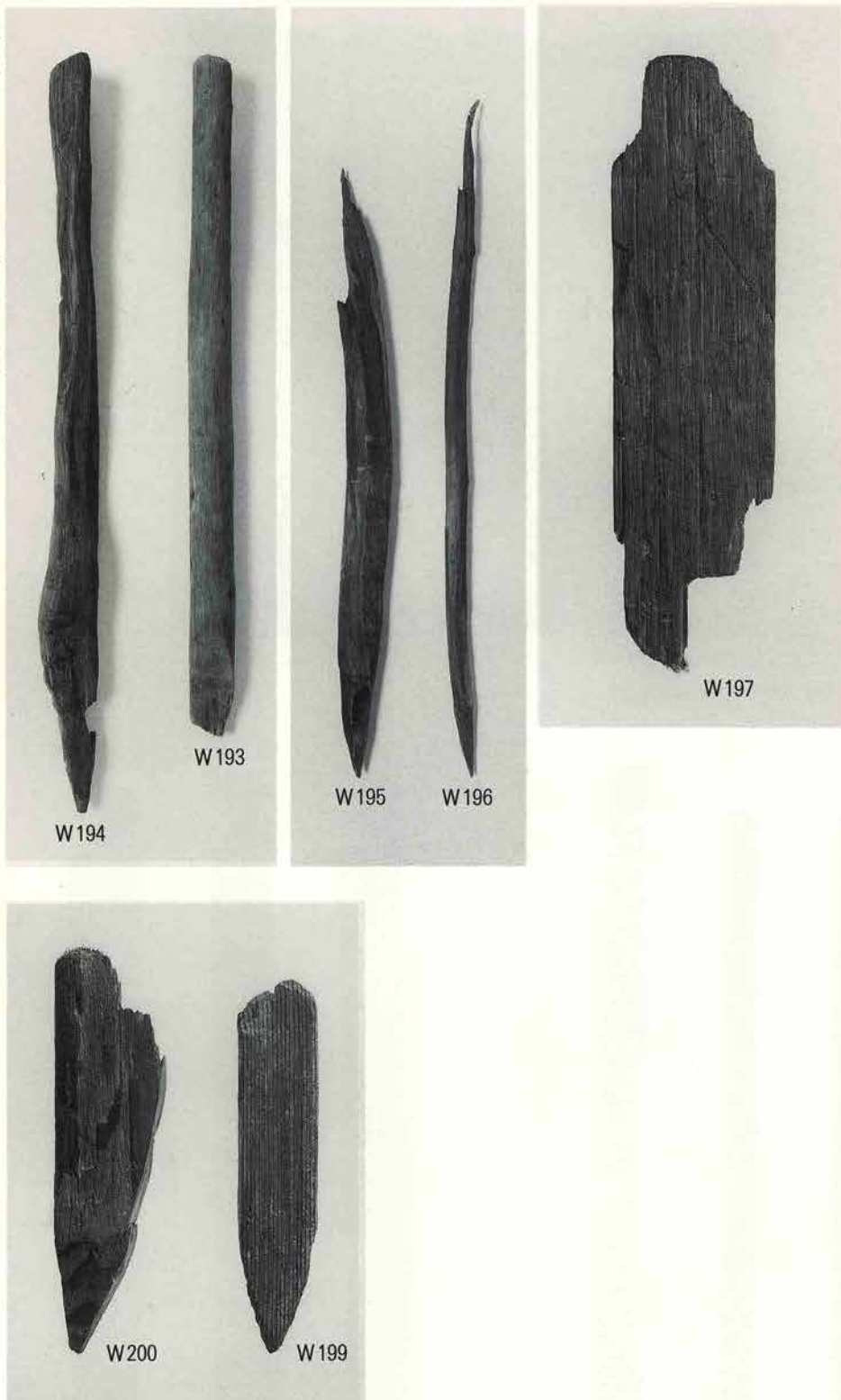
2. 井戸4・包含層出土銅・鉄製品



1. 井戸4 井側板材



2. 井戸4 井戸杵材



堀・水田出土木製品 杭・矢板他

兵庫県文化財調査報告書 第116冊

初 田 館 跡

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XIV)

平成4年3月25日 印刷

平成4年3月31日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番地5号

TEL (078)531-7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手5丁目10番1号

TEL (078)341-7711

印 刷 船場印刷株式会社

〒670 姫路市定元町4-2

TEL (0792)96-3535
